

黒羽転生

NANSAN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とりあえず三つの特典を貰った。主人公『じゃあ、演算能力高め、記憶能力高め、健康な体で。これで一流大学狙えば平穩無事な生活も出来るでしょ』神『え？ チートいらんの？』

そんな主人公が生まれたのは黒羽家だった。

目次

はじまり

はじまり 1

はじまり 2 8

入学編

入学編 1 15

入学編 2 25

入学編 3 36

入学編 4 47

入学編 5 56

入学編 6 67

入学編 7 77

入学編 8 87

入学編 9 97

九校戦編

九校戦編 1 108

九校戦編 2 118

九校戦編 3 128

九校戦編 4 139

九校戦編 5 149

九校戦編 6 158

九校戦編 7 169

九校戦編 8 180

九校戦編 9 190

九校戦編 10 200

| | |
|------------|-----|
| 来訪者編 6 | 415 |
| 来訪者編 5 | 405 |
| 来訪者編 4 | 395 |
| 来訪者編 3 | 384 |
| 来訪者編 2 | 375 |
| 来訪者編 1 | 367 |
| 来訪者編 | |
| 追憶編 Ver. S | 359 |
| 追憶編 | |
| 横浜騒乱編 1 1 | 351 |
| 横浜騒乱編 1 0 | 340 |
| 横浜騒乱編 9 | 331 |
| 横浜騒乱編 8 | 321 |
| 横浜騒乱編 7 | 311 |
| 横浜騒乱編 6 | 300 |
| 横浜騒乱編 5 | 290 |
| 横浜騒乱編 4 | 280 |
| 横浜騒乱編 3 | 269 |
| 横浜騒乱編 2 | 260 |
| 横浜騒乱編 1 | 249 |
| 横浜騒乱編 | |
| 九校戦編 1 4 | 239 |
| 九校戦編 1 3 | 229 |
| 九校戦編 1 2 | 220 |
| 九校戦編 1 1 | 210 |

来訪者編 3 1
来訪者編 3 0
来訪者編 2 9
来訪者編 2 8
来訪者編 2 7
来訪者編 2 6
来訪者編 2 5
来訪者編 2 4
来訪者編 2 3
来訪者編 2 2
来訪者編 2 1
来訪者編 2 0
来訪者編 1 9
来訪者編 1 8
来訪者編 1 7
来訪者編 1 6
来訪者編 1 5
来訪者編 1 4
来訪者編 1 3
来訪者編 1 2
来訪者編 1 1
来訪者編 1 0
来訪者編 9
来訪者編 8
来訪者編 7

681 669 655 634 626 616 605 594 585 576 566 556 546 537 527 517 506 495 486 477 466 458 446 435 424

| | |
|-----------|-----|
| ダブルセブン編 9 | 833 |
| ダブルセブン編 8 | 819 |
| ダブルセブン編 7 | 806 |
| ダブルセブン編 6 | 794 |
| ダブルセブン編 5 | 781 |
| ダブルセブン編 4 | 768 |
| ダブルセブン編 3 | 751 |
| ダブルセブン編 2 | 735 |
| ダブルセブン編 1 | 722 |
| ダブルセブン編 | |
| 来訪者編 3 3 | 705 |
| 来訪者編 3 2 | 693 |

はじまり
はじまり1

四葉家当主、四葉英作は魔法演算領域を解析することのできる特異な精神分析能力者だ。その彼は生まれたばかりの子に解析をかけ、潜在的な魔法能力を解析していた。

「整える力、混沌を正す力。この子は『調律』とも言うべき力を備えている」

それを聞いた一族は驚いた。

半年ほど前に四葉深夜の息子として生まれた司波達也は『分解』と『再成』という世界すら壊せる力を持って生まれた。まさに混沌の子。恐怖のあまり、赤子の内に殺すことすら提案された呪いの子。その提案こそ当主こと四葉英作の手で却下されたが、不安はまだ漂っていた。

だが、それと対を為すように生まれた調和の子。

精神干渉系魔法を先天的に宿す事も含め、多くの期待を寄せた。

——黒羽紫音くろばしおん

四葉において裏工作を担う一族、黒羽の長男が生まれたのだった。だが、彼こそが司波達也を越えて混沌をもたらすなど、まだ誰も知らない。



「今日も終わったか」

十歳になった紫音はベッドに倒れつつ眩く。

(転生して早くも十年。慣れたもんだな)

黒羽紫音は生まれながらにして前世の記憶を持っていた。ちよつとした事故で亡くなった後、神様な何かに会って転生させて貰った過去がある。

なんでも、面白——もとい若くして亡くなったし可哀想だから創作世界にぶち込むということらしい。取りあえず三つぐらいは特典やると言われたのでしつかりと選ばせて貰った。

紫音は当時のことを少しだけ思い返す。

『じゃあ、演算能力高め、記憶能力高め、健康な体で。とりあえずこれで一流大学狙えば平穩無事な生活も出来るでしょ』

『え、ちよつ!? もっと豪華なのにしないの!? ほら、F a t e 的な宝具とか、一方通行的な反射能力とかさ!? それぐらいないと原作に絡めないよ?』

『いや、何か問題があれば原作主人公がなんとかしてくれるでしょ? だから俺は一流の国公立大学に入って良いところに就職しようかと。いや、記憶力もあれば言語学習も楽だし、海外に出るのもアリだな』

『想像以上に安定志向で詰まんねえ……じゃあいいや、君の願いに適当なプラスアルファ加えるよ。そうじゃないと面白くない。あとは主人公の近くに生まれるように設定しちやおつと』
『無理やり関わらせるのかよ!?!』

そんなやり取りがあつて生まれたのが今の紫音だ。

原作『魔法科高校の劣等生』において重要な位置づけとなる四葉一族、その分家である黒羽の家系で長男として生まれた。紫音も前世で原作は知っている。

面倒な場所に放り込まれたと辟易したものだ。

しかし慣れとは恐い。

地獄のような魔法の特訓、礼儀作法、言語、暗号解析、ハッキング、その他諜報活動に必要な技能をこれでもかというほど叩き込まれたにもかかわらず、今ではそれが普通となっている。

(それにしても、俺の立ち位置はオリジナルキャラ。つまり原作に登場しないはずの人物って訳だし、どう動くか悩むよな)

一応、原作が開始するのは中学生になってからだ。追憶編と呼ばれる内容で、主人公であり公式チートとも言われる司波達也が戦略級魔法『質量爆散』マテリアルバーストをぶっ放す事件である。沖繩に旅行していたところ、大亜細亜連合が軍艦を使って攻めてくるのである。原作でも屈指の危険なイベントだった。

十年経った今でも、それぐらいは覚えている。

(とりあえず、俺たち黒羽は関わらないけどな)

沖繩戦自体は紫音に関係ない。パーティに参加するために沖繩には赴くものの、次の日には本土へと引き上げるからだ。なのであまり気にしてはいない。

一番気かけなければならぬのは、高校からである。紫音は達也と同年であるため、同じ時期に高校へと入学することになる。恐らく……というよりも確実に魔法科高校へと入学することになるだろう。問題は何処の魔法科高校に通わされるかだ。第一高校から第九高校まで存在する魔法科高校において、メインとなるのは主人公の入学する第一高校だ。

しかし司波達也と司波深雪の兄妹を入学させる以上、同時期に四葉

一族をいか所を集めないために、紫音は他の高校へと行かされる可能性が高い。有力なのは原作で黒羽文弥と黒羽亜夜子の双子が通う四校だ。

ちなみに、紫音からすれば文弥と亜夜子は弟と妹にあたるので、非常に可愛がっている。

(ま、なるようになるか。問題があれば達也がなんとかしてくれろだろうし)

そんな思考のもと、紫音は意識を落としたのだった。



紫音は黒羽の長男として多くの訓練を受けている。魔法戦闘訓練はその内の重要事項であり、自身の持つ特異魔法の練習も兼ねて訓練には参加していた。

『ダークミステリア暗黒流星群』

紫音が手を翳した先にある的が、黒いラインによって貫かれる。漆黒のラインは無数に展開されているので、的は一瞬にして穴だらけとなった。

魔法を解除すると黒いラインが消える。

「発動数がかなり上がりましたな。真夜様の『流星群』ミューティアラインに近づいていきますぞ」

「ありがとうございます」

紫音の特異魔法は『調律』。

それは混沌を整然とさせることのできる精神系の魔法だ。本来は対象の心を落ち着かせたりするのが目的だが、物理にも干渉できる。それによってマイクロレベルでの調整を可能とするのだ。

今回の場合は光の調律。

本来、光は乱反射することによって人の目に届き、立体感や色相を感じさせている。しかし、空間上をランダムに走り回る光が一方方向に調律された場合、それは凶器へと変貌するのだ。どんな障害であつても反射吸収をさせず、一方方向に進み続ける光となるのである。

つまりはあらゆる対象を貫く流星となるのだ。そして光が一方方向に進むということは、その部分の光が目が届かないということになる。結果として黒いラインが空間中に残るので、漆黒のレーザーが飛んでいるように見えるというのが『暗黒流星群』ダークミューティアの仕組みだ。

名前の由来は四葉家現当主の四葉真夜が使う『流星群』ミューティアラインから来ている。

『流星群』ミューティアラインは空間中の光分布を偏らせることで百パーセント透過するラインを作り出す魔法なので、過程や効果範囲は違えど結果は似ている。

この魔法で最も恐ろしいのは、攻撃速度が光速であることだ。つまり、気付いた時には死んでいるのである。

「紫音様は一般的な魔法こそ凡庸ですが、事象干渉力と特異魔法は次期当主候補としても充分。その歳でこの実力なら、まだ狙えますぞ」
「良いよ別に。俺の能力は黒羽に向いている。当主は深雪に任せるよ。今のところは彼女が筆頭候補だからね」

「紫音様がそう言われるのなら構いませんが、自分としては微妙な気

分ですな」

教官役の男は複雑そうな目で紫音を見つめる。

まだ十歳という若さでありながら特異魔法を使いこなす紫音は、大人の中から見て異常だ。だが、それは紫音が特典として選んだ演算能力に起因している。紫音は思考能力や計算能力の向上というつもりで選んでいたのだが、効果は無意識下の魔法演算領域にまで及んでいた。

結果として紫音は魔法発動に必要な想子量サイオンこそ少ないが、魔法演算能力と干渉力だけは並外れていた。それこそ、魔法演算に関しては補助道具として一般的なCADを必要としないほどである。

通常はCADを使って半秒以内に魔法を発動するのが実用レベルだ。しかし、紫音はCADなしにその基準をクリアしていたのである。

惜しむらくはサイオンが非常に少ないことだろう。

それこそ、平均的なサイオン量を下回るほどである。こればかりは遺伝の他に運の要素が強いので、鍛えたところで生まれ持った量で満足するしかない。

また、サイオン量の少なさこそが紫音が当主筆頭となれない理由でもあった。並みはずれた特異魔法と演算能力を持ちながら深雪に筆頭の座を取られたのは、偏にサイオン量が少ないからである。

「さて、紫音様。本日は訓練相手の他に司波達也も来るそうですよ」

「あー、いつものね」

「はい。亜夜子様と文弥様も混ざられるそうです」

「じゃあ俺は魔法じゃなくて体術を教えてもらうとしようかな？俺と達也では特異魔法の撃ち合いにしかならないし。流石に『分解』は食らいたくない」

「何をおっしゃいますか。紫音様が本気になればガーディアンごとき――」

教官の男がつつらと達也の悪口を述べるのを見て紫音は密かに溜息を吐く。主人公の幼少が酷いものだというのは知っていたが、実際に目にするのと文章として読むのでは違ってくる。見ているだけなのに精神がガリガリと削られているように感じたほどだ。

なお、初めて『調律』を使ったのは自分自身である。強制的に安定化させなければ吐いていたかもしれないほど過酷な環境に紫音は置かれていた。

(ま……原作通り亜夜子と文弥は慕っているみたいだし、とりあえずはこれでいいか。下手に関わって原作が変わっても面倒だ)

いつかは原作を変えるかもしれないが、それは今ではない。

今の過酷な環境が達也を創り上げているのは確かだ。将来に影響があつては困る。まことに自分勝手な発想と分かりつつも、紫音は止めるつもりがなかった。

ちなみに、亜夜子が達也を慕っているのは魔法のヒントをもらったからである。

黒羽亜夜子が得意とする収束系魔法『極散』。

これは『拡散』という魔法の究極形であり、熱や光や音を平均化するというもの。紫音の『調律』にも似ていることから、やはり兄妹なのだと分かる。そしてこの『極散』は達也の『分解』がきっかけで生まれた魔法だった。

亜夜子は達也から詳しいプロセスを教わり、自分なりに『極散』を完成させたのである。『拡散』までなら扱える魔法師も少なくないが、『極散』ともなると話が変わってくる。理論上は誰でも使えるが、少なくとも今は亜夜子だけしか使えない魔法だった。

そして双子の弟である文弥も姉に釣られて達也を慕っている。

(さて、原作開始の日までにアレを完成させようか)

その日まで、イレギュラーは力を蓄え続ける。

はじまり2

五年がたち、紫音は十五歳となった。

次は高校生であり、一応は魔法科高校への進学が決まっている。決まっていると言っても、試験自体はまだ先だ。更に言えば願書提出も三か月先である。

だが、紫音の実力からすれば受かるのが当然。

問題は何処へ行くかだけだった。

「ただいまーっと」

紫音は眠そうな表情を浮かべつつ山梨県の四葉本邸に上がる。するといつもは使用人が迎えに来るところを、今日は筆頭執事の葉山が立っていた。

「お帰りなさいませ紫音様」

「……珍しいね。葉山さんが来るなんて」

「はい、本日は奥様から紫音様が帰還次第、通すように命じられておりますので」

「今日の仕事の報告……なわけないか。大したことのない情報の抜き取りだったし」

「詳しくは奥様から」

紫音は黒羽の中でも拷問官という立ち位置にいる。黒羽家が捕らえた他国のスパイから情報を抜き取るのが主な仕事だ。だが、拷問官といっても残虐な行為をするわけではない。

特異魔法『調律』によって脳波をリンクさせ、思考を直接読み取るのである。紫音が予てから開発していた戦略級魔法の応用なのだが、黒羽としては非常に便利な力だった。

結局のところ、拷問官（笑）なのである。

それはともかく、紫音は葉山に連れられて当主、四葉真夜の部屋へと案内される。ノックの後に入ると、ナイトドレスを纏った真夜が待ち受けていた。四十代にもかかわらず、恐ろしいほどの美貌を放つ彼女こそが『極東の魔王』とも呼ばれる最強の魔法師。決して色香に惑わされてはならない存在だ。

「こんばんは当主様」

「ええ、こんばんは紫音さん。今日は貴方に頼みごとがあるのよ」

「頼み事……ですか」

姿勢を崩す許可がないところを見ると、短時間で済む内容らしい。逆に言えば『はい』か『Yes』しか許されない命令ということだろう。頼み事と言っているが、そんなものは形ばかりのものである。

そもそも、次期当主候補の一人とは言え、分家の長男如きが当主に口答えできるはずもない。

尤も、真夜は自身と似た魔法を使う紫音を気に入っている節があるので、多少の口答え程度なら赦されるだろうが。

「魔法科高校へ進学することは決まっていたのだけど、ようやく貴方に行つて貰うところを決めたわ。結論から言うと第一高校に行つていただきます。四葉として」

「かしこまりま……はい？ 四葉として？」

「ええ、四葉として」

第一高校に進学する部分は良い。

想定外だがそこは構わない。

しかし、四葉として入学するということは、自分が次期四葉家当主候補であることを世間に晒すということの意味する。かつての事件から身内を守ることに執着する四葉らしくない行動だった。

故に紫音は驚いたのである。

「理由は簡単です。深雪さんの囀になりなさい」

「……つまり、自分が第一高校に入ることと司波兄妹の異常性を誤魔化そうと?」

「ええ、加えて、貴方にはアレがありますから、二人の役に立つでしょう。それに紫音さんにはガーディアンがついていません。来年になれば水波も入学できるようになりますが、少なくとも今年の内は達也さんにガーディアンを兼任して頂くことになります」

「しかし達也と深雪の囀が目的なのでしょう? 達也に守って貰っては本末転倒では?」

「ええ、ですからこれは建前。貴方の情報収集能力には期待しているわ。本当ならガーディアンすら必要ないでしょう? 貴方が黒羽に戻るのは真の次期当主が決定するとき。紫音さんは自身を囀にして情報収集に励み、そして深雪さんから目を逸らさせる役目もこなす、ということよ」

これも黒羽としての仕事なら問題ない。

規模は大きい、囀捜査も含めたカモフラージュだからだ。しかし、四葉紫音として第一高校に入学するとなると、かなり気を使う必要が生まれる。達也と深雪に情報を伝えるだけでも、不自然にならないように工夫を凝らさなくてはならない。

唯一の救いは、手加減しなくても良いことだろう。

十師族であるという括りのお陰で、大きな力を見せても不審がられることはないし、他の十師族から勧誘を受けることもない。そこだけは四葉というネームバリューが効いてくる。

しかし、紫音は念のために真夜に尋ねた。

「第一高校入学の件は承りました。ところで、どこまで見せても宜しいですか?」

「本当の力を見せてはいけないわ。貴方の持つ真の魔法は四葉の最重要機密。それを隠すためにも、逆に貴方は四葉を名乗りなさい。

『暗黒流星群』を見せれば周囲も納得するでしょう。私の『夜』は有名

ですもの」

四葉という家系は二種類のタイプが生まれる。

一つは先天的に精神系の魔法を有するタイプ。もう一つは歪な魔法演算領域によって特殊な魔法を操る真夜のようなタイプである。

紫音は前者、精神系統魔法『調律』の使い手だが、その応用によって後者に見せかけることも可能だ。『ダークミリーティア暗黒流星群』は真夜の魔法と似ているので、説得力もあるだろう。つまりは見せ札を作ること、真なる切り札を隠すという手法である。

殺すことに特化した、兵器としての魔法『ダークミリーティア暗黒流星群』。実に四葉らしいと誰もが思うことだろう。

(まさか原作に無理やり関わるとはね……しかも四葉の名前でときた。俺を転生させた神モドキは、そこまで原作に絡ませたいのかね)

その心の眩きは誰にも聞こえることなく、嘆きは誰にも知られることがないのだった。



第一高校への入学が決定した数日後、紫音は黒羽家の家族会議に出ていた。家族会議といっても、参加者は黒羽家当主であり父親でもある黒羽貢、双子の亜夜子と文弥だけである。紫音の母親である亜弥は不参加だった。

「——というわけで第一高校へ入学することになりました。四葉紫音として」

「よりにもよって……真夜様は何を……」

貢は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。嫌われ者のガーディアン司波達也と同じ高校であることまでは許容したとしよう。だが、四葉の名で入学するとなると、様々なしがらみが襲ってくる。しかも、自身を囿にしたカモフラージュがメインだというのだ。

親からしてみれば心配もするだろう。

これでも貢は子供に甘い部分があるからだ。

「紫音兄さんとは滅多に会えなくなるってことだよね？」

「ああ、その通りだよ文弥」

そして兄を慕う文弥も残念そうに俯く。

四葉を名乗る以上、不用意な接触は出来なくなる。一緒に住むなど言語道断だ。既に紫音は一人ぐらしが決まっており、教育が終わり次第、桜井水波をガーディアンとしてつけることになっている。これから最低でも三年は会うだけでも不自由することになるだろう。

「これからは俺がしていた仕事も亜夜子と文弥に振り分けられると思う。情報の抜き取りは秘密裏に俺が担当するだろうけど、捕縛は回ってくるだろうな……お前たちこそ大丈夫か？」

「大丈夫よ！ 私も『極散』を実戦レベルで使えるようになったし、隠密行動なら誰にも負けないわ。文弥だっているもの」

「うん。姉さんの言う通りだよ。兄さんも心配しないで」

「ああ、せめて女装して違和感が出るぐらいしつかりしてきたら安心するよ」

「兄さん!？」

「あらあら？ だったら文弥は一生安心させられないわね」

「姉さんも!？ 僕だって好きでやってるんじゃないよ!？」

亜夜子と文弥は黒羽の仕事を手伝う際に変装をしている。その際、文弥は女装しているのだ。裏では双子の姉妹と認識されているが、実際は姉弟。見事に騙せてしまっているのである。

文弥はそのことを地味に気にしていた。

そろそろ文弥が涙目になってきたので、紫音が折れることにする。

「悪かったよ文弥。ちゃんと期待している。頑張れよ」

「……はい」

紫音は文弥の頭に手を置いて激励を送る。妹と弟に期待しているのは事実なので、最後は茶化さずにしっかりと託した。

それから紫音は貢の方に目を向ける。

「父さん。あっちの仕事はまだ続けるつもりだから、専用の場所を用意して欲しい」

「思考の読み取りはお前にしか出来んからな。次代を育てるためにも口の軽い奴らは部下に任せる。だが、面倒な奴は頼むつもりだ」

「任せてくれ。それが『調律』の本来の使い方だからな」

紫音がやっている情報吸い出しは高校進学後も続ける予定なので、四葉を名乗ってからも専用の場所を用意することで誤魔化す予定だ。紫音の『調律』は貴重なので、囿の役目があっても手放せない。

圧倒的な演算能力のお陰で精神系統魔法を連続使用しても負担が少なく、肉体へのフィードバックが全くと言って良いほどない。特典として頼んだ健康な体が効いていたという部分もある。嘗ての四葉深夜のように魔法の使い過ぎで衰弱するようなこともない。

相変わらず妙な部分で特典が仕事していた。

ちなみに記憶能力向上のお陰でフラッシュユキキャストまで習得していたりする。しかも類稀なる演算能力のお陰で発動する魔法は相当な威力だ。

紫音の基本戦術は『暗黒流星群』^{ダークミューティア}なので、実戦においてはフラッシュキヤストも滅多に使わないが。

「最低でも二年は不自由なままになると思う。父さんにも迷惑をかける」

「気にするな紫音」

パーソナルデータ上でも紫音が黒羽家の者であるという情報は完全秘匿されるので、紫音は完全に謎の人物となる。

両親不詳の四葉一族。

大きな注目を集めるのは間違いないだろう。

だが、それでこそ司波兄妹のカモフラージュになる。

「ま、なるようになるか」

紫音は入学早々のテロ事件を思い出しつつ、今のひと時を噛みしめるのだった。

入学編 入学編1

桜が舞い、花卉で道が染まる季節。

東京都八王子に存在する国立魔法大学付属第一高等学校は入学式を迎えていた。新入生が意気揚々と校門を潜る中、二人の男女が何かを言い合っていた。

「納得できません」

「まだ言っているのか……?」

不満そうな表情を浮かべるのは恐ろしさすら感じる美少女。左右対称の整った体つきに加え、黄金比を思わせる顔のパーツ。十人が見れば十人が絶賛する美しさだった。

対する男は少女の兄。

困ったような、呆れたような目で妹を見返している。二人は四月生まれと三月生まれの兄妹であり、今年の第一高校入学者だった。

「なぜお兄様が補欠なのですか？ 入試の成績は二番手だったではありませんか！」

「お前がどこから入試結果を手に入れたのかは横に置いておくとして……魔法科高校なんだからペーパーテストより魔法実技が優先されるのは当然じゃないか。そもそも、一番手は紫音だ。魔法もペーパーテストも出来る奴がいるんだから、ペーパーテストだけの俺は受かっただけでも奇跡と言っている」

「う……それはそうですが……」

「それにしても紫音だって運がない。まさかサイオン量の点数でお前に負けるとはな……」

「そういうお兄様も入試成績を知っているじゃありませんか……」

この兄妹こそ、司波達也と司波深雪である。

現当主である四葉真夜の姉にあたる四葉深夜の子だった。四葉において重要なポジションである二人は、紫音を隠れ蓑に魔法科高校へと在籍することになったのである。既にこのことは二人も知っており、紫音と達也で協力して独自の連絡回線を作っていた。

そして四葉紫音。

入学成績は二位である。魔法技能は深雪とほぼ同点であり、ペーパーテストはギリギリ達也より上。しかしサイオン量が致命的に少ない紫音はその点数で総合一位を逃した。結果として深雪が入試成績一位となり、新入生総代を務めることになっている。

劣等生の兄と優等生の妹。

その二人と共に入学した混沌なる調律師。

ここから物語は捻じ曲がっていく――



入学式が始まるギリギリで式場へと入った紫音は空いている席を探した。既に席の殆どが埋まっているので、かなり探さないと見つからないだろう。

ちなみに、席は前方が一科生^{ブルーム}、後方が補欠と称される二科生^{サイド}である。一科生と二科生を見分ける方法は簡単で、左胸にエンブレムが入っているかないかで分かる。勿論、エンブレム付きが一科生だ。

キョロキョロと周囲を見渡していると、紫音は少し下から声をかけられた。

「あの、新入生ですよね？」

「はい。そうですよ」

紫音が視線を下ろすと、そこには背の低い女子生徒がいた。同じ新入生かと思っただが、それよりも先に彼女が答えを口にする。

「私は生徒会書記の中条あずさといいます。空いている席に案内しますよー」

「ではお願いしますね」

「任せてください」

先輩だったのは予想外だが、念のために敬語で話して正解だった。紫音としてもこの中から空いている席を探すのは面倒なので、素直に案内を受けることにする。

すると、席に向かう途中であずさが話しかけた。

「入学おめでとうございます。ギリギリで入ってきたみたいですけど、寝坊でもしたんですか？」

「いえ、少し親戚と電話をしていました」

「なるほど。それは入学祝いですか？」

「そうですよ」

嘘ではない。

紫音は今朝から真夜と電話していたのだ。その内容は入学祝いという建前のもと、学校生活における注意点の再確認などである。紫音は達也との秘匿回線を形成したことを連絡した程度だった。

だが、そんなことは知らないあずさは素直に納得する。

「それにしても生徒会の方は入学式の案内もしているのですか？」
「はい！ 私は会場の案内のほかにも、名簿のチェックもしています。
それと今は席に困っている新入生がいたら案内もしていますよ」
「それはそれは。どうもありがとうございます」
「これも仕事ですから！」

あずさは確かに先輩だ。

だが、少し誇らしげに話している姿を見ると、幼児が背伸びしているように感じる。口が裂けてもそんなことは言えないが。

そしてすぐに空席へと辿り着き、紫音はお礼を述べる。

「どうもありがとうございます。ごさいます中条先輩」

「いえいえ。あ、そう言えば名前を聞いていませんでした。良ければ教えてください」

「そうでした。これは失礼しましたね。四葉紫音と申します。これからよろしくお願いますね中条先輩？」

「はい、よろしくお願いますね。四葉君……って四葉ですかあっ!？」

「ええ、中条先輩の想像している四葉ですね」

面白いほど反応しているあずさを無視して紫音は席に着く。一方、
アンタツチャブル
接触禁忌とも呼ばれる四葉一族の一人が目の前にいると知ったあずさは、壊れたブリキのおもちやを思わせる足取りで逃げるように去って行った。

また、あずさの叫びを聞いた周囲の新入生たちも恐る恐ると言った様子で紫音を見る。

流石は恐怖の代名詞、四葉である。

(ま、それより深雪の答辞だな。どんな面白いことを言ってくれるのやら……)

数分後に控えた入学式。

紫音はブーツとしながらその時を待つのだった。



入学式が終わったので紫音は会場の外に出ていた。

少し楽しみにしていた深雪の答辞は「皆等しく」「一丸となつて」「魔法以外にも」「総合的に」と際どいフレーズを盛り込みつつ構成されていた。魔法の実力や血統がものを言う魔法科高校において、平等など有り得ない理想だ。

生まれ持った才能こそが全てであり、努力で埋められる隙間など少ない。魔法とは、才能ある者が努力することで身につく技能だからだ。皆努力している以上、才能こそがものを言う。

だから深雪の答辞はかなり危ないものではあった。
尤も、その美貌に見惚れて誰も気に留めなかったが。

(ブラコン姫も達也のためにやったんだろうな……まあ、気持ちちは分
からんでもないけど)

紫音とて亜夜子と文弥の双子は可愛がっている。それはもう、この上なく可愛がっている。だからこそ、兄を思いやる深雪の気持ちは理解できた。

さらに司波兄妹は達也の方もシスコンである。妹以外に興味がないのではないかと疑うほどのレベルで妹だけを愛している。勿論、妹として。

「しかしやらかしたな……まさか深雪に負けるとは思わなかった」

四葉の名を背負う以上、総合成績一位で入学するつもりだった。類稀なる演算力と記憶力のお陰でペーパーテストは余裕。そして干渉力と魔法演算力があれば魔法技能テストも問題なかった。

問題だったのはサイオン量が点数にされる部分である。

魔法師はサイオンを使って魔法を発動させるので、サイオン量が多いほど良いとされている。今ではその風習も廃れつつあるが、そういうイメージが残っているのは確かだ。魔法科高校の入試でもサイオン量は点数化されるので、その分だけ深雪に負けてしまったのである。

紫音のサイオン量は一般平均よりも下だ。十師族という日本を代表する魔法師名家を基準にすれば、かなり下となる。ここだけは運の要素なので仕方ないが。

ともあれ、司波兄妹のカモフラージュになるつもりが、四葉に勝った一般人として深雪を目立たせる結果となってしまった。いきなり失敗である。

ちなみに、今朝の電話はこれに関する小言も含まれていた。

「まあ、なんとか挽回してみるか……」

溜息を吐きながら、紫音はIDカードの発行に向かう。新生生が一齐に並んでいるので、かなり時間がかかるだろう。それでも並ばないわけにはいかない。

仕方なく紫音は最後尾から並んで三十分後にカードを手に入れることが出来た。

「B組……ね。組分けは適当か」

こういうのは成績順にA、B、C……と分けられているのかと思えば、実はランダムだ。ただし、一科生がAからD、二科生がEからH

というクラス分けになっている。

一科生と二科生の違いは魔法実技における教員の有無だ。期待されている一科生は魔法を教えることの出来る希少な人員によって丁寧に教えてもらえる。だが、二科生は与えられた課題を自主的にこなすことで単位を貰える仕組みだ。

また、座学については一科生と二科生で差はなく、与えられた課題を時間内にこなせば良い。時代の流れと共に教員不足が加速し、現在のような効率化されたシステムが採用されるようになった。

「取りあえず帰りますかね」

すでに担任というシステムがない以上、入学式が終われば帰っても文句は言われない。ただ、与えられたホームルームへと行くことで新しい友人を作ることは出来るだろう。

しかし、紫音は学校生活を四葉として生きることになっている。予想するまでもなく友達など出来ない。名前を聞いただけで避けられることだろう。先ほどの中条あずさが良い例だ。

紫音はそのまま四葉家が用意した家へと帰るのだった。



夜、ホーム・オートメーション・ロボット（HAR／ハル）に夕食を作らせた紫音は、食後タイミングを見てリビングの巨大モニターの前に立ち、テレビ電話をかけた。

専用秘匿回線を利用して、司波家に連絡を取ることにしたのである。

案の定、電話に出たのは司波兄こと達也だった。

「こんばんは達也、それに深雪」

「ああ、こちらこそ紫音」

「こんばんは紫音さん」

どうやら向こうも夕食を食べたところらしく、食後のコーヒーが用意されている。どうやら兄妹団欒の時を邪魔してしまったらしいと察した紫音は手短かに用件を済ませることにした。

「取りあえずは簡単な情報交換といこう。俺はB組になった」

「そうだな。俺はEだ」

「私はAです」

「全員バラバラだな。まあ、達也が別なのは仕方ないとして、俺と深雪も離れたか」

「クラス分けはランダムらしいからな。それも仕方ないさ」

「ま、支障はないから良いだろ。それで……初日から聞くのもアレだけど、トラブルはなかったか？俺はさっさと帰ったから特に把握してないんだけど」

紫音がそれを聞くと、少しだけ達也は困ったような表情を浮かべた。元から達也がトラブル体質なのは知っていたが、初日からかと紫音も呆れる。

「……で、何があった？」

「特に何かがあったわけじゃない。ただ、生徒会長に目を付けられたかもしれない」

「七草か……よりもよつて」

「どうやら俺のペーパーテストに対する魔法技能成績を見て目を付けたみたいだ」

「それなら実家関連じゃなさそうか？」

「今のところはそう見える」

かつて、四葉真夜と十師族七草家の当主である七草弘一（セブクヒロイチ）は婚約者だった。四葉を貶めたかつての事件以来、その婚約も解消され、今では犬猿の仲となっている。正確には七草が一方的に四葉を毛嫌いしているだけなのだが。

「俺も入試成績一位を逃してしまったからな。こっちの責任もあるか……」

「サイオン量の点数で僅かに深雪に負けただけだろうか？　紫音の責任にはなるまい」

「いやー、当主様に今朝から小言を頂いちやってね。まあ、誤魔化せるように動くつもりだよ」

「すみません紫音さん……」

「深雪が謝ることじゃない。俺の力が足りなかったただけの話だ」

紫音の本来の力を使えば、サイオン量はそれほど関係ない。だが、その力は公表するつもりはないし、あくまでも紫音は『夜』を継ぐ者として四葉を名乗るのだ。

『暗黒流星群』（ダークミステリア）はいずれ披露することになるだろう。紫音の想定では魔法科高校の祭典である九校戦で見せることになっている。というより、四葉の力を大々的に見せるとすれば、そこぐらいしかない。

「達也たちは何かほかにあったか？」

「いや、主にこれぐらいだ。問題はなかったよ。強いて言うなら、ブルームとウィードぐらいか」

「あの不愉快な差別ですね」

深雪が本当に不愉快そうにしていることから、達也が蔑まれる場面でもあったのだろうと予想できる。確かに、達也の持つ本当の実力からすれば二科生（ウイード）という結果は我慢できないだろう。兄を慕うが故に、その感情は強いハズだ。

紫音もこれについては察している。

「一科生も二科生を見下しているようだけど、俺の調べでは二科生も過剰に差別を意識しているらしい。それに二科生の一部は、不満から魔法排斥団体にも所属しているみたいだ。ブランシュって言ったら分かるか?」

「把握している。有名どころの一つだな。まさか魔法科高校に入り込んでいたとは……」

「テレビでもたまに出るテロ組織だ。流石に知ってたか。で、その下部組織エガリテがどうやら絡んでいるらしいぞ。取りあえず近いうちにアジトごと潰す予定だ」

「流石だな。もう調べが済んでいるのか?」

「当たり前だ。もしも深雪が通う高校にテロ襲撃でもあってみる。達也は深雪のために派手な行動を起こすだろう? それを事前に防ぐのも俺の仕事だ」

「ああ、済まないな」

深雪の兄でありながらガーディアンとしての側面を持つ達也。深雪が危険に晒されるならば、徹底的に潰す自信がある。それこそ、『分解』や『再成』を使うことも厭わないだろう。

それでは困るので四葉という派手に動ける名を持った紫音が対処するのだ。

「気を付けてくれよ二人とも。あ、もしも亜夜子と文弥が来たらよろしく言っておいてくれ」

「ありがとう。勿論だ」

「情報提供ありがとうございます。紫音さんもお気をつけて」

秘匿回線も長く使う訳にはいかないので、今日はこの程度で切ることにする。

画面が消え、そのあと紫音もすぐに休んだのだった。

入学編2

魔法科高校二日目。

この日は授業もなく、履修登録後はオリエンテーションとなった。このオリエンテーションもクラスごとに回るような行儀の良いものではなく、割と自由に見ることが許されている。更に言えば、帰るタイミングも自由だ。

だからこそ、紫音は履修登録が終わり次第、学校を出た。そして目的地へと移動する途中でメールを打つ。

(さて、これで死体処理班にも連絡できたし、あとは蹂躪タイムだな)

昨晚の宣言通り、エガリテを潰すことにしたのだ。

一応、現在は上の組織ブランシユが水面下で動きつつエガリテが魔法科高校内部に侵入している。まずは表面の除去をするために紫音が動くのだ。

紫音が指定の位置に行くと迎えの車が用意されている。この車と運転手は四葉の関係者であり、紫音が自由に使える道具と使用人だった。予め連絡は入れているので、特に指示をすることなく目的地へと車は走って行く。

数十分ほどすると、エガリテのアジトであるボロアパートに辿り着いた。

「すぐに終わらせる。待機しておけ」

「かしこまりました」

それだけ言って紫音は外に出た。

ボロアパートの見た目をしているが、内部はそれなりに改装してあるらしい。部屋の壁をぶち抜くことで大きな空間を確保しているようだった。

紫音は『調律』という収束系と振動系に属する特異魔法を使用する

関係上、波動について敏感だ。魔法的資質と共に、特異体質として電磁波を知覚できるようになっている。この電磁波を知覚することで『暗黒流星群』ダークミーンティアは発動できるので、必須の特異体質だ。

そしてそれを利用すれば、ボロアパート程度の薄い壁の向こう側も知覚できる。

「十六人つてところか。情報通り、エガリテ幹部は揃っているようだな」

紫音は気負うことなくボロアパートの扉の一つに手をかけると、わざと激しい音を立てて開いた。そんなことをすれば注目されるのだが、それが目的である。

案の定、エガリテ幹部の一人は紫音を見て叫んだ。

「何者……その制服は魔法科高校のものか！ 何しに来た！」

「ちよつと用事があつてね。この中でリーダーは誰かな？」

「舐めんじゃねえぞガキが！」

エガリテ幹部たちは落ち着いた様子の紫音を見て武器を構える。法治国家日本では銃火器を沢山用意できなかったのか、十六人のうちの五人は鉄パイプだ。しかし、逆に言えば十一もの拳銃が紫音に向けられていることになる。普通ならば声も出ないほど恐怖することだろう。

だが、残念ながら紫音は魔法師だ。銃弾程度ならベクトル反射障壁で簡単に弾ける。魔法師にとって銃火器は脅威になり得ないのだ。魔法師を倒せるとすれば、魔法による事象改変を上回る出力で吹き飛ばす特殊兵器ぐらいだろう。ただし、これらの兵器は軍事機密級なのでエガリテ如きでは手に入らない。

「リーダーは誰かな？」

相変わらず涼しい口調で問いかける紫音にエガリテ幹部は苛立ちを募らせる。

だが、意外にも一人が名乗りを上げた。

「俺がリーダーだ。(馬鹿め。素直に名乗り上げると思ったか？ 真のリーダーは俺の右斜め後ろに——)」

「はいダウト」

紫音は容赦なく『ダークミューティア暗黒流星群』で男の額を穿った。ついでに貫通した暗黒のラインが後ろにいた別の男をも殺す。

精神系統魔法『調律』は脳波を調律することで紫音と思念リンクさせることが出来る。つまり、考えたことが筒抜けになるのだ。

「嘘はダメだろう？ リーダーは君だ」

紫音が真のリーダーを指さした瞬間、エガリテ幹部に動揺が走った。

その隙に紫音は追加の魔法を放つ。

「罪には罰を。『ダークミューティア暗黒流星群』」

空間を埋め尽くす光の乱舞。

だが、一方向へと完全調律された光は、決して目に届くことがない。故に暗黒のラインを残すという見た目も恐ろしい魔法。人が喰らえば一撃で穴だらけとなる。

『ぎゃあああああああああ!』

悲鳴が重なって不協和音となり、ボロアパートに響く。

生き残ったのは紫音がわざと外したリーダーだけだった。そして紫音は血だまりの中を一步ずつ進みながらリーダーに話しかける。

「君は質問に答えればいい。ただし、嘘はいけない。さあ、ブランシユについて教えて貰おうか？」

絶望が一步步つ迫る光景にリーダーは力なく膝をつく。

これが魔法の暴力。

圧倒的な力。

気に入らなかった魔法に反抗したが故に、こうなったのである。

こうして、数分と経たずにエガリテは壊滅し、紫音の『調律』によって全ての情報を抜き取られる。加えて魔法科高校の生徒を勧誘している証拠、更には一校生徒の中でエガリテに所属している人物のリストを手に入れた。エガリテはメンバーの証として赤、青、白が縞模様になったリストバンドをしている。メンバーリストに加えて、実際のリストバンドという証拠があれば内部からの浄化も簡単になるだろう。

そしてブランシユの情報も得た紫音は、死体処理を使用人に任せて再び学校へ戻るのだった。



真夜への報告や、エガリテから得た情報の裏取りをしてから学校に戻ったので、既に夕方となっていた。第一高校にブランシユの手が入り込んでいる以上、生徒会長にも報告するべきだろう。

幸いにも、第一高校の生徒会長は十師族に属する七草の長女だ。更に同学年には同じく十師族の十文字もいる。四葉からの報告となれば、すぐにでも動いてくれることだろう。

また、これによって敢えて目立つことにした。
しかし、紫音は校門でトラブルを目撃することになる。

「いい加減に諦めたらどうなんですか!? 深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挟むことじゃないでしょう!」

柴田美月。

達也と同じクラスであり、入学式で席が隣だったことから仲良くしている。霊子光放射過敏症という^{フシオン}霊子に対して過剰に敏感になってしまう特異体質を持っている。普段はそれを緩和するために特殊コーティングを施した眼鏡をかけている少女だ。

深雪と並ぶと見劣りしてしまうが、十分に美少女の領域だろう。大人しい見た目に反して、言いたいことはしっかり言える性格らしい。

(なんだあれ?)

少し離れた場所から見ていた紫音は、状況観察から事態の把握に努めた。

まず、深雪と達也の他に、柴田美月、千葉エリカ、西城レオンハルトが固まっている。二科生の中に深雪という一科生が一人だけ混じっているのは、少し不思議な光景だ。しかし、達也の関連で共に居ると考えれば納得できる。

深雪は達也のいる所ならどこにでも行くだろうから。

そして相對しているのは一科生数人だ。それを見た時点で紫音は状況を察する。

(深雪を取り合っているって訳ね)

左胸の紋章に誇りを持つ^{ブルーム}一科生ならば補欠の^{ウイード}二科生に深雪を取ら

れるのは我慢ならぬのだろう。深雪は非常に見目麗しく、言動も隙が無い上に魔法も優秀だ。少しでも取り入ろうと努力する気持ちは納得できるモノだ。

だが、行き過ぎた自信は転落を招く。

所詮は試験の成績による結果でしかない。正直、実戦ともなれば達也一人で一科生を蹂躪できてしまうだろう。それだけの實力差がある。

「相変わらずトラブルに愛されているな達也は」

紫音が溜息を吐いている間にも言い争いはヒートアップしていく。

「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」

「そうよ！ 司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらっただけなんだから」

無茶苦茶な論理だが、自分たちが特別だと愉悦に浸っているからこそその意見である。それに対し、レオンハルトとエリカも喧嘩腰で言い返した。

「ハッ！ そういうのは自活中にやれよ。ちゃんと時間が取ってあるだろうが」

「相談だったらちゃんと本人に同意を取ってからにすれば？ 深雪の意見も無しに相談も何もあつたもんじゃないの。それがルールなの。高校生にもなつてそんなことも知らないの？」

エリカの煽るような口調は実に腹が立つ。赤い髪と強気な表情が余計にソレを際立たせていた。そして遂に逆切れした一科生の一人が禁則事項を口にする。

「うるさい！ ウィード如きが僕たちブルームの邪魔をするな！」

あ、これはダメだ。

紫音はそんなことを思った。一高において差別用語とされ、公に禁止が言い渡されている言葉を使ってしまったのだ。我慢していた深雪もそろそろ限界だろう。

達也の安寧を守るためにも、このあたりで出しゃばるべきである。

紫音は暗殺技術の応用で流れるように動き、『ウィード』と口にした男子生徒の背後に立った。そして右手を彼の肩に置き、囁くように声をかける。

「へえ。なんだか楽しそうな話をしているね」

『ッ!?!』

突然現れた紫音を見て、達也以外が驚く。達也の場合、周囲を完全知覚する『精霊の眼』エレメンタルサイトのお陰で初めから紫音がいることを知っていたからだろう。

だが、本業で鍛えた隠密を破れる人物など高校レベルではそういうない。

故に誰もが驚いたのだ。

「だ、誰だあんた!?!」

「ふーん? 俺のこと知らないんだ?」

「はあ? 知るわけねえだろ!」

普通、十師族が入学するときはそれなりの噂が出回る。しかし、四葉の場合はかなり秘匿したので、一部の家系しか入学していることを知らないだろう。まして、顔など分かるはずもない。

また紫音の見た目は今どき珍しい純日本人的な風貌をしている。海外から優秀な魔法師の遺伝子を取り込んだことで、魔法師は日本人離れした顔つきになることが珍しくないのだ。濡羽色の髪と色白で線の細い紫音は古式魔法師の名家でよくみられる容姿をしている。

故にまさか紫音が十師族であるなどとは想像もつかないだろう。だからこそ、紫音は嗜虐的な笑みを浮かべながら名乗ることにした。

「四葉紫音……四葉家の後継者候補だよ」

それを聞いて急速に空気が冷える。

実際に冷えているのではなく、そう感じてしまうほどに誰もが動揺していた。

アンタツチャブル

接触禁忌の一族が目の前にいるのだ。十師族の中でも異様な個人戦闘力を持ち、数十人で一国を滅ぼせるとも言われるのが四葉一族。そしてそれは誇張でも何でもなく、昔に大漢という国は四葉一族によつて滅ぼされた。

歴史が語っているのだ。

史上最強の兵器が目の前にいると。

「面白い話をしていたよね？ ブルームが優れていてウィードは劣っているんだっけ？」

そんな問いかけをされても頷くことすら出来ない。

いや、許されない。

紫音はそれだけの畏怖を放っていた。

「だったら俺が司波深雪さんと帰ろうか。何、問題ないだろう？ 優秀な者は劣っている者よりも優先されるのだから……ね？」

紫音にお前たちは劣っているとと言われても言い返すことは出来ない。

一科生であることが誇りなのか。それは紫音の前で見事に碎かれた。上には上がいる。優秀な者が深雪と共に居られるというのなら、紫音には決して逆らうことが出来ない。

流石の一科生も四葉に言い返すなど無理と思っっているらしく、氣拙そうにしながら一人ずつ去って行った。

そして残ったのは一科生であることを特に鼻にかけていた男子生徒。そして少し離れた背後に女子生徒が二人。

「僕の名は森崎駿。ウィードなんか認めない！ 司波さんは僕たち一科生といるべきなんだ！」

せめてもの反抗なのか、男子生徒はそんな捨て台詞を吐いて逃げていった。

たった一人の登場によって解決してしまったことに、レオンハルト、エリカ、美月はポカンとする。

「はあく。すげえ」

「流石は名家ってやつね」

「ちよつとエリカちゃん……」

そんな風に茫然としていると、紫音は振り返りつつ笑顔で話しかけた。

「いや。済まない。たかが入試の成績で舞い上がっている程度の奴らが失礼なことを言ったね」

「構わない。寧ろ助かった」

紫音の言葉に達也が返す。再はとこ従兄同士である二人は面識もあるのだが、ここは初対面のふりをしなくてはならない。それを察したのか、深雪も一歩前に出て礼を言った。

「四葉君ですね。ありがとうございます」

「気にしなくていい。俺を抜いて成績一位になった君には少し注目していたところだよ。ああ、それと俺のことは紫音と呼んでくれ。四葉

の名は大袈裟過ぎて嫌いなんだ」

「分かりました。では紫音さんとお呼びします」

「俺も紫音と呼ぼう」

「そうしてくれ。司波では分かりにくいから、俺も深雪と達也でいいかな?」

「ええ、勿論です」

「構わない」

これで公でも普段の呼び方を使える。流石に公私で呼び方を使い分けるのは肩が凝るので、自然に名前呼びをする流れを作ったのだ。

そしてそんなやり取りをしていると、今のやり取りを見ていた二人の少女がやって来る。一人は無表情で大人しそうな見た目である一方、もう一人はビクビクとしながら紫音の方をチラチラと見ていた。この二人も先の一科生と共に居たメンバーだった。

恐らくは半分流れて付いてきただけだったのだろう。

そしてビクビクしている女子生徒が頭を下げ達也に謝る。

「光井ほのかです。さっきは失礼なことを言ってますみませんでした」

これには達也も面食らう。

だが、紫音の登場によって自分が恥ずかしいことをしていたと自覚したのでだろう。豹変ぶりにもビクビクしたが、それでも謝罪を述べるだけの根性もあるようだ。

「いや、構わない。皆もそれでいいな?」

「お兄様がそう仰るなら」

「ああ、いいぜ」

「まあ、赦してあげるわ」

「はい、謝罪は受け取ります」

深雪、レオ、エリカ、美月もそれぞれ頷きながら同意する。

だが、そこでまた一つ問題が起きた。

「貴方たち。少し話を聞かせて貰えないかしら？」

凜とした声に反応して全員が振り返ると、そこにいたのは生徒会長こと七草真由美だった。入学式で顔を見ているので、この場にいる誰もがそれを理解している。

そして真由美の隣にいるのは風紀委員長を務める渡辺摩利。

真由美の言葉を引き継いで、摩利が口を開く。

「騒ぎがあったと聞いてな。まさかお前が原因か四葉紫音？」

面倒なことになった、と紫音は密かに溜息を吐くのだった。

入学編3

七草真由美と渡辺摩利が騒ぎを聞いたのは偶然だった。入学の時期に新入生が羽目を外すのは珍しいことではなく、いつものことだと判断して現場に急ぐ。

だが、途中で聞いた騒ぎの場所に行ってみれば、そこにいたのは今年注目している二人の新入生。

一人は入試をトップで合格した司波深雪。減衰振動系を得意とする絶世の美少女。そして彼女の兄はペーパーテストにおいて教師を唸らせるほどの成績を叩き出した。だからこそ、摩利はともかく、真由美はよく知っていた。

そしてもう一人は――

「もう一度聞くぞ、四葉紫音。お前が原因か？」

「そうですよ」

摩利の質問に躊躇いなく紫音は頷いた。

今年の新入生において最も注目されていたのが四葉紫音だろう。十師族の中でも異質と言える四葉の後継者候補であり、噂では『夜』を継ぐ者と言われている。確実に台風の目となる人物だった。

摩利は眉を顰めながら再び問いかける。

「事情を聞こうか？」

「入試結果如きで優越感に浸っている愚か者にアドバイスをあげただけですよ。静観するつもりでしたが、どうやら禁止用語を使ってしまったみたいなので、注意をしてあげました」

「なに……？」

さも良いことをしたと言わんばかりの態度に戸惑う摩利。だが、それと同時に事情を察した。それは真由美も同じだったのか、後ろにい

る達也たちにも問う。

「司波さんたちから見ても四葉君の言った通りで正しいですか？」

「はい。概ねその通りです」

代表して深雪が答えると、達也、レオ、エリカ、美月も頷いて同意する。

暴力沙汰があつたわけでもなく、ただの揉め事だつたと判断した真由美は、嚴重注意だけで済ませることにした。

「わかりました。今回についてはお咎めなしにします。四葉君も、その名を背負っている以上は不用意なことを避けてください。いいですね？」

「自分は校則に則つたことしかしていませんがね」

「それでもです。七草としてではなく、一校生徒会長としてお願いします」

「……それならいいでしょう。心に留めておきます」

真由美も七草と四葉の確執を理解しているが故に、紫音の扱いには注意する。表立って喧嘩しているわけではないとはいえ、仲が悪いのは事実だ。特に現当主の七草弘一は四葉を毛嫌いしている節がある。長女である真由美まで気を使わなければ御家問題にまで発展しかねない。

また、四葉紫音という人物について掴み切れていないことも一つの要因である。

だからこそ、真由美は人格を知るために一手を打つことにした。

「そうそう。四葉君は明日の昼休みに生徒会室へときてくれませんか？ 生徒会メンバーと昼食を一緒にしながら話を聞きましょう。十文字君も呼んでおくわ」

「構いませんよ。自分としても元々、今から生徒会室に行く予定でし

「だから」

「あら、そうなの？」

「ええ、七草生徒会長と十字部活連会頭にお話があったので」

「それは十師族の関連かしら？」

「いえ。関係ありませんよ。挨拶のようなものです」

「そう、なら明日の昼休みにお願います。そうだ！ 司波さんも来てくださいますか？ 昨日はあまりお話できませんでしたから」

唐突に目を向けられた深雪は少し驚きつつも、達也の方に目を向ける。そして達也が頷いたのを確認すると、肯定の意を示した。

「分かりました。あの、お兄様も一緒に構いませんか？」

「深雪!？」

達也の頷きは『好きにしなさい』というものだった。だが、深雪はそれを拡大解釈して、そのように答えたのである。達也は慌てたが、真由美は笑顔で許可してしまった。

「構わないわ。ね、摩利？」

「ああ、別にいいんじゃないか？」

あっさりと許可が下りてしまったことで気の毒そうな目を向けるレオと美月。なお、エリカは一人で面白がっていた。

生徒会長と風紀委員長、部活連会頭はともかく、四葉と共に食事など恐怖でしかないだろう。そう思ったからである。達也と深雪が紫音と親戚同士であるとは知らないのです、そう思っても仕方ないが。

ともかく、達也は面倒を避けたかったので、優秀な頭脳を働かせて断りの文句を口にした。

「七草会長。生徒会と昼食ということ副会長殿も一緒なのでしょう？ 自分は副会長と揉め事なんて御免ですよ」

「あら、昨日睨まれたことを気にしているのかしら？　大丈夫よ達也君。はんどーくんは部室で昼休みを過ごすから」

「紫音の話を聞くなり生徒会が揃っている方が良いのでは？」

「大丈夫よ。私と十文字君さえいれば良いみだし……ね、四葉君？」

紫音は背後から達也の視線を感じる。

ここで達也の参加を断って欲しいという意味がハッキリと伝わってきた。

(だが、すまんな達也。俺は深雪が怖い)

そう、紫音は達也よりも深雪の方が怖い。

単純な戦闘においては達也の方が怖いが、こういったときには深雪が最も怖いのだ。ブラコン姫から達也を超えるオーラが飛んできているのを感じつつ、紫音は真顔で答える。

「いえ、ならば自分は明日の放課後にでも行きましょう。放課後なら副会長もいますよね？」

「ええ、そうね。呼べば来ると思うわ」

「ならば十文字会頭と副会長には明日の放課後にアポイントをお願いします。昼休みは司波兄妹とお話をして下さい」

「それでも構わないわよ」

恨めしい目を向ける達也と、嬉しそうな視線を送る深雪。

紫音は咄嗟に『調律』を使い、達也と脳波を合わせて念話する。

(スマン達也。深雪には逆らえないんだ)

(……まあいい。恨むぞ)

(恨むならお前のトラブル体質を恨んでくれ)

(……………)

その日はそこで解散したのだった。
達也と深雪はレオ、エリカ、美月に加えて先程の一科生に混じって
いた光井ほのか、北山雫を伴って帰る。一方、紫音は一人で帰路に就
いたのだった。



翌日の放課後、職員室に呼び出されたことで少し遅れた紫音は、急
ぎ足で生徒会室へと向かった。そして軽く服を整えてからノックし
ようとすると、勝手に扉が開かれる。

まさか気配を察して開けられたのかと思ったが、それは単なる偶然
だった。

「あら、四葉君？」

「七草会長。これは一体？」

真由美に続いて生徒会室から出ようとする一団を見て紫音は怪訝
な表情を浮かべる。すると、真由美が簡単に説明をした。

「紆余曲折あって達也君を生徒会推薦の風紀委員にしようと思ったん
だけど、はんぞーくんが反対しちゃってね。それで平行線になりかけ
たから、十文字君が模擬戦をしてみろって」

「なぜ模擬戦なのかは理解に苦しみますが……」

「話を端折り過ぎだ七草」

首を傾げる紫音に対し、十文字家の次期当主と言われる十文字克人が呆れたように口を開く。そして簡潔かつ分かりやすい言葉で紫音に説明をした。

それによると、生徒会副会長こと服部刑部少丞範蔵が司波達也の風紀委員入りを反対したのだ。そもそも、なぜ達也が風紀委員に推薦されてしまったのかと言えばお昼休みまで遡ることになる。

まず、新入生のトップ司波深雪が生徒会役員になって欲しいと要請された。新入生のトップが生徒会に入るのは毎年のことなので、ここまでは良い。だが、ここで深雪が達也こそ相応しいと言いだしたのだ。残念ながら生徒会は一科生で構成されると校則で決まっているので、変えようがない。しかし、風紀委員ならば大丈夫だということで、達也は生徒会推薦による風紀委員入りがほぼ決定したのである。

決め手は深雪が思わず漏らしてしまった達也の解析能力だった。達也のことを力説するあまり、魔法起動式から一瞬で発動する魔法を読み取るという特技がバレてしまったのである。通常は発動しなければ結果の分からない魔法を、発動準備段階で知覚できる能力。これを買われたのだ。

なお、深雪が嬉しそうにしていたのを達也も無下にできなかつたという理由がメインである。

「ところが服部は司波の風紀委員入りに強く反対しているようだな」「当然です十文字会頭。風紀委員とはいえ、二科生で務まるとは思えません。いえ寧ろ、まともに魔法も使えないのに、風紀委員の仕事を任せるなど……」

克人の言葉を補足するように服部が口を開く。紫音がチラリと深雪に目を向けると、かなり不愉快そうな表情を浮かべていたので、その後のことは予想できた。

「服部と司波兄を庇う司波妹が口論になったので、ならば模擬戦をし

て風紀委員たる実力があるかを見せてみると言ったのだ。これから第三演習室で模擬戦をすることになっている」

達也の持つ真の力を知っている深雪からすれば、達也への不当な扱いに我慢できないだろう。激しい口論になり、売り言葉に買い言葉で模擬戦に至ったことは容易に想像できる。

そして達也も、深雪のために模擬戦を受けることにしたのだ。そうでなければ、達也は必ず自分から引き下がっていたはずだから。

深雪がいるので目立つのは避けられないと思っていたが、まさかここまでトラブルを引き寄せるとは予想外である。流石の紫音も内心で達也を哀れんだ。

「……なら、ご一緒させてください。自分も興味が湧きました」

「構わないな、服部に司波？」

「大丈夫です会頭」

「自分も問題ありません」

「うむ。ならば同行を許可しよう。それに確か、四葉は教師推薦で風紀委員になるのだったな？　ならば寧ろ着いてきた方が都合も良い」

「ありがとうございます」

実は紫音は風紀委員に推薦されていた。

職員室に呼び出されていたのも、それが原因である。本来ならば森崎駿が教師推薦の風紀委員となるはずだったのだが、四葉の名の方が相応しいと判断された。風紀委員に四葉がいるだけでも、生徒たちは気を引き締めることだろう。

それを狙ったの推薦である。

「ああ、そうだ。渡辺委員長、これからよろしくお願いします」

「うむ、ご苦労。また後で風紀委員のメンバーを紹介しよう」

「お願いしますね」

紫音としては生徒会プラス十文字克人にブランシユについての話をしたかったのだが、どうやら後回しになりそうだ。だが、達也と服部の模擬戦を見るのも面白そうである。

だが、自由人な真由美の気まぐれによって紫音は傍観者の地位から引きずり落とされた。

「あ、そうだ！ ついでだから四葉君も模擬戦をどうかしら？ 十文字君もいるし、十師族どうしでちよつとだけやってみない？」

「はい？」

「む？」

これは克人も予想外だったのか、珍しく驚いた表情を浮かべる。高校生らしからぬ体格と雰囲気有する彼が年相応の驚きを見せるのは珍しい。いたずらが成功したと言わんばかりに真由美は口元を吊り上げ、言葉を続けた。

「彼も風紀委員になるわけだし、摩利としても実力を見てみたいでしょう？」

「確かにな。一理ある」

「でしよう？ 十文字君が良ければ、是非とも四葉君にもやってほしいわ。どうかしら？」

紫音は少し考える。

服部と達也の模擬戦で達也の異常性が出てしまうのは確実だ。そこで、自分が更に異常な姿を見せれば上塗りも出来るだろうと考えた。紫音の役目はあくまで囷。目立って目立って、達也と深雪から目を逸らさせるのが仕事である。

模擬戦程度ならやっても良いと判断した。

「いいでしょう。では胸をお貸しください十文字先輩？」

「ふむ。確かに俺も興味がある」

「決定ね！」

こうして、達也と服部、そして紫音と克人の模擬戦が行われることになったのだった。



第三演習室で、達也は模擬戦のためのCADを準備していた。使用するのはシルバーモデルの中でもループキャストに特化したシルバーホーン。同一の魔法を連続発動することを可能としたループキャストシステムを搭載しているので、警察組織などで人気となっている。

非常にプレミアの高いモデルのだが、実はこのCADの開発者トーラスⅡシルバーとは達也のことである。正確には二人の開発者がトーラスⅡシルバーを名乗っているため、達也はその片割れだ。

フォア・リーブス・テクノロジーズという企業に勤めるプロフィール不詳の天才開発者トーラスⅡシルバーが実は高校生だったという冗談のような事実がそこにはあるのだ。

そういった理由で、達也はフルカスタマイズしたシルバーホーンを持っている。

達也が魔法式のストレージを入れ替えていると、摩利が興味深げに尋ねた。

「いつも複数のストレージを所持しているのか？」

「自分では汎用型を使いこなすほど処理能力がないので」

実際、達也が使用するのは処理速度を強化した特化型CADだ。一

つの系統魔法しか使えない代わりに、その系統における処理能力が格段に高い。特化型は一つのCADに九個までしか魔法式を入れられないので、様々な魔法を使う場合はストレンジに魔法を込めて持ち歩くことになる。

逆に汎用型は様々な系統を組み合わせて使える。複数系統を組み合わせる複雑な魔法はこちらでなければ使えない。ちなみに、こちらは九十九個まで魔法を入れられる。

逆に言えば特化型しか使えないというのは魔法演算能力が低いということ。やはりウイードだと服部は達也を見下す。

「ルールを説明するぞ。相手を死に至らしめる攻撃は禁止だ。回復不可能な障碍しょうがいを与えるような攻撃も禁止。相手の肉体を直接損壊する術式も禁止する。ただし、捻挫以上の負傷を与えない直接攻撃は許可する。素手による攻撃も許可するが、武器は禁止だ。蹴り技を使うなら学校指定のソフトシューズに履き替えろ。

勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不可能と判断した場合に決する。双方開始線まで下がり、合図があるまでCADは起動させないこと。このルールに従わない場合はその時点で負けとする。あたしが力づくで止めさせるから覚悟しておけ。

以上だ」

摩利の説明が終わると、達也も服部も開始線の上に立つ。距離は五メートル。この距離ならば一秒以内に発動できる魔法の方が強い。服部は勝利を確信していた。

それは自身の使う腕輪タイプ汎用型CADが特化型より処理能力で劣ることを加味してもだ。一科生と二科生ではそれだけの差があるため、自惚れ抜きにして敗北など有り得ないと思っていた。

互いにCADへと手をかけて開始の合図を待つ。

「始め！」

摩利の合図と同時に達也の姿が消える。
そして次の瞬間、背後から魔法を浴びせられ、服部は床に倒れたの
だった。

入学編4

「勝者、司波達也……」

摩利の宣言に対し、当然と言った様子でCADを降ろす達也。秒殺で服部を倒したことで、深雪と紫音を除いた誰もが驚いた。

そしてその場を後にする達也の背後から摩利が言葉をかける。

「待て。今のは自己加速術式を予め展開していたのか？」

「そんなわけではないのは先輩が一番ご存知なハズですが」

「だがあれは……」

摩利の疑問も尤もだった。

事実、真由美、生徒会会計の市原鈴音、生徒会書記の中条あずさも驚いている。仕方なく、達也はその疑問に答える。

「魔法ではありません。正真正銘、身体的な技術ですよ」

「私も証言します。あれは兄の体術です。兄は、忍術使い・九重八雲先生の指導を受けているのです」

「ああ、司波兄妹の言った通りだ。俺も証言しよう」

深雪が補足しただけでなく、克人までも同意する。ここまで言われたならば疑う余地はなかった。また、九重八雲は忍術使いとして魔法界隈では有名である。古式魔法の使い手としてだけでなく、体術の面でも注目されている人物だからだ。

そして瞬間移動の如き体裁きの秘密が分かったところで、達也が使った魔法についての質問になる。

「ならば達也君の使った魔法も忍術ですか？ ただのサイオン波に見えたのだけど？」

「ええ、その通りです。ですが忍術ではありません。振動系の基礎魔

法でサイオンの波を作り出したのですよ」

「なるほど。服部はサイオン酔いで倒れたということか」

「御名答です十文字会頭」

サイオンは確かに存在するが、物質的な干渉は出来ない。だが、魔法師ならば観測は出来るので、強いサイオンで酔ったりすることはある。それによつて服部は倒れてしまったのだ。

しかし、ここで真由美に新たな疑問が生じた。

「でも待って。魔法師は普段からサイオンに晒されているから、それなりに慣れているはずよ。それなのに魔法師が立っていられないほどのサイオン波をどうやって……」

それにも達也が答えようとするが、先に口を開いたのは鈴音だった。

「波の合成……ですね」

「リンちゃん？」

「三つの波を連続生成し、服部君のいる場所で丁度重なるようにしたのでしよう。これによつて三角波のような強い合成が生じた、というわけですね。」

よくもそんな緻密な計算が出来るものです」

「お見事です市原先輩」

だが、そんな鈴音でも分からないことがあった。

「しかしどうやって振動魔法を三回連続で発動させたのですか？ それだけの魔法演算能力があれば相応の評価を得られるはずですが」
「ふむ。確かにそれはおかしいな」

克人も顎に手を当てて首を傾げる。

そこへ、口を挟んだのはこれまで口を閉ざしていた紫音だった。

「ループキャスト。これならば同一系統の魔法を連続生成できますね。そして座標、強度、持続時間に加えて振動数も全て変数化すれば可能でしょう。実際、俺も出来るので」

「紫音の言った通りです。多変数化は処理速度、演算規模、干渉強度の項目で評価されませんから、実技評価では大したことがないと判断されてしまいます」

紫音は自分も出来ると付け加えることで周囲の驚きを少なくしたが、多変数処理というのは事実として珍しい技能だ。どうしても関心を集めてしまう。

だが、そのなかで中条あずさだけは別のところに注目していた。

「あの一。もしかして司波君のCADはシルバーホーンですか？」

シルバーホーン？ とほとんどの人が首を傾げる中で、あずさが早口の説明をする。

「はい、天才魔工師と呼ばれるトールラスⅡシルバーが世界で初めて創り上げたループキャストシステム。それに特化させたモデルがシルバーホーンなんです！ しかも司波君の持っているものは銃身が長い限定モデルですよねっ！ どこで手に入れたんですか！」

あずさは達也にフラフラと近寄ってシルバーホーンに触れようとする。だが、達也は触らせまいとして華麗に避けていた。

まるで小動物がじやれているようである。

そして呆れた空気になったところで服部も起き上がった。

「なるほど……学校の成績だけでは測れない実力か……」

「はんぞーくん大丈夫？」

「は、はい！ 途中から目は覚めていましたから！」

そして服部は軽く頭を振った後、深雪の前まで歩いて行って頭を下げた。

「司波さん」

「はい」

「さきほどは身贖などと言ってすみませんでした」

素直に謝罪する服部を見て皆が驚く。だが、そこで達也ではなく深雪に謝る辺り、理解はしても納得はしていないのだろう。

「目が曇っていたのは自分の方でした。赦して欲しい」

「いえ、私の方こそ生意気なことを申しました」

互いに謝罪をしたところで、今回の件は終結する。

だが、もう一つだけ模擬戦が残っていることを摩利は忘れていなかった。

「さて、これで司波兄の風紀委員入りは決まったな！ 次は四葉だ。十文字と模擬戦をするのだろうか？ 準備してくれ」

残るは紫音と克人の模擬戦である。

達也もさっさとCADを仕舞い、試合の見学に集中することにした。一方のあずさはシルバーホーンが収納されてしまったことに落胆するが、十師族どうしの試合ということで気を取り直す。

誰も見たことがない四葉を継ぐ者の試合。

興味が出ないはずなかった。

「ルールは先程と同じだ。……四葉、CADはどうした？」

改めてルール説明をする必要もないだろうと、摩利は説明を省略したのだが、その時に紫音がCADを所持していないことに気付く。緊張して構えるのを忘れたのかと思ったが、そうではなかった。

「必要ありませんよ。CADなんて邪魔ですから」
「はっ。」

現代においてそんなことを言う魔法師は殆どいない。古式魔法師の中には、特殊な札などを用いることで魔法を発動する者もいるので、必ずしもCADが必要なわけではない。だが、何の媒体も無しに魔法を発動するなど前代未聞である。

勿論、出来ないことはない。
だが、実戦レベルと言われる半秒以内の発動は確実に無理だ。

そもそも、CADは長い詠唱や儀式を高速処理するためのものである。それを無しに自己の魔法演算だけで発動させると言っても、頭がおかしくなったとしか思われないだろう。

だが、紫音は改めて言い直した。

「CADなんて必要ありませんよ。発動が余計に遅くなります」

これには相対する克人も戸惑った。

魔法の常識をぶち壊すようなことを言いだしたのだから当然である。CADもなく実戦レベルで発動できるとすればBS(Born Specialized)魔法と呼ばれる生まれ持つての特殊技能だ。例えば、七草真由美は広範囲に空間把握を出来る特殊な眼を持っている。あらゆる死角を無視して全方位を知覚できる知覚系魔法を先天的に使えるのだ。

つまり、紫音はこの手の魔法を発動するのだと予想できた。

「なら、構わないが……後悔はするなよ?」

「ええ、大丈夫ですよ」

紫音は摩利の忠告にも涼しい顔で答える。

そして紫音と克人が開始線に立ったところで、摩利は試合開始の合図を出した。

「始め」

その瞬間、紫音の姿が克人の視界から消えた。

拙いと思ったときには激しい揺さぶりを喰らい、克人はバランスを崩す。だが、ここで服部とは異なり、踏みとどまって即座に持ち直した。

「へー。流石ですね十文字会頭。鍛えているだけではありません」

背後に立って右手を翳す紫音は余裕の表情でそんな言葉を述べる。

克人は先程の揺さぶりが残っているのか、不快そうな表情を浮かべつつ紫音に尋ねた。

「今の一撃。司波の再現だな？」

「はい、その通りですね。ただ、自分の場合は自己加速術式を使っています。その状態で波の合成を行い、サイオン波による酔いを誘発したというわけです。耐えられるとは思いませんでしたが」

「CADも無しにその発動速度。どうなっている？」
「秘密です」

答えはフラッシュキャスト。

魔法起動式を記憶領域にイメージ記憶としてインプットすることで、CADを介さず、直接魔法演算領域へと落とし込む。これによって魔法式の構築だけで発動してしまうという技術だ。

紫音が特典で貰った演算力強化と記憶力強化のお陰で扱える技術でもある。四葉が秘匿する技術なので、簡単に喋るつもりはない。

紫音がフラッシュキャストを使った場合の魔法発動速度は百ミリ秒以下であり、世界でもトップクラスの魔法発動速度と比べても半分以下に短縮できる。魔法発動の兆候を感じ取りにくいことを考えれば、ノータイムでの発動と言っても過言ではない。

「じゃあ、いきますよ」

そう言った紫音は自己加速術式を発動し、再び克人の視界から消えた。だが、克人は経験則と野性的な勘で紫音の位置を特定し、『フアランクス』を放つ。無数の障壁系魔法を連続的に発動することで無敵の防壁を作り出す十文字家の得意技。

だが、紫音はフラッシュキャストで自己加速術式の変数を次々と変更しながら発動し、縦横無尽に動き回って克人の『フアランクス』を避け続ける。『フアランクス』の本来の使い道は、圧倒的な出力によって対象を押し潰すこと。つまり圧殺である。

どんな攻撃も受け付けない壁が迫る光景は恐怖でしかないだろう。しかし、当たらなければどうということもない。

「自分はサイオン量に欠点があるのでね。早めに決めさせて貰いますよ」

自己加速術式を連続起動し続ければ、サイオンは尽きてしまう。もともとサイオン量が少ない紫音は、早々に決着させる必要があった。

「そういうわけで応用編です。多変数処理×並列演算処理」

紫音は振動系の魔法を多重発動させて、サイオン波、音波、光波を同時に放つ。そして同じく波の合成によって強力な一撃を作り出した。

サイオン、音、光によってスタングレネードのような魔法が発動し、演習場を閃光と高音が包み込む。間近で受けた克人は一溜まりもな

いだらうと思われた。

「十文字君！」

真由美は咄嗟に叫ぶ。

激しい閃光のせいで模擬戦を見守っていた誰もが目を閉じた。
『エレメンタルサイト』
『精霊の眼』を持つ達也だけは状況を把握していたので、冷静を保つ。
紫音の実力を知る深雪も冷静だった。しかし、真由美を含めた他のメンバーはかなり取り乱していた。

それを安心させるようにして、克人は敢えて答える。

「問題ない。心配するな七草」

事実、克人は障壁魔法を発動することで防いでいた。『フアランクス』という魔法を使いこなすからこそ、出来た対応である。普通ならば今頃は床に倒れていることだろう。

若手の十師族で比べても高い実力を誇る十文字克人。

そしてその十文字を相手に防戦を強いさせる四葉紫音。

模擬戦にしてはハイレベル過ぎた。

「これにも対応しますか」

「無論だ。舐めて貰っては困る」

「となると、模擬戦レベルではどうも勝てそうにありませんね」

「ふむ。確かに、これ以上は殺し合いになりそうだ」

紫音のフラッシュキャストは振動系に特化している。だが、十文字家の『フアランクス』はそれらの魔法を完全に防御してしまう。このままでは紫音が不利だった。

光を問答無用で透過させる『ダークミステリア暗黒流星群』ならば問題なく『フアランクス』を破ることが出来る一方、殺傷力が高すぎるので却下だ。
つまり、今の紫音ではなす術がない。

「では降参します。ありがとうございます」

「うむ。面白い体験が出来た。こちらでも感謝しよう」

互いに礼をしたところで、ポカンとしていた摩利が勝者宣言をする。

「勝者、十文字克人！」

十文字後継者に対して互角の戦いを演じた四葉の新生。

そしてCADを介さない魔法の高速発動。

達也のインパクトを塗りつぶすには十分だった。

（フォローはしたぞ達也）

（感謝する）

密かにそんなやり取りが行われたのは二人の他に誰も知らない。

入学編5

CAD無しに凄まじい魔法発動速度を実現して見せた紫音に、達也と深雪を除いた誰もが驚いた。基本的に紫音は魔法演算能力が高い。そのため、殆どの魔法をCAD無しに発動可能だった。

勿論、複雑な起動式は覚えきれないので、そういったものはCADを介した発動をする。しかし、シンプルな魔法ならば、CAD無しでも問題なく発動できた。単純な術式、特に振動系ならばフラッシュキャストで圧倒的な速さを叩きだせる。

「想像以上の逸材だな。魔法式を読み取れる司波、CAD無しでも魔法の高速発動が可能な四葉。今年の風紀委員は安泰だな」

風紀委員長の摩利は満足気にそんなことを言う。

そして素直な賞賛を聞いた深雪も非常に嬉しそうな笑みを浮かべていた。そんな深雪を見ては達也も嫌味を言う訳にはいかない。半ば無理やり風紀委員にさせられたとはいえ、ここは我慢の時だ。

一方、真由美は紫音のフラッシュキャストが気になったのか、迫るようにして問いただす。

「ねえ四葉君。どうやってあんな発動速度を実現したの?」

「他人の魔法を探るのはマナー違反ですよ。それにあれは四葉の秘匿する技術です。何を言われようとも教えるはずがないでしょう」

「けちー」

「……七草家に抗議文を出しますよ?」

「冗談よ。ごめんなさい」

あまり詮索するのは良くないと判断し、真由美は引き下がる。それに四葉の秘術だと言われれば引くしかないのも事実だ。

尤も、フラッシュキャストは四葉だけの技術ではない。軍でも一部では採用されている。そのため、知る人ぞ知る技術と言ったところ

だ。ただし、本当に極秘だが。

そして紫音は話題を無理やり変えるために、ブランシユについて話すことに決める。ただ、この場で話すほど空気が読めないわけではない。そこで、データだけ渡すことにした。

「七草先輩。これを差し上げます」

「これは……データチップかしら？」

「はい。中身は秘密です。十文字先輩と一緒にご覧ください。質問があれば、後日にでも呼び出していただければ応じますので」

「重要なものって訳ね。十師族関連じゃないんでしょう？」

「十師族は関係ありませんね。ともかく、見て頂ければわかります」

これで目的は達した。

紫音は一步下がる。すると同じく話を聞いていた克人が逆に一步進み出て真由美に近寄った。

「あとで見ることにして構わないか七草？ 俺はこれから部活連のほうでやることがある」

「へ？ うん、ごめんね十文字君。時間を取らせちゃって」

「構わない。面白いものが見られたからな」

そういつて克人は紫音を一瞥した後、演習室を去って行く。

去って行く後姿を見ながら、今度は摩利が紫音と達也に話しかけた。

「さて、早速だがこれから風紀委員会本部へと来てもらう。お前たちの先輩に挨拶だ」

「分かりましたよ渡辺先輩」

「了解です」

一方、真由美は深雪の方を向きながら皆に話しかける。

「じゃあ、みんなで生徒会室に行きましょう。生徒会室の裏から風紀委員会本部にも行けるからね！ 深雪さんには生徒会の仕事を教えるわ」

市原鈴音が演習室の電源を落とし、ぞろぞろと出てくる。そして軽い会話を交わしつつ、生徒会室へと向かったのだった。一校でも有名な面子が歩いていることで多少の注目は浴びたが、特にトラブルもなく生徒会室へと到着する。

そして入るなり、紫音と達也は摩利に腕を掴まれた。

「お前たちはこっちに來い」

そして有無を言わさず引つ張っていき、風紀委員会本部へと繋がる扉を潜る。するとそこには、とても言葉では形容しがたい光景が広がっていた。

床に落ちている無数のコード、粗雑な籠に押し込められているCAD、机の上には整理されていない書類が散らばっており、感情の起伏が少ない達也ですら啞然とする。

「ここが風紀委員会本部だ。男所帯だから、こんなんだ。整理整頓するようになっているんだが……」

「そもそも今は誰もいませんよ。整理できなくて当然です」

「そろそろ帰ってくるはずなんだがなあ。まあ校内の巡回が私たちの仕事だ。部屋が空になるのも仕方ないさ」

正直、何をすればここまで散らかるのか理解に苦しむ。特に情報を扱う黒羽として、紫音はこの惨状に頭を抱えたくなった。基本的に紫音は整理整頓が得意だ。そして達也もその手のことについては煩いほうである。

「片付けましょうか渡辺先輩」

「CADが乱暴に放置されているのを見ると耐えがたいものがありますしね。これでも自分は魔工師志望なので」

紫音と達也は散らばっているコードをまとめ始め、無造作に置かれているCADを整理し始める。さすがに書類については分からないので、取りあえずは出来る所からだ。

そして摩利は着々と片づけを始める二人に疑問を投げかけた。

「司波は魔工師を目指しているのか？ あれほどの対人スキルがありながら？」

「自分の力量ではどう足掻いてもC級ライセンスが限界ですから」

達也の答えに摩利は啞然としつつも納得する。これでも摩利は魔法と剣術を組み合わせて戦う魔法剣士であり、対人戦闘における達也のスキルには一目を置いていた。だが、ここで壁となるのが国際魔法ライセンスである。

魔法師であることの証明であると同時に、魔法師としての能力を表している。AからEまでの五段階評価は学校の評価基準と同じであるため、達也の得意分野は反映されない。

やむにやまれぬ思いがあった。

そこで、切り替えるためにも摩利は紫音に問いかける。

「ところで四葉は片付けなんかもできるんだな」

「これでも一人暮らしなので。家事なんかも一通りは出来ますよ。普段はHARに任せていますが」

「意外だな。私のイメージではお坊ちゃんって感じだが」

「それは誤解ですね。本家に戻らない限りは庶民的な生活をしていきますよ」

日本で最も謎に包まれた一族、四葉。

その本家がどんなものか気になるころではあるが、摩利は好奇心を抑える。魔法師の中では、やはり四葉というのは恐怖の象徴だ。あまり踏み込みたくはない、というのが正直なところである。

「しかし今年の風紀委員が豊作なのは事実だ。とくに四葉というのはデカいな」

「まあ、名前を出すだけで怖がられますからね。入学式の時も中条先輩に逃げられました」

「そうなのか？ まあでも怖いのは事実だ。なにせ当主が魔王などと呼ばれているからな」

「実際に会うと面白い方ですよ？」

「そうなのか？」

「はい、誤解を招く言い方になりますが、可愛らしい部分もありますし」

「ほう」

摩利は興味深げだが、達也は一瞬だけ動きが止まった。

紫音の言葉に動揺したからだろう。司波兄妹は四葉真夜に対し良い印象を抱いていないので、紫音の言葉は意外だったのだ。

「これでも真夜様には直接魔法を教えていただいたこともありませんから」

「四葉の後継者というのは伊達ではないのだな」

「あくまで候補ですけどね」

それからは紫音が達也への興味を攫うように適度な会話を続けていく。その間に達也は黙々と部屋の整理を進めていき、一時間もすれば見違えるほど綺麗になっていた。

それからしばらくして生徒会室から真由美が降りて来たとき、『ここは何処かしら？』と言ったのは余談である。

ともあれ片づけを始めて二時間後、ついでに壊れていた備品の部品

交換まで済ませていた頃に、ようやく見回りの風紀委員が戻ってきた。

「ハヨーツス！」

「どうもツス姐さん！ 本日の巡回は終了しました。逮捕者はおりません！」

「馬鹿者！ 姐さんと呼ぶな！」

摩利は丸めた書類で入ってきた男子生徒の一人を叩く。

敬礼しつつ今日の報告をしている様子を見ると、警察か軍人のようである。

そして二人はすっかり片付いている様子の委員会本部を見て、目を丸くした。

「ありや？ 間違えてんな？」

「……もしかしてこの部屋、姐さんが片付けたんですかい？」

「だから姐さんと呼ぶな馬鹿者が！ お前の頭は飾りか！」

「アイテツ!!」

まるで一昔前のドラマである。

そんな感想を紫音が抱いていると、二人も紫音と達也に気付いた。

「おや、新入りですかい。もしかしてこいつらが片づけを？」

「そうだ。こっちに來い二人とも」

摩利に呼ばれたので、紫音は綺麗に並べ変えたファイルを棚にしまい、達也は備品のCADを棚に戻してから向かう。そして失礼の無いように気を付けの姿勢で並んだ。

それを見た摩利が紹介をする。

「生徒会推薦の司波達也。そして教職員推薦の四葉紫音だ。今日から

二人の後輩になるからな。しっかりと教えてやれ」

「ほう。噂の四葉ですかい。それにもう一人は紋無し……」

「なんだ？ 文句あるのか鋼太郎？」

「辰巳先輩。その表現は禁則事項に抵触する恐れがあります。この場合は二科生と呼んだ方がよろしいかと」

摩利ともう一人の男子生徒に咎められて、辰巳鋼太郎は肩をすくめる。だが、もう一人の男子生徒も値踏みするような態度で達也を眺めていた。

一方の紫音については問題ないと判断したのだろう。既に受け入れ態勢である。

そんな二人に、摩利はニヤリと笑みを浮かべながら忠告した。

「二人とも、そんな考えでは足元をすくわれるぞ？ 現に先ほども服部がやられた。それに四葉は十文字の奴と対等にやりあったしな。今年は豊作だぞ」

摩利の言葉に二人は驚く。服部はあれでも二年生のエースであり、複雑で多種の魔法を使いこなすことで有名だった。その服部が達也に足を掬われたとなれば、驚愕ものである。

「あの服部が試合で負けたってことで？」

「そうだ。正式な試合でな」

「そりや凄い！ 入学以来負けなしの服部を倒すなんて」

「煩いぞ沢木。騒ぐな」

「いやいや。それに四葉も十文字会頭と対等に戦ったのでしょ？
今年は逸材ですな委員長」

辰巳も沢木も掌を返したように達也を称賛する。紫音は当然として、達也は受け入れられつつある状況に戸惑っていた。それを察した摩利が肩に手を置きながら口を開く。

「意外だろうか？」

「はい？」

「ブルームやウィードなんて下らん肩書で優越感や劣等感に浸る奴が多いのが現状だ。だが、生徒会や部活連や風紀委員にはそういう意識の低い奴を選んでいいる。今日の試合もスカツとしたぞ。あの服部を見事に打ち負かしたんだからな。」

それに、四葉も昨日は悦に浸る一科生の奴らを咎めてくれたんだらう？ 私としてもそういうやつが入って来てくれたのは嬉しいぞ。教職員推薦枠ではなかなか分かってくれる奴がないからな。こう言うのもあれだが、森崎という奴でなくてよかったかもしれない思っているぐらいだ」

最後に『ここだけの話だぞ？』と付け加える。

そして、呆れたような表情をしつつ、鋼太郎と沢木は改めて挨拶をした。

「三―Cの辰巳鋼太郎だ。二人ともよろしくな。歓迎するぜ」

「二―D、沢木碧だ。自分のことは沢木と呼んでくれ」

こうして、二人は正式な風紀委員として活動することになったのだった。



数日後の放課後、紫音は小会議室に呼び出された。呼び出したのは七草真由美と十文字克人である。指定された時間の五分前に向かい、ノックをしてから入室する。

「失礼します」

「良く来たな四葉。適当な椅子に腰かけてくれ」
「では遠慮なく」

紫音は近くの椅子に座り既に待っていた真由美と克人の正面から向かい合うようにする。すると、克人がおもむろにデータチップを取り出し、紫音に手渡した。

「これは返そう。中身はしつかりと見させてもらった。正直、よくここまで調べたものだ」

「自分が入学する学校ですからね。これぐらいの安全確保は当然です」

「正直、学生の域を超えたレベルで資料が集まっている。これは四葉家が集めた資料と考えて良いのかな？」

データチップの中身は反魔法組織ブランチに関するものだった。更には下部組織エガリテのメンバー構成や、一校に侵食している規模までも入っていた。ブランチのアジトまで情報があつたので、真由美も克人も驚いたものだ。

しかし、紫音は首を横に振りながら答える。

「いえ、四葉というよりも個人で集めた情報ですね。ちよつとエガリテのアジトを壊滅させて、リーダーからは拷問で情報を抜き取りました。ついでに資料をかつ攫っただけです。随分とエガリテは手を伸ばしていたみたいですね。生徒の中には二科生の待遇改善運動程度にしか思っていない人もいるでしょうが」

「……お前が情報を手に入れた経緯は置いておくとしてだ。これを俺

たちに渡して、何が目的だ？」

「四葉君。これは大スキヤンダルと言つても過言ではない情報だわ。魔法科高校内に反魔法組織の手が入り込んでいるなんて、ちよつとどころの騒ぎじゃないもの」

「勿論、目的はありますよ？」

鋭い視線を向ける克人に対し、紫音は目を逸らすことなく答えた。

「取りあえず壊滅させますよ〜つていう事前報告です。そこに書いてある通り、ブランシユは一校でテロを起こそうとしているみたいなので。そのぐらいの情報は把握しておきたいでしょう？」

紫音は原作からの知識でテロ事件を知っていた。だからこそ、入学前から重点的にブランシユについて調べていたのだ。自身の魔法『調律』を駆使して思考を読み取り、芋づる式に情報を辿つてようやくテロ計画を突き止めたのである。

いくら四葉の名があつても、このレベルの事件となると証拠がなくでは動けない。

だからこそ、わざわざ証拠を集めて提出したのである。

「敵はアンティナイトまで用意しているみたいですね。幾ら魔法科高校でも、ここまでの装備をしている相手が暴れば死人が出るかもしれませんよ？」

「……一理ある」

「十文字君!？」

「少なくとも俺は四葉紫音の行動を黙認するでしょう。それが十師族としての行動ならな」

「ちよつと待つて十文字君！ 幾ら何でも危ないわ！」

真由美が反対するのも当然である。

紫音は自らブランシユのアジトに乗り込んで壊滅させると言つて

いるのだ。四葉一族と言えど、まだ紫音は学生。真由美の意見としては、紫音に負担をかけられないというものである。

しかし、紫音も引き下がらない。

「問題ありませんよ。実際に行動するときには四葉の部隊が出ます。勿論、自分も行きますが」

「相手はアンティナイトを持っていてるって四葉君も言ったばかりじゃない！」

「大丈夫ですよ。使われる前に無効化します」

実際は『調律』を使うことでアンティナイトの魔法阻害を無効化できる。収束系振動系魔法としての『調律』ならサイオン波を操れるからだ。そして系統外精神干渉魔法としての『調律』で心を読めば、ブランシユからも情報を抜き取れる。

アンティナイトを始めとした軍事級武装を提供した裏ルートも特定できると思われる。

そしてそのルートを辿れば、他の反魔法組織を壊滅させるのにも役立つだろう。

紫音はそう考えていた。

「まあ、テロ決行までの期限はもう少し先です。よく考えて答えを出してください七草会長。今日は風紀委員がありますので、ここで失礼します」

それだけ言って、紫音は会議室を出たのだった。

入学編6

高校時代というものは青春と共に過ごすものだ。勉強も良いが、友人と遊んだり、部活に励んだりするのも高校生だからこそである。

魔法科高校というのは非常に特殊な場所であり、五教科と呼ばれる基礎科目は最低限の成績で許される。その代わりに、魔法の修練へと時間を費やすのだ。魔法とは簡単に扱えるものではなく、非常に細かい理論と制御が必要になる。いくら努力しても足りない世界なのだ。

しかし、だからと言って部活動がないわけではない。

寧ろ、魔法を活かした特有の部活動まであるぐらいだ。

魔法大学付属第一高等学校も新入生を迎えた今、各部活は有力新人獲得のために画策していた。

「諸君、今年もまたバカ騒ぎの季節がやってきた！ 風紀委員会にとつては新年度初の山場となる。この中には、去年調子に乗って大騒ぎした者も、それを鎮めようとして更に騒ぎを大きくしてくれた者たちもいるが、今年こそは逮捕者を出さずに乗り切りたい。

いいか？ くれぐれも、風紀委員が無暗に騒いで事態を大きくするなんてことは止めてくれよ？」

風紀委員会本部では、委員長こと渡辺摩利が強い視線でそんなことを訴えかけていた。

今日から始まる新入部員勧誘週間は、毎年の如く白熱する。例えば、四葉の名を持ちながら総合二位で入学した紫音だ。最も今年有力なのは総合一位で入学した司波深雪だが、彼女は既に生徒会なので除外する。風紀委員ならば部活にも参加している先輩が実際にいるので、紫音は狙われる側だろう。

現に数日前から非公式の勧誘を受けている部活がいくつもある。

また、どこから入手したのか、伝統のある大きな部活であるほど入試成績を所持している。よって一科生も優秀生徒の場合、取り合いで喧嘩に発展することもある。

風紀委員の仕事でも初めの山場と言われるだけはあるのだ。

「さて、今年は卒業生分の補充が間に合った。既に知っている者もいると思うが、ここで正式に紹介しよう。立て！」

摩利に促されて紫音と達也が立ち上がる。

自然とエンブレムの付いていない達也の左胸へと視線が吸い寄せられるのは仕方なかった。

「I―Bの四葉紫音とI―Eの司波達也だ。今日から早速パトロールに加わって貰う。こいつらは優秀だからな。他のメンバーと同じように、一人で巡回させる予定だ」

まだ顔合わせをしたことのないメンバーは、四葉の名に驚いた。噂で風紀委員に四葉が入るといっているのは知っていたが、やはり直接見るとインパクトがある。

しかし、それよりも目を向けられるのはやはり達也だった。

教職員推薦枠の二年生、岡田が不快そうな顔で摩利に質問する。

「使えるんですか？」

その質問は二人に向けられたもの……とは言えなかった。どう繕っても達也に向けられたものである。というより、間違っても十師族相手に『使えるのか？』などとは言えないだろう。

十師族とは日本を支える魔法の名家。

その中でも四葉は恐怖の象徴とすら呼ばれる最恐の魔法師一族なのだから。

しかし、摩利もその質問は予想していたのだろう。淀みなく、自信満々に答えてみせた。

「ああ、心配するな。四葉は十文字とも対等に戦えるし、司波に関して

も私が直接腕前を確認している。それとも私の言葉は信じられないか？ まあ、私から言わせれば岡田……お前よりもこの二人の方が強いぞ」

「……そうですか」

岡田は今にも舌打ちしそうな表情を浮かべていたが、紫音が冷ややかな目を向けていたので引き下がった。この場で無暗に反論しようとすれば、四葉に目を付けられる。そんな思いから引いたのである。

(スマン紫音)

(この程度ならね。こういう時のために四葉を名乗っているんだから気にするな)

達也は目でお礼を言い、紫音も目で返す。

まさかこの優等生と劣等生が裏で繋がっているなどとは誰も思わないだろう。

そして摩利の説明にある程度は納得したのか、不満そうにしていた他数名も特に発言することはなかった。

「よろしい。では早速だが行動に移ってくれ。レコーダーを忘れるなよ。四葉と司波には私から説明するから、各自先に行くように。では出動！」

摩利がそう言っつてパンパンと手を叩くと、一斉に立ち上がって左胸に右拳を当てる。紫音と達也は疑問に思ったが、後で聞くと風紀委員会に伝わる敬礼という話だった。

メンバーはそろそろと委員会本部を出ていき、各自巡回に移る。そして摩利は紫音と達也を呼び寄せ、簡単に説明を始めた。

「これを胸ポケットに入れておけ」

渡されたのは高性能なレコーダー。映像と音声を高画質で記録できるデバイスだった。摩利は操作方法を説明してから、巡回についての注意をする。

「違反行為を見つけたらスイッチを入れて記録しろ。ただし、撮影を意識する必要はない。風紀委員の証言は全てそのまま証拠になるからな。」

あと、風紀委員は学校内でCADの携帯を許可している。そして勧誘週間の間はデモンストレーションのために一般生徒にもCADの使用許可が下りるから、普段よりも魔法を使う機会が増えるだろう。だからと言って不正は許さん。もしも不正が見つかった場合は、委員会から除名すると同時に、普通よりも重い罰を受けて貰う。

実際に一昨年にはそれで退学処分になった奴もいるから甘く見るなよ」

紫音からすればCADなど、あつてもなくても変わらない。少なくとも戦闘で使える簡単な魔法はフラッシュキャストで幾つも記憶しているの、学生如きに負けるつもりはない。

別に携帯する必要はないな、と考えていると、達也が無表情のまま質問を投げかけた。

「質問があります」

「許可する」

「CADは委員会の備品を使用してもよろしいのでしょうか？」

「……構わないが。しかし良いのか？ あれは旧式だぞ？」

「問題ありません」

達也はそう言って棚に置いてあるCADへと目を向ける。

「あれは確かに旧式かもしれませんが、エキスパート仕様の高級品ですよ」

「ほう」

「あのシリーズは調整が面倒なので敬遠されがちですが、設定の自由度が高く、非接触型スイッチの感度が優れているので、一部のファンが熱狂的に支持しています。恐らく、購入したのもファンの一人だったのでしょう。」

調整さえすれば最新機種にも劣らないものですよ」

「……そんなものをガラクタのように放っていたわけか。君が片付けに拘った理由も分かったよ」

摩利は流石に反省する。

だが、そういう意味でも達也が風紀委員に入った意味はあったとポジティブに考えることにした。

「中条先輩なら知っていそうなものですがね」

「あいつは怖がってここに降りてこない」

「はあ」

興味深い話だったが、摩利は遊んでいる暇などないことを思い出す。そして改めて達也の方へと向き直り、頷きながら許可を出した。

「まあいい。自由に使え」

「では遠慮なく」

そう言って達也は二つのCADを手を取った。

魔法師が複数のCADを同時使用すること自体は不自然ではない。しかし、使いこなせる魔法師は多くない。だからこそ、摩利は興味深げな視線を向けた。

「本当に面白いな君は」

その言葉を背に、紫音と達也は巡回に出るのだった。



しばらく校内を進み、周囲に人が誰もいなくなった辺りで紫音が達也に話しかける。

「CAD二つで何するんだ？ 達也なら必要ないだろうに」

「ああ、ちよつと面白いテクニクがあつてな」

そう言つて達也は簡単に説明を始める。

「発動する魔法の起動式と、その逆方向の起動式を同時展開すると、それが無系統のサイオン波として放たれるんだ。すると、それが丁度『キヤスト・ジャミング』になるんだよ。ただし、起動式を読み取れないと使えないけどな」

「そんなテクニクがあるんだ。まあ、達也にしか使えなさそうだけど。起動式を読み取るなんて普通は出来る訳ない」

「ああ。だが、アンテナナイトなしに魔法を妨害できるわけだ。こういう時には丁度いい」

「……あんまり目立たないでくれよ？」

「善処しよう」

「期待はしてないけどな。このトラブル体質め」
「……」

紫音は達也が十中八九トラブルに巻き込まれると予想している。特に、達也は風紀委員でありながら実は二科生なのだ。下手なことをすると絡まれて余計に被害が大きくなることも考えられる。

逆に紫音は四葉という威光がある。
近寄るだけで喧嘩は止まる。

「この辺りで別れよう。俺はエリカと待ち合わせをしている」

「……深雪に怒られない？」

「問題ない……とりたい」

「まあ、クラスメイトと交流するのは良いことだ。うん、頑張れ」

「何の応援かは知らないが受け取っておこう」

「ああ、可能な限りはフォローするけど、ホントにトラブルは避けてくれ。ホントに」

「切実だな」

「誰のせいだと思っている」

紫音は溜息を吐いてチラリと達也の方に目を向ける。

相変わらず無表情な彼は幼い頃からの付き合いだ。家のこともあるので毎回とは言えないが、助けになるなら手を貸そうとは思える仲である。何より、亜夜子と文弥も達也を慕っているのだ。

紫音も達也のことは言えないぐらいにブラコンシスコンな部分がある。二人のためにも達也と深雪のために奔走することは苦にならない。

だが、達也のトラブル体質は度を超えている。

(ブランシユ事件が終わったら九校戦の無頭竜ノーヘッド・ドラゴンだろ、その後は横浜に大亜連合が攻めてくるし、その後は吸血鬼とアメリカ軍だけ？
原作知識なかったら胃に穴が開きそうだな)

少しゲンナリしていた紫音を怪訝に思ったのか、達也は心配そうに尋ねる。

「大丈夫か？」

「安心しろ。お前のストレスは俺が受け持つ」

「いや、ホントに大丈夫か!？」

これから先のことを考えればあまり大丈夫ではない。

とりあえずは深雪が四葉後継者となり、紫音が黒羽に戻るまでが任務だ。まだ深雪が後継者と決まったわけではないもの、恐らくは確定と考えて良いだろう。それだけ深雪の魔法力は隔絶している。

紫音も能力は高いが、サイオン量の少なさが邪魔をして筆頭候補から外れていた。

「とりあえず亜夜子と文弥に癒されたい」

「……なんかスマン」

達也は久しぶりに本気で謝罪したのだった。



達也と別れた紫音は、部活の勧誘を受けつつもフラフラと見回っていた。四葉の名に対する反応は二種類であり、一つは実力を買って是非とも我が部に入って欲しいという反応。もう一つは恐怖から避けるという反応だ。

紫音は黒羽の仕事もあるので部活をするつもりはない。

出来るだけ丁寧に断りながら、違反者がいないか探していた。既に紫音の顔写真でも回っているのか、少し喧嘩に発展しかけていても、紫音が通りかかるだけで急に仲良くなる。

実に便利な名前である。

(ん……あれって……?)

紫音は少し離れたところで揉めている現場を発見した。

近付けば収まるだろうと思つて寄つていくと、既に誰かが仲裁を始めていることに気付く。女子制服を着た小さい人物だったので、非常に心当たりがあつた。

「中条先輩? どうかしたんですか?」

「だからですね—— はい、呼びましたか……つて四葉君ですかあつ!」

「はい、四葉君ですね」

オーバーリアクションで驚く中条あずさ。

通称『あーちゃん』である。尤も、この呼び方は真由美しかしていないが。

今回は風紀委員だけでは手に余るので、生徒会からも巡回の協力者が出ているのだ。そのメンバーは意外にも怖がりなあずさである。実は彼女、系統外精神動系魔法『梓弓』というものが使える。これは効力こそ低い、広範囲に効果を与えるので、大きな喧嘩に発展したときなどは一発で鎮めることが出来る。それ故に選ばれたのだつた。

そしてあずさが紫音を見て『四葉』と叫んだからか、何やら言い争いをしていた生徒たちもピタリと止まる。そして壊れたブリキのようにならぬ紫音の方へと向いた後——

「いやあ、悪かつたね」

「なあに、こちらこそ済まないな」

『はははははははは』

——急に仲良くなった。

さっきまで汚い言葉で言い争っていたのが嘘のようである。そして逃げるようにして紫音の前から逃げ去って行ったのだった。

「お疲れ様です中条先輩」

「ひいっ!? だだだ大丈夫ですう!」

「あの、先輩に何かしましたっけ。怯え過ぎでは?」

「ごごごごめんさいいいいいい」

「あ、ちよつと……」

そしてあずさも逃げて行く。

その場に残された紫音は眩いた。

「これは酷い」

入学編7

毎年恒例の新入生獲得合戦。そのパトロールに駆り出された紫音と達也だが、案の定というべきか、達也はトラブルに巻き込まれた。

剣道部と剣術部が体育館での演舞を巡って争っているところを取り押さえたのである。剣道部の壬生紗耶香みぶさやかに剣術部の桐原武明きりはらたけあきが突っかかり、剣で勝負をつけることになったのだ。剣術部は魔法を前提とした剣である以上、単純な剣技では剣道部に敵わない部分がある。それで敗北した桐原が逆上し、魔法を使用したので達也が抑えたのだ。

だが、そこで問題になるのが二科生というレッテル。

結局、達也が気に入らない剣術部員が乱闘騒ぎを引き起こしたというのだ。達也は体術と例の『キャスト・ジャミング』を使い、無傷で切り抜けたが、事件は部活連に持ち込まれる程の事態となった。

初日からこれでは先が思いやられると摩利も頭を抱えたものである。

その一方で、それほどの大事件を無事に抑えた達也の手腕について、七草真由美や十文字克人は称賛していたが。

そんなことがあつて四日目。

達也は初日の事件があり、すっかり目を付けられていた。

「むっ？」

達也は人気の少ない場所を歩いていた時に『精霊の眼』エレメンタルサイトで魔法発動の兆候を知覚した。即座に『キャスト・ジャミング』を使って起動式展開を妨害すると、その犯人と思われる人物は逃げ出した。

勿論、移動系の魔法を使って。

「……逃げられたか」

自身の持つ特異魔法以外は碌に使えない達也では、追いきることな

ど出来ない。幾ら体を鍛えていると言っても限界はある。

「それにしても……あのリストバンド」

達也の動体視力で捉えることが出来た情報として、犯人の左手にあるリストバンドがあった。それは赤と青で縁取られた白のリストバンド。紫音からの情報にあったエガリテの証である。

秘匿回線で一校にエガリテの手が伸びているのは知っていたが、実際に目にとすると異様な光景ではあった。

魔法科高校に反魔法主義団体のメンバーがいるのだから当然である。

尤も、リストバンドを付けている本人は二科生ウイードに対する差別撤廃運動という風にしか思っていなかったのだが。

「エガリテは壊滅させたと聞いたが……やはり上位組織フランッシュを潰さなければ止まらないか」

それから更に三日。

つまり、一週間の勧誘期間が終わるまで、達也は何度も魔法による襲撃を受けるのだった。



ある日の昼休み、紫音は珍しく生徒会から昼食に誘われていた。誘ってきたのは真由美であり、摩利や達也といった風紀委員のメン

バーも参加するという。

一体何の用事かと思いつながら廊下を歩いていた。すると廊下を歩いていた生徒が話していた内容が擦れ違いざまに聞こえてきた。

「なあ、聞いたか？ 雑草ワイドの風紀委員がカフェテリアで壬生さんを口説いてたらしいぞ。調子に乗ってんじゃねえか？」

「あ？ 俺が聞いたのは言葉責めにして辱めたって……」
「ぶっ!? なんだそりゃ？」

紫音は声こそ出さなかったが、思わず足を止めそうになる。
そこで思い出した。

(ああ、壬生紗耶香と接触したのか。たしか壬生紗耶香はブランシユに唆されてたんだっけ？ 確か達也を差別撤廃運動という名のテロ加担に引き込もうとした……だったか)

十六年も経つと流石に細かい原作の内容は忘れてくる。大まかな流れはまだ覚えている一方、そのようなイベントはすっかり頭から抜けていた。

それに、紫音はエガリテを既に潰している。ブランシユの方にも波纹が広がっているのかと思いきや、意外と原作通りに進んでいるのだ。黒羽家の部下に調べさせたところ、相変わらずテロの準備は進んでいるらしい。

着々と戦力が揃っているのも把握していた。

(ま、戦力が揃ったところで潰すから意味ないけどな)

相手に準備する余裕があるということは、こちらにも時間があるということ。戦力については紫音一人ですら過剰だし、後は残党を残さないように包囲網を作るだけだ。そちらは部下に任せれば問題ない。

そして紫音の頭から達也と壬生の噂が抜けてきたころ、ようやく生徒会室へと到着した。

ノックをしてから入室すると、既に自分以外のメンバーが揃っている。

「遅れました」

「そんなことないわ。それより昼食は準備しているかしら？」

「弁当を持っていますので」

真由美に対して紫音はそう返して空いている席に腰を下ろし、持ってきた弁当を開ける。すると女性陣は興味深げに紫音の弁当箱を覗いた。

中身は卵焼き、魚、野菜の煮物といった和風のもの。意外そうな視線を向けてくる真由美に対して、紫音は問いかける。

「どうかしましたか？」

「うーん。もしかして弁当……四葉君が作ったの？」

「そうですよ？　といっても昨日の余りも入ってますが」

「意外ですね。四葉ですから使用人が作っているのかと思いました」

「リンちゃんもそう思うよね？　ホント意外だわ……」

勿論、紫音とて弁当を毎日作っているわけではない。暇がある日や、気分が乗った時ぐらいである。そうでない日は食堂で済ませているので、今日は偶然にも弁当だっただけなのだ。

「何度も言うようですが、一人暮らしですので……そう言えば、この話は達也と深雪、それに渡辺先輩しか知りませんでしたね」

「そうなの？　同じ十師族でもウチとは違うわね」

事実、真由美は実家から通っている。

だが、四葉家本邸が山梨県にあることを加味したとしても、一人暮

らしはないだろうと誰もが思った。十師族の秘密を狙う海外のスパイは結構多いので、一人暮らしなどすれば恰好の的になる。実は、紫音も一人暮らしを始めてから何度か襲撃されているのだ。

当然、返り討ちにして逆に情報を奪い取っているが。

こうして紫音が四葉を名乗りつつ一人暮らしをしているのは、そうやってスパイをおびき寄せ、返り討ちにして情報を抜き取るという仕事もあるからだ。更にそうやって目立てば、達也と深雪に目が行かなくなる。

大きな目的で考えても一石二鳥というわけである。

もちろん、その理由を話すことはないが。

「自分のことはいいいですから、呼び出した本題に移ってください。昼休みは有限ですよ」

と言いつつ、紫音は先程廊下で聞いた噂を思い出す。

何やら達也にとつて不名誉な内容だったので、ここで聞いてみることにした。

「そうだ。達也と壬生先輩についての噂が流れていたんだけど、アレって何?」

「お、四葉も知っているのか。あれだろう? 昨日、司波がカフェで壬生を言葉責めにしたという」

どうやら噂は予想以上に出回っているらしく、摩利も把握していた。何故そこで俺に話を振ったんだという視線を紫音に向けつつ、達也は話を逸らそうとする。

「……先輩も年頃の淑女なんですから『言葉責め』などという、はしたない言葉は控えた方がよろしいかと思いますが」

「ははは。私を淑女扱いしてくれるのは君ぐらいなものだよ」

「おや、先輩の彼氏はそのように扱ってくれないのですか? それは

あまり紳士的とは言えませんね」

「そんなことはない！ シュウは——」

摩利は思わず立ち上がって抗議するが、それと同時に『しまった』という表情を浮かべる。そして気まぐずい空気のまま、腰を下ろした。達也はそんな摩利を無表情のまま見つめる。

「……」

「……」

「……」

「……なぜ何も言わない？」

「なら逆に聞きますが、コメントが欲しいですか？」

「……」

「……」

否定の沈黙。

そうとつた達也はようやく視線を自身の昼食に向ける。

この場にいた他の誰もが肩を震わせつつ必死に耐えていた。尤も、摩利の一睨みで全員が目を逸らしたが。

「そ、それで壬生さんの件はどうかしら達也君？」

どうにか空気を戻そうとして真由美は話を掘り返す。折角、達也が話を逸らしたのに、見事なまでの巻き戻しを喰らってしまった。摩利もここで、仕返しとばかりに問い詰める。

「で、実際どうなんだ？」

「事実ではありません」

「私が聞いたところによると、壬生は顔を真っ赤にして恥じらっていたらしいぞ」

それを聞いた達也は、不意に隣から冷気が漂ってくるのを感じた。紫音は『いつものアレか……』と思いつつ、咄嗟に弁当を魔法で守る。

「お兄様？ 一体、何をされてらっしゃったのですか……？」

深雪の事象干渉力は桁外れに高い。それこそ、感情の表出と共に冷気が漏れ出すレベルだ。紫音の場合、これが副作用として電磁波などの波動を知覚する能力になっている。

いわゆる超能力の領域なのだ。

深雪の発した冷気は一瞬で生徒会室を冷やし、温かかったお茶すらも凍り付く。

「落ち着け深雪。ちゃんと説明する」

「はっ！ もうしわけありません……」

深雪も魔法が暴走していることに気付いたのか、すぐに制御を取り戻して室温を元に戻す。夏場は冷房いらずで便利な能力だが、強力すぎて霜焼けになるほどだ。

冗談抜きで危ない。

そして深雪が落ち着いたのを見計らって、達也は話し始める。

「聞いた話によると、風紀委員の活動は生徒に反感を買っている部分があるようです。強引な摘発や点数稼ぎなんでものが横行しているとか。それに、本人がいる所では言いにくいのですが、紫音が四葉の力で無理やり押さえつけているなんて話も……」

「はい？ 俺が？」

「いや、別に俺が紫音を疑っているわけじゃない。しかし、紫音の話はともかく、点数稼ぎのために強引な摘発なんて話があるんですか？」
「生徒会役員で新入生の私が言うのもおかしい話ですが、風紀委員の活動は寛容なほどだと思います。かなり際どい事例でも何とかして

軽い罰になるようにされていますし」

達也と深雪の指摘を聞いた摩利は眉を顰める。

それを見ただけで、これらの噂が事実無根でしかないことを表していた。

「風紀委員に点数システムなどない。内申点などないに等しい名誉職だ。それに四葉の件も問題だな」

「なんだか無駄に誇張されていますね。自分は脅しなどしませんから。むしろ、顔を見て勝手に逃げているのはそちらだと言いつ返したいですね」

「つまりは壬生の勘違いだな。もしくは誰かから聞いて思い込んでるだけだ」

摩利はきつぱりと言いつ返す。

次に達也は真由美の方を向いて尋ねた。

「では、非魔法系競技の部活は魔法系競技の部活に比べて予算が少ないというのは事実ですか」

「それもないわ。予算は部活動ごとの大会成績から振り分けているもの。そこに魔法系競技も非魔法系競技も関係ないわ」

「となると、どうも話が食い違っていますね」

「……そうね。そのように印象が操作されている事実は否めないわ」

ポロっと漏らした驚愕の事実に達也も驚く。予想はしていたが、それが真由美の口から出るとは思わなかったからだ。それは紫音も同様で、思わず聞き返した。

「七草会長はそれが何者か掴んでいるんですよね？」

「え、えー……そのね。やっぱり噂なんて霞みたいなものだし、出所はちよつと……」

やはり思わず口を滑らせてしまっただけなのだろう。あからさまに動揺している。摩利も真由美に冷たい目を向けていた。

すると、開き直ったのか、真由美は紫音の方を向いて全て話し出す。

「……四葉君は知っているとと思うけど、一校の中に反魔法主義団体の手が入り込んでいるわ。これはちゃんと証拠もある事実」

「おい真由美！」

「いいのよ摩利。元々、様子を見て話すつもりだったもの」

そこまで言われて、紫音は呼び出された理由を察知する。

「なるほど。自分を呼び出した理由はそれですか。許可は頂けるといふことまで？」

「ええ、これはもう自浄作用なんて域を超えている。そう判断したわ」「おい真由美。どういうことだ？　なぜ四葉に？」

「元々、この情報は四葉君から貰ったものよ。それも、入学して三日目にね」

これには摩利だけでなく、鈴音、あずさも驚いた。

そこで紫音は勝手に話を引き継ぎ、ある程度の経緯を話し始める。

「これでも一人暮らしなのでね。周囲には気を使うんですよ。だからこそ、学校という生活空間に巢食う敵の存在にも気づきました。

国際的反魔法社会政治団体ブランシユ、そしてその下部組織エガリテ……これらが潜り込んでいます。二科生の抱える劣等感を、平等という甘言で包み込む。それによって密かに勢力を増やしているようです。恐らく、二科生の殆どは、これが反魔法団体の活動だとは知らないでしょう。ただの差別撤廃運動だと考えているようです。

そして少し前にエガリテはアジトごと四葉が壊滅させました。あとはブランシユを壊滅させるだけだったのですが、やはり七草会長と

十文字会頭の許可があった方が良く考えたままでの話です。すでに十文字会頭からは許可を頂いています。そして今、七草会長からも許可を頂きました」

そして紫音は周囲を見渡し、重々しく告げた。

「次はブランシユを潰します。四葉の力を使ってね。外的要因さえなければ、一校内でも自浄作用が働くでしょう。そこからは七草会長の手腕にかかっていますよ」

紫音が目を向けると、真由美は大きく頷く。

覚悟を決めたということだろう。

そして真由美は生徒会室にいるメンバーに対して、真面目な口調で告げた。

「今聞いた話はここだけのものだと思つてちょうだい」

寧ろ広められるのは困る。反魔法師団体の手が魔法科高校に伸びていることも問題だし、テロ組織とはいえ未遂の状態で壊滅させようとしているのだ。これは公に出来ない話である。

だが、実際にテロ事件が起こるよりは良い。

そう判断したからこそ、真由美は紫音に全て任せることを決意したのである。それに、ここまで校内で情報操作が行われている以上、十師族としても動かないわけにはいかないのだ。

(さてと……壬生さんの件は、原作通り達也に任せるか)

紫音は食べ終わった弁当を片付けつつ、そんなことを考えるのだった。

入学編 8

紫音がブランシユ壊滅について許可をもらった一週間ほど後のこと。

それは突然起こった。

『全校生徒の皆さん！』

授業が終わり、さあ帰ろうと準備している者が多くいる中で、耳を塞ぎたくなるほどの大音量が校内で鳴り響いた。多くの生徒が耳を塞ぎ、不快感で眉を顰めている。

それは達也たちも同じだった。

『——失礼しました。全校生徒の皆さん！』

今度は正常な音量がスピーカーから流れる。どうやら音量調節をミスしただけらしい。どこことなく申し訳なさが乗っていた。

「どうやらボリュームの絞りをミスったようだな」
「いや、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ」

達也の呟きにエリカがツツコミを入れる。

確かに、このような放送があるなど通常とは思えない。事実、この放送は不正なものだった。

『僕たちは学内の差別撤廃を目指す有志同盟です。僕たちは生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求します！』

先日から火種がくすぶっている二科生による運動。そしてその背後にいるブランシユ。

それらが形となって現れたのが今回の放送らしい。

達也はそう判断した。

これから風紀委員として呼び出しがかかるだろう。そう思っただけでバイスをチェックすると、風紀委員専用コードによる連絡が入ってきた。

「行かなくていいの？」

「ああ、行ってくる」

達也はエリカに背を向けて走り出した。達也が風紀委員であることを知るクラスメイトは、それとない応援を送る。不安そうな表情と共に送られる応援を背に、達也は放送室へと向かったのだった。すると、途中で放送室へと向かう深雪を見つける。

「あ、お兄様」

「深雪も呼び出されたのか？」

「はい、会長から放送室の前に来るようにと」

二人は並んで走りつつ、会話を交わす。

「やはりこれはブランシユの……？　紫音さんが言っていたテロの環境でしょうか？」

「いや、そこまでは分からない。今回は全て紫音に任せているからな。こんなことなら詳しい資料を貰っておけばよかった」

しかし後悔先に立たず。

有志同盟とやらに、どういう意図があって今回の件に走ったのかわからないまま現場へと向かう。放送室前には既に紫音を除いた風紀委員全員と、真由美を除いた生徒会全員、そして十文字克人が揃っていた。

「遅いぞ司波」

「すみません」

達也は形式上の謝罪をして現場の観察をする。

放送室の前で固まっていることから、扉は固く閉ざされているのだろう。立てこもっている犯人は何らかの手段で鍵を強奪したということになる。

「ここまで来ると犯罪ですね」

もはや悪戯で済まされるレベルではない。ルールを超えた手段を取った以上、それは犯罪者と同じだ。

「ここは慎重に動き、彼らを暴発させないように対応するべきでしょう」

「いや、だからと言って相手がこちらのペースに合わせてくれるとは限らない。早急な解決こそが必要だと思うぞ」

市原鈴音と渡辺摩利は対極の意見を出して口論する。正直、どちらの意見も一理あるので、決めかねているのが現状だ。その結果が今の停滞なのである。

達也は出しやばり過ぎかもしれないと思いつつ、これまで意見を発してこなかった十文字克人へと話を振ってみた。

「十文字会頭はどのようにお考えですか？」

「俺は彼らの要求に応じても良いと考えている。彼らは交渉を求めているわけだ。元より誤解が招いた結果なのだから、公に話し合える場が出来るなら願ってもない。それに、ここで事実関係をハッキリさせなければ、いつまでたつても憂いが残ることになるだろう」

「では、このまま待ち続けますか？」

「それは難しいところだ。早急に話し合いを持ちたい反面、学校の設備を壊してまで急ぐ必要もあるまいとも思っている」

克人の意見は鈴音に近い。多数決の原理で考えるならば待機を選択することになるだろう。摩利の不満そうな視線が突き刺さる中、達也はおもむろに携帯端末を取り出した。

このタイミングでなぜ、と誰もが思ったが、達也は説明もなく電話をかける。数回のコールが鳴った後、相手が電話に出た。

「壬生先輩ですか？ 司波です」

まさかの電話相手に皆がギョツとする。

「それで今はどちらに………はあ、放送室ですか？ それはお気の毒です」

その瞬間、周囲にも分かるぐらいの音量で何かを叫んでいる音がする。達也はそれを直に受けてしまったからか、一瞬だけ携帯端末を耳から離れた。

しかし、それでも落ち着いた声で説得を試みる。

「落ち着いてください。十文字会頭は交渉に応じると仰っています。それに生徒会も……今、了解が得られました。そういうわけで、交渉の場所や日程の取り決めをしたいのですが……ええ、今すぐお願いします。」

大丈夫です。先輩の自由は保障されます。それにまだ警察沙汰にもなっていないませんが、出来れば早めの対応をお願いします」

電話での交渉は成立したのか、達也は端末を仕舞う。

すると摩利は首を傾げながら達也に尋ねた。

「今のは壬生紗耶香か？」

「はい、以前からカフェで話す仲になっていまして、その関係でプライベートナンバーも。こんな風に役立つとは思いませんでしたが」

「なんだ。君も手が早いな」

「誤解を招く言い方は止めてください」

主に深雪に向かって言い訳する達也。流石の深雪も、この非常事態で兄の腕をつねるようなことはしないらしい。

達也も誤魔化すようにして摩利に進言した。

「では取り押さええる態勢を整えましょう」

「は？ 自由を保障するのではなかったのか？」

「壬生先輩の自由は保障しました。それに約束したのは個人としての俺です。風紀委員は関与していませんね」

つまり、言外に壬生紗耶香の他は自由を保障しないと云っている。更に、取り押さええない約束をしたのは達也だけであり、風紀委員自体は関係ないということだ。

これには摩利だけでなく、鈴音や克人も呆れた。

そして余裕が生まれたのか、摩利はふとあることに気付く。

「ん？ そういえば四葉の奴がいないな。何しているんだ？」

よくよく周りを見れば、紫音は何処にもいない。摩利は風紀委員全員に招集をかけたので、連絡が届いていないということはない。それに、これだけの事態なのだから風紀委員が出動することぐらい分かるはずである。

摩利はサボりを疑ったが、それを否定したのは克人だった。

「いや、四葉は例の事をしている。だから今日は学校に来ない」

「例の……ああ、アレか」

摩利は一週間ほど前に聞いた話を思い出した。紫音がブランシユのアジトをテロ部隊ごと壊滅させるといふ話である。それが今日

だったのは初めて知ったが。

「ならばごちらもしっかり働こうか。今頃、真由美の奴も教職員共に色々と手をまわしているだろうからな」

そして直ぐ後。

放送室から出た今回の実行犯たちは取り押さえられた。勿論、壬生を除いて。

壬生は話が違うと抗議したが、達也も嘘はついていないと反論。丁度そこに教職員と話を付けてきた真由美が登場し、交渉についての話がまとまる。

結果、壬生たちは一度釈放され、交渉の場所や日程についての話し合いをすることになったのだった。



まだ空が青い時間帯の夕方。

紫音は第一高校の近くにある廃工場へとやって来ていた。自身の情報網を使って調べ上げたブランシュのアジトであり、テロ部隊の駐屯地、そして仕入れた武器の管理場所でもある。

既に周囲は黒羽の部隊によって包囲され、あとは紫音が殲滅するだけとなった。いた。

「さて、行くこうか」

紫音が眩くと、暗黒が巨大鉄格子の門を破壊する。一方向に進み続ける光の乱舞によって、障害物など紙切れのように吹き飛んだ。

それだけ派手に壊せば、当然のように気付かれる。

廃工場からテロ部隊の一部が出てきて、紫音を見つけた。彼らは銃を構えながら叫ぶ。

「敵襲だ！ 殺せー！」

アジトを見られた以上、帰すわけにはいかない。イコール殺害だ。躊躇いなく引き金が引かれる。

子供一人を殺すのに機関銃など必要ないと判断したのだろう。単発の拳銃から発砲された。

パンツと乾いた音が響く。

しかし、標的は彼の視界から消えていた。

「なにっ!？」

そして再び暗黒の蹂躪。

自己加速術式で銃弾の着弾点から逃れた紫音は、即座に『ダークミューティア暗黒流星群』でこの場にいるテロリストを殺し尽くした。

さらに暗黒の光は廃工場の壁を吹き飛ばし、紫音はそこからアジトに侵入する。

そこから先は蹂躪劇だった。

「ぎゃあああああああ!？」

「足が！ 足がああああああああ!？」

「いでえええよおおお」

「逃げっ……ぎゃっ!？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「あ、アンティナイトを早く持って来い」

「化け物だ！ 早く逃げろ！」

攻撃速度は光速。

そこにはもはや回避という概念は存在しない。『調律』の性質上、一方向にしか光を飛ばすことは出来ないのだが、武器となる光は幾らでもあるのだ。敵を殺し尽くすのに問題はない。

『ダークミューティア暗黒流星群』は性質上、光の多い場所こそ真価を発揮する。だからこそ、紫音は学校を休んでまで日の出ている内にアジトを潰しに来た。絶対に逃しはしない。

「アンティナイトを使い！」

一部の者たちが持ち直したのだろう。

指輪型のアンティナイトを使い、キャスト・ジャミングを放った。キャスト・ジャミングとは不規則に変化し続けるサイオンノイズによるものであり、魔法師がこれを浴びると魔法発動が阻害される。

イメージとしては、歌っている最中に他の曲を幾つも同時に流されるようなものだろう。そんなことをすれば自分の歌うべきメロデーとリズムが狂わされてしまう。これと似たような仕組みを引き起こせる希少物質が、アンティナイトなのである。

アンティナイトは希少な軍需品なので、一般では手に入らない。テロ組織とは言え手に入れている以上、相応のバックが付いているということである。

「ま、大亜連合ってところだろ」

紫音はそう言いながら『調律』でサイオンノイズを整える。そして空間を埋め尽くすほどのサイオンを逆に掌握し、自身の魔法に変えた。

「これだけのアンティナイト。折角集めたのに意味がなかったな」

これまでにないほどの数で展開された『ダークミューティア暗黒流星群』がテロリストたちを消し飛ばす。あまりの攻撃密度に、相手は原型を留めることから出来ない。

「な、何故アンティナイトが効かない!？」

「アンティナイトのサイオンノイズなんて、俺にとってはエネルギーの宝庫だ。覚えておくといい。世の中にはアンティナイトで逆に強化されてしまう魔法師がいるってな」

「ぎゃつ!？」

「まあ、覚えても意味ないけど」

サイオンノイズは様々な波長を持つ波だと考えることが出来る。ランダムに変化するサイオン波が魔法発動を邪魔するならば、『調律』で整えてしまえばよいのだ。そして紫音のサイオン波形に変化させてしまえば、逆にそれらは利用できるサイオンとなる。

サイオン量の少ない紫音にとって、アンティナイトによるキャスト・ジャミングは格好の餌でしかない。

勿論、使用される前に無効化も出来るが、利用する方が効率的である。

「邪魔だ」

廃工場は血の海に沈み、生臭さが充満する。紫音は自身の精神を『調律』することで吐き気を催すような光景に対しても冷静でいられたが、テロリストたちはそうもいかない。

あまりの凄惨さに、発狂寸前の者すらいた。

「な、なななななんだ貴様はあ!？」

それはブランシュのリーダーであつても変わらない。

初めて見る地獄の戦場。

死が背後に迫っている絶体絶命の瞬間。

暗黒を操る死神を前に、恐怖で顔を歪めたブランシユ日本支部リーダーは逃げることにすら出来ない。いや、逃げるための五体は揃っているが、恐ろしさのあまり逃げるといふ発想が浮かばない。

「さて、仕上げだな。ブランシユ日本支部リーダー、つかさはじめ司一」

紫音は司一つかさはじめ以外、幹部級数人を残して殺し尽くした。そして自己加速術式をフラッシュユキヤストで発動し、一瞬で司一の前に立つ。そして右手で首を掴み、呟いた。

『シンクロダイヴ』

入学編9

系統外精神干渉魔法『調律』。

その応用として脳波リンクを利用した表層意識の読み取りができる。だが、もつと深い領域まで『調律』した場合、それは深層意識や本人すら思い出せない幼少期の記憶にもアクセスできるようになる。それが『シンクロダイヴ』だ。

「く……」

紫音は司つかさはじめ一の首を右手で絞めつつ、記憶を読み取っていく。この魔法のリスクは膨大な情報を処理することによるオーバーヒートだ。加減を間違えると自爆してしまう。

転生特典で貰った演算強化と記憶力強化があつてこそ可能な魔法である。

「雇い主はウクライナ・ベラルーシ再分離独立派。そして金の出どころは大亜連合か。調べていた通りみたいだな。第一高校へのテロは父親の再婚で連れ子の……義理の弟が出来たのが始まりか？」

「ひっ……」

司つかさぎのえ甲 第一高校の三年生だな。まあ二科生だが。剣道部の主将で、その繋がりから壬生紗耶香に接触、そしてマインドコントロールを仕掛けたか。意識干渉型系統外魔法『邪眼イビル・アイ』って……ただの光信号を使った洗脳技術じゃないか。拍子抜けだな」

第一高校内部で情報操作が行われているのは分かっていたが、まさか洗脳まで利用されているとは思わなかった。尤も、マインドコントロールを受けているのは司甲と壬生紗耶香の二名だけのようなだが。

「明日に実行予定だったテロで魔法科大学図書館の資料室からデータを盗み出す。ごく丁寧にパスワードブレイカーまで用意していたのか。

で、その手引きを壬生紗耶香と司甲にさせようとしていたと……」

記憶を探っていく内に、紫音は忘れていた原作知識を思い出し出していく。

本来なら、今日の段階で壬生紗耶香たちが放送室を占拠し、差別撤廃のために生徒会と部活連に交渉を要求する。そして交渉は受諾され、公開討論会という形を取るようになった。

そして討論会は明日。

更に言えばテロ実行も明日。

放送室の占拠も司一つかさはじめがマインドコントロールで唆したことだったのでだろう。七草真由美や十文字克人の性格を知っていれば、交渉したいという要求は必ず受諾される。そして生徒会長の真由美と部活連会頭の克人を交渉の席に集めることで、テロを起こしやすくしたのだ。

厄介な人材は一か所に纏めておきたいという思惑だろう。

「図書館の特別閲覧室にある貴重データは大亜連合に売り渡す……その条件で金やアンテナイナイトを支援して貰ったと……なるほど、利害の一致というやつか」

三年前、大亜連合は沖縄へと攻め入り、司波達也によって大打撃を受けた。それ以来は小さな小競り合い程度だったが、再び日本へと侵略の手を伸ばしているらしい。

今回の事件もその一環ということだ。

「取引ルート、スポンサーも記憶させて貰った。後は死ね」
「ひぎやつ!?!」

紫音は光を『調律』して司一の額を貫き、絶命させる。
残るはブランシユの幹部級が数名。

問答無用で情報を奪い取り、殺し尽くしたのだった。



翌日、紫音はブランシユ壊滅について真由美と克人、そして摩利に報告することになった。時間は昼休みであり、いつもの小会議室を利用している。

「——というわけで壊滅させました。主犯……というよりブランシユ日本支部リーダーだった司つかさはじめ一は拷問後に殺害。残る幹部も情報を抜き取るだけ抜き取って殺害しました。これで今日予定されていたテロは起りません」

「ご苦労、四葉」

「ありがとね四葉君。これで憂いなく討論会に臨めるわ」

「あたしが想像していた壊滅より物騒だが……まあ、よくやった」

第一高校でも事情を深く知る三人には報告が必須。

そう考えて、昼休みにアポイントを取ったのである。真由美と摩利は少しばかり頬を引き攣らせていたが、克人は最後まで表情を変えることなく耳を傾けていた。

（十文字克人。割と残虐な話でも顔色一つ変えないか。流石に手強いな。敵にはしたくない）

正面から戦えば勝てる自信もある。

しかし、十師族とは本来殺し合う間柄ではない。戦うとすれば政治的な方面だろう。精神的にも完成されている克人は、そういった意味で敵に回したくない相手である。

紫音はそんなことを頭の片隅で考えつつ、報告を続けた。

「そして司つかさはじめ一の弟、司つかさぎのえ甲はマインドコントロールを受けていたと思われます。そこからブランシユが侵食していたようですね。そして司先輩は剣道部主将です。その繋がりもあって壬生先輩にも……」

「なんだと！ 他にもマインドコントロールを受けている奴はいるのか!？」

「落ち着いてください渡辺先輩。マインドコントロールを受けているのは今の二人だけです。そして司先輩は霊子放射光過敏症なのです。それを利用して同じ霊子放射光過敏症の生徒を勧誘していたようです。表向きはこの体質に悩む者たち専用のサークル、実態は二科生であることへの劣等感と一科生への憎悪を刷り込むための集会ですね」

司一は本当に小物だったが、意外と手腕はあったらしい。司甲という中継地点を利用して、見事に第一高校を切り崩していたのだから。

「そしてブランシユの最終目的……それは図書室の特別閲覧室からのみアクセスできる貴重な魔法研究データです。これを奪い取り、大亜連合へと売り渡すつもりの方でした。危なかつたですね」

「それが本当なら大事件よ！ ……これまで何もできなかったのが悔やまれるわ」

「七草の言う通りだ。これは俺たちの問題だな」

真由美と克人は苦々しい口調で反省する。自分たちが想像していた以上の大事だったのだ。下手すれば手遅れな事態に発展していたことだろうと思うと、今更ながら恐怖が湧いてくる。

そんな中、摩利は不意に紫音へと尋ねた。

「待てよ……もしかして今日の討論会中にテロが起ころうとしていたのか!? もしそうだとすれば、図書館なんぞザル警備だったぞ!」
「それが狙いだったのでしょうかね。最低でも七草会長、十文字会頭、渡辺先輩の三名は一か所に縛りつけたのだと推察できます。そして差別撤廃の交渉とやらをしている間に、壬生先輩がテロリストたちを特別閲覧室まで手引するつもりだったようですね。御三方が揃っている場所でテロリストたちが暴れ始めたら、必ず鎮圧するでしょう? 彼らはそれを囮にして特別閲覧室に向かうつもりだったということですよ」

「ifの話とは言え、ゾツとするわね」

テロのことを知らなければ、見事に思惑通りの事態へとなっていたことだろう。原作では達也たちが特別閲覧室へと向かっていたので、どちらにせよテロは失敗するのだが。

「さて、渡辺先輩」

「どうした四葉。改まって」

「実は、壬生先輩や司先輩はブランシユが壊滅したことを知りません。そして今日の討論会の間、ブランシユを手引きするべく動きます。そこへ風紀委員を派遣してくださいませんか?」

「……何とも間抜けな話だな。既に起こらないと決まっているテロに加担する生徒か……」

「お勧めは壬生先輩のところに司波達也を。そして司先輩は重度のマインドコントロールを受けているようなので、暴れられても対応できる腕の持ち主をお願いします」

それを聞いて摩利は首を傾げる。

「なぜ司波を?」

「彼は壬生先輩と仲が良いようなので、話し合いで終わるかもしれないま

せん。まあ、念のために渡辺先輩も行って欲しいですね。どうやら壬生先輩は渡辺先輩に因縁があるようです」

「因縁だと?」

「はい、詳しくは本人にどうぞ」

摩利は壬生紗耶香と何があったのか思い出す。

そして辛うじて可能性があると考えたのは、昔に剣の試合を申し込まれたことだ。

これでも摩利は千葉家の剣術道場で門下生をしている。故に剣の腕前もかなりのものだ。尤も、魔法を前提としているので、純粋な剣技ではそこそこ程度だが。

『あの、渡辺先輩の剣技に感動しました。是非ともお手合わせ願えますか?』

『すまないが、あたしの剣では到底、お前の相手は務まらない。だから無駄な時間を過ごさせることになると思う。自分の腕に合った練習相手を見つけてくれ』

『そう……ですか……』

そんなやり取りだったはずである。

しかし、それで恨まれているとすれば逆恨みも甚だしいところだ。

この事件以外に壬生と関わった記憶もないので、摩利はただ首を傾げるのだった。



放課後、公開討論会には想像以上に人が集まっていた。一科生と二

科生の聴講者は半々であり、今回の事案に興味を示されていることが窺える。

そして当然の如く、討論会は真由美の独壇場となった。

差別撤廃同盟という二科生の生徒たちは、所詮、扇動によって行動しているに過ぎない。具体的なビジョンを持たないまま、討論会に臨んでいるのだ。元から誤解である以上、真由美一人でも跳ね返せる。同盟側は差別されているという主張を繰り返すが、真由美は根拠に基づいて反論を続ける。施設使用制限、部活動費の分配における鼻屑……そんなものは初めからない。

最終的には逆に真由美が一科生と二科生の意識改善を訴えかける演説会へと変貌し、何事もなく終了したのだった。

一方、剣道部主将の司甲は焦っていた。

(なぜ、なぜ……)

テロリストを手引きするハズだった。

だが、肝心の兄とは連絡がつかず、指定の場所には誰もいない。どうなっているのかと思考を重ねるが、まるで霞がかかったかのようにハッキリしなくなる。まるで、特定のことしか考えられなくなっているかのような状態だった。

マインドコントロールは科学的根拠に基づいた洗脳だ。大元である司一が消えたところで、マインドコントロールは消えない。

そんな司甲の元に、一人の男子生徒が近づいた。

「随分と拳動不審だな司」

「……辰巳か」

そして振り返ったところを、挟み込むようにしてもう一人が出てくる。

「ちよつと同行願えませんかね司先輩」

「沢木……僕に何か用なのかい？ 風紀委員が二人で物々しいね」

誤魔化そうとしているが、逃れることなど出来ない。

何故なら、既に辰巳も沢木も摩利から捕縛命令を受けているからだ。

「悪いがウチの委員長様から逮捕命令が出ているんだわ。なんでも……『心当たりならあるだろう？』らしいぞ」

「そういうわけです。大人しくしてくださいませんか」

「残念だが……出来ない相談だ！」

もはや言い逃れは不可能と判断したのだろう。司は実力行使に出る。相手は魔法に自信を持つ一科生。だからこそ、アンティナイトを使えば逃げることも容易いと考えた。

腕に巻き付けたアンティナイトのブレスレットにサイオンを流し込み、キヤスト・ジャミングを発動させる。しかし、次の瞬間には腹部に鈍痛を覚えた。

「抵抗の意志あり……強硬手段に移らせていただきました」

「勘違いしているようだから教えてやるぜ。沢木はこれでも魔法無しで強い」

「そん……な……」

沢木の拳が鳩尾に突き刺さっていた。

そして司甲は捕獲完了したのだった。



同時刻、達也と摩利も壬生紗耶香を見つけていた。

「壬生先輩。どれだけ待ってもブランシユは来ませんよ」

「っ!? 司波君! ……と渡辺先輩」

建物の陰から近づいたからだろう。壬生は驚いて後ずさる。その行為が、後ろめたいことをしようとしていることを示しているように思えた。

「すでにブランシユは壊滅しました。愚かなことは止めてください」

「っ! 愚かなことですよっ!」

ちなみに、達也は壬生説得に当たり、摩利から詳しい事情を聞いている。ブランシユとの関係も既に知っていた。

淡々と事実を述べる達也に対し、壬生は激昂する。

「差別をなくそうとしたのがいけないことだったの!? 平等を目指したのは間違いだったというの!? 二科生だからって蔑まれて、馬鹿にされて……貴方だって感じてきたでしょう!? 司波君だって不当な侮辱を受けてきたはずよ!」

しかしその言葉は達也に届くことはない。

激しい怒りを達也が理解することはない。

強い情動を消し去る代わりに魔法演算領域を得た達也にとって、壬生の姿は理解しがたいものだった。だからこそ、代わりに摩利が答える。

「それは司波に対する侮辱だぞ壬生」

「……なんですか渡辺先輩。先輩だって二科生を馬鹿にしているじゃありませんか？」

「何の話だ？ ……司波は確かに二科生で、多くの生徒から蔑まれている。だが、少なくともあたしは司波を認めているし、司波妹や真由美だって同じだ。ちゃんと司波を見ている奴はいる。それを無視して闇の部分にだけ目を向けるのは侮辱だと言っているんだ！」

珍しく激しい剣幕の摩利に対し、壬生は少しだけ怯んだ。

しかし、今度は摩利の方を睨みつつ叫ぶ。

「だったら……だったらなんで去年は私を馬鹿にしてあしらったんですか！ 去年の勧誘週間で先輩の魔法剣を見て……凄いと思って……その剣を見てみたくて練習を申し込んだ！ それなのに先輩は『お前では相手にならないから無駄だ。自分に見合った相手を探せ』って……これも私が二科生だから——」

「ちよ、ちよつと待て！ なんだそれは！ あたしはそんなことを言っていないぞ！」

「……………え？」

「え？」

見つめ合う摩利と壬生。

落ち着いたところで達也が仲裁に入った。

「渡辺先輩、壬生先輩も落ち着いてください。一旦整理しましょう。まず、壬生先輩の主張については置いておきます。どうやらお二人の間に誤解があるようなので、それを確認しましょう」

「あ、ああ」

「……分かったわ司波君」

そこで、摩利は紫音が言っていたことを思い出す。壬生と確執があるという話だったが、どうやらこのことを指しているのだと理解し

た。

同時に、何か勘違いが起こっているとも理解できた。

「落ち着いて聞いてくれ壬生。確かに、壬生から練習相手を申し込まれたのは覚えている。だが、その時はこう言っただけだ。『すまないが、あたしの剣では到底、お前の相手は務まらない。だから無駄な時間を過ごさせることになると思う。自分の腕に合った練習相手を見つけてくれ』とな」

「え……う。あれ……う」

「あたしの剣は魔法ありきものだ。純粋な剣では流石に敵わない。そう思ったからこそその断り文句だったんだが……」

「じゃ、じゃあ……勘違いで……」

摩利は無言でうなづく。

壬生はチラリと達也の方に目を向けると、やれやれと言った様子だった。

「い、いやあああああああああああああああー！」

恥ずかしさのあまり、壬生はその場で蹲って叫び声をあげることになる。勘違いで逆ギレした上に、テロ組織にまで加担していたのだ。事実を知れば、自分のしでかしたことの大きさが見えてくる。

勿論、これらの勘違いはマインドコントロールによるものなのだが、本人には自覚がない。恐らくは一生の黒歴史として残ることだろう。

こうして、ブランシユ事件は本来の歴史よりもちよっぴり平和に終わったのだった。

九校戦編 九校戦編1

ブランシユ事件は一般生徒に知られることなく終わり、暫くが経った。あの後、壬生紗耶香と司甲は重度のマインドコントロールを治療するために入院することになり、司に関しては最終的に自主退学をした。

なお、勧誘週間で壬生に突つかかっていた桐原武明は毎日見舞いに通っていたようである。あの日にちよつかいを出したのも、マインドコントロールを受けてから鈍っていた彼女の剣にイラついたからだったそうだ。

そして二人は付き合うことになったのだが、それは余談である。今論ずるべき問題は、ネット公開された期末考査の結果だった。

一位、B組、四葉紫音
二位、A組、司波深雪
三位、A組、光井ほのか
四位、A組、北山雫

三位と四位は僅差だったが、三位と二位には大きな壁がある。そして紫音も期末考査ではサイオン量を点数化されなかったことで、無事に一位を獲得した。

密かに安堵していたのは言うまでもない。
ちなみにこれは総合成績の結果だ。公開された順位には、理論のものもある。

一位、B組、四葉紫音
二位、E組、司波達也
三位、A組、司波深雪
四位、E組、吉田幹比古よしだみきひこ

まさかの二科生が上位ランクインである。

更に言えば、こちらも二位と三位の間には十点以上もの差がある。紫音はともかく、達也に関しては大いに驚かれた。

なにせ、生徒指導室に呼ばれて実技で手を抜いている疑惑をかけられたほどである。

「——ということがあったんだ」

「ほー。達也も大変だな。なまじ勉強ができるせいで疑われるなんて」

「ああ、最終的に誤解は解けたが、四校への転校を勧められた」

「そういえば四校は技術重視だったか。魔工師志望者も多いって聞くし」

「断ったがな」

風紀委員会本部で書類整理をしつつ、紫音は達也の話聞いていた。このぐらいの会話は作業しながらでも並行してできる。これでも二人は理論においてツートップだ。並みの頭脳ではない。

そして、二人に書類作成と整理を丸投げしていた摩利は達也の話聞いて興味深げに尋ねる。

「それはアレか？ やはり妹と離れたくないという奴か？」

「そういうことです」

「なんだ？ 無表情で肯定されると詰まらん。少しぐらい恥じらえ」

「自分は渡辺先輩を愉しませるためにここに来ているんじゃないやありませんよ」

的確なツツコミに摩利も肩をすくめる。

そんな摩利に今度は紫音が尋ねた。

「それにしても、引き継ぎ資料なんてもう作るんですね。次の風紀委員が決まるのはまだ先でしょう?」

「ああ、それなんだが、やはり九校戦が始まると忙しくてな。メンバーが固まったら練習も始まるし、道具の手配や情報収集と解析、作戦立案、挙げていけばキリがない」

「大変ですね」

「言っておくが四葉は既に出場者に決定だぞ」

「知ってます」

九校戦。

毎年、夏休みに行われる魔法科高校による競技大会だ。全国に九つある魔法科高校が集い、魔法競技で腕を競うのである。

「見る分には楽しいですけど、出場する側になると大変ですね」

「お、その口振りからすると、四葉は九校戦を見たことがあるのか?」
「昔に一度だけ会場で。近年はずっと画面越しでしたね。去年や一年の年も一応は把握しています。七草会長はやはり凄かったですね。一番印象深いですから」

「そうだろうな。十師族だけあって、圧倒的だ。エルフィン・スナイパー七草真由美は伊達じゃないってことさ」

魔法競技というだけあって、九校戦はかなり白熱する。一般人からすれば未知の現象がこれでもかというほど飛び交う大会なのだ。まして、十師族のレベルともなれば興奮もする。

そして行われる競技は全部で六つ。

高速で飛び交うクレーを破壊するスピード・シューティング。

低反発ボールを魔法やラケットで打ち、相手のコートに落とせば勝ちというテニスに近いクラウド・ボール。

ボードに乗って水上コースを走り、タイムを競うバトルボード。

向かい合い、自陣にある十二の氷柱を守りつつ、敵陣にある十二の氷柱を倒すアイス・ピラース・ブレイク。

空中にホログラム投影された的をバットで壊して回るミラー・バット。

モノリスを奪い合う三対三の魔法戦、モノリス・コード。

これらは本選と新人戦で分けて行い、十日間で全ての競技を終える。一瞬の油断も許されないハードスケジュールの中、魔法科高校の生徒たちがしのぎを削るのだ。

(確か九校戦は国際犯罪シンジケートノーヘッド・ドラゴン無頭竜が暗躍するんだっただけかな？ そろそろ調べておいた方がいいかもしれないね)

紫音は密かにそんなことを考えるのだった。



九校戦の出場メンバーに選ばれるというのは名誉なことだ。

試合で活躍すれば成績加算されるばかりか、夏休みの課題免除、評価も一律Aになるという学校からの特典も凄い。逆に言えば、それだけ九校戦に力を入れているということだった。

出場するだけでステータスになる。

故に無様な姿は見せられず、代表選手も慎重に選ばれる。本選、新人戦に男女十名ずつなので、選手としては合計四十名。ここに作戦スタッフや技術スタッフが加わることになる。

そして、その選考会議が今、開かれようとしていた。

「それでは九校戦メンバーの選定会議を始めます」

真由美の宣言と共に始まる。

部活連本部で行われているこの会議では、既に内定しているメンバーを含め、かなりの大人数が参加している。当然ここには紫音も出席しているのだが、その出場者の席には一人だけ二科生がいた。勿論、達也である。

「なぜ二科生がその席にいるんですか？」

とある生徒からその質問が飛ぶのも無理はない。

風紀委員として活躍する達也は、上級生から意外な高評価を受けている。だが、やはり二科生ということで否定的な目を向ける者が多いのも事実。

そこで、真由美は事情を説明することにする。

「司波達也君は技術スタッフ枠です。彼の理論成績を知っている人は理解できると思いますが、競技出場者としてならともかく、技術面では一科生すら凌駕するというのが私たちの考えです」

当然である。

達也の正体は謎の天才魔工師トールラスⅡシルバーの片割れ、ミスター・シルバーである。圧倒的なプログラミング技術を保有し、CAD調整に関して言えば比肩できる者を探す方が難しい。寧ろ九校戦などでその技術を振るうならば、オーバーキル過ぎて笑いが込み上げてくるほどである。

勿論、そんなことを知らない一科生の生徒たちは激しく反論する。

「しかし前例がない」

「いくらなんでも二科生を出すなんて……」

「CADを二科生に預けるのはちよつとね」

「いや、だが理論成績が良いのは事実だ。技術スタッフぐらい……」

「だが——」

「しかし——」

議論は達也一人のために白熱し、次第に収拾がつかなくなる。そこで紫音が立ち上がった。

「少し宜しいですかね？」

その一言で一気に静まる。

悪名を轟かせる四葉が相手では、流石に逆らうことは出来ない。たとえそれが下級生であつたとしてもだ。紫音と同じ一年生はともかく、二年生や三年生までも黙り込んでしまったことには達也も呆れていた。

一方、紫音はゆつたりとした口調で話し出す。

「個人的な意見ですが、自分としては司波達也にCADを調整して頂きたいですね。どうやら、司波深雪さんは彼にCADを調整して貰っているそうですよ。総合成績二位になるような人物のCADを普段から扱っているのは事実ですから、九校戦で起用しても問題ないのではありませんか？」

紫音の要望、そして実際に深雪のCAD調整をしているという事実。

会議の雰囲気を傾けさせるには十分だった。

そこで十文字克人も助け舟を出す。

「二科生だからというくだらない理由は却下だ。しかし、実力に問題があるというのなら、今ここで試してみればいい」

紫音に続き、克人までもそんなことを言い出したので、もはや反論できる空気ではない。静まり返った会議室の中で、摩利は克人に尋ねる。

「具体的にはどうするつもりだ？」

「実際に調整をさせてみればいいだろう。なんなら、俺が実験台になるろう」

CADの調整は魔法師にとって重要なことだ。

魔法の設計図である起動式を高速処理して読み込む以上、魔法師側への精神的負荷は計り知れない。それを緩和するために、個人に合わせた調整が必要となるのだ。

仮に合わないCADで魔法を発動した場合、不調や幻覚症状が出ることもある。高度な機種であるほど細かな調整が必要であるため、それを他者に任せるといえるのはかなり勇気のいることだ。

「いえ、彼を推薦したのは私です。実験台は私がやりましょう」

真由美が今度は立候補する。

十師族の二人が名乗りを上げる以上、この時点で達也の実力は証明されているとも言える。日本を支える魔法一族の者たちが信頼すると言っているのだ。加えて、紫音も達也にCAD調整を任せてみたいと言っているほどである。

この時点で反対意見を出せる者がいれば、それはそれで勇者だ。

その後、結局、桐原武明が立候補し、実験台となった。彼は勧誘週間で達也に痛い目に遭わされた経験を持つが、壬生の話聞いて一目を置くようになっていた。

そして達也と桐原の事件は周知の事実。

しかし、勧誘週間のことしか知らない周囲からしてみれば、達也にとって不利になる人物が立候補しているように見えた。逆に、だからこそ客観的な意見となる。結果として達也が桐原専用にCADを調節した結果、非常に良い出来栄えと称賛される。

当然、九校戦の技術スタッフへと加わることになるのだった。

(原作通り、シルバー様が加わったな。他の魔法科高校さん、ご愁傷

様)

そして、密かに他校に対して冥福を祈る人物がいたとかいなかったとか。



九校戦選手団発足式。

通常授業の四時限目を削ってまで生徒がホールへと集められたことから、どれだけ学校が九校戦に力を入れているのか理解できる。

そして今年は第一高校にとって三連覇がかかった年だ。

去年、一昨年から……つまり真由美、克人、摩利の三巨頭が入学しからの快進撃は誰もが知っている。更に言えば、今年は四葉紫音という新たな十師族が新入生として入ってきたのだ。他にもA級ライセンス相当といわれる者たちが多く、特に期待されている。

仮に賭け事がされるとすれば、もはや成立しなくなるほど一校が人氣となるだろう。

それだけのメンバーだった。

だが、それだけに注目を浴びるのが達也である。

(居心地が悪い)

達也は無表情を貫いていたが、あまり気分が良いとは言えなかった。

石や魔法こそ飛んでこないものの、突き刺さる視線からは様々な感情が読み取れる。それは主に、選ばれなかった一科生による嫉妬だ。

なぜ二科生が選ばれるんだという憎悪にも似た目を向けられる。

それが心地よいはずもない。

紫音は心労軽減のために思念リンクを図る。

(おーい、大丈夫か達也ー)

(……予想はしていたが、歓迎されていないようだな)

(一科生からは嫉妬、同じ二科生からも羨望に似た嫉妬……敵だらけだな)

(恨むぞ紫音。なぜ会議の時に俺を推薦した)

(……すまんな達也。深雪から頼まれてたんだ)

あの会議の時、深雪は生徒会室でお留守番だった。会議中にも生徒会としての仕事は必要なので、下っ端は処理に励むのである。

だからこそ、紫音は深雪からひそかに頼まれていた。

お兄様を推薦してあげてください、と。

深雪は既にアイス・ピラーズ・ブレイクとミラージ・バットへの出場が決まっている。だが、そうなると兄こと達也と離れ離れになるのは確かだ。そこで、達也を技術スタッフとして起用することを望んだのである。

それに事実、深雪のCADは達也が調整している。

九校戦でも万全の状態で臨めるように、CAD調整を達也にして貰いたい。そう思うのは当然である。

だからこそ、会議に出られない深雪は紫音に頼んでいたのだ。

(——ってことがあってな)

(前から思っていたが、お前は深雪に弱すぎないか?)

(……あの有無を言わさない笑顔。真夜様を思い出すぜ……ははは)
(…スマン)

深雪は四葉真夜からすれば姪にあたる。また、深雪の母親である深夜は真夜と双子だったので、似ている部分があってもおかしくない。妙な所が似ている深雪に、紫音は逆らえないのだ。そう、本能的に。

「では、選手紹介を始めます。まずは――」

発足式という名の選手お披露目が始まり、真由美がプレゼンターとして選手紹介をしていく。選手は合計して四十名、これに加えて技術スタッフもいるのだから結構な人数だ。

そして、その一人一人に競技エリアに入場するためのIDチップを仕込んだ徽章が付けられる。見栄えの良いという理由で選ばれた深雪が、一人一人の左襟へと付けていくので、彼女にとっては結構な手間である。

しかし深雪はこれでも淑女教育が施されている。

この程度のことなら、笑顔でやり遂げる事も難しくない。

そして紫音へと徽章を付けるとき、誰にも聞こえないように呟いた。

「ありがとうございます紫音さん」

「喜んでもらって何よりだ」

同じく紫音も深雪にだけ聞こえるように返事する。深雪も徽章を付け終わった後に少しだけ微笑み、次へと移っていった。

(喜んでもらえて何よりだよホントに……)

兄を敬愛する深雪にとって、公的に達也が認められることは非常に嬉しいことだ。その証拠に、最後の微笑みは心の底からのものだったと分かる。

最後に深雪が達也へと徽章を取り付けるときも、本当に誇らしげな表情を浮かべていたのだった。

九校戦編2

八月一日。

第一高校が九校戦の会場へ出発する日となった。会場は富士演習場南東エリアであり、一高から行けばかなり近い。なので、ギリギリで出発しても充分なのだ。

ちなみに、九校戦自体は八月三日から始まるのだが、今日の夕方から懇親会があるので、それに間に合うように前々日から会場入りするのだ。

だが、第一高校のバスは出発時間が大いに遅れていた。

「バスの中で待っていても良かったんだぞ司波？」

「いえ、これも仕事ですので」

「真面目な奴だ」

遅れている理由は真由美にある。

彼女はこれでも日本を代表する魔法の大家、七草であり、政治的にも大きな力を持つ。そしてその魔法力と美貌から縁談を持ち込まれることも少なくないのだ。今回も、急遽入れられたお見合いのせいで遅れていたのである。

そして達也は人数が揃っているかの確認が仕事だ。まだ到着していない真由美のために、バスの外で待っていた。既に八月になっているので、外は汗が滲むほど暑い。

事実、摩利も同じく待っていたのだが、日傘をさしているにもかかわらず薄っすらと汗をかいていた。

「渡辺先輩は先に中へどうぞ。自分が待っておきますので」

「そうか。なら任せる。熱中症で倒れないようにだけしてくれ」

「了解です」

摩利は日傘を折り畳んでバスの中に入っていった。選手として出

場する以上、最良のコンディションを保たなければならない。明後日からの試合とは言え、無闇に体調が悪くなる行為をするわけにはいかない。

勿論それは達也も同じだったが、この程度で調子が悪くなる達也ではなかった。

それからおよそ二十分後、ようやく真由美が到着する。

「ごめんなさい！」

つばの大きな帽子を被り、サマードレスを纏った真由美を見るに、相当急いだのだろう。ヒールのサンダルで器用に走り寄ってくる。

時間にして一時間三十分の大遅刻だったが。

「会長で最後ですね。バスへどうぞ」

若干、息を切らせながら真由美はバスに乗り込もうとする。

そこへ、ひよつこりと顔を出した摩利が真由美に注意した。

「おい真由美。ちゃんと司波に礼を言っておけ。この炎天下ですつと待ち続けていたんだからな」

「え？ そうだったの？ ほんとにごめんなさい」

「大したことではありません」

達也はそう言って選手三十九人の名前全てにチェックを付けた。別シートに記されている技術スタッフと作戦スタッフの計十二人分は既にチェックが終わっている。

つまり、これで全員が揃ったことになるのだ。

選手の中で、ただ一人ここにいない四葉紫音を除いて……



紫音が一高バスに乗っていないなかった理由だが、それは別件で先に九校戦会場へと赴いていたからだ。真由美や摩利には連絡済みなので、紫音がいけないこと自体には理解を貰っている。

紫音としては後ろめたい気持ちになったが。

真つ黒な車を降りた紫音は使用人に案内させて高級ホテルの一室を目指す。

最上級のスイートルームの前でチャイムを鳴らすと、扉が開けられた。

「お待ちしておりました紫音様」

「お久しぶりです葉山さん」

「真夜様がお待ちです。どうぞこちらへ」

出迎えたのは四葉家筆頭執事の葉山。

そして奥で待つのは極東の魔王こと四葉真夜である。クッション性の高いソファに腰を下ろした真夜は、いつも通り歳不相応の美貌を放っていた。

「良く来ました紫音さん」

「お呼びとあらば当然です」

「あまり硬くならなくても良いわ。腰を下ろして寛ぎなさい。葉山さんも紅茶の用意を」

「かしこまりました」

紫音が真夜の正面に腰を下ろし、その間に葉山は紅茶の用意をする。

正直、こうやって呼び出された理由は紫音も分かっていない。だか

らこそ、早く用件を聞き取った。しかし、真夜が紅茶の用意を指示したということは、ゆつくりと話し合いをするということの意味している。

ここで話を切り出すほど無粋でもないので、紫音は紅茶の用意が出るまで待つことにした。

「紫音様はお砂糖を三つ、そしてミルクでございますね？」

「ええ、それをお願いします」

「あら、相変わらず甘いのがお好きなのね」

「普段から考え事が多いもので」

流石は筆頭執事というべきか、以前に言った紫音の好みを覚えていた。主人である真夜の好みは聞くまでもないのだろう。あつという間に用意を終えた。

湯気が立ち昇り、心地よい香りが鼻を抜ける。

そして真夜は一口だけ紅茶を頂いた後、話を切り出した。

「さて、紫音さんをここに呼び出した理由を言いたしましょう」

「はい」

「私は今年の九校戦を会場で見ることになりました。四葉家当主である私が九校戦の会場に来ること自体は不思議なことではありません。見どころのある学生を見つけ、招致するのも一つの仕事だからです」

「心得ています」

九校戦は日本全国にある魔法科高校が一挙に揃い、魔法の腕を見せつけ合う親善大会だ。しかし、同時に自身の魔法力をアピールする場でもある。

高い能力を見せつけければ、十師族抱えの魔法師になれることもある。また、軍の施設を利用するということもあって、当然のように軍関係者も見に来る。高校生でありながら優秀な者は、各所から引っぱりだこになるほどだ。

これは選手だけでなく技術スタッフも同じであり、高い技術力を見せつけられ、企業から勧誘を受けることすらある。

故に真夜が観戦することは何ら不自然ではない。

(いや、不自然じゃないのは分かるけど、いきなり原作乖離って……)

紫音が九校戦関連で覚えている知識は、国際犯罪シンジケートノイヘッド・ドラゴン無頭竜が第一高校の優勝を阻むために色々邪魔をするということだ。これが原因で渡辺摩利は怪我による棄権を余儀なくされ、新人戦モノリス・コードでは森崎駿を始めとした三人の一年生が同じく大怪我を負う。

他にも被害者がいた気がするのだが、それは紫音も覚えていなかった。

ともかく、原作基準で言えば九校戦に真夜は来ない。

それが変わっているのも、やはり紫音というイレギュラーのせいだろう。

「真夜様が来られた……ということとは、何か意図があつてのことですよね？　今更、九校戦を見て人を見繕ったりなどしないでしようし」

「ええ、その通り。本来の目的は別にあります」

「もしや無頭龍ノイヘッド・ドラゴンですか？」

紫音は違うだろうなと思いつつも聞いてみた。

既に無頭龍は紫音が対処を始めているので、真夜が出てくる必要はない。真夜の方も紫音が動いていることぐらい把握しているだろう。

案の定、真夜は紫音の問いに否定で返した。

「違いわ。それについては紫音さんが既に手をまわしているでしょう？」

「……よくご存じで」

「それぐらいは当主として当然です。」

さて、本題へと行きましょう。今回、私が九校戦へと赴いた真の目的は貴方です、紫音さん」

「はい？ 私ですか？」

「私の息子が九校戦に出るのですから、親として観戦するのは当然でしょう？」

「……………は？ 今何と？」

流石の紫音も耳を疑った。

「ですから私の息子として、貴方は九校戦に出るということですよ」

「……………え？」

「聞こえませんでしたか？」

「いや、聞こえましたよ!？」

聞き間違いでなかったと知り、紫音は慌てふためく。

第一高校に四葉として入学するとき、プロフィール上では親不詳となるはずだった。四葉の権力で無理やり隠したのも知っている。

だからこそ、今更そんな公表をする意味が分からなかった。

「……………そもそも、私は次期当主が決定した時点で黒羽に戻るのでは？」

四葉を名乗るのもそれまでだったはずですよ。ここで真夜様の息子だという風に公表した場合、黒羽には戻れなくなります」

「そうね。でも構わないわ。黒羽は文弥さんに継いでもらうことになるでしょうから」

「どういうことですか？」

「簡単よ」

真夜はそこで一旦言葉を切り、紫音に向かって微笑みかけてから続けた。

「紫音さんの能力は、既に黒羽に収まる領域ではない。そう判断され

ただけのこと。これは新発田、津久葉、黒羽の当主とも話し合った結果です」

「では父も？」

「ええ、貢さんも賛成でしたね。感情面では納得していないようでしたが」

新発田、津久葉は黒羽と同じく四葉分家だ。各家に後継者候補がいるのだが、年代も近いので紫音も面識がある。そして、それぞれの分家は自身の子を次期当主へと持ち上げようとしていたはずだ。

少なくとも、紫音はそう認識している。

そんな中で、次期当主に近づくかもしれない真夜の子という地位へと紫音を置くことに賛成するとは考えにくい。貢にしても、流石に自分の子を真夜の養子に出すことに葛藤はあつただろう。あれでも貢は子供に甘い。優秀な紫音は特に手放したくないはずである。

「どういった経緯でそんなことに？」

「単純に紫音さんが優秀過ぎたということ。第一高校に入学してから捕らえたスパイの数は三十六名。その中には大亜連合、USNA、ソビエトのスパイもいました。更に『調律』を利用した記憶の読み取りで、彼らの拠点も発見しています。

これらの働きによって四葉は非常に有利となりました。

正直に言いましょう。紫音さん一人で他の分家を上回る功績を叩きだしています。この点から言えば、筆頭当主候補は深雪さんから紫音さんに変更されてもおかしくありません」

「しかし私はサイオン量に欠点があります。だからこそ、当主筆頭を避けていたのでは？」

「自覚がないようですが、紫音さんが集めた情報はその欠点を打ち消すほどのもの。特に反魔法師団体が利用していた取引ルートの手は素晴らしい功績です。そのお蔭で逆に四葉から間者を送り込むことが出来ましたから」

四葉が一人暮らしをしているというのは、他国のスパイからすると狙い目となる。最恐一族と呼ばれる四葉は、確かにアンタツチャブル接触禁忌とも呼ばれているが、だからこそUSNAのような大国は探りを入れてくる。大漢が四葉一族によって滅ぼされたのは、大漢という国が弱小だったからだ。

このような考えが大国にはある。それゆえ、四葉の恐怖は通じにくい。

紫音は帰宅中や就寝中に襲撃を受けることが多々あり、その度に返り討ちにしてきた。そして情報を抜き取ってスパイたちの拠点を探り出し、黒羽の部隊を使って襲撃することで逆に情報を奪う。また、スパイが調べていた他の十師族に関する情報も四葉が独占することになった。

各分家当主が思わず認めてしまうほどの偉業なのである。

「紫音さんの力を見れば次期当主は确实。ほぼ決定といっても良いでしょう。しかし、そこだけを見て当主を決定する訳にはいきません。そこで戦略級魔法すら有する紫音さんは、力を振るえる立場でなければならぬのです」

「基本的に十師族当主は戦略級魔法師でないことが望ましい。だからですね？」

「その通りです。これまで通り、筆頭当主候補は深雪さんです。そして紫音さんは四葉の保有する強力な魔法師という立場。これが最も望ましいでしょう」

「……」

真夜の言葉を紫音は否定できなかった。

十師族というのは大きな力を持つだけあって、その当主は無暗に力を振るうことが許されない。また、戦略級魔法師は軍の要請によって動くため、仮に当主が戦略級魔法師だったならば、不用意に本家を空けることになりかねない。

だからこそ、望ましい地位は四葉家の魔法師の一人であるという立

場。

強すぎるが故に、また使い勝手がよすぎる故に、そのような判断となった。

「つまり、私が真夜様の養子となり、真に四葉を名乗るのは戦略級魔法師として公表するからですね？　しかし私の戦略級魔法は……」

「勿論、貴方は戦略級魔法『日蝕』^{エクリプス}の使い手として登録されます。真の戦略級魔法『リベリオン』^{エクリプス}は隠しなさい」

「……そうですね。『日蝕』も『リベリオン』も本質は同じです。片方を前に出せば問題なく隠せるでしょう。それに『日蝕』^{エクリプス}自体も解析不能と言って良い魔法ですからね」

もはや紫音は諦めることにした。

自分でも意外だったが、紫音は黒羽であることを気に入っているし誇りに思っている。四葉紫音になってからもやっていることは変わらないとは言え、黒羽紫音であることはアイデンティティの一つとして認識している。

しかし、当主様の言葉は絶対。

更によえば、分家筋の各当主まで賛同しているとのこと。

逆らえるわけがない。

「承知しました。謹んで承ります」

「そう、なら書類にサインしてくれるかしら？」

真夜が合図を出すと、控えていた葉山が数枚の書類を差し出す。

どうやら養子縁組に関するものらしい。

紫音は躊躇いなく直筆サインを入れた。

「完了しました母上殿」

「嬉しいわ紫音さん」

これから先は真夜が母親である。これは今回の九校戦を境に対外的にも公表される。

思いのほか嬉しそうにする真夜は意外だったが、何とも実感の湧かない現実だ。取りあえず後で黒羽貢とお話が必要だと考える。

「ところで真夜様」

「母上でいいのに」

「では母上。戦略級魔法師としての公表はどのタイミングでするのですか？」

「恐らく、近いうちに披露する機会があるでしょう。紫音さんの集めてくれた情報を元にこちらの間者を広げ、とある事実を突きとめましたから」

それを聞いた紫音は横浜騒乱編だと理解する。

横浜に大亜連合が攻め入る大事件だったはずだ。

確かに、捕らえたスパイの中には大亜連合の者もいたし、抑えた取引ルートには大亜連合と通じるものもあつた。そこから情報網を広げ、そこに辿り着いたのだろう。

原作では達也が戦略級魔法『マテリアル・バースト質量爆散』を使用していたが、この様子では紫音が『エクリプス日蝕』を使うことになりそうだった。

(九校戦前なのに疲れた……)

紫音は甘味たっぷりの紅茶を口に含むのだった。

九校戦編3

真夜と別れた後、紫音は父親こと黒羽貢に電話で文句を言った。貢はひたすら謝り、これには理由があると述べていたが、その理由自体は語られることもなかった。

藁にも縋る必死さがあったので、仕方なく赦したが。

そして真夜と面会するために着ていたスーツを脱ぎ、制服に着替えて懇親会の会場へと向かう。九校戦開催の前々日に行われる懇親会には、一校から九校までの選手団、技術スタッフ、作戦スタッフが全員参加するので、合計すると四百名を超える。

広い会場とは言え、紫音が入った時にはかなり混雑していた。

「取りあえず会長は……」

紫音は真由美を探すが、この広さでは見つからない。

とりあえず一校生徒が固まっている場所を見つけたので、その辺りへと行くことにした。紫音が近寄ると目を逸らされたりするので、やはりまだ怖がられているのだと実感する。既に入学して三か月以上経つにもかかわらず、この扱いなのだ。

勿論、中には慣れてきた者もいるが。

「あ、四葉君」

「四葉さん！ 来てたんですね！」

「北山に光井か」

北山雫と光井ほのか。

この二人は深雪経由で仲良くしている。度胸があるのか、魔法についてコツを教わりに来たこともあるほどだ。それ以来、ちよくちよく話す程度の仲にはなっている。

「七草会長を知らないか？ 来たことを報告したくてな」

「それならあっち」

雫が指差した方を見ると、大きな人だかりがある。
どうやら人気者の真由美はあの中のような。

「助かった……が、あれでは行けそうにないな」

「今は他校の人とも挨拶しているみたい」

「さつきも六高の生徒会長さんが宣戦布告しに来てましたよ」

紫音は近くのウェイトレスを呼び止め、飲み物を受け取った。暫くは真由美も忙しいと思われるので、待つことにしたのである。

「そういえば達也と深雪はどうした？ いつも一緒にいるイメージだけど」

「二人はあっち」

雫がまた指を差したので、その方向を見ると達也と深雪がいた。だが、達也は深雪に何かを言って離れていく。そして深雪は一科生の集まるところに向かって行った。

どうやら同じ選手と交友を深めるように、達也が論じたらしい。

「さつきまで深雪と一緒にだったからほのかがへタレてた。私はその付き添い」

「ちよつと雫!?!」

「でも深雪が離れた。今がチャンス」

雫はほのこの手をグイグイ引っ張って達也の方へと向かって行く。紫音も呆れつつ、二人の後ろを歩いて達也の方へと歩いていった。

「達也さん」

「雫にほのか……それに紫音か。いつの間に来ていたんだ？」

「俺が来たのはさっきだ。会長に挨拶しようと思ったんだけど、あの様子ではね」

紫音が真由美を囲む人ばかりへと目を向けると、達也も納得したように頷く。

「達也は一人なのか？」

「ああ、さっきまで深雪と……あとはウエイトレスのバイトで参加しているエリカとも一緒に居たんだが、今は一人だ。どうも俺が二科生だから敬遠されているみたいだな」

「そんな！ 達也さんだってメンバーなのに！」

「下らない」

ほのかは悲しそうに、雫は淡々とそんなことを口にする。

そんな二人に同調して、二人の先輩が入ってきた。

「ホント馬鹿馬鹿しいわね」

「それが人の性というものだよ花音」

二年生の千代田花音^{ちよだかのん}、そして彼女の婚約者であり、技術スタッフとして参加している二年の五十里啓^{いそりけい}。仲良く腕を組みながら会話に参加してきた。

とりあえず紫音は二人に挨拶する。

「こんにちは千代田先輩、五十里先輩」

「あんたも来てたのね四葉。バスにいなかったから驚いたわ」

「家の用事があったんだってね。そちらは終わったのかい？」

「ええ、つつがなく」

花音と啓も紫音を四葉という色眼鏡で見ない希少な人物だ。故に紫音も相応の態度で接している。四葉という立場を笠に着た傲慢な

奴だと思われていることもある紫音だが、実は物腰は丁寧で礼儀正しい。それを知る人物からは紫音も高評価を受けていたりする。

尤も、怖がられている人数の方が圧倒的に多いが。

そして紫音、達也、雫、ほのか、花音、啓で軽く談笑していると、摩利がやってきた。

「お、四葉も来ていたのか」

「どうも渡辺先輩。先程到着したばかりです」

「いや、間に合って何よりだ。今は真由美も忙しそうだから、後で報告にだけ行ってくれ」

「そのつもりです」

「あとは五十里、中条が探していたぞ」

「本当ですか？」

「ああ、一号車だ。ついでに会場まで来るように言ってくれ。そろそろお偉い方の挨拶も始まるからな。最低でも老師のお言葉に欠席者がいるのでは外聞に障る」

「了解しました」

啓はすぐに駆け足で会場を出ていき、当然のように花音もついていく。

すると摩利は達也の方へと向き直り、上から下まで眺めて何度も頷いた。

「なんだ。紋付きの制服も似合ってるじゃないか」

「少々脇の辺りがきついですがね」

「まあ、予備だからな。仕方あるまい」

懇親会のドレスコードは制服だ。そして、このために達也は一科生の制服を着用している。流石にこれだけのために用意するのは憚られるので、予備のものを借りたのだ。

故に少しサイズが合ってなくても仕方ない。

「仕立てても良かったんじゃないか？ 深雪が喜ぶだろうに」

「いや、たかが制服で何を言ってるんだ紫音……」

「それでもないぞ司波。女というものは、案外そんなことで喜ぶものだ。その対象が愛する人物なら余計にな」

「ということとは渡辺先輩も？」

「当たり前だ！ シュウウの立てた功績は自分のことのように嬉し——って何を言わせる！」

「毎度引つかかる先輩もどうかと思いますがね……」

紫音が呆れると、摩利は顔を赤くして黙り込んだ。

だが、数秒で落ち着いたのか、元に戻る。

「くっ！ 四葉も司波に劣らず性格が悪いな」

「四葉ですから」

「なるほど理解した……お、どうやら真由美の方も空いたみたいだぞ」「そのようですね。では行ってきます」

「ついでだ。あたしも行こう。司波はどうする？」

「いえ、止めておきます。エリカが探してくるでしょうから」

エリカの名前を聞いた瞬間、摩利の視線が少し揺れた。どうかしたのかと紫音が首を傾げていると、摩利はそのまま真由美の方へと行ってしまふ。

どうやら並みならぬ因縁でもあるらしい。

(……………あ、そう言えばエリカの兄が渡辺先輩の恋人なんだっけ?)

ちばなおつく
千葉修次。

言われてみれば思い出す人物である。その関係でエリカと摩利は仲悪そうにしているシーンもあった。千葉修次は『イリュージョンブレード』として知られる人物なので、紫音もある程度は把握している。

(ま、俺が口出しすることじゃないし、そつとしておこう)

弄りネタにしても良かったが、デリケートな問題なので控えることにする。

そして達也を置いて、真由美の元へと向かった。

「真由美、四葉を連れてきたぞ」

「あら、四葉君。来ていたのね？」

「ご迷惑をおかけしました。先程到着した次第です」

「間に合って良かったわ。用事の方は終わったの？」

「ええ、なんとか」

その後は、暫く真由美を含めた先輩たちと歓談するのだった。



いよいよ懇親会が始まり、来賓の挨拶が繰り返される。眠くなってしまうような長い話も、九校戦への緊張からか、無駄に真面目な様子で耳を傾ける生徒ばかりだった。

そして遂に最後の挨拶となる。

くどうれつ
九島烈

かつては『世界最巧』と呼ばれた魔法師であり、今でも『老師』と呼ばれて軍にも大きな影響力を持っている。今の十師族という序列を提唱した人物でもあり、日本の魔法界において重鎮といって差し支

えない老人だ。

そろそろ九十歳にもなるということだが、その威光は衰えることがない。

そのような人物が挨拶するというのだから、高校生たちは息を飲んで登壇を待った。

(ん?)

紫音は精神に作用する魔法を感じ取る。

『調律』という魔法を使う以上、自身の精神を乱す力に対して敏感だ。ほぼ自動で『調律』が発動し、精神干渉を打ち消してしまう。どうやら認識を逸らすタイプの魔法だったようだが、魔法強度が弱すぎて紫音には効かなかった。

すぐに紫音は周囲を見渡し、魔法の発生源を探した。

だが、次の瞬間には壇上へと目を奪われることになる。

「……………え?」

フォーマルなワインレッドのワンピースを纏った美女。

紫音もよく知る人物が壇上に立っていたのである。

「なんで真夜様が……」

九島老人が登るはずだった壇上にいたのは四葉真夜。

まさかの人物である。

そして紫音は、真夜のすぐ背後に年老いたもう一人が立っているのを見た。薄暗いので見えにくいだが、電磁波を知覚できる紫音にはハッキリと分かる。発動中の精神干渉系魔法のせいで、殆どの生徒が認識できていないようだが。

パーティの会場全体がどよめく中、真夜はスッと横に避けた。

すると精神干渉系の魔法が解除され、九島烈を誰もが知覚できるよ

うになる。

「まずは悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する」

思ったよりも若々しい声。

それが第一印象だった。

「今のはちよつとした余興だ。魔法というよりも手品に近い。だが、見たところ手品の種に気付けたのは六人だけだった」

思ったよりも少ない。

紫音はそう思う。

『エレメンタルサイト精霊の眼』を持つ達也、『マルチスコープ』を持つ真由美などは気付けた六人に入っているだろう。

紫音を抜けば後は三人。

誰が気付けたのかは謎だが、それはどうでも良いことだ。

全国から集められた優秀といわれる魔法師の卵に対し、これだけの魔法を仕掛けた。その事実だけで老師の力が窺える。

「もし私がテロを起こしたとするなら……それを阻止するべく動けるのは六人だけということ。ところで、四葉家当主、四葉真夜としての意見はどうかね」

「期待外れ……ね。魔法とは発動するものではなく、使うものよ。それを理解できているのが僅かに六人というのは嘆かわしいわね」

「……少々毒が強いようだが、これこそ十師族の長が考える事実だ」

烈の言葉を聞いて会場に衝撃が走る。

『極東の魔王』『夜の女王』と呼ばれる最恐魔法師、四葉真夜が目の前にいるのだ。そのインパクトは強い。

紫音が達也と深雪の方に目を向けてみると、面白いぐらいに目を剥いていた。真夜がここに現れるのは、それほど衝撃的だったということこ

とである。観戦に来ると知っていた紫音ですら驚いたのだから、二人の驚きはそれに勝るものだろう。

「魔法を学ぶ諸君。魔法とは手段であつて、目的ではない。そのことを思い出して欲しくて今回の悪戯を仕掛けた。

私が今用いた魔法は、規模こそ大きいものの、強度は極めて低い。だが、君たちはその弱い魔法に惑わされ、見事に出し抜かれたのだ。私がこの場に現れると知っていながら、目の前にいる私を認識できなかった。

魔法を磨き、魔法力を上げる努力をすることは大切だ。しかし、それだけでは不十分だということを認識して欲しい。使い方を誤った大魔法は、使い方を工夫した小魔法に劣る。

この九校戦はまさに魔法を使う場だ。

私は諸君らの工夫を期待している。

最後になるが、真夜にも協力を感謝しよう。折角だから、君も何か言いたまえ」

「十師族当主をそのように扱えるなんて老師ぐらいなものね。

まあいいでしょう。

言うべきことは九島老師が言ってくれましたから、私からは一つ激励を送ります。

この九校戦には私の息子、四葉紫音が出場します。彼は私の魔法を継ぐ魔法師として鍛え上げました。老師の言われた工夫を以て紫音を超えてみなさい。そして私を愉しませなさい」

四葉真夜の息子。

その言葉を聞いた第一高校のメンバーは一斉に紫音へと注目する。

(真夜様……このために来やがったな……)

真夜はかつて、九島烈の教え子だったと聞く。

その伝手を使い、今回のことを仕掛けたのだろう。紫音はそう確信

した。

元から養子になった事実を公表する予定だったとはいえ、こうも早く、大々的なものになるとは予想もしていなかった。

とりあえず紫音は最も混乱しているであろう、達也と深雪へとリンクする。

(あー、達也に深雪)

(紫音か)

(どういうことですか紫音さん！)

(待て、落ち着け！ ちゃんと説明するから！)

二人には真夜と話した簡単な内容を説明する。

重要な所だけを掻い摘んだ内容だったが、達也も深雪も理解できたようだった。

(俺に続いて二人目の戦略級魔法師を四葉から……叔母上は何を考えている?)

(そもそも、達也が『質量爆散』マテリアル・バーストを使ったこと自体が予定外だったんだ。俺の戦略級魔法『リベリオン』はかなり昔から実験を重ねていたわけだし、元からこつちを……正確には派生魔法『日蝕』エクリプスを表に出すつもりだったんじゃないかと思っている)

三年前、沖縄戦で『質量爆散』マテリアル・バーストを使ったのはやむを得ない事情があつたからだつた。軍艦六隻を壊滅させるために、達也が使用したのである。

結果として達也は軍籍を得ることになり、真夜も仕方なくそれを認めた。

そして四葉家では、昔から紫音の戦略級魔法『リベリオン』が研究されていたことを加味すると、達也の件は予定外だったと推定できる。

(どうやら、俺のことは深雪が当主になったときの最終兵器という位置づけらしいぞ。達也が深雪の盾となるように、俺が剣として君臨するのを理想としているみたいだ)

(そんな……)

(落ち着け深雪。今はそれを考えても仕方ない。それで紫音、お前はそれで納得しているのか？ 黒羽を継ぐと言っていただろう?)

(そう……だな——)

紫音は数秒ほど言葉を途切れさせる。

そして壇上の真夜に目を向けてから、再び思念を送った。

(いずれは黒羽に戻れることを期待しよう。例えば、深雪が当主になった時にでもな——)

(……)

(……)

九校戦前の懇親会は大きな波乱を感じさせるものとなったのだ。た。

九校戦編 4

懇親会の翌日は、休養日として当てられている。明日から始まる九校戦に向けて、選手たちは最終調整をするのだ。

それは魔法しかり、コンディションしかり。

技術班は担当選手のCADを最終調整するために奔走し、作戦班も最後の詰めをするので、裏方についてはあまり休めないが。

そして、その日の夜、紫音は一本の電話を受け取った。

「俺だ……ああ、完了したか。尋問は？ ……それなら俺は必要なかったな。流石に横浜まで行くのは面倒だから良かったよ。結果をいつものコードで送ってくれ」

紫音の電話相手は部下の一人である。

彼は黒羽家が有する部隊に所属しているのだが、紫音は名前も年齢も知らない。コードネームと顔だけでやり取りしている仲である。

電話を切った紫音は、デバイスを立ち上げ、アルファベット二十六文字によるパスワードを打ち込み、送信されてきたメールをチェックする。

ちなみに今いる場所は人気のない場所。生垣に扮したフェンスに寄りかかっていた。

（お、仕事が早い）

届いたメールをチェックし、添付されているファイルを立ち上げる。その際、黒羽で取り決めている暗号解析ソフトを使用し、暗号化処理を解除した。

これぐらいは基本である。

「……ジエネレーターねえ」

溜息を吐きながら読み進めるファイルには、タイトルとしてこのように記されていた。

『無頭 竜 東日本総支部壊滅の報告』

紫音は既に九校戦の邪魔となる無頭 竜を壊滅させるべく動いていた。昨日の時点で、黒羽の者から東日本総支部に所属する幹部の居場所が特定できたと連絡があった。そこで突入計画を立て、無事に制圧。

数人ほどこちら側も命を落としたようだが、幹部は全員捕獲したという。

まさか黒羽の人員に死者を出すほどの激戦になるとは思わなかったので、これには紫音も驚いた。そしてその原因こそがジエネレーターである。

「洗脳を利用し、人工的に魔法開発を行う実験の成果。理性や自己の放棄を代償に、魔法力を得る。そんなことをしていたとはな」

やっていることは四葉の実験に近い。

四葉一族の大元である、第四魔法研究所では精神干渉を利用して魔法師を強化したり、人工的に作り出す実験をしていたことがある。達也の感情を排して魔法力を植え付けたのも、その実験の一つだ。

ジエネレーターに関するデータは、後で本家に提出するべきだと紫音は判断する。

そして次に目を通したのは、無頭 竜のボスに関する部分だった。

「リチャードⅡ孫。表向きの名前は孫公明。正体不明と言われていた無頭 竜のボスがこうもあっさり判明するとは。しかもご丁寧に住所や行きつけのクラブまで書いてあるぞ……どんだけ口軽かったんだよ」

香港系犯罪シンジケート 無頭 竜の由来は、首領が全くの正体不明だったからだ。決して表に出ることはなく、用心に用心を重ねてい

るという。部下の粛清でさえ、気絶させてから部屋に連れこんで実行するというのが筋金入りだ。

普通の幹部では顔すら知らないレベルだという。

今回、これだけの情報が手に入ったのは、リチャードⅡス孫スのプライベートまで知る側近レベルの人物がいたからだだった。

「さて、戻るか……」

報告書に目を通した紫音は、デバイスを仕舞ってホテルに向かう。紫音の出場する新人戦は四日目からは言え、不用意な夜更かしはコンディションに響くので避けるべきだからだ。

しかしそのとき、紫音は高速で動く物体を観測する。

先天的特性として可視光線外の電磁波を知覚できる紫音は、赤外線を探知することで暗闇でも人の存在を察知できるので。そして、電磁波を放つ存在は、ホテルの外部から侵入してきた。

(三人か。二百メートルほど先だな)

この暗闇なら、まだ向こう側に紫音の存在は察知されていないだろう。侵入者を捕えるべく、紫音は駆けだす。どうやら侵入者は紫音と反対側に走っているらしく、中々追いつけなかった。

(昼間なら『暗黒流星群』ダークミューティアが使えるってのに……)

既に日も沈んだ時間帯だ。

このような時間帯では『暗黒流星群』ダークミューティアも使えない。そこで自己加速術式を利用し、物理的に追いつくことに決める。

普段からCADを持ち歩かない紫音は、フラッシュキャストで記憶域より起動式を呼び出し、魔法演算領域に落とし込んで魔法式を展開する。そして移動魔法と慣性緩和魔法により、紫音は目で追えなくなるほどまで加速した。

(ん? 強い電磁波?)

紫音は不意に空中で強烈な電磁波が集まっているのを観測する。どうやら電子操作系の魔法が発動しているらしい。その狙いは恐らく三人の賊だ。

つまり、紫音以外に迎撃している人物がいるということ。

目標との距離は五十メートル以上あるので、向こうの方が早い。これで決まっただろうと考え、紫音は速度を緩めつつ近づいていった。

閃光と共に雷撃が落ちて、三人の賊は倒れる。

電磁波を見たところ、迎撃したのは二人のようだった。何かを話していたようで、風に乗って微かな声が聞こえる。近づいていくにつれて、音は意味のある言語として理解できるようになった。

「お前の場合、発動している術式に問題がある。魔法が上手く発動しないのは術式が原因だ」

「何でそんなことが分かるんだよ!」

一人が叫び、いきなりのこととて紫音は驚く。

急いで近づくと、会話している人物の正体が判明した。

「達也? それに誰だ……?」

「紫音も来たのか」

『エレメンタルサイト精霊の眼』で初めから気付いていたのだろう。特に驚くこともなく、淡々と確認してくる。逆に、もう一人の方は酷く驚いていたが。

「まさか……四葉の!?!」

「四葉紫音だ。お前は?」

「I—E、吉田幹比古だよ。まさかこんなところで君に自己紹介するとはね」

「吉田幹比古……ああ、理論四位だった奴か」

「覚えているのかい？」

「名前ぐらいは」

紫音も名前を聞いて思い出す。

この吉田幹比古、原作でも重要な位置づけの人物だったはずだ。流石に顔は忘れていたが、名前を聞いて連鎖的にすべて思い出した。

古式魔法の大家、吉田家の次男であり、嘗ては神童と呼ばれる程の魔法を使っていたという。調子に乗って無茶な魔法行使をした結果、事故を引き起こしてしまい、その後から思うように魔法が使えなくなったのだ。

本来ならば九校戦に出場できるだけのポテンシャルを持っている人物である。

今は二科生に甘んじているが、達也と出会ってメキメキと実力を伸ばしていったメンバーだったはずだ。

「それで……何の話をしていたんだ？」

「達也に、僕の使う術式は無駄が多いって言われてね。吉田家は古くから続く古式魔法の家系だし、その過程で使用する魔法は研究され尽くしてきた。そう言われたら黙っていられない」

「なるほど、さっきの雷もお前の魔法だったのか」

紫音は達也が眼で解析したのだと理解した。

アイデアにアクセスし、魔法構造を一瞬で理解する異能は信じられないものがあるのだろう。また、受け継いできた魔法を否定されてしまったのは幹比古も怒って当然である。

一応、紫音はフォローを送ることにした。

「達也は説明が簡潔すぎる。だから勘違いさせるんだ」

「え？」

「古式魔法というのは、長い歴史の間で受け継がれてきた秘匿性の高

いものだ。故に起動式自体にも発動を察知されないように、隠密を目的とした回り道が組まれている。達也はそれを無駄と評したただけだろう。見た目通り、達也は効率性を好むからな」

「……なるほど」

「たとえば呪符で発動するならともかく、CADによる高速処理をするならば隠密性など意味がない。それに起動式には呪文詠唱をしていた名残が含まれているから、詠唱を妨害されないような工夫も組み込まれているんだろ？ それもCADを使うなら意味がない」

「なんだか古式のスタイルを真つ向から否定する意見だね」

「……いや、古式を否定するつもりはないけどね。ともかく、最新機器による起動式の高速処理を行うならば、無駄な起動式を削ぎ落して最適化できるって話を達也はしたかったわけだ。だろ？」

紫音が目を向けると、達也は大きく頷く。

幹比古も納得したようで、興奮も落ち着いた。

そこで達也は倒した三人の賊を指さして指摘する。

「取りあえずコレの処置をしよう。俺が見張っておくから、警備員を呼んできてくれないか？」

「あ、ああ、それなら僕が——」

「いや、それよりも先に確認することがある」

紫音が暗闇の向こう側に指を向ける。

「そこにいる三人。何者だ？」

達也ですら気付かなかったレベルの、高度な気配隠し。

幹比古も驚いて紫音の指差した方向に向くと、三人の男が姿を顕した。軍服を纏っていることから、基地の人間なのだろうと予想できる。

そして真ん中にいた男の一人が紫音に向かって話しかけた。

「流石は四葉の人間というべきか。まさか隠密が破られるとはな。参考までに見破った理由を聞いても?」

「特異体質で可視光線以外の電磁波が観測できるんですよ。赤外線を感じ取りました」

「なるほど。知覚系魔法によるものだったか。自分の隠密に問題があるわけではなくて安堵したよ。ところで、その賊はこちらで預かろう。ホテルとは言え、軍の施設に侵入した輩だ。構わないな?」

紫音は頷いて肯定する。それは達也も幹比古も同じだった。

「では預かろう。ああ、それと捕獲した経緯を聞きたいから、一人だけ残ってくれないか?」
「ならば自分が」

達也が即座に立候補したので、それで決定する。

事情聴取なら全員に聞く方が良いハズだが、なぜか軍の男は一人だけ残るように指示した。そのことで紫音は疑いを覚える。そこで、思念リンクを繋いだ。

(達也、一人だけ残れなんて怪しすぎるぞ)

(問題ない。この人は独立魔装大隊の少佐だ。俺に話があるんだろう)

(なるほど。例の風間少佐か?)

(そういうことだ)

実はこの男、達也の知り合いだった。

陸軍一〇一旅団独立魔装大隊。最新の魔法兵器の実験、開発も行う部隊であり、人数こそ少ないが戦力はかなりのものだ。戦略級魔法師である達也が所属している時点で察することも出来るが。

ともかく、それが達也の属する部隊である。

そして達也が軍籍を持つことは秘密だ。少なくとも、幹比古がいる場所では明かせない。だからこそ、紫音と幹比古をこの場から去らせたいのだ。

事情聴取というのは建前なのだろう。

「行こうか吉田」

「わかったよ……それと僕のご事は幹比古と呼んでくれ」

「そうか、なら俺も紫音でいいぞ」

そう言いながら紫音と幹比古は去って行ったのだった。

二人の姿が見えなくなり、声も聞こえなくなるほど離れた頃、風間は達也に話しかける。

「あれが四葉の跡取りか特尉？」

「正確には候補ですが」

「だが、四葉の姓を名乗らせているのは彼だけだろうか。最も当主に近いのでは？」

「本人はあまりその気がないようですがね」

「あの四葉真夜が養子を取ったと聞いた時には驚いたが……まさか俺の隠密を破るほどとはな。達也とも親しそうだったが、味方と考えて良いのか？」

風間は達也が四葉の血筋であることを知っている。そして四葉真夜との契約により、達也は軍籍を所持しているに過ぎないのだ。

だからこそ、四葉紫音という人間に興味を持った。

「紫音は味方と考えて良いでしょう。そもそも、彼が四葉を名乗るのは自分と深雪のカモフラージュですから」

「ふ……確かに、分かりやすい四葉がいれば特尉も疑われることがない」

「自分と深雪の周囲にいる脅威も独自に動いて処理してくれます。正

直、楽ですね。今回も無頭竜ノヘッド・ドラゴンの対処に奔走してくれましたから」
「こちらでもそれは確認している。だが、一か月ほど前から無頭竜ノヘッド・ドラゴンは水面下に潜り、代わりに反魔法師団体イザクトが活発になり始めた。この賊もイザクトの者だろうと予想している。事情が変わったということだ。特尉も気を付けろよ。」
「イザクト……ですか」

本来の歴史において、第一高校は会場へと向かうバスの道中で自爆テロに遭うはずだった。発動を察知させない高度な魔法によって、高速道路の対向車線から車で飛び出し、バスに激突させようとするのである。

第一高校の優秀な魔法師たちによって無事に食い止められるのが本来の歴史だった。

しかし、紫音の介入によって自爆攻撃は行われなかった。

これが意味すること。

それは無頭竜ノヘッド・ドラゴンは九校戦が始まる前に……つまり初めから動きが沈静化していたということである。

「イザクト、たとえばUSNA東海岸が発祥の過激派組織ですね。魔法師犯罪者によって被害のあった親族がバックに付いていることで有名です。中には大企業の社長などもいるそうですから、資金も豊富と聞きます」

「うむ。知っているなら説明するまでもなかったな。奴らのような過激派にとって、九校戦は格好の的になる。未来の魔法師を潰せる機会でもあるからな」

「肝に銘じておきましょう」

「こちらも可能な限り対処する。その賊はこちらで預かろう。君も戻ると良い、達也」

敢えて達也を名前で呼び、風間は踵を返す。横に付けていた二人の部下が手早く縄を取り出して三人の賊を縛り上げ、肩に担ぎあげて

去って行ったのだった。

九校戦編5

八月三日。

九校戦が遂に始まった。第一日目は本選のスピード・シューティングを男女決勝まで行い、バトル・ボードは男女予選まで終える。

これには出場した真由美がスピード・シューティングで見事な優勝を飾り、バトル・ボードでも摩利が圧倒的なタイムで決勝まで駒を進めた。順調な滑り出しに第一高校の陣営も盛り上がる。

八月四日。

二日目の競技は本選クラウド・ボールを男女決勝まで行い、アイス・ピラーズ・ブレイクは男女ともに予選まで決める。またしても真由美がクラウド・ボールで活躍し、無事に優勝した。しかし、男子部門のクラウド・ボールは結果が思わしくなかったので、快進撃に陰りが見え始めた。

なお、当然のようにアイス・ピラーズ・ブレイクへと出場した克人は決勝進出を決め、同じくアイス・ピラーズ・ブレイクに出場した千代田花音も決勝まで進むことが出来た。

予定外の敗退は悔しいが、概ね計画通り。
だが、本当の予定外は三日目に起こった。

「クソがつー」

九校戦の様子を映しているデバイスを見ながら紫音は珍しく声を荒げた。

現在、紫音は全く試合を観戦せずに一人で行動している。理由は、捕らえた無頭竜幹部から聞き出した情報にある。

(結局原作通りじゃないかよ！)

無頭竜の東日本総支部は確かに壊滅した。九校戦で手を出してくる組織が消えたことで、無事に大会を乗り切れると思っていた。

しかし、現実には甘くない。
第三者による工作によって、競技中の渡辺摩利が負傷したのだ。

（七校選手へのCAD細工、水面への精霊魔法行使……思い出せば全部原作通りだ。あの情報は正しかったってことか……）

三日目に行われたバトル・ボード決勝。
そこで事件は起きたのだ。

試合開始後は難なくトップを走っていた摩利だが、ここで後ろから追隨していた七校選手に異変が起こる。速度を落とすべきカーブで、無茶な急加速を始めたのだ。勿論、これはCADに細工されたことで起こった事件である。七校の選手が故意に加速した訳ではなかった。急加速によって摩利に衝突しかけたので、とっさの判断で摩利は七校選手を受け止める。水面をボードで走っている状態でありながら、ブレることなくターンを決めて受け止め体勢に入れた部分は流石と言えた。これで大丈夫だろうと安堵したところで再び異変は起こる。突如として水面がへこみ、そのせいで摩利はバランスを崩してしまったのだ。

結果として摩利も七校選手もコースアウトしてしまい、その際の衝撃で摩利は骨に罅が入る。間違いなく九校戦は棄権しなければならぬだろう。

これが第一高校にとって一番の予想外だった。

（反魔法師団体イザクト……無頭竜ノヘッド・ドラゴンの細工をそのまま利用してくるとは思わなかったぞ）

黒羽の部隊による尋問が明らかにしたのは、実は無頭竜ノヘッド・ドラゴンは九校戦へと手出しするつもりがなかったということである。

九校戦を利用した裏の賭博で、第一高校は非常に人気となった。優勝確実と言われるのは覆しようもない事実であり、このような分かり切った賭博では胴元である無頭竜ノヘッド・ドラゴンは大損してしまうことになる。

そこで始めは無頭竜ノイヘッド・ドラゴンも第一高校の優勝を邪魔するべく、様々な細工を一月以上前から仕込んでいた。大会の運営に組織の者を潜入させ、CADのレギュレーションチェックの際に細工を施せるようにする。バトル・ボード試合会場の水中に精霊を仕込み、遠隔で気付かれることなく水面をへこませる術式を発動できるようにする、などだ。

しかし、無頭竜ノイヘッド・ドラゴンはとある事実を知って細工の実行を止めた。それは第一高校に四葉紫音がいるということ。

香港系犯罪シンジケートというだけあって、嘗て大漢で起こった滅亡の恐怖は身に染みている。四葉一族による報復で滅びた国の話は、無頭竜ノイヘッド・ドラゴンに一つの決断をさせた。

無頭竜アンタツチャブルは、
接触禁忌に手を出してはいけない。

そこで、無頭竜ノイヘッド・ドラゴンは今回の賭博で大損することを妥協してしまう。四葉を敵に回すぐらいなら、それぐらいは安いと考えてしまったのである。そして、少しでも金を回収するために、九校戦へと仕込んだ細工の数々は、反魔法師団体イザクトへと大金で売った。

これで九校戦が中止となり、賭博自体も無くなることを願って。仮に四葉の報復を受けるとしても、イザクトへと怒りが流れるように願って。

「下手な原作知識が仇となったか……軍の基地じゃ黒羽の部隊も動かさにくいし、イザクトの動向が全く掴めない。どうする……」

九校戦一日目にこれらの追加報告を受けた紫音は、観戦を止めてイザクトの調査に奔走した。怪しい人物を見つけては思念リンクで表層意識を読み取っていくのだが、全て外れである。紫音一人しか動けない以上、これが限界だった。

そして遂に三日目。

未だにイザクトのアジトもメンバーも見つけることは出来ていなかった。

「明日の四日目からは新人戦が始まる。俺は五日目と六日目だから、動けるのは明日までだ。本気で拙い状況だぞ……」

恐らく、軍はある程度のことを認知しているのだろう。

なにせ、ここは軍事演習場なのだ。寧ろ把握できていないならば、とんだザルである。

軍に情報を貰いたいところだが、そんなものを貰えるはずがないのは紫音も理解している。十師族の四葉家とはいえ、軍とは別組織なのだ。当然である。

「二日目と二日目に大人しかったのは、様子を見るためだったんだろうな。大会委員に成りすました工員がバレていないかの確認してところか。それで、渡辺先輩の件でどれぐらい使えるのか確認したつてところだな。

だとすれば、これから被害は増えていく一方だぞ……無頭ノーヘッド・ドラゴン 竜と違ってイザクトの連中は見境がない。マジでどうするか……」

イザクトは反魔法師団体の中でも過激派で有名だ。

下手をすれば、本当に人が死ぬレベルの事件を起こしかねない。

イザクト自体は犯罪組織ではないので、過激なデモはしてもテロ行為に近いことは行ってこなかった。しかし、無頭ノーヘッド・ドラゴン 竜の置き土産によって大きな力を手に入れてしまったのである。

自分という存在のせいで原作よりはるかに危険な状況となっているのだから、なんともいたたまれない気持ちになる。

「ホテルに侵入してきた賊から情報を抜き取らなかつたのは痛いな……」

今のところはなす術がない。

『調律』を使って地道に探すほかないだろう。

逆に一人でもイザクトのメンバーが見つかれば、後は芋づる式で

あつという間なのだが。

とりあえず、摩利のことも心配だったので一校の陣営へと戻ることにするのだった。



その日の夜、紫音が泊る部屋には深雪が訪れていた。ちなみに、紫音が泊る部屋は達也の泊る部屋でもある。ホテルは二人部屋なのだが、四葉の名を恐れた同級生たちが非常に嫌がったので、技術スタッフとして参加している達也が同じ部屋になったのだ。

「今日も成果は無しか紫音？」

「ダメだな。まるで見つからない」

「では、渡辺先輩の事故も？」

「ああ、奴らのせいだ」

摩利に起こった悲劇は、一見すると七校選手のミス。

しかし、達也は水面で発動した精霊魔法に気付き、念のために解析を行った。五十里啓も手伝い、精霊魔法ということとで古式魔法使いである吉田幹比古にも意見を聞いた結果、やはりあれは第三者の手によって故意に引き起こされたものだったと断定。

達也も深雪も紫音からイザクトのことは聞いていたので、今はその報告会をしているのである。

「CADへの細工は大会スタッフに紛れた作業員の仕業だ」

「なるほど。お兄様の予想通りですね」

「一番嫌な予想だったかな」

「明日からの新人戦は達也も注意してくれ。俺の予想では、イザクトが仕掛けてくるのはモノリス・コードやミラーズ・バットだと思ってるけど……一応な」

「紫音さん、何故その二つなのですか？」

「CADに細工したとき、最もダメージを与えられるのがそれだからな。モノリス・コードはCADの細工でレギュレーション違反の魔法を仕込めば、甚大なダメージを期待できる。そしてミラーズ・バットでは、重力軽減の魔法を空中で停止するように細工すれば、自由落下で大怪我をさせられる。他の競技は安全性が極端に確保されているから難しいだろうな。渡辺先輩の件で大会委員会もバトル・ボードには細心の注意を払うようになったと思うし」

「卑劣な……！」

CADの誤作動は選手に身体的ダメージを与えるだけではない。魔法が上手く発動しなかったことによる不信感から、魔法を使えなくなってしまう可能性もある。

魔法師にとってイメージというのは意外と大切で、魔法が怖いと思うようになると、無意識化にある魔法演算領域は機能しなくなってしまうのだ。

他にも、出来ないことを出来ると思いつくと魔法事故に発展することもあり得る。これは吉田幹比古が実体験したことだ。

出来ることと出来ないことを把握し、地道に力を伸ばしていくことが魔法師として成功する秘訣なのである。

今回、イザクトがやろうとしていることは、その事故を煽るもの。深雪が卑劣と称したのは間違いではない。

「落ち着け深雪。紫音、前回のブランシユのように、直接的なテロが起こる可能性はあるのか？」

「いや、イザクトは反魔法師団体ではあるけど、反社会組織じゃない。過激なデモはあってもテロはないと思ってる。だからこそ、今回のように無頭竜ノーヘッド・ドラゴンから細工を買い取れたのは渡りに船だったんだろう

な。

如何に反魔法師団体といっても、そんな反社会的行為に準ずる細工なんて出来ないし」

「つまり、イザクトは表に出ない……あるとしても高みの見物か？」

「だから俺も『調律』で表層意識を読みながら観客席を回っている。成果はないけどな」

達也は少し黙って考える。

その優秀な頭脳で対応を模索しているのだろう。

下手をすれば深雪の安全にも関わることであり、達也としては決して見逃せないことだ。深雪のガーディアンとして、兄として、確実に深雪を守るべく思考を巡らせる。

その間に、紫音は自身の考えた案を述べた。

「正直、俺一人では手詰まりだ。あまり使いたくないが、九島老師の力を借りたいと思っている……」

「だが紫音。それは……」

「間違いなく借りを作るようになるだろう。真夜様もいらっしやっている以上、余計にな。最悪の場合は俺の異能を一部だけ披露することになるかもしれない。」

だが、老師の一声で大会スタッフを全員集め、脳波リンクで思考を一斉に読み取れば一発で工作員を把握できる。上手くいけば、『シンクロダイヴ』でイザクトの連中まで繋がれるはずだ。例え無理だったとしても、九校戦への工作は阻止できる」

しかし九島烈への借りは本当に大きい。

十師族の始まりを作り、今も尚、軍に影響力を持つ人物に借りを作るとなると、相応の返礼が必要になってくる。

そして九島烈は四葉の強すぎる力を危惧している。十師族からでさえ突出しかけている、その大きな力を削ぎ落せる機会を狙っているのだ。間違いなく宜しい事態にはならないだろう。

「……理想は工作員を現行犯で捕まえることだな」

「それが出来れば苦労はしないぞ達也」

「いや、そうでもないかもしれん。大会スタッフの中に工作員が紛れ込んでいるならば、CADに細工できるとすればレギュレーションチェックの検査機にかけている時だ。不正プログラムを挿入できる唯一のチャンスだからな」

「ああ、正確には電子的改竄によって電子機器に不具合を発生させる遅延式精霊魔法、電子金蚕^{でんしきんさん}だ。SB(Splitual Being)魔法によるものだから、通常のウイルス解析では発見できない仕様になっている。

「いや、確かに達也なら見破れるだろうけど、まさかレギュレーションチェックの場ですつと待機するつもりか？」

紫音も明後日から試合だし、達也も明日出場するメンバーの担当技術スタッフをしている。レギュレーションチェックの場で待機し続けるなど出来るはずがない。

そこで深雪がふと意見を発した。

「お兄様。それなら美月や吉田君に頼んでは如何ですか？ SB魔法

ということなら、^{フシオン}霊子を見ることの出来る美月、あとは古式に詳しい吉田君なら気付けると思えます」

「残念だけど、深雪、それは無理だよ」

「どうしてですか？」

「美月も幹比古も一校のスタッフじゃない。名目上は観客の一人なんだ。レギュレーションチェックを行う大会委員のテントに入れるはずがない」

「あ……」

最も効率的なのは間違いないが、ルール上、不可能だ。

故に取ることの出来る選択肢は限られてくる。

「……取りあえず、明日の内は俺がチエツクしよう。出場する明後日からは無理だけど、明日なら波動感知でフシオン霊子の波動を感じ取れる。検査機からCADに侵入しようものなら、俺が取り押さえよう。それに、四葉の名を持つ俺の方が周囲の説得もしやすい」

「ならば明日は頼む。俺も自分の受け持つメンバーの分は特に気を付けよう。幸いにも深雪の担当は俺だからな」

「はい。お兄様ならば安心です」

後手に回ることしかできないとは言え、今はこれが最善だ。

とりあえずは妥協することにする。

「今日はここまでにしよう。深雪も明日は試合がないとは言え、寝不足になるのは拙い」

「そうですね。わかりました」

「部屋まで送っていいこう」

既に時間は夜の十時。

高校生ということを考えれば、寝るには早いかもしれない。しかし、九校戦とは体力勝負だ。夜更かしは天敵である。

「おやすみ深雪」

「はい、紫音さんもおやすみなさい。ではお兄様」

「ああ、行こうか」

こうして大会三日目の夜も更けていったのだった。

九校戦編 6

大会四日目からは遂に新人戦がスタートする。

この時点で第一高校は三百二十ポイント。続く第三高校が二百二十五ポイントであり、第一高校は大きなリードを奪っている。三位以下が団子状態の混戦具合を見せていることを鑑みれば、第一高校がどれだけ圧倒的か理解しやすい。

しかし油断は禁物だ。

新人戦の得点は本選の半分しかないとは言え、十分に優勝を左右する。ここで三高が底力を見せれば、逆転優勝される可能性も残っているのだ。

新人戦初日の競技はスピード・シューティング決勝までと、バトル・ボードを予選まで。

スピード・シューティングには北山雫が、そしてバトル・ボードに光井ほのかが出場するので、その担当エンジニアとして達也も忙しくしていた。

ほのかの試合が午後からなので、まずは雫のスピード・シューティングである。

(どうやら問題ないようだ)

達也の眼によって雫のCADに細工がされていないか知覚できる。

誰が細工したかまでは分からなくとも、その程度ならば問題ない。

そして摩利の時のような、細工の跡は見つからなかった。

(今日のところは紫音に任せる他ないな)

思考の端でそんなことを考えつつ、まずは始まろうとしている雫の試合へと目を向けるのだった。



「凄いじゃない達也君！」

スピード・シユータイングの全行程が終わった後、真由美は達也を絶賛していた。

それもそのはず。

なんと女子スピード・シユータイングに出場した三名の各校選手が一位、二位、三位を独占したからだ。ちなみに、各競技では三名ずつ参加者を出すことが出来るので、上手くやればポイントを独占できる。(ただし、昨年度の成績から三つの高校は参加者枠を二人に限定されるので、競技出場人数は二十四名だ。最後に残った三人による変則的な決勝戦を含めると、五回勝てば優勝となる)

「……優勝したのも、準優勝したのも、三位になったのも選手の力ですよ」

「勿論、北山さんに明智さん、滝川さんも凄いわ。でも、貴方の功績も確かなものでしょう？」

「そうだぞ司波」

「渡辺先輩まで……」

達也は戸惑いの表情を見せるが、これは想像以上に凄いことだ。

雫を含めた三名は全て達也がCAD調整も作戦もプロデュースしており、選手本人の魔法力があつてこそという事実を除けば、残りは達也の功績と言える。

現に、雫も明智も滝川も同意だった。

「北山さんが予選で使った魔法は大学の方から『インデックス』に採用するかもしれないと打診が来ています」

追加で報告してきた鈴音の言葉に一同が驚く。

『インデックス』とは『国立魔法大学編纂・魔法大全・固有名称インデックス』という魔法辞典のようなものであり、これに掲載されるということは、事実上、新しい魔法を開発してしまったということになる。

高校生のレベルとして考えるならば、素晴らしい快挙だ。

大学で魔法研究をする教授たちからしても名誉と言える出来事なのである。

それが達也の開発した魔法『能動的空中機雷』アクティブ・エア・マインだった。

指定した空間を立方体で認識し、各頂点と立方体の中心に合わせて九つの震源を設置する。震源は一番から九番までの変数に対応しているので、発動者は番号指定するだけで好きな場所から破壊振動波を発生させることが出来るというものだ。

スピード・シユールディングの競技内では、これによって一度に複数のクレーを同時破壊し、あつという間に百個のクレーを破壊し尽くした。

振動系を得意とする雫の魔法出力があつてこそと言えるが、この発想は面白い。

応用すれば、自身を中心とした振動による範囲攻撃も可能となるだろう。

そういう意図があつて新魔法の登録へと至ったのである。

しかし、達也は表情を変えることなく鈴音に答えた。

「そうですか。では、開発者名の問い合わせには雫の名で返答ください」

「そんなのダメー！」

これにはいつも無表情の雫ですら慌てる。

「あれは達也さんのオリジナルなのになんで！」

「新種魔法の開発者名として最初の発動者が載ることは珍しくない」

というのには建前である。

達也の正体は天才魔工師トールスⅡシルバーだ。プロレベルで活躍できる能力を持った達也が高校生であること自体、反則のようなものだが、これは良しとする。

ここで言いたいのは、達也がトールスⅡシルバーであることを隠す必要があるということだ。少なくとも、新魔法を開発した時点でただの高校生ではないと思われることだろう。大企業からの勧誘程度ならまだしも、魔法師の名家が達也を身辺調査し始めるかもしれない。その過程でトールスⅡシルバーのことがバレると拙いのである。

いや、トールスⅡシルバーのことだけなら、まだ問題は浅い。しかし、魔法科大学の調査力によって達也が四葉の人間であることが判明するのは最も拙い。

如何に紫音がフォローに走っているとは言え、迷惑はかけないに限る。

そんな理由から拒否したのである。

また、開発者に雫を推したのはこれだけが理由ではない。

「自分は確かにこの魔法を組み立てましたが、発動できるわけではありません。仮に実演を求められたとして、発動できなければ恥をさらすことになりますから」

「……発動できない魔法をどうやって動作確認したんだ？」

「全く使えないわけではありませんよ？　ただ、自分の魔法演算領域では処理しきれず、発動に時間がかかり過ぎるだけです。ただ『使える』とは言い難いですね」

摩利は揚げ足を取るように問い詰めるが、達也は淡々と返すだけ。これ以上は険悪になると思ったのか、真由美が間に入った。

「まあまあ。今はそんなことで口論しなくていいじゃない。達也君も、この調子で他の選手たちのことも見てあげてね!」

達也は当然と言った様子で頷き、摩利も取りあえずは納得する。

そして午後に達也が作戦担当するバトル・ボード予選でも、ほのかが決勝へと駒を進めたのだった。

なお、この日の夕方には多方面から称賛を受けることになり、達也としては非常に居心地が悪くなったのは言うまでもない。だが、深雪は自分のことのように喜んでいたので、達也としてもそれで良しとするのだった。



大会は五日目となる。

そして新人戦は二日目だ。

今日はクラウド・ボール、そしてアイス・ピラーズ・ブレイク予選が行われる。ちなみにアイス・ピラーズ・ブレイクは大量の氷を用意する必要があるので、準備のために午後からとなる。まずは午前中にクラウド・ボールを決勝まで終わらせるのだ。

そして、今日、遂に紫音の出番がやってきた。

「あの、大丈夫ですか四葉君?」

「多分……少し寝不足なもので」

控室で欠伸をしながら紫音は答える。

昨日はレギュレーションチェック用の大会テントで一日中、見張りをしていた。結果として作業員を見つけることは出来なかったため、完全な無駄骨である。更には辛うじて動かしている極少数の部下が纏めた報告書を読んでいたため、夜も遅かった。

それ故、眠いのである。

ちなみに、紫音に付いているエンジニアは中条あずさということになっていて。本当は紫音も達也が良かったのだが、あまりにも達也が人気だったので辞退した。

そして紫音はCADを全く使わない。

実質、担当者はエンジニアである必要すらなかった。

「よ、四葉君は本当にCAD無しでも大丈夫なんですか？」

「はい。邪魔ですから」

「十文字先輩との試合を見てなかったら信じられませんでしたよ……」

担当があずさな理由はここにある。

紫音は全くCADを使用しないと決めていたのだが、普通の者から見れば異常に映ることだろう。そこで、理解のあるあずさが担当になったのである。決まった当初は彼女も涙目だったが。

「多少の睡眠不足程度でコンディションが崩れるほど軟ではありませんよ」

「でも、四葉君はクラウド・ボールに続いて午後からアイス・ピラーズ・ブレイク予選もあるんですよ？ 大丈夫なんですか？」

「魔法の使用は最小限で決めますから。クラウド・ボールもアイス・ピラーズ・ブレイクも」

しかし、サイオン量の少ない紫音としては非常に困った事態だった。

基本的に、紫音は一発一殺の魔法を重視している。習得している戦闘用の魔法は、全てそれに傾倒しているのだ。サイオン量が少ないゆえに、短期決戦を強いられているからである。具体的には、紫音のサイオン量から換算すると、百の魔法発動で辛くなる。

つまり、九校戦は紫音にとってかなりの鬼門である。

まず、スピード・シューティングなど論外だ。一度の試合だけで百近い魔法を使う以上、優勝を狙うならば五百発の魔法発動が必要になる。紫音のサイオン量ではとても無理な話だ。

次にバトル・ボードだが、これも持久力が必要になる競技なので論外。

モノリス・コードは四葉の名を恐れてチームが組めないので除外。消去法でクラウド・ボールとアイス・ピラース・ブレイクになったのである。

この二つならば、最小限の魔法で優勝できる秘策があるため、紫音はこの二つを選択した。本当ならば一つの競技だけにしたかったのだが、四葉の名を持つ以上、それは許されない。

必ず二つの競技に出場し、優勝しなければならぬのだ。

懇親会で真夜にも発破をかけられたので、余計にそう思う。

「ほ、ホントに大丈夫なんですか……?」

「大丈夫ですから……」

こうして精神統一する時間はあずさを宥める時間として潰えたのだった。



紫音のクラウド・ボールを見るべく、達也たちは試合会場へと早めに足を運んでいた。四葉が出るという期待からか、既に会場一杯に観客が詰まっている。

席が確保できたのは運が良かったからだった。

「はあく。こりやすつげーな」

「会長の試合もそうでしたけど、やっぱり十師族というのは期待されているんですね」

レオの感心に美月も同意する。

それはエリカや幹比古も同じだった。

「四葉君が魔法使ってるところなんて初めて見るからちよつと楽しみかも」

「僕も少しだけ話したことあるけど……魔法を見るのは初めてだね」

「え？ ミキって四葉君と話したことあんの!？」

「僕の名前は幹比古だ!」

そして達也は深雪とほのかに挟まれ、解説役としてその場にいた。

「お兄様。紫音さんはどのような魔法を使われるのかご存知ですか?」

「ああ、聞いてはいる。光波振動系を使うということらしい」

「え？ 加速魔法じゃないんですか?」

「クラウド・ボールなのに振動系魔法?」

ほのかと雫が首を傾げたので、達也は表情を緩ませつつ競技用コートに目を向けた。そして第一試合から出場する紫音を眺めつつ口を開く。

「見ていれば分かるさ」

深雪、雫、ほのかだけでなくレオ、エリカ、美月、幹比古も紫音に注目する。競技用のスポーツウエアを纏い、右手にはラケット。装備はそれだけだった。

「え？ CADは？」

その事実気付いたのはほのかだった。

クラウド・ボールは、低反発ボールを魔法もしくはラケットで打ち返し、相手のコートに落としたりポイントになる。二十秒ごとにボールが最大九個まで追加されるので、三分間の試合において、ラスト二十秒は忙しい戦いになる。

仮にボールがコートで跳ね返らず落ちた場合も、拾って打ち返して構わない。九個のボールを如何にうまく使い、ポイントを稼ぐかが重要だ。

そして男子クラウド・ボールではこれを五セット繰り返し、三セット先取で勝利となる。

しかし、ラケットだけを手に、CADを所持しないスタイルは初めてだった。

確かに、CADを持ち込まなければならないというルールは存在しないので、持ち込まなければ選手のミスとして処理される。だからルール上はCADを持っていなくても問題ない。

「まさか忘れた？」

「おいおいおい……」

エリカとレオも呆れたような目を向ける。

しかし、達也は冷静に答えた。

「そうじゃない。紫音は元からCADを試合で使うつもりはない。

ボールは全てラケットで打ち返すと言っていたぞ」

「え？ そんな強引な方法なの!?!」

「なんでも百年ほど前に流行った『テニヌ』というものをしてみたいらしい」

「なにそれ」

「俺も分からん。だからエリカも気にするな」

「ええ……」

一つもCADを持たない紫音は、クラウド・ボールが行われるコートの中へと入っていった。対戦する相手は八高の選手であり、こちらはラケットを使わず魔法だけで対処するらしい。魔法力とサイオン量に自信があるのだろう。

CADを持っていない紫音を見て首を傾げていたが。

「始まるぞ」

達也の言葉と重なって試合開始のブザーが鳴る。

そして、まずは紫音の側に低反発ボールが打ち出された。黒羽として鍛えていた紫音は、当然のようにボールへと追いつき、力を込めてラケットで打ち返そうとする。低反発仕様なので、かなりの力を込めなければ相手のコートに届かないのだ。

そして八高の選手は紫音を侮っていた。

何の変哲もない、ただの打球。

加重術式によって打つ動作が補助されている様子もないため、そこそこのスピードしか出ないだろうと油断してしまった。四葉と言っても期待外れだと錯覚してしまった。

だが、次の瞬間に異変は起こる。

ラケットにボールが触れた瞬間、ボールが彼の視界から消えた。

「え?」

動体視力に自信のあるエリカは目を見開く。

ボールが消えて困惑する達也以外のメンバー。ついに二十秒が経過し、次の追加ボールが発射される。

それも紫音がラケットで打った途端、消えてしまった。

「あの、ボールは……？」

「まあ、見ておけ美月」

美月の困惑は正当なものだ。

しかし、達也は黙って見ておけという。

すると、一番初めのボールが消えて三十四秒後、つまり先ほどボールが追加されて十四秒後に、ようやく消えたボールが姿を現した。

——八高の選手のコートで転がりつつ。

達也はそれを見て不敵な笑みを浮かべつつ一言呟く。

「あれが紫音の秘策。最小限の魔法で勝利するために使用した『消える魔球』だ」

九校戦編7

$$h \parallel p \lambda$$

量子力学においてこのような式がある。

h とはプランク定数(6.63E-34)であり、 p は運動量(質量と速度の掛け算)、 λ は波長である。この式が意味する事象はとても興味深く、目に見える物質の不確かさを教えてくれる。

結論から言うが、この式を読み解くと、全ての物質は波動であるということを表しているのだ。

例えば、電子だ。

電子の質量は非常に小さく、よって運動量も非常に小さい。そして $h \parallel p \lambda$ の式に当てはめると、ある程度の波長が算出できる。つまり、電子とは粒子であると同時に波なのだ。

これは電子における粒子と波動の二重性として有名である。

だが、これを運動量の大きなボールで計算するとどうなるのか。運動量が大きいということは、小数点以下34桁という恐ろしく小さいプランク定数を考えると、波長 λ は限りなくゼロに近い値となる。つまり、殆ど波動として機能しないレベルということだ。

人間がボールを波動ではなく物体として認識するのは、波長が限りなくゼロに近いからである。

「——というのは知っているか？」

「それぐらいは知ってるぜ。今時の高校生からすれば常識だろ」

「うわ、レオがそれを言うの？」

「うるせえぞエリカ！」

達也は唐突に量子力学の物質波について説明をし始めた。いわゆるド・ブロイの式である。

そしてこのような説明を始めた理由は、これこそが紫音の使った『消える魔球』の正体を表すものだからだ。

「紫音はクラウド・ボールで使われるボールの持つ物質波の波長へと、周囲の光の波長を『調律』した。ボール表面に到達した光は、限りなくゼロに近い波長へと強制的に書き換えられ、ボールを自然透過してしまう。いや、透過というよりも馴染むと言った方が正しいか。限りなくゼロに近い波長をもつ光という、物理的に不可解な状態が一時的に保存され、光子としてボールをすり抜けてしまう。そしてボールを透過すれば、光は事象の復元力によって元の波長に戻るという仕組みだ」

「だからボールが消えて見えたんですね。ボール表面で光が反射しない以上、私たちの目には反射光が認識できませんから」
「その通りだよ。よく分かったね深雪」

達也が解説している間にも、紫音はボールをラケットで打ち返しては視界から消す。透明になったボールは数秒後に相手のコートに転がり、数十秒後に姿を現す。逆に八高選手は何をすることも出来ない。

初めから八高側に出されたボールならば、ベクトル操作で紫音のコートへと打ち返せる。しかし、紫音はフラッシュキャストで自己加速術式を使い、一瞬で追いついてラケットでボールを八高側に打ち返していた。

八高選手もなんとか透明化が解けたボールを紫音のコートへと打ち返しているが、その度に紫音は打ち返してボールを消し、相手コートに転がす。低反発ボールなので、力加減をすれば、床で跳ね返らず転がってしまうのだ。これによって、八高選手が拾うまでの時間を稼いでいる。

紫音が使ったのは光を物質波の波長まで『調律』することで対象を透明にする『透明化』という術式。そして自己加速術式だけだ。しかも、『透明化』によってボールは不可視となり、八高選手は全く反撃できない。

ちなみに、この『透明化』だが、ボールのようにシンプルな形状ならば魔法演算も楽なので、発動時間も長くなる。ボールが相手コート

に落ちた後も三十秒以上は透明なままなので、速攻の反撃も出来ない仕様となっている。

別の意味で一方的な試合だった。

あつという間に三分が経過し、紫音の完勝となる。

「勝っちゃいましたね……CADなしで」

「うわ。あれはドン引きかも」

美月とエリカは頬を引き攣らせている。

途中から八高選手も泣きそうになっていたが、残る二セット目と三セット目も紫音が奪い取り、第一試合は一高が制したのだった。

「紫音はサイオン量がかなり少ない。本人の申告では、一般魔法師の平均を下回っているそうだ。だからこそ、あのような戦い方が必須らしい」

「す、すごいです！ 私も光波振動系が得意なんですけど、あれほど使いこなすなんて無理です！ 私もあんな魔法が使えるんでしょうか？」

「落ち着けほのか」

「ほのか落ち着いて。お兄様が困ってらっしゃるわ」

「はっ……ご、ごめんなさい。つい興奮してしまっ……」

「気持ちに分かるが、ほのかには難しいかもしれないな。紫音は光波に限らず、音なんかも自在に操れるそうだ。波長や振動数の事象改変については他の追隨を許さない強度を持っている。あれ程の事象改変能力なら『ニブルヘイム』や『インフェルノ』といった超高等魔法も使えるかもしれない」

そんなことを言いつつも、達也は紫音がそんな魔法を通常時では使えないことを知っている。紫音の魔法演算領域は光波や音波などを操ることに特化しているので、分子振動による熱への干渉はあまり得意ではないのだ。

試合終了後、八高選手は膝から崩れ落ちていた。何もできずに敗退したのだから、悔しきは人一倍だろう。

「心が折れちゃってるかもね。カワイソー」

「珍しく意見が合うねエリカ。僕も八高に同情するよ」

「エリカちゃん……吉田君……」

美月が呆れたように声をかけると、エリカも幹比古も目を逸らす。だが、会場全体の雰囲気としても八高選手へと同情する目が多かった。

「さて、深雪に雫。そろそろアイス・ピラーズ・ブレイクの準備に行こう。午後からは言え、そろそろ最終調整をした方がいい」

「わかりましたお兄様」

「うん」

とりあえず紫音の試合を見た達也は立ち上がり、深雪と雫も続く。

その後、ほのか、レオ、エリカ、美月、幹比古の五人は残って観戦したのだが、やはり『透明化』を使う紫音が一度打ち返すだけで次々と試合を決めて、あっという間に決勝進出。

赤外線でも、エックス線でも、電波でも観測不能な『透明化』では、知覚系魔法があっても絶対に対応できない。

事象改変の大きさから維持時間が短い——単純な形状ならば三十秒以上、複雑な形状かつ激しく動き回る対象ならば一秒未満——という弱点はあるものの、数秒で相手コートにボールが届くクラウド・ボールにおいては全く意味をなさない弱点だった。

最終的には決勝戦の二試合も難なく勝利し、見事に優勝を決めたのだった。



昼休憩で一高陣営に戻った紫音は、主に先輩から称賛を受けた。特にサイオン量が少ないことを認知している作戦スタッフ陣からの称賛が強かった。

「お見事でした四葉君」

「ありがとうございます市原先輩」

「ホントに凄かったわ！ あんなの初めて見たわよ」

「七草先輩もありがありがとうございます」

紫音がクラウド・ボールで使用したのは自己加速術式と『透明化』のみ。そして紫音が打ったボールは一度も打ち返されず、一方的に試合を運ぶ。

クラウド・ボール史上、前代未聞の記録と言えた。

同じクラウド・ボールで優勝した真由美は、運動量を二倍で跳ね返す『ダブル・バウンド』のみで勝利をしたのだが、こちらとはまた違った凄さがある。

「午後のアイス・ピラーズ・ブレイクも問題なさそうですか？」

「魔法を三回使う程度なら問題なさそうですね」

「三回……？ まさか一度の魔法発動で勝負を決めるつもりですか？」

「はい」

アイス・ピラーズ・ブレイクは予選のみ行うので、今日だけで三回の試合を行う。つまり、三度の魔法で勝ち抜くと言うことは、一回の試合で一回の魔法しか使わないということだ。

勿論、紫音はアレを使うつもりである。

「折角の機会ですから、四葉を名乗る所以と言える魔法をお見せしますよ」

「それは楽しみです。司波さんたちの試合も興味があったのですが、私はそちらを見学させていただきましよう」

「あ、リンちゃんズルい！ 私も四葉君の試合を見たいのに！」

「早い者勝ちです」

「いや、好きな方を見に来ればいいじゃないですか……」

早い者勝ちも何も、観戦には別に制限などない。

見に行きたければ、勝手に来ればよいのである。

そこに腕を布で吊るした摩利も一言付け加えた。

「しかしアイス・ピラース・ブレイクなら明日の決勝が一番盛り上がるだろうな。恐らく三高からは『クリムゾン・プリンス』が出てくるぞ」「一条将輝ですね。一家には『爆裂』がありますから、アイス・ピラース・ブレイクに出てくるのは確実と言えるでしょう」

『爆裂』は液体を一瞬で気化させることによる膨張で対象を破裂させる。つまり、氷を倒すことが目的のアイス・ピラース・ブレイクでは圧倒的な力を振るうことが出来るのだ。

ルーピキャストを使用すると仮定して、『爆裂』を使えば一つの氷柱を潰すのにかかる時間は平均コンマ五秒となる。つまり、六秒ほどで一条将輝の勝利となるわけだ。

氷柱に情報強化を施したとしても、『爆裂』にはそれを抜く技法が組み込まれている。元から一条家は生体干渉というテーマがあるので、魔法師が無意識に纏っている情報強化を破り、体内の水分を爆発させるために研究をしている。

対人戦闘においては『爆裂』ほど殺傷に向けた魔法も中々ない。

本来ならばレギュレーション違反となる高威力魔法『爆裂』も、氷を破壊するだけのアイス・ピラース・ブレイクでは解禁される。

「誰がどう見ても優勝間違いなしと言われてるのが将輝なのだ。」

「それでもなお、四葉君は優勝できますか?」

「当然ですよ。僅か十二個の氷を破壊するのに六秒もかけるような雑魚相手では話になりませんね」

「そ、そうですか……」

言葉は自信たっぷりなのに、妙に真顔な紫音を見て鈴音も動揺したらしい。

摩利と真由美も呆れていた。

「本当に規格外だな」

「四葉君が味方で良かったと心底思ったわ」

「母上殿が見ていますからね。無様は見せられませんよ」

九校戦は九島烈だけでなく、あの四葉真夜も見ているのだ。どれだけ注目されているのかよく分かる。

そして最も注目されるだろうと思われるのが、四葉と一条の戦いだ。

大会委員は、試合を最も盛り上げるために、決勝戦で紫音と将輝がぶつかるようにと試合カードを組んでいる。つまり今日はまだ将輝と相見えることもない。

観戦するならば明日が一番だろう。

一高陣営でも、殆どの二年生三年生は明日の試合は見逃せないと話していたのだから。

「そろそろ選手控室に行きます。予選一回目は第二試合ですが、念のため」

「そうね。あーちゃんも行ってらっしゃい」

「はい! といっても私は何もすることないんですけどね……」

紫音はそう言ってあずさを伴いつつ、一高陣営を後にしたのだった。



九校戦を観戦する際、全国のファンの中でも富豪と呼ばれる者たちは、特別な観戦室を用意される。彼らは九校戦を支援するスポンサーであり、VIPなのだ。

だが、九島烈はそれとはまた違ったVIPである。

魔法界における長老とも言える存在に、適当な部屋を与える訳にはいかない。強化アクリル樹脂製の大きな窓から会場を見渡せる席を用意されていた。

そしてそこには四葉真夜も同席しており、嘗ての師弟で魔法の談議をしつつ、観戦していたのである。

「また、お前の子が出るようだな真夜」

「ええ、そのようですね。あの子はサイオン量に問題を抱えていますから、持久力が必要な競技は避けたのでしよう」

「確かに、あのような魔法を有するなら、何百という魔法を使うスピード・シユータイングや魔法維持でサイオンを消費するバトル・ボードに出るより、クラウド・ボールに……と考えるのは分かる。しかしアイズ・ピラーズ・ブレイクも持久力が必要だと思いがね？」

「普通はそうでしょう。ですが、あの子は使うつもりですよ。『夜』の力を」

「クラウド・ボールでも驚かされたが、アレで本気ではないのか。楽し

みにしておこう」

アイス・ピラーズ・ブレイク第一試合が終了し、今は新しい氷柱を並べて次の試合準備を行っているところだ。そして第二試合こそが紫音の出番。

老師は年甲斐もなく気分を高揚させる。

「しかしお前に息子とは驚いた」

「分家筋からの養子です。血縁上は私の子と言えませんが、使用する魔法は私を彷彿とさせるものです」

「あの子が『流星群』ミステイア・ラインを使うのかね？」

「発動過程も、見た目も『流星群』ミステイア・ラインとは異なります。ですがその効果はまるで私の力を引き継いだかのように思えるものですよ」

「皮肉なものだな。司波の兄妹ではなく、別の分家の者がその力を得るとは」

烈は当然のように達也と深雪のことも知っている。

そしてこの場には烈の側近と呼べるものが一名、そして四葉家筆頭執事の葉山しかいないので、隠すべき秘密も平然と語られていた。

「あら、達也さんも深雪さんも分家の子ですよ？」

「とはいえあの二人は深夜の子供たちだ。血の繋がりで言うならば、最も近いのはあの二人だろう？」

真夜からすれば、達也と深雪は甥と姪にあたる。

それに対して紫音は従弟である黒羽貢の息子という位置にあるので、血縁上は達也と深雪の方が近い。烈の言葉も尤もである。

「ふふ。遺伝などそのようなものでしょう？　ただ、今の紫音は私の

息子です。最も四葉の血に愛された私の息子」

「血に呪われた、の間違いではないかね」

「あら、幾ら九島先生でも聞き捨てなりませんわね」
「それは失礼したな」

烈は四葉の力を危惧している。恐れているといっても過言ではない。

ただの魔法師一族が、嘗て国を滅ぼしたことから、烈を臆病だと罵ることは出来ないだろう。

しかし、それは烈の勘違いである。

今の四葉一族は弱体化していると言つてよい。大漢を滅ぼした時、四葉一族にも死者はいた。優秀な四葉の魔法師は殆ど死んでしまったので、今は巻き返しを狙っている時期と言つて良い。

紫音のような、少数精鋭の強力な魔法師によって力が保たれているのが今の四葉一族なのだ。真夜としては決して烈に手を出させるつもりなどないし、その他の介入を許すつもりもない。

こうして紫音を表に出し、真夜自身が九校戦へと赴いたのもその一環である。

「さて、始まるぞ」

話を切つた烈は興味深げな視線を向ける。

その視線の先では、ステージに上がった紫音の姿。予選一回目の試合は五高の選手が相手のようである。

フィールド両サイドにある赤いランプが点灯し、黄色に変わった。そして青のランプになった瞬間、試合は始まる。

——そして終わった。

「ほう」

烈は思わず感嘆を漏らしてしまう。

試合時間、僅かに一秒。

ランプに青が灯されると同時に、五高選手の陣地を暗黒が蹂躪した。分類上では光波振動・収束系魔法『暗黒流星群』ダークミューティア。光を一方向にのみ進むよう、事象改変することで、あらゆる物体を貫通する。

無数の暗黒がラインとなって降り注ぎ、一秒で十二の氷柱全てを破壊した。

「真夜の力を『夜』と評するなら、これは『闇』。確かに似ている」「そうでしょうか？」

圧倒的な力の前には全てが平伏す。

紫音は僅か一度の魔法で一試合目を突破。

残る予選二試合も、一発ずつで勝利を収めた。

初めの宣言通り、最小限の魔法で圧倒的な勝利を叩き出したのである。試合を見た誰もが、その様に四葉紫音を恐れた。

あれこそが『魔王の子』であると。

九校戦編 8

紫音の試合を見て第一高校が沸き上がった一方、他校では意気消沈していた。それは一高のライバルになり得ると言われていた第三高校も同じである。

本選に出場する二年生や三年生はともかく、新人戦で戦う一年生は暗い表情だった。

「あれが四葉なのかよ……」

男女含めた第三高校の一年生は一部屋に集まり、唸っていた。彼らの前には大きな画面があり、そこには紫音の試合光景を映している。特に彼らを唸らせたのはアイス・ピラース・ブレイクで見せた『闇』だった。

正式名称、光波振動・収束系魔法『ダークミューティア暗黒流星群』。新たに『インデックス』へと掲載されることになった魔法である。勿論、使用者は紫音しかない。

通称、『闇』。

九島烈がそのように称したことで広まった俗称である。

『セカンド・デヴァイル魔王の子』想像以上だったね」

「ああ、だが負けるわけにはいかない」

その中でも、二人だけはまだ戦意を喪失していなかった。

一人は吉祥寺真紅郎。きちじょうしんくろうカードイナル・ジョージとも呼ばれている彼は、『基本コード』を発見したことで有名だ。

加速・加重、収束・発散、放出・吸収、振動・移動の四系統八種には、それぞれの現象を司る正負の魔法的コードが存在すると言われ、吉祥寺真紅郎はこの中の『加重プラスコード』を発見した。当時十三歳ということもあり、有名になった話である。

そしてもう一人が一条将輝。いちじょうまこと一条家の跡取りにして、三高新人エー

ス。またの名を『クリムゾン・プリンス』。

明日の決勝戦で紫音と戦うわけであり、恐るべき『闇』を正面から打ち破らなければならぬ本人である。十師族の一員ということもあり、怖じ気づくわけにはいかないのだ。

「十二の氷柱を砕くのにコンマ三秒未満。これに対して将輝は最速でも四秒。もう気合では埋めきれない差があると思つていい。『爆裂』を十二同時にパラレル・キャストできるなら別だけど……」

「正直な話、無理だな。いつものCADならともかく、競技用のものじゃ、処理が足りない」

「だと思つたよ。それに、彼は恐るべきことにCADを一切使用していない。自前で魔法式を展開しているんだ。とんでもない相手だよ」

吉祥寺はやれやれと言つた様子で溜息を吐く。

そんな将輝を見て、一人の女子生徒が声を荒げた。

「ちよつと！ そんな覇気のないままでいいの!？」

「ま、まあ落ち着いてよ……」

「そうだぞ。事實はしつかりと受け止めるべきだからな」

一色愛梨。十師族ではなく、師補十八家の一つだ。

十師族と師補十八家を合わせた二十八の魔法名家は、家名に一から十までの数字が含まれており、ここから選ばれた十の家が十師族として君臨することになる。なお、十師族は必ず一から十まで揃つていないのだが、現在は丁度、一から十まで綺麗に並んでいた。

ちなみに、十一以上の数字が家名に入っている魔法師一族は百家と呼ばれており、師補十八家と合わせて『数字持ちナンバーズ』と呼ばれている。百家は、例えばエリカの千葉家などもこれにあたる。

そして一色は師補十八家といつても、その血統は十師族と同等だ。一年生の中でも相応の実力と発言力を持っている。

「四葉なんかには負けるんじゃないわよ！ 気合で勝ちなさい！」
「そんな簡単に言うけどなあ……」

将輝としても、今年の新人戦アイス・ピラーズ・ブレイクは確実に優勝だと考えていた。

しかし、ここで現れたのが四葉紫音。

クラウド・ボールで謎の透明化魔法を見せただけでなく、新たに『闇』という力を見せつけた。『魔王の子』という二つ名は相応しいものだと言える。

既に一条将輝と吉祥寺真紅郎の頭からは、一高エンジニア司波達也のことなど抜けていたのだった。



大会六日目。

アイス・ピラーズ・ブレイク決勝戦は男女ともに多くの観客が押し寄せていた。

まず、女子アイス・ピラーズ・ブレイクの目的は当然の如く司波深雪である。実は決勝に進む三名を第一高校が独占してしまい、大会委員からは三人を同時優勝にする提案がされていた。

明智英美あけちえいみこと通称エイミーは体調不良を理由に賛同したのだが、雫と深雪は白黒つけたいとのこと。そこで、エイミーを三位とし、雫と深雪による決勝戦を行うことになったのである。

高出力振動系魔法による『共振破壊』で攻める北山雫。

『インフェルノ』という超高等魔法を披露した司波深雪。

その戦いに誰もが興味津々だった。

勿論、その美貌を目的とした人物も多くいたが。

一方で男子アイス・ピラース・ブレイクは十師族の対決ということもあり、こちらも多くのお客様と関心を集めていた。同じく決勝リーグに進んだもう一人の選手は肩身の狭い思いをしているだろうが、それも仕方がない。ただ、既に午前の試合で二人に負けているので、もはや出番すらない。

なにせ、世間一般的に見ても、決勝とは『魔王の子』と『クリムゾン・プリンス』の戦いなのだから。

「ところで、あーちゃん先輩」

「私をあーちゃんと呼ぶのは止めてください！」

「お菓子とか食べます？」

「無視ですか!? 無視なんですね!? だから私を子ども扱いするのは——」

そして紫音は超余裕だった。

それはもう、あずさを弄り倒せるぐらいには余裕だった。

弄り過ぎて地味に仲良くなってしまうほどである。既にあずさも紫音のことは怖がっておらず、割と齒に衣着せぬ言葉で言い返すほどになっていた。

「——って、聞いているんですか!？」

「聞いていますよ。聞いた端から抜けていますが」

「それって実質、聞いていないってことじゃないですか——っ!」

面白すぎる。

紫音はそう思った。

じゃれてくる子犬と遊ぶような感覚である。

「おっと、そろそろ時間のようですね。では行ってきます」

「ま、また無視ですか!? 私って先輩なんですよ!?!」

「知ってますよ、あーちゃん先輩」

「だから私は中条あずさですー!ー!ー!」

そんな叫び声を背に、紫音は控室を出たのだった。

特に迷うこともなく通路を歩いていく。その道中では真面目な表情で考え事をしていた。

(やはりイザクトはまだ手出しして来ないか。予想通り、狙い目はモリス・コードとミラージ・バット。明日は注意が必要だな)

紫音のミッションは色々とある。

一つは司波達也という超優秀なエンジニアが目立たなくなるぐらい、圧倒的な力を見せつけることだ。二つ目に四葉の力をアピールし、養子とは言え真夜の息子ということを知らしめる。

これは日本だけでなく海外にも向けたアピールなので、これから後は紫音を調べたり誘拐しようとするスパイも増えることだろう。また、より優秀なスパイが派遣されると思われるので、紫音はそれを捕えて各国に関するディープな情報を根こそぎ奪い取る。

そして今回の九校戦で一番大事なのがイザクトの企みを阻止することである。

達也を暴走させないためにも、深雪の安全の確保は大事だ。

紫音にとっても深雪は大切な友人であり親戚なので、防げる事故は防ぎたい。ミッションの中では一番重要と言えるだろう。

もはや紫音にとって将輝に勝つのは片手間の話でしかない。

真剣に戦おうとしてる将輝……哀れである。

「四葉紫音選手ですね。こちらです」

ステージに上がる所で大会スタッフに最後のチェックを受ける。これは大会規定にかかわる不正を犯していないか、ということ調べ

るからだ。後は服装のチェックもしている。

このアイス・ピラース・ブレイクは特に動き回る競技でもないの、ある程度は服装の自由が認められている。公序良俗に反する服装でなければ、自分にとって気合の入る恰好で構わないのだ。

そしてその公序良俗に反していないかも知れなくもチエック項目に入る。

紫音は何の面白みもない一高制服なので、無難に通り返されたが。

「では、頑張ってください」

「どーも」

手を振って送り出す大会スタッフを背に、紫音はステージに昇るエレベーターに乗った。アイス・ピラース・ブレイクのステージには、下からせり上がる形で登場する。

向かい合い、お互いの顔を確認し、眼下の氷柱を意識する。

これがアイス・ピラース・ブレイクの始まりだ。

「一条将輝か」

「四葉紫音……」

お互い、声が聞こえる距離ではない。

だが、口の動きでそれぞれの放った言葉は理解できた。

決勝リーグは三人による変則的なものになる。決勝リーグ進出を決めた他の選手と一回ずつ試合を行って優勝、準優勝、三位を決定するのだ。

決勝へと駒を進めていた二高の選手は紫音と将輝によって瞬殺されているので、今から行われる試合こそが真の決勝戦。

紫音は右手を翳し、将輝は赤い特化型CADを構える。

そして将輝は、吉祥寺の言葉を思い出していた。

『ジョージ。どうすれば勝てると思う？』

『防戦……だね。四葉紫音は一秒以内で勝負を決めてくる。勝つには

その一発目を耐えなければ話にならない……と思う』

『情報強化でいいのか?』

『難しいだろうね。あれだけの威力だし、専用の対抗魔法が必要かもしれない。多分、情報強化では確実に破られる。領域干渉でも無理かもしれない』

両脇のランプが赤から黄色へと変わる。

『ならどうする?』

『うん。もう負けても良いんじゃない?』

『は?』

そして青色が灯り、試合が開始された。

紫音と将輝は同時に魔法を使用する。

特異魔法……つまりBS魔法に近いゆえに、魔法演算領域が専用最適化されている『調律』は、瞬きよりも早く発動する。

上空から黒い光が閃き、将輝が魔法式を展開する頃には全ての氷柱を破壊した。

ブザーが鳴り、勝負は決したことを知らせる。

ここまで一方的な試合を見せた紫音に、将輝は悔しそうに唇を噛みつつCADを下ろしたのだった。

『負けるなら負けるでいいじゃないか。これも経験だよ』

『ジョージ……』

吉祥寺の言葉を思い出し、将輝は敗北を認める。本番になれば何とかなるかもしれないという一縷の思いも、ここで砕けた。

そもそも、魔法は根性だけで何とかなるものではない。

負ける要素は初めからあったし、逆に勝てる要素は一つもなかった。

しかし、将輝は完全敗北だとは思わない。

「次は勝つ……！」

自分より上の存在がいるなら、超えるまで。

一条家次期当主として、敗北したままではプライドが許さない。
将輝は最後にそう言って、ステージから退場したのだった。



一高陣営に戻った紫音は、当然の如く称賛の嵐を受けた。あの一条を相手にして完勝。それは士気を高める上でも大きなことである。

特に喜んでいたのは、珍しくも十文字克人だった。

「よくやったぞ四葉」

「どうもありがとうございます十文字会頭」

「どうした？ 優勝したのに浮かないようだが」

「少し……別の心配事もあるもので」

まだ確保が終わっていないイザクトのことを考えていたので、紫音は勝者とも思えぬ表情を浮かべていた。周囲からすれば、何が不満だったのかと問いたいほどである。

しかし、克人としても思うところがあったのか、軽く注意を促した。

「何を心配している。四葉が心配する理由も分からなくはないが、今はそれを考える時ではないだろう。四葉は勝利した。それも圧倒的

な力でな。それが今の全てだ。

勝者は胸を張れ。

それが勝った者の礼儀だ」

威風堂々。

克人にはそんな言葉が似合うだろう。

言葉の一つにすら、そんな力が込められているように感じる。

摩利の負傷が第三者からの妨害による不正なものである可能性がある
ある、という事実は、当然ながら克人も知っていた。つまり、摩利で
終わらず、他にも妨害工作を受ける可能性は残っている。紫音の言う
心配事も察していた。

それでも尚、今は新人戦男子アイス・ピラーズ・ブレイクの優勝を
喜ぶべきだという。

紫音も克人の言葉を受け入れることは難しいと考えたが、取りあえ
ずは一段落したことを喜んで良いかと思えた。

「そうですね。ひとまず、勝ったことを喜ばせて頂きます」

「そうしろ。それに四葉は今日の段階で試合を終えたのだ。あとは俺
たちに任せろ。あれだけの戦いを見せてくれたのだから、俺たちも負
けるわけにはいかない」

克人は九日目と十日目で本選モノリス・コードに出場する。

新人戦で見せた十師族・四葉家の力は、同じ十師族・十文字家の力
をも象徴することになるだろう。十師族は格が違うと思わせるに十
分な材料となる。

「そういえば、女子の方はどうなったんですか？ まだ結果を知らな
いのですが」

「む？ どうやら司波妹が勝ったようだ。北山も善戦したようだが、
やはり地力で敵わなかったようだな。お前といい、司波といい、今年
は本当に逸材揃いだ」

「お褒め頂き光荣ですね」

「謙遜するな。現に、お前たちのお蔭で新人戦は優勝が濃厚だ。勿論、総合優勝もほぼ確実と言っている」

実は、紫音がクラウド・ボールとアイス・ピラース・ブレイクで優勝したことにより、本来の歴史よりも多くの点数を稼いでいた。この時点で新人戦優勝も総合優勝も目前の域まで迫っていたのである。

「では素直に受け取ることになしましょう。あとは十文字会頭も頑張ってください」

「うむ。期待に応えてみせよう」

紫音にはまだやることがある。

いや、試合が終わったからこそ、本格的にやらなければならないことがある。

そのために……イザクトの計画を潰すために再び動き出すのだった。

九校戦編 9

九校戦は七日目となった。

今日は新人戦ミラージ・バットを決勝まで行い、モノリス・コードは予選をする。

ちなみにミラージ・バットは午前中を四人同時の予選、そして六つの予選から勝ち上がった六名が午後の決勝を戦うことになる。他の競技と異なり、一度に多数の選手が出場する競技なので、選手から見ればたったの二試合で済むのだ。ただし、ミラージ・バットは一度の試合でフルマラソンにも匹敵するほど体力を消費すると言われてるので、二試合でもかなりキツイ。

『跳躍』の術式で何度も飛び上がれば疲労するのも当然だが。

そしてミラージ・バットでは第一高校から出場するのは光井ほかかと里美スバルの二人だけ。本来なら三人の出場権を持つ第一高校だが、苦渋の決断で深雪は出場を止めたのだ。

理由は、棄権した摩利の代わりに本選ミラージ・バットへと出場するからである。二年生や三年生に混じっても優勝を狙えると期待されている一方、出場者の深雪には負担がかかる。それでも出場を決めたのは、やはり達也がバックに付いているからだろう。

そして再び摩利のような犠牲者を出さないためにも、紫音はCAD検査用テントで見張りをしていた。

(……眠い)

欠伸を噛み潰しながら^{フシオン}霊子の波動に注意する。^{でんしきんさん}電子金蚕という精霊魔法によってCADを細工していることは判明しているので、精霊を紛れ込ませる唯一のチャンスと言えるCAD検査機を見張っていたのだ。

レギュレーションチェックをする機械を利用するとは考えたものだが、これに気付かない大会側も思ったよりザルである。大きなスポンサーも集める大会であるにもかかわらず、そして使用施設が軍のも

のであるにもかかわらず、このような醜態をさらしているのでは色々と先が思いやられた。

(あー……気を抜くと見逃しそうだな)

正直、大会中に色々と動き回ったりした挙句、昨日の試合もあつて紫音はかなり疲れていた。油断すると立ったまま眠りそうになるほどである。

理想としては工作人員を現行犯で抑えること。

決して言い逃れ出来ない状態ならば、警察ではない紫音にも逮捕権がある。取り押さえた状態なら、『シンクロダイヴ』で多くの情報を根こそぎ奪える。

(もう一つの目的のためにも、電子金蚕でんしきんさんはこの眼で見えておかないとな)

正確には眼で見えるのではなく、脳で知覚していると言った方が正しい。波動を知覚する異能は、アイデアを介しているので、死角で発生した波動すらも感知できるからだ。

そして特典で貰った記憶力増大によって、波動のパターンすらも写真のように記憶できる。

(ん……う?)

そして紫音の波動知覚能力が、靈子フシオンの波動を感知した。特定波長パターンを有する塊が、第四高校のCADに侵入するのをハッキリと感じたのである。

(記憶したぞ。電子金蚕)

CAD検査機を利用して四高のCADに電子金蚕を侵入させた大会スタッフの顔だけでなく、電子金蚕の波動パターンもしっかりと記

憶した。

だが、紫音はここで大会スタッフに扮した作業員を抑えることなく泳がせる。

ただ、心の中で呟いた。

(悪いな森崎。幹比古を表に出す必要があるんだ)

基本的に秘匿技術である古式の精霊魔法。

それを公然と見ることの出来る機会を逃すわけにはいかない。紫音は今後のために、敢えて今回の細工を見逃すことにしたのだった。



大会委員会は騒然となった。

モノリス・コード予選、一高と四高の試合。

廃ビルの中にスタート地点を設定された森崎たち三人の一高選手は、試合開始直後に奇襲を受けた。しかも室内で発動するとき、殺傷ランクA指定となる『破城槌』によって、である。

まず、試合開始直後に魔法攻撃を受けたということは、四高のフライングが疑われる。さらにレギュレーション違反の魔法を使用したことも含めれば、言い訳の余地もない。

これによって森崎駿を始めとした選手三人が重症となった。

「計画通り……!」

速報をテントで聞いた紫音は早速行動を開始する。

すぐに紫音は四高CADに細工をした検査スタッフへと近づき問いかけた。

「少し宜しいですか？ 先程、四高CADを検査したことについて聞きたいのですが」

「な、なんだね君は！」

四高のレギュレーションチェックを担当したスタッフは驚いて大きく後ずさろうとした。

だが、紫音は即座に腕を掴んで逃げられないように押さえる。

「聞きたいことがあるので待ってくださいませんか？」

「な、なにをするんですか!？」

「四高のCADに細工しましたか？」

「濡れ衣だ！ 僕は何も知らない！」

スタッフの男は周囲に訴えかけるように、わざと大きな声で否定する。それを聞いた近くの警備員も、異常だと考えて近寄ってきた。

そして、状況を見て紫音を取り押さえるべきと判断する。

しかし、紫音はそれを無視して一言告げた。

「嘘はダメだろう？」

「がっ!？」

腕を捻りつつ足払いを仕掛け、あっという間に転ばせて男の肩を固める。これには警備員たちもあわてて近寄り、紫音を引き剥がそうとした。

「待ちなさい。一高の生徒だね。暴行は止めるんだ」

「少し黙ってください」

「いや、しかしだね……」

確かに、一見すると、モノリス・コードにおけるルール違反を見た一高の生徒が逆上して大会スタッフへと暴行を加えているように見える。警備員が止めるのも当然だ。現に、このテント内にいた他の学校の生徒たちも遠巻きに見ているのだから。

そこで、紫音は冷静な口調で淡々と説明した

「反魔法師団体の工作人員を確保しました。名前は池崎純一郎、三十四歳です。大会スタッフへと紛れ込んでCADチエック機器を利用し、精霊魔法による電子機器介入魔法、電子金蚕でんしきんさんを使用したと思われま

す。背後関係を洗った結果、彼と同じ工作人員は他に六名。名前は中山伸介、北条昭雄、大島竜二、小谷宗太、美輪良平、佐々木恭子ですね。まあ、これらは大会スタッフに紛れ込むための偽名ですが」

「な……」

既に紫音は『シンクロダイヴ』を発動し、男の記憶を読み取っている。

無頭ノーヘッド・ドラゴン 竜からイザクトへと細工自体は売り渡されたが、買い取った細工を実行したのはイザクトが雇った者だ。当然、イザクトの潜伏地も記憶から読み取れた。更に言えば、彼と同じく大会スタッフへと紛れ込んでいる工作人員も判明したのである。

それが事実であることは、動揺する男を見れば明らかだった。

「香港系の犯罪シンジケートから入手した電子金蚕でんしきんさんは全部で十回分。その内一つは犯罪組織が元から計画していた方法を流用して使用。そして六回分をミラージ・バット新人戦の決勝で使用するつもりでしたね？」

確かに、『新人戦』の『女子』競技で大きな事故が起これば、魔法師社会に大きな打撃を与えることが出来るのは間違いないでしょう。九校戦という大きな大会での出来事なので、揉み消すことも出来ません。これによって魔法の危険さを訴えることが反魔法師団体イザク

トの目的ですね？

そして残り三回分の電子金蚕でんしきんさんは十師族が選手として出場していないモノリス・コードの試合で使用し、魔法戦闘がどれほどの惨事を生むのかを強調。流石に十師族に手を出すほど愚かではなかったようですが、これはとんだ自作自演ですね」

紫音は読み取った計画を淡々と述べていき、周囲を味方につけていく。これほど具体的に男の素性や計画を口に行っているのだから、紫音の言葉は信憑性が高い。

更には、新人戦クラウド・ボールとアイス・ピラーズ・ブレイクで大きな活躍を見せた紫音は、顔もかなり知れ渡っていた。つまり、周囲も紫音が十師族……さらには四葉家の人間であることを理解していたのである。

こういう時は家名の力に感謝だった。

「警備員の方々、すぐに中山伸介、北条昭雄、大島竜二、小谷宗太、美輪良平、佐々木恭子の六名を捕えてください」

「いや、しかし……」

「証拠が必要ですか？」

如何に十師族の言葉といえど、鵜呑みにして捕らえることは出来ない。

警備員たちは苦々しい表情で紫音から目を逸らした。

そこで紫音は地面に倒して取り押さえていた男、池崎純一郎から手を放す。そして立ち上がり、警備員の方へと向き直ってから改めて述べた。

「ではこの男を身体検査してください。どうやら、証拠となる電子金蚕でんしきんさんを残りの八回分全てを所持しているハズですよ」

CAD検査機は大会テントに一台だけだ。選手の数もそれほど多

くないので、一台だけ導入している。つまり、CADへの工作は一人で十分ということだ。だから電子金蚕でんしきんさんも今は彼一人が所持している。CAD検査機の担当を他の作業員と交代するとき、電子金蚕でんしきんさんが保存された器も受け渡すことで、好きなタイミングで工作できるということだ。

そしてスピード・シューティングやクラウド・ボール、アイス・ピラーズ・ブレイク、バトル・ボードで殆ど行動を起こしてこなかったのは、単純にCAD検査機を担当するシフトの関係だったらしい。

電子金蚕でんしきんさんの数の上でも、担当シフトの上でも全ての試合で工作するのは不可能だったので、上手くシフトでミラージ・バットやモノリス・コードの試合の時を担当できるように調整した、というのが真相だったようだ。

「ぐっ……クソッ！」

紫音が真実を述べたことで言い逃れ出来ないと悟ったのだろう。手を離れた隙に、男は逃走を図ろうとした。

しかし、これは自分に後ろめたいことがあると語っているようなもの。

優秀な大会警備員が一瞬で取り押さえ、紫音の言葉通りに身体検査をする。

すると、魔法的な封印が施された、明らかに怪しい電子デバイスが見つかった。恐らく、この中に電子金蚕でんしきんさんを封じているのだろう。

「これは……」

「大会委員の魔法師を呼んで調べさせろ！」

「了解しました」

「それと残る六人もすぐに捕まえて大会本部に連れて行くぞ」

証拠らしき品を見つけたことで警備員も本格的に動き出す。

これにはテント内にいた学生たちも騒然としていた。大会で有名

になった紫音が暴れただけでなく、大会の威信にも関わるような事件性を匂わせているのだから当然である。

公然の場で『シンクロダイヴ』すら使用してしまったのは拙いかもしれないが、まだ誤魔化せる範囲内である。

(あの程度だったら『頑張って調べた』で押し通せるだろ)

紫音にしては杜撰な考えだが、実際にこれぐらいなら誤魔化せる。何しろ、四葉の人間である紫音がそう言ったのだから。十師族はそれだけ発言力のある一族なのである。

この光景を見ていたのも学生や少し魔法に詳しい程度の大会スタッフだけであり、『調律』の力がバレることはない。

流星に老師クラスの人物がいたら拙かっただろうが。

そして池崎——これは偽名だが——を捕まえた警備員は、次に紫音へと声をかける。

「申し訳ないが、大会本部まで来てくれないだろうか？ 事情を聞きたい」

「構いません」

「顔色が悪そうだが大丈夫かな？」

「少し疲れているだけです」

紫音はそのまま警備員と共に大会本部テントへと向かうのだった。



大会本部テントに到着したとき、そこには運営委員の他に、十文字克人と七草真由美がいた。大会スタッフに紛れ込んでいた職員によつて、第一高校の一年生三人が重傷を負ったのだ。そういう意味でも、二人がこの場に居るのはおかしいことではない。

だが、それは建前であり、今は十師族の一員としてこの場に集っていた。

「十文字会頭に七草会長も呼ばれたんですね」

「うむ。少し事情を聞いたが驚いた」

「四高の不正だとは思っていなかったけど、まさかこんなに早く証拠が出るなんてね」

既に職員は七名全員が捕まっており、事情聴取という名の尋問が行われている。電子金蚕でんしきんさんという物的証拠がある以上、言い逃れは不可能だと思われるが。

なにせ、電子金蚕でんしきんさんを封じていたデバイスに七名全員の指紋が付着していたのだ。これで無関係ですとは言いかねる。

そしてしばらくすると、同じ十師族の一員として呼ばれた一条将輝が現れた。彼はどうして呼ばれたのか把握しておらず、紫音、克人、真由美の姿を見てギョツとする。特に、紫音に対しては睨みつけるようにしていた。

なので紫音は問いかける。

「どうかしたか一条？」

「いや……何もない。だが何のために集められたんだ？ どうやら十師族が集められているみたいだが」

「その通りだ一条将輝。大会委員長が来てから詳しい話が始まるそうだが、その前に少しだけ状況を説明しよう」

紫音の代わりに克人が答え、簡単な経緯を説明する。

大会委員に反魔法師団体の工作員が紛れ込み、CADに細工した恐れがあるということ。それが原因で四高のCADから『破城槌』が起動され、一高の生徒が重傷を負ったこと。

そして紫音が証拠となる電子金蚕でんしきんさんを発見し、犯人を取り押さえた上で協力者も見つけたことも語った。

将輝はそれを聞いて驚き、怒り、不快感を示す。

「舐められたものだな……」

「その通りだ。だからこそ、俺たちが集められた。大会委員長殿から説明もあるのだろうか」

克人がそう言つてテントの入口へと目を向けると、丁度そこに九校戦の大会委員長が走り込んできた。額の汗をハンカチで拭っていることから、相当急いだのだろう。息も少しばかり切れている。

「も、申し訳ない。待たせてしまつて」

大会委員長は本部テントの奥へと四人を案内し、そこにある椅子へと腰掛ける。四人もそれに続き、更に真由美は音を遮断する魔法を張り巡らせた。

盗聴対策である。

そして五人は、大会のこれからについて話し合いを始めるのだつた。

九校戦編10

話し合いにおいて、まず初めに行われたのは現状確認だった。

細工を行った七人の身元、そして今回の事件の黒幕と言えるイザクトについて、細工に使用された方法、最後に九校戦の大会スタッフにそのような人員が紛れ込んでいたことへの謝罪である。

大会委員長一人の責任とは言い難いが、このような時に責任を取るのが彼の仕事である。

そして、どうするべきかという相談のために十師族が四人も集められたのだ。

ここで老師や真夜が呼ばれないのは、単純に怖いからだろう。

そして相手が学生ならば、どうにか誤魔化せるという意識が透けて見えた。

(ま、その考えは甘いだろうけどな)

紫音はそんなことを考えつつ克人の方へと目を向ける。

話を一通り聞いた克人は、一度頷いたうえで意見を述べた。

「まず、今回の件について、遺憾の意を表明させていただく」

「も、申し訳ない……」

「そしてこれ以上の細工がないか、そして不審人物が紛れ込んでいなかを徹底的に洗い出して貰いたいと思う」

「それについては当然です。これ以上の失態は重ねられない！」

九校戦には日本全国の富豪も観戦のために集まり、スポンサーとして大金を出している。もはやこれ以上の失態は有り得ないし、中止などもつての外だ。

正直、重傷者が出た時点で新人戦モノリス・コードは中止の方向へと持っていく予定だった。だが、スポンサーたちの意向により、第一高校を抜きにして予選が進められることになったのである。その折

衝もあつて大会委員長は遅れたのだつた。

ちなみに一条将輝は試合が終わったところであり、そのせいで事故は把握していても、その真相までは分かっていたいなかった。

「モノリス・コードにつきましては、とりあえず第一高校を抜きにして進めております。裏があるとはいえ、惨事を起こした第四高校は失格とさせていただきました。そして第一高校も棄権という形になるかと思ひます、はい……」

「ふむ。大会側としての意向は理解した。だが、こちらは被害者だ。新たな選手を出すということで新人戦モノリス・コードに出ることは可能ではないのか？ 元はと言えばそちらの責任だろうか？」

「しかし第四高校も被害者です。失格にした以上、第一高校だけを特別にするのはどうかと……それにモノリス・コードへと出場できるメンバー自体、調達できるのですか？ あれは寄せ集めで勝ち上がれる競技ではありません」

「それは当然理解している。相応のチームを用意しよう」

毅然とした態度を崩さない克人を見て、大会委員長は第一高校にだけ、特例でチーム替えを認めることに決める。

本来なら、一度提出された出場メンバーは変えることが許されない。仮に怪我をしたならば棄権をするのが常道だ。それに照らし合わせれば、第一高校は棄権という形を取るはずだった。

しかし、今回は明らかに大会側の不手際である。

真実を知らない観客側としても、第四高校の不正によって強制退場させられたと映ることだろう。

特例でメンバーを変えること自体は不可能ではない。

そこで、大会委員長はせめて利を得ようと、克人に要求する。

「なら、第一高校がモノリス・コードのチームを再編する場合、四葉殿を必ず加えて頂きたい」

これには紫音だけでなく、真由美や将輝も驚いた。

何故なら、既に紫音はクラウド・ボールとアイス・ピラース・ブレイクに出場しているのだから、出場限界である二種目を消化しきっているのだ。優秀な選手の使い回しは、普通認められない。

だが、大会委員長からそれを破るように促したのだ。

驚くのも当然である。

克人も目に見えた動揺はなかったが、これについては肯定しかねた。

「四葉は既に二種目をこなしている。流石にそれは難しいのでは？」

「いえ、メンバー交代自体が特例なので今さらです。それならば、滅多に見ることの出来ない四葉一族というのを見てみたい観客は多くいらつしやいます。特例を許す以上、それぐらいの譲歩やサービスは必要ではありませんか？」

「確かに一理ある意見だ。しかし、他の高校から見てもどう映る？ 四葉は二つの競技で圧倒的な力を見せた上で優勝した。それはここにいる一条将輝も理解しているだろう」

「ええ。そうですね」

将輝は克人の問いに苦々しい表情で答える。

つまり、紫音という強すぎる手札を三度も使うのはズルいのではないかということだ。ここにきて三枚目のジョーカーが飛び出てくるなど、他校からすれば悪夢でしかない。

たとえ観客は良くても、選手側としては認められないだろう。

しかし、大会委員長も引き下がらない。

「どうにかありませんか？ 例えば三人チームの中に能力の低い者を

入れるなどという方法でバランスを取ったりは……」

「……一条はどう考える？」

「は？ 自分ですか？」

「そうだ。今は十師族としてではなく、選手の一人として意見を述べ

どである。

尤も、出場を断る本当の理由は違うが。

これには大会委員長も頭を抱えた。

「こういうわけですから、四葉を出すのは難しいでしょう。彼以外でメンバー替えをさせて頂きたい」

「九校戦は公正であるべきです。そう思いませんか？」

克人と真由美の言葉に、大会委員長は項垂れた。

確かに、紫音を出せば高確率でモノリス・コードも優勝できるだろう。少なくとも入賞は間違いないハズである。そうすれば第一高校が有利になるのも間違いはない。

だが、克人と真由美は過剰な優遇で優勝を掴みたくはなかった。

三連覇のかかった今年だからこそ、文句のつけようがない勝利を飾りたい。

だから、克人と真由美は紫音の出場をかたくなに拒んだ。

「わかり………ました………」

最終的には四葉紫音の出場を諦める。

だが、克人は大会側の不手際を強調してメンバーの入れ替えだけは勝ち取ったのだった。



「クソクソ……クソがつ！」

九校戦が行われている富士の演習基地。

そこにある軍施設の一室で、とある人物が怒りに燃えていた。

「落ち着け真壁大佐」

「これが落ち着いていられるか！ 細工は失敗し、工作人員も捕まった！ イザクトの考えに賛同してくれた同志を七人も失ったんだぞ！」
「分かっている。だが怒るだけではどうしようもないぞ真壁」

今回の黒幕とも言うべき組織、イザクト。

過激派反魔法師団体であり、多数の国で人間主義を掲げている。魔法という不自然なものに頼らず、人らしくなるうというのがメインの主張だ。しかし、過激派であるイザクトは、魔法師育成機関の前で過剰なデモ行進をしたり、魔法師への資金援助——CAD購入費など——を行う政府に抗議したりと、かなり活動が激しい。

中には実力行使で魔法師に暴行を加え、警察に御用となったメンバーもいるほどである。

そして、イザクトのメンバーは軍の中にも入り込んでいた。

「ふざけやがって……クソが！ 四葉のガキが！」

最も怒り狂っているのが真壁景義大佐^{まかべかげよし}。かつて魔法師による放火事件により妻子を失った経験を持つ。それゆえに魔法師を嫌い、イザクトに賛同していた。

「声を抑えろ真壁大佐。ここだって防音じゃない」

そう言って諫めるのが、軍医の春日部瑛太^{かすかべえいた}。口調は冷静だが苦々しい表情は変わらない。幼い頃、魔法による怪我の治療を受けた母親を失ったことで魔法師を恨んでいる。正直、彼の母親は魔法での治療す

ら難しい段階だったので、完全な逆恨みだ。

しかし、それでも恨まずにはいられないので、せめてもの反抗としてイザクトに所属している。

「その通りだ。忌々しいのは同意だがな。真壁も今は耐えろ」
「く……」

そして最後の一人が山根宗一郎やまねそういちろう中尉である。階級としては真壁よりも山根の方が低いのだが、二人は同期の友人なので、プライベートでは呼び捨てにしている。

真壁、春日部、山根の三人が今回の黒幕として動いていたイザクトのメンバーだった。これに加えて七人の工員、更に九校戦前夜にホテルへと侵入しようとした三人を加えれば、動いていたメンバーはこれで全てになる。

そして三人は軍に所属していたので、工員を紛れ込ませるのも楽だった。

更に九校戦前夜にホテルへと侵入してきた賊は、内部犯であることを誤魔化すための策。適当に侵入させた後、引き揚げさせることで内部から目を逸らさせる予定だった。

残念ながら達也と幹比古によって捕まってしまったが。

「どうする？ もはや九校戦に手出しする方法は皆無だぞ？」

「いつそ爆弾でもあればな……」

「馬鹿か。九校戦には魔法師じゃない人間も来るんだぞ？ 巻き込まれたらどうする？」

「魔法を見て喜んでるんだ。同罪だろ」

人間主義を掲げるだけあって、イザクトを含めた反魔法師団体は一般人を巻き込むテロまではしない。勿論、テロを辞さない反社会組織も存在するが、あくまでもイザクトは言葉によって訴えかけることをモットーにしているのだ。

ただし、表向きは。

メンバーの中には魔法師を直接排除すべきと唱える者もいるので、絶対とは言えない。元から過激派の組織なので、そのような人物が集まってしまうのだ。

この三人の中では真壁が一番の過激派だった。

「待て真壁。それよりも気にするべきなのは捕まった奴ら経由で俺たちのことがバレるかもしれないってことだ」

「山根中尉の言う通りだ。今はこちらの身も危うい状況なんだぞ。まさかCADへの細工に気付かれるとは思わなかったからな……舐め過ぎだったかもしれない」

山根は友人として、そして三人の中では一番の冷静さを持つ春日部は客観的な分析を以て真壁を諫める。しかし、それは既に遅かった。

荒々しく扉が開かれ、武装した数名が真壁、春日部、山根を取り押さえる。

「が……く、そ……」

真壁は必死に暴れて逃れようとするが、武装した一人がCADを操作する。すると、真壁の背中に凄まじい重圧が加えられ、動けなくなった。加重系統魔法である。

そして無事に鎮圧したころ、一人の男が部屋へと入ってきた。

「ご苦労」

『はっ！』

その男は真壁もよく知っていた。

陸軍の中でも優秀な魔法師として名を馳せている一方、優秀な上司に恵まれなかったせいで昇進が遅れている人物。

『大天狗』、かぜまはるのぶ風間玄信少佐である。

秘匿されている所属としては、陸軍一〇一旅団独立魔装大隊。そして彼がその隊長である。

「貴様……風間ア！」

「残念だよ真壁大佐。今回の件に君たちが関わっているのは既に突きとめている。職権乱用による九校戦への意図的介入、及び殺人未遂、暴行未遂……こんなところか」

風間は魔法を利用する部隊の隊長として九校戦の観戦へと赴いていた。そして、もう一つの目的として達也もある。独立魔装大隊には達也も所属しているので、上司として様子を見に来たのだ。

達也は秘匿級魔法『ミスト・デイスパージョン雲散霧消』を有する魔法師でもある。

技術スタッフとは言い、公的な魔法大会に出場するのだ。秘匿すべきものを見せていないかという監視の意味もあった。勿論、達也がそのようなことをするとは露ほども思っていないが。

「証拠も殆ど出揃っている。明日、午前零時の時点で貴殿らの軍籍は破棄され、法的措置によって拘留所へと送られることになるだろう。覚悟をすることだ」

「風間ア！ 貴様には分からんのだ！ 魔法とは悪だ！ 諸悪の根源だ！ 魔法師を擁護し、あまつさえ補助までする今の日本は絶対に許せん。これは——」

「黙れ真壁！ 言い訳は聞こう。だが高校生を巻き込んだ事実が変わらん」

風間は達也から、軍の者が今回の件に関わっていると聞いて驚いた。そして同時に怒った。

国を守るはずの者が、高校生に対して復帰不可能になるほどの怪我を負わせるところだったのだ。これは許せることではない。

ちなみに、『シンクロダイヴ』でイザクトの黒幕を掴んだ紫音が達也に情報を伝えたことで、風間まで情報が回ってきたのだ。流石に紫音

も軍の者を問答無用で捕まえられるほど権力を持っているわけではない。

今回に関しては伝手を頼ったのである。

「連れていけ」

突き放すような風間の一言で三人は連れていかれる。

こうして、九校戦の影で一つの事件が収束したのだった。

九校戦編 1-1

一段落したと連絡を受けた紫音は、ホテルのベッドで眠ることにした。九校戦に真夜が現れたり、予定外の敵が出現したりと大変だったのだ。『調律』がある以上、ストレス性の疲労はないが、身体的な疲労は溜まっていく。

達也にも言われたことで、ようやく休息の時を持ったのだった。

一方、達也は達也で困惑していた。

「自分がモノリス・コードに……ですか？」

「その通りだ」

克人が鷹揚に頷き、肯定する。

新たに第一高校から選手を選ぶことになった時、克人は達也を指名した。既に選手交代という特例がある以上、二科生で技術スタッフの達也が出てても今更だ、というのが彼の主張である。

この場には真由美の他に、動けるまで回復した摩利も居たので、説得が本気であることが窺えた。

「自分が出場すれば、一つの競技にしか出ていない一年生にも精神的なしこりを残すことになると思うのですが？ 例え大会側が認めても、一高内では不満を持つ者が多いでしょう。先輩方がそれを理解していないとは思えませんか？」

しかし達也は遠回しに拒否する。

実戦に近い魔法競技である以上、達也はある程度の活躍が出来ることだろう。しかし、余計なしがらみを避けたい達也としては、この件を受けたくはない。

なので辻褄を合わせるかのように、次々と理由を述べていく。

「特例が許されるなら紫音はどうですか。それこそ、技術スタッフの

自分が出るより、三度目の出場を許可する方が受け入れやすいでしょう？　なにより、紫音の實力は誰もが知っています」

「残念だけど、それはダメよ。四葉君は強すぎる。これは他校から見てもズルいと思われかねないの。今回の件を利用して事を有利に進めたなんてケチをつけられるのは御免だわ。だから四葉君は出せない」
「そもそも、四葉とチームを組んでくれる奴もいないからな。少なくともあたしは知らない」

例え紫音がモノリス・コードに出るとしても、チームの問題がある。未だに紫音を怖がっている生徒は多いので、まともなチームになることはまずないだろう。

それは達也も理解できた。

「紫音のことは分かりました。ですが、それなら自分に白羽の矢が立った理由が分かりません」

「司波は単純な魔法競技よりも実戦形式の方が力を発揮できるだろう？　寧ろ、他の生徒ではいきなりモノリス・コードに出るのは難しいぞ」

「渡辺先輩。モノリス・コードも立派な魔法競技ですよ」

「揚げ足ばかり取るな。あたしはそういうことを言いたいんじゃないんでだな……」

どうにもこうにも達也の説得は難しい。

なんとかしてはぐらかそうとしてくるのが真由美と摩利にも分かった。

だが、ここで克人が厳しい口調で達也を咎める。

「甘えるな司波」

その目はまっすぐに達也を見つめていた。

「お前は二科生だからと……そんな理由を述べてはいるが、少なくとも俺はそんなものは関係ないと思っっている」

その言葉には確かな重みがあった。

「ここにいる以上、お前は一年生二百名から選ばれた二十一名の内の一
人、技術スタッフとか選手とかの区別は関係ない。お前はここに第一
高校の代表として来ているのだ」

二科生で補欠ということを理由にするな。

克人が言いたかったのはそういうことである。

そもそも、二科生制度自体、嘗て第一高校が新生の急な追加募集
をしたことが始まりだった。当時は百人だった枠が倍の二百人に増
やされ、成績順で二つに分けられることになったのである。その際、
制服の発注ミスで追加募集の百人分はエンブレムがなかった。

これがのちに曲解されてブルームとウイードになったに過ぎない
のだ。

克人は、これも意識改革だと言っているのである。

それも一科生への改革ではなく、二科生に対するものだ。

お前たちは決して何もしない補欠ではないと示したのである。

「司波の出場は第一高校のリーダーである七草が決めたことだ。そし
て補佐を務める俺と渡辺も許可を出した。リーダーの決定に逆らう
ことは許されない。

甘えるなよ司波。

そして逃げるな。

代表としての義務を果たせ」

克人が伝えたいことは達也にも理解できた。

補欠であることに、弱者であることに逃げ道を見出すなど言ってい
る。

如何に感情の薄い達也であっても、ここまで言われては逃げる気も起きない。

「了解しました。義務を果たします」

達也の新人戦モノリス・コード出場が決定したのだった。



九校戦の八日目。そして新人戦の最終日。

この日は再編した第一高校のチームが残る予選二回分を行い、予選を終了させる。そして決勝トーナメントを行うのだ。

モノリス・コードは変則的なリーグを採用している。

予選で四試合行い、勝利数の多い四チームが決勝トーナメントへと進めるのだ。既に第一高校は四高のルール違反による不戦勝があり、その前に一勝していたので、残る予選が二試合ということである。

相手は二高と八高。

達也はどちらにも勝つつもりだった。

「あ、勝ちましたね」

「うむ。期待以上だ」

そして達也は見事に勝利を収めた。

これで予選は四勝となり、その内の一つが不戦勝であることを加味して二位通過となった。ちなみに一位通過は一条将輝と吉祥寺真紅

郎がいる三高である。こちらはストレートに四勝したので、文句なしの一位通過だった。

そして決勝リーグに進出する残り二つは八高と九校。

先程の予選で八高とは戦ったばかりであるため、第一高校は準決勝を第九高校と試合する。そして第三高校は第八高校との試合だ。

恐らく、次の準決勝も問題なく勝ち上がれると思われる。

そんな試合を紫音と克人はスクリーン越しに眺めていた。

「司波は戦い慣れているように見える。昨日の今日という無茶を要求したが、まさかこれほどまでに応えてくれるとはな」

「チームメイトの残り二人も優秀ですね。あれ、ホントに二科生なんですか？」

「そうらしいな」

達也がチームとして選んだのは西城レオンハルト、そして吉田幹比古である。レオは硬化魔法を得意としており、肉体をフル活用した戦闘方法が目立つ。モノリス・コードは直接攻撃が禁止されているので、その自慢も生かされないかと思われたが、達也は意外な解決策を持ってきた。

その名も『小通連』。

剣の形をした武装一体型デバイスであり、硬化魔法によって刀身を飛ばすことが出来る。そもそも、硬化魔法とは物体の相対位置を固定するというのが定義であり、これを分子に適応すると硬くなる。

だが、その定義を拡大解釈すると、もつと大きな物体でも位置を固定できるのだ。

そこで、『小通連』は刀身を飛ばして硬化魔法で位置を固定し、手元に残った部分を振り回すことで、飛ばされている刀身も自在に動かせるという魔法だ。

そしてモノリス・コードでは質量体を飛ばして攻撃することは許可されている。

ルール違反にはならず、レオの肉体を生かせる寸法だ。

もう一人のメンバーである幹比古は、元から高いポテンシャルを秘めている。そもそも、なんで二科生にいるのかすら分からないほどの実力者だ。元は魔法事故によって一時的に上手く魔法が使えなくなっていただけであり、達也の指導もあって自信を取り戻した。

先の予選でも古式魔法特有の隠密性を利用し、奇襲を仕掛けて戦場を掻きまわした。更には精霊との『感覚同調』によって視覚を共有し、遠距離からモノリスに記されているコードを打ち込んで送信するという荒業までやってのけた。

克人が唸るのも頷ける手際の良さである。

「決勝トーナメントの開始は正午でしたか？」

「その通りだ。まずは三高と八高の試合だから、司波たちの出番はもう少し後だな」

「よほどのことがない限りは三高が上がってきますよね」

「そうだろうな」

「となると、決勝は辛そうですねー。何せ『プリンス』が相手ですし」

「ふ……司波たちが九校を倒すのは確定事項か？」

「少なくとも、自分はそう思ってますよ。達也は魔法を使うことにおいて群を抜いています。そしてチームメイトにも、上手く魔法を使う方法を教えているようですし」

「老師の言葉か……その点においては一科生の奴らも司波を見習って欲しいものだな」

実戦を経験している者であるほど、魔法の使い方重点を置く。魔法師にとって魔法が使えるのは当たり前のことであり、後は戦いにおいてどのように工夫するかが重要になるのだ。

紫音の場合、サイオン量の関係で魔法の連続発動は得意とは言えない。

『ダークミューティア暗黒流星群』も何百と撃てる魔法ではなく、戦闘中に使うならば数十回が限界だ。粘っても百回までだろう。

だからこそ、一撃で多数の相手を仕留めることに特化させた。

突き詰めた結果、CADが必要なくなるほどに一部の魔法だけを極めてしまったが。戦闘で使う魔法はフラッシュキャストで発動できるが、そうでない魔法は普通にCADを使うこともある。尤も、魔法を使う上ではフラッシュキャストだけで十分だが。

「司波達也……何者か気になるところだな。ただの高校生ではあるまい」

紫音は克人の眩きを聞いて冷や汗を流すのだった。



第一高校は、その後も無事に準決勝を突破した。溪谷ステージで九高と試合を行ったのだが、ここでは古式魔法使いの幹比古が大技を披露した。フィールドを霧で覆うことで試合を掌握したのだ。

相手が霧で迷っている内に、達也がモノリスの鍵を開ける。

そして幹比古が『感覚同調』で遠距離からコードを打ち込み、勝利となったのである。

これまでの試合で最も簡単に終わったと言えた。

遂に、決勝戦である三高との試合である。

「遂にここまで来たわね……」

画面を見つめる真由美の言葉に、周囲が頷く。

とは言っても、この時点で新人戦の優勝は決まっていた。更に言えば、総合優勝も確定的といって過言ではない。勝っても負けても問題はなかった。

故に心配事は一つ。
怪我をしないかということだ。

「どうやら入場が始まったようです」

「ええ……なんだか緊張するわね」

「画面越しですが、司波君はあまり緊張しているようには見えませんね。残る二人は別のようですが」

真由美と鈴音の会話を聞き流しつつも、同じくこの場にいた紫音は考え込む。

（原作通りなら、達也は一条将輝を倒すはず。こればかりは誤魔化しきれないか……）

実は、達也も適当にやって負ける予定だった。

しかし、試合前に深雪から『お兄様は最強です（意識）』という激励を貰い、かなりヤル気になっているのである。基本的に深雪の期待には応える達也だ。流石に『分解』は使わないだろうが、フラッシュキヤストや『エレメンタルサイト精霊の眼』は使うことだろう。

あくまで魔法競技というレギュレーションがある以上、これがあれば作戦次第で三高にも勝てる。

いや、勝ててしまう。

達也が十師族でもない（名目上）、しかも補欠という立場の二科生である以上、一条を倒してしまったというのは外聞に障る。そして何より、達也が目立つ。

真夜も観戦に来ているので、紫音は今の時点から胃が痛かった。

急いで『調律』を使う。

「しかし草原ステージとは、達也も運が悪いですね」

「そうなのよね。こんな開けたステージだと、吉田君の奇襲も使えないし……一番困るのは一条将輝と正面から戦わないといけないって

ことよ」

「このステージだと、間違いなくモノリスを開く前に相手を気絶させることが優先になりますから」

モノリス・コードの勝利条件は、モノリス内部のコードを送信するほか、相手選手を三人とも気絶させることでも達成される。障害物のない草原ステージでは、後者の勝利条件が必須となるだろう。

実に不利な戦いである。

真由美も紫音の意見に同意だったのか、困ったような表情を浮かべていた。

だが、そこに摩利が口を挟む。

「いやいや。司波のことだから、あたしたちが驚くような作戦を使ってくるんじゃないか？ ほら、現にローブとマントなんて用意して被っているぞ？」

摩利が指差した画面では、レオが全身を覆うマントを、幹比古がローブを纏っていた。

ちなみに、これは吉祥寺真紅郎の使う『不可視の弾丸』インビジブル・ブリット対策である。『基本コード』の一つ、加重プラスコードを使った魔法であり。狙った対象に対して直接加重を与えることが出来る。

だが、事象を書き換えるのではなく、書き加えるのが『基本コード』だ。

つまり、対象をしつかりと認識できなければ魔法は機能しない。そこで、吉祥寺の視界を塞ぐために、達也はローブとマントを用意したのである。

流石にコスプレを彷彿とさせるので、レオと幹比古は恥ずかしそうにしていたが。

「五十里君にも確認して貰っていたものよね。さつき見せてもらったときには驚いたけど」

「ルール違反ではありませんからね。正確にはルールに記載されていないだけといえますが。彼はそういつたルールの穴を突くのも上手いようです」

鈴音の発言は的を射ている。

予選の前にも、達也は『モノリスを開く鍵魔法をぶつけられたら、硬化魔法で開かないように固定すればいい』ということまで言っていたのだ。確かに、モノリスは一度開くと元に戻すことは禁止となる。しかし、鍵魔法をぶつけられても開かないように抑えておくことはルール違反ではないのだ。

悪知恵が働くのは相変わらずである。

(ん?)

そして試合直前、紫音はデバイスにメールが届いたことに気付いた。

すぐに中身を確認する。

『どうして紫音さんが出ていないのかしら？ 母より』

紫音はパタリとデバイスを閉じ、見なかったことにしてポケットにしまったのだった。

九校戦編12

モノリス・コード新人戦決勝。

草原ステージで行われる第一高校と第三高校の試合は砲撃戦から始まった。

初期位置での互いの距離は六百メートルであり、すぐに近寄れる距離ではない。有利となるのは魔法砲撃を得意とする一条将輝だった。

「押されている!」

「だが司波も負けてないぞ!」

「魔法を全部『術式解体』で……なんて奴だ!」

「ホントに二科生だって言うの!?!」

第一高校のテントは誰もが驚いていた。

達也の技術力は、もはや誰もが知る事実だ。担当した選手が全て優勝または入賞していることを鑑みれば、認める他ない。しかし、あの一糸を相手にして動じることなく砲撃戦に応じていることも驚きである。

右の拳銃型CADで魔法を撃ち落とす。

左の拳銃型CADで攻撃魔法を放つ。

一進一退の魔法戦を見て、誰もが息を飲んでいた。

しかし、距離が縮むに連れて、達也の魔法力という弱点が露呈し始める。達也の使える攻撃魔法は、将輝が無意識の情報防壁で防げる程度のものであり、攻撃は牽制にもならない。対して、攻撃に集中できる将輝は一方的に攻めたてていた。

どちらが有利なのかは一目でわかる。

「やっぱり不利ね……」

「しかし、会長。仕方のないことかと。寧ろ決勝まで進んだだけでも快拳ですから」

「あら？　はんぞーくんも言うようになったわね」

「どうやら司波君に負けてから少しは考え方も変わったようですね」

「し、司波は関係ありません！　会長も市原先輩も揶揄わないでくださいー」

しかし、服部がそんなことを言ったところで不利なのは変わらない。
い。

互いに歩きながら距離を詰め続け、遂に試合が動いたのは五十メートルを切ったところだった。

「司波が勝負に出たな」

克人が呟く。

その言葉通り、達也は将輝に向かって一直線に走り出した。既に向こうは吉祥寺ともう一人の選手も迂回するように動きだしており、こちらは幹比古とレオが対処している。

実質、達也と将輝の一騎打ちだ。

「凄いサイオン量ね。あれだけ『術式解体』グラム・デモリッションを使っても尽きないなんて」

「並みの魔法師では一日中、サイオンを絞り出しても集めることが出来ないと言われているほどの量を圧縮する必要がありますから、司波君の保有サイオンは相当なのでしょう。ですが効果は相応のものですね」

「現存する対抗魔法では最強と言われているもの。十師族相手にここまで撃ち合えるだけでも凄いことだわ」

感心を込めた真由美と鈴音の解説によって、一高陣営で映像観戦している他の一校選手たちも達也への印象を改める。

勿論、これらの会話は意識改革を狙った真由美の作戦だったので、彼らは見事に嵌ったわけだが。

それはともかく、映像の向こうでは激戦が広がっていた。
将輝の使う圧縮空気弾は四方八方から達也に襲いかかる。これほどまで近づくと、座標指定も目視で楽にできるので、攻撃も激しくなるのは必至だ。その分だけ達也も防衛を強いられることになるため、ついに達也は隠し札の一枚を切った。

(達也の奴、『エレメンタルサイト精霊の眼』を使ったな。流石に捌ききれなくなったか)

紫音は達也の動きが急に良くなったので、そのことを察した。

情報世界であるアイデアを観測できる『エレメンタルサイト精霊の眼』は、魔法発動の兆候すら知覚可能だ。つまり、通常よりは一段階早く魔法を察することが出来るのである。

それを使って将輝の使う魔法を察知し、その全てを『グラム・デモリッション術式解体』で撃ち砕いていた。
ひとまずの停滞。

だが、決して抜け出せない不利な停滞である。

一高陣営でも、この膠着を見てもう一つの戦いへと目を向けた。

「こつちも始まるぞー！」

「二人が勝てるかどうかで司波が足止めしている意義が変わってくるぞ……」

「頑張れ！ 勝てるー！」

レオと幹比古も二科生なのだが、思ったより声援を受けていた。
飛び入り参加で気に入らないところもある一方、これまでの試合を見て認めているところもあったのだ。

風で翻ったマントや不格好なローブが気になるものの、勝つことを信じて応援している。

「吉祥寺がCADを構えた。来るぞー！」

摩利の言葉に誰もが息をのんだ。

吉祥寺真紅郎の使う魔法は『不可視の弾丸』インビジブル・ブリット。加重プラスコードの基本コードによって、直接荷重を加え、ダメージにする。事象改変ではないので、情報強化では防ぐことが出来ない。

だが、照準を付けられたレオは即座に対処して見せた。

一瞬でマントを脱ぎ棄て、硬化魔法で堅くして地面に突き立てる。

真つ黒な壁がレオの前に出現したことで、目視が必須の『不可視の弾丸』を防いだ。

吉祥寺は驚き、その隙を突かれる。

『小通連』が発動し、横方向から飛ばされた刀身が薙ぎ払われた。柄の部分と飛ばされた刃の間は空洞なので、壁を挟んで攻撃できるのも利点の一つ。それを上手く利用した作戦である。

「やった！」

「いや、まだまだ！」

辛うじて吉祥寺は移動魔法で飛び下がる。

しかし、そこに幹比古が突風を仕掛けた。これで地面に叩きつけようとするが、吉祥寺は咄嗟に魔法を更新して突風に逆らわず飛ばされ、衝撃を逃がして上手く着地する。

マントで作った壁で『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットがレオに効かないと分かった以上、吉祥寺はレオを諦めて幹比古へと照準を合わせる。

だが、それが罠だった。

古式魔法による幻術の発動。視覚を狂わされ、廻る風景に酔って膝をつく。そこへレオが『小通連』で薙ぎ払いを仕掛けた。

「今度こそ決まった！」

誰かの叫びが一高陣営に響く。そして誰もその言葉を疑わなかった。

それは紫音や真由美、克人、摩利といった実力者でもある。

しかし、レオは予想外の場所から攻撃を喰らい、吹き飛ばされた。将輝の圧縮空気弾である。結果として吉祥寺への攻撃も外れ、驚いた幹比古はもう一人いた三高選手の攻撃を喰らう。

小さな攻撃だったので、これでダウンする程ではない。

だが、『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットを発動するには十分だった。

吉祥寺の得意魔法を喰らい、強い荷重で幹比古は地面に縫い付けられる。

「ああつー！」

たったの一瞬。

それで形勢が崩れた。

「待て。今度は司波が動き出したぞ！」

摩利の言葉を聞いて、今度は達也を映していた画面に向く。すると、将輝が先の一撃でよそ見した瞬間に、縮地を思わせる速さで距離を縮めていた。忍術使い・九重八雲の下で体術を学んでいる達也だ。忍らしく意識の隙間を突くのも得意である。

油断していた将輝は驚き、反射的に魔法を発動した。

レギュレーション違反になるほどの強力な魔法を十六発も。人体に直撃すれば大怪我は間違いない、下手すれば死に至る攻撃。

将輝は魔法を発動させた瞬間、自分が大きなミスをしてしまったことに気付いた。

(拙いな)

紫音も焦る。

別に、達也のことが心配だからではない。二十四時間以内の情報を辿り、バックアップとして上書きすることで状態を復元する『再成』がある以上、達也は怪我を負うことがない。一撃で死なない限り、達也

を殺すどころか怪我させることすら不可能なのだ。

ここで問題なのは、公衆の面前でそのような魔法を使ってしまうことである。

達也自身に対する『再成』は自動発動であるため止めることは出来ない。

願わくば、違和感を抱かれないことを……

紫音は冷や汗を流しつつ、そんなことを考えた。

「拙いわー！」

こちらは真由美が本当に焦ったような口調になる。

レギュレーション違反となるのは確実な威力の魔法だ。それは改変されている事象の規模を見れば一目で理解できる。

達也は『術式解体』グラム・デモリッションで次々と魔法を破壊するが、どれだけ頑張っても数秒では十四個が限界だった。

つまり、残り二個は直撃を喰らうことになる。

ここまでできて『分解』による魔法の消滅……『術式解散』グラム・デイスパーションを使用しないのは、『分解』が軍の極秘魔法だからである。

呆気なく魔法を喰らった達也は吹き飛ばされ、丁度、将輝の目の前で倒れた。

——【修復／開始——完了】

そして『再成』が発動し、達也は意識を取り戻す。達也が唯一、無意識下で高速処理できる魔法。その発動は人の認識を超える。

審判ですら、達也が僅かな間だけ気を失っていたことに気付かなかった。

目を覚ました達也からすれば、いつの間にか目の前に将輝がいるよ

うなもの。レギュレーション違反を犯したと思つて茫然としていた将輝は隙だらけだった。

九重八雲の下で鍛えた体幹を存分に活かし、すぐに起き上がって右手を将輝の左耳の側へ突き出す。

指を鳴らし、フラツシユキヤストで極限まで増幅した。

まるで音響爆弾のような効果となり、将輝は脳を揺さぶられて倒れる。

同じく轟音を側で聞いた達也も、その場で膝をついた。

「今のは……なに？」

映像を見ていた真由美は茫然とする。

いや、ここにいた生徒の内、紫音以外は誰も理解できなかっただろう。達也は下手すれば死に至るほどの魔法を喰らったのだ。だが、すぐに起き上がって魔法を発動し、将輝を倒してしまった。

意味不明である。

とりあえず冷静だった紫音は、真由美の問いに答えた。

「指を鳴らし、その音を増幅したようですね。アレを至近距離で喰らえば一溜まりもないでしょう。それにしても、達也は忍術使いの弟子だけあって、受け流しも得意なんですネ」

しれっとした表情で息を吐くように嘘を述べる。

とりあえず『忍術凄い』で納得してもらうのが一番なので、紫音は先手を打った。

「あれは忍術で片付けて良いものなの……？」

「しかし、そう考えれば納得できるのも事実ですね」

「事実を見る七草。現に司波は怪我もなく……いや、自分の放った魔法の影響は受けているようだが、オーバー・アタック過剰攻撃による負傷は無いように見える。恐らく、四葉の言った通りなのだろう。古流武術にはその手

の技術もあると聞いたことがある」

「リンちゃんも十文字君もそういうなら納得するけど……」

真由美は今一つ納得できていないようだったが、ここは引き下がった。

まだ試合は終わっていないからである。

画面を見ると、将輝が倒れたことで吉祥寺は幹比古から目を離してしまう。照準が逸れたことで『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットは効果を失った。

ここぞというところで幹比古は起き上がり、雷魔法を使う。

吉祥寺は電気抵抗を操作する魔法『避雷針』で雷を逸らしたが、攻防が逆転してしまった。

幻術で『不可視の弾丸』インビジブル・ブリット対策をした後、『地鳴り』『地割れ』『乱れ髪』『蟻地獄』と魔法を連続起動させて、吉祥寺を追い詰める。そして『蟻地獄』から逃れようと高く跳躍した吉祥寺に、『雷童子』による一撃が落ちた。

ホテルに侵入しようとした賊を一撃で無力化した術式だ。

吉祥寺は堪らずダウンする。

(やるな)

紫音も幹比古を素直に称賛していた。

賊の件では紫音も現場に居たので、達也と幹比古のやり取りも知っている。恐らく、今回のモノリス・コードでは、達也が術式を最適化していたのだろう。一科生にも劣らぬ……いや、一科生上位にも通用する魔法だった。

幹比古は流石に『不可視の弾丸』インビジブル・ブリットを長時間食らいすぎたのか、圧迫による酸欠で膝をつく。

それをチャンスと判断した残る三高選手は、移動系魔法で土砂を叩き付ける『陸津波』くがつなみを放つ。これには幹比古もリタイアを覚悟した。

だが、土砂の塊が幹比古へと直撃する直前に、目の前を黒い何かが覆う。レオが自身のマントを硬化することで発動する即席の盾だっ

た。

「あ……」

誰かがそんな声を上げる。

まさかレオが復帰してくるとは思わなかったからだろう。将輝の一撃で吹き飛ばされていたのだから。

そして『小通蓮』を振り回したレオは、最後の一人を殴り倒す。勝負は決してしまった。

「……勝った、のよね？」

現実味が湧かないのか、真由美は誰かに問いかける。

「ああ、勝ったな」

「勝ちましたね」

摩利と鈴音はハッキリと答えた。

その瞬間、一高テントは大歓声に包まれる。

あの一条を相手に奮戦し、相打ちに近いとは言え倒した。そして最終的にはモノリス・コードの試合にも勝利し、優勝を決めたのだ。

この歓声も当然である。

その中で十文字克人と四葉紫音だけは難しい表情を浮かべていた。

(司波……確かめる必要があるな)

(あー、フオローしないといけないよなあ……)

二人の悩みは誰も知ることがない。

九校戦編 13

九校戦九日目となり、そろそろ総合順位も確定し始めていた。

現時点で一位の第一高校と二位の第三高校との差は二百十ポイントであり、既に一高の優勝は決まっている。

本で行われるミラージ・バットは、一位が五十ポイント、二位が三十ポイント、三位が二十ポイント。明日の本選モノリス・コードは一位が百ポイントだ。

例え三高がミラージ・バットで一位から三位を独占し、モノリス・コードで優勝したとしても、第一高校の総合優勝は揺るがない。

勿論、一高としては残る競技も全力で臨むつもりだったが。

だが、その一方で大会委員会では大きな問題が浮かび上がっていた。

「どうしますか？ 反魔法師団体が工作していたことは隠せません。最悪、九校戦自体が無効になる可能性も……」

「被害に遭ったのは一高、四高、そして七高ですね。特に一高と七高には怪我人も出しています」

「スポンサーからもどういふことかと説明の要求があるのですが、どうしましょう？」

「馬鹿野郎！ それよりも老師様だろー！」

もうすぐ九校戦が終わるといふ時になって、頭を抱えなくなるような事態だった。

反魔法師団体イザクトによるCAD細工は非常に悪質であり、許しがたい事件である。だが、紫音が現場を直接抑えたことで、そういった細工が横行していたと一部で広まってしまった。大会委員会も鎮静に努めたが、広がった波紋は止まらない。

老師を含めた関係各所から説明請求をされているのである。

「新人戦モノリス・コードの事件は一番痛いですね。重傷者を出して

しまいましたから。四高を失格にしたのも、体裁上仕方ないとは言え、不満は拳がっています」

「七高の件もですね。バトル・ボードで危険走行をしたのもCAD細工のせいだと思われます。九校戦に選ばれる選手が、そんなミスをするとは思えませんし」

「一番被害を被っている第一高校が圧倒的な点数差で優勝するでしょうから、文句は付けにくいと思います。ですが、不信が高まるのは避けられませんよ」

「職員と、それを手配していたイザクトのメンバーは既に全員捕まっている。この件でUSNA東海岸にあるイザクト本部にも抗議文を提出するつもりだ。」

「犯罪組織との繋がりもあるので、恐らくイザクトは解散の方向へと進んでいくことだろう。」

「長期的に考えれば都合の良い事件だった。」

「しかし、短期的に見ると問題だらけである。」

「魔法協会の方からも抗議文が届いています。どうしますか?」

「そちらもイザクトか!?!」

「いえ、一条選手が負けたことに関する内容でした」

「そっちなか!」

「そしてもう一つの厄介事は、達也が将輝に勝ってしまったことである。所詮は学生のスポーツとは言え、十師族の一員が一般魔法師に負けるとなると、威信にかかわる。」

「日本を代表する名家、十師族の傷は魔法社会の傷だ。」

「それについて魔法協会から対応を求める文書が届いていたのである。」

「あー! なんてこう、問題が二方向からやって来るんだ!」

スタッフの一人がそう叫んでしまうのも仕方ない。

こうなってしまう以上、九校戦の大会委員会は一つ姿勢を示さなければならぬだろう。反魔法師団体には屈しないという強気、そして十師族の力を示す機会を九校戦の間に用意してその力を見せつけさせておかなければならないのだ。

誰もが悩んでいた時。ふと一人のスタッフが提案をした。

「あの、こういうのはどうですか——？」

それを聞いた時、誰もが一瞬だけ難しい表情を浮かべる。

だが、有効な手の一つであるのは間違いない。

有効な手段を他に思いつかない以上、大会委員長も許可を出すしかなかった。

大会スタッフは、委員長の指示のもと、早速手配を始めるのだった。



九日目の本選ミラージュ・バットは第一高校が圧勝した。二年生と三年生に交じって出場した深雪も、トールラスⅡシルバー作（つまり達也が作った）飛行魔法デバイスによってぶつちぎりの優勝をしてみせたのである。

加重系統魔法の三大難問と言われた汎用飛行術式。

勿論、飛行自体には問題ないのだが、飛行中に何度も加速減速を重ねると魔法力の関係で限界が訪れてしまい、平均して十回ほどの魔法行使で墜落してしまうことが分かっていた。そこで達也は魔法をこ

く短時間で終了するように、起動式にデジタル処理を加えることで解決する。

何度も魔法を発動しては終了させることで、魔法の重ね掛けによる飛行魔法の限界を解決したのだ。

勿論、大量の魔法行使が必要となるので、相応のサイオン量が必要になる。

深雪だからこそ使いこなせる魔法だった。

ミラージュ・バット予選で飛行術式を披露したので、大会委員からこれはズルいと判断される。他校からも不正が疑われたので急遽、決勝から飛行デバイスをコピーして全ての選手に配布したのである。

勿論、使いこなせず途中でサイオン切れを起こし、深雪の圧勝となったが。

そして忠告を聞いて、飛行術式を使わず『跳躍』のみで戦った一高のミラージュ・バット出場者、小早川景子も見事に二位となり、第一高校は更に点数を伸ばしたのだった。

初めも彼女は飛行術式を使うことを望んでいたのだが、担当エンジニアの平川小春が止め、彼女に協力する形で達也も説得したのである。

ちなみにもう一人いた一校選手は予選で敗退しているので、一位から三位まで独占とはならなかった。

(飛行術式……また達也が別方向から疑われているみたいだな)

紫音は中条あずさを観察することで、達也をトールラスシルバーだと半ば確信していることに気付いた。確かに、あれほど高校生から逸脱した技能を見せた上に、飛行術式まで披露したのだ。

技術者ならば疑って当然である。

他の生徒たちは、達也が二科生という先入観から、そこまで想像できているようだ。

しかし、その先入観がなかったあずさは誤魔化せなかったらしい。

(始末は……リスクが高いか。まあ、彼女も周囲に言いふらす性格じゃないし、今は放置でいいだろ。達也がモノリス・コードに出てくれたお陰で、アレも手に入ったし、総合的にはこっちのプラスだったな)

九日目の行程が終了した今、紫音は優勝記念の祝賀会に向かっていた。新人戦が終了した昨日の時点で優勝が確定していたとはいえ、ミラージ・バットの準備もあつたので一高だけのささやかな祝賀会すら開く暇はなかった。

だが、最終日である明日はモノリス・コードだけであり、生徒の大半は暇になる。

そこで、主に一年生を集めて祝賀会を開いたのだった。

これは優勝記念でもあるが、その本当のところは新人戦優勝のお祝いである。

当然、活躍した紫音も参加する予定だった。

だが、ホテルの廊下を歩いていると、不意に背後から声をかけられる。

「四葉、少しいいか？」

「あれ？ 十文字会頭じゃないですか。モノリス・コードの打ち合わせがあるんじゃないですか？」

「それは切り上げてきた。後は細かいところだけだからな。それよりも少し来て貰いたい」

「分かりました。どこまで？」

「大会本部だ」

十文字克人がわざわざ呼びに来たということは、十師族関連だろうと推測する。紫音としても呼び出される心当たりがなくもないので、素直に応じることにした。

そして暗くなっている夜道を歩き、まだ明るい大会本部テントへと向かう。

中に入ると、前に会った大会委員長、そして一条将輝がいた。

「待たせたようだ。済まない」

「いえ、十文字殿も四葉殿もよく来られました。どうぞこちらへ」

委員長に着席を促されたので、紫音も克人も座る。

そして紫音たちの正面側に委員長も座ったところで、スタッフの一人がお茶を持ってきた。四人分が用意されたのち、委員長が口を開く。

「突然お呼びして申し訳ありません」

「出来れば明日の試合があるので、早めに終わらせて貰いたいのだが……」

「勿論です十文字殿。話はすぐに終わります」

委員長はそう言つて資料を取り出し、紫音たちに配った。

紫音は受け取るとすぐに読んで内容を把握する。

(そうきたか)

記されていたのは、モノリス・コードによる特別試合。

紫音、克人、将輝で十師族による合同チームを組み、富士軍事演習場にいる本職の軍人と試合するのだ。ちなみに、軍でもモノリス・コードは競技として存在する。魔法を鍛えるスポーツの一環として認められているのだ。

なので、モノリス・コードにも精通した相手となる。

学生を相手にするのとは比べ物にならない。

「なるほど。内容は理解しました。つまりこれは、十師族の力を見せつけつつ、軍との関係性を強調することで反魔法師団体が九校戦で細工していた事実に対し、強気の対応を見せる。そういうことですね

？」

「その通りです十文字殿。受けてくださいますか？」

これには克人も腕を組んで考える。

確かに思うところがあるのだろう。だが、これを九校戦の場でやるべきかは慎重に考えなくてはならない。

言い方は悪いが、これは誤魔化しなのだ。

イザクトが九校戦で細工をしていた事実に対する誤魔化しである。

だが、まだ学生の十師族が軍人と試合をすることで、反魔法師団体に対しても正面から強気のアピールをすることになる。有効な手段であることには違いなかった。

更に言えば、特別試合をすることで各スポンサーたちへの機嫌取りも行うつもりである。

「良いでしょう。四葉と一条はどうだ？」

「構いませんよ」

「問題ありません。元はと言えば俺が司波に負けてしまったことも発端のようですし」

紫音としても目立てる場はウエルカムなので了承する。疲れもすっかり回復してるため、モノリス・コードを行っても問題ないだろう。

それに真夜からも『出場しないの？』という催促を頂いていたのだ。

丁度いい機会でもある。

寧ろ真夜が仕込んだのではないかと紫音も疑ったほどだ。

そして達也に負けた将輝としても汚名を晴らすチャンスだと考えたので、受けることにした。

「良かった……では、そのように調整していきます。試合は、明日のモノリス・コード決勝戦が終わった後です。九校戦のすべてが終わった後に、特別試合として行います。恐らく十文字殿は連続試合となるで

しよう。一時間ほどは休憩を挟む予定ですが、それで問題ありませんか?」

「こちらは構わない」

「ありがとうございます」

大会委員長もホツとした様子で胸を撫で下ろした。

これで十師族や魔法協会に対しても面目が立つかもしれないと安堵しているのだろう。

「では、よろしくお願ひします」

委員長は深く頭を下げたのだった。



九校戦の最終日。

第一高校は既に優勝確定とは言え、モノリス・コードにも気合が入っていた。なにせ、十文字克人が出場するのだ。気合の入りが違う。

更に、一条将輝の敗北を受けて、師族会議から一つの通達があった。それは十師族としての力を見せつけろというもの。

十文字家のお家芸である『フアランクス』によって相手選手を跳ね飛ばし、圧倒的な力を見せつけた。どんな魔法攻撃も障壁が阻み、克人の攻撃は防げない。

あつという間に優勝してしまったのだった。そして、ここで一つのアナウンスが鳴る。

『以上を持ちまして、九校戦の全ての行程を終了させていただきます。なお、一時間後から十師族の代表選手によるモノリス・コード特別試合が行われます。第一高校三年・十文字克人選手、第一高校一年・四葉紫音選手、第三高校一年、一条将輝選手がチームとなり、陸軍所属のモノリス・コード選手と試合を行います。』

繰り返します——』

紫音たちを除けば、誰も知らなかったサプライズイベント。

これには観客だけでなく一高や他校選手たちも驚き、沸き上がる。十師族の一員がチームを組んでモノリス・コードをするというのだ。その興奮は計り知れないだろう。一体どのような試合になるのか、予想も出来ない。

一高陣営も、完全優勝に対する喜びの他に、この特別な試合に対する興奮が強かった。

「また十文字先輩が出るぞ！」

「四葉も出るんだろ？ どんな魔法を使うんだろうな」

「一条選手とも組むんだって。ドリームチームよ！」

「相手はプロのモノリス・コード選手だろ？ 勝てるのか？」

「分からないぜ？ なにせ十師族だからな」

このサプライズはスポンサーたちにとっても間違いなくビッグイベントである。そして、この一つの試合だけで各界に魔法協会の姿勢を見せつけることも出来るだろう。

まだ子供とは言え、十師族がどれだけの力を持つのか、日本の魔法師はどれだけの力を持っているのか、ということを発信する機会である。テレビ局でも急遽、九校戦の番組を延長することになっていた。そして紫音のもとには、真夜から電話がかかってきていた。

「紫音です」

『どうやら特別試合に出るようね。楽しませて貰うわ』

「私としてはそんな予定もなかったのですが……達也のこともありませんからね」

『ええ、そうね。だから存分に戦いなさい』

「お任せを、母上」

CADを必要としない紫音はともかく、将輝や克人は調整に入っている頃だろう。指定された集合場所に向かうために、足を速めるのだった。

九校戦編 14

モノリス・コード特別試合が始まる数分前、紫音たちは自陣モノリスの側で待機していた。フィールドは新人戦決勝と同じく草原ステージ。恐らく、十師族との戦いをより分かりやすくするために選ばれたのだろう。

九校戦側の意思が透けて見えるようだった。

「四葉、それに一条。作戦は特に与えない。所詮は即席のチームだ。チームワークなど期待する方が難しいからな」

克人の言葉に紫音も将輝も頷く。

この試合も昨日言われたことであり、作戦立案も出来ていない。強いて言うなら、克人が『フアランクス』を展開しながら突撃し、紫音と将輝が背後から砲撃に専念すると言った程度。

とても作戦とは言えない。

「そろそろ始まる。相手は軍属の魔法師だ。油断はするな。一条も宜しく頼む」

「了解です十文字会頭」

「宜しくお願いします」

うむ、と克人が頷いたところで、試合開始のサイレンが鳴り響く。相手は陸軍所属の魔法師だ。魔法での実戦を想定した訓練を積む猛者たちである。九校戦で戦った学生とは天と地ほども差があることだろう。それは魔法力の差ではなく、魔法の使い方だ。

老師の言っていた『工夫』を凝らしているはずである。

「行くぞ」

「わかりました」

「全力で行きますー！」

克人は悠々と歩きだした。

相手チームとの距離は凡そ六百メートル。開けた場所なので、遙か向こうにある三つの影だけは認識できる。早速とばかりに砲撃戦がスタートした。

まず、特化型CADを構えた将輝が圧縮空気弾を使う。魔法において物理的距離は関係なく、認識できる場所ならばどこにでも魔法を発動できる。これによって、遙か遠くにいる相手チームの上空から空気弾を放った。

だが、相手も陸軍に所属する程の魔法師だ。

その程度ではビクともしない。

悠然と空気を拡散させる魔法を使い、無効化した。

更に、意趣返しとして相手も圧縮空気弾を使ってくる。

「ふん」

それは全て克人の障壁魔法によって防がれた。

四系統八種の魔法障壁を使いこなす十文字家にとって、この程度はわけない。

「流石ですね会頭」

「おい四葉！ お前も働けよー！」

紫音が普通に感心していると、将輝から怒られる。

そこで、肩をすくめた紫音は右手を伸ばして相手チームの方へと向ける。そして親指と中指を付け、弾くことで指を鳴らした。

だが、克人にも将輝にも音は聞こえない。

紫音はフラッシュキャストによって音を増幅させ、更に一方向へと『調律』することで衝撃波に変えて飛ばしたのだ。達也の魔法では一方向に飛ばすことが出来ず、拡散させることになった。しかし、紫音ならば全ての音エネルギーを無駄なく一方向に飛ばすことが出来る。

これによって克人と将輝には音が聞こえなかったのだ。

しかし、飛ばされた衝撃波は凄まじい威力になる。一秒ちよつとで衝撃波が相手チームの元に届き、一人が吹き飛ばされた。

指を鳴らして音を増幅させ、一方向に衝撃波として飛ばす紫音の汎用魔法『音壊』。

本来は相手を直接殴打したときの音を増幅させ、内臓を破壊することを目的としている。この魔法のために紫音は体術も習得していた。

「もう一発行きますか？」

暗に『自分だけで始末できるけど、どうする？』と問いかける。

これには将輝もムツとしたのか、パラレルキャストで大量の圧縮空気弾を生成する。相手チームもいきなり一人が吹き飛ばされたことで動揺しているらしかった。それで乱れてしまったのか、将輝の魔法を回避するのに遅れてしまう。

直撃こそ避けたが、相手はペースを乱されたらしかった。

「攻めるぞ二人とも」

「では自分が閃光魔法を使いますので、十文字会頭と一条は光波系の防御を使いつつ走ってください」

「おい四葉！俺はその手の障壁魔法をCADに入れてないぞ！」

「分かった。なら、一条の分も俺が障壁展開しよう。任せたぞ四葉」

早口で会話を終えた三人は、即座に陣形を変える。

克人と将輝が二人とも前に、そして紫音が後ろである。そして紫音はフラッシュキャストで強い閃光を放った。今の時点で相手との距離は四百メートルほどであり、自己加速術式を使えば二十秒以内に詰められる距離である。

そして魔法の射程を考えれば、限界まで距離を詰める必要はない。

つまり、相手が閃光を喰らって、そこから回復するまでに十分距離を詰めることが出来る。

向こうも、草原ステージのモノリス・コードで閃光魔法を使つてくるとは思わなかったのか、激しい光を浴びて明転しているようだ。

その間に克人と将輝は距離を詰めて魔法を使おうとする。克人は加重系統による障壁で相手を吹き飛ばす魔法、将輝は空気弾を無効化されたことから、移動魔法で土砂をぶつけることにした。

だが、二人が魔法を発動しようとした直前に、足元で放電が発生する。

「む?」

「何!？」

放出系魔法による電子の強制排出。これによつて電撃を浴びせる魔法だ。

放つたのは紫音に吹き飛ばされたはずのもう一人。距離もあつたので、衝撃波は予想以上に減衰していたらしい。気絶させるには至らなかつたようだ。

吹き飛ばされた後は、一度戦線から外れてチャンスを窺っていたのである。

克人が反射的に障壁魔法を展開し、放出される電子を防ぐ。これによつて克人も将輝も辛うじてリタイアを免れた。

しかし、その間に向こうの二人も閃光による明転から復帰してしま

う。そして距離を詰めたことで照準がつけやすくなるのは相手も同じだ。如何に魔法が距離に縛られないといつても、人の認識はほとんど目に頼っている。近ければ近いほど、狙いやすい。

振動魔法によつて地面が大きく揺らされ、将輝どころか克人までも膝をついた。

「今だ吉岡!」

「了解!」

吉岡——紫音に吹き飛ばされた男——は再び放出系魔法で放電を発動させようとする。しかし、後方にいた紫音が『音壊』による衝撃波を飛ばす方が早かった。

知らぬ間に距離を詰めていた紫音から飛ばされた衝撃波は、一瞬と経たずに吉岡を吹き飛ばす。これによって事象改変が実行されかけていた放電の魔法はキャンセルされた。

更に紫音は、この事象改変を踏み台にして、同じ放出系の魔法をフラッシュキヤストで使用する。座標部分の変数だけを書き換え、吉岡に対して放電を放った。

既に事象改変によって物理の制約が弱まっていたので、簡単に魔法が発動する。

これには今度こそ、吉岡も気絶してしまった。

「十文字会頭！ 一条！」

紫音の言葉と同時に、持ち直した克人は『ファランクス』で相手を一入吹き飛ばした。凄まじい衝撃を全身に受けたことで、一撃ノックダウンとなる。

本来は重装車両すら押し潰すことの出来る魔法なのだ。人が喰らえば一溜まりもない。

そして将輝も飽和砲撃を得意とする一条家の跡取りだ。『爆裂』ならともかく、圧縮空気砲ならば、相手が対処しきれないほど一度に発動できる。

大量の空気弾を喰らい、残る一人も気絶。
試合終了を知らせるサイレンが鳴った。

「お疲れ様です会頭」

「うむ。四葉もよくやった」

少し離れたところに居た紫音は、克人と将輝の元に近寄った。

だが、将輝はその紫音に掴みかかる勢いで問いかける。

「おい四葉！ 最後のアレは何だ？！ 相手の魔法を引き継いだように見えたぞ！」

「その通り。何か問題でも？」

「そんなことが出来るのか!？」

「当たり前だ。相手の魔法をそのままコピーして奪い取るならともかく、事象改変を借り受けて発動補助するぐらいなら出来るに決まっているだろ。理論上」

「理論の上ではな！」

確かに、将輝の言った通り理論上の話である。

普通なら魔法師は他者の魔法を奪い取ったりすることは出来ない。しかし、魔法発動後や発動キャンセル後に残っている事象改変の跡を利用することは可能である。

例えばF A E (Free After Execution) 理論がそれに近い。

これは魔法が本来の物理法則から外れている故に、魔法発動後には物理の束縛が緩くなるというもの。それは一ミリ秒以下のことだが、実際にその現象は起り得る。

とはいえ本当に理論だけの話だ。

実戦で使用するには多くの偶然と経験が必要になる。

将輝が驚くのも当然だった。

紫音は『調律』によって表層意識を読み取り、相手の選択する魔法を把握することで、相手の事象改変を利用することを思いついただけであった。いわば、一つの偶然である。紫音がたまたま電子を放出する系統の弱い魔法をフラッシュキャストで記憶していたからこそ出来たことである。

(まあ、奪い取ることも出来るんだけど)

紫音はそんな心の声を仕舞い込む。

系統外精神干渉魔法『調律』の真なる力は誰にも明かすわけにはいかない。知っているのは四葉の中でも一部だけだろう。分家を含めた親族を除けば、葉山のような側近クラスの人物だけだ。

ともかく、将輝も納得はしたらしい。

微妙な表情を浮かべつつもこれ以上は質問して来なかった。

「四葉、一条。よくやった。これで運営側も満足だろう。相手をして下さった軍の方を起こして戻るぞ」

「あー、そうですね。当て馬みたいになっちゃいましたし、それぐらいは」

「え、ええ……」

こうして、九校戦における全ての試合は終了したのだった。



長い表彰式も終わり、第一高校は見事な総合優勝を飾った。そして、夜。

九校戦の全てを終えた選手たちは、その祝賀会に参加していた。第一高校から第九高校までの全員が、十二日前に懇親会を行ったホテルのパーティ会場に集まっている。

その時とは異なり、ここは本当に親交を深める場となる。

闘いを終えた選手たちは、ライバルたちとも交わりつつ時を過ごしていた。

なお、この場には各企業も優秀なエンジニア候補の生徒を勧誘する

場でもあるので、達也は大層忙しそうにしていたが。そして、このパーティの場に紫音はいなかった。

「一応、頑張ったと思うのですがね。真夜様？」

「そうではないでしょうか？」

「え？」

真夜にそう言われた紫音は少し考えてから言い直す。

「ああ……どうでしたか母上？」

「とても素晴らしかったわ」

現在、紫音はホテルの一室で真夜と共にいた。

今日の内に真夜は本邸へと戻るの、最後の挨拶のために訪れていたのである。

「今回は想像以上に梃子摺られました。四葉の方にも迷惑は掛かっていませんか？」

「問題ないわ。私が訪れている場で起こった不祥事。それを半分以上、貴方の功績で捕えたのだから貸しを与えたと言っても過言ではないでしょう。防衛省の方にも手が伸びました。訪れた甲斐があったというものです」

「一時は九島閣下の手も借りようかと思ったぐらいでしたが……」

「それはしなくて正解よ」

紫音は心の内で密かに安堵する。

本当の最終手段として考えていただけとはいえ、実行しなくてよかったと思えた。

「ところで、無頭竜ノヘツド・ドラゴンの情報は役に立ちましたか？」

「それについては直接的利益にはなりませんでしたが、防衛省

や公安の方からの覚えは良くなつたと思います。どうやら、
無頭竜ノーヘッド・ドラゴンはソーサリー・ブースターの供給源だったそうですから」
「確か……魔法師の脳にあるニューロンを利用した疑似感応石。それ
によって特定魔法の演算規模を増大させることが出来るものでした
か？ あれは人間の脳を利用するという特性上、真つ黒な代物ですか
ら、どこかの犯罪組織が独占していると聞いていました。まさか
無頭竜ノーヘッド・ドラゴンだったとは」
「その通りです。これによって軍の……勿論、独立魔装大隊以外の部
分と接点が生まれました。これは貴方を戦略級魔法師として出すと
きに必要になる繋がりです」

紫音のことを公表するときも、ただ軍の方に打診する訳にはいかな
い。勿論、それでも構わないと言えば構わないのだが、もつと有意義
にこの手札は切るべきなのだ。

具体的には戦略級魔法が必要な状況下において、司波達也の
『質量爆散』マテリアル・バーストや五輪滯の『深淵』アビスの代わりとして、戦略級魔法『日蝕』エクリプス
を使うのである。

具体的に力を見せつける状況であると同時に、より上の立場に立
つ。

四葉側が『この子を戦略級魔法師として使ってください』と言うよ
りも、防衛省に『是非ともその子を戦略級魔法師として迎えたい』と
言わせるのが目的である。

そのために軍への貸しを積み重ね、いざという時に四葉の力を使う
場を提供させなければならぬ。

今回の件で、一段階進んだ。

「最後に一つ、紫音さんに忠告しておきます」
「忠告ですか？」

「今以上に慎重になりなさい。どうやら、貴方のことを嗅ぎまわって
いる人物がいるようです。特に電子的なやり取りは常に監視されて
いると思いなさい」

「……ならば黒羽の報告も紙媒体が望ましいでしょうか？」

「今のところは必要ないでしょう。私の方でも、貴方を監視している人物を監視していますから」

「いつも通り、困というわけですね」

「ええ。だから忠告はしました」

「ではお言葉通り、気を付けます。丁度、今回の九校戦で面白いものも手に入れましたから」

紫音は掌の上に靈子^{フシオン}を収束させる。

そこには紫音の記憶領域に刻みつけられた靈子^{フシオン}波長パターンを基準に『調律』したことによって、靈子^{フシオン}の塊が意味のある形となって出
来上がった。

それを古式魔法師が見ればこう言ったことだろう。

精霊——と。

横浜騒乱編

横浜騒乱編1

横浜。

多くの船が行き来する港で、不審船が発見された。通報を受けた魔法師の警察官が現場に派遣される。

「おーおー。こりゃ物騒だねー」

「無駄口は止めてください千葉警部」

「いやしかし稲垣君。これは大事件だよ」

恐らくは海外からやってきた特殊部隊の類だ。

武装を見れば分かる。

千葉家の長男であり、警察に勤める千葉寿和ちばとしかずは木刀を肩に乗せつつボヤいた。

「行きますよ。魔法犯に対処できるのは、我々魔法師の刑事だけです
から」

「全く。俺は君の上司なんだが?」

「自分は貴方より年上です」

やれやれ、と言いつつも寿和は自己加速術式を使って現場に迫る。千葉家の得意とする、魔法を利用した白兵戦法は体に染みついていく。今更、会話した程度で体勢を崩したりはしない。

「仕方ない。お仕事をしよう、か!」

寿和はそう言って飛び上がり、移動魔法を使って物理に喧嘩を売っているかのような空中機動をする。気付いた犯人たちは手に持ったサブマシンガンで対応するも、寿和はそれを全て回避した。

次の瞬間、木刀が牙を剥く。

「が!？」

「ぐあ……………」

「く……………そ……………」

「ぎやつ……………!？」

「いっちょ上がりつてね」

そう言いつつ、木刀を再び肩に乗せた。

援護射撃が担当の稲垣は、拳銃機能のある武装一体型CADを構えつつ、寿和に追いついた。

「警部。あそこに船が！ 押さえますよ！」

「え？ 俺がやるの？」

「さっさとやる」

仕方ねえ…………と呟きつつ、寿和は木刀からスラリと刃を解き放つ。どうやら仕込み杖のように、内部に刀を仕込んでいたらしい。

そして刀を構えつつ、稲垣に向かって命じた。

「君がまず、船を止めてくれ」

「自分では沈めることになるかもしれないが？」

「上手くスクリューを狙えば大丈夫さ。それに沈めても責任は課長が取ってくれる」

「分かりましたよ……………」

稲垣はそう言つて武装一体型CADに弾丸を込める。

そして照準を付け、加速魔法を加えた銃弾を放った。空気と海を切り裂いて弾丸は飛び、海中の水による粘性抵抗すら振り切つてスクリューを破壊する。

「お見事」

魔法で跳躍した寿和は一気に船へと飛び移る。
そして斬撃で船の甲板を破壊した。

だが……

「もぬけの殻……か」

船底には海中に逃げるための穴が開いていた。

もはや追跡は不可能だろう。

「全く……無駄骨だったじゃないか」

その溜息は暗い夜空に消えるのだった。



夏休みも終わり第一高校では新生徒会、風紀委員会が発足した。

生徒会長は中条あずさ、副会長が深雪、会計が五十里啓、書記が光井ほのかである。そして風紀委員長には九校戦の女子アイス・ピラーズ・ブレイクで優勝した千代田花音が就任した。なお、他の風紀委員メンバーは変わらずである。

紫音か達也が生徒会に移籍する案もあったのだが、風紀委員において書類担当——本来はそんな担当などない——の達也が抜けるのは困ると言って花音が引き留めた。そして紫音は、単純に風紀委員にい

ると学校全体が引き締まるからである。

そして季節は秋になり、そろそろ論文コンペティションの時期が迫っていた。

また、その件について紫音は頭を悩ませていた。

「達也。なんで君は論文コンペティションの手伝いに選ばれたんだ？」

「市原先輩、五十里先輩、平河先輩からは是非と言われてな」

「お陰で誰が風紀委員の書類仕事をすると思ってるんだ」

「お前だろ？」

「そうだよ！ 俺だよ！ 千代田先輩が全ての書類仕事を俺に押し付けるんだよ！」

紫音は風紀委員会本部で本音を叫ぶ。

実は達也は秋の論文コンペティションで発表する一高チームから、助っ人として要請されていた。基本的に、論文コンペティションはメイン一人に補助二人の三人で出場するのだが、準備段階においては風紀委員や生徒会、部活連などからお手伝いを要請してよいことになっている。

その名目で達也が呼ばれたのだった。

勿論、それもこれも九校戦で達也が凄まじい技術力を示したからである。

また、鈴音たちが発表する論文のテーマも達也向きだった。

「市原先輩たちは重力制御魔法式熱核融合炉をテーマにしているらしい。俺も同じテーマを志している以上、興味がある。助っ人を要請されて受けたのはそれが一番の理由だ」

「別に理由なんて聞いてないっての……」

「しかし俺としても驚いた。市原先輩や五十里先輩はともかく、平河先輩も好意的だとは思わなかったな」

「平河先輩って言ったら、九校戦でもエンジニアしてたからな。達也

の活躍を生で見えていたわけだし、注目していて当然じゃないか？」

「ああ、なるほど。そう言えば、ミラージ・バットの時も少しあったな」

達也はどこか遠い目をしながら、数か月前の話を始めた。

「本選ミラージ・バットの決勝戦で、他校も飛行術式を使ってきただろう？　それで平河先輩がエンジンニアを担当していた小早川先輩も飛行術式を使いたいと言ってきたんだ。だが、平河先輩はいきなり使える術式じゃないから危ないって説得してな。それでも小早川先輩は聞かなかったから、俺も一緒に説得したんだ」

「それで謎の連帯感が生まれたってことか？」

「結果として小早川先輩はミラージ・バット二位だった。他校が飛行術式を使ってこの結果だ。だから余計にな」

「なるほどねえ」

原作において、無頭竜ノーヘッド・ドラゴンによる工作で小早川景子はミラージ・バット予選中に落下事故を起こしてしまい。そのエンジンニアだった平河小春も、事件が原因で心に傷を負い、体調を崩していた。

その穴埋めとして達也が論文コンペティションのメンバーとして選ばれたのだが、どうやら平河小春が無事な状態でも論文コンペティションの助っ人はするらしい。

なんとしてでも原作に沿おうとする力が働いているかのようだった。

気味悪いな、と思いつつも、紫音は表情に出すことなく会話を続ける。

「しかし高校生にしては大きなテーマを選んだものだな。重力制御魔法式熱核融合炉って加重系統魔法の三大難問……いまは二大難問か。飛行術式がシルバー様によって解決されたからな」

「だが、テーマが大きいかどうかは関係ない。そこに付随する意義が重要だと、俺は思っている」

「といつとっ。」

「魔法師を兵器ではなく、別方向に導くということだ。確かに、魔法師は兵器として運用するために開発されてきた存在だ。しかし、これからはそれだけではないといけないと思っている。魔法師にとって兵器だけが道ではないと市原先輩は示したいんだ」

「……それはそれは」

四葉の兵器であることを選んだ紫音にとって、中々に眩しい目標である。

『調律』の力は、人を傷つけ、殺し、精神に侵入し、尊厳を踏みにじることしかできない魔法だ。精神治療にも使えなくはないが、紫音はその方向で魔法を鍛えて来なかった。

ただ、兵器としての力だけを高めてきたのである。

特に父親である黒羽貢は、何かと対抗するかのようには紫音を鍛え続けた。何を思って紫音に破壊の力を与えたのかは分からない。しかし、どこか必死だったので特に理由は聞かなかった。

既に紫音は兵器として、育てられた。

今更、人の役に立つ方向を見出そうとは思わない。

この破壊の力も、四葉や黒羽を守る力なのだから。

「それで紫音。本題に入りたいんだが」

「今までのは何だったんだ……」

「ただの前置きだ」

元々、風紀委員会本部で書類仕事をしていた紫音のもとに達也が来たのが会話の始まりだった。いきなり論文コンペテイションの話題を振ってきたので、ただの報告だと思ったのだが、別の用件があるらしい。

紫音は座り直して話を聞く姿勢になる。

「実は、論文コンペでは出場者に風紀委員会か部活連から護衛を付け

るらしい。機材や資料、出場者本人が狙われるケースもあると聞いている」

「高校生レベルって言っても、貴重な資料を使ったりするからな。論文だって学術誌に記載される程ハイレベルなものもあるし」

「そうだ。市原先輩には部活連から服部先輩と桐原先輩が付くそうだ。そして五十里先輩は——」

「千代田先輩だろ？」

「その通りだ。で、平河先輩にはお前が推薦されている」

達也は真顔でそういつたが、紫音はすぐに嘘だと気付いた。

長年、達也と付き合っているのだ。

それぐらいは分かる。

「……本当は選ばれたの、達也だろ。お前だって風紀委員だし、助っ人という立場だし。面倒だから俺に押し付けたな？」

「その通りだ。俺が推薦した」

「おい、何が『お前が推薦されている』だ。お前のせいじゃないか」

「平河先輩も問題ないそうだ。寧ろ、四葉の家の者と話せる機会かもしれないって言っていたぞ」

「逃げ道を塞いでくるねえ……まあいいけどさ」

達也に護衛を任せた場合、その異常性が滲み出てくる。

仮に襲撃があった場合、達也は『分解』を使うことになるだろう。それは間違いない。だからこそ、公に力を振るえる紫音が護衛に就くのは間違いではない。

（俺も最近は何も嗅ぎまわられているんだけど……大丈夫かね？）

九校戦以降、紫音の周囲では監視が増えている気がする。

それは国外からのスパイに限らず、国内における十師族の者もいるらしい。特に七草は紫音の周囲を常にウロウロしていた。

そんな人物が護衛として相応しいのか、甚だ疑問ではある。しかし、既に外堀を埋められている以上、断ることも出来なかった。

「分かったよ。取りあえず引き受けよう」

「そうか。助かる」

「念のためにCADを持ち歩くかな……夜の戦闘はCADがないと辛いし」

「分かった。調整しよう」

「頼む」

紫音にはフラッシュキャストと『暗黒流星群』ダークミステリアがあるので、昼間の戦闘においては殆ど無敵だ。しかし、太陽光のない夜になると戦闘力は大きく落ちる。『音壊』があるので戦えなくはないものの、この場合はCADによる補助があった方が良い。

紫音のCADは夜の戦闘を意識した特別仕様なのだ。

「ちなみに護衛はいつからだ？」

「今日だ」

「早急にCADを頼む。久しぶりに使うし」

「ああ、分かった。あとでCAD調整実習室を借りて行おう」

紫音は厄介事の予感に溜息を吐くのだった。



風紀委員の書類仕事を終わらせた紫音は、論文コンペの準備室へと向かっていた。予め達也から場所は聞いているので迷うことはない。

広い魔法科高校も、日頃見回りをしている風紀委員からすれば迷う要素のない場所だ。

こういうところは風紀委員であることに感謝した。

尤も、その感謝も書類仕事を考えれば消え失せるが。

そして準備室の前に立ち、ノックをしてから入室する。一応、市原の返事は聞こえたので問題はない。

「四葉です。先程、風紀委員の仕事が終わったので訪れたのですが……」

「平河さんの護衛の件ですね。よく来てくれました四葉君」

「こんにちは四葉君。あたしが平河小春よ。護衛を引き受けてくれてありがとね。やっぱり十師族の人に護衛して貰うってなると、安心感が違うわ」

四葉が恐怖の象徴という一面を持つ中で、小春の言い分は珍しいものだ。

紫音は少し驚く。

「驚きましたか四葉君？」

「ええ、まあ」

心を読んだかのような鈴音の言葉に、紫音は頷いた。

「これでも怖がられることの方が多いですからね。頼られるなんて久しぶりですよ」

「九校戦の活躍は存分に見たからね。期待もするよ」

「そういうことです」

「それだけ四葉君の試合が衝撃的だったってことさ」

「そういうものですかね？」

「鈴音だけでなく啓も同意したので、紫音は納得する。」

そして紫音もここに来た本題を思い出し、用件を述べることにした。

「では、風紀委員より平河小春先輩の護衛を務めさせていただきます、四葉紫音です。護衛と言うのは主に登下校中を考えれば良いですよね?」

「そうね。登校、帰宅の時間を護衛して欲しいかな。朝は早くから来て貰うことになるし、迷惑かもしれないけどお願いね?」

「それぐらいなら。それでも早起きする習慣が付いているので問題ありませんよ」

「よかった。じゃあ、早速だけどメールアドレスを交換してくれない?」

「そうですね。連絡がつかないのは不便ですから」

紫音はポケットから携帯端末を取り出し、アドレスの交換を済ませる。

すると丁度そこで、準備室の扉がノックされた。鈴音が許可を出すと、扉を開けて達也が入ってくる。

「ここにいたのか紫音。風紀委員会本部に一度寄ったんだが、いなくてな。ここにきて正解だった」

「風紀委員の方が終わったからな。俺もここに来たのはさっきだし、どうやら擦れ違ったらしいな」

「CADの調整をやっておいた。念のために確かめてくれ。長期間使っていないから、かなり調整が必要だったぞ」

「悪いな」

紫音は達也からケースを受け取り、開いてCADを取り出した。銃身の長い拳銃タイプのCADであり、全体が黒で塗られていた。

初めて見る紫音のCADに鈴音が興味深げな目を向ける。

「特化型ですか？」

「いえ、汎用型ですよ」

「まさか照準補助の付いた汎用型ですか？ 九校戦でも司波君が披露した……」

「違います。これは銃の形をしているだけで、照準補助装置はありません。普通の汎用型ですね」

黒塗りの銃を彷彿とさせる紫音のCADは、特殊な形状をしている汎用型だ。見た目は特化型で見られる拳銃型だが、その先端部分は照準補助ではなく、領域展開補助のパーツとなっている。

勿論、それを素直に言うつもりはなかったが。

紫音は手に持って違和感がないか確かめ、サイオンを流して起動式展開の直前まで持っていく。そして不具合がないことを確認し、起動式展開をキャンセルした。

「よし、問題ないな」

「それは良かった」

紫音は黒いCADを懐に仕舞いつつ、達也に礼を言うのだった。

横浜騒乱編2

帰り道、紫音は風紀委員としての仕事をこなすために平河小春とキャビネットを共にしていた。最大四人が搭乗可能なバスであり、運転手はいない。全て、コンピューター管理によつて運用されている。そもそも、現代において運転とは趣味の領域だ。

ネットワークで交通量などを把握し、コンピューターが最適ルートで目的地まで運んでくれる。紫音と小春が乗っているキャビネットもそのシステムが搭載された乗り物だった。

「へえ。平河先輩には妹さんが？」

「そうなのよ。四葉君と同じ学年よ。千秋つて言うの。二科生だけだね」

「それは知りませんでした」

「あたしともあんまり仲良くないんだけどね……やっぱりあたしが一科生で千秋が二科生だから、どうしても親が比較しちゃうって」

「拗ねてしまったということですか？」

「そういうわけじゃないんだけど、ちょっと距離が出来ちゃったのよ」

小春は溜息を吐きながらそんなことを言う。

無言で先輩女子とキャビネットを一緒にするのは御免だと思つて紫音が振つた話だったのだが、思いのほか微妙な関係だったので若干後悔する。

「二科生でも司波君みたいに出来る人もいる訳だし、それを目標にして欲しいんだけどね」

「アレは特殊なので、あまり参考にしない方がよろしいかと……」

「まあね。司波君は天才つて域だと思つて。あたしも嫉妬してしまうぐらいの技術力だもの」

事実、達也はトールラスシルバーとして働いているプロだ。

ちなみに務めている会社はFLT(Four Leaves Technology)である。FLTは四葉が絡んでいる会社なので、トールスシルバーのパソナルデータはキッチリ保護されている。
Four Leaves

四葉という如何にも手抜きなネーミングの会社だが、四葉や八葉を意味する名前の魔法系企業は日本でも多いので、丁度良いカモフラージュになっていた。
それはともかく、そんな達也と張り合うのは無茶というものである。

「司波君はあのトールスシルバーを思わせる技術者よ。九校戦でも他校の生徒が叫んでたわ。将来的には、きつと第一線で活躍するでしょうね。論文コンペの作業も一緒にしていると嫌でもそう思わされるわ」

(バレかけじゃねーか)

流石に九校戦はやり過ぎたのだろう。

それに関しては紫音も咎めるつもりなどないが、面倒な疑惑が浮上しているのも間違いない。今は小春も達也とトールスシルバーが同一人物である可能性を頭から排除しているのだろう。だが、ちよつとしたきっかけで繋がってしまう要素は芽生えている。

「確かに、彼の技術力はすさまじいですよね。自分もさきほどCADの調整を頼んでみたのですが、なかなかいい仕事をします。四葉で雇ってしまいたいほどですね」

「あははは。司波君も凄いとところに目を付けられちゃったみたいね」

「魔法師も各所で不足していますが、優秀なエンジニアはそれ以上に不足気味です。ところで、平河先輩はどうして魔工師志望に？」

「魔法を使った戦闘は怖くてね……やっぱり、魔法師って最終的には軍に所属することも多いし、それなら技術者がいいかなって。それに理論系にも興味があったから」

「二応、進路の自由はあるはずですが……確かに、魔法科高校卒業後は

防衛大学か魔法科大学へと進むことが多いですね。大学卒業後はそのまま国防軍というのが一般的な流れになっていますし」

「魔法師にも色んな道があっても良いと思うの。だからあたしは市原の主張する、兵器以外の道には大きく賛成だよ」

鈴音、小春、啓は三人とも兵器以外の魔法師というコンセプトを持っている。啓は五十里家の得意分野である刻印魔法を利用した、経済的な必要となる魔法というものに興味があるようだ。

達也としても、重力制御魔法式熱核融合炉というテーマに引かれたのではなく、この三人の志に引かれたからこそ、論文コンペの手伝いを了承したのだろう。紫音はそう思えてならなかった。

「あ、長く話し過ぎたみたいね。もう到着だよ」

小春の言った通り、キャビネットは停車駅で止まる。

スライド式のドアが大きく開かれ、ドア側に座っていた紫音が先に出了。続いて小春も降車し、キャビネットは次の人を乗せてどこかへ行ってしまふ。

「先輩の家はここから近いのですか？」

「そうね。徒歩で数分かな」

「良かったです。あまり遠いと自分としても大変なので」

キャビネットの駅から出た二人は、とりとめのない会話を交わしつつ平河家へと向かって行く。そして小春の言った通り、数分で到着した。

「ここがあたしの家よ」

「そうでしたか。では、明日からは何時にここへ来れば宜しいですか？」

「うーん……八時でどうかな？」

「了解です。では、自分はこれで」
「明日も宜しくね？」

小春に手を振られて、紫音は来た道を引き返す。
既に十月ということもあり、外はかなり暗くなり始めていた。

(帰る頃には真つ暗だな)

紫音の住む家は、ここから一時間ほどかかる場所にある。

風紀委員の仕事とは言え、少し面倒だと思つてしまった。再びキャビネットに乗つて、自宅から最寄りの駅まで向かう。

だが、その途中で紫音は何かを追跡されていると気付いた。

(これは……精霊？ いや、化成体による使い魔か？)

アイデアを通して感じ取れる異質な波動。

フシオン
サイオン
霊子ではなく想子の塊で、精霊に近い何かだった。紫音がキャビネットの中からチラリと視線を向けると、上空には黒い鳥が一羽いる。恐らく、あれが使い魔だと即座に理解した。

(使い魔による監視……大亜連合の奴らか)

化成体と呼ばれる魔法が存在するのだが、それは大亜連合の魔法師が得意としている。古来から存在しているらしく、これを使うとすると日本の魔法師ではない。断定はできないが、ほぼ確定と言って過言ではないだろう。

それを見て、紫音はひとつピンときた。

(横浜事変の準備にきているのか。つまり順調に原作の流れを辿っているってことだな)

紫音は黒い鳥型の使い魔を消すべきかどうか思案する。

サイオンの塊に幻影魔法を被せ、加重魔法などで質感を出したのが化成体の正体だ。古式故に隠密性に優れた術式なのだが、紫音のようにサイオン波動を感知できるならば隠密も意味をなさない。

普段ならともかく、最近は周囲に気を配っていたので、どうにか気付くことが出来た。これを消したとなると、相手に警戒心を与えることになるだろう。碌に情報を取ることも出来ないなら、泳がせる意味を込めて放置でも良いかもしれない。

所詮、紫音は囷なのだ。

見張られたり観察されるのも仕事である。

最寄り駅についてキャビネットを降りた後も、使い魔は紫音の後を付けているようだった。

「念のために感知範囲は広げておくか」

そう呟いた紫音は、数キロ範囲で波動観測を広げる。

紫音は目で波を見ているのではなく、アイデアを介して波動を理解しているのだ。脳内で観測された大量の波動を処理することで、大まかに周囲の様子をリアルタイムで感知することが出来る。

ただし達也の『エレメンタルサイト精霊の眼』と異なり、常時発動すると脳が疲れてしまう。如何に紫音が反則じみた演算能力を持っていたとしても限界はあるのだ。脳に供給される栄養分も有限なので、こればかりは特典で貰った健康な体も機能しない。無から栄養分を作れる能力ではないからだ。

そこで、この波動感知も必要のない波を観測対象から削除することで、整理している。

電磁波は殆ど削除し、音も生活音レベルは削除する。サイオンやプシオンの他、銃声などの非生活音だけは広範囲に探索していた。

特に、銃声については遠距離狙撃の可能性を考慮して、警戒強めで注意する。

(確か原作で達也も狙撃されてたよな。俺には『再成』なんてないし、気遣っておかないと)

原作において、達也は瓊勾玉にのまがたまと呼ばれるレリックを狙った襲撃犯に狙撃された。このレリックは達也が勤めるFLTが国防軍から複製を請け負ったというものであり、魔法式の保存が可能とされている。

魔法式が保存できるとすれば、それは魔法兵器の大規模製造、及び配備を可能とする。

狙われて当然の代物だった。

そして、高確率で相手は大亜連合だ。絶対とは言えないが、これは原作の知識から明らかである。

現在、紫音を監視している化成品は大亜連合で使用される魔法なので、紫音も達也同様に狙撃される可能性も捨てきれない。紫音は四葉という、厄介な存在なのだから、問答無用で消されかけてもおかしくないのだ。

だが、その日は特に手を出されることなく、無事に家まで辿り着くことが出来たのだった。



その日の八時ごろ、紫音は司波家と結んでいる秘匿回線から連絡を受けていた。

この回線を使うのはかなり久しぶりであり、何事かと考える。

『少し厄介なことになったかもしれない』

「どうした達也？」

首を傾げながら画面の向こう側にいる達也に向かって尋ねる。

すると、達也はジュラルミン製の頑丈な箱を手に取り、カパリと蓋を開けて中身を見せた。そこに入っていたのは、鮮やかな赤色を放つ勾玉。

瓊勾玉系レリックである。

丁度、帰りにこのことを考えていたところだ。凄いいタイミングである。

紫音はその正体を知りつつも敢えて尋ねた。

「それは？」

『小百合さんから預かったレリックだ。魔法式を保存できる可能性が濃厚らしい。国防軍の方からFLTに複製の依頼があつたらしくてな。俺が預かることになった』

「そんな貴重品を一般家庭にねえ……」

『俺と深雪の家を一般家庭と称すなら、な』

四葉の関係者である達也と深雪の家を一般家庭と言うのは少しおかしい。そもそも魔法師の時点で一般家庭ではないのだが、それはそれだ。

ちなみに、小百合とは書類上における達也と深雪の母親だ。二人の父である司波辰郎の後妻であるため、二人にとっては継母ままははにあたる。彼女もFLTの人間であり、四葉のことも多少は知っている。

それはともかく、レリックとはその辺の家に置いておくようなものではないのだ。

「それで問題は？　ただ、レリックを預かるからと言って問題になるわけじゃないだろう？」

『ああ、実はこれを巡って襲われた。風間少佐にも報告したんだが、どうやらかなり大きな組織による犯行らしい。夜間に千メートル級の狙撃をこなしてくるスナイパーに撃たれたからな』

『『再成』まで使ったのか？』

『街頭カメラは誤魔化してある』

「ならいいけど」

達也の異能とも呼べる魔法は、公の場で使って良いものとは言えない。近年のように、どこにでも防犯用監視カメラがある中では、簡単に能力を記録されてしまう。そのカメラ映像も、知り合いの国防軍の方で揉み消したのだろうと予想できた。

『紫音。お前の方で、何か心当たりはあるか？』

「あるにはあるかな？ 少し前に横浜の山下埠頭で密入国者がいたらしい。魔法師の警察官が駆け付けけるも、既に船はもぬけの殻。見事に入国されたって話だ。密入国ってことは海外の組織だ。警察から容易く逃げ切ったわけだし、腕の良いスナイパーを雇えるルートを持った大組織かもしれないな。

詳しい話は分からない。

最近七草の監視が面倒で、黒羽の部隊も動かさにくいから」

『わかった。参考にしよう』

「で、襲撃者は全員殺したのか？ スナイパーを含めて」

『いや、スナイパーは始末したが、襲撃者二人には逃げられた』

「となると、達也がレリックを持ってるのはバレそうだな」

『確定ではなくとも、可能性には入れられるだろう』

紫音は少し考える。

まだ覚えている原作知識が正しいなら、恐らく相手は大亜連合だ。レリックという国家機密レベルの物品を奪おうとする時点で、並みの組織ではないだろう。

機密事項であるはずのレリックを知っていること。

恐ろしい腕のスナイパーを雇えること。

この二点を考えれば、間違いないと言える。

だが、確定も出来ない。

九校戦の時、ノーヘッド・ドラゴン無頭竜ではなく反魔法師団体イザクトが暗躍して

いた。それによって振り回された経験があるため、絶対とは言えない。

「俺の方でも可能な限りは動いてみる……が、期待はするな」

『頼む。俺たちも警戒はしておく。それと九重先生、もしくは小野先生の方にも頼ってみよう』

「小野先生……？ ああ、一高でカウンセラーをやってる人か」

『あの人も九重先生の弟子だ。ある程度は融通も利くし、こういう時は頼れる』

小野遥。

第一高校でカウンセラーをしている人物だが、公安の人間でもある。情報を集めるときには頼れる存在と言えるだろう。

状況と場合によっては紫音以上に役立つ人物だ。

「俺の方も監視された。化成体を使った使い魔による監視だ。この手の術式は大亜連合のものと相場は決まっている。レリックを強奪しようとしたのも大亜連合の可能性がある。確定は出来ないけど気を付けろよ」

『お前を監視していた使い手と、レリックを強奪しようとしてきた奴らが同一組織だと？ それも大亜連合だと？』

「可能性は高い。そして、場合によっては戦争に発展するかもしれない。真夜様からも、近いうちに俺の戦略級魔法が必要になるかもしれないと言われている」

『……よく覚えておこう』

そのほか、数点ほど確認ごとを行って通信を切る。

あまり長く使える回線ではないので、本当に必要事項だけだ。

ただ、達也の思考から、『戦争』という単語がこびりついて離れなかった。

横浜騒乱編3

数日後の放課後、その日も論文コンペに向けて市原鈴音と平河小春は準備をしていた。原稿の校内提出も明日に迫っているので、現在行っているのは詰め作業である。

勿論、紫音も同じ部屋で待機していた。護衛という名目の雑用係である。

本当は達也の仕事なのだが、今は切らしていた3Dプロジェクト用フィルムを買うために、駅前の文具店へと向かっている。五十里啓が買出しに向かい、達也がその手伝いと護衛、そして花音がメインの護衛として付いている。

「さて、見直しも終わりましたね。後は五十里君と司波君が帰ってくるのを待つだけです」

「うん。そうね。四葉君もお手伝いありがとう」

「いえいえ。自分がやったのは荷物運び程度ですから。お茶でも入れましょうか?」

原稿の見直しを終えた鈴音と小春に対し、紫音は休憩を勧める。そんな紫音を見て、鈴音は首を傾げた。

「四葉君はそんな技能も持っているのですか?」

「不思議ですか?」

「会長……いえ、七草元会長はそういうのが得意とは言えませんでしたから。同じ十師族でも違うものだと思います」

「習得できる技能はどんなものでも、っていうのが我が家の方針ですの」

正確には黒羽の方針である。

それはともかく、紫音はカップを用意してお茶を淹れた。大量生産品の緑茶だが、小さな工夫で甘みを出したり苦みを出したりと調整で

きる。論文原稿見直しで疲れているだろうと判断したので、甘み優先でお茶を淹れた。

湯気の立つカップを手に取り、鈴音と小春は一口含む。

「思ったより上手ですね」

「意外だわ……」

「まあ、上手い下手はともかく、お茶を淹れるぐらいなら誰でもできるでしょう？ 別に驚くことでもないと思うのですが？」

「そう考えれば、確かにその通りですね」

ついでに紫音が自分の分を注ごうとした時、不意に携帯デバイスが振動していることに気付く。

取り出してみると、達也からの電話だった。

(コンペ関連なら市原先輩に電話するだろうから……問題か?)

プライベートな内容でもなさそうだったので、紫音は部屋を出るこ
となくその場で通話を入れる。

「もしもし?」

『紫音か? 少し問題が起きてな』

「何があった?」

『俺たちのことを監視している奴がいたようだな。こちらが監視に気
付いていると分かると逃げ出したんだが……』

「当然、捕まえたんだろ?」

『いや、用意周到にも閃光弾を用意していた。逃走用のスクーターも
一緒にな。五十里先輩が摩擦力をゼロにする魔法をタイヤにかけて
捕まえようとしたんだが、何を想定したのかロケットブースターを
使って逃げた』

「ちよつと待て。色々意味が分からん。スクーターにロケットエンジ
ン? 間違つて事故が起きたら大爆発だぞ? 死ぬ気だったのか?」

『さあな。だが、監視していた相手は第一高校の制服を着ていた』
「……また内部犯か」

紫音が思い出すのはブランシユ事件だ。

あの時は壬生紗耶香と司甲がブランシユの手先となり、テロ行為を計画していた。事前に紫音が阻止したので直接の被害はなかったが、二人には重度のマインドコントロールが仕掛けられていたことが分かっている。

今回もその可能性を考えた。

「分かった達也。市原先輩と平河先輩には俺から伝えておく」

『頼む』

「そちらも気を付けて」

紫音は最後にそう言って通話を切る。

振り返ると、鈴音が怪訝そうな表情をしていた。

「随分と物騒な会話のようでしたが……？」

「買出し組が少し……何者かに監視されていたらしく、事情を聞こうとしたところ逃げられたようです。それもスクーターにロケットエンジンを付けるという無茶苦茶な代物で」

それから、紫音が先ほどの内容を要約して二人に伝えた。

一高の内部にスパイがいる可能性を伝えたところで紫音は話を切る。

「お二人も、校内だからと言って油断しないでくださいね」

「こうなっては仕方ありませんね……四葉君は引き続き、平河さんの護衛をお願いします。私も服部君と桐原君に強く要請しておきますので」

「常に平河先輩に付いていることは出来ませんので……先輩も一人に

ならないようにお願いしますね」

「そうね。分かったわ」

小春は不安そうにしながらも頷く。

元々、彼女は気が強い性格ではない。内部犯の可能性を示唆されて不安になるのも仕方なかった。

「今日は早めに帰りましょう。原稿の仕上げも終わったんですよ？」

「そうですね。平河さんも構いませんか？」

「ええ。そうしましょう。五十里君が帰ってきたら、確認だけして今日は解散でいいかしら？」

その後帰ってきた啓たちにもその旨を伝え、その日は早めに解散するのだった。



東京の某所、廃ビルにて、大亜連合の特殊作業員たちが小さな基地を作り上げていた。最低限の設備と武装だけを揃えた本当に小さい前線基地だが、人員に関してはかなり投入されている。

各所に放った連絡員と通信網を形成し、作戦を遂行していた。

「現地協力者は失敗したもようです」

「確か周^{チヨウウたいじん}大人が紹介してきた小娘だったか……こちらの情報が洩れる心配はないか？」

「少女の装備品などは周大人が手配したものですから、こちらまで洩

り着くことは出来ないと思われれます」

「あの若造……どこまで信用できるのか……」

特殊部隊の隊長、チエンシヤンシエン 陳祥山は顎に手をあてながら唸る。

こうして無事に日本へと潜入できたのは、全て周公瑾しゅうこうきんと呼ばれる男のお蔭だ。年齢不詳だが、見た目から考えれば三十に届かない程度だろう。チエンシヤンシエン 陳祥山はそう思っている。

しゅうこうきん 周公瑾は横浜中華街を實質支配する人物であり、対価を払えばこのような手配もしてくれる。だが、信用は出来ない。

一度会っているが、蛇のように何かを狙っている雰囲気があった。

「まあいい。レリックはどうなっている？」

「FLTから持ち出された形跡はありません」

「ふん……フォア・リーブス・テクノロジーだったか。四葉とは無関係だったな？」

「はっ！ 特に繋がりはありませんでした。魔法系企業において、四葉や八葉を意味する名称は好んで使用されているようです」

「紛らわしい……」

大亜連合は、嘗て四葉一族に滅ぼされた大漠を取り込んだ国だ。故に、その一族の恐ろしさをよく理解している。だからこそ、早急に消さなければならぬと考えていた。

「四葉の子供がいたな？ そちらはどうなっている？」

「魔法科大学付属第一高校に通っているようです。各所の連絡員のお蔭で、詳しい位置もすぐに掴めます」

「レリックは後回しだ。先に四葉のガキを始末する」

陳祥山は目を横に向け、側に立っている人物へと命令を下した。

「リユウ呂上尉。現地に赴き、指揮を執れ。四葉のガキを……殺せ」

「是」

リュウカンフウ
呂剛虎。

『人食い虎』とも言われる、大亜連合の魔法師。白兵戦闘においては世界最高クラスの人物だ。

その牙が今、紫音へと向けられようとしていた。



横浜中華街。

ここで人気中華料理店のオーナーをしているということになっていくのが周公瑾だ。しかし、その実態は裏から多方面に手を回す策士でもある。

大亜連合の圧政を逃れた難民を日本に迎える亡命ブローカーとして、更に日本での反大亜連合の活動を支援する資産家としての顔が比較的有名だ。勿論、裏での話だが。

そして、バランスを取るようになっているのが、大亜連合のスパイとしての役目である。日本と大亜連合のどちらにも味方せず、争いを煽る。

真なる目的のために、真なる主人のために働く参謀が彼の本質だった。

「マスター
大師」

周公瑾は自身の店の地下に存在する秘密の部屋で跪く。

その相手は死体をソーサリー・ブースターに変えて通信呪法具にしたもの。金糸銀糸をふんだんに使った漢服を着せられた死体は、防腐措置が施されて、椅子に座らされていた。

勿論、周公瑾はこの通信呪法具の向こう側にいる、真なる主に対して膝を着いているのである。

周公瑾の呼びかけに対し、死体は瞼を開いて空の眼孔に鬼火が灯った。

死体を操るきようしじゆつ僵尸術、そしてサイオン信号を電気信号に変換する一般的技術を組み合わせた傍受不可能な通信装置が起動する。肺のない死体から、おどろおどろしい声が聞こえ始めた。

『公瑾、首尾はどうだ？』

「四葉紫音を大亜連合の特殊部隊に殺害させるよう、唆しておきました。大師マスターより頂いた情報を提供いたしましたところ、随分と乗り気なようで……」

『四葉紫音は警戒心が強い。それに相手の記憶を読み取る魔法を有している。捕まったら、その瞬間に自害しなければならぬ。気を付けよ』

「大師マスターへイグ。問題はございません。大亜連合も私の表向きの素性しか知りませんから」

『ならばよい。』

暗殺に関して、今回は失敗しても良い。その代わり四葉紫音の全力を引き出せ』

「……よろしいのですか？」

周公瑾は主の望みを知っている。

だからこそ、疑問を覚えて尋ねた。

だが、声の主は問題ないといった様子で答える。

『奴を本気で殺すのはもう少し後だ。USNAから魔法師を送り込み、その時は確実に殺す』

「かしこまりました。そのように手配しましょう」

周公瑾の言葉に満足したのが気配で伝わる。

嘗て四葉一族に滅ぼされた大漢、その生き残り魔法師であるジード・ヘイグ。またの名を顧傑^{グ・ジー}。

USNAに亡命した彼は、四葉を滅ぼすためだけに、大漢の亡霊となつて暗躍するのだった。



いつも通り、紫音はキャビネットに乗つて平河家の最寄り駅まで送りに来ていた。明るい内に帰ることにしたとは言え、もうすぐ十一月だ。既に空は暗くなり始めている。

キャビネットの駅から出てすぐ、小春は一通のメールを受信した。

「あれ？ 千秋？」

「妹さんでしたか？」

「うん。今日は友達の家泊るつて……大丈夫かな……」

「今日のこともありましたからね。気を付けるように、とだけ返信を
しては如何ですか？」

「そうさせて貰うわ。少し待ってね」

小春は少しの間だけ立ち止まり、携帯デバイスを操作する。

そしてすぐにデバイスを仕舞った。

「ごめんね四葉君」

「いえ、では帰りましょう。そろそろ暗いですし」

二人は平河家までの数分を黙々と進んでいく。駅からかなり近いので、特に問題もなく辿り着いた。平河家の入口で、最後の挨拶を交わす。

「今日もごめんね。お疲れ様」

「いえいえ。平河先輩こそお疲れ様です。ゆっくりとお休みください。明日も八時ごろに参りますので」

「ええ。お願いね」

「では失礼します」

一礼した紫音は早足で駅へと向かって行く。そして直ぐにキャビネットへと乗り込み、黒羽の部下とやり取りする際に使う専用デバイスを開いた。

パスワードを打ち込み、メールが届いていないかチェックする。

「……何も無しか。気のせいだと良いけど」

今日の帰り道は少しピリピリしていたようだった。

精神系統魔法師特有とも言われる勘だが、襲撃を予感したのである。怪しい動きがないかチェックするつもりで黒羽からの報告書を期待したのだが、今のところないらしい。

最近七草家の監視が厳しいので、情報にも遅れが見られる。報告がないからと言って安心はできない。

紫音は波動観測を広げた。

「今日も監視が一匹。ここは変化なしか……?」

化成体による使い魔が相変わらず紫音の周辺を飛び回っていることは観測できる。サイオンの塊なので、波動感知で真っ先に引つかか

る対象だ。見逃すことはない。

サイオン、プシオン、銃声音などに注意しながら、大人しく待つことにした。

念のために持ち歩いているCADを確認する。

(時間帯は夜だ。これが必要になるな)

光の少ない夜の時間帯では、『ダークミューティア暗黒流星群』は本来の力を発揮しない。これはイコール、紫音の戦闘力低下を意味する。

それを補うために、特殊なCADを必要としていた。

キャビネットを降りた紫音は、いつでもCADを抜けるように気を張りつつ、自宅へと向かう。一步進む毎に殺気立った空気が濃くなっているような感覚を覚えた。

これは間違いないく、襲撃に遭うと悟る。

(目的は何だ？ 論文コンペ絡みという可能性もあるけど……やっぱり俺自身が目的か)

真夜からも注意されていた。

これからは今まで以上に狙われるようになるだろうと。

九校戦で十師族からも一段飛びぬけた魔法力を見せつけた以上、狙われない保証などない。しかも、本家から離れて一人暮らしをしているのだ。他国からすれば恰好の獲物だろう。

しかし、これはチャンスでもある。

襲われた所を返り討ちにすれば、逆に情報を抜き取れる機会となる。

(それに、今回は九校戦で手に入れたアレを試すチャンスだ)

流石にこんな街中で戦闘は避けたい。

紫音は、わざと人の少ない通りへと足を踏み入れた。

そして相手も紫音が誘っていることに気付いたのだろう。人避けの結果が展開される。

更に、紫音の周囲で幾つかの魔法が発動され、街路カメラが一気に破壊された。

「精霊魔法による遠隔術式か。大亜連合で当たり……か？」

日本の古式にも精霊を使う術者は存在する。しかし、紫音を襲う意味はないので、消去法から大亜連合だろう。ずっと紫音を見張っている化成品の使い魔から見ても明らかだ。

紫音の波動感知が足音を捉えた。

コツ、コツ……と高い音を鳴らして近づいてくる。攻撃力の高い、金属を仕込んだ靴を履いていると予想できる。明らかに白兵戦闘を意識した装備だ。

暗がりの向こうで、紫音は大柄な人物の姿を捉えた。

「来たか」

紫音は街路カメラやサイオンセンサーが壊されていることを良いことに、遠慮なくCADを取り出す。

向こうにも戦闘の意思が伝わったのか、獣のように歯を剥き出して構えた。

相手はあまりにも有名であり、紫音は勿論、名前を知っている。

「大亜連合の『人食い虎』、リュウカンフウ呂剛虎」

世界でも指折りの白兵戦闘魔法師が紫音の前に立ちふさがったのだった。

横浜騒乱編4

先に動いたのは紫音だった。

早撃ちの要領でCADを呂剛虎リュウカンフウに向け、引き金を引く。真っ黒に塗られた拳銃型のCADから、見えない弾丸が発射された。音速を超えた一撃が呂剛虎リュウカンフウを仰け反らせる。

音を一方向に増幅、収束することで衝撃波に変える魔法、『音壊』。普通ならば一撃で気絶する威力である。

しかし、呂剛虎リュウカンフウは倒れない。

理由は彼が最も得意とする魔法、硬気功の発展形である鋼気功ガンシキコンによるもの。皮膚の上に鋼よりも硬い領域を展開し、物理攻撃を弾く。衝撃波も事象改変によって生じた結果の物理現象なので、容易に弾くことが出来た。

ただし、凄まじい威力だったためにその反動は受けたが。

「頑丈な奴め……」

紫音は効かないと分かった魔法を無暗に使うことはない。サイオン量が少ない以上、無駄な魔法行使をするわけにはいかないからだ。

このCADは『音壊』を使うことを前提としたギミックが組み込まれている。それは拳銃における銃身の先から、特定周波数の破裂音が出るようになっていなのだ。音の大きさや波長は一定値であるため、『音壊』を放つための変数代入もかなり省略される。

小さな魔法演算で高威力の衝撃波を打つことが出来る特製のCADなのだ。

そして、このCADには照準補助装置が組み込まれていない。代わりに、銃身の先から筒状の事象改変領域が展開されるようになっていいる。

『音壊』もこの筒の内側で音を収束することで、威力を増していた。見た目には衝撃波の弾丸を飛ばす魔法だが、実際は相手の位置まで筒状の事象改変領域を展開し、結果ゼロ距離で衝撃波を撃ち込む魔法

なのである。

こういつた特性のCADであるため、きつちりとCADの先を相手に向けなければならぬという弱点もある。

「四葉……っ！」

呂剛虎は自己加速術式を展開して紫音に向かってくる。その肉體こそが武器である彼にとって、近距離戦闘が勝利の要。そして現在は日も沈んだ夜であり、最も脅威的な『闇』を恐れる必要はない。

だが紫音は迫る呂剛虎に対して、落ち着いたままCADを構えた。拳銃型にもかかわらず、まるで居合でもするような構え。

これには呂剛虎も疑問を感じるが、それでも止まることはない。紫音まで数メートルの位置まで迫った。

「ふっ……」

紫音の目が鋭くなり、息を吐きだす音と共にCADを振り抜く。

これに悪寒を感じた呂剛虎は、急いで自己加速術式を中止し、慣性を打ち消す魔法を行使して緊急回避した。

結果、血飛沫が舞う。

呂剛虎は切り裂かれた胸を抑えつつ、下がった。

「勘がいいな。戦士として一流と呼ばれるだけはある」

そう言った紫音は、再びCADの先を呂剛虎に向ける。

拙いと感じた呂剛虎は咄嗟にその場から回避した。微かに見えたのは、闇を切り裂くようにして伸びる暗黒のライン。

使えないはずの『闇』だった。

夜という制約を受ける時間帯においても、紫音が戦闘力を低下させないために要求した特殊CAD。

黒薙くろなき

このCADは照準補助を外した代わりに、CADの先から筒状の領域を展開できるように補助が組み込まれている。先程は『音壊』のためにこの筒状領域を使用した^{ダークミステリア}が、本来の使い道は別だ。

閃光魔法からの単発『暗黒流星群』。これによって、筒状領域の内側に暗黒のラインが一瞬だけ出現する。

この筒状領域はCADと相対位置が固定されているため、CADを振り回すことで剣のように使うことが出来るのだ。先程はこの一撃で^{リュウカンフウ}呂剛虎の胸を切り裂いたのである。

薙ぎ払う闇。

この魔法はCADと同じく『黒薙』と名付けている。

いや、寧ろこの魔法が『黒薙』というからこそ、CADに黒薙と名付けたのだ。

閃光魔法からの連続魔法であるという特性上、『黒薙』が発動されるのは一瞬だ。そのため、タイミングよく振らなければならない。

紫音は走り出し、CADを構えた。

対する^{リュウカンフウ}呂剛虎は、自分を一撃で殺す魔法を目の当たりにしたことで警戒を増す。

「はっー！」

「ぐ……！」

^{ガンシゴン}鋼気功では防ぎきれない可能性のある攻撃は避けるしかない。

斬撃の軌道上から逸れるように大きく回避し、^{リュウカンフウ}呂剛虎は普段では有り得ない隙を晒してしまう。本来ならば最小限の回避と鋼気功による防御で相手を押し潰すのだが、紫音にはその戦術が使えなかった。

更に、紫音はCADから『黒薙』で攻撃しつつも、フラッシュキヤストで振動系魔法を地面に使う。^{リュウカンフウ}呂剛虎に反撃のチャンスを与えなかった。

だからこそ、^{リュウカンフウ}呂剛虎は認めることにする。

紫音と自分では明らかに相性が悪いと。

一撃で相手を殺すことに特化した紫音は、リュウカンフウ呂剛虎の鋼気功でも防げない攻撃を使ってくる。紫音を殺すならば、一人では足りないのだ。

一対一の戦闘において、間違いなく自分一人では勝てないと認めるしかなかった。

体術の心得もある紫音は、防戦一方のリュウカンフウ呂剛虎に負けたりしない。流石に純粋な白兵能力では彼に劣るが、一撃必殺の魔法を警戒させている今ならば勝機はあった。

(右に回避した後、蹴り)

リュウカンフウ脳波を合わせることで表層思考を読み取り、先読みによってリュウカンフウ呂剛虎相手に有利な立ち回りを続ける。

(半歩逸れて右手で攻撃)

リュウカンフウ呂剛虎の右手に螺旋回転する力場が生まれる。全身の骨肉を連動させ、捻りの一撃を加える中華拳法を発展させた魔法だ。まともに喰らえば、皮膚を引き裂かれ、骨を砕かれる。

紫音は受け止める系統の武器を持っていないので、避けるしかない。

この隙を逃さず、リュウカンフウ呂剛虎は防戦から攻めに移った。

螺旋回転する力場を纏った一撃が紫音の顔面に放たれる。

しかし、これをチャンスと思ったのは紫音の方だった。

——脳波接続完了

——フィードバック防止完了

——魔法演算領域を調律

——『グラム・デイバーション術式強奪』発動

紫音は左手で横からリュウカンフウ呂剛虎の右手を掴む。

リュウカンフウ
呂剛虎の右腕に展開されていた力場は消え去っており、紫音の左手が傷つくことはなかった。

リュウカンフウ
理解できず停止してしまった呂剛虎に対し、紫音は一本背負いを仕掛ける。フラッシュキヤストで慣性や重力を操作し、体格が遥かに上の相手を軽々と背負って地面に叩きつける。

リュウカンフウ
地面に打ち付ける瞬間に加重系魔法を使用したことで、かなりのダメージを入れることが出来た。

背中を強打して息が止まる。

更に切り裂かれた胸から大量の血が噴き出る。

紫音はその隙を逃さない。

—— 記憶領域参照

—— プシオン
霊子を調律

—— 人工精霊の構築

—— ヤタガラス
『八咫鳥』発動

リュウカンフウ
一瞬の間に呂剛虎へと精霊を流し込む。九校戦で得た電子金蚕と、幹比古から得た精霊魔法におけるパターン波長特性によって、紫音が独自に完成させた精霊魔法『八咫鳥』。

隠密性が非常に優れているので、流し込む瞬間の喚起に気付かれなければ、その後もバレる心配は殆どない。

(目的は完了したな)

リュウカンフウ
紫音の目的は呂剛虎に『八咫鳥』を流し込むこと。
後は撤退でも構わない。

リュウカンフウ
数秒とはいえ動けなくなった呂剛虎を捕まえることも、殺すこともせず、紫音は自己加速術式と跳躍術式でその場から逃げるのだった。



「呂上尉リュウが失敗しました。かなり負傷したもようです」
「何……!?!」

陳祥山チエンシヤンシエンにとつても呂剛虎リュウカンフウの敗北は予想外だった。しかも、詳しい報告を聞くと、呂剛虎は見逃されただけのようにも思える。
実に屈辱的な報告だった。

「記録はあるか?」
「念のために映像記録が残っています。再生しますか?」
「やれ」

陳祥山の命令で、部下の一人がモニターへと映像を映し出す。
後詰部隊として控えていた一人が、紫音と呂剛虎の戦闘をカメラで記録していたのだ。念のため、といった程度のつもりだったが、本当に役に立つとは思わなかった。
そして一通りの戦闘を見終わった後、陳祥山は怪訝な表情を浮かべる。

「最後に呂上尉が魔法を停止したのは何故だ……?」

確実に紫音を仕留めるはずだった、呂剛虎の右腕。纏わせていた螺旋の力場は一瞬の後に消失し、紫音はその隙に一本背負いを仕掛けた。

呂剛虎ほどの魔法師が、魔法をミスするとは思えない。
そうになると、それ以外の要素が絡んでいることになる。

「対抗術式か？ いや、そんな様子はなかった……呂上尉に聞くしかないか」

ブツブツと独り言を呟いていた陳祥山は、決心したように命令を下す。

「第一高校への手を広げろ。必要なら他の人員を回しても構わん。例の小娘にも手を貸してやれ。そうだな……武器でも持たせてやれ。それと、呂上尉を呼べ」

大亜連合特殊工作部隊。

その隊長、陳祥山は四葉の凄まじさに改めて危機感を覚えるのだった。



帰宅後、紫音は玄関で座り込みながら一気に息を吐いた。かなり遠回りして隠れながら帰ったので既に夜は遅い。疲れるのも当然だった。

それに、あれ程の緊張感で殺し合いをするのは久しぶりである。相手は世界最高峰の魔法師だったのだ。初見殺しの魔法で攻めたて、どうにか目的を果たすことは出来た。

「はあ……二度と戦いたくはないな……」

せめて昼間ならばもつと楽に勝てた。

夜における戦闘能力の低さは今後の課題である。

『術式強奪』も簡単ではないのだ。アレは『調律』によって精神的波長を合致させ、相手の魔法演算領域を乗っ取るというもの。時間を掛けるならまだしも、咄嗟の発動は結構な負担をかける。

本来ならば変数の書き換えによって魔法をそのまま奪い取ることが出来る魔法だ。

しかし、咄嗟の発動ならば停止が限界。

今回もギリギリだった。

「さて、やることやらないと……」

とりあえず体を起こし、紫音は自室へと向かう。

そこでとあるデバイスを立ち上げ、サイオン情報を電子情報に書き換える特殊な装置を接続した。この装置は感応石を組み込んだタブレット型CADサイズの機器であり、トールスシルバーに依頼して作らせたものだ。紫音は、その装置内に自身のプシオンを収束させて、人工的な精霊を宿らせる。

精霊魔法『八咫鳥』を。

紫音が呂剛虎にも使ったこの魔法は、とある特徴を持っている。それは二つセットであるということだ。古式魔法師でない紫音は、精霊を使役するようなことは出来ない。波動観測で感じ取ることは出来るものの、使役する才能は皆無だ。

そこで、紫音はコンセプトを変えた。

精霊を使役するのではなく、強制的に操作すれば良い。

呂剛虎に捻じ込んだ『八咫鳥』と、紫音が今出した『八咫鳥』は繋がっているのだ。『調律』の特性を付加しているので、片方の『八咫鳥』を操ると、もう一つも連動して動くのである。

精霊は『調律』によってプシオン波長パターンを強制操作することで、各種の動きを再現している。この動きと波長パターンを調べるた

めに、九校戦では幹比古の魔法を見る必要があった。

夏休みの間に練習を重ね、最近になってようやく動かせるようになったのである。自在とまではいかないが、十分に使えるレベルにはなっていた。

「同調開始つと……」

『調律』で精神波長をリンクさせ、精霊の視界を得る。

映し出されたのは、呂剛虎の視界だ。

彼の中に『八咫鳥』を仕込んだので、その繋がりで見えるようになってくる。電子金蚕を元にしてるので、隠密性は非常に高い。よほど活発な動きをさせない限りは、呂剛虎のオーラで隠されてバレることもない。

現在、呂剛虎は会話をしているらしかった。

『呂上尉の話は理解した……次は四葉のガキを殺せるか?』

『是^シ』

『だが、行動を起こすのは後だ。白虎鎧バイフウジヤの着用も許可する。まずは傷を癒せ』

言語は日本語ではなく中華言語——旧中国語——だったが、紫音は理解できた。これも黒羽家の教育のお蔭である。

会話はそれで終わったのか、呂剛虎は話していた男の背後に控えたようだった。

(感じからして……今の男が特殊部隊のリーダーか?)

紫音はそう判断する。

そして呂剛虎の視界を借りて、基地らしき場所を観察した。大量のモニターが並べられ、通信記録などが映っている。各所に放っているスパイからの情報を纏めているらしい。

(丁度いい。これで大亜連合の動きは丸わかりだ)

紫音は手元の『八咫鳥』を波長操作して、呂剛虎に仕込んである『八咫鳥』を動かした。バレないように素早く精霊を移動させ、大量に設置されている機器の一つへと侵入する。

元々は電子金蚕を元にした精霊なのだ。

本来の役目は電子的な部分にある。

機器に侵入した『八咫鳥』は、同調している紫音側の『八咫鳥』へと情報を伝達する。正確には0と1で構成された電子的記録をサイオン信号に変えてそのまま転送していた。

そしてサイオン信号は、再び電子信号に変換されて紫音のデバイスに転送される。

これを専用プログラムで解析すれば、大亜連合の情報がリアルタイムで、全て手元に贈られてくる——誤字にあらず——という仕組みだ。

告げ知らせる使い。

故に『八咫鳥』。

これを手に入れるために、九校戦では少し苦労した。

「さてと、真夜様にも連絡だな。四葉家を敵に回した恐怖を味わわせてやるよ……」

一段落させた紫音は、そう言つて制服を脱ぎ捨て、ベッドに倒れるのだった。

横浜騒乱編5

リュウカンフウ

呂剛虎を撃退した翌日、紫音は何食わぬ顔で普通に登校していた。朝は小春を迎えに行き、通常通りの授業を受ける。午後は手早く風紀委員の書類を片付けて、論文コンペ準備の警護に向かった。

全国高校生魔法学論文コンペティションは三名での発表だが、その準備では多くの生徒が関わることになる。風紀委員や部活連はもとより、機材や資料の準備は美術系や純理論系の部活も積極的に手伝うことになっているのだ。

論文コンペで使用する機材は、ただのハリボテではいけない。設計、補助術式設定、安全装置なども全て生徒で準備して、実際に動くものを作り上げる。

結果として、放課後には多くの生徒が集まっていた。

今日は常温プラズマ発生装置を作成するために、鈴音、小春、啓が中心となって準備を進めていた。

「作動準備、三、二、一……」

鈴音の掛け声で啓と達也が装置を動かす。今回、各種プログラムは達也が色々とアドバイスを行っているので、当然のように作業を一緒にしていた。

小春はデータを記録して、不備がないかを確認している。

結果として、常温プラズマ発生装置は、しっかりと機能した。

内部に閉じ込められた高圧水素ガスがプラズマ化することで電子が飛び出し、激しい光を放つ。エネルギーを加えれば簡単に起こせる現象だが、エネルギー供給なく魔法で実行するのは難しい。今回の実験装置で難所と思われていた部分が見事に成功した。

「やった！」

「第一段階クリアだ！」

設計や組み立てを手伝った生徒たちが歓喜の声を上げる。
鈴音や小春、啓も安堵したようだった。

だがその時、紫音は不正な電波を知覚する。実験装置を制御するデバイスに向けた不正電波の発信源は、思いのほか近かった。それは見学をしていた生徒の一人が持っている機器。

紫音はそれが無線式パスワードブレイカーだと分かった。
即座に自己加速術式を使い、少女の腕を掴む。

「そこまで」

「な、何するんですか!？」

「悪いけど、連行させて貰う。証拠は揃っているんでね」

「あたしが何したって言うんですか!？」

「君が持っているそれ。パスワードブレイカーだろ？」

それを聞いた少女は慌てて隠そうとしたがもう遅い。

周囲も、紫音が確保したことで小さな騒ぎになっていた。同じく近くにいた新委員長こと千代田花音も気付く。

「ちよつと四葉君。どうしたの!？」

「千代田委員長ですか。いえ、この生徒が不正に論文コンペ用の機材にアクセスしようとしたので、即座に取り押さえました。手に持っているパスワードブレイカーが証拠ですね」

「本当……?？」

花音は怪訝そうに少女へと近寄る。

「貴女、名前は?？」

「I—G、平河千秋です……」

その答えに、紫音は『ん?』となった。

名前にかなり聞き覚えがあったからである。

「平河先輩の妹……？」

「そうです。それが何か？」

「何でそんなことをしたんだ？」

「そんなことも何も、あたしは何もしていませんよ。こんなの持っているだけじゃ、不正アクセスの証拠にはなりませんから！」

持っている時点でアウトな代物だが、確かに使った証拠はない。

しかし、この場合は証拠など必要ないのだ。

「残念ながら、風紀委員である俺の言葉は百パーセント信用されることになっている。君がパスワードブレイカーで無線電波を実験機器に向けたのは既に分かっているから、言い逃れしても無駄」

「……電波を飛ばしたなんてわかる訳ないじゃないですか」

「分かるんだよ。特異体質で電磁波に対して敏感なんだ」

紫音の言った通り、風紀委員の言葉はそのまま証拠になる。電磁波を知覚できる紫音が、電波を観測したと言ったなら、それがそのまま証拠になるのだ。

千秋に逃げ道はなかった。

「取りあえず事情聴取ですかね千代田先輩？」

「そうね。連れて行きましょう」

紫音と花音は千秋を風紀委員会本部へと連行しようとする。

だが、千秋は最後の抵抗とばかりに実力行使に出た。

右手に仕込んだバネ仕掛けのダーツが飛び出す。向けられたのは近かった紫音だ。いや、紫音が掴んでいたのが右腕だったので、そのまま矛先を向けられたというのが正しい。

そのような至近距離でも、紫音は冷静にフラッシュキャストで障壁を張った。手で触れていたので、『調律』で簡単に思考が読み取れたか

らこそ、問題なく防げたのだ。

「ちよつとっ!？」

だが、この不意打ちに花音は思わず動きを停止させる。

今は紫音が防いだが、もしも防げなかったら大怪我をしていたのだ。これは流石に見逃せない。立ち直った花音は反射的に振動系魔法を千秋に使い、意識を奪ったのだった。

紫音は倒れる千秋を支える。

「これ、どうします?」

「今のは明らかに傷害未遂よ……取りあえず保健室に運びましょう」

そして騒ぎに気付いたのか、鈴音や小春や啓もやってきた。

特に、小春は気絶している千秋を見て慌てる。

「千秋!? どうしたの!」

「やはり平河先輩の妹でしたか」

「そうよ四葉君。千秋はどうしたの?」

「詳しい説明は後で、取りあえず彼女を運びますので」

紫音は小春を宥めて、千秋を抱える。

取りあえず保健室へと向かうのだった。



その後、事情を理解した小春は驚いたようだった。

そして千秋が紫音に傷害を負わせようとしたことを知り、頭を下げて謝る。

「ごめんなさい四葉君。あたしの妹がそんなことを……」
「謝罪は受け取ります。取りあえず頭を上げてください」

準備も今日の分は鈴音と啓と達也に任せて、小春は紫音と共に保健室で千秋が目を覚ますのを待っていた。軽い振動系魔法による失神なので、すぐに目が覚めるだろうというのが保険医の安宿^{あすか}が出した見解だった。

一度戻るのも手間なので、ここで待つことにしたのである。

「でも、なんで千秋がこんなことを……」

「下手すれば……犯罪行為ですからね。一つ考えられるのはマインドコントロールです。論文コンペに出場する平河先輩の妹ですし、産学スパイの手が加わったと考えるのが自然でしょうね」
「そんな……」

紫音はそんな嘘を述べる。

昨日、『八咫鳥』を仕込んだことで、大亜連合が千秋を唆したことは分かっている。正確には、大亜連合に協力している周公瑾という人物の仕業だ。

だが、あくまで一般人の小春——魔法師は一般人とは言えないが——に真実を言う必要はないので、納得できる理由だけ伝える。

「そのために護衛の俺たちがいるのですが、流石に家族関係までは守り切れませんからね……」

「いえ、責めてるわけじゃないわ」

「分かっています。悪いのはここにいる誰でもありません」

思ってもいないことを真顔で述べる。

別に千秋が悪いとは思っていないが、愚かだと思ったのは事実だ。そしてもう一人、第一高校の内部に裏切り者がいることも知っている。

せきもとこうが
関本 勲。

風紀委員会所属なので、紫音もよく知っている先輩だ。

鈴音と同じく論文コンペ代表候補者だったのだが、今回は選ばれなかった。嫉妬の感情に付け込まれて、利用されてしまったのだろう。こちらにも、近いうちに行動を起こすと思われる。今は問題を起こしていないので捕まえることは出来ないのだが、バレないように警戒はしていた。

「ん……」

そして、丁度良いタイミングで千秋も目を覚ます。安宿の見立て通り、割とすぐに目を覚ました。

小春はすぐに駆け寄って千秋の顔を覗き込む。

「千秋？ 目が覚めた？」

「……………姉さん」

「そうよ」

状況が理解できていないのか、千秋はボーっとしていた。だが、次の瞬間には色々思い出したらしく、跳ね起きる。

「ちよっと千秋。まだ大人しく寝ていないと……」

「別に大したことない」

「でも……」

「うるさいー！」

姉妹にもかかわらず、距離を感じる。

以前に紫音が聞いた通りだった。

このままではダメだと悟り、間に紫音が入る。

「さて、平河千秋さん？ 色々と聞きたいんだけどいいかな？」

「……あたしが言うことは何もありません」

「千秋！」

「お待ちを平河先輩」

紫音が制止したことで、小春は下がる。

そうなったところで、再び質問を開始した。

「聞きたいことは一つだ。君が今回のようなことをしでかした理由を教えてください。何が気に入らなくて論文コンペを妨害しようとした？」

「それは……」

記憶を読み取ってしまえば一発だが、公共の場で同級生の女性に触れるのは一般常識的に良くないこととされているので却下だ。表層意識だけ読み取り、嘘かどうかだけ判断する。

だが、千秋は何も話すことはなく、チラチラと小春の方を見るだけだった。

表層意識から、千秋の要求を理解した紫音は、小春に対して小声で話しかける。

「すみません、平河先輩。彼女が話しにくいそうなので、一度席を外してくださいますか？ 結果は報告しますので」

「……不本意だけど分かったわ。あたしがいても邪魔になるみたいだから」

こういう時は理解の早い小春に感謝だ。

小春が一礼して保健室を一時退室したところで、再び話しかける。

「お姉さんがいて話しにくかった。だよね？」

「……」

「さ、答えてくれないかな？」

千秋は沈黙を貫く。

だが、それでも紫音はじっと待ち続けた。

二分ほど経った頃、先に耐え切れなくなった千秋が話し始める。

「全部アイツが悪いのよ。九校戦が終わってから、姉さんはアイツの話しかしなくなっちゃった。二科生でもアイツのようになれる、二科生でもアイツは凄いつて……。論文コンペもアイツなんかを頼って……」

「アイツってのは司波達也のことか？」

「……」

沈黙は肯定。

紫音はそう受け取って質問を続けた。

「昨日は達也たちの後を付けていたよね？ それで見つかって逃げた。下手すれば街中で大爆発が起るところだったんだけど、ロケットエンジン付きのスクーターなんて誰に用意して貰った？」

「……なんで昨日のがあたしだって分かったのよ？」

「俺の情報網を甘く見ないで欲しいな。それより質問の答えは？」

「……」

ここでも沈黙。

紫音としても、答えは知っているので、千秋の口から聞かなくても別に構わないと思っている。そこで、次の質問に移った。

「なら、今日のことは？ パスワードブレイカーなんか使って何をしようとした？ 論文コンペのプレゼンを失敗させたかったのか？」

「違う！ プログラムをちよつと書き換えて作動しなくしようとした

だけ！ それに、この程度なら、どうせあの男が簡単に解決してしまう。でも、本番直前にプログラムをダメにしてやれば、あの男も、あの男の話ばかりする姉さんも困らせることが出来ると思った。あたしの気持なんか知らないアイツらなんて、プログラム修正で疲れてダウンしちやえばいいって……！」

「要約すると、質の悪い嫌がらせだったと？」

「そうよ！… 悪い!？」

「いや、悪いだろ」

「う……」

正論を言われて言葉に詰まる千秋。

自分でも悪いことをしている自覚はあるのだろう。

「はあ……今回は未遂だったが、下手すれば退学にもなっていたかもしれない。君が想像している以上に大事になっていたと思うんだけど？」

「構わないわ。アイツと姉さんに一泡吹かせてやれば……それで……」

思想の一点突破。

マインドコントロールでよく見られる傾向である。それ以外のことが考えられなくなるので、飛び抜けたことも簡単に実行してしまう。

最悪は入院が必要だろう。

「あの男だつて……姉さんも唸らせる実力を持っているクセに！きつと実技で手を抜いて、あたしたち二科生を嘲笑っているのよ！だから……だからっ！」

「ハイハイ、ストップよ」

興奮した千秋の手を取って保健医の安宿が止める。

確かに、これ以上は質問しても意味がないだろう。今回のことは報告書にして風紀委員会の方でもまとめることにする。今回のことで動機は聞きだせたのだから、充分だろう。

「分かりました。では失礼します」

紫音は、外で待つ小春に報告するため、保健室を出たのだった。

横浜騒乱編6

数日後の夜、論文コンペまであと八日となった土曜日に、紫音は真夜から電話を受けていた。

『紫音さんが手に入れてくださった情報のお蔭で、産学スパイは全て駆逐できたそうです。先ほど、国防軍から連絡がありました。』

お手柄ですよ紫音さん』

「ありがとうございます」

『ふふふ。七草の無能さも浮き出てきたのではないかしら？ 苛立つ弘一さんを想像するだけで笑みが零れそうになるわね』

「しかし宜しいのですか？ わざわざ七草に喧嘩を売るようなことをして」

『構いません。第一高校に進学していた紫音さんが独自に、偶然にも手に入れた情報のお蔭で事件が解決したのですから』

「母上……とても楽しそうですね」

『ええ、楽しいわ』

人工精霊魔法『八咫鳥』によって、大亜連合特殊工作部隊の動きは丸裸になった。今もリアルタイムで紫音のデバイスに情報が集まっております、すつかり特殊工作部隊（笑）となっている。

特に特殊工作部隊と本国との通信ログは重要な情報を教えてくれた。

『さて、紫音さん』

「はい」

『私たち四葉家は、紫音さんの功績によって重要な情報を掴みました。現在、大亜連合の軍は鎮海軍港に多数の駆逐艦を招集中です。更に空母一隻が駆逐艦四隻を伴って既に出航。こちらは横浜へと向かっているようですね』

「把握しております」

『空母については公海を航行中ですので、国防軍は把握したところで攻撃できません。恐らく、横浜で大規模侵略を実行した際、後詰としてやって来るのでしょう。いえ、正確には紫音さん、貴方一人を殺すためだけにこれだけの部隊を揃えたようですね。』

「達也さんの戦略級魔法で始末するのは難しいと思われませう」

「津波の心配ですね」

『その通りです。紫音さんは、その時に『日蝕』^{エクリプス}を披露しなさい。専用CAD、神籬^{かんなぎ}の使用を許可します。本家から送られますから、しっかりと受け取ってくださいね』

「かしこまりました」

名目上、空母の派遣は、紫音を含めた十師族への対策である。

侵略の決行日は十月三十日の論文コンペ当日であり、その日には一条、四葉、七草、十文字が揃うだろうと大亜連合も理解していた。

特に四葉は恐ろしい。

一切の躊躇いを捨て、四葉の名を持つ一人を滅ぼすためだけに空母の派遣を決定したのだ。

大げさではない。

嘗て、四葉は数十人で一国を滅ぼした。

一人に対して空母をぶつけるのは妥当と言える判断である。

四葉という存在を過小評価しないからこそだった。

『四葉の敵を『闇』に沈める……その日を楽しみにしているわ』

「ええ、ご存分に楽しませてみせましょう」

『ではおやすみなさい。ゆっくりと休みなさい』

「はい。失礼します」

大画面に映されていた真夜の姿が消えて、音声通話も途切れる。

大亜連合も、まさか既に四葉の掌の上で転がされているなど、知る由もないだろう。決して触れてはならないものへと触れようとした罰が降りかかろうとしていたのだった。



同刻、東京某所にある大亜連合特殊工作部隊の秘密基地で、隊長の
チエンシャンシエン
陳祥山は苛立っていた。

「各地の連絡員が全員消えただど!? どういうことだ!」
「も、申し訳ありません。現在、調査中です。ですが、恐らくは日本の
国防軍に捕まってしまったものと思われます」

興奮した陳祥山は拳を握りつつ……すぐに冷静に戻った。
隊長として、いつまでも苛立っているわけにはいかない。次の指令
が必要だった。

「何処から情報が漏れたか分かるか?」
「不明です。最有力は現地協力者かと……特に第一高校の娘は既に失
敗し、捕まったようです」
「第一高校の小娘か……」

周公瑾の紹介で手に入れた駒だったが、所詮は素人。下手を打って
捕まってしまったのだと容易に想像できた。所詮は捨て駒なので、
失ってもいたくはない。だが、そこから情報が漏れたのだとすれば、
すぐにでも消さなければならぬ。

陳祥山の判断は早かった。

「明日予定していたFLTへのセキュリティ攻撃は中止しろ。レリッ
クよりも先に小娘だ。現在位置は分かるか?」

「国立魔法科大学付属立川病院です」

「呂上尉」

陳祥山は呂剛虎リュウカンフウを呼びつつ、鋭い視線を向けた。

「小娘を消せ」

「是」

「ついでだ。第一高校にいるもう一人の協力者も消しておけ。もはや
必要ない」

作戦のためならどこまでも非情になれることで有名な陳祥山チエンシャンシエン。
その本性が顔を出し始めていた。



翌日の日曜日、紫音は平河小春と共に魔法科大学付属立川病院へと
赴いていた。小春が妹である千秋のお見舞いに行くというので、護衛
として紫音もついてきたのである。

勿論、紫音は呂剛虎リュウカンフウが千秋を始末するために、今日ここに来るのを
知っている。正確には、各種手配の通信ログから予想したのだが。

しかし、元からこの日は小春から一緒に病院に行ってくれないかと
頼まれていたのだ。大亜連合の『人食い虎』が来るからお見舞いを止
めましょうとは言えないので、危険と知りつつもやってきたのであ
る。

寧ろ、あえて呂剛虎リュウカンフウに接触し、始末するのもアリだと考えていた。

「平河先輩。千秋さんは何階に入院しているんですか?」

「四階よ。今日は午後から論文コンペの準備があるし、それまでは一緒にいようと思うんだけど、四葉君も付き合ってくれる?」

「勿論ですよ。そのために来ましたから」

日曜日と言えど、あと一週間に迫った論文コンペの準備がある。今日はプログラムのデバッグ作業、その他細かい見直しなどをする予定だった。

小春は休みの日にまで付き合ってくれる紫音に申し訳なさを感じつつも感謝していた。

そして恐怖の象徴とも言える四葉も、本当は心優しい人たちなのではないかと思い始めていた。

勿論、錯覚だが。

別に紫音は優しいわけではない。人並みの気遣いは出来るが、心からの思いやりではない。

人の心が読めるゆえに、多くの嘘や裏切りを見抜いてきた紫音は、身内とその他という区分で人を分ける。身内は犠牲を払っても守るべき存在であり、その他は最悪切り捨てることの出来る存在だ。

その他の存在をどうでもいいと思っているわけではないが、いざという時は切り捨てる事が出来る。

今はいざという時ではないので、人並みの気遣いを見せているだけなのである。

「そう言えば、お見舞いですから花や果物でも持ってくればよかったですね」

「そんな、いいのに!」

「いえいえ、もし機会があれば、次の時は持っていくことにしましょう」

「気遣わせてごめんなさいね」

二人はエスカレーターを昇りながらそんな会話をする。

そして四階に辿り着いた二人は、千秋が入院している病室の扉の前まで移動した。そして小春がノックをする。

病室に付けられている電子錠が外れた音がしたので、小春がスライドドアを開いた。

「お見舞いに来たわ千秋」

「姉さん……とアンタは！」

「ちよつと千秋！ 四葉君はお見舞いに来てくれたのよ。アンタって言い方はないでしょう!？」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ平河先輩。俺は気にしていませんから」

紫音が宥めると、小春も落ち着いたらしい。

大きな溜息を吐いて、ベッドにいる千秋へと近寄る。そして備え付けの椅子に座り、千秋と目を合わせた。

「具合はどう？」

「別に……元からどこも悪くない」

「千秋……」

小春は言葉を詰まらせる。

マインドコントロールを受けている可能性から入院ということになったのだが、本人にはその自覚がないらしい。それがマインドコントロールの特徴とも言えるため、当然と言えば当然だが。

そんな千秋の手を握りながら、小春は頭を下げた。

「ごめんね千秋」

「姉……さん？」

「あなたと司波君は違うもの。比べたりなんかしてごめんなさい。本当はあなたが努力しているのも知っているわ。魔法工学だって、期末

テストの成績は司波君に続いて二位。しかも九十二点だったんでしょう？ あたしだってそんな点数は取れないわ。だからね、ごめんなさい」

突然のことで動揺したのか、千秋はオロオロとしながら視線を彷徨わせている。

そして紫音と目が合った途端、視線を逸らして小春の方へと向けた。

「うん。あたしもごめん」

「千秋……ごめんね」

今日、ここに来るまでに小春は妹と仲直りしたいと言っていた。それが叶って何よりだと、紫音は心の内で考える。

良い雰囲気なので、一度席を外そうかとも考えたが、すぐにそんな余裕はなくなった。

(殺気!?)

病室の入口から微かな殺気を感じる。

咄嗟に紫音は小春たちを庇う位置に立って、右腕を突き出した。

突然のことで驚いた小春は驚きの声を上げる。

「よ、四葉君?」

「下がってくださいい平河先輩。千秋さんも俺の後ろで大人しくしてくれ」

その言葉と共に、病室の扉が破壊される。

メキメキと音を立てながら無理やり破り、顔を出したのは獣のような殺気を放つ大柄の男。

リュウカンフウ
呂剛虎。

「死ね！」

紫音は即座に『闇』を発動した。

今は午前中なので、使える光は幾らでもある。この前と異なり、自在に暗黒のラインを飛ばすことが出来る状態だ。

そして呂剛虎リュウカンフウも病室の扉を破った途端、四葉紫音の顔が見えたので、本能的にその場を離れた。結果として『闇』を回避することが出来たので、命拾いする。

(来るとは知っていたけど、このタイミングか)

紫音は振り返って、怯える小春と千秋に指示を出した。

「すぐに暴力行為対策警報を出してください。俺はアイツを始末しますから」

「危ないわ四葉君！」

「何もしない方がもっと危ないです」

紫音は小春の言葉を振り切って病室から飛び出す。

それと同時に、病院内で警報音が鳴り響いた。無事に小春か千秋が暴対警報のスイッチを押してくれたのだろう。

紫音は、病室前の廊下で鋭い眼光を放つ呂剛虎リュウカンフウへと目を向けた。

「一週間ぶり、か。『人食い虎』」

「四葉……」

「先輩の付き添いでお見舞いに来ていたら、まさかお前に出会えるとはな。丁度いい機会だ。ここで始末してやる」

白々しくも偶然だと主張して『暗黒流星群』ダークミューティアを放とうとする。

病院内なので派手には使えないが、数本の黒いラインが呂剛虎リュウカンフウを貫

く軌跡を描いた。

自己加速術式を使いつつ、野性的な勘でライン上から回避したリュウカンフウ呂剛虎だが、廊下という狭い場所では明らかに不利を強いられる。つまり、撤退こそが正解だった。

この病院はエントランスが吹き抜けになっており、各階の廊下は剥き出しになっている。リュウカンフウ呂剛虎は廊下から飛び降りて、一気にエントランスまで落下した。

「ちっ！ 待て！」

紫音は『闇』を使おうと思ったが、エントランスには多くの人がいるので控える。間違って誤射が起これば、幾ら紫音でも揉み消しは出来ない。

仕方なく、フラッシュキャストで重力を中和しつつ、落下した。

だが、肉体の強化で自由落下の衝撃に耐えたリュウカンフウ呂剛虎は、身体を引きずりながら病院の外に逃げてしまう。ゆつくりと落下している紫音では追いつけなかった。

千秋が狙われていることを知っている紫音は、深追いを止めてその場に留まる。また、大亜連合の魔法師には鬼門遁甲という八門遁甲から派生した方位を狂わせる術者がいると聞くので、追っても無駄だろうと判断した。

その後は事情聴取などで時間を取られ、小春と共に学校へと行くのは午後二時頃になってからだった。



学校に赴き、準備室へと到着した紫音と小春は、まず初めに意外な

報告を聞くことになった。

「関本先輩を捕まえた？」

「そうだ」

紫音の問いに達也が答える。

今日の午後、ロボ研でプログラムのデバッグ作業をしていたところ、催眠ガスを利用して眠らされるところだったらしい。達也が眠っている隙に、ハッキングツールでプログラムを盗み出そうとしていたのだが、問題なく捕まえたという。

「ご丁寧に自動警報装置を切ったからの行動だったそうだが、『再成』を持つ達也は催眠ガスを無効化して手動による警報を作動させた。結果として千代田花音が駆け付け、御用となったのである。」

それを聞いて、紫音は『ようやくか』と思っていた。

（関本先輩が大亜連合に唆されているのは知っていたけど、今日動くとはね。呂剛虎リュウカンフウの暗殺対象に入っていたから、俺が病院で邪魔しなかつたら一高で暴れられていたかもしれないな）

そう考えると、病院で呂剛虎リュウカンフウを撤退させたのは意味のあつたことだと言える。

「それで、関本先輩がプログラムを盗み出そうとした理由は？」

「それは——」

「それは私からお答えしましょう」

紫音の質問に対して、達也の代わりに鈴音が口を開いた。

「関本君は純粋に魔法の発展を望んでいます。魔法理論は世界で一丸となって発展させるべきだというオープンソース主義者というわけです。だからこそ、魔法後進国にも我が国の魔法技術を公開し、世界

的に発展を促すのが目的だそうですね」

「浅はかですね。軍事的対立がなければ素晴らしい考えですが」

「その通りです。国家機密漏洩の罪に問われる可能性がありますね」

紫音だけでなく鈴音もバツサリと切り捨てる。

だが、関本だけが悪いとは言い切れないだろう。恐らく、その考えに付け込まれて、マインドコントロールを仕掛けられたのだ。時間をかけず、証拠も残さずにマインドコントロールを行っている様子を鑑みると、精神干渉系の魔法師が関与している可能性が高い。

いつかのブランシユ日本支部リーダーが使用していた光波振動系の『邪眼』モドキとは異なり、本物の精神干渉系『邪眼』を有していると思われる。

『八咫鳥』でも、その辺りの情報は詳しくなかったもので、分からないままだ。

「あと一週間とは言え、こういうことも起こり得るということを心に留めてください。宜しいですね」

『は』

鈴音の忠告に、皆返事をするのだった。

横浜騒乱編7

翌日、月曜日の放課後。

今日は珍しく千代田花音委員長が書類仕事をしていた。前委員長である摩利も付き添いで忙しそうにしている。論文コンペの直前ということもあって、仕事が溜まっているのだ。

紫音も風紀委員会本部でいつも通りの書類仕事をしていると、達也がやってきた。久しぶりにこちらの手伝いをしてくれる——本当はこちらが本職だが——のかと思ったが、そうではないらしい。

花音の前に立ち、せきもとしきお関本勲との面会を求めた。

機密漏洩という大きな犯罪の未遂とはいえ、彼も希少な魔法師の卵だ。現在は八王子特殊鑑別所に拘留されており、反省と改心が見られ次第、一高に復帰することになっている。そのため、面会に関しては問題ないことだ。

だが……

「ダメ」

花音は一言でバツサリと切り捨てた。

勿論、達也は納得しない。

「何故です？」

「ダメなものはダメよ」

「いえ、ダメなのはわかりましたから、理由を教えてください。風紀委員長、または生徒会長を通して鑑別所の面会申請が受付されるのは分かっています。最終的な判断は学校側にあります。理由も教えてもらえずに門前払いでは納得できませんよ」

正論で言い返した達也に対し、花音は非常に不機嫌そうな表情を浮かべた。

元から気の強さが目立つ顔立ちなので、そういう表情をされると怒

らせてしまったのではないかと思ってしまう。花音としては、達也を引きさがらせるために、敢えてそのような雰囲気を出していたのだが、生憎と達也にそんな感性はなかった。

達也が首を傾げていると、花音は諦めたように答え始めた。

「……面倒なことになるから」

「面倒……とは？」

「惚けないで！ この際だからハッキリ言うけどね、あなたはトラブル体質なのよ！ 例え望んでいなくても、あなたに落ち度がなかったとしても、トラブルの方からやって来るの。鑑別所に行きたいですって？ 絶対に面倒事が起こるに決まっているじゃない！ この忙しい時期に仕事を増やさないで！ ただでさえ四葉君もオーバーワーク気味なのよ!」

「あ、それは同意です」

「ほら、四葉君も言っているじゃない！」

花音に言われたことは、非常に心当たりのあることだ。

紫音のフォローがあっても尚、かなりの頻度でトラブルに巻き込まれている自覚がある。故に言い返しにくかった。例え理不尽な理由だったとしてもだ。

しかし、そこで助けを出したのは意外にも摩利だった。

「まあ待て花音。達也くんにそこまで言うのは酷というものだろう？

それに関本から直接被害を受けたのは彼なんだ。事情を聞きに行きたいと思うのは自然なことだと思うけどね」

「でも摩利さん……！」

「そう言うな。お前の気持ちはあたしもよく分かる」

「分かるんですね……」

紫音の小さなツツコミを摩利はスルーしつつ、言葉を続けた。

「実は明日、あたしと真由美で関本の様子を見に行くことにしていたからな。その付き添いという形なら構わないだろう。ああ、ついでに四葉も連れて行こう」

「はい？ 自分もですか？」

「そうだ。達也くんはトラブルメイカーとして有名だが、同時に四葉はトラブルシューターとして有名だからな。二人いれば相殺できるさ」

「あの、渡辺先輩。自分は便利屋ではないのですが？」

「先輩命令だ。一緒に行こうじゃないか」

「まあ、摩利さんと四葉君が一緒にいるなら……」

「いやいや、千代田先輩もなに許可出そうとしているんですか？」

結局、紫音の言葉は受け入れられず、明日の放課後に特殊鑑別所に行くことになった。小春の護衛という仕事もあるのだが、そちらは何故か真由美が手を回して部活連に代理を頼んでいたという。

どうやら、本気で達也のトラブル体質と相殺させるつもりらしかった。

それを聞いて紫音が呆れたのは言うまでもない。



火曜日の放課後、紫音たち四人は八王子特殊鑑別所にやってきていた。論文コンペまで五日という時期であるため、出場者三名は最後の詰めを行っている。達也は結局のところお手伝いなので、ここで抜けたところで問題にはならない。

寧ろ、風紀委員としてこちらの問題を解決する方が優先されることだろう。

今回はその名目でやって来ていた。

だが、紫音はかなり嫌そうにしていたが。

「はあ〜」

「どうした四葉？ 溜息なんかしていると幸せが逃げて行くぞ？」

「いえ、面倒事が起こる予感がいたしましてね」

予感というより確信である。

『八咫鳥』によって送られている情報によると、現地協力者である関本勲を処分するべく大亜連合が手を出してくるらしい。その手配情報を昨晚知ったのだ。

やはり達也はトラブル体質なのではないかと疑う。

しかも、今回は平河千秋の暗殺失敗から反省し、かなり大きな部隊を動かしているらしい。昨日の今日なので、部隊の用意に手間がかかり、丁度放課後の時間帯に襲撃があると予想された。

だから溜息を吐いていたのである。

「ごめんね四葉君。達也君のトラブル体質を相殺するなら、やっぱり四葉君が一番だから」

「あの、それって理由になってませんよ」

「あらごめんささい」

真由美と摩利の認識も、紫音と達也のフォロー役らしい。

本質的に間違っていないので、否定もしにくい。

ともかく、特殊鑑別所の入口で少し面倒な手続きを行った後、四人は案内用デバイスだけ渡されて自由行動を許される。職員の一人もつかないのは、四葉と七草の名前があったお蔭である。

本当のところは、このために紫音を連れてきたというのが真相だ。

これから行うのは、あまり合法とは言えない手段故に、誰も見てい

ないのが望ましいのである。

「達也君と四葉君はこっちにきてー！」

真由美に連れられて、紫音と達也は別室に行く。

そして摩利だけが関本が拘留されている部屋に入った。

拘留部屋といっても、牢屋のような場所ではない。生活に不自由のない、かなり充実した設備になっているのが紫音と達也にも分かった。

紫音たちが入った部屋は、関本の部屋の様子を観察できる隠し部屋だったのである。

「渡辺……何の用だ」

特に拘束もされていない関本は、部屋に入ってきた摩利を見て力なく問いかける。

彼は元風紀委員であり、摩利のことをよく知っている。

だからこそ、無意識のうちに震えていた。

「勿論、事情を聞きに来た」

「い、いくらお前でも、ここで魔法は使えないぞー！」

叫びながらも後ずさる関本に、摩利は不敵な笑みを浮かべる。

魔法などなくても、相手を自白させることぐらいいけない。魔法を使う者であるがゆえに、魔法だけが特別だと錯覚しがちだが、魔法技能以外にも奇跡を起こせる方法は存在する。

一瞬だけ風が吹き、甘いような不思議な匂いがした。

関本は慌てて口と鼻を抑えるが、既に遅い。

両腕を力なくダラリと下げて、意識を朦朧とさせる。

摩利は薬を吸い込ませるためだけに魔法を利用したが、調合自体は自分で行っている。隠された彼女の特技だった。

アロマテラピーのように嗅覚を刺激する薬品を調合することで、白剤に似た効果を生み出すのである。風紀委員ならば皆が知っている摩利の悪い趣味だった。

「へえ。初めて見た」

「奇遇だな。俺もだ」

一年生の紫音と達也は、聞いてはいても見たことはない。

初めて見る彼女の技術に対し、特に紫音が驚く。

摩利の質問に対し、関本が順調に答えていく様を見て、黒羽でも使えないかと考えたほどだった。

「質問だ。司波達也を催眠ガスで眠らせた後、何をするつもりだった？」

「……デモ機のデータを吸い上げた後、司波の私物を調べる予定だった……」

「理由は？」

「レリック聖遺物」

これには達也も面倒だと思った。

まさかそんなルートでレリックを狙われるとは思わなかったからだ。あれから特に音沙汰が無かったので、諦めたのかと思っていたが、どうやら虎視眈々と狙っていたらしい。

正確には、紫音が動いたことで大亜連合が放っているスパイが全て捕まり、レリックどころではなかったのが理由だ。関本についても運がよければ、程度でレリック強奪を命じられていたのである。

そして、これに驚いたのは真由美だった。

「達也君、レリックなんか持っているの？」

「さあ？ 確かに少し前からレリックについて文献を調べていましたから、それで勘違いしたのではないのでしょうか」

真顔で嘘を吐くのは流石である。

あまりに突拍子もないことだったので、真由美も特に追求しなかった。

それに、どちらにせよ追求できなくなった。

突如として非常警報が鳴り響いたのである。

四人は一度部屋を出て廊下で合流し、状況を確かめることにした。

「侵入者のようですね」

答えを知っている紫音は、白々しくも警報情報を見ながら呟く。

「侵入だと？ どの馬鹿だ？」

摩利がそう言ったのも無理はない。

先々日、病院で襲撃事件があったところであり、警察も捜査を強化していた。勿論、その時、病院で襲撃者を撃退したのが紫音である。

真由美が持っていた案内用デバイスにも、すぐに避難ルートが提示された。

そこから逆算すると、どうやら相手は屋上から侵入してきたらしい。流石に正面突破はないだろうと思っていたが、これはまた予想外だ。

マルチスコープを持つ真由美が状況確認すると、二十人以上の襲撃者が武装して暴れているのが見える。

「警備員が応戦しているわね。鎮圧には時間がかかりそうよ」

「そのようですね。それに、そちらは時間稼ぎで、本命はこちらのようです」

達也の知覚が、もう一人の襲撃者を捉えた。

廊下の少し先にいる大柄の男。

紫音が二度も戦った相手である。

「出たな。呂剛虎」
リュウカンフウ

「なにっ!？」

「……?」

驚く摩利に対し、真由美はキョトンとしている。

ちばなおつぐ 千葉修次の恋人である摩利は、その関係で呂剛虎のことも認知していた。より正確には、この前の病院事件で呂剛虎が襲撃してきたからこそ知っているのである。

あの日の夕方、摩利は修次と共に千秋に事情を聞きに行こうとしていた。ところが、その日は午前に襲撃者がいたことで、面会を完全に謝絶されていたのである。

警察関係者と縁が深い千葉家の伝手を辿り、襲撃者の正体を知った。

それが呂剛虎。
リュウカンフウ

その恐ろしさは修次から聞いている。

「先輩方は後ろへ」

「いや、四葉こそ下がれ」

紫音と摩利が同時に前に出る。

そして先に紫音が右手を翳し、問答無用で『闇』を使った。数本からなる漆黒のラインが空中で閃き、呂剛虎の足を穿とうとする。しかし彼は、発動を勘だけで感じ取り、それを回避してみせた。

壁や天井を走るといふ荒業で無理やり回避した呂剛虎は、紫音と摩利まで一瞬で接近する。

しかしあと数メートルといったところで足を止めた。

そして次の瞬間、慣性操作で無理やり停止した呂剛虎の目の前を、摩利の斬撃が掠めた。

「ほう。避けるのか」

摩利が手に持つのは二十センチの短冊が二枚繋がれた、三節構造の小型剣。かなり特殊な構造の武器らしい。

そして動きを止めたところを真由美の『ドライ・ミーティア』が襲う。二酸化炭素を凝縮させ、その時の熱を運動エネルギーに変換して飛ばす魔法。嵐のようなドライアイスの弾丸が呂剛虎リュウカンフウに襲いかかった。

鋼よりも硬い鋼気功ガシキコンがそれを防ぎつつ、下がる隙を与える。
しかし、紫音は追撃の瞬間を逃さない。

「なら、これは防げるか？」

再び連射される『闇』の一つが脇腹を貫通する。

完全に一方向へと『調律』された光を防ぐには、紫音の干渉力を上回る必要がある。だが、波動の事象改変に特化している紫音の干渉力を上回るのは簡単ではない。鋼気功も容易く貫かれた。

一瞬だけ止まった呂剛虎リュウカンフウに対し、今度は摩利が攻撃を仕掛ける。

二枚の短冊を飛ばして呂剛虎リュウカンフウの上でクルクルと回転させる。そして柄として残っている部分と二枚の短冊に斥力場を発生させ、三方向から魔法斬撃『圧斬り』を実行しようとしていた。

「四葉、足止めをー」

「了解」

再び『闇』を放ち、両足を穿って呂剛虎リュウカンフウに膝を着かせる。

動けなくなつた呂剛虎リュウカンフウは、それでも戦士としての意地から立ち上がろうとした。だが既に遅い。

摩利の『圧斬り』は未熟故に、三つ同時となると発動に時間がかかる。
しかし、今の時間稼ぎで十分な猶予を確保できた。

三方向からの斬撃が呂剛虎リュウカンフウに襲いかかる。

ここで問題なのは、あらゆる物理攻撃を弾く鋼気功だ。摩利の『圧斬り』など容易くはじいてしまうことだろう。そこで、紫音が密かに右手を伸ばし、魔法を発動させた。

グラム・デイバージョン
〔術式強奪〕

精神波長を調律し、魔法演算領域を乗っ取る。これによって魔法を強制キャンセルした。

鋼気功を失った呂剛虎リュウカンフウは摩利の『ドウジ斬り』によって容易く切り裂かれた。

胸、両肩を同時に切り裂かれたことで、力なく倒れる。

このままでは出血多量で死に至るのではないかと思うほど、流血していた。

「終わったな」

「そうですね先輩」

その後やってきた警備員によって無事に呂剛虎リュウカンフウは確保されたのだった。

横浜騒乱編 8

リュウカンフウ
呂剛虎が捕獲されたことで、
チエンシャンシエン
陳祥山は撤退を決意した。利用していた隠れ家を捨てて、一時的に横浜中華街へと逃げ延びていたのである。

そして、現在、東京某所に作っていた隠れ家は国防軍によって抑えられているのも分かっている。

少しでも遅ければ、彼も捕まっていたことだろう。

現在は、周公瑾と対面していた。

「周先生、色々世話になりました」
チヨウ

「恐縮です陳閣下」
チエン

お互いに心にもないことを述べる。

あくまでも形式的なことなので、お互いに余計なこととは言わない。元よりそういう関係性なのだから。

「本国との連絡で無事に艦艇が集結しているとのこと。空母も公海上で待機していますので、無事に作戦を実行できそうです」

「それは何よりです」

「しかし……一つ問題がございまして」

陳祥山は一旦言葉を切る。

そして手に持った猪口で酒を口に含んでから、言葉を続けた。

「ご存知かと思いますが、武運拙く、我が副官が敵の手に落ちてしまいまして……例の四葉に」

「ええ、存じております。まさかリュウ先生が……」

「敵の手に落ちる失態を晒したとはいえ、彼は我が国に必要な人材。どうか手を貸してくださいませんか？」

これは苦渋の決断。

渋い陳祥山の表情からそれが読み取れる。

だが、周公瑾は露ほどにも表情を崩さず、笑顔で承諾した。

「勿論ですとも閣下。これは同胞の危機。見過ごすわけにはまいりません」

そして周公瑾は身を乗り出すようにして陳祥山へと囁く。

「実は十月三十日、その日に呂^{リュウ}先生が横須賀の外国人刑務所へと移送されることになっているのです。勿論、そのルートも把握しております」

「ほう」

「便宜を図りましょう。その代わりと言っては何ですが、この中華街には出来るだけ被害を出さないように計らってくださいませんか？」
「ええ。ですが、我が国の最も重要な狙いは横浜ベイヒルズタワーにある魔法協会。必ずしもとは約束できませんが、中華街に戦火が広がらないよう、手配しましょう」

「充分です閣下。感謝します」

そして周公瑾は、伏せていた目を上げて、陳祥山に尋ねた。

「ところで閣下」

「まだ、何かあるのですか？」

「いえ、ただ……陳^{チェン}閣下に精霊を憑依させている者がいるようですが、取り除いて差し上げましょうか？」

「なんだと!?!」

陳^{チェン}祥山は自身の体を探るが、何か異物が入り込んでいるようには見えない。いや、指摘されたことでようやく気付けるようになったという程度だ。

だが、周公瑾は一目でそれを見抜いてみせた。
笑顔を崩さぬ目の前の若造に……である。
陳祥山はギロリと彼を睨みつける。

「そう睨まないでください」

「貴様も魔法師だったのか？」

「御戯れを。陳閣下チエンに自慢できるようなものではございません。こ
ういったものを見抜くのが得意なだけですよ。」

「……いいですか。この程度でしたらサービスしましょう」
「……いいだろう。取り除いてくれ」

「では失礼して」

周公瑾はスツと手を伸ばして陳祥山に触れる。

そしてあつという間に精霊を追い出してしまった。

だが、その精霊を見た周公瑾は内心で驚く。

(これは……見たことのない……遠隔術式でしょうか？ 術者との繋
がりがかく見えませんか)

精霊の構成は大亜連合の術式に近いが、日本神道の系統も含まれて
いるように感じる。いや、正確には大亜連合の精霊を神道の操作方式
で無理やり操っているように見えた。

精霊と心を交わして使役するのではなく、強制的に支配する。

周公瑾はそのような印象を受けたのである。
さらに調べようとしたところ、その精霊は不意に消失してしまっ
た。恐らく、強制的に切断したのだろう。

「終わりました。どうやら相当な術者のようですね。こちらから解析
を掛けようとしたところ、逃げられてしまいました」

「まさか……情報が筒抜けだったのはそのせいだったのか？」

「ええ、恐らくは」

陳祥山は自分に憑依していた精霊のせいでも、早く作戦が失敗していたと知り、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

レリック強奪は完全に失敗した。

しかし、侵略作戦はまだ終わっていない。

そして四葉という存在を警戒し、過剰とも言える戦力を用意している。

波乱は十月三十日まで鳴りを潜めるのだった。



一方、『八咫鳥』を調べられそうになった紫音は、強制的に潰すことで人工精霊を消していた。大亜連合が東京の隠れ家を捨てた時点で、『八咫鳥』は電子機器から陳祥山に憑依させていたのである。

だが、あの周公瑾は侮れない。

誰一人として気付かせなかった『八咫鳥』に気付いたのだから。

この『八咫鳥』の弱点として、向こう側の精霊を掌握された場合、こちらの手元に置いている操作作用の『八咫鳥』を通してこちらの情報が筒抜けになる可能性があるということだ。

見つけた時点で、即座に消すのが最も有効的である。

精霊を強制操作する手法しか持たない紫音では、これが限界だった。

「向こうの情報が手に入らなくなったか……これ以上は奴らの足取りを掴むのも無理だな」

紫音は、デバイスを閉じて背もたれに体を預ける。

そして何度か深呼吸した後、ベッドの方へと目を向けた。

明け方、四葉家の第二位執事である花菱が持ってきた紫音のCAD。荒事担当の彼が自ら持ってきたのだから、このCADがどれだけ重要なのかよくわかる。

CAD名、神薙^{かんなぎ}。

強化ジュラルミン製アタッシュケースの中には、銃身の長い拳銃型CADと、一つのタブレット端末。二つは有線で連結して使用することを前提としている。

「本当に、コイツの出番があるかもしれないってことね……」

このCADは夏に一度使って以来だ。

長期休暇で本家に戻った時、調整のために動作確認をした。

戦略級の魔法を使う上で必要なCADだが、一度も戦略級魔法を使ったことはない。おいそれと実験できるものでもないのので、実戦投入は初となる。

だが、使えなかったとしても問題はない。

最悪の場合、CAD無しでも戦略級魔法『リベリオン』は発動可能なのだから。

数日後に迫った論文コンペのために、紫音は神薙を手取るのだった。



論文コンペ当日、風紀委員の紫音は会場の見回りとして横浜国際会議場に入っていた。午前八時半から各魔法科高校から集まった有志

部隊が、プロの魔法師と共に警備をしている。

そして手伝いをしていたとはいえ、論文コンペ出場者ではない達也は紫音とペアで警備をすることになっており、主に会場の中を歩いていた。

「紫音、聞きたいことがある」

「どうした？」

「今回の敵についてだ。藤林少尉から、首謀者を取り逃がしたと聞いている。そして奴らの情報は四葉家から貰ったものだという事も聞いた。紫音は何か掴んでいないのか？」

「……今回の情報はほとんど全部、俺が仕入れた。だから大抵は把握している」

それを聞いた達也の視線が鋭くなる。

だが、紫音は気にすることなく言葉を続けた。

「公海上に大亜連合の空母、駆逐艦四隻が待機中。そして横浜にはゲリラ部隊が潜んでいるらしい。残念ながら、ゲリラの場所までは把握していない。正確には、把握していたけど位置を変えられた」

「空母だと？ 戦争でも起こす気か？」

「戦争を起こすんじゃない。奴らにとっては三年前から戦争中なんだよ」

三年前、沖縄に大亜連合が大艦隊を率いて侵略してきた。

その時に達也たちが旅行で訪れていたのだが、深雪を傷つけられた達也は怒り、力を振るう。世界を滅ぼす悪魔の力を振るった。

摩醯首羅マヘーシユウアラと言われた沖縄の悪魔。

大亜連合でそのように認識されている存在こそ、司波達也なのである。

勿論、三年前の沖縄戦では大亜連合が大敗を喫することになった。今回の侵略は、その時の雪辱を果たすつもりで計画されたのだろうか

予想できる。

「ちなみに言うと、空母と駆逐艦は俺一人を殺すためだけに用意されているそうだ。随分と四葉を買ってくれたと思っっているよ。まあ、撃沈するけど」

「……神薙を持ってきているのか？」
「そういうこと」

理解の速い達也は、状況を把握したらしい。

論文コンペティションの日に、大亜連合は確実に大規模侵攻をする。理由は横浜にある魔法協会関東支部のデータバンク、論文コンペティションのデータ、更に魔法師の卵である魔法科高校の生徒を虐殺することである。

「達也、心配しなくても、これらの情報は防衛省に流してある。対策の部隊がいつでも送られる手筈になっている」

「なるほど。さつき藤林少尉と出会ったんだが、一〇一旅団も出動準備が出来ていると言っていた。一高控室での会話だったから詳しい話は聞かなかったが、紫音の話を聞いて全部繋がったな」

「恐らく、達也の出動もあり得る。覚悟はしておけよ」
「……そうだな」

意外かもしれないが、深雪を守る任務に支障が出ないかぎり、軍の任務が優先されることになっている。国防軍から達也に出動要請があった場合、四葉は拒否することが出来ない契約なのだ。

だから、達也に出動命令が下った場合、大黒竜也特務士官として力を発揮しなければならない。

「事件が起これば、俺は横浜全域に『リベリオン』を発動させる。全ての戦場をコントロールして深雪も守り抜く。お前は深雪を害する外敵を排除して来い。空母は『日蝕』^{エクリップス}で沈めるから」

「もしも……そうならならな」

「これは真夜様からの依頼でもある。ま、俺はガーディアンじゃないんだけどなあ」

「済まないな」

「いやいや。四葉を裏から支えるのが俺の仕事だから。これぐらいはやってやるさ」

ある程度情報交換をした紫音と達也は、そのまま見回りの仕事を続ける。

まずは、昼間まで何事もなく終わったのだった。



警備のメンバーの中では一足早く昼食を貰った紫音と達也は、十二時の段階で午後の見回りに参加していた。今は論文コンペも休憩中なので、多くの生徒が行き来しているのが見える。

その時、配布されている無線から警備隊総括である十文字克人の声が聞こえてきた。

『各員に告ぐ。午後からの警備は防弾チョッキを着用せよ。繰り返す。午後からの警備は防弾チョッキを着用せよ』

「達也」

「ああ」

紫音と達也はこの命令を聞いて自分たちの予感を補強する。

克人も何かを感じる所があつたのだろう。実戦を想定した防弾チョッキを着用するという事は、何かが起こる可能性が高いと考え

ていることに等しい。

十師族十文字家代表代理である彼の言葉だけあつて、説得力も充分だった。

「ん……？ あれって」

防弾チョッキを着ている途中で、紫音はある人物を見つける。

それは九校戦で優勝を争った仲であり、共闘した仲でもある三高の一年生。

一条将輝だった。

紫音の視線に気付いたのか、将輝も目を合わせてきたので声をかける。

「一条、やはり来ていたか」

「四葉……それに司波か！」

「九校戦以来だな」

次に紫音は将輝のペアである十三束とみつかはがね鋼に声をかける。紫音と彼はクラスが一緒なので、お互いに良く知っているからだ。

「十三束もお疲れ。一条と組んでいたんだな」

「うん。君は司波君とだったんだ」

「風紀委員で一緒だからな」

そして挨拶を済ませたところで、本題に入る。

「それで一条。この防弾チョッキ着用命令、どう思う？」

「どうって……ピリピリしている感じはある。戦いが始まる前の戦場みたいな鋭い空気だ」

「へえ、流石に実戦経験者は言うことが違うね」

「茶化すな四葉。そういうお前はどうかなんだ」

「襲撃はあるだろうね。確実に」

将輝の問いかけにハッキリと肯定で返す。

これには将輝だけでなく、十三束も息を呑んだ。

「四葉家の者として忠告しよう。敵は来るよ」

「……了解した。一条として忠告を受け取ろう」

紫音と将輝はしっかりと目を合わせて言葉を交わす。

そして踵を返し、二人は別れた。紫音の方には達也も付いてくる。そして会話が聞こえなくなるぐらい離れた頃、達也が話しかけてきた。

「あそこまで詳しい話をしてよかったのか？」

「彼も一条の長男だ。知っておくべきだと思ったただだよ」

本当に戦争が始まれば、十師族の者として動くことになるだろう。

特に後継者である十文字克人と一条将輝は確実に防衛に参加するはずだ。戦いが起こる覚悟をして貰うためにも、これぐらいの情報は伝えておくべきである。

紫音もホルスターに仕舞っている神薙に触れつつ、決意を固めた。

(初めての……大虐殺だな)

運命の時刻まで、後少し。

横浜騒乱編9

午後三時、第一高校のプレゼンテーションが始まった。

重力制御魔法式熱核融合炉という加重系統魔法三大難問に挑戦するということで、多くの注目を集める発表だ。核融合によって連続的に質量が変化してしまうため、重力魔法を安定化させるのが難しいというのが主な課題だったのだが、鈴音はアプローチを変えることで解決して見せた。

それは重力制御の負担を減らすということである。

核融合で必要なのは、原子核同士のクーロン力（電気的斥力）に逆らって接触させること。クーロン力を上回る重力で無理やり引き起こすのが、一般的な考えだ。

鈴音はクーロン力を減らす方向で術式を開発し、一瞬だけ核融合を起こすことにした。

断続的に核融合を発生させ、熱は重力制御とクーロン力制御の魔法式に充てる。余った熱が回収分のエネルギーになるという寸法だ。

魔法による水素の常温プラズマ化、魔法によるクーロン力低下、魔法による重力制御、熱回収、そして再び水素のプラズマ化……と言う風に繰り返すことで、断続的に核融合反応を実行し、熱機関とするのである。

今回はデモンストレーション用の実験機なので、エネルギー回収効率は非常に悪い。そのため、どちらかと言えば回収効率はマイナスであり、核融合機関維持には魔法師が必要だ。だが、そこを改良すれば、一番初めに起動するだけで、維持が可能になる。

これが鈴音の主張だった。

「へえ……あれってループキャストだろ？ 達也が手伝ったのもあの辺？」

「そうだ。主にプログラムの手伝いだが、俺がやったのは平河先輩の補佐程度だ」

「達也が手伝っている時点で色々ズルいと思うけどね」

この時間帯、会場内警備をしていた紫音と達也は、一番後ろで立ちながら鈴音の発表を見ていた。国際会議場の外は、魔法協会が手配したプロの魔法師による警備がされている。各校の風紀委員や部活連が担当するのは、国際会議場の中にある各フロア、および会場内だった。

「次は三高か。予想通り吉祥寺だな」

「ああ、俺としてもカーディナル・ジョージの発表は少し楽しみだ」

「俺は技術系に関してあんまり得意とは言えないからなあ。知識はあるけど、実用的に役立てる知恵はないわけだし」

「紫音には魔法力があるだろう?」

「いや、こうやって軍事的要求以外に魔法師が役に立つってことを主張する場にいると、俺も思うところがあるってことだよ」

紫音は少し遠い目をする。

自分の持つ魔法は破壊の力だ。四葉家が生み出した……いや、第四研究所が生み出した最強にして最凶の兵器が紫音なのである。

四葉の求めた精神系統魔法の終着点を体現したのが『調律』。

故に生まれた時から兵器としての道は決まっていたといっている。

「後悔しているのか? 四葉の兵器になったことを」

だが、紫音は達也の質問に首を振りつつ答えた。

「そうでもない。今の俺には満足している。ただ、俺は精神的な面で本当に真夜様の子と言っても過言じゃないからな。そういう点で言えば、不満は消えた。昔は嫌だったけど」

「あの実験の後遺症か?」

「後遺症ってほどじゃないと思う。あの実験の後から、メンタルが強くなったのは確かだから」

それに、と紫音は言いながら鋭い目を達也に向ける。

「こういう非常事態の時は、力が必要だからな」

その言葉と共に、爆発音が響く。

横浜国際会議場が激しく揺れた。

午後三時三〇分。

後世において、人類史の転換点と呼ばれる事件が始まった。



横浜、山下埠頭ふとうの入出港管制ビルにロケット弾による攻撃が行われた。これによって管制ビルで働く公務員たちは避難することになり、港の監視に穴が開く。

その隙を突いて貨物船に偽装した揚陸艦がミサイルを発射。

辺り一帯は混乱に包まれた。

更に、この混乱に乗じて、各地に配置されていたゲリラ部隊が一斉に行動を開始。

狙いの一つには、論文コンペが行われている横浜国際会議場も含まれていた。

午後三時三十七分。

今度は会場を直接揺らすような激しい爆発音と振動が響く。

論文コンペに集まっている生徒や各企業の重役たちは悲鳴を上げた。

「達也は深雪の方に行け。それと達也、俺はアレを使う」

「分かっている。伯母上の命令もあるのなら許可しよう」

紫音はそう言って会場の扉を開き、フロアに出た。

すると、既に正面入り口ではプロの魔法師と敵部隊の交戦が始まっている。敵は対魔法師用のハイパワーライフルを所持しているので、迂闊に攻撃を喰らう訳にはいかない。

ハイパワーライフルは、魔法師の持つ情報改変強度を超える威力の弾丸を放つというものだ。

「今の内に使っておくか」

弾丸に当たらないよう、物陰に隠れながら自身の持つ特異魔法を発動した。

『調律』。

これによって紫音は周囲の人間と精神波長レベルでリンクしていく。勿論、フィードバックが起こらないように調整された魔法だ。『調律』において一番難しいのがここで、四葉家の実験でも、この部分のコントロールに重点を置いていた。

精神波長を『調律』された人物は、非魔法師であっても紫音と同じ魔法演算領域を持つことになる。更に、その魔法演算領域は紫音のコントロール下におかれるのだ。逆に魔法師の場合、本人が元から持っている魔法演算領域と紫音の魔法演算領域に互換性が生じる。それによって他人の魔法演算領域を自在に操作することが可能になる。

非魔法師を魔法師に変える。

そして魔法師は自分の持つ魔法演算領域を紫音に奪われる。

この調律はウイルスのように次々と感染していき、あつという間に広範囲へと広がっていく。

戦略級魔法『リベリオン』が密かに発動した。

本来、これは他者の魔法演算領域を操り、強制的に過剰な魔法を発動させることで自爆させるのが戦略級魔法としての使い方だ。自分の魔法演算キャパシティを超える魔法演算を実行することでオー

バーロードを引き起こし、精神から殺す。

周囲を破壊せず、人間だけを殺す魔法。

自分の魔法演算領域に裏切られる魔法。

しかし、『リベリオン』はそれほど無差別ではない。

敵味方が入り乱れる場所で使用した場合、味方の魔法演算領域は残り、敵の魔法演算領域は非魔法師を含めて奪い取ることが出来る。更に言えば、『調律』のお蔭で敵のサイオンを紫音のものとして扱うことも出来る。

サイオン量不足など殆ど意味がない。

寧ろ、無尽蔵と言っても過言ではない。

紫音は、この場で『リベリオン』を発動させることで、会場内にいる魔法科高校の生徒たちともリンクを確立した。深雪や達也ともリンクすることになるので、先程は一応の許可を取ったのである。

魔法演算領域を奪い取らずとも、このリンクがあれば紫音は『リベリオン』範囲のどこにでも魔法を発動させることが出来る。

「把握、完了」

リンクを繋げば繋ぐ程、紫音の魔法演算領域は広がる。

仕組みとしてはソーサリー・ブースターと同じだ。他人を使って自分の魔法演算領域を増幅させているのだから。

つまり、『リベリオン』は幾ら広げても限界がない。

そこに人がいれば、幾らでも広がる。

リンクはネットワークのように繋がっているので、途中で途切れる心配もない。

紫音は五分かけて、周囲一帯にいる数千人と魔法演算領域をリンクさせた。

「戦闘開始」

そう呟き、紫音は無数の『ダークミューティア暗黒流星群』を放つ。

それは敵の体ではなく、武装を正確に破壊した。

現在、紫音は敵から魔法演算領域を徴収している状態なので、今は無闇に殺さず、捕縛して利用するつもりなのである。

武器を失った敵は立ち往生し、敵魔法師は魔法が使えなくなって動揺する。

後は魔法協会が手配したプロたちによって取り押さえられた。

次いで、国防軍も国際会議場へと踏み込んでくる。元から四葉家が防衛省に情報を流しておいたお蔭で、早急な出動が出来たからだ。国防の本職たちは国際会議場に侵入している敵部隊をあつという間に捕虜へと変えてしまったのだった。



国際会議場へと駆け付けたのは、達也も所属する一〇一旅団独立魔装大隊だった。隊長の風間少佐はもとより、多くの隊員が駆け付けたことで事態は一気に収束。

論文コンペに集まった生徒や各企業の重役たちは、独立魔装大隊に誘導される形で別れて避難することになった。

論文コンペで使用したデモ機の処分をした後、基本的には各校で集まって避難指示に従う。地下の避難経路や地上など、それぞれ分かれて移動することになった。独立魔装大隊の隊員が守ってくれる形になっっているので、生徒たちも少しは安心しているようだった。

そんな中、達也と深雪だけは別室に呼ばれていた。

風間少佐、藤林少尉の二名が達也を待ち構える。

「大黒特尉。情報統制は解除されている」

「はっ！」

部屋に入るなり掛けられたその一言で、達也は敬礼する。
つまり、ここからは独立魔装大隊特務士官、大黒竜也として動くこととなる。

「藤林少尉。特尉に状況の説明をして差し上げろ」
「はい」

藤林は手に持ったデバイスを操作し、部屋にあるスクリーンへと戦況を映し出す。

「現在、我が隊を中心として横浜に国防軍が展開。港では最も激しい戦いが繰り広げられています。近くにある魔法協会支部、つまり横浜ベイヒルズタワーでは独自戦力を展開し、防戦に集中しているもようです。

既に避難ルートは確保。順調に一般人の避難は進んでいます。
しかし、沖合上に空母一隻、駆逐艦四隻を発見。

大規模な戦闘が予想されています。

また、敵は大亜連合で確定。内閣府より速やかな迎撃作戦が命じられています」

「この通りだ特尉。これより特尉は例のムーバル・スーツを着用し、部隊を率いて貰う。目標は港の早急な確保、及び迎撃準備だ」

「質問があります」

「手短に言い給え」

「迎撃、と申されましたが、具体的にはどのような？」

その問いに対して、風間は眉を顰めつつ答えた。

「防衛省より、新たな戦略級魔法実験を行うという通達があった。これは『マテリアル・バースト』のことではない。そもそも、あの規模を撃滅するには『マテリアル・バースト』は強すぎる。余波による

津波の心配があるからだ。

そして防衛省に圧力を掛けたのが……四葉家だ」

「四葉が……なるほど、紫音ですね」

「その通りだ。新たな戦略級魔法師として、四葉紫音が相応しいかを見定める実験でもある」

紫音の言っていた通りになったな、と達也は考える。

原子力が禁止されている今の時代において、空母は効率の悪い兵器だ。しかし島国の侵略戦争においては非常に役立つ兵器でもある。ここでコストを無視して投入してきたということは、この戦争が大亜連合にとって沖縄以来の本気であることが窺える。

この戦力は四葉紫音一人を恐れてのものだとは誰も思っていないようだが。

達也は、深雪の肩に手を置いて、優しく語り掛けた。

「深雪。この通りだからお前は避難してくれ。既に紫音の加護が周囲を覆っている。これも伯母上の命令だそうだ」

「お兄様……」

深雪は、達也が戦場へと身を投じるのは自分の責任だと思っっている。

かつて力の至らなさをゆえに傷つき、達也に眠る残された感情を引き出してしまった。

沖縄で『悪魔の力』と『神の如き力』を振るい、国防軍に対して力を見せてしまった。

それが今に繋がっていると思っっている。

だからこそ、達也の力を縛る枷を外すことを決意した。本来は勝手に外してはいけない枷だが、達也は深雪のガーディアンという立場なのだから、深雪の好きにしても構わない。

深雪の魔法力を枷として達也を縛る『誓約』^{オース}を一時的に解除することに決めた。

「枷を外します」

深雪は達也へと両手を伸ばし、その頬に触れる。

一瞬だけ目を見開いた達也は、次の瞬間には目を閉じて跪いた。

頭一つ分だけ低くなった達也に対し、深雪は唇を近づける。そして額へと静かに口付けを落とした。

嵐が吹く。

封じられていた達也の魔法力が解放され、『分解』の力を最大まで引き出せるようになった。

普段は束縛されている力の解放に伴い、サイオンの嵐が部屋を薙ぎ払う。

これには風間と藤林も眩しそうにしていた。

そして深雪は一步下がり、スカートの裾を掴んで優雅に一礼する。

「ご存分に、お力を振るってくださいませ。お兄様」

四葉の有するもう一つの兵器が解放されたのだった。

横浜騒乱編10

貨物船に偽装した大亜連合の揚陸艦内部で、司令官の一人が声を荒げていた。

「どうなっている！ 何故押されているのだ！」

「不明です。こちらの魔法が発動しないという報告が上がっています！」

「ふざけるな！」

紫音の発動した『リベリオン』によって大亜連合の魔法師は、ただの人になつていた。寧ろ、保有する魔法演算領域を奪い取られて紫音に利用されているほどである。

「各地で黒い光を観測。一瞬で部隊が無力化されていると連絡が！」

「黒い光だと？ それは魔法か？」

「不明です！」

「何をしている。さっさと解明しろ！ 沖合の風山フォンシヤンはどうした!？」

「現在、沖合百キロの地点を航行中。まだ時間はかかるとのことですよ！」

「本隊が到着するまで、何としてでも港を死守しろ！」

風山フォンシヤンとは大亜連合が用意した空母のことである。魔法師と燃料電池によって航行する空母であり、コストは非常に高い。それでもなお、この船を投入したのだから、作戦の失敗は許されない。

風山フォンシヤンから通達！ X—II型爆撃機を六機発進させたとのことですよ！」

「爆装は？」

「衝撃波弾頭弾を装備しているとのことですよ！」

「よし！ いけるぞ！」

航空機による爆撃があれば、火力で押し切れる。
これでどうにかなると司令官も安堵した。
しかし、次の瞬間、別の通信が入る。

「重機動部隊の一つが壊滅しました！ 敵は飛行魔法を使った奇襲部隊!？」

「壊滅だと!？」

「殺したはずの相手が生き返ると……訳の分らぬことを言っておりま
す!」

「なんだそれは？ 他に何か言っていないのか？」

殺した相手が蘇るなど意味が分からない。

激しい戦闘のせいで混乱しているのだろうと誰もが思った。

その一言を聞くまでは。

「摩醯首羅……最後にそう聞こえました」

「馬鹿な……沖繩の悪魔だと……」

司令官を始めとした一部の古株たちは言葉を詰まらせる。

その中で、新人の連絡員が疑問を投げかけた。

「摩醯首羅とは一体……？」

「黙れ！ 戯言を抜かすなと言いつ返し！」

そう言っつて司令官は力なく椅子に座る。

もはや彼らにとつてトラウマと言つていい存在なのだ。三年前に
大敗を喫した悪夢が、再びここで訪れるなど、何の冗談だと言いたい。
根拠のない悪戯だと割り切つて、司令官は再び指示を飛ばすのだつ
た。



敵のゲリラ部隊によつて桜木町駅シェルターの入口を破壊され、地上を進んでいた第一高校の生徒たちは立ち往生していた。ゲリラ部隊こそ、護衛の国防軍がすぐに排除してくれたが、このままでは地下シェルターに入ることが出来ない。

これによつてパニック状態へとなりつつあった。

「み、みなさ〜ん！ 落ち着いてください〜！」

生徒会長の中条あずさが必死に呼びかけるも、逃げる場所がないというのは覆せない事実だ。シェルターという目標地点を失ったことで、何をしていたかが分からず、皆が焦っている。

あずさも今は呼びかけることしか出来なかった。

「ど、どうしましょう。真由美さ〜ん！」

「あーちゃん落ち着いて。こうなったら、お父様に頼んでへりを寄越して貰うわ。大型輸送へりを使えば、ギリギリいけると思う」

地下シェルターには一高生徒だけでなく、逃げ遅れた市民も集まっている。入り口を破壊されて落胆している姿がちらほらと見えていた。

「瓦礫を取り除いてへりの発着場所を確保しましょう。それより、シェルターの中は大丈夫なのかしら？ 確か二高と八高が地下通路でシェルターに向かっていたわよね？」

国防軍の指示に従い、第二高校と第八高校は地下から進んでいた。通路の広さに制限があるので、迅速な避難のために、他の高校は地上から進むことになり、第一高校も地上組だったのである。

他にも第六高校と第九高校も地下から進んでいたのだが、こちらは別の避難シェルターに移動していたので、そちらの現状は不明である。

今問題なのは、入り口を破壊された桜木町駅前の地下シェルターが無事かどうかだった。

「いえ、心配はいりません。二高と八高の生徒は無事なようです」

真由美の疑問に対し、答えたのは精霊魔法を得意とする幹比古だった。

人が入れない瓦礫の隙間に精霊を飛ばし、シェルター内部が無事であることを確認する。

「どうやら、国防軍の方が早急に対処してくださったお蔭のようですね。破壊されたのは本当に入口だけのようです」

「響子さんたちに感謝ね」

真由美は安堵してデバイスを操作し、ヘリを呼ぶ。

それから市民や生徒に向かって指示を出した。

「皆さん。私は十師族七草家の長女、七草真由美です。ここ地下シェルターは入ることが出来ないようですので、父のヘリを寄越すよう、要請しました。発着に備えて瓦礫を片付けてください。そして落ち着いて行動し、第一高校生徒会長、中条あずささんの言うことをしっかりと聞いてください」

「わ、わたしですかあ〜っ!?!」

あずさは一人でパニックになっているが、真由美はウインクして『任せたわよ！』という合図を送る。それでも真由美は十師族の一員であり、非常事態には逃げる訳にはいかない。

超法規的存在であり、多くの優遇を受けるナンバーズであるがゆえに、このような時は責任を果たさなくてはならないのだ。

既に十文字克人は、十文字家の次期当主として横浜ベイヒルズタワーへと向かっている。そこにある魔法協会関東支部を死守するため、首都防衛を想定した魔法師の役目を果たしに向かったのだ。

そして紫音も、四葉家として戦闘に参加している。

噂によれば、将輝も一条家として義勇軍に加わったらしい。

だからこそ、真由美もここに残ってギリギリまで市民を守るべく戦わなければならない。

ヘリを待つ間、再びゲリラ部隊がやって来ないとも限らないからだ。

「僕も残ります。五十里家として、百家の者として同じく責任を果たさなければなりません」

「あたしも残るわ。あたしだって千代田だもの！」

「だったら千葉のあたしも残らなきゃね」

「僕も残るよ。吉田家は百家じゃないけど、古式魔法の大家として優遇されている」

「俺も百家じゃないが、腕には自信がある。……それに折角鍛えたのに、使う機会がないのは癪だからな」

「下級生がこういつてるんじや、俺もやらないわけにはいきませんね」

五十里啓、千代田花音、千葉エリカ、吉田幹比古、西城レオンハルト、そして桐原武明もゲリラに備えて警戒すると言い張る。

戦闘力が低いと言わざるを得ない柴田美月や壬生紗耶香も同じく頷き、同意した。

最後に深雪も真由美に向かって告げる。

「私も残ります。お兄様も戦っていらつしやるのですから、私も逃げる訳にはいきません」

「そう………だったわね」

達也が一高のグループから離れて戦闘に参加するにあたり、ここにいるメンバーなどの一部には、達也の身分が少しだけ明かされた。同時に守秘義務を言い渡されているので、大きな声では言えないが。

「下級生たちが残るのに、あたしたちが逃げる選択肢はないな。そうだろう市原?」

「そうですね。真由美さんは抜けているところがありますから、私たちでフォローしましょう」

「自分も当然残りますよ。これでも次期部活連会頭に推薦されていますから」

「もう………摩利にリンちゃん、それにはんぞーくんまで………」

結局、第一高校は戦闘力を持つメンバーが中心になって周囲を警戒することになったのだった。



一方、克人と同じく別行動していた紫音は、港付近でその力を振るっていた。

無数の黒い流星が閃き、次々と装甲車両を破壊する。

銃弾は情報防壁によって弾き飛ばし、黒い薙ぎ払いが直立戦車を引

き裂く。

「ば、化け物！」

「早く魔法師を呼べ！」

「違う。魔法が発動しない！」

「なんだと!？」

戦略級魔法『リベリオン』は既に横浜全域に発動しており、相手の魔法師は魔法演算領域を紫音に奪い取られている。どう頑張っても魔法を使うことは出来ない。

例えCADから起動式を読み取っても、紫音が魔法演算領域を操ることで、それを拒否しているのだから。

「四葉殿。まもなく制圧完了です」

「そうですか。引き続き、俺が無力化した相手兵士の捕縛を頼みます」
「了解です」

現在、紫音には独立魔装大隊幹部の真田繁留大尉さなだしげはるが付いていた。彼他に数名の部下が、大型火器を手にして援護に徹している。そしてその他の歩兵部隊が紫音の倒した相手兵士を捕縛して、捕虜にしていた。

黒い光の圧倒的な制圧力が大亜連合の軍を一網打尽にする。

(深雪の方は特に問題なしか……殆どこちらで始末しているし、遠隔起動も必要なさそうだな)

膨大な魔法演算領域を得たことで、紫音の電磁波知覚能力は極端に上昇している。

これによって『リベリオン』効果範囲は好きに観測することが出来る状態だった。当然、深雪たちも紫音の観測下に入っている。仮に危険が生じれば、遠距離から『暗黒流星群』ダークミューティアを使って対処できるのだ。

魔法において物理的距離は関係なく、認識できる距離こそが重要になる。

電磁波を知覚できる領域が、紫音が魔法を発動できる領域なのだ。つまり、横浜全域が紫音の領域なのである。

尤も、全域を同時に対処できるわけではないが。

(港の制圧も時間の問題か)

そんなことを考えていた時、海の方から低空飛行で迫る六つの物体を知覚した。

まだ点のような大きさだが、速度からするとすぐにここまで来るだろう。

「真田大尉、あれは？」

「どうやら戦闘機の様です。どうされますか四葉殿？」

「撃ち落とします」

例え音速の二倍で飛ぶ機体であっても、光の速さには敵わない。

光速攻撃という反則じみた魔法が放たれ、無数の『闇』が接近しつつあるX―II戦闘爆撃機を破壊した。六機は海上で破損し、慣性を残したまま墜落して大爆発と共に水飛沫を上げる。

もしも低空飛行していなかったら陸地で墜落し、二次的な災害を出していたことだろう。

「お見事です四葉殿」

「まだまだこれからですよ。もうすぐ魔法協会前ですから、より戦闘が激しくなります」

「そちらは十文字殿が向かわれたと思えますが？」

「俺が行けばもっと早く制圧できる。それだけのことです」

「仰る通りで」

紫音は黒い光を次々と放ち、大亜連合の軍を壊滅させたのだった。



「重戦車部隊が壊滅しました……風山フオンシャンからの爆撃機も墜落です」

「馬鹿な！ 全てか？」

「全機体が墜落しました」

揚陸艦の中で司令官は声を荒げた。

「何者なんだ！ 判明したのか？」

「恐らくは四葉と思われます。黒い光という情報と合致しており、本人の顔を見たという情報もあります」

「横浜ベイヒルズタワーに進軍中の部隊も壊滅しました！ また黒い光ということですよ！」

「直立戦車が二機破損！ 同じく黒い光です」

「えーい！ 忌々しい！」

報告のどれもが、黒い光によつて部隊を壊滅させられたというものの。

爆撃機まで墜とされたとなつては面目丸つぶれだ。

九校戦の情報や、陳祥山チエンシャンシエンの特殊工作部隊が集めた情報のお蔭で、黒い光の攻撃が四葉紫音の魔法であることは分かっている。だが、対処法がない。

一方的な蹂躪を受けるだけだった。

何よりも不可解なのは、大亜連合側の魔法師がまるで役に立たない

ことである。

「張上尉との連絡が途絶えました。捕虜になったものと思われま

「奴の部隊は魔法師で構成されていたはずだ！ 全員捕まったのか？」

「その通りです！ 最後の通信で、魔法が使えないとだけ……」

「役立たずめ！」

思うように戦況が進まない。

良かったのは一番初めの奇襲までだった。

数分もしない内に日本軍が迎撃を始め、十五分もしない内に魔法が使えなくなったという情報が届いた。

「不確定情報ですが、呂上尉も連絡が途絶えたと……また、陳隊長も行方が分からなくなったそうです！」

「あの二人まで……っ！」

魔法が使えなくなった呂剛虎は魔法協会の魔法師によってあつと
いう間に捕縛、そして鬼門遁甲の使えない陳祥山もあっさり捕縛。

正面からの侵攻軍を囚にした少数の奇襲部隊だったが、魔法を前提としていたために一瞬で捕虜と化してしまったのだった。

魔法を前提とした作戦を全て台無しにする。

一度の発動で敵軍全てを混乱に貶める裏切りの魔法。

『リベリオン』は所定の効果を一部発揮していた。

本来は魔法演算を暴走させて精神崩壊させる魔法であるため、現在発動している『リベリオン』は本当の意味における戦略級魔法とは言えないが。

「……撤退だ」

司令官にとつても苦渋の決断だった。

「一度撤退し、空母風山フオンシヤンおよび駆逐艦と合流する。そして態勢を立て直し、総攻撃を仕掛ける。

四葉め……必ずこの屈辱は晴らしてくれる！」

港に着いていた揚陸艦は撤退を開始する。

付近は既に紫音が部隊を壊滅させており、魔法協会支部のある横浜ベイヒルズタワー付近も克人と将輝が中心となって解決していた。

その他の激戦地は達也……いや、大黒竜也の『悪魔Demonの力』と『神Divineの如き力』Leftによって終結済み。

駅前に集まっていた第一高校の生徒、及び市民も七草家のへり、北山雫が呼んだへりによって無事に避難を完了させた。

大亜連合の侵攻軍は六割が捕虜となり、二割が死者となって、僅か二割のみが撤退という屈辱的な敗北を晒すことになる。

残るは沖合六十キロ地点にまで迫った空母一隻と駆逐艦四隻。

それを標的に、戦略級魔法『日蝕』エクリプスの実験が始まろうとしていた。

横浜騒乱編11

大亜連合が投入した戦力はかなり大きなものだった。

大型装甲車両が二十両、直立戦車が六十機、多くの魔法師を含んだ戦闘員が八百名。加えて陳祥山チエンシャンシエンの工作部隊。

占領する程の戦力ではないが、横浜に大打撃を与えられるはずだった。

しかし、紫音が集めた情報によって国防軍が先だって防衛線を構築しており、密かに発動された戦略級魔法『リベリオン』によって大亜連合の侵攻軍は潰走した。

装甲車や直立戦車は既にゼロ。

僅か二割の戦闘員だけが偽装揚陸艦によって撤退出来た。

そして独立魔装大隊は紫音と共に、港で空母と駆逐艦の迎撃準備を整えていた。

「これより仮称・戦略級魔法『日蝕』エクリプスの発動実験を行う。本実験は独立魔装大隊内部で秘匿されるものと留意せよ」

風間の言葉に皆が敬礼で返す。

その中で、紫音だけは遙か向こうにある空母へと目を向けていた。

およそ五十キロ先に見える空母は、まだ小さな影にしか見えない。

撃沈するならば、これ以上近づかせる訳にはいかないだろう。

「本実験は防衛省からの依頼を受け、統合幕僚会議の認可を受けている。四葉紫音殿の魔法が戦略級に相応しい効果を発揮した場合、本日零時を以て大黒特尉に続く戦略級魔法師として認定されることになる。」

また、撃沈不可能だった場合、大黒特尉による戦略級魔法『質量爆散』マテリアルバーストによって撃滅する。津波の心配が予想されるが、多少の被害はこの際目を瞑ることにする」

無茶苦茶だが、誰も反対しない。

空母から発進する爆撃機と駆逐艦が横浜に来るよりはましだと分かってるからだ。恐らく、駆逐艦による砲撃と空母から発進した戦闘機による爆撃で横浜を潰すつもりなのだろう。

現在、空母は沖合に停止して例の揚陸艦と合流を果たし、再び全面攻撃へ移ろうとしていた。

ただ一人、四葉紫音を殺すためだけに。

「四葉殿、用意を」

「はっ」

紫音は手に持ったCADを構えた。

銃身の先には照準補助装置が組み込まれており、遙か彼方にある空母を標的とする。

そしてもう一つ、CADとセットになっているデバイスを接続した。これはループキャストを補助するシステムで、何百という連続起動をしても問題ない仕様になっているものだ。

準備を終えたところで、再び風間が号令をかけた。

「戦略級魔法『日蝕』^{エククリプス}、実験開始」

「『日蝕』^{エククリプス}、発動します」

そして紫音はCADの引き金を引いた。

同時に、『リベリオン』によってリンクしていた魔法演算領域を全力起動する。ループキャストによって何百という魔法演算を実行し、照準地点を中心とした領域全ての光を『調律』した。

空母の上空から無数の闇が降り注ぐ。

闇は怒涛の勢いで広がり、半径数百メートルの黒い柱となった。

いや、黒い柱はまだまだ広がり続け、半径五百メートルを突破する。

ループキャストはまだ止まらず、遂には半径一キロを超えた。

魔法演算領域が許す限り、『闇』を発動し続けることで範囲を極大化

させた魔法。

『リベリオン』によつて紫音自身の魔法演算領域を増幅させていることが前提の魔法であり、言い方を変えればゴリ押しの魔法だ。

しかし、ただ適当にループキャストすれば良い訳でもない。

紫音自身が干渉力を担当し、『調律』した他人の魔法演算領域で魔法式を連続展開する。展開した魔法は全て紫音の制御下に統合されていき、半径十キロを超えるまで闇は広がり続けるのだ。

つまりは紫音の魔法演算領域をメインとしてサブ演算システムを構築し、魔法演算を割り振つていくのである。

精神的な領域である、魔法演算領域の波長が一致しているからこそ出来る裏技。これは乗積魔法マルチプリケイティブ・キヤストとして知られている技術だ。理論ではなく、実例のある技術である。

七草真由美の妹に双子がいるのだが、その双子は先天的に魔法演算領域の波長が一致しており、二人で協力して魔法を発動させることが出来る。

紫音の場合、支配下に置いた他者の魔法演算領域に魔法式を展開させ、自分が干渉力を与えて維持することで乗算的に魔法を増幅しているのだ。

「……暗く」

魔装大隊の一人が呟く。

言葉通り、海に向こうは真夜中のように真っ暗に染まっていた。

航空宇宙写真で観察すれば、円状に暗黒地帯が生じているように見えるだろう。いや、事実、衛星からの観測状況を確認していた藤林が、そのような円状の黒い地帯を確認していた。

それは丁度、皆既日食で生じる地球上の影のように見える。

故に『日蝕』エクリプス

半径十キロを超えたところで闇は止まり、数秒ほど維持される。

その後、何事もなかったかのように闇は霧散した。

発動が終了したのである。

「藤林！」

「空母、および駆逐艦も残骸のみを僅かに観測。見事に撃沈したと推察されます」

衛星からの映像に映されていたのは、ボロボロになって海を漂う鉄の残骸。そして深紅に染まった海面。

間違いなく沈没していた。

「撃沈と断定。我々独立魔装大隊の権限を以て、四葉紫音殿の魔法を戦略級相当と認定する」

それを聞いて、紫音はCADを下ろしたのだった。

「新たな命令を下す。敵兵残存部隊は他の部隊に任せ、我々独立魔装大隊は対馬要塞へと向かう。現在、大亜連合の大艦隊が鎮海軍港に集中中。

統合幕僚会議の認可により、戦略級魔法兵器の投入を命じられている。本作戦においては戦略級魔法『マテリアル・バースト』を使用する。よって、四葉紫音殿を安全地帯に送り届けた後、我々は対馬要塞へと移動する」

『はっー！』

「四葉殿。これでよろしいですね」

「ええ、お願いします」

紫音も了承し、独立魔装大隊は動き出す。

そして十月三十一日、午前一時四十二分。

戦略魔法兵器、大黒竜也による『質量爆散』マテリアル・バーストが発動。鎮海軍港に集結していた駆逐艦、潜水艦、その他無数の艦隊は全て消滅した。

その中には大亜連合の戦略級魔法師、劉雲徳リゆううんとくも含まれていた。

僅か一撃で戦況を逆転する力。

核・生物・化学兵器を凌駕し、魔法こそが戦争の勝敗を決すると決定づけた。

日蝕の如き闇。

計り知れぬ熱を放った謎の大爆発。

それが、後世において『暗黒と灼熱のハロウィン』と呼ばれた歴史の転換点となったのだった。



深夜の横浜中華街。

周公瑾は大亜連合が敗走し、謎の暗黒によって空母が破壊、謎の大爆発によって集結していた大軍を失ったことを認知していた。

それは全て、彼の主である顧傑グ・ジエからの暗号メールで知った情報であり、裏を取ったわけではない。だが、彼は顧傑グ・ジエの情報がすべて正しいことを知っていた。

「あまり上手くいった……とは言えませんか」

周公瑾の目的は、日本と大亜連合の力を減らすことだった。

今回の作戦で日本側の魔法師が大きく数を減らし、大亜連合も迎撃によってダメージを受ける。魔法師の数が国力に比例する以上、これによって双国の力を減らすことが出来るはずだった。

しかし、結果としてダメージを受けたのは大亜連合である。

日本も少なくない傷を負ったが、大亜連合に比べれば微々たるものだ。

加えて、日本軍は新たな戦略級魔法兵器まで手に入れてしまった。対して大亜連合は戦略級魔法師を一人失った。

「私としてもあの国に思い入れはありませんが……この結果は頂けませんか」

周公瑾にとって大亜連合は民族を同じとする者たちの国、という認識だ。

愛国心など欠片もない。

寧ろ、国力を削ぎ落そうと狙っている。

国の力が弱まれば、金の力が強くなる。そうなれば、自分たちも動きやすくなるのだ。

そんなことを考えていた時、周公瑾は周囲が少し騒がしいと気付いた。

「これは……侵入者、ですか？」

そう呟いた途端、扉が開け放たれる。

そして黒い服に身を包んだ男がなだれ込み、周公瑾を取り囲んだ。最後に、第一高校の制服を纏った少年が入ってくる。

「周公瑾、会うのは初めてですね」

「これはこれは。四葉家のお方ですか」

周公瑾は立ちあがりながら四葉紫音の姿を両目に収めた。

そして紫音も周公瑾を見返しながら口を開く。

「ブランシユ蜂起、ノ・ヘッド・ドラゴン無頭竜とイザクトの繋がりを作り、大亜連合の特殊工作部隊を手引き……最近の大きな事件はこれかな？」

「買い被りです。私如きに、まさかそのような——」
「四葉家当主、四葉真夜様より伝言です」

紫音は周公瑾の言葉を遮り、告げる。

「貴方の暗躍ぶりは良く拝見させていただきました。しかし、貴方の存在は日本の魔法師界にとって不要です」とのことですが

「過剰に褒められたものですね」

「それでもありません。ですから、このような伝言も預かっています
『褒美に『夜』の力を貴方に贈ります』と」

そう言つて紫音は魔法を発動させた。

周囲が暗く染まり、光が偏倚する。これによつて百パーセント透過する光のラインが出現し、暗闇の中で周公瑾の両手両足を貫いた。

『流星群』。

これは四葉真夜だけの魔法だ。

しかし、紫音はこれを手に入れている。

系統外精神干渉魔法『調律』によつて、四葉真夜の魔法演算領域を紫音の内部にコピーする。それを司波深夜が精神構造干渉で安定化させる。これによつて紫音は真夜と同じ魔法演算領域を得た。

だが、これは既に埋まっている魔法領域に新たな魔法領域を植え付けるというもの。達也は強い情動を司る部分を白紙にすることで、魔法演算領域を植え付ける余裕を得たのだが、紫音は別のアプローチによつてこれを得た。

つまり、必要のない時は自分の魔法演算領域を使用し、必要が生じれば真夜の魔法演算領域の波長パターンへと『調律』することで『流星群』を発動可能にするというもの。

一種のエミュレータに近い。

嘗ての実験によつて、紫音は真夜と深夜の精神性を一部受け継ぐようになっている。波動の中でも、電磁波に対して特に干渉力を持つのは、本当に真夜の影響を受けていたからだつた。

未熟な紫音が使った『調律』は、本来の魔法演算領域にも影響を与えていたのである。

結果としては良い方向に進んだが、下手をすれば魔法力そのものを失う危険な実験だった。

「ぐ……」

闇が晴れた時、周公瑾は血溜りの中に沈んでいた。

痛みに耐えながら、化成体で反撃しようとする。彼が使うのは『影獣』という黒い犬。大漢の方術と西洋魔術を組み合わせたものだ。

しかし、発動しない。

これには周公瑾にも焦りが見えた。

「な、なぜ……」

「魔法が発動しないことに疑問がある、といったところですか？」

既に紫音は周公瑾の魔法演算領域を『調律』し、自分と同じ波長パターンへと変えている。つまり、紫音の手に落ちていたのだ。

魔法など発動するはずがない。

「さて、色々と情報を教えて貰いましょうか。例えば、君の主とか……ね」

魔法を封じられている以上、いざという時の自死術式も機能しない。

周公瑾はいとも簡単に四葉へと落ちてしまったのだった。

追憶編

追憶編 Ver. S

二〇八四年六月三日。

当時の紫音が四歳のとき、一つの魔法実験が行われることになった。

実験の内容は危険のあるものだったが、未成熟だからこそ成功しやすいと判断され、第四研究所にて実験は行われた。

「楽しみにさない、紫音さん」

「は、はい……」

紫音は前世の記憶を持っており、年齢の割には成熟した考えの持ち主だった。早期の段階から『魔法』という概念を教え込まれ、彼の持つ特異な魔法『調律』が研究されていた。

当時分かっていた『調律』の性質は三つ。

- ①分類は精神系統だが、観測した物理的波動にも効果が及ぶ。
- ②精神波長を操作することで、他者と精神的にリンクできる。
- ③精神的にリンクした場合、互いが心で思ったことが伝わる場合がある。

まだ魔法の強度も低く、少し心が読める程度の魔法として認識されていた。だが、ここで第四研究所は、他者と自分の精神波長を操作することで、魔法演算領域を操作できる可能性に行きつく。

つまり、魔法演算領域を操作することで、自分に新しい演算領域を増設したり、非魔法師を魔法師に変えたり出来るようになるのではないかと考えられた。

その検証実験として、紫音に四葉真夜の魔法演算領域を埋め込むという実験が行われたのだ。

現在、紫音は椅子に座らされて真夜と対面しており、非常に緊張していた。

如何に前世の記憶があるとと言っても、目の前にいる四葉家の当主に對して平静でいられるはずがない。それに、ここには真夜の他に司波深夜——旧姓、四葉深夜——もいた。

『夜の女王』と『忘却の川の支配者』の二人が臨む実験。

見守る第四研究所の研究員ですら、実験前から冷や汗を流している。

「準備は良いかしら深夜？」

「ええ、今日は体調も優れているわ。それに骨子は紫音さんに担当して貰いますから、負担も少ないでしょう。私は精神構造の安定化と固定化を手助けするだけですから」

「そう、なら始めましょうか」

真夜は紫音の手を取り、微笑む。

深夜は二人に手を重ね、精神構造干渉の準備に入る。

そして紫音は自身の持つ『調律』の力に意識を落とし、真夜の魔法演算領域を自分の内部にコピーし始めた。

だが、紫音の魔法は万能に精神を改変するものではない。

浅い領域を調律し、リンクするだけならともかく、魔法演算領域の精神波長パターンを調律して自分と同期させるのは初めての試みだった。故に、紫音の魔法演算領域が間違つて書き換わってしまった。いように、深夜の精神構造干渉で安定化させる。

そんな実験だった。

第四研究所のテーマは『精神干渉魔法を利用した精神改造による魔法力の付与・向上』。

紫音が他者の精神波長を自分の内部に調律できることを利用し、自分自身の魔法演算領域に加えて、四葉真夜の魔法演算領域を得ることが出来るかという実験。

これが成功すれば、紫音はただ一人『夜』の魔法を継ぐことになる。そればかりか、四葉の秘術級魔法を全て習得することすら可能になるかもしれない。

精神という謎に包まれた領域の先駆者となり得る可能性を秘めていた。

故に、危険と知りつつも実験を行ったのである。

仮に失敗して精神に異常をきたした場合、幼い状態ならリカバリも難しくないだろうというのが、実験の後押しとなった。

これに対して黒羽貢のみは渋い反応を見せていたが、結局は承諾。

何故承諾したかについては、当主である四葉真夜しか知らない。何かの交渉があったのだと推察されているが、紫音も深夜も研究員もわざわざ聞き出そうとは思わなかった。

「紫音さん。『調律』はどの程度で終わりますか？」

「最低でも三十分以上はかかると思います。こんなレベルまで調律するのは初めてなので」

「深夜」

「今のところは紫音さんの内部に異常はありません」

「いいえ、今聞いているのは貴女の体調です」

「そちらも問題ないわ」

電磁波を始めとした波動を観測できる紫音にとって、物理的な調律はそれほど難しくない。今のところは音を衝撃波に変える『音壊』のみが実用レベルとして習得できている魔法だが、練習を積み重ねれば他にも出来るが増えると思っている。

だが、本来の用途である精神の調律はかなり難度が高い。

精神構造の把握ができない紫音は、意味の分からぬまま波動パターンを自分の内部に再現しているため、先の見えない不安がある。

精神構造干渉を扱う深夜がいなければ、実験を行う気になれないほどだった。

（あー……しかし俺が自分の魔法演算領域を真夜様のものに調律していたら、俺の『調律』も使えなくなるんじゃないか？ その辺はどうなってるんだろ？）

紫音の魔法演算領域と真夜の魔法演算領域は全く違う。

特異な精神系統に特化している紫音に対し、真夜は歪で特殊な魔法に特化している。四葉一族はこの二人のように二種類の魔法師が生まれる傾向にあるのだ。

そして精神系の紫音に対して、真夜のように特殊な魔法を使うための魔法演算領域を植え付けた場合、元あった紫音の魔法演算領域が消えてしまうのではないかという疑いがあった。

ただ、紫音はそれほど気にしていない。

実際、『調律』といっても当時は大したことがなく、ちよつと心が読める程度の能力だったからだ。

(いつそ真夜様の『流星群』ミューティア・ラインの方がカッコよくていいかも?)

(あら、そう思ってくれるのなら嬉しいわ?)

(はいっ!? 真夜様!?)

(表層のリンクが確立しているようね。思っていることが筒抜けよ?)

思わず紫音は慌てる。

今回は思考が繋がらないように調整していたつもりだったが、未熟な紫音ではキツチリ出来ていなかったらしい。

恥ずかしさで魔法が乱れる。

今度は深夜がそれを思念リンクで指摘した。

(紫音さん、乱れているわよ)

(す、すみません深夜様……)

何とも不思議な気分である。

外から見ている研究員には理解できていないだろうが、現在、紫音と真夜と深夜は思考レベルで繋がっていた。そのため、心で思ったことがそのまま相手に届いてしまう状態なのである。

慌てる紫音に対し、深夜は落ち着いてアドバイスを送った。

(心を落ち着けて真夜を意識しなさい。私が調律した魔法演算領域わたくしを再構築し、安定化させますから、貴方の魔法演算領域が失われることはありません)

(そこも聞いていたんですね……)

だが、安心した紫音は改めて『調律』に集中する。

結果として四十八分で全ての実験は終了することになった。

全ての行程が終了したことを深夜が告げる。

「終わりました。予定通り、真夜の魔法演算領域は紫音さんの中で構築されました。ただし、私の魔法で構造切り替えの仕組みを入れています。いわば、二重人格に近いと思ってください。

ただし、私も魔法演算領域に対して魔法を行使するのは初めてです。『調律』された対象を整えただけとはいえ、エラーが生じている可能性はあります」

「そう、なら早速だけど検証して頂戴」

真夜の声で研究員の一人が的を用意する。

すると突然、真夜が『流星群』ミューティア・ラインを発動し、的を砕いた。

「やって見なさい。紫音さん」

「はっ」

魔法師にとって魔法とはイメージだ。

無意識化にある魔法演算領域は、自分自身のイメージが肝になっている。

紫音は研究員の一人が用意した的に対し、真夜の魔法を発動しようとした。

ところが、紫音の予想に反して的是は黒いラインに破壊される。

予定外の魔法発動を見て、真夜と深夜は驚いた。

「これはどういうことかしら?」

「私が先ほど言った、エラーが生じているようね」

深夜が混乱する紫音に触れて精神構造解析をする。

数分後、結果だけを簡潔に述べた。

「真夜の魔法演算領域は紫音さんの中で情報化して存在しているようね。これについては成功と言えるわ。ただし、本人が真夜の魔法演算領域をどうやって使うか理解していないようね。今の魔法は紫音さんの魔法演算領域から出たもの。」

真夜の魔法演算領域が影響を与えて変質してしまった……。

それどころか、私の魔法演算領域も影響を与えてしまった可能性があるわ

『調律』の効果が及び過ぎた結果ね。

途中で心を乱したのがいけなかったのでしょうか」

「つまり、要練習、ということかしら?」

「ええ、それに新しい調査も必要でしょう。紫音さんの人格にもきつと何かの影響があるわ」

前世の記憶があった紫音に変化があったとすればここだろう。

無意識の領域に真夜と深夜の精神性を受け継ぎ、その魔法にも影響されたのは事実だ。

この日から、紫音は真夜と深夜に対して共感を示すようになる。一部の精神性を受け継いだことで二人に影響されやすくなり、達也と深雪に対しても特に目をかけるようになるのだった。

ある意味、四葉一族としてこの世界に定着した瞬間となった。



調査ファイル

対象：黒羽紫音、五歳（二〇八五年九月時点）

実験後の経過観察によつて、黒羽紫音の魔法演算領域に悪くない影響が出ていることが判明した。

『調律』の魔法は四葉真夜の魔法的性質、及び司波深夜の魔法的性質に近付き、効果の特化と向上が見られた。

①電磁波を調律し、一方向に絶対透過させる（『流星群』ミューティア・ラインの性質を受け継いでいると思われる）

②精神波長の調律によつて、他者の魔法演算領域に干渉できるようになった。（精神構造干渉に影響されていると思われる）

これによつて『調律』の魔法的効果の向上を確認。
第四研究所のテーマを鑑みれば、非常に興味深い結果となった。

これを元にして司波達也に魔法演算領域を埋め込む実験を計画。
詳細についてはファイルN-32K30を参照すること。

また、当初の目的であつた四葉真夜の魔法演算領域も正常に機能していることを確認。後に黒羽紫音が『流星群』ミューティア・ラインを発動したことで実験の成功を確信した。

ただし、精神的構造変化に伴い、一時的な混乱も観察できた。

四葉真夜と司波深夜の精神性が混じつたことで、仕草に女性らしさが見え隠れすることがしばしば。カウンセリングを繰り返すことで解消されたが、これからも観察が必要と思われる。

四葉真夜の魔法演算領域を二重人格のようにして構築した際、黒羽紫音の内部で精神的解離性が一部見られたと推察される。保有サイオン量がおよそ三分の一に減少し、一般的魔法師の平均を大きく下回ることになったことから、ここで魔法演算領域に分割が生じたと思われる。ただし、魔法力自体の低下は見られず、謎は多い。

恐らく、四葉真夜の精神構造パターンをサイオン情報体として保存し、必要に応じて『調律』により再構築していると思われる。これは司波深夜の見解に一致する。

これにより、黒羽紫音へと多数の魔法演算領域を再構築させるのは現実的に不可能と断定。

当初の実験を離れ、別のテーマへと推移する。

以下、最重要機密につき、電子データ化を固く禁じる。

黒羽紫音の『調律』による非魔法師の魔法師化。

精神構造を波動パターンとして認識し、調律することで非魔法師に疑似的な魔法演算領域を構築することに成功。同様に、魔法師の魔法演算領域を黒羽紫音の構造パターンへと変化させ、更に操ることも確認。

他人の精神に黒羽紫音の魔法演算領域パターンを構築することで、増設メモリのように魔法力を増幅させることが出来ると判明。

魔法師を非魔法師に
非魔法師を魔法師に

そのような改造が可能であると断定された。

更に、『調律』の魔法力増幅能力により、非魔法師をも利用した魔法力の極大化も可能。

これにより、精神系統戦略級魔法兵器の実用化が可能と推察される。

仮称・戦略級魔法『リベリオン』の開発を開始。

Project Rebellionの計画書はファイルK-23L98に記載。

来訪者編

来訪者編1

二〇九五年十月三十日、そして三十一日に二つの戦略級魔法が使用された。実戦において戦略級魔法が投入された意味は大きく、その破壊規模と戦略性を全世界が注目した。

『暗黒と灼熱のハロウイン』。

そう名付けられた歴史の転換点は、幾つもの流れを作り出す。一つは反魔法主義者による魔法反対運動の増加、一つは魔法の軍事的優位に関する認識、そして日本が発表した新しい戦略級魔法師への対策である。

戦略級魔法師、いつわみお五輪滯の『アビス深淵』に続いて発表されたのが、四葉紫音の名前だった。

戦略級魔法『エクリプス日蝕』は、仕組みも効果も発表されず、ただ実戦で使用された結果のみが各国の知る情報となった。半径十キロにも及ぶ広範囲を闇が覆い尽くし、軍艦や空母すらも藻屑へと変えてしまう謎の魔法。

その見た目と仕組み不明な部分から、『ブラックボックス正体不明』とも呼ばれるようになる。

USNAの学者たちは放出系プラス基本コードによる魔法ではないかと予想した。光子を放出系魔法で操ることで一方向に飛ばし、そのエネルギーで対象を破壊するというのが彼らの見解だった。通常の放出系魔法だと考えるには規模が大きすぎるので、魔法的な負担の少ない基本コードが有力だと思われるのである。

勿論、基本コードだけでは説明できない部分もあったので、結局は分からないままだった。

ただ、流石に『エクリプス日蝕』が力技の魔法だと思っっている人物は皆無だったようだ。

そしてUSNAが最も頭を悩ませたのは、発表されなかった方の戦略級魔法である。いわゆる『灼熱』の部分だ。学者たちは質量から工

エネルギーを取り出す魔法ではないかと予想した。自分たちが認知していない方法で質量エネルギーを取り出す魔法があることを知り、彼らは焦りを覚える。

故に、少しでもヒントを得ようと、安全面からゴーサインの出なかった『余剰次元理論に基づくマイクロブラックホールの生成・蒸発実験』が行われた。

テキサス州ダラス郊外にある国立加速器研究所は未知に潜む危険を無視して、あの大艦隊を消滅させた大規模魔法の手がかりを掴もうとしていた。

それが本当の危機を招き入れると知らずに……



秋も深まる中、紫音は本家に戻って真夜と面会をしていた。

横浜事変以降、新たなる戦略級魔法師として紫音は多忙を強いられていたのである。防衛省各所への挨拶を含め、五輪濤と面会、更に命令系統の決定確認などである。

国の保有する貴重な兵器である戦略級魔法師なだけあって、その扱いは非常に丁寧だった。他国から狙われないように、様々な形で護衛が付くことになりそうだったので、それは流石に断った。四葉で護衛を付けると言えば、相手も引き下がらざるをえない。

ただ、どちらにせよ国は紫音に護衛を付ける予定だった。表立って護衛するか、裏からひっそり護衛するかの違いである。

今回の面会は、それらの報告を兼ねて、戦略級魔法発動後の体調確

認も行っていた。

「精密検査の結果を拝見させて貰ったわ。また深夜の力が増していたよね」

「はい、精神構造干渉の力が増幅されているのは確かです。元々、『リベリオン』は深夜様の残滓とも言える力ですからね」

「ええ、深夜と違って構造を作り変える力はないみたいだけど……精神構造を波長パターンとして認識することで、その構造に一時的な干渉をすることは可能。一度の『リベリオン』で魔法力が大きく増加したのは興味深いわね」

「そうですね……精神干渉系『調律』の力は増加していると思います。確実に」

あの日、『リベリオン』で多くの人の精神を支配下に置いた紫音は、結果として『調律』の力を増幅させていた。深夜の残滓とも言える精神構造干渉の力がより強くなったのである。

イメージしにくいのが、元から持っていた精神構造干渉の力の破片が凝縮し、一つのサブシステムとして紫音の魔法演算領域に組み込まれた感覚である。

この表現も正確とは言えないが……

「それはそうと紫音さん」

「はい」

「紫音さんは正式に戦略級魔法師として公表されました。恐らく第一高校でも少し敬遠されることはあるでしょう。しかし、これからも紫音さんの仕事は変わりません。深雪さんと達也さんの力が周囲に知られることの無いように立ち回りなさい」

「しかし、横浜事変のせいで達也の立場もある程度は知られてしまったようですが？」

紫音が言っているのは、独立魔装大隊との関係である。

非常時だったとはいえ、一部の一高生徒には達也が軍籍を持つてい
ることがバレていた。

しかし、真夜は微笑みながら答えた。

「問題ないわ。最も避けるべきなのは深雪さんと達也さんが四葉の人
間であることが知られること。それに、独立魔装大隊は十師族をよく
思っていない部隊ですから、今のところは達也さんと四葉の関係を結
びつける人物はいないと思って良いわ。

それに、分かりやすい四葉として紫音さんがいるのですから。

達也さんにも、勝手に封印を解いてアレを使用した罰として、暫く
は独立魔装大隊との接触を禁じています」

「つまり、結局は私が注目を集めることになるよ?」

「ええ、戦略級魔法師として世界に発表したのもこのためよ。本当は
紫音さんが成人するまで名前は伏せようと思ったのだけど……達也
さんが『マテリアル・バースト』を使ったことでUSNAも探りを入
れているみたいなのよ。

だから、紫音さんには色々と苦勞を掛けるわ」

「USNAが……ですか?」

「ええ。達也さんの魔法を『大爆発』グレート・ボムと呼称して使い手を探っている
わ。そしてUSNAが突き止めた使い手候補の中に、達也さんの名前
も入っているみたいなの。

近いうちに第一高校にも探りが入られるはずだから気を付けな
さい」

「承知しました」

どうやって真夜がUSNAの事情を知ったのかは不明だが、何かし
らの伝手があったのだろうと紫音は納得する。

そして紫音が戦略級魔法師と知られた以上、これからはもっと多く
の諜報員が紫音の周囲に現れることだろう。それを捕えて情報を抜
き取るのは今まで通りなので、これからもやることは変わらない。

紫音がそう思っていると、真夜はそれを見抜いたのか、釘を刺して

きた。

「紫音さんが捕らえた周公瑾という男は覚えていますか？」

「はい。勿論です。母上の命令で捕えたのですし」

「紫音さんのお蔭で彼の背後にいた黒幕も分かりました。その黒幕が直接仕掛けてくるかもしれません」

「確か顧傑グ・ジーでしたか。ブランシユの総帥で無頭ノーヘッド・ドラゴン竜を支援した人物でしたね。つまり反魔法師運動が強まると……？」

「どうやら周公瑾は日本における彼の代理人という立場のようでしたから、本人がやって来る可能性は高いと考えるべきよ。気を付けなさい」

可能性、などと言葉を濁しているが、真夜がわざわざ注意を促している意味はしっかり理解しなければならない。

紫音は表情を引き締めるのだった。



顧傑グ・ジーにとっては全てが予想外だった。

周公瑾を通してブランシユや無頭竜を暗躍させたのだが、その全てが四葉一族によって封殺された。結果としてブランシユ日本支部はほとんど壊滅し、無頭竜も日米の共同作戦によって壊滅させられた。

無頭竜はボスだったリチャードⅡ孫の一人娘である孫美鈴スンメイリンをリーダーとして立て直しを図っているが、日本への手出しは一切を禁じているらしい。

もはや使える手駒は周公瑾だけだった。

しかし、その周公瑾すらも消された。彼によつて築かれた亡命方術師によるネットワークは残されている一方、日本で暗躍する基点はない。

顧傑は本当に困り果てていた。

「尽く四葉が立ち塞がる……か」

USNA西海岸のとある街に顧傑は拠点を構えている。

そして物事がうまく進まないことで不満の声を漏らしていた。

元々、彼は大漢の出身だ。四葉一族によつて滅ぼされた国である。

その魔法師開発機関だった崑崙方院こんろんほういんに所属していた古式魔法師だったのだ。

現代魔法師の風潮に押されていく中、彼は不老の魔法を開発した。

しかし、それは適性のない者を死に追いやる魔法だった。神仙術の素質を持つ古式魔法師ならば、若いままの体を保つことが出来る——ただし、不死ではないので寿命は変わらない——魔法。だが、素質のない者が使えば、数か月で死に至る。

何故なら、魔法とは効果がいずれ消えてしまうもの。つまり定期的に魔法をかけ直すことになり、これを自動化したのが不老の魔法だったのだ。魔法的素質のない人物が、自動とは言え自分自身に魔法をかけ直すことを繰り返せば、どうなるか予想に難くない。

そのリスクを知らずに大漢の権力者へとその魔法を献上した顧傑は、あつという間に肅清対象となった。現代魔法へ対抗するための逆転策として打ち出した魔法が、古式魔法師たちへのトドメとなったのである。

結果として周公瑾を始めとした弟子たちと共に亡命を果たし、顧傑はUSNAへと移り住むことになった。

故に顧傑にとつても崑崙方院と大漢は復讐の対象だ。

しかし、その復讐は四葉によつて奪われてしまった。

自分を社会的に抹消した大漢を滅ぼした四葉。顧傑は復讐の対象

を四葉へと変えてしまった。自分が復讐するべき対象を奪った四葉を社会的に貶め、抹消するために、周公瑾を通して暗躍を繰り返していた。

しかし、尽く上手くいかない。

「もはや私が出るしかない……が頼れる伝手も殆どない……」

顧傑が得意とするのは、人間を魔法の部品として、呪法具として造り変える悍ましい技術だ。魔法師の脳を魔法力増幅装置へと変えたソーサリー・ブースター、魔法師を改造強化したジェネレーター、そして死体を操る僵尸術^{きょうしじゆつ}。

お世辞にも、前に出て戦う魔法師ではない。

どう頑張っても、四葉一族と正面对決するのは不可能だ。

だからこそそのブランシュや無頭竜だったのである。なにせ、敵を前にした戦闘では弟子の周公瑾にも劣っていたのだから。

そこで、顧傑は自分に残されたもう一つの手段を使うことにする。

バーチャルリアリティーを利用したデバイス、^{ヘッドマウントディスプレイ}H M Dを装着

し、自分の有する権利を行使した。

フリーズスキャルヴへのアクセス権を。

(日本の伝手が頼れないならば、USNAのモノを利用するしかあるまい)

そう判断して、指をなぞる。

すると、その軌跡が文字となって浮かび、検索ワードとして打ち込まれた。

フリーズスキャルヴとは、あらゆるネットワーク情報へとアクセスし、どんな暗号すらも解析して盗み見ることが出来るハッキングシステムだ。

全地球傍受システム、エシクロンⅢのバックドアを利用したものであり、正規システムを遥かに上回る効率で情報を集めることを可能と

する。

そのシステムによってランダムに選ばれた七人のオペレーターの内、顧傑グ・ジもその一人だった。

(……吸血鬼?)

顧傑グ・ジはUSNA内部の不祥事を中心に検索する内に、一つのワードへと注目した。それはテキサス州で起こった不審死事件。体内の血液が一割ほど失われ、衰弱死しているというもの。

魔法による殺害が疑われ、反魔法師団体の動きが活発になりそうだった。

これは使えど顧傑グ・ジも考える。

新たな策略を練るために、更に詳しい情報を集め始めるのだった。

来訪者編 2

USNAにはスターズというエリート魔法師部隊が存在する。アメリカ全土から集められた魔法師の中で、最も優れた魔法師たちの部隊という認識だ。

彼らを構成する十二の部隊の隊長には一等星の名前が割り振られており、その中でもシリウスは総隊長を意味している。

戦略級魔法『ヘヴィ・メタル・バースト』の使い手であり、スターズ総隊長でもあるアンジー・シリウス少佐は憂鬱が滲み出るような表情で自室にいた。

「はあ……」

今の時期はクリスマスだ。

世間一般ではお祝い事ムードになりつつあり、このような表情を浮かべるには相応しくない季節である。元はキリスト生誕を祝う日とはいえ、現代ではすでに形骸化した祭りの一種だ。宗教に関係なく、喜び楽しむべきである。

だが、やはり彼女の表情はすぐれなかった。

そんな時、部屋のインターホンが鳴らされる。

「どうぞ」

ドアホンのリモコンマイクに向かって答えると、椅子に座って出迎える準備をする。別に会うことを約束していた相手ではないが、これぐらいは礼儀だ。

「失礼しますよ総隊長」

「やはりベンでしたか」

入ってきた相手はベンジャミン・カノープス少佐。同じスターズ所

属であり、カノープス隊の隊長でもある彼は、良い相談相手としてシリウス少佐の中に確立していた。

「聞きましたよ。日本へ行くよ」

「ええ。脱走兵がまさか海外に行くとは思いませんでしたが。それに……まさかフレディまで……」

「フォーマルハウト中尉が脱走兵となるなど、予想できるはずもない。本部も慌てていましたよ」

「それに、スターズ隊長クラスとなれば、総隊長である私が出るしかありません」

シリウス少佐が憂鬱気味なのは、これが原因だった。

魔法師部隊であるスターズからの脱走兵。これはUSNA軍全体に衝撃を与える結果となった。

始まりは、謎の人体発火事件である。何もなかったところで人が燃えるという事件は、魔法師が関連していると、すぐに判断された。そして捜査の結果、犯人として浮上したのがアルフレッド・フォーマルハウト中尉である。

彼は発火念力バイロキネシスの使い手であり、視点を合わせた個所から火種を生み出すことが出来た。

しかし、フォーマルハウト中尉が犯人だと分かった時には既に遅い。

彼は日本へと亡命していたのである。

幾人かのUSNA兵を伴って。

「しかし総隊長。自分が聞いた限りでは、脱走兵排除だけが任務ではないようですが？」

「はい。特別任務が与えられました。あの『大爆発』グレート・ボムの使い手を探ること、そして『正体不明』ブラックボックスの使い手と接触することです」

『正体不明』……正式名称は『日蝕』エクリプスでしたか。なんでも、あの四葉が使い手だとか？」

「ええ。上層部は四葉がどういった存在なのか理解していません。あの接触禁忌アンタツチャブルに触れるという任務ですから」

「抗議は……できるはずもないですね」

シリウス少佐こと、アンジェリーナ・クドウ・シールズはまだ十六歳だ。つまり、本来ならば高校生なのである。恐ろしいまでの才能と魔法力によってスターズ総隊長の地位に就いているが、これが厄介事を呼ぶ。

年端も行かない少女がUSNA最強の魔法師部隊で隊長を張っていることに不満を持つ者も少なくないのだ。

四葉に触れるのは良くないと進言したところで、『世界最強の魔法師、スターズ総隊長ともあろう者が日本の魔法師一族如きを恐れるとは……』などと嫌味を言われるだけである。

シリウスといっても所詮は実働部隊だ。

結局、上層部には逆らえない。

また、上層部は四葉を理解していない。

「そもそも、私は諜報について専門的な訓練を受けていません。それにもかかわらず、脱走兵排除と同時に、日本の戦略級魔法師を探りを入れるなど、お門違いです！」

「しかし、相応のバックアップも得られるではありませんか？」

『大爆発グレート・ボム』の使い手候補、そして四葉は高校に通っているそうです。ですから私も高校生に扮して、留学生という立場を利用することになりました。内部潜入捜査というやつですよ」

「そうになると、高校内では大きな援助が受けられそうにありませんね」

本来なら、この手の任務は幾らでも適任者がいる。

しかし、上層部は紫音を恐れてシリウスの投入を決めたのだ。それは四葉の名を恐れたのではなく、紫音が多くスパイを捕えているという実績である。

並み程度の魔法師では捕らえられる。

そこそこ強い程度でも同じだ。

ならば、紫音と同様の戦略級魔法師であり、偶然にも近い任務地で活動するアンジー・シリウス少佐をぶつけければ良いと上層部は考えたのである。

「まあ、ハイスクールライフを楽しむ……といった感覚でいれば良いのではないですか？」

「ベン……それは些か拙い気がします……」

「いえ、こう考えてはいかがでしょう。少佐の役目は四葉、そして『大爆発』^{グレート・ボム}の使い手候補と接触し、揺さぶりをかけること。詳しい調査は補佐として付くスターズ隊員に任せればよいのです」

シリウス少佐としても、そう言われると楽になる。

やはり、彼は相談相手として適格だった。

「そうですね……そう考えることにします。私の留守中は任せましたよ、ベン」

「はい。お任せください」

笑顔で敬礼するカノーパス少佐に対し、シリウスもほぐれた表情で答礼するのだった。



二〇九五年一二月二四日。

クリスマスイブということもあり、街は綺麗なイルミネーションで

飾られている。寒冷化の影響もあって凍えるような寒さである一方、街の雰囲気は暖かで柔らかいものだった。

しかし、そんな日でも魔法科高校に休みはない。

夕刻、紫音は一人で帰路についていた。

「はあ——」

吐き出した息が白く染まる。

別に憂鬱なわけではない、だが、少々疲れただけだ。

戦略級魔法師であることが公に発表されて以降、紫音は少しばかり学校でも避けられがちになった。慣れ親しんでいる風紀委員会や生徒会はともかく、クラスでは敬遠されている。

そうやってあからさまに避けられると、流石の紫音でも多少は傷ついていた。

しかし、それよりも疲れを増幅させるのは、紫音を付け狙う存在である。大亜連合、新ソ連、USNA、EUなどからパイが放たれ、紫音の周囲を見張っている。特に手出しはしてこないようだが、それが鬱陶しくて仕方なかった。

(二人……かな)

今日も紫音を尾行している人物が二人。

だが、今日に限ってはお粗末すぎる尾行だった。なにせ、目を向けなくとも尾行されていることが分かるほど気配が漏れているのである。素人すぎて、逆に罫を疑うほどだ。

明らかに怪しいので、今のところは手を出していない。

(確認はするべきか)

こちらから視線を投げかけていないので、相手の姿形は全くの不明だ。しかし波動観測で精神波長を視れば、相手の様子は観察できる。

『リベリオン』を発動し、精神構造干渉の力が強まってからは、精神波長観測の力も増大した。波動パターンを見ることで、相手の抱えている感情もある程度は理解できる。

そして、紫音を尾行している二人から読み取れたのは、緊張。尾行の心得など一つもない、素人丸出しの様子に紫音は少し呆れた。

そして人混みに紛れるようにしてフラリと路地に入る。

尾行している二人組は慌てて紫音を追いかけた。

クリスマスイブの街中で一度見失うと、再び見つけるのは不可能に近い。しかし、ここで慌てて追いかけてしまうあたり、やはり素人だった。

二人が路地に走り込むと、そこでは紫音が待ち構えていたのである。

「おー……随分と可愛らしい尾行者だな」

「なっ!?!」

「嵌められました!?!」

紫音の前に現れたのは二人の少女だった。

観測できる声紋パターン、サイオンパターン、精神波長パターンが酷似していることから、双子である可能性が高い。

(丁度、亜夜子と文弥ぐらいか?)

高校生と言うには少し幼い顔立ちなので、恐らくは中学生だろう。

紫音を尾行する人物としては首を傾げざるを得ない。

「で、君たち二人は何で俺を尾行していたわけ?」

「……」

「……」

当然ながら、そんな問いに二人は答えない。

少しばかり警戒しているらしく、今にも逃げそうだった。それに、ここは人通りの少ない路地とは言え、少し移動すれば大通りに出るこ
とが出来る。逃げるのは簡単だ。

だが、どういいうわけか少女たちは引かなかつた。

(精神波長から見ると……単にプライドが邪魔してるところか)

つまり、彼女たちのプライドを適度に刺激してやれば良いのである。

「……クリスマススイブだからって男を尾行するのは流石に変質者っぽいと思うんだが、そういう解釈で良いのか?」

「んなっ!? 違うに決まってるでしょ!」

「そうです! 私たちはただお姉様の——あつ」

「お姉様?」

予想通り簡単に引つかかってくれた。

紫音が問い詰めるような目で聞き返すと、二人は慌てだす。

「ちよつと泉美! なにポロつと言ってんのさ!」

「だってこの人が私たちを変質者呼ばわりしたんですよ! 仕方ないじゃないですか!」

「開き直るな! お姉ちゃんにバレたら怒られるじゃん!」

「香澄ちゃん。私たちは双子なんです。怒られるときは一緒ですよ」

「しれつと巻き込むんじゃないっ!」

どうやらこの二人は香澄と泉美というらしい。香澄は少し活発なイメージ、そして泉美はお淑やかな雰囲気が出ているが、姿形は瓜二つだ。髪型が違うので見分けることが出来るものの、その気になれば入れ替わっていても気付かれないだろう。

そして紫音は二人の名前を聞いたことで、その正体が確定した。
臙げな原作知識のせいで自信はなかったのだが、今なら確信を持て
る。

「はあ……七草先輩の妹か……」

七草の双子と呼ばれる二人のことは、紫音もよく知っている。

戦略級魔法『リベリオン』発動中において、調律した支配下の精神
へと魔法演算を割り振ることで乗積魔法を使用できる。これに
よって『日蝕』は制御されているのだ。
エクリプス

そして、魔法師社会において有名な乗積魔法の使い手が、目の
前にいる七草の双子なのである。

偶然によってサイオンパターンや魔法演算領域のパターンが一致
しており、二人は魔法演算を分担することで相乗的に魔法力を高める
ことが出来る。これによって、通常では有り得ない合体魔法とも呼べ
る技術を扱えるのだ。

この場合、魔法力は単純な足し算ではなく掛け算。

紫音の『日蝕』が極端に広範囲なもの、乗積魔法が魔法力の
掛け算だからこそ、というわけだ。
エクリプス マルチブリケイティブ・キャスト

それはともかく、どういうわけで七草家の双子が自分を尾行してい
るのかは気になった。

確かに、最近は七草家も自分の周囲を嗅ぎまわっている。しかし、
配下ではなく、わざわざ令嬢を出してくるのは明らかにおかしい。つ
まり、今回のことは二人の独断だと理解できる。

「ど、どうするんだよ泉美」

「バレてしまったては仕方ありませんね香澄ちゃん。ここは素直に謝る
のです」

「はあ？　なんでさ？」

「不躰に尾行していたのは事実ですから」

どうやら、後ろめたいことをしていた自覚はあるらしい。
流石の紫音も気が抜けた。

「……取りあえず、その辺のカフェにでも入る？　ここで立ち話をするには寒いし」

そう切り出した紫音に、香澄と泉美は縦に首を振るのだった。

来訪者編3

紫音は香澄と泉美を伴って近くのカフェに入った。クリスマスイブということで、中はかなり混んでいるように見える。インターネットでカフェの空席情報を調べておかなければ、かなりの時間を待たされていたかもしれない。

情報化社会が進んだ現代では、公共交通機関だけでなく外食店などもインターネットで空席情報を調べることが出来る時代となっているのだ。

店員に案内されて、三人はカフェの奥側にある席へと座る。

「ごゆっくりどうぞ」

そう言っただ店員が下がるのを見計らい、紫音は七草の双子へと話しかける。

「好きなものを頼んでいいよ。お金は出すから」

「別にいい……です。借りは作りたくないの」

「この程度で貸したりするほど狭量じゃない。カフェに誘ったのは俺だから、金を出すのは当然だ」

香澄は少し反発したが、紫音にそう言われて大人しくメニューへと目を落とした。メニュー表も電子デバイスになっており、ここから注文することが出来る。

なお、泉美は初めから遠慮なくメニューを選んでいた。

「私はベリーチーズケーキとハーブティーにします。香澄ちゃんは何にしますか？」

「泉美と一緒にいいよ。あ、ボクはミルクティーで」

(……ボク?)

紫音は香澄の一人称に違和感を覚えたが、表情には出さずスルーした。そういう女子もないことはないので、特に指摘する必要もないだろうと思っただのである。

それはともかく、紫音もメニューに目を通して適当に選んだ。

「じゃ、俺はガトーショコラとコーヒーかな」

メニューデバイスを操作して注文を終える。これで厨房にも届いたはずなので、五分以内に注文したものが持つてこられることだろう。

いきなり本題に入るのも詰まらないので、ケーキと飲み物が届くまでは雑談を興じることに決めた。

「改めて自己紹介でもしようか。俺は四葉紫音だ」

「七草香澄です」

「わたくし私は七草泉美ですわ」

「取りあえず分かりにくいから名前呼びで構わないか？」

「別に構いません」

「敬称も不要です」

「分かった。一応聞くけど、香澄と泉美は七草真由美先輩の妹ってことで間違っていない？」

その質問に対して、二人は同時に頷く。

となると、今年で中学三年生だったはずだ。恐らくは真由美に倣って第一高校を受験するのだろう。この時期に遊んでいて構わないのかと疑問に思ったが、そこは問題ないと考え直す。

香澄と泉美は十師族七草家の一員なのだ。

ちゃんと対策ぐらいはしているはずである。

寧ろ、受験よりも紫音は別のことが気になった。

「七草家って言ったたら、この時期は各界のクリスマスパーティーに参加しているんじゃないの？ こんなところに居てもいいわけ？」

「問題ありませんわ。私^{わたくし}たちは毎年、イブパーティーには参加しませんから。明日のクリスマスパーティーには参加しますけど」

「ボクはパーティーなんか面白いとも思わないけどね。明日のパーティーも休みたいなあ。受験を理由にしたら休めるんじゃない？」

「ダメですよ香澄ちゃん。それは理由になり得ません。寧ろ、七草家だからこそ、余裕を見せつけてやるのです」

「うえー」

香澄は本当に嫌そうな表情を浮かべている。

相当面倒なのだろう。

「パーティーねえ。四葉^{ウチ}はそういうのに顔を出さないから、あんまり共感できないな」

基本的に、四葉は外に対して情報を発することがない。更に言えば、四葉家の血族ですらほとんど秘匿されているありさまだ。

現在の四葉分家は司波、真柴^{ましぼ}、椎葉^{しいば}、静^{しずか}、新発田^{しんぱた}、津久葉^{つくば}、武倉^{むぐら}、そして黒羽となっている。つまり、四葉を名乗る分家は存在していないのだ。

四葉姓なのは当主である四葉真夜、養子の四葉紫音、そして紫音の祖母にあたる四葉夢女^{ゆめめ}だけである。

これだけでも、どれだけ隠れた一族なのかよく分かる。

更に言えば、四葉本家は日本地図に記されておらず、魔法協会上層部ですら大まかな位置しか知らない。また、本家に向かう時は、特定の場所で特定の魔法を使い、ゲートを開ける必要があったりする。

紫音ですら、色々面倒臭いと思ったことは一度や二度では済まない。

「それで二人は第一高校に進学する予定……で合ってる？」

「そうです」

「わざわざ他の魔法科高校に行く理由はありませんから」

「ということは、四月から俺の後輩になるってこと？」

『……………』

その質問に対しては二人揃って目を逸らした。双子だからか、全く同じ方向へと逸らしている辺り面白いと思う。

だが、それはともかく何故目を逸らされたのか気になった。

「……………何？　なんか悪いことでも言った？」

「いえ、その……………少し戸惑っていると言いますか……………」

「戸惑ってる？」

泉美が右手を頬に当てつつ答えるのを見て、紫音はさらに訳が分からなくなる。全く話の流れが読めず、寧ろ紫音の方が戸惑った。

しかし、ここで丁度良く注文していたケーキと飲み物がやってくる。

「ご注文のベリーチーズケーキが二つ、ガトーショコラがお一つ、ハーブティーがお一つ、ミルクティーがお一つ、そしてコーヒーになります。コーヒーのお砂糖とミルクはテーブルに置いてあるものをご自由にお使いください」

店員は持ってきたケーキと飲み物を丁寧に並べ、お辞儀をしてから下がっていく。

取りあえず、落ち着くために紫音はコーヒーをブラックのまま口に含んだ。強い苦みと程よい酸味が口の中に広がり、独特の香りが鼻腔を通り抜ける。

それに続いて香澄と泉美も飲み物を一口含み、落ち着いたようだった。

「……で、何を戸惑ってるって?」

「いえ、ただ私のイメージわたくししていた四葉と違ったものですから……こう言っただけ失礼ですが、もっと怖いのではないかと思っていました」「カフェに誘われた時点で気が抜けたけど」

「あー、なるほど」

世界的な基準で言えば、四葉Ⅱ接触禁忌だ。

そして日本でのイメージで言えば、四葉Ⅱ怖い・よく分からない、となる。

四葉一族が大漢ダイカンを滅ぼしたのは有名な話であり、日本国内でも武勇伝ではなく恐怖の象徴として認識されていた。

香澄と泉美がそう思ってしまったのも、仕方ないと言える。

「実際、俺は第一高校でも敬遠されているからな。ハロウインのこともあつて余計に」

「う……やっぱりアレって本当なんだ……」

「漣みおさんとは随分と違うんですね……」

勿論、『ハロウインのアレ』とは戦略級魔法のことである。

暗黒と灼熱のハロウインと称される大事件の片方を担ったのが、この四葉紫音なのだ。学生が軍事的に大きな意味を持つ魔法を会得しているという事実は、日本中で大事件のように報道されたので、香澄と泉美も当然のように紫音のことを認識している。

もしも戦略級魔法師が四葉の者でなければ、反魔法師運動が今より盛り上がりを見せていたことだろう。学生を戦争に徴用している魔法師社会を非難するという、格好のネタになったはずだ。ある意味、四葉の名前に助けられた形である。

一応、全く反発がないというわけではないが。

ただ、十師族の、あの四葉家なら仕方ない……という風潮は確かにあるということだ。

だからこそ、香澄も泉美も紫音が思ったより普通であることに戸

感っていたのである。

「要するに、四月から俺の後輩になるけど、四葉であり、あんな魔法を使う人物が先輩にいるってことが分かって怖かったと」

「別に怖い訳じゃありません……」

「まあまあ香澄ちゃん。『お姉ちゃんの後輩にヤバい人がいるなんて！』『ちゃんと調べてボクが安全確認しないと！』なんて言っていましたものね。」

流石、香澄ちゃんは勇ましいですわ」

「わあああつ!? 何言ってるのさ泉美っ!?」

「事実でしょう?」

「それを言うなら、泉美だって『お姉さまに近づく虫は調べる必要がありませんわね……』とか言ってたじゃないか!」

「そんなことは言ってますせん! 『お姉さまに近づく殿方は私わたくしがしっかり精査します』と言ったのです! 捏造はダメですよ香澄ちゃん?」

「似たようなものじゃない?」

「全然違うでしょう!」

そんな二人のやり取りを聞いて、紫音は大体のことを察する。

ガトーシヨコラをフォークで切って口に運びつつ、大まかな内容をまとめた。

(要するに、四葉家で戦略級魔法師である俺のことが気になったってことね。第一高校には七草先輩もいるし、四月からは香澄と泉美も入学だ。気になって当然か)

これが尾行の主な理由だろう。

それだけ紫音が戦略級魔法師として発表されたのは衝撃なのである。

結局、尾行されていた理由も大したことはないらしい。こうして対

面して話すことで、ある程度は解消したようだった。
取りあえず、紫音は二人の口喧嘩を止めることにする。

「一旦落ち着け二人とも。ここは公共の場だぞ？」

別に二人の声が大きかったわけではない。

精々、周囲の喧騒に紛れてしまう程度だろう。しかし、七草という上流の家に育ち、一流の教育を受けてきた二人としては痛いところを突かれた気分だった。

ハツとして口を噤み、少し恥ずかしそうに目を伏せる。

ここも二人同時だったので、流石は双子と驚いた。同じ双子でも、文弥と亜夜子はここまで動きがシンクロナすることは滅多にない。男女の違いというのもあるのだろうか。

「ともかく、大体の事情は理解した。尾行は素人すぎて逆に罫を疑ったけどな」

『うっ……』

余程恥ずかしいのだろう。

精神波長が乱れている。

紫音としては、年下の女子を虐めるような趣味もないので、この辺りで勘弁することにした。

「けど、俺の尾行なんかして大丈夫だったのか？ 七草の護衛もいるだろう？ 絶対に止められる気がするんだけど」

「基本的にボクたちの護衛は何してもスルーですから」

「わたくし私たちに危機が迫った時だけ動いてくれます。危機管理は別の人がやっていますし」

「ああ、なるほど」

それでいいのかと言いたくはなるが、他家の事情に口を出すつもり

はないので納得しておく。

予想はしていたが、今回の件は七草家が関わっているわけではなく、香澄と泉美の独断だった。

とりあえず、クリスマスイブに美少女二人とカフェでひと時を過ごせたと考えれば、単なる役得で済ましても構わないだろう。別に被害を受けたわけではないのだから。

「二人ともあまり危険なことはするなよ？　今回は俺だったから良かったけど、変なことをしたら七草家にも迷惑がかかるわけだから」

「あ……はい」

「そうですね。確かに、今回は軽率だったかもしれませんが」

「ケーキ食べて息抜きしたら早く帰れよ。今の時期は日没も早いからな。中学生女子が出歩くと碌なことがない」

今の時代、大抵の店で十八時以降は中学生の入店を断っている。高校生になれば一気に縛りが緩くなるので、やはり義務教育の段階では早く帰れということだ。

香澄と泉美がケーキを食べ終わる頃には丁度いい時間になっている頃だろう。それを二人も分かっているのか、特に反発はしなかった。

そして、まだ手を付けてなかったベリーチーズケーキにフォークを入れる。

「んー、まあまあかも？」

「及第点、というところでしょうか？」

「ここは普通のカフェだぞ。二人は何を基準にしているんだ」

流石は十師族の中でも四葉に並んで力を持つ七草家の令嬢。

中々に辛い評価である。

紫音としても特別美味しいと思えたわけではなかったので、特に反

論はしない。そもそも、ここは香澄と泉美から話を聞くために入ったカフェなのだ。そこまで上等なものを求めてはいなかった。

「ところで二人は迎えが来るの？」

「どうかな泉美？」

「連絡すれば来てくれると思いますよ」

「なら、俺は先に帰るよ。会計は済ませておくから」

紫音はそう言って立ち上がる。

すると、泉美が咎めるような視線を向けつつ呟いた。

「誘っておきながら先に帰るのはどうかと思いますが……？」

「あまり仲良くするのも問題になりそうだからな。特に四葉ウチと七草そっちの確執で。少なくとも、今日は『ちよつと話ただけ』って恰好の方が都合も良いってことだよ」

「それは……そうですけど」

「今の俺が微妙な立場にいるってこともある。俺は四葉以外に特定の魔法師家系と仲良くすることは出来ないって分かってくれ」

戦略級魔法師である紫音が特定の家と仲良くすることがどれぐらい波紋を呼ぶのか、泉美にも理解できる。それとこれとは違うだろうと言いたい部分はあれど、紫音の言っていることは事実だった。

今日のところは『ちよつと話ただけ』で済むかもしれないが、結構ギリギリである。

クリスマスイブということもあり、余計な詮索を入れられかねない危険もあるのだ。

「今日のところはここでお別れだ。四月からは宜しく。気を付けて帰れよ」

尾行をされていたこともあり、面倒なクリスマスイブを迎えるので

はないかと思っていたが、蓋を開けてみれば勘違いのようなものだった。

結果としてクリスマススイブっぽいイベントをこなせたと思えば悪くもないだろう。

殺伐としていた最近のことを思えば、今日のことはクリスマスプレゼントのようなものだ。

そう思うことで納得した。

(支払いは……電子マネーでいいか)

会計を済ませるべくレジの方へと向かいつつ、ポケットから携帯端末を取り出す。近年では電子マネーが拡大しており、紫音も現金は最小限しか持っていない。

何より、電子マネーは端末でタッチするだけなので支払いが楽なのだ。

そうしてレジの前に立ち、店員の指示に従って端末を認証させると、無事に支払いが終了した。

後は帰るだけだと出口に足を向けようとする。

だが、同時に紫音は気付いてしまった。

レジのすぐ側にある窓の外で、右手をこちら側に伸ばし、魔法を発動しようとしている男の姿に。

「っ!？」

反射的にフラッシュキャストを実行し、障壁魔法を展開する。

それと同時に、店の壁ごと窓が吹き飛んだ。

轟音が鳴り響き、ガラスが割れ、店内は一瞬で騒乱に包まれる。間違はなく紫音を狙った魔法攻撃。紫音は自分を守ることに成功する一方、その他の被害までは防ぎきれなかった。

防壁を張った紫音を避けるように壁の破片が飛び散り、店の床を汚す。

紫音を魔法攻撃した男が再び魔法を発動しようとしたので、
『ダークミステリア暗黒流星群』で即座に両手両足を穿った。そのせいで魔法は中断さ
れ、男は倒れる。

「……こんなクリスマスプレゼントはいらなかったよ」

達也のトラブル体質が感染したのかもしれない。
場違いだが、そんなことを思うのだった。

来訪者編4

カフェは一瞬にして騒然となった。

店の壁が吹き飛ばされ、更にその犯人は紫音によって四肢を貫かれ、血だらけになっている。これで騒ぎにならないはずがなかった。

(狙いは俺か?)

四葉として、また戦略級魔法師として各国から狙われているのは知っている。しかし、ここまで派手で直接的な行動を取ってきた人物はいない。

流石の紫音も戸惑った。

呻きながら倒れている犯人の顔を確認すると、外国人らしいと分かる。

白人系の男性であり、歳は三十代に見えた。

「け、警察！ それに救急車！」

店員はここで思い出したかのように電話を取り、警察と救急に通報する。壁が吹き飛ばされた時に怪我をした客がいたので、救急車も要請したのだ。これで五分もすればパトカーも救急車もやってくることだろう。恐らく、紫音は当事者の一人として警察から事情聴取されるはずだ。

監視カメラと共に設置されているサイオンレコーダーを見れば、紫音が魔法を使ったことは明白となる。その気になれば紫音はサイオンレコーダーで感知されないように魔法を使うことも可能なのだが、今回は目撃者もいるので不要だと判断した。

寧ろ、サイオンレコーダーで記録されない魔法を使うとなれば、警察から目を付けられかねない。

よって今回は敢えて記録を残すことが正解となる。

そして事態を察した七草の双子こと香澄と泉美も紫音の元に走り寄ってきた。

「なんなのさこれ！　もしかしてテロ？」

「決めつけるのは早計ですよ香澄ちゃん。それよりも大丈夫でしたか四葉さん」

「俺はね。二人も大丈夫そう良かった」

二人にも犯人の男が魔法を使ったと察知出来たのだろう。

だからこそ、十師族の一員として現状確認にやってきたのだ。そして、流石にこれだけのことが起こって傍観しているのは拙いと思ったのか、香澄と泉美の護衛も現れる。

「香澄様、泉美様。ご無事ですか」

「大丈夫ですわ。お父様への連絡は？」

「いえ、まだです。泉美様の方からなさいますか？」

「貴方に任せます」

今回の事件で手を出したのは紫音だけだ。如何に魔法師一族の七草とは言え、ただカフェでケーキを食べていたに過ぎないのだ。恐らく、警察からの事情聴取も最低限だろう。

泉美自らが報告する必要はないと判断した。

護衛の男も同じように考えたのか、同意を示す。

「かしこまりました」

そして護衛の男は少し離れて通信端末を取り出し、どこかへと連絡を始める。紫音もそれを眺めていたのだが、そうして犯人から一時的にでも目を離れたのは致命的だった。

「う……………うおおおおおおおー！」

四肢を穿たれたはずだった犯人は声を張り上げながら飛び上がる。そして右手にはどこからともなく取り出したナイフが握られていた。更に、ナイフからは魔法の兆候が見える。

まだ犯人が動けるとは思わず、また普通ならば痛みで魔法どころでないにもかかわらず、魔法を発動しようとしたのだ。紫音としてもこれはまさかの事態である。

しかし、一瞬目を離していたとは言え紫音も四葉の人間だ。

反射的にナイフの軌道から逸れる。

(ナイフに魔法的兆候……武装デバイス)

武装デバイスとはCADの一種であり、武器としての効果を魔法的に底上げすることを目的としている。例えば硬化魔法で硬くした籠手、振動系や加重系魔法で切れ味を底上げたナイフ、加速魔法で威力を上げた銃などがそれにあたる。

そして刃物系の武装デバイスの場合、切断効果のある範囲が延長されている場合が多い。

単純に切れ味を上げるのは勿論、刀身を基準にして仮想領域を伸ばし、魔法を展開して切断範囲を広げるのが一般的だ。

それ故、紫音はナイフの軌道から逸れたのである。

事実、犯人が振り下ろしたナイフは、刀身が伸びているかのように効果を発揮する。結果として、運悪く魔法効果の範囲にいた店員の一人が切り裂かれてしまった。

「ぎゃっ!?!」

相当魔法の威力が高いのか、店員の左腕を抵抗もなく切断した上に、店の床にも大きな傷跡を付ける。ただの振動系や加重系にしては威力が高過ぎた。

刀身が延長されていることから、振動系ではなく加重系による魔法

だと判断しかけたが、それにしても綺麗に切れ過ぎた。
その事実から、紫音は一つの可能性を導き出す。

(まさか……『分子デバイダー』!?)

それはUSNA軍スターズ先代総隊長ウィリアム・シリウス少佐が開発した機密術式だ。分子結合を弱めるといふようなものではなく、分割してしまう魔法である。

これは振動系や加重系の魔法と比較しても恐ろしい効果だ。

まず、切断とは突き詰めてしまえば圧力による分子結合の破壊だ。振動系や加重系の魔法はあくまでも切れ味を高める魔法であり、対象を切断できるかどうかは使い手の技量に依存する。

しかし、『分子デバイダー』は違う。

これは魔法の対象を判断してしまう魔法なのだ。例えナイフを扱う技量が素人レベルだったとしても、振れば切断できてしまう魔法なのである。

(USNAの魔法師部隊がなぜ……)

流星に『分子デバイダー』が流出しているということはないだろう。アレは魔法師部隊スターズが嚴重に秘匿し、保管しているのだから。

紫音はそう思った。

だが、すぐにそんなことはどうでも良くなる。

何故なら、犯人についてももう一つの不思議な点に気付いてしまったからだ。

「こいつ、傷が消えてる!」

紫音は確かに両手両足を『暗黒流星群』^{ダークミューティア}で穿ったはずだった。しかも、動けなくなるように神経や筋肉を的確に貫いたはずである。

しかし、現に犯人は怪我がないかのように動いてナイフを振るい、実際に傷も消えている。

確かに治癒魔法というものも存在はしているが、このように一瞬で傷がなかったことになるような便利魔法ではない。紫音の知る限り、それが可能なのは達也の『再成』だけだ。

基本的に、治癒は傷がある状態という情報を書き換えることで行っている。情報体書き込まれた治っている状態を世界が修正しようとするので、それを何度も書き換えることで徐々に世界を騙していくのが一般的な治癒魔法だ。

そこで、紫音は確かめるべく再び『闇』を放った。

「がっ!？」

犯人は右掌を貫かれ、持っていたナイフ型武装デバイスを落としてしまう。そして紫音は右足を軸にして背中向きに回転しつつ一歩分だけ踏み込み、右手で掌底を叩き込んだ。

この時、フラッシュキャストで『音壊』を発動する。

掌底を叩き込んだ時の衝撃音を操り、増幅して犯人の体を内部から破壊した。

内臓を掻きまわされるような衝撃を受けて、犯人も吐血しながら再び倒れる。左胸に当てれば一撃で心臓を破壊できる魔法なのだが、今回は殺さないように胃を破壊する程度で留めた。

「これで再生するかは疑問だけど……」

紫音は今度こそ目を離さないようにしつつ、香澄と泉美の護衛に対して指示する。

「七草の護衛さん。腕を斬られた店員さんの処置をお願いしますか？」

「良いだろう。お嬢様方は御下がりください」

護衛は香澄と泉美を奥へと追いやり、自分のズボンからベルトを外して店員の傷口を縛る。店員もかなり痛そうに呻いたが、救急車が来るまでは保てるだろう。

その間、紫音は懐からハンカチを取り出して犯人の落とした武装デバイスを拾いつつ、『闇』で貫かれた犯人の右手を観察する。

血が溢れている傷は、逆再生でもしているかのように修復してしまった。

やはり、何かしらの特殊な魔法を持っているらしい。

紫音は臍げになりつつある原作知識から、手掛かりを探す。

(達也と似たような能力なら、原作でも取り上げられてた可能性は高いな。横浜事変の後は確か……)

そう、吸血鬼だ。

USNA軍と吸血鬼が色々騒ぎを起こすというのが主な部分だった。

紫音はそれを思い出したことで、犯人の正体について当たりを付ける。

(こいつも吸血鬼か？ USNA軍の機密装備も持っているし、スターズの秘密兵器って線もあるけど)

仮にスターズが裏で開発した魔法師なのだとなれば、紫音暗殺のために超越した理由もある。吸血鬼よりもそちらの方が尤もらしい。

しかし、それは普通に考えればの話だ。

紫音には、犯人の男が吸血鬼かどうか調べるだけの能力がある。

(男の精神波長は……やはり、人とは違うか)

精神波長は人によって形が変わる。

しかし、大まかに『人』を表す精神パターンと言うのは存在しているのだ。しかし、男はそのパターンから大きく外れていた。

例えば『人』の精神が四角形だしよう。個人差によって台形、ひし形、平行四辺形、正方形などの微妙な差はあるが、基本的に四角形から外れることはない。しかし、『人ならざる者』は四角形から外れ、五角形や六角形といった、まるで別の型に変化しているのだ。

紫音はその型を感じ取り、犯人が人ならざる者であることに気付いた。

(そうだ。ちよつと思ひ出してきた。確かUSNA軍の脱走兵の中に吸血鬼がいたんだっけ？ それなら機密装備を持っているのも多少は納得できる)

確定は出来ない。

しかし、人ならざる存在が目の前にいることから、新しい厄介事が舞い込んできているのは分かる。

取りあえず、紫音は傷が修復しかけている犯人に対して振動系の魔法を使用し、脳を揺さぶる。これによって犯人は脳震盪に近い状態を起こし、気絶してしまった。

如何に吸血鬼といえど、器は人なのだ。

意識さえ失わせれば、能力を使われることもない。

「四葉殿、応急処置は終わった」

「ありがとうございます七草の護衛さん。しかし面倒なことになりましたね」

少し周囲を見渡すと、犯人を血だらけにして倒した紫音を恐れるような目が並んでいた。今は魔法科高校の制服を着ているので、学生だと分かったのだろう。

その学生が、カフェへの襲撃犯を倒してしまったのだ。

血が飛び散っている地面で気絶している犯人を見れば、殺してし

まったように捉えることが出来る。そのことで紫音を恐れていたのである。

正当防衛である上に、自衛のために魔法を使用することは合法だ。しかし、彼らの証言で紫音は過剰防衛だったのではないかと問い詰められる可能性もある。魔法師に対して良くない感情を抱いている警官が来ないことを願うばかりだった。

「はあ……ホント最悪のクリスマスイブだよ」

その後、到着した警察から事情聴取を受けて紫音は夜遅くに解放される。

犯人は捕まり、紫音の正当防衛は認められたが、世間では魔法師による大きな事件として扱われることになるのだった。



東京の某所にある警察病院。

ここに紫音が倒した吸血鬼の男は収容されていた。彼が吸血鬼だと知らない警察は、カフェ襲撃犯という風にしか扱っていない。精々、魔法師であることを考慮した束縛をしているぐらいだろう。

「隊長。こちらです」

「わかった」

そして、その警察病院に忍び込む二人の影。

USNA軍の脱走兵を始末するべく派遣されたアンジー・シリウス少佐と、その部下だった。彼女たちはカフエ襲撃を引き起こした男を始末するべく、忍び込んでいたのである。

実を言えば、犯人の男はUSNA魔法師部隊の脱走兵だった。

正確には脱走兵の内の一人である。

今回の事件によってその一人の居場所を特定したシリウスは、秘密裏に処理するべくここへと忍び込んでいたのだ。彼は末端の兵だったが、それでもUSNA魔法師の一人だ。その身体には秘密にしなればならない情報が刻み込まれている。

下手な調査を受ける前に処分しなければならぬのだ。

「この先、角を曲がって二つ目の部屋です。ご武運を」

シリウスは無言で頷き、素早く動いて男が収容されている部屋の前に立つ。そして軍用のパスワードブレイカーで扉のキーを解除し、中へと入り込んだ。

ベッドの上では男が拘束されて寝かされており、特に見張りもない。

そして今から数分だけは監視カメラとサイオンレコーダーを無力化するように細工していた。

(…………ごめんなさい)

心の中でそんなことを思いつつ、シリウスは手に持ったナイフを振り下ろす。そして一撃で男の心臓を貫き、即死させた。

そして魔法を使い、男の体を燃やす。

しばらくすれば警備も火災に気付くことだろう。それに乗じて逃げる予定である。

音もなく部屋を出たシリウスは、部下が待っている位置まですぐに戻った。

「上手くいきましたか隊長？」

「はい。任務は成功です」

「丁度先ほど、『分子ディバイダー』を搭載した武装ディバイスの回収班からも連絡がありました。無事に回収を終えたそうです」

「そうですか。では、私たちも脱出しましょう」

「了解です隊長」

二人が消えた数分後、警察病院内部で火災警報が鳴り響く。

そして消火後、カフェ襲撃事件の犯人は、黒焦げになって発見されたのだった。

来訪者編5

二〇九五年一二月二五日。

この日は魔法科高校において二学期が終業されることになっていく。式典などは特になく、午前中まで授業を行って解散。それだけだ。

しかし、紫音はある人物から呼び出しを受けていた。

勿論、七草真由美である。

内容は昨日あつた事件のことだろうと容易に想像できた。

(さて、向かうか)

指定されたのは空き教室。

生徒会長の役目が終わってから、相変わらず権力を使いまくっている。七草だからと言えばそれまでだが、それでいいのかと言いたくなることもある。

とはいえ、別に紫音が口出し出来ることでもない。

そんな眩きは心に仕舞い、空き教室へと向かった。

念のためにノックをするが、返事はない。そこで扉を開いたところ、中には誰もいなかった。どうやら真由美より先に着いてしまったらしい。

教室に入り、適当な椅子に座って待っていることにした。

そして数分後、扉が開けられ、真由美が入ってくる。

「あら？ 待たせちゃったみたいね。ごめんなさい」

「構いませんよ。三年生は色々忙しいでしょうから」

「ふふ。ありがとね」

受験生であるため、これでも真由美は忙しい。魔法科大学への合格は殆ど確定なのだろうが、だからと言って勉強を怠るわけにはいかないのだ。

そして、成績優秀な真由美は他の生徒から質問を受けることも多々ある。今回もその手の生徒に捕まったのだらうと予想できた。

真由美は紫音の近くに座り、手早く本題へと入る。

「さてと。早速だけど本題に入りましょうか」

「分かりました。昨日のことですよ？」

「ええ。妹達のこともあるから、ちゃんとお礼を言わないと。それに、四葉君には十師族七草として言っておきたいこともあるから」

真由美はそう言うと、座ったまま頭を下げた。

「まずはありがとう。香澄と泉美を守ってくれて感謝するわ。それに、あの子たちが後を付けたりしてごめんなさい。私の方からきつく言っておいたわ。赦してくれないかしら？」

「感謝と謝罪は受け取ります。それについては深く掘り下げないことにしましょう。今日の本題は……別のことでしょう？」

「……そうね。父から伝言を預かっているわ。本当のことを言えば、そちらが本題よ」

紫音はやはり、と考える。

わざわざ、誰にも話を聞かれない場所へと呼び出されたのだ。単純にお礼や謝罪だけならカフェでも問題ない。そういった秘密の伝言があると考えるのが普通だった。

真由美はしっかりと紫音の眼を見て、七草弘一から預かっている伝言を述べる。

「『今回の件、四葉は行動を控えて貰う。四葉は戦略級魔法師の護衛にだけ努めよ』……です」

「……まあ、そう来ると思いました」

「この事件は七草家と十文字家で捜査するわ。警察は既に動いているし、ウチも伝手のある部署と手を組むことになっているわ。それに十

文字家代表代理、つまり十文字克人君ともね。この後、彼を七草家まで連れていくことになっているの」

「そうですか……」

昨日のテロ事件。

テレビでは魔法師による事件だと騒がれ、反魔法師団体が今朝からデモ活動をしている。死者はいなかったが、カフェの店員が魔法によって重傷を負ったのだ。メディアでもそのことが酷く強調されていた。

しかし、テロ実行犯の魔法師が警察病院で殺害されたことについては、どのメディアでも述べられることがなかった。恐らく、七草が先に手を回して隠蔽したのだろうと予想できる。

ただでさえ、魔法師にとって不利な事件が起こったのだ。その上、犯人が第三者によって消されたとなれば、余計な憶測すら呼びかねない。

魔法師犯罪者の不適切な管理を問われることにもなる。

そちらへ対応していたが故に、実際の事件の方へ手回しする余裕がなかったのだ。

また、犯人が始末されたことによって生まれた別の懸念がある。

「犯人が消されたということは、組織的な犯行ということですよ。それらも警察病院の警備を簡単に掻い潜ってしまうほどの。しかも、凶器として使用された魔法デバイスも奪われたと聞いています。その辺のテロ組織ではありえませんが。」

七草と十文字は、それを調査する。そして四葉は何もするな。

そういうことですよね？」

「ええ、やっぱり四葉君も知っているのね。一応、犯人が始末されたこと、証拠品のデバイスが盗まれたことは秘密になっているはずなんだから……」

まあ、いいわ。ともかく、これから何かしらの事件が起こると予想されています。ですが、四葉家は静観するようにしてください。自

衛は構いませんが、能動的な行動は控えて貰います

「これが十師族七草家としての申し出です」

そう言われると、紫音としては少し困ったりする。

今回の事件で、七草も十文字も掴んでいない情報が幾つかある。まず、犯人が吸血鬼であることだ。そして後ろから手を引いていると思われる顧傑^{グゼツ}。最後にUSNA軍魔法師部隊スターズの介入である。

犯人が使っていた武装デバイスが『分子ダイバイダー』であること、そしてそのデバイスが盗まれたことを考えれば、既にスターズがこちらに来て対処している可能性が高い。

臃げな原作の知識を当て嵌めると、戦略級魔法——特に『マテリアルバースト』——についても探りを入れてくるはずである。これについては真夜からも情報を貰っているので、殆ど間違いない。

そこまで分かっている状況で、何もするなと言われるのは癪だ。一連の事件は全て関連しているため、ここで首を縦に振ると、全ての事件で四葉は介入できなくなってしまう。

簡単には了承できない案件だった。

「お断りします」

「……理由を聞かせて貰えるかしら？」

「今回のテロ事件ですが、偶然にも俺がいたカフェが狙われたという風に捉えるのは些か出来過ぎです。戦略級魔法師である俺を狙った事件だと考える方が良いでしょう」

「そうね」

「そして、戦略級魔法師が直接狙われる場合、考えられる敵は二つです。一つは反社会系の魔法師排斥団体。もう一つは他国です。特に、仮想敵国ならば日本の魔法戦力を低下させるために戦略級魔法師をテロに見せかけて殺害することを厭わないでしょう。

証拠品である武装デバイスを盗み、実行犯を消したことから、後者である可能性も充分にあります」

紫音はそう言うが、本心では前者だと考えている。

より正確には顧傑^{グジエ}が自分を狙ってきたのだと殆ど確信していた。周公瑾から奪った情報、淡い原作知識を合わせれば自然と答えは出る。顧傑^{グジエ}が吸血鬼を利用し、恨みのある四葉を標的として、まずは紫音に狙いを定めたというのが本命の予想だ。

とはいえ、今回は後者である方が都合も良いので、そのまま説明する。

「相手が国家であるならば、俺も十師族四葉家として動くべきではありませんか？ 確かに、横浜事変のような、表立った戦争ではありません。しかし、これは立派な攻撃行為です。既に始まっている攻撃に対して、何もするなど言うのは聞き入れられません」

「……相手は他国じゃなくて、反魔法師団体かもしれないわ」

「反魔法師団体が魔法師を使ってテロを行うのですか？」

「うっ……まあ、そうよね……」

真由美は観念したように話し始めた。

「本当は、今回の事件が他国による攻撃である可能性が高いことも分かっているわ。特にUSNAが何だか不穏な動きを見せているみたい。あの国は一応同盟国だけど、完全な味方じゃない」「そうですね」

「横浜事変の時もそうよ。本当なら、すぐにUSNAから援軍や救援がくるはずだった。でも、やってきたのは殆ど全部終わってからだったわ。あれはわざと遅らせたかしら思えない」

「大亜連合とUSNAの間に何かしらの取引があったらと思った方がいいですね。横浜へ攻撃する際、USNAは敢えて援軍を遅らせる……とかの」

証拠はないものの、少し考えれば誰でもわかることだった。そのことも含めて、USNAの動きが怪しいのである。

同盟国とは言え、USNAからすれば日本に優れた魔法師がいることは許容できないのだろう。立場は対等であっても、相手より優位に立ちたいと考えるのは当然だ。故に、大亜連合と秘密の契約を交わした。

大亜連合は横浜を襲撃し、技術者や魔法師を拉致、魔法データバンクから情報をゴツソリ奪い取る。

USNAは日本の戦力が低下したことで、少し優位に立てる。そんな利害の一致があった。

しかし、結果として二種類の悪夢を呼び寄せることになる。紫音の『日蝕』と達也の『質量爆散』^{マテリアルバースト}によって大亜連合軍は壊滅。USNAも未知の魔法に対して怯える結果となってしまった。

ならば次にUSNAが起こす行動は何か。

答えは日本が保有する戦略級魔法師の調査、または始末である。

紫音も真由美も『可能性』や『かもしれない』などという言葉で濁しているが、今回の相手がUSNAであることは殆ど確定という前提で話していた。

「四葉が保有する戦略級魔法兵器こと、俺が他国に狙われている。それならば、四葉はしっかりと動かせていただきます。正式な抗議があるならば、四葉の本家へと伝えてください」

「はあ……分かったわ。父にもそのように伝えます」

真由美はあの父親にこのことを伝えなければならぬと考えて溜息を吐いた。今回の件は七草や十文字の監視地域で起こったことであり、四葉に余計なことをすると言うのは簡単だ。

しかし、紫音が正式に戦略級魔法師として公表されたことが枷になる。

紫音は国家レベルで守られなければならないし、四葉も紫音を守る義務が生じる。

昨日の事件が紫音を狙ったことだとすれば、寧ろ積極的に四葉が動かなければならない。担当地域を理由に縛り付けることは出来な

いのだ。

この際だから四葉も七草も協力すれば良いのに、と真由美は考える。しかし、過去の確執がそれを許さない。特に弘一が無駄に四葉を意識してライバル視しているせいで、いつまでたっても微妙な関係が続いているのだ。

そしてその夜、四葉本家にいる真夜に向けて、七草から抗議文が送られた。

しかし、当然の如く真夜は拒否。息子を守るために動いて何が悪いと言われれば、流石の弘一も言い返せない。

結局、四葉は四葉で独自に動くことが決まるのだった。



二〇九五年一月三十一日、大晦日。

紫音は今年、四葉家に戻っていなかった。いつもならば元旦に行われる慶春会に出席するべく、本家へと帰っている。しかし、今年は少し事情があるので、東京に留まっていた。

理由はUSNAへの警戒である。

紫音が監視されている可能性を考え、四葉本家の場所を悟られないために、紫音は東京で待機することになったのだ。これは真夜の決定であるため、紫音も文句はない。

だが、この日の夕方、紫音はテレビ電話で真夜と会話をしていた。

「今年も終わりね紫音さん」

「はい、明日の慶春会に出席できず、申し訳ありません」

「構わないわ。東京に残っているようにと命じたのは私なのだから、紫音さんが気にする必要はないのよ」

「ありがとうございます」

挨拶はこのぐらいにして、真夜は本題に入る。

「紫音さんには幾らか連絡があるのよ。それを踏まえて、色々動いて貰う予定よ」

「連絡ですか。USNAのことですか？」

「それも含めてになるわね。なら、まずはUSNAのことから伝えましょうか。どうやら、達也さんの魔法を探るためにスターズが投入されたみたい。まだ『マテリアルバースト』の使い手が達也さんだとは分かっていないみたいだけど、候補の一人には挙がっているわ。これは前にも言ったわね」

「はい。以前にも聞きましたが、スターズまで投入するとは……」

「もう一つは吸血鬼ね。まだメディアでは報道されていないのだけど、血液が抜かれた変死体が見つかっているの。関連があるかどうかは不明瞭だけど、行方不明者も多数いるそうよ。この吸血鬼はUSNAから来たみたいね。スターズの本命はこちらかしら」

ここは原作通りだ。

紫音も真剣な表情で頷く。

「それでこの吸血鬼なのだけど、どうやらUSNA軍の脱走魔法師兵のようね。武装デバイスも大量に盗まれて、日本に持ち込まれたそうよ。クリスマスイブに紫音さんを襲った犯人も、恐らくはこの脱走魔法師ね。捕縛後に犯人を始末したのはスターズで殆ど確定よ。

気になる吸血鬼の正体だけど……これは止めておきましょう。私も確定情報を持っているわけではないわ。また今度にしましょう。

それよりも、この吸血鬼を日本に手引きした人物の方が重要ね」

「^{グ・ジー}顧傑ですね？」

「ええ、紫音さんが前に捕えた周公瑾という男の背後にいる人物。大漢出身で、元崑崙方院の魔法師。四葉に恨みを持っていると思われる要注意対象よ。」

紫音さんが狙われたのも、戦略級魔法師だからというより、四葉だからと考えた方が納得できるわ。これからも狙われると考えると動きなさい」

「心得ています」

紫音が周公瑾から情報を吸い出した時、顧傑グ・ジの情報も幾らか得ることが出来た。そこから感じ取れた顧傑グ・ジの評価は不気味の一言。

ともかく、四葉に対して並ならない感情を抱いていることだけは非常によく理解できた。

「紫音さんへの依頼は三つよ。まずはスターズが達也さんに向けて疑惑を取り払うこと。次に顧傑グ・ジを排除または捕縛すること。最後に吸血鬼の捕獲ね。」

予測している吸血鬼の正体と、紫音さんがテロ犯に見た不可思議な精神波長……このことから、吸血鬼は四葉にとって有用なものであると考えているわ」

「承知しました。仮にスターズと戦闘になった場合、私はどこまで力を見せても構いませんか？」

「そうですねえ……」

真夜は可愛らしく首を傾げてから答えた。

「見せるだけなら全部見せても構わないわ。『調律』の力も、『夜』の力もね」

「わかりました。ありがとうございます」

「ああ、そうそう。念のために言っておくわ。アレはまだ使ってはダメよ」

「……そもそも、アレはまだ未完成ですからね。それに、アレは『闇』

や『夜』よりも遥かに致死性が高い魔法です。使う場面も限られますよ」

「ふふ……念のためよ」

紫音は現在練習中の、ある魔法について思考を巡らせる。

アレを会得するために、紫音は幾つもの死体を作り上げた。元は真夜の命令で会得を始めた魔法であり、練習台も真夜が用意した。

出来れば、アレを使う機会は無い方がいい。

仮にその魔法が使われることがあれば、その時こそ、四葉は世界に對して再び最恐のイメージを植え付けることになるだろう。

そんなことを考えるのだった。

来訪者編 6

二〇九六年という新しい年を迎え、一週間もすれば流石に正月気分は抜ける。三が日が過ぎるまでもなく働き始めるといふ伝統は変化しておらず、学生を除けば大抵の人は会社へと足を延ばしていた。とは言え、そろそろ学生たちの冬休みも終わる。

魔法科高校も新学期を迎え、魔法を研鑽する日々を送ろうとしていた。

しかし、それは留学生の到来という一大イベントによって崩れ去る。三学期からはUSNAから交換留学生がやってくるという噂でもちきりとなり、学校全体がソワソワとした雰囲気になっていた。

「ねえ、聞いた？」

「交換留学生でしょ？ A組だよな」

「A組の北山さんと交換って話らしいからな」

「なんで俺たちはB組なんだよー」

「そんなに気になるなら見に行けば？」

一年B組のクラスでは、やはり留学生の話で盛り上がっていた。しかし、その中で紫音だけは電子書籍を眺めながら考え事をしていた。

(来たか。アンジェリーナ・クドウ・シールズ……)

真夜からも忠告されているが、アンジェリーナこと通称リーナが今回の事件でキーパーソンとなる。彼女の正体はUSNA魔法師部隊スターズ総隊長シリウスにして、戦略級魔法『ヘヴィ・メタル・バースト』の使い手。追加で言えば、紫音という戦略級魔法師、そして謎の戦略級魔法『マテリアル・バースト』の使い手を探るためにスパイ活動もすることになっている。ただし、作戦の本命は吸血鬼と化した脱走兵の始末だ。

この辺りの知識は紫音も覚えていた。

（暫くは接触を避けるのが吉か。どうせ向こうから近づいてくる。それよりも先にこちらが近づくと、『アンタの情報に筒抜けだぜ』って言ってるようなものだし）

こういうときは四葉という名前が邪魔をする。

国という単位で見れば、四葉を過小評価するところもある。しかし、それは魔法師でない政治家たちが甘く見ているだけの話であり、実働部隊の魔法師たちは、寧ろ四葉を激しく警戒している。

つまり、不用意な接近は警戒心を抱かせるのに十分ということだ。

アンタツチャブル
接触禁忌に触れようとする心意気のある者すら少ないのだが。

しかし、スターズ隊長ならば確実に近づいてくる。

今は警戒心を出来るだけ抱かせず、待てばよい。

（後の注意点は、達也や深雪と仲良くしないこと）

真夜からの依頼で最も重要なのは、達也にかけられている戦略級魔法師疑惑を取り去ることだ。同じ戦略級魔法師である紫音が達也と親し気にしていると、疑う材料として扱われる。普段から特別仲良くしている風には装っていないので、気を付ければ問題ない。

あくまで、紫音は達也の実力を認めているという風に振る舞う。

ただし、認めているのは魔法力ではなく戦闘力というところをアピールするのも重要だ。どうせ、接していれば達也の特異性はバレてしまう。

戦略級魔法などを扱うような魔法力など皆無だが、達也は実戦において優れている。このような印象をリーナに与えるのが最も自然であろう。下手に隠蔽するよりかはマシになるはずだ。

（達也に吸血鬼と関わらないよう、釘を刺しておかないとな……原作ではなんで達也が吸血鬼と関わることになったんだっけ？ 思い出

せん……)

特に深雪へと危害が加わるような事件はなかったはずだ。

しかし、逆に深雪の生活圏で事件が起こったのも事実。それを理由に達也が動くとするればあり得る。紫音はそう結論付けた。

(なんにせよ、今夜は四体目の吸血鬼を捕獲するとしますかね……)

新学期初日の学校は、特に事件もなく終えたのだった。



夜の十一時にもなると、流石に人通りも少なくなる。

そんな中、黒い衣服をまとった紫音はビルの隙間を縫うようにして駆けていた。サイオンレコーダーに感知されないように魔法を行使するのは当たり前。自己加速術式だけでなく、ベクトル操作系の加速魔法も利用して人間離れした移動を見せていた。

「速いな。流石に三体も捕獲されたら警戒するか」

紫音はそんな呟きを漏らしつつ、ターゲットに迫る。波動感知によってプシオン波動を知覚し、吸血鬼独特の不思議な波長を追う。吸血鬼からすれば隠れているつもりでも、紫音にとっては見つけてくださいと合図を放っているようなものだ。

これほど特徴的な波動ならば、数百メートル離れていても余裕で見つけられる。

「逃げられると思うなよ」

紫音は吸血鬼の動きが止まったことを知覚した。先回りさせておいた黒羽の者が抑えたのだろう。その間に紫音はさらに加速し、現場に到達する。

丁度、そこでは吸血鬼と黒羽家直属の魔法師が戦闘を繰り広げているところだった。ちなみに、戦闘場所へと余計な人が近づかないよう、人払いする部隊も別で展開している。

よって、ある程度の激しい戦闘は問題にならない。

(後は俺がやる)

吸血鬼を抑えていた者たちにアイコンタクトを送ると同時に、紫音は吸血鬼の背後に現れて『音壊』を使用した。衝撃音などを増幅し、敵を内部から潰す魔法だ。シンプルさの割に効果は極悪である。

「いんぱくしー！」

背骨と内臓を掻きまわされた吸血鬼は、その場で崩れ落ちた。しかし、これで終わりではない。吸血鬼には凄まじい再生能力が備わっている。この程度で終わりだと侮れば、不必要な反撃を喰らうことになる。

紫音は徹底的に吸血鬼を痛めつけ……たりはしない。

ただ、相手の背中を踏みつけながら告げた。

「眠れ」

それだけ言って、『調律』を発動した。吸血鬼の精神波長を調律し、完全に一定化させる。つまり、精神に変化を与えないのだ。

言い換えれば、外部からの刺激に対して反応できない精神を作り上げる。

目で見ても見えず、耳で聞いても聞こえず、匂いすら無臭と捉え、食べ物は無味となり、痛みどころか触れられているという感覚すらない。

それが何の刺激にも反応しない精神状態である。

分かりやすく言えば、眠っている状態だ。

身体は起きているが、精神が眠っている。

吸血鬼はピクリとも動かなくなった。

「手早く拘束してくれ。この魔法は長時間使うと心肺停止状態になるかもしれないから」

精神は体に引かれる、などというが、それより体が精神に引かれることの方が多い。ストレスが溜まれば体調は崩れるし、下手すれば胃に穴が開く。

この精神一定化の魔法も、使いすぎると相手が心肺停止状態になることもある。何の刺激にも反応できないので、身体が死んだと勘違いしてしまうのだ。ただし、あくまでも可能性であり、絶対にそれが起こるわけではない。

更に、この魔法は相手に長く触れながら『調律』しないといけないので、刹那の戦闘では全く使えない。

相手を無力化するこの魔法を使用するために、相手を一度無力化しなければならぬというところでもない矛盾が生じてしまうのだ。今回のような特殊ケースでもない限り、出番はないだろう。

(今回の吸血鬼も脱走兵じゃなかったか)

黒羽家の配下たちが吸血鬼を拘束する様子を眺めつつ、そんなことを考える。どうやら、吸血鬼の全員がUSNA軍の脱走兵ではないらしいと分かっていた。

そして、脱走兵でない吸血鬼は弱い。

肉体能力と多少の異能で苦戦はするが、四葉の戦力を投入すれば怪

我人もなく確保できる。その程度でしかなかった。

(顧傑が温存しているのか……そもそも制御できていないのか)

顧傑が吸血鬼を日本に手引きしたのは既に分かっている。そして、彼の目的が四葉であることも明白だ。以前にカフェで襲撃されたのも、顧傑の差し金だとすれば納得できる。

しかし、今日捕獲した分を含めた四体の吸血鬼は手ごたえがなさ過ぎた。

それに、紫音が夜の街に繰り出すと簡単に見つかるような場所にとたというのも不審だ。

何か怪しい計画でも立てられているのではないかと疑ってしまう。

(警戒は必要だな)

紫音は顧傑を過剰に警戒していると言って良い。それは周公瑾の思考や記憶を『シンクロダイヴ』で読み取ったからこそだ。

悍ましいほどの怨念が顧傑にはある。

「拘束完了しました紫音様」

「よし、撤退だ」

ともあれ、今日の仕事は終了である。

捕らえた吸血鬼は黒羽の者に任せ、紫音は自宅に戻るのだった。



「四葉紫音とは未接触……ですか？」

「ええ、機会がなかったわ」

リーナは拠点としていたアパートに戻り、同居人であり任務のサポート要員でもあるシルヴィアと情報交換をする。

シルヴィア・マーキュリー・ファースト。スターズ惑星級魔法師マーキュリーの一番手というコードネームだ。リーナは恒星級魔法師シリウスなので、立場上は部下にあたる。

ただし、プライベートでは割と対等な付き合いをしていた。

「四葉紫音は日本が新たに発表した戦略級魔法師。小さな国土で二人も戦略級魔法師を抱えているという時点で異質だけど、何よりも異質なのは四葉の魔法師ということです。極端なまでに情報がなかったあの家が、まさか……というのが正直な感想です」

「彼とはクラスが違うわ。だから無理やり接点を作らないと接触は難しいです」

「向こうからは来てくれないのですか？ 噂の美少女留学生となれば、一目見ようという気になると思うんですけど」

「シルヴィ……押揃うのは止めてください」

客観的に見て、リーナは美少女だ。

輝く金髪、宝石のようなブルーの瞳、白い肌は万人が認める美少女だと証明している。しかし、事実として紫音からの接触はなかった。興味がないということなのか、ミーハーっぽい行為を避けたのか……彼女たちにとって真相は不明である。

「まだまだ初日です。頑張ってくださいリーナ」

「はい。それに、もう一人のターゲット……司波達也とは接点が出来ました。彼がああ『大爆発』^{グレート・ボム}の使い手だとはとても思えませんでしたが」

「それを言うならリーナも同い年でしよう？」

呆れたような目で諭すシルヴィアに対し、リーナは肩を竦める。

「そう考えれば、四葉紫音も戦略級魔法師ですし、魔法と年齢は関係ないことも多いです。気にするだけ無駄でしたね」

最後にはそう言っただけ溜息を吐くシルヴィア。

リーナのサポート要員として派遣されただけあり、苦勞人っぽさが漂っている。

「事前情報では、司波達也は風紀委員というものに所属していましたね。確か四葉紫音も同じ所属だったはずです。そこを接点にしてどうにか接触を試みてはいかがですか」

「なるほど。名案です」

「でも、慌て過ぎないでくださいね。リーナはおつちよちよいなところがありますから」

「お、おつちよちよいって……」

リーナは反論しそうになったが、言い返せないところもあるため途中で黙る。

そんな彼女に対して、シルヴィアは優しく語りかけた。

「慎重に行きましょう。ただでさえ、スパイなんて慣れない任務ですから」

「う……はい」

スターズ総隊長アンジー・シリウスも万能ではない。戦闘力では最強と言えるだけの実力を保有しているが、まだまだ少女でしかないのも確か。冷静な判断力、的確な対応力は圧倒的に足りない。

自分の至らなさにもどかしい感情を覚えつつ、留学初日を終えるの

だ
っ
た。
。

来訪者編7

リーナには脱走兵の始末という任務の他に、謎の戦略級魔法『グレート・ボム（仮称）』の使い手を探ること、また四葉紫音について探りを入れるという任務がある。

正直、潜入捜査任務は専門ではないため自信はないのだが、軍からの命令である以上、しつかりとこなさなくてはならない。

昨夜シルヴィアから受けた助言に従い、リーナは風紀委員を訪れていた。

名目は『日本の風紀委員活動を見学したい』というもの。交換留学生という立場を利用した、上手い手だとリーナも自負していた。

「おはようございます」

授業終了後の夕方だが、これは風紀委員の挨拶だ。本部にいた皆が入り口に目を向けると、今や風紀委員の大戦力として数えられている司波達也が立っていた。

「あ、司波君。ちよつといい?」

「何でしょうか千代田先輩」

風紀委員長となった花音に呼ばれ、達也がそちらに向かう。勿論、その側にリーナがいることは気付いていたが、この段階でここにリーナがいる理由は知らなかった。

「シルズさんのことは知っているわよね? 実は風紀委員の活動を見学したいって言われて、今日が当番だった司波君に見回りを一緒に行って貰おうと思って」

「はあ、自分ですか。こういうのは委員長か風紀委員の先輩がする仕事ではありませんか?」

「同じ一年の方が肩ひじ張らずに済むという見方もあるわ」

この厄介事から逃れるのは無理だと悟り、達也は諦める。

「分かりました」

「初めからそう言えばいいのよ」

絶賛注目中の美少女留学生を連れて学校を歩くというのは、嫉妬の視線を受けることに等しい。ただでさえ、リーナはUSNAの魔法師シリウスという爆弾のような事実を抱えているのだ。事前に紫音から忠告を受けていた達也としては、関わりたくない人物といえる。しかし、無闇に拒絶するのは世間体的に良くない。

「よろしくねタツヤ」

「ああ、こちらこそよろしく頼むリーナ」

既に風紀委員会本部で嫉妬の視線を感じつつ、達也は頷くのだった。



達也は居心地の悪さを感じながらリーナを連れて歩いていた。それは、擦れ違う生徒から妬みの目を向けられることだけが理由ではない。

リーナの方から達也を探るような視線を感じるのである。

紫音からの忠告通り、戦略級魔法師として疑っているのだろうと達也も感じていた。

そんなとき、達也はふと紫音の言っていた言葉を思い出す。

『面倒だと思つたら俺を生贄にしろ。それで達也が注目から逃れられるなら、問題ない』

五日ほど前に秘匿回線を使って言われた話だ。

元々、紫音は達也と深雪のカモフラージュとして第一高校に入学している。その役目を果たすという意味だろうと達也も認識していた。実を言うと、達也も紫音の仕事は全て把握しているわけではない。しかし、決して無駄なことではないだろうと確信していた。なので、ここは言われた通り、紫音を生贄として自分への興味を逸らすことに決める。

「ところでリーナ」

「えっ？ ど、どうしたのかしら？」

急に声を掛けられたからか、少し動揺気味でリーナも返事する。しかし、達也は敢えてスルーしつつ、質問を投げかけた。

「風紀委員に四葉紫音という生徒がいるのは知っているか？」

「……知っているわ。だってあの有名な四葉だもの」

少しリーナからの警戒度が上がった気がした。

だが、それは当然である。何故なら、リーナは紫音と接点を持っためにも風紀委員会にやってきたのだ。こちらから話題を振る前に、ターゲットの話が出てくれば怪しんだりもする。

しかし、達也はリーナの警戒に気付きつつも、口調を変えずに言葉を続けた。

「他にもこの第一高校には元生徒会長の七草先輩、元部活連会頭の十文字先輩がいる。日本では魔法の名家と言われているんだが、USNAにもそう言った名家はあるのか?」

思ったより普通の質問だったからだろう。リーナは警戒を緩めて普通に答えた。

「勿論、あるわ。でも、日本の十師族のように大きな力があるわけではないの」

「十師族についても認識があるんだな」

「ええ。ワタシには九島の血も流れているのよ?」

「ああ、そう言えばそうだったな」

アンジェリーナ・クドウ・シールズがリーナの本名だ。ミドルネームとしてクドウが入っている通り、彼女の祖父はあの九島烈の弟になる。それ故、十師族についてもある程度の知識があった。

「十師族はUSNAでも知られているのか?」

「というより、十師族の四葉が知られているのよ。特に魔法師の中では……ね」

「それなら、紫音はリーナからしても興味がある人物ということになるのか」

「え、ええ。そ、そうね」

リーナは戸惑いながらも頷く。

何故だか、紫音に対して強い興味を示しても疑われない構図が出来上がってしまった。都合が良いと言えばそうなのだが、流石にこれでもいいのかと考えてしまう。

(違うわ。これでいいのよ。そう、作戦通りよ!)

しかし、リーナは納得する。今の会話に不自然な流れは感じられない。達也からも、リーナを試すような口調の変化は見られなかった。つまるところ、リーナは見事に達也の掌へと収まってしまったのである。

「紫音は流石と言える魔法力だな。九校戦は知っているか？」

「初めて聞くわね。どんなものか説明してくれるかしら？」

「ああ、勿論だとも——」

その後、達也は見回りをしつつリーナの興味を紫音へと移らせる。達也も限度は弁えているので、紫音の力を完全には話さない程度で、適度に興味を引くのだった。

——なお、仲睦まじくリーナと話している姿が学校で噂となり、氷の女王が降臨したのは余談である。



一月十四日、夜の渋谷。
軽く変装した千葉寿和ちかばとしかずと相方の稲垣は小声で会話しつつ歩いていた。

「おお……冷えるなあ」

「ちゃんと見回りもして下さいよ警部」

「分かっているさ稲垣君」

二人は吸血鬼事件であたりを搜索している。体内の血液が一割ほど抜かれた状態で死体が見つかる変死事件だ。これが警視庁全体を悩ませていた。

「最近では吸血鬼事件以外にも行方不明事件だってありますから、注意してくださいよ」

「既に二十人を超えているらしいからねえ。大事件だよ」

「上の方々は吸血鬼事件と関連があると考えているみたいですよ」

この吸血鬼事件と同時に起こったのが行方不明事件だ。警察に多くの搜索依頼が提出されており、時期を鑑みて関連性が疑われている。

だが、実を言えばこれだけではなかった。

「稲垣君。こんな話を知っているかい？」

「なんです警部」

「一月ほど前に、横須賀にある国防軍の倉庫から爆薬が盗まれたんですよ」

「なっ——!？」

「ちよっと声が大きいよ」

慌てて稲垣は自分の口を塞いだ。

本当に思わず叫び声を上げる所だったので、良い判断である。そし

て、少し落ち着いた稲垣は寿和へと小声で尋ねた。

「初めて聞きましたよ」

「僕も実家の伝手で知った話だから、君は知らなくて当然だよ」

「……もしや、それも吸血鬼事件と関連が？」

「ないとは言いきれないんじゃないかな？ 時期も大まかには重なっているよ」

これが表に公表されないのは、盗まれた爆薬が少量だったからである。テロを起こすには少なすぎる量だったので、まだ隠されていた。

勿論、犯人は捕まっていない。

「お蔭で国防軍もてんやわんやさ。それに、あの七草家まで動いているらしい」

「十師族が……ですか？」

「噂じゃ、四葉にも動きがあるとか……ないとか？」

「なんだか不安になってきましたよ」

「四葉についても実家からの伝手だよ。どうも、あの戦略級魔法師君が色々と動いているらしいね。護衛が数日に一回の割合で例の彼を見失うらしい」

「……怪しいですね」

勿論、例の彼とは紫音のことだ。

紫音は吸血鬼を確保する際、国からの護衛を適当に撒いていた。それ故、毎日は吸血鬼を追うことが出来ない。流石に何日も見失うほど、見張り役は愚かではないからだ。

護衛たちも紫音が何をしているのかは分かっていないが、偶に消えることから、何かをしているのだろうと考えていた。ここから、四葉にも何かの動きがあると予想されたのである。

「こんなことが立て続けに起こっているんだ。きっと大事件になる

よ」

「呑気に言っている場合ですか!」

本当のことを言えば、あまり悠長なことをしてられない事件だ。何故なら、既に多くの死者が出ているのだから。

「手がかりがその辺に落ちていたらいいんだけど」

「そんな都合のいいことはありませんよ警部」

二人して溜息を吐く。

そんな寿和と稲垣のすぐ側で、ガタイのいい少年と擦れ違ったことに気付きもしなかった。

「あれ? エリカの兄貴の警部さん?」

しかし向こうは気付いたらしい。そのセリフで自分のことを指していると感じた寿和は、慌てて声のした方へと向く。すると、そこには見知った高校生、西城レオンハルトの姿があった。

だが、それよりも先にすることがある。

「君、ちよつと来てくれ」

舌打ちしそうな表情で稲垣はレオの腕を引っ張り、小さな路地へに入る。

レオはただ知り合いを呼び止めただけの感覚だったが、寿和や稲垣からすると事情が異なってくる。夜の渋谷は不良気味の若者が騒ぐ歓楽街と化しており、その中に警察の者が入っていくことには一定の意味が生じる。

捜査している事件が事件だけに、注目は避けたかった。

なので、人目を避けるように路地へと入ったのである。

レオも寿和と稲垣が知り合いということもあり、特に抵抗せず従

う。三人は路地裏の小さな酒場へと入り、マスターの声も聞かずに奥の密室へと入った。

「いや、何なんすか……？」

あまり状況の掴めていないレオは、ようやく問いかける。それには苦虫を噛み潰した顔の稲垣に代わり、寿和が答えた。

「いやあ、よく僕たちに気付いたね。西城君だったっけ？ 気配は消してたつもりなんだけどなあ」

「……？」

苦笑いする寿和を見てレオは首を傾げる。だが、すぐに何か気付いた様子を見せた。

「もしかして……捜査の邪魔をしちまったとか……？」

「いや、そんなことはないよ。気配を消していたのはトラブルを避けるためさ。夜の渋谷は無駄に絡まれるからねえ」

「ああ、なるほど。確かに、警察の人は目の仇にされるからなあ」

レオも深夜の渋谷は偶に歩いている。それは彼が不良だからではなく、単に本能に任せた散歩をしているからだ。放浪癖と言っても良い。

だから、寿和の言わんとしていることは理解できた。

そんな態度だからだろう。稲垣も少しだけ雰囲気を変化させた。

「……警部。折角なので彼に話を聞いてみませんか？」

「ん？ ああ、そうだねえ。となると、ちよつとだけ事情を話さないといけないかな」

状況を把握できないレオは首を傾げる。

そんなレオに、寿和は吸血鬼事件についての説明を始めた。この事件はまだ世間に出ていない情報なのだが、実を言うと明日には報道されるのが決まっている。言っても言わなくても同じだった。

「ちよつと奇妙な変死事件が起こっているね。死因は衰弱死、かすり傷以上の外傷もなく、毒の疑いも全くない。強いて言うなら血液が一割ほど失われているのが特徴かな」

「変死ねえ……まさに怪異ってことか」

「そうだ。そんな怪異事件について情報が欲しいのさ。何か渋谷で変わったことはなかったかい？ 例えば、見知らぬ人間が入ってきたとか。噂なんかでも構わないよ」

「余所者や変な噂か……」

レオはしばらく考えたが、首を横に振った。特に心当たりはないらしい。

寿和も稲垣も期待はしていなかったのか、すぐに顔を見合わせて諦めた。

だが、レオはそんな二人に希望を告げる。

「なんなら、俺のダチからネタを仕入れておくぜ？ そいつらなら、何か知ってるかもな」

「え？ いやいや。そこまでしなくてもいいよ。それは警察の仕事だし」

「でもよ、夜の渋谷で警察が聞き込みできるのかよ？」

遠慮しかけたが、レオの言っていることは事実だ。

正直、魅力的な提案と言える。

「危険なことやしねえよ。これでも嗅覚には自信がある」

「……そうか。じゃあ」

「警部!?!」

稲垣は止めようとしたが、寿和はそれを無視して自分のメールアドレスが書かれた名刺を差し出す。

「何かあればここに連絡してくれ」
「おう」

レオは名刺をポケットに仕舞い、店から出ていくのだった。

来訪者編 8

翌日、一月二五日。今朝のニュースで吸血鬼事件が発覚したからだろう。日本の東京という世界でも割と治安の良い場所で起こった連続怪奇事件だ。メディアは面白おかしく、シリアスも忘れずという絶妙な塩梅で報道し、世間の注目を集めていた。

勿論、ただの怪事件で終わらせるようなことはしない。

最終的には魔法が怪しいという話になり、次に魔法師の犯罪件数についてのデータ、最後に反魔法主義のコメンテーターが魔法師に対する批判を述べて朝の特番を終える。

いつも通りと言えども通りである。

しかし、十師族に連なる者は『へえ〜』で終わるわけにはいかない。国立魔法大学付属第一高校の午後、とある空き教室では七草真由美と十文字克人が揃っていた。

「こんな時間に悪いな七草」

「いいわよ。幸い、私たちは受験生だから午後の授業はない。密会するには丁度いいわ」

そんな会話をする二人だが、逢瀬というわけではない。確かに、克人の婚約者候補として真由美は挙げられているものの、二人の間に恋愛感情はなかった。

今回、こうして顔を合わせたのは別の要件である。

今朝報道された吸血鬼事件についてだ。

「手短に言うわ。十師族七草家当主、七草弘一からのメッセージです。私たち七草家は十文字家との共闘を望みます」

「協力ではなく共闘か……もうそんなところまできているのか？」

説明を求めるような視線に応じ、真由美は頷く。

「まず、十文字君は吸血鬼事件についてどれくらい知っているのかしら？」

「メディアで報道された以上の情報はないな。うちは七草ほど情報網を張っているわけではない」

「でしようね……それで七草家の調べた範囲で分かっている内容だけ」

真由美は一度そこで切り、目を閉じた。そして覚悟を決めたかのような眼で再び語り始める。

「……実際の被害者数は報道された数の三倍以上よ。付け加えるなら、死体が見つかっていない行方不明事件も多発しているわ。警察は吸血鬼事件と行方不明者多発事件が連動していると考えているみたい。うちも同じ考えよ」

報道されたのは八人だった。三倍以上ということは、見つかった被害者だけで二十四人を越え、そこから更に行方不明者までいるという。

克人も驚かざるを得ない。

「警察も把握していない被害者は七草家の関係者か？」

「ええ。それだけじゃなく、魔法師じゃない魔法の資質を持つ人、魔法科大学の学生まで含まれているわ」

「つまり魔法師が積極的に狙われていると……？」

「そうなるでしょうね」

これは十師族として放っては置けない。責任感の強い克人はそう考える。

だからこそ、ここに呼ばれていないもう一人の十師族について言及した。

「四葉には言わなくていいのか？」

「……出来ればそこに触れて欲しくなかったわね」

急に不機嫌そうな表情を浮かべる真由美に克人も戸惑った。

四葉と七草の仲が悪いのは周知の事実であり、そこに疑問はない。だが、この緊急事態で協力体制を敷かないのは些か不思議である。

「父が直接言ったのよ……ここは七草でやるってね」

「直接？ 四葉家にか？」

「最近USNAの作業員らしき人物の影もあるわ。だから四葉君に忠告だけはした。でも、四葉は四葉で今回の事件について勝手に動くみたい」

「なんだそれは」

流石の克人も呆れた。

ここまで協調性のない話があるだろうかと目頭を押さえる。

確かに、四葉には単独で解決できる力があるのだろう。更に言えば、公認戦略級魔法師として知られる紫音を囿にすれば、USNA関係はあつという間に捕捉できるだろう。ホームグラウンドでないにもかかわらず、幾らでも先手を取れる手札が四葉にはある。

それならば、頭を下げてでもこちらから協力を願うのが常套だ。

「……念のために俺の方からも声を掛けようか」

「四葉君に？ もう手遅れだと思わよ……」

真由美は知っている。

既に四葉が動き回り、何かを掴んでいることを。七草の情報網はそれを掴めぬほど愚かではないのだ。ただ、何を掴んだのかについては全くの不明だが。

つまり、四葉は単独でも既に成果を出しているのである。

わざわざ、他家に隙を見せる必要もない。

「あの狸親父……」

静かに毒づく真由美に、克人は同情の視線を送るのだった。



夜の東京は思ったより静かだ。

それこそ中心地は深夜まで明かりが消えないものの、住宅街に行けば夜七時ごろでも静まり返っている。だが、そんな閑静な場所で、殺気だった鬼ごっこが繰り広げられていた。

『脱走兵デーモス・セカンドを捕捉。サイオンパターン一致』
「了解」

リーナは通信に従って脱走兵を追う。

可能な限り人のいない場所へと追い詰め、処刑するのだ。

だが、今日は何故か追跡が上手くいかない。

『奴の反応が消えた!? 誰か仕留めたのか?』

そんな通信が入ったことでリーナは驚く。しかし、同じチャンネルに繋いでいる仲間たちからは誰一人として応答して来なかった。

つまり、誰も始末などしていないということである。

『あ、申し訳ありません。また反応が見つかりました。北に二百メートルです。くそ……レーダーの調子が悪いのか?』

「了解。追跡を続行」

実を言えば、今日で似たような通信内容を五回もしている。

リーナも後方支援部隊のいい加減さに苛立ちをぶつけそうになったが、そこは我慢した。文句は後で幾らでも言えると考え、方向転換してターゲットを追跡する。

こうして見失うたびに距離を離され、本当にイライラしてきた。

(どうしても今日に限って……)

リーナたちの部隊が脱走兵を発見したのは日本に来て久しぶりのことだ。これまではよほど巧妙に隠れていたのか、滅多に姿を見せなかったのである。

そして久しぶりに捕捉したと思えばこれだ。

『クソ！ また見失った！ どうなっついていやがる!』

それはこっちのセリフだと言いたい。

言いたいのが我慢する。

「早く捕捉を!」

『り、了解です!』

動き回っても仕方ないので、一度止まってから通信を待つ。

だが、今度はいくら待っても返事が返ってこない。

「どうしましたか? 捕捉したなら返答を!」

『ダメです。幾らたっても捕捉できません。これより最後に捕捉した

地点から目的地を推測します』

「わかりました急いでください」

リーナは嫌な予感に苛まれつつ、次の通信を待つのだった。



リーナたちUSNAが動いていた近くにて、四葉も動いていた。

『紫音様、USNA軍の動きは止まったようです。ターゲットを捕捉した様子はありません』

「分かった」

実を言えば、リーナに通信しているのはUSNA軍の後方支援部隊ではない。なんと、偽装した四葉の作業員である。紫音が通信電波を乗っ取り、嘘の通信をすることでUSNAの実働部隊を操っていたのだ。

「そのまま見当違いの方向に誘導しろ」

『そろそろ難しいですよ？ 実働部隊はともかく、本物の支援部隊は異変に気付いているみたいですよし』

「すぐにばれるのは分かっている」

『人使いが荒いですね紫音様……』

「なあ……結構前から思ってるんだけど、黒羽の部隊って文句多くね？ 当主相手に同じこと言える？」

『あつはっはー。昔から馴染みの紫音様だからこそですよ』

彼らは優秀なので、仕事ぶりに文句はない。

だが、この緩さは諜報工員としてどうなのだろうかと思うことはある。亜夜子や文弥に聞いたところ、二人の直属も似たような感じだという。紫音はもう諦めることにした。

「もういい。俺は吸血鬼を追う。そっちは頼んだぞ」

『勿論です紫音様』

頼れることは間違いないので、USNA軍の攪乱は任せて吸血鬼を追うことにする。今回は身のこなしなどから仮定して元USNA軍の魔法師だ。捕獲すれば、それなりの価値があるのは間違いない。

紫音は自分の波動知覚へと意識を落とし、特殊なプシオン波動を感じる。

人間と吸血鬼の差異からターゲットを捕捉した。

「無駄話をし過ぎた。追いかけるか」

自己加速術式を使用し、紫音はその場から消えるのだった。



渋谷の公園。

薄れていく意識の中で、レオは自嘲する。

(まずったぜ……)

吸血鬼事件についての情報を手に入れて、千葉寿和へと連絡する約束をしたまでは良かった。レオとしては渋谷の知り合いからネタを仕入れる程度のもりだったのだから。

まさか、いきなり吸血鬼に遭遇するなど想像できないだろう。

(畜生、力が入らねえ)

特に何かをされた記憶はない。ただ、遭遇した吸血鬼と数度ほど生身で打ち合っただけだ。いきなり力が抜けて、立つことすら儘ならなくなつたのである。こうして意識を保つだけで精一杯であり、それでも必死に自分を見下ろす吸血鬼を睨み返す。

丸つばの帽子と白い覆面、全身を隠すコートという如何にも不審者な恰好であり、構えから格闘技の心得があるように感じられる。数度打ち合ったレオは、この人物が女性かもしれないと考えていた。だが、それ以外に特徴はない。

(……? 誰か近づいてくる)

地面に倒れているレオは、その鋭敏な感覚で僅かな振動を感じ取る。これで助かったかもしれないと安堵するも、それは幻想でしかなかった。

現れたのは覆面を被った怪人の如き人物。

吸血鬼の仲間である。

レオは意識を失う最後の瞬間、虫のさざめきのようなノイズを感じ

たのだった。



完全に意識を失ったレオを見下しつつ、二人の吸血鬼は会話をする。

(追手に見つかったようだ)

(USNAの連中か？ 日本の警察か？ それとも十師族とか言う奴か？)

(恐らくはUSNA軍だろう。だが、途中で私を見失ったようだ)

(それならば撤退を？)

(ああ)

吸血鬼はテレパシーで仲間とやり取りすることが出来る。そしてお互いの位置を常に把握することが可能であり、これを上手く連携に利用して実験を繰り返していた。

(今回は成功か？ この男は生きているようだが)

(今日の実験体はこの男ではない。実験自体は別の女で試し、失敗した)

(死体を持ち帰るか？)

(顧傑グ・ジとかいう男が言うには、死体は充分だとか)

(それならば持ち帰る必要もあるまい)

二人の吸血鬼は撤退で同意し、その場から離れようとする。だが、その決定は遅かったのだとすぐに気づいた。

(っ！ 囲まれている！)

(離れるぞ)

CADもなく魔法を発動し、高速でその場から離れようとする。しかし遅い。凄まじい衝撃に二人は吹き飛ばされ、宙できりもみしてから地面に激突した。その間に二人の手足が絡まり、立ち上がるのに時間を取られる。

二人の吸血鬼は逃走に失敗したことを悟った。

「これがUSNA軍人を元にした吸血鬼か」

砂利を踏みしめる音と声に反応して目を向けると、そこには整った顔立ちの少年が立っていた。右手を向けて指を鳴らせるように構えており、特に武器を携行した様子はない。

しかし、二人の吸血鬼はこの少年の正体を知っていた。

(顧傑グ・ジーが言っていた殺害対象、四葉紫音)

(ここで倒すか?)

(囲まれているから不利になるだろう)

逃げようか、と意見を一致させたところで紫音が言葉を投げかける。
る。

「なんだ逃げるのか？ つれないな」

そのセリフを無視して吸血鬼は同じ方向へと跳ぶべく力を込める。更に魔法の補助も発動し、一気にこの包囲を脱出する算段だった。

しかし、跳ぶ寸前になって再び吸血鬼は強い衝撃に弾き飛ばされ

た。

「テレパシーによる会話か？　けど、俺には筒抜けだな」

波動を知覚する紫音を前にテレパシーを使用するのは迂闊だった。

逃げる方向、タイミングまで読まれ、音を増幅する『音壊』によって吹き飛ばされたのである。

二度も逃走を阻止された吸血鬼は、ここで初めて危機感を覚えたのだった。

来訪者編 9

吸血鬼二体に対し、紫音は一瞬で勝負を決めた。
世界最強の魔法師が使用する、世界最速と言える魔法。

(馬鹿な……)

(肉体に多大な損傷！)

吸血鬼はそんな思いが過る中、冷たい地面に倒れた。紫音が使用したのは四葉真夜の固有魔法『流星群』ミューティア・ラインである。嘗ての実験で精神性を真夜に近づけた結果、使用可能となったものだ。

この『流星群』ミューティア・ラインの特徴は、光の少ない場所で真価を發揮するといふもの。光の分布を偏移させることであらゆる物質を透過させるのが主な仕組みなので、室内や夜のような光量の限定される条件が望ましい。

光があるほど真価を發揮する『暗黒流星群』ダーク・ミューティアとは逆だ。

「捕獲しろ」

『かしこまりました紫音様』

通信デバイスに向かって短く告げた紫音は、公園の端で倒れているレオの姿に目を向けつつ、更に言葉を続けた。

「あと、西城レオンハルトの保護も頼む。すぐに検査してから病院に搬送してくれ。吸血鬼に襲われて生きている重要なサンプルだ。丁寧にな」

『バラしてもいいんですか？』

「んなわけないだろ。一応は高校の同輩だ。丁寧に扱えって話、聞いてたか？」

『聞いてみただけですよ……そんなに凄まじいんでくださいって』

「だったらちゃんと働け。俺は亜夜子や文弥みたいに甘い対応はしな

いぞ」

『りよ、了解です……』

すると、早速とばかりに黒羽の配下が姿を現し、血を大量に流して倒れている吸血鬼と、吸血鬼に襲われたレオの二手に分かれて作業を開始した。

吸血鬼は嚴重に拘束するので時間がかかりそうだが、レオの方はすぐである。

二人がかりでレオを持ち上げ、紫音の方に一度頭を下げてからこの場を去って行った。この後は四葉の息が掛かっている病院で検査し、それから別の病院へと移す予定となっている。

(さて、これでまた二体を確保だな)

吸血鬼に発信機などが取り付けられていないか探っている配下たちを眺めつつ、そんなことを考える。しかし、ここで予想外の通信が新たに入ってきた。

『すみません紫音様』

「どうした？」

『USNA軍のバックアップ部隊が予想以上に早く対応してきました。既にスターズの部隊が紫音様のところに向かっています』

「……おい」

予定ではあと十分以上時間を稼ぐはずだった。

しかし、想像以上にUSNA軍が優秀だったということだろう。いや、これまで紫音が簡単に出し抜き過ぎていただけだった。今回の相手は世界最強を謳う魔法師部隊スターズだ。並みのものと同列にしてはいけなかった。

紫音は即座に予定を変更し、指示を出す。

「相手の包囲網は？」

『不明ですが、恐らく包囲はされていません』

「だったら逃走ルートを確認しろ。殿は俺がする。確保した吸血鬼を守護しつつ、USNA軍と戦闘だ。俺の補佐に数人だけ残せ」

『了解しました。すぐに取り掛かります』

「それと、戦闘になったら俺が魔法で電波妨害をする。全ての用意を三十秒以内に済ませろ」

紫音はすぐに通信を切つて、フードを被つた。顔を隠せるのはこれぐらいだが、ないよりはマシだろう。それに、元からUSNA軍相手にバレたところで大した問題ではない。

USNA軍の方こそ、極秘裏にならなければならぬ立場なのだ。寧ろ、紫音は日本の治安のために十師族として仕事しているというスタンスで押し通すことも出来る。勿論、それは最終手段だが。

「吸血鬼の拘束は完了したか？」

「もう少しです……こいつら、暴れて、中々！」

「痛覚がないんですかね？　かなり手間取っています」

初めから『調律』で精神を眠らせたほうが早かつたかもしれない、と考えるも今更遅い。精神への直接干渉は微妙な力加減が必要な作業であり、今の状況でするべきではないのだ。

一度引き上げてから別の場所で吸血鬼を眠らせる予定だったのだが、逆にそれが仇となつてしまったらしい。

「もうすぐスターズが来る。急げよ」

紫音はそう言つて、電波妨害のために『調律』を発動させるのだつた。



一方、四葉に騙されていたと既に知っているリーナは怒りのオーラを発しながら全速力で目的地へと向かっていた。

(何が魔法による電波妨害よ！　しっかりしなさいよスターズの後方支援部隊でしょ！)

その怒りは四葉に対する怒りではない。綺麗に騙された自分と、何もできなかった後方支援部隊に対しての怒りである。

『四葉の部隊と戦闘が予想されます。注意を』

「分かりました。援軍は？」

『申し訳ありません。急がせているのですが、十五分はかかります。それも四葉が——』

「ああ！　そちらもですか！」

思わず苛立ちが口調に表れてしまう。部下に当たるなど、上官にあるまじき行為だ。しかし、今のリーナにはそれだけの余裕がなかった。

「ハンターRとハンターQはキャスト・ジャマーの用意を。私に続き、ターゲットに対して放射しなさい」

『はっ！』

スターダストと呼ばれるスターズの失敗作がRとQだ。プラネット惑星どころか衛星サテライトの名すら与えられず、アルファベットで呼ばれている。リーナはそれを嫌い、便宜上の名を付けた。

彼女たちは強力な魔法師であることに違いないのだが、遺伝子異常などの事情によって寿命が非常に不安定である。燃え尽きるまで一瞬の輝きを見せる星層スターダスト。

それが彼女たちだった。

使用するキャスト・ジャマーとは、USNA軍が開発したCADを無効化させる魔法である。無系統サイオン波動を飛ばし、展開される魔法式を阻害することを目的としている。

これによって四葉部隊の無力化を測ろうとしたのだ。

『間もなく目的地です。注意を——』

「……………どうしました？」

ここで途絶える通信にリーナは不審さを覚える。紫音が『調律』の魔法で電波を妨害しているのが原因なのだが、それをリーナが知ることは出来ない。

再びの不時に、一瞬だけ通信デバイスを握り潰してやろうかと思ってしまった。

(落ち着くのをよ私。総隊長たるものクールでなければならぬわ……………)

こんな時シルヴィアなら……………とリーナは考える。シルヴィアは日本に来るにあたって、同居している人物であると同時に、バックアップの責任者でもある。しかし、彼女は現在、四葉に通信電波を乗っ取られた事態へに対応しており、リーナの対応は出来ない。

魔法と思われる方法で電波介入をしてきた四葉にどう警戒すれば良いのかは不明だが、シルヴィアもシルヴィアで苛立っているようで

はあつた。

そんな上官シルヴァにバックアップを任せられ、更にバックアップ先である総隊長リーナからもイライラした声で接されたら、胃が痛くて仕方ないだろう。

尤も、リーナが我慢せずに叫んだところで、既に通信は途切れているのだが。

(見えた！)

自己加速術式で急いだ結果、まだ四葉は引き上げていなかった。追っていた吸血鬼と思われるターゲット二名が既に倒れており、拘束が完了している。もう少しで連れ去られるところだったと知り、リーナは少しだけ安堵した。

吸血鬼を抱えているのは四名。

そして、その四名を守るようにフードを被った人物と、黒服の男が数名。自分たちが接近していることを察知し、待ち構えていたのだろうと予想できた。

つまり、交渉はあり得ない。

リーナにも交渉するつもりなどない。

吸血鬼はUSNA軍が開発した魔法師が素体となっているので、持ち去られるのは非常に困るのだ。

「ターゲット殺害を優先」

「了解しました」

「キャスト・ジャマー発動」

リーナの命令に従い、RとQはキャスト・ジャマーを使ったのだつた。



「好都合だな」

紫音は波動知覚によって、アンティナイトによるキャスト・ジャミングにも似たサイオン波動を感知していた。『調律』によってそれを利用し、即座に魔法障壁を張った。

勿論、守ったのは確保した吸血鬼である。

同時に二発の銃弾が透明な障壁に激突し、運動量を失った。

「なっ!？」

深紅の髪を振り乱し、黄金の瞳をギラつかせた仮面の少女——リーナの変装した姿——が驚きの声を上げる。キャスト・ジャマーによってCAD操作は抑制されているはずであり、あの速度で銃弾を止めるほどの強度を持った魔法を使うことなど出来なかったはずだった。

しかし、目の前で起こったことが事実。

リーナがターゲット殺害のために放った銃弾は、確かに止められてしまったのである。

そして、ここでどうということかと考えてしまったのがいけなかった。

「ぐあー!」

一瞬の煌めきの後、ハンターRが悲鳴を上げて倒れる。魔法が発動

したのは理解できたが、それが一体何なのかはリーナに分からなかった。

戸惑い、慌てる様子のリーナを見て、紫音がフードで顔を隠しつつ声をかける。

「大人しく引いて貰おうUSNA軍魔法師部隊スターズ。それとも、ここで死にたいのかな？ スターズ総隊長にして戦略級魔法師アンジー・シリウス」

「なんですつて……？」

リーナは紫音が流暢な英語で質問してきたにもかかわらず、日本語で返してしまった。それほど動揺しているというところだろう。

一瞬でRがやられたことにも、そして自分たちの身分がバレていることにも。

紫音はそれが手に取るようにわかった。『調律』による精神的揺らぎを知覚すれば、リーナが動揺しているのは一目瞭然だった。

「引けないということなら、こうなるがな」

再び闇の中に何かが閃き、今度はハンターQが倒れた。よく見ればRもQも全身を何かに貫かれたかのような傷を負っており、大量の血を流している。

そんな魔法をリーナは知らなかった。

当然である。

これは四葉真夜だけの魔法『流星群』ミューティア・ラインなのだ。目の前の人物が、それを使うなどと予想する方が無理である。

紫音はリーナがそのように考え、混乱することを予想して、敢えて『流星群』ミューティア・ラインを使ってみせた。考える心の余裕も時間も与えないつもりなのである。

しかし、意外にもリーナは強かった。

「断ります。貴方こそ引きなさい」

「言っておくが、これは交渉じゃない。命令だ」

「従えない命令ですね」

「なら、仕方ないな」

紫音は『流星群』ミーティア・ラインを発動し、リーナの持っていた銃を破壊した。続いて目に映った武装デバイスと思われるナイフも『流星群』ミーティア・ラインで打ち落とす。

一瞬にしてリーナは武装解除をさせられてしまった。

「これでもか?」

「く……」

リーナは壊れた銃を懐に仕舞いつつ、歯ぎしりする。

ここで紫音がリーナを殺害しないのは、流石にスターズ総隊長アンジー・シリウスを殺してしまうことが拙いと分かっているからだ。UNNAと明確に戦争をしているのならば問題にならないが、一応は同盟国となっている。幾ら不正に潜入してきたとは言え、殺してしまつては問題が生じるのだ。

あまりにも大物すぎて容易に殺せないというのは難儀な話である。

それに、数か月前にあった灼熱のハロウィンで、大亜連合の戦略級魔法師が死亡している。日本の魔法師が公認戦略級魔法師を二連続で始末したとなれば、世界の調和を乱そうとしているとして世界中から糾弾されることになるかもしれない。

だからこそ、武装解除と降伏勧告をしたのだ。

(リーナを確保できれば、四葉家はUNNA軍と有利な条件で繋がれる。これを逃すなんて馬鹿だ)

当然、捕縛した後の利益についても考慮済みだ。その後のことは真夜に任せれば、良いように進めてくれることだろう。四葉の当主は伊

達ではない。

また、仮にUSNAがリーナを切り捨てるなら、四葉に取り込んでしまえば良いのだから、どう転がったとしても利益にしかならない。

(どうすれば……)

逆に追い詰められたリーナは考えた。このままでは動くことも出来ず、血を流しているRとQの治療すら不可能だ。その上、ターゲツトである脱走兵の始末も出来ない。

通信が出来れば支援部隊に意見を聞いているところだが、今は電波が妨害されている。まさに、詰みという言葉が相応しい状態だった。

この状況がひっくり返るには、盤上以外の要素が必要になる。

今の場にある駒とは異なる、何かがなければどうしようもない。そして、リーナはそんな奇跡を願うほど現実逃避はしていない。

(もう無理……ね)

逃げよう。

ターゲツトを四葉に奪われ、自分まで捕まっては査問会で資質を問われることになる。スターズ総隊長であることに誇りを持っているリーナにとって、それは耐えがたい屈辱だった。

故に逃げることを選択する。

(『^パ仮装^レ行列』を使えばあるいは)

せめてハンターRとQだけでも抱えて逃げようと、隠し持っているCADから『^パ仮装^レ行列』の魔法式を呼び出そうとした時、状況が動いた。

「ぐぎぎや!?!」

「うわあああ! うわあああ!」

「熱い！ 早く消してくれ！」
「ああああああ！」

吸血鬼二名を抱えていた四人がいきなり燃えたのである。
何もない場所で人体が発火する。
リーナはこの現象をよく知っていた。

「パイロキネシス発火念力！ まさかフレディー！」

リーナは急いで周囲を見渡した。

USNA軍スターズ恒星級フォーマルハウトを冠する元同僚の姿を探した。

アルフレッド・フォーマルハウト元中尉はこの近くにいる。

「間に合え。『フリーズ・フレイム凍 火』」

紫音は即座に発火した部下に魔法を行使し、炎を消した。

しかし、その間に今度は拘束した吸血鬼に発火念力が行使される。

紫音はスターズの別動隊が吸血鬼を始末しようとしているのだと考
え、吸血鬼に『フリーズ・フレイム凍 火』を使いながら電波妨害を解除する。

そしてすぐに通信を入れた。

相手は包囲網を形成している配下の一人である。

「スターズに抜かれているぞ。包囲網はどうなっている！」

「紫音様！ 早くその場から脱出を！ 大量の吸血鬼と死体が――
ぎゃあああああ！」

「おい！ 死体ってどういうことだ！」

これはUSNA軍の仕業ではない。

グ・ジ紫音は即座にそれを悟った。死体という言葉から推測できるのは、
顧傑の僵尸術である。フリススキャルヴで四葉の動きとスターズの

動きを眺め、手を打ってきたのだろう。

電波妨害を使って通信を阻害していたのが仇となった。

流石の紫音も、第三者による介入は警察か七草か十文字あたりしか警戒していない。

「撤退だ！」

紫音は領域干渉で分子振動を支配し、発火念力を防ぐ。そのまま即座に撤退することを決めた。通信機に向かって叫ぶと同時に、ここに残った配下たちにも命令する。

しかし、既に時遅し。

公園の周囲から、紫音たちを囲むようにして、大量の人影が現れたのだった。

来訪者編10

元大漢ダイハンの魔法師顧傑グ・ジーは死体を操る術を得意としている。分類としては古式に相当しており、伝承で言えばキョンシーになるだろう。

同時に、生命に関する魔法を得意としている魔法師だった。かつては不老不死の研究をしていたこともあったので、その手の術式には明るいのである。

死者が生者であるときに持っていた、生命エネルギーとも言えるものをエネルギー源として、死体を操ることが出来る。生者が死んだ（生命エネルギーを失った）時に生じた余剰の生命エネルギーを死体に貯蓄し、それを魔法力として利用することすら出来るのだ。

しかし、今回顧傑グ・ジーが用意した死体は吸血鬼が殺したことで生じたものだ。その過程で生命エネルギー、またはプラーナとも呼ばれるものが大幅に失われており、複雑な動きは難しい。

「まるで一昔前の映画だな」

紫音は自分たちを取り囲む死者の数々を見てそんな感想を覚えた。血の気を失った動く死体は、周囲を取り囲むようにして配置しており、一歩ずつ、ゆったりと近づいてきている。

また、死体に紛れて吸血鬼も数体が感知することが出来た。

明らかに精神の波動を失った動く死体、人ならざる精神波動を見せる吸血鬼。

本当に映画のような光景である。

「怪我人を報告しろ」

『八人です。とんでもない身体能力の奴に奇襲されました……』

「多分、吸血鬼だな。こちらも撤退する。今日は吸血鬼の回収は不可能だ。後でどうにかする。今回は命を大事に、で行け」

『了解です紫音様！』

もう、捕獲した吸血鬼を運んでいる場合ではない。スターズに始末されるとしても、ここは引き下がっておくほうが賢明だ。

「行くぞ。死体を切り抜けて脱出する。必要なら手伝ってやるから来い、アンジー・シリウス！」

ここでリーナを放置するほど紫音は鬼ではない。それに、出現した動く死体はともかく、吸血鬼に囲まれている状況というのはそれなりにピンチだ。紫音自身はともかく、配下たちを守りながらとなると難易度が跳ね上がってしまう。

なので、リーナの戦力を当てにする——そちらはあまり期待していない——と同時に、恩を売る目的で共闘を申し出たのだ。

「……………いいでしょうー！」

しばらく考えた後、リーナはやけくそ気味に了承した。紫音は配下に指示を出し、倒れているハンターRとハンターQを抱えさせる。

その間に、リーナは電波が繋がった後方支援部隊へと通信していた。

「想定外の事態です。吸血鬼に囲まれました。一時的に四葉と思われる敵戦力と共闘し、撤退します」

『お待ちください総隊長。ターゲットはどうなりましたか？』

「始末は不可能です。どうやら、フォーマルハウト元中尉もいるようですから」

『分かりました。C地点で合流してください』

「了解です。ハンターRとQが負傷していますので、救護班の用意を」
『すぐに手配します』

紫音は波動知覚でリーナの通信を聞いていた。それによって、リーナがしっかりと協力してくれそうなことを察知する。

幸いにも動く死体は歩くスピードが極端に遅く、吸血鬼も向こうから攻撃してくるといふことはなさそうだ。なので、紫音は先手を打つ。

(動く死体と言っても結局は魔法。死体の中に術者の精神と同調させるためのコアがある。それを乗っ取れば死体は俺の制御下だ)

この辺りは感覚的なものだが、蠢く死体に共通した精神波動が宿っている。それが顧傑グ・ジのものであることは明白だった。

紫音は周公瑾から情報を奪い取った時に、その手の魔法についても知識を得ている。

仕組みはある程度理解してるので、後は実践に移すだけだった。

(精神波動を感知、同調開始、干渉……グラム・デイバージョン『術式強奪』)

この魔法は特別だ。

精神干渉によって魔法の制御を乗っ取るというものだ。本来、これは術者に直接干渉することで効果を発揮する。しかし、今回の場合は別となる。

グラム・デイバージョン『術式強奪』はつまるところ、干渉できる精神があれば良い。

動く死体には顧傑グ・ジの精神リンクがある。

それを元にして精神干渉魔法『調律』を発動すれば……より正確には、その部分を紫音の精神波長に書き換え、紫音の命令を聞くようにしてしまえば良い。

「行くぞー!」

動く死体には命令を上書きし、その場で停止するようにした。そして、同時に懐からCAD黒薙を取り出し、トリガーを引く。

連続して音が増幅され、『音壊』が動く死体を吹き飛ばした。

この拳銃型CAD黒薙は紫音用に調整が施されている。銃口に相

当する部分から破裂音が発生し、その音を増幅することで衝撃波を形成するのだ。破裂音は一定なので、変数代入する必要がない。なので、発動がかなり速い。

『音壊』については、いちいち指を鳴らすよりも、こっちの方が連射は速かったりする。

(後、気を付けることは――)

紫音は衝撃波を最大まで増幅することで、動く死体を吹き飛ばした。だが、吹き飛ばすだけでは済まない。死体は既に腐りかけだったので、引きちぎれ、四散した。

同時に死体が大爆発を引き起こす。

これは紫音の魔法による効果ではない。元から死体に仕掛けてあった爆弾だった。

(やはり仕掛けられていたか)

爆発した死体を見て、紫音はこれが顧傑グ・ジの仕業であることを確信した。死体に爆弾を仕掛けて特攻させるのは、原作でもあったことだ。その印象が残っているので、紫音も覚えていた。

そもそも、ゆっくり動く程度の死体が魔法師に何を出来るというのか。このことから想像力を働かせれば、自ずと答えも見えてくる。

(国防軍の基地から爆薬が盗み出されたって話も聞いていたからな。あの事件も顧傑グ・ジの仕業で確定っと)

発火念力を防ぐために領域干渉を発動している状態なのだ。それなりに紫音も限界まで能力を酷使している。動く死体は『音壊』で倒すにしても、吸血鬼の対処は困った。

吸血鬼はCADなしに強力な魔法を行使できる。

「ぐあっ!？」

ベクトル障壁により、紫音の補佐役として残っていた配下が弾き飛ばされる。発動が早く、感知もしにくいので、避けるのは至難だろう。

紫音は自分の魔法力と相談し、可能か不可能かを判断する。

「いや、悠長に考えるのは間違いか」

死体爆弾の檻と吸血鬼による魔法攻撃。

それを凌ぐには、無茶も必要だ。

「借りるぞ。アンジー・シリウス!」

「は? 何を!？」

紫音は戸惑うリーナの言葉を無視して戦略級魔法『リベリオン』を発動する。そして強制的にこの場にいる魔法師の精神波長を紫音のものへと整えた。別にリーナの許可を取る必要はなかったのだが、咄嗟のことで思わず聞いてしまったのである。

とはいえ、それはどうでも良い。

これこそが系統外精神干涉魔法『調律』の真骨頂。

魔法師を非魔法師に変え、非魔法師を魔法師のようにすることができる。その境界すら操る紫音が持つ究極の力がこの場で発動した。

更に、ここで終わらない。

整えた精神波長をリンクさせ、全て紫音の魔法演算領域に接続する。そして自身の魔法演算領域を四葉真夜のものへと近づけた。

つまり、条件が整った。

(発動、範囲拡張 『流星群』ミューティア・ライン)

一瞬の間に紫音の支配領域が降臨した。

光が瞬き、死体と吸血鬼が纏めて貫かれる。無数の光条ラインが流れ、一

瞬にして全てを無力化してしまった。

同時に、紫音は『リベリオン』を解除する。

リーナは一瞬だけ『リベリオン』の違和感を感じたようだったが、それよりも紫音の使った魔法の方がインパクトを与えたらしい。少し啞然としていた。

「ちよつと貴方！ 今の魔法で吸血鬼を倒さないの!？」

「煩いぞアンジー・シリウス！ 今はこつちが後手に回ってるんだ！

死にたくなかったらさつさと逃げる馬鹿が！」

「んな!?! 馬鹿とは何よ！」

「ともかく、悪趣味な包囲をしてきた黒幕は、二重三重にも罫を張っていると思え。明日の朝日を見て安心するのが丁度いいぐらいだ」

「はあ!?! どういうことよ！」

「いいからこつちだ！」

紫音はフードで顔を隠したまま、『パレイド仮装行列』で変装しているリーナを引つ張る。そして『音壊』で開いた道に向かって一直線に走った。リーナは途中で紫音の手を振り払うが、もう文句は言わなかった。そして公園を出るか出ないかといったところで、死体が全て大爆発を引き起こした。軍用の爆薬であったので、それなりの爆発力がある。凄まじい熱と爆風で紫音はフードが外れないように手で抑える。

「やっぱりどこかで監視してるな」

爆発も紫音たちが逃げるのを見てグ・ジ顧傑が起爆させたのだろう。あまりにもタイミングがいいのだから疑うなという方が無理である。そう思ったからこそ、一目散に撤退したのだから。

流星に、あの爆発で黒羽の部下たちを守りながら吸血鬼を回収するなど、幾らなんでも無理だ。

「おい！ 誰も爆発に巻き込まれていないな！」

「大丈夫です若！」

「若こそ大丈夫ですか？」

今はリーナが近くにいたので、配下たちも紫音を名前では呼ばない。紫音は『若なんて久しぶりに呼ばれたな』などと考えつつ、走りながら人数を確認する。

どうやら欠けたメンバーはいないと知り、紫音は安堵する。

『紫音様、スターズの援軍がそちらに向かっています。ご注意を』

「ここですか」

『アンジー・シリウスに発信機でもついているのかと』

「黒羽の援軍はあるか？」

『すみません。怪我人の救護と撤退で人員を割いてしまつて。それに、先の爆発で警察も動き始めていますから、すぐに動きにくくなります』

「踏んだり蹴ったりだな。顧傑の奴……」

顧傑が想像以上に直接的介入をしてきたのが全ての原因だった。この辺りは既に原作とずれているので、紫音が僅かに持つ知識も役に立たない。

(下手に利益を求めるより、損をしないようにする方が今は大事か)

紫音は共に走っている部下に目配せをした。その内の二人はハンターRとQを抱えていたが、紫音のアイコンタクトに気付いて頷く。

その瞬間、紫音はフラッシュキャストで自己加速術式、ベクトル制御術式、慣性制御術式を連続して発動させる。そして少し後ろを走っていたリーナの腕を掴み、片足を軸にしながら回転、腕を振りつつ持ち上げ、そのまま地面に叩きつけた。

変則的な一本背負いである。

リーナもプロテクターを付けていたのでダメージは少なかったが、

いきなりのごとで動きを止めてしまう。その間に、紫音はリーナを押しさえつけた。

「っ!？」

「大人しくしてくれよ」

「何のつもり!？」

「間もなくスターズの援軍がやってくるみたいだ。俺たちはスターズと戦うなんて事態は避けたいんでね。ここでお別れしようか。公園からもかなり離れたし、ある程度は安全だと思うから」

紫音は言うことだけ言って、リーナの拘束を解く。リーナはこのまま捕縛されてしまうと思っていたので、少し意外だと考えたのである。

そして去って行く紫音たち——リーナは紫音のことを紫音と認識してはいない——を見て、啞然とするのだった。

『総隊長。まもなく援軍が到着しますが……』

「……」

『総隊長?』

「いえ、何でもないわ。C地点に行くよりも早く合流できそうですし、共に向かうことにします」

『了解です』

遠くで聞こえるパトカーのサイレンが虚しく聞こえた。

来訪者編 11

死体を爆発させたことで、戦場となった公園は炎に包まれた。

そして、予めレオに連絡されていたお陰で、他の警察より一足早く辿り着いた千葉寿和は、その惨状を見て茫然とした。

「おいおい……いつから日本はこんな国になったんだ？」

「それよりも警部。生存者の確認と保護を」

「ああ、急ごうか」

相棒の稲垣と共に寿和は周囲を探る。

すると、燃える公園の木々の間で、幾つもの爆散死体が見つかった。その全てが内部から破裂したかのような状態であり、そういったものに慣れている二人も吐き気を覚える。

まるで一条家の『爆裂』を思わせる死体だった。

「これは……」

「魔法か？ いや、それとも爆弾か？」

「恐らくは爆弾ですね。僅かに火薬の匂いが残っています」

「つてことは……人間の体内に爆弾を仕込んで爆破させる趣味の悪い奴がいたってことかよ」

ただでさえ、最近では吸血鬼事件に行方不明事件と怪奇が続いていたのだ。そろそろ勘弁してほしい。寿和はそんな思いで死体の顔を確認していく。

「……レオ君はないようだ」

「例の少年ですか？」

「こうなる前に逃げてくれたのか……だとすればいいんだけどね」

二人が早くこの場に来ることが出来た理由は、レオが『吸血鬼はこ

ここにいる』というメールを送って来てくれたからだ。そのメールは正しく、二人が到着する少し前までは吸血鬼がこの場にいた。しかし、僅かに遅かったのだ。

「犯人はまだ近くにいるかもしれん。稲垣君は本部に連絡して封鎖要請を」

「了解です」

結局、その後の捜索でも犯人が見つかることはなかった。

そして、爆散した死体が行方不明者として捜索中だった者たちであることが判明したのだった。



翌日、任務に失敗したりーナは学校を休んでいた。理由は家の用事ということになっているが、その実態はUSNA軍の駐屯基地に呼び出されていたからである。

アメリカ大陸本土の基地と衛星通信で昨晚の報告を行っていた。

『——ほう。つまり、スターズ総隊長シリウスともあろう者が、日本の魔法師一族ごときに出し抜かれた上、謎の第三者によって襲撃された挙句、何の功績もなく戻ってきたというのかね』

「……その通りです」

解釈に悪意を感じたが、リーナは頷くことしか出来ない。

ここで言い返せば悪者になるのは自分だと分かっているからだ。

(何が日本の魔法師一族ごときよ！ 四葉を知らないの!?)

昨晚見た謎の攻撃(『流星群』ミューティア・ラインのこと)を考えれば、四葉がただの魔法師一族でないことはよく分かる。少なくとも戦術級として十分な魔法を楽々行使出来る魔法師を揃えているのだ。侮つてよい相手ではない。

しかし、本土の役員たちはそれが理解できていなかった。

『そもそも、軍の通信を乗っ取られ、さらにこの事実気付かなかった時点で軍人としての適性を疑いたいな。一度本国で検査でも受けてみるかね?』

『シリウス少佐が吸血鬼に感染しているという可能性はないか? なら、ここでチェックしてみるかね。身体に咬み跡がないか……を』

『おお！ それは大事だ。吸血鬼を本国に持ち帰られては困るからな』

つまりここで脱げと。

リーナは屈辱のあまり、そのまま画面を殴つてやろうかと思つた。勿論、軍である以上は男女の間に区別はない。ある程度の配慮こそあれど、検査のために男性の前で衣服を脱ぐこともある。

しかし、画面の向こうにいる役員は本当にそういった目的ではないだろう。寧ろ、よこしま邪な空気すら感じる。

(この狒々親父……)

しかし、ここでリーナにも救世主が現れた。

突然、画面の向こう側にある会議室の扉が開いたのである。

『私を除け者にしてこんな会議を開いているとはな』

『なっ!? 貴女はバランス大佐!』

『どうしたのだ? 私がここにいたら拙いのかね? そもそも、私もこの会議に出席できる身分の者だったと認知しているのだが』

ヴァージニア・バランス大佐。

彼女の肩書はUSNA統合参謀本部情報部監察局第一副局長。つまり、内部不正を監査する役職である。正直に言えば、彼女に頭が上がない者は何人もいた。

バランス大佐がこの場に初めから呼ばれていないのは不思議なことであり、敢えて彼女に情報を流さなかった役員の何名かは視線を伏せた。

そんな様子を観察しつつ、バランスは口を開く。

『発言、よろしいか?』

『許可しよう』

『ありがとうございます。今回、シリウス少佐が出し抜かれたのは少佐の責任ではなく、バックアップとして付いていた部隊にあるでしょう。なんでも、通信電波を乗っ取られ、少佐はそれに振り回されて後手に回ってしまったとか?』

先程まで会議室にいなかったバランスがなぜ、詳しい話を知っているのか。そんな疑問を口に出せる猛者はこの場にいない。

『更に、相手は日本の十師族の中でも魔法力で最も優れた四葉一族だったと聞く。貴方がたは、四葉が何者か知っているのですか?』

『ただの魔法師一族だろう? 一族で国を滅ぼしたなどという逸話もあるが、直接的に滅びた原因は大亜連合が大漢を吸収したからだ。何を恐れる必要がある』

『なるほど、他の方々も同じ認識なのかな?』

バランスが見渡すと、この場にいた殆どが首を縦に振った。中には無反応な者もいたが、バランスは少しだけ不快そうな表情を浮かべつつ言葉を続ける。

『甘い。甘い、としか言いようがない』

『なんだと?』

『貴方がたは日本の十師族について、どれだけのことを知っている?』

バランス大佐の問いに答えられることは少ない。十師族とは日本を代表する魔法師一族であり、最も強力な遺伝子を持つ者たちというのが一般的に知られていることだ。

しかし、軍に在籍する以上、彼らはもう少し踏み込んだことも答えられる。

それは、十師族が日本の経済界に大きな影響力を持っているということである。十師族は魔法力だけでなく、経済力やその他影響力も含めて力が求められるのだ。魔法は万能ではない。日本という国を守るためには、様々な方面に強くなければならない。

情報機密、情報操作、経済力、人員など、それら総合的な影響力が十師族を十師族たらしめている。

『——そういう認識ですね?』

一通りの説明をしたバランスは問いかける。

彼らでも、知識としてあるのはこの程度でしかない。十師族の中で最も特別な四葉のことを知らないのも当然だった。

『十師族の中で四葉だけは特別なのです。かの一族は、ただ魔法力だけで十師族という地位に就いている。世界最強の魔法師、四葉真夜がその筆頭です。更に戦略級魔法師、四葉紫音を抱え、USNAの諜報

員もかなりの数が四葉によって処理されている。また、薬物耐性のあ
る彼らから情報を抜き取り、諜報員の拠点までも抑えてくる。何もか
もが不明であり、どんな戦力を持っていたとしても不思議ではない』

それこそが、四葉。

最後に呟かれた言葉は会議場を静かに打った。画面を眺めている
だけだったリーナですら、思わず息を吞んでしまう。昨晚相手をした
四葉は、それほどの相手だったのかと慄いた。

しかし、ここで終わらないのがバランスである。

『故に！ スターズ総隊長シリウス少佐をバックアップ不十分で任務
地に送り込んだ我らにこそ責任があるのではないか……と。本官は
そう思います』

シリウスと言っても人間だ。一人で何もかも出来るわけではない。
任務を達成するためには、後方支援が絶対に必要となる。

今回の任務失敗は後方支援部隊が通信を乗っ取られた上に、第三者
による介入を事前に防げなかったことが全ての要因なのだ。 balan
スにそう言われると、これ以上はリーナを追及できなくなる。

完全に主導権を握ったバランスは、最後にこう告げた。

『このままシリウスに任務を続行して頂くのに際し、最高水準での支
援を行いたいと思います。具体的には、駐在武官の監査を名目に本官
が東京へと向かいます』

その言葉に会議場が騒めいた。

だが、バランスの提案はこれで終わらない。

『同時に、シリウス少佐の補佐官としてカノーパス少佐も同行。また、
本部長よりブリオネイクの使用許可も頂きました』

「大佐殿！ それは真ですか！」

『ああ、勿論だともシリウス少佐』

リーナの問いに、バランスは笑顔で答える。

その後、会議はバランス大佐とベンジヤミン・カノープス少佐の来日予定日などを話し合う場に変化していったのだった。



その日の夜、閑静な東京の路地裏を走る男がいた。息を切らし、何かから逃げているようにも見える。

(馬鹿な……どうして私の居場所が……)

彼は元USNA軍スターズ所属デーモス・セカンド。本名をチャールズ・サリバンという。CADなしに高度な軌道屈折術式を扱えるようになった吸血鬼だった。

昨晚、公園で紫音に追い詰められたが、顧傑グ・ジェによって助けられた。正確には、自分たちを囮として紫音を殺害しようとしただけであり、自分は結果的に助かったというだけに過ぎない。

それでも、まだ死ぬつもりのない彼は顧傑グ・ジェに感謝していた。

(だが、どうして見つかった!)

大人しく隠れているつもりだった。

都内のホテルに身を隠し、警察の手が引いて動きやすくなるまでは何もしないつもりだった。

だが、さつき部屋を黒服に襲撃され、今は逃げているのである。

(仲間へのテレパシーも繋がらない。どうなっている)

吸血鬼は仲間とテレパシーで意思疎通が出来る。それによって救援を呼ぼうと考えた。しかし、どんなに叫んでも応答がないのだ。

サリバンは焦った。

パン、パパン……と軽い銃声になり、サリバンは軌道屈折術式で迫る弾丸を防ぐ。幾ら逃げても、何処からともなく銃弾は飛んでくるのだ。まるで、既に相手の網の中に納まっているかのような感覚すら覚えてしまう。

「ま、まさか……」

いや、本当に自分は詰んでいるのではないか。

サリバンはそう思った。

(既に包囲網は完成し、私は誘い込まれている……のか?)

「その通りだ」

その時、走るサリバンの前方から声がした。

カツ、カツと靴音を鳴らし、ゆつくりと近づいてくる。夜の月明かりに照らされ、サリバンはその人物の正体を知った。

「シオン・ヨツバカ」

「正解だ。既に包囲している。お前は昨日の段階から、俺の掌の上だ」
「なんだと? それは——」

サリバンは言葉を終える前に、膝から崩れ落ちた。見れば、両足に

幾つかの穴が開き、出血している。足の腱を貫かれているらしく、もはや立ち上がることは物理的に不可能だった。

続いて足の付け根、両肩、両肘を穿たれ、サリバンは地面に倒れる。

「が……」

「眠れ」

その言葉を最後に、吸血鬼チャールズ・サリバンは意識を閉ざしたのだった。



「や」と

部下たちに吸血鬼を回収させた紫音は、一息つく。そしてサリバンから回収した精霊を左手で握り潰した。

「ギリギリで『八咫鳥』を打ち込んでいて正解だったな」

こうして紫音がサリバンを捕捉できたのは、昨晚の内に『八咫鳥』を仕込んでおいたからである。この『八咫鳥』は精霊魔法の一種であり、九校戦で手に入れた電子金蚕でんしきんさんを改良して開発した魔法だ。

紫音自身は精霊を使役する才を持たないので、『八咫鳥』は特殊な運用をする。対となる精霊を作り、片方を観察対象に埋め込み、もう片方は紫音が保持しておくのだ。保持した精霊を操作することで、対となったもう片方を動かすことが出来る。

そういった仕組みなのである。

その応用で、埋め込んだ『八咫鳥』が観測した事象を、紫音が保持する対の『八咫鳥』で見ることにも出来るのだ。このようにしてチャールズ・サリバンを捕捉したのである。

「さて、俺も引き上げないと……」

そう言っただけで帰ろうとしたところで、不意に通信デバイスが振動した。見ると、電話をかけてきたのは達也と表示されている。

昨日のことも聞きたいのだろうと考え、その場で電話に出た。

「もしもし」

『紫音か。聞きたいことがあるんだが——』

「昨日のことか？」

『ああ、レオが吸血鬼に襲われ、入院したことについてだ。何か知っているんだな？』

「知っている。詳しいことは帰ってから電話し直すよ。今は外にいるから」

『何かしているのか？』

「丁度、レオを襲った吸血鬼の一体を捕縛したところだよ。もう一体は明日……いや、明後日あたりになるかな？」

『流石と言うべきか……呆れたと言うべきか……』

電話の向こうで感心気味の声があった。

こうして電話をしてきたのも、深雪のために情報を集めたいからだろう。達也は深雪のガーディアンであるため、防衛に必要な情報を与えるのは紫音としても吝かではない。

「この際だから、色んな情報を共有しておく。すぐに帰って秘匿回線を開くよ」

『頼む』

「資料も必要なら作っておくけど？」

『いや、そこまで手間を取らせるつもりはない。口頭で充分だ』

「分かった。じゃあ切るぞ」

『時間を取らせたな。また後で頼む』

「ああ」

電話を切り、紫音はデバイスをポケットに入れながら呟く。

「もう一体は本郷美亜……いや、USNA軍支援部隊オペレーター、ミカエラ・ホンゴウか。確かマクシミリアン・デバイスを潜入していた奴だっけ。襲撃計画を立てないとな」

昨晚の内に付けておいたもう一つの『八咫鳥』により判明した事実だ。今日はチャールズ・サリバンを捕獲完了したので、明後日にミカエラ・ホンゴウを捕縛する。

明後日にした理由は、チャールズ・サリバンが持っていた『分子デバイス』の軍用デバイスを解析したいからだ。

「忙しいな。ホント」

その呟きと共に、紫音は闇に紛れていったのだった。

来訪者編12

翌日、紫音は捕らえたチャールズ・サリバンを嚴重に椅子へと縛り付け、その正面に立っていた。手に持っているのはナイフのようなC ADであり、とある魔法を行使するために用意したものだ。

ここは都内にある四葉の魔法実験施設。

学校が終わった後、ここへとやって来たのである。

「紫音様、取りあえずは完成です」

『分子デイベイダー』をもう解析したとはな。中々やる」

「はははは。まあ、それなりのプロテクトはありましたけどね。私たちにかければ、一日で充分です。後は紫音様が考案されていた術式に嵌め込み、調整すればすぐですよ。コピー・ペーストが殆どだったので難しくはありませんでした。そのデバイス『死怨^{しおん}プロトタイプ』は紫音様専用調整したものです。今回の実験では術式の使い勝手を調べてくだされば、残りは私たちが完成させます」

「そうか」

紫音は手に持った新デバイス・死怨プロトタイプに軽くサイオンを流す。発動の直前まで持っていていき、感触を確認した。

それから、椅子に縛られている吸血鬼チャールズ・サリバンへと目を向ける。

「で、あれはもういいのか？ この術式を使えば確実に殺してしまうぞ？」

「生きた吸血鬼については、以前に紫音様が捕らえられた吸血鬼からデータを採取しています。今回、吸血鬼からパラサイトが出て行く様子を観察したいのです」

「なるほどね」

パラサイト。

Paranormal Parasite(超常的寄生体)の略だ。既に吸血鬼は、このパラサイトによつて引き起こされたものだと判明している。パラサイトは嘗て妖あやかしや妖魔、デーモンと呼ばれていた存在と同等である。プシオン体であり、対象の精神と同化して寄生するということも分かっていった。

これらは、紫音が捕獲した吸血鬼によつてもたらされた解析結果である。

「ま、コイツを殺すのは賛成だ。USNA軍は特定のサイオン波動を追跡する技術を持っているみたいだからな。さっさと殺しておかないと、USNAにこの場所がバレる」

「そういうことです。存分に、例の魔法を実験してください」

「じゃ、遠慮なく」

紫音は椅子に固定されたチャールズ・サリバン……的に向かつて死怨プロトタイプを向ける。そして、サイオンを流しつつ、横向きに薙ぎ払った。

すると、一瞬の後、チャールズ・サリバンの首に赤い筋が浮かび上がった。それは、空間を飛び越えてナイフで切り裂かれたようであり、実際にそのように見えた。

ゴト……

そのまま、重力に従つてチャールズ・サリバンの首が落ちる。断面は恐ろしいほど水平であり、達人が名刀で切り裂いたかのような切り口となっていた。

血飛沫が高く吹き上がり、天井を染める。部屋中に生臭さが立ち込めた。

「おおー！ 素晴らしい」

「実験は成功だ！」

「流石は紫音様です」

「いやあ、我々も『分子デイベイダー』を解析した甲斐があつたよ」

実験を観察していた研究員たちは歓声を上げる。こちらは紫音のデバイス開発に協力した研究員であり、パラサイト遊離観察実験を行っている研究員は何かのデイスプレイを眺めていた。

紫音も引き起こされた結果を見て呟く。

『^{へしぎ}圧斬りモドキ』で代用しようと思っていたけど、『分子デイベイダー』のお蔭で完全に上位互換の術式になったな」

首が綺麗に切断できたのは『分子デイベイダー』によるものだ。小さな負担で、このような魔法を引き起こせるとは流石である。USNAが秘匿とする術式なだけはあつた。

この術式を解析して死怨プロトタイプに嵌め込んだ研究員は紫音に近寄りつつ、嬉しそうな笑顔で告げる。

「これで完璧です。紫音様の『リベリオン』もあれば、たった一人で国を滅ぼすことすら不可能ではありません。そして四葉の呪い、司波達也を物理的に殺害する手段を——」

「少し黙れ。まだコイツは未完成だ」

「——失礼しました」

「それに、達也と敵対するつもりはない。確かに、俺は達也を物理的に止めることが出来る最後の鍵だ。だが、そもそも俺が働く必要のないようにすればいい話。それを忘れるなよ」

世界を滅ぼす力を持つ司波達也は、四葉の分家当主たちが恐れる存在だ。大抵の使用人や研究員は達也を劣等生だと思いついてるよ。うだが、一部の者は達也の力を知っている。

この研究員も、真実を知る者の一人だった。

「理論射程は無限、防御は不可能、条件さえ整えばどんな人物でも瞬間に殺せる。だからこそ、この魔法は四葉の新たなる象徴として輝くべき。いずれ、この力を世界に見せる時が来る。」

言っておくぞ。この魔法は達也を想定した魔法じゃない。達也を暴走させないために、世界の全てから四葉を……特に深雪を守るための魔法だ」

紫音は『リベリオン』も『八咫鳥』も、全てこの魔法のためだけに精度を上げた。そして、全てが明かされるとき、紫音は四葉真夜すら超える魔王として世界に君臨することになる。

この魔法と比較すれば、『日蝕』^{エクリプス}など大した魔法ではない。

「……明日、もう一体の吸血鬼を連れてくる。準備をしておけ。それと、顧傑^{グレンジャー}との繋がりを見つけるために探る。すぐには始末するな。残念ながら、さっきの奴は知らなかったみたいだからな。次に期待する」

「かしこまりました紫音様。整えておきます。それと新デバイスの調整も」

紫音は死怨プロトタイプを研究員に渡し、この場を後にしたのだった。



その夜、紫音は真夜とテレビ電話していた。

「お久しぶりです母上」

『ええ、久しぶりね』

軽い挨拶を交わし、まずは紫音が報告する。

「相変わらず、顧傑グ・ジの情報は手に入りませんね。躲し方が巧妙です」

『あら？ 紫音さんにしては珍しいわね』

「申し訳ありません」

勿論、紫音はこれがフリズスキャルヴのせいだと考えている。淡くなりつつある原作知識のお蔭で、フリズスキャルヴについては軽く認知していた。それに、真夜からも電子的情報のやり取りは監視されている可能性を忠告されているので、重要な情報は紙でやりとりするようになっている。

それでも顧傑グ・ジを追いきれないのは、少し予想外だったが。

「吸血鬼と顧傑グ・ジが繋がっているのは確実。なので、吸血鬼を捕えて『シンクロダイヴ』で情報を奪い取っています。今のところ、当たりはありません。明日にも一体捕獲予定ですので、それに期待しようと考えています」

『そう。頑張りなさい。応援は必要かしら？』

「お願いします。先日、スターズと接触してしまいました。『夜』も見せましたし、向こうも相応の準備を整えてくるでしょう。最悪、本国からスターズの隊長格を連れてくるかもしれません。なので、スターズとの大規模戦闘が起こった場合に誤魔化せる人員をお願いします」

『そんなものでいいのかしら？』

真夜は疑問の声を向ける。

スターズがシリウス以外も動くのならば、四葉の戦闘部隊を送り込

むぐらいが丁度いい。そのように考えたからである。

しかし、真夜も紫音がスターズに劣るとは考えていない。なので、笑みを崩さなかった。この質問は、あくまで紫音を試しているに過ぎないのだから。

「母上はあの魔法以外ならば使って良いと仰いました。なので『リベリオン』を使います。スターズと戦闘になったとしても、『リベリオン』を使用して捕獲。私の軍籍を利用して捕虜にすれば国防軍に貸しを与えられますし、四葉で直接交渉して伝手を作るのもアリです。その辺りは、本当にこれが起こった際に母上へと委ねます」

『あらあら……スターズと戦闘はもう前提なのかしら?』

「ええ、襲撃予定の吸血鬼はミカエラ・ホンゴウといえます。彼女はシリウスのバックアップとして活動しているUSNA軍の者です。私たちが誘拐すれば、すぐにバレるでしょう。戦闘は避けられないかと思えます。まあ、勝手に潜入活動しているのは向こうですし、騒ぎになって困るのはあちらでしょうが」

『そうよねえ。まあ、構わないわ。紫音さんの要望通りに援軍を送りましょう。存分に戦闘をしても構わないわ』

愉しそうな笑みを浮かべる真夜は、本当に歳不相応だ。画面越しにも漂う妖艶さを見ると、紫音でも目を背けたくなる。

勿論、そんな失礼なことはいらないが。

それはともかくとして、真夜は先の話を蒸し返した。

『そうそう。あの魔法なのだけど、凡そは完成したそうね?』

「……つい先程のことなのですが」

『私が知らないでも思ったの?』

「いえ、どうせ知っていると仰いましたよ。結論を申し上げれば、九割以上完成しました。あとはデバイスの調整を行い、実戦を想定した運用実験が成功すれば完成になるかと」

『アレの運用実験ねえ……どうしましょうか?』

殺傷力が高すぎるだけに、実験を行うのも色々と手間がある。近場で戦争でも起これば、紫音を投入することで幾らでもデータを取ることが出来るだろう。

真夜は妖しいオーラを深める。

『横浜事変以降、大亜連合と我が国は何度も交渉を続けているそうね。それに介入して、本格的に戦争でも起こそうかしら？』

「冗談でもやめてください」

本当に出来そうだから困る。

「しかし、どちらにせよ母上は……あの魔法を世界に見せつける機会を伺っているのでしょうか？」

『ええ、その予兆はあるわ。そのために顧傑を泳がせているのだから』
「……母上が本気になれないのはそういう理由ですか」

外国ならまだしも、顧傑がこの国にいる状態で四葉が何も出来ていないとは思えない。紫音はそう考えていた。紫音のお蔭もあり、四葉家は原作よりも遥かに諜報能力が上がっている。

顧傑の情報が紫音にまわって来ないのは、真夜が敢えて止めているという部分もあるからだろう。それにもかかわらず真夜は紫音に顧傑を調べると言っているのだ。少し意地悪である。

『顧傑という男は私の復讐相手。紫音さんに命じた始末する件を撤回するつもりはないけど、タダでは殺さないわ。存分に利用し、限界まで搾り取ってから無様に死を与えてあげましょう。期待しているわ
紫音さん』

「お任せください。あと、追加で頼みますが、七草や十文字への対処もお願いします」

『息子に頼られるというのは良いものね。いいでしょう』

真夜の雰囲気は柔らかくなった。

それを見ると、極東の魔王とも呼ばれる四葉真夜とのギャップを感じてしまう。紫音も四葉の全てを理解しているわけではないし、真夜の目的を完全に知っているわけではない。しかし、真夜の本性がかなり子供っぽいことは知っている。

普段は当主らしく振舞っているが、気を許した者の前ではそのように振る舞うこともあるのだ。

自分は気を許されている人物の一人なのだと知り、密かに頬を緩ませる。

『それで、今夜の報告は以上かしら？』

「はい。そうなります」

『そう……なら、紫音さんもゆっくり休みなさい』

「はい。おやすみなさいませ」

『ええ、おやすみ』

画面が暗くなり、通信は途切れる。

その後すぐに達也と深雪の家へと電話をかけた。今度もテレビ電話であるため、画面に兄妹きょうだいの顔が映る。

「こんばんは。達也に深雪」

『こんばんは紫音さん』

『紫音か。何かそちらで動きでもあったのか？』

「いや、こちらは大したことはないよ。聞きたいのは千葉エリカの話だ」

『……ああ』

達也は何か納得したのか、すぐに答えた。

『レオがやられたことで、千葉家を動かしているようだ。レオは千葉

の門下生だったことがあるからな。その報復ということらしい』

「やつぱり。こちらでも千葉家の変な動きをしているのは掴んでいた。達也に確認して正解だったみたいだな。ちなみに、止めることは出来るか?」

『難しいだろう』

「七草先輩や十文字先輩を通じてもか?」

『止まらないだろうな』

吸血鬼を捕獲するにあたって、第三者の介入など二度とお断りだ。明日の作戦では、より緻密な情報収集が必要となるだろう。

一瞬だけ考え事をした紫音は、すぐに画面へと向き直って口を開いた。

「いや、悪いね夜遅くに。その確認がしたかっただけだ。達也も深雪もおやすみ」

『役に立てて何よりだ。では切るぞ』

『おやすみなさい、紫音さん』

「あ、切る前に……深雪はリーナのことを観察して、今度様子を教えてください」

『はい、それぐらいでしたら。他にはありませんか?』

「いや、それぐらいか。今度こそおやすみ」

『ええ、おやすみなさい』

深雪の雰囲気当真夜に似ているな、などと感じつつ紫音はテレビ通話を切ったのだった。

来訪者編 13

『対象ミカエラ・ホンゴウを捕捉』

『捕獲作戦に入る。マクシミリアン・デバイスからの帰宅ルートに相違なし』

『輸送ルートも確保済みです』

「よし、作戦開始だ」



「ミアが!？」

「はい、総隊長。間違いありません」

ミカエラ・ホンゴウ（＝ミア）はリーナが滞在している部屋の隣に住んでいる。攫われたのはすぐに判明した。今夜はバックアップ要員の一人であるミアと相談事があった。勿論、次の吸血鬼に対応するための話し合いと、USNAからきたベンジヤミン・カノープス少佐を紹介するためだった。

「ベン、場所は判明しているのですか？」

「残念ながら……いえ、判明したようです」

食い気味に問い詰めるリーナを宥めるカノープスは、今朝に日本へと到着したばかりだ。リーナの補佐をすることになるや否や、全ての仕事を部下や同僚に任せて飛び立ったのである。名目は、駐屯基地を

監査に訪れるヴァージニア・バランス大佐に同行したとされている。駐屯地に滞在する米軍魔法師の様子をスターズとして視察するのだ。しかし、その実態は四葉（と思われる）勢力への対抗である。

そしてミアが攫われたと分かり、早速カノープスが仕事したのである。

「サイオンリーダーで居場所を特定しました。都内にある何の変哲もない建造物のようです。スターダストのチエイサーが既に現地付近まで到着し、様子を見ているとのこと」

「ではすぐに向かいますよう」

「お待ちください総隊長。まず、彼女が誘拐された理由が不明です」

慌てるリーナに対して、カノープスは冷静だ。まず、ミアとは個人的面識が殆どないので、客観的に物事を考えられる。そして何より、リーナより経験豊富で大人だ。

「まず、彼女が攫われた理由を考えましょう。そして、次は彼女を攫った勢力について。救出はバランス大佐が検討してくださいますから、私どもは一度冷静になりましょう」

「そ……うですね」

「分かって下さって何よりです。それで総隊長、理由については？」

リーナは少し考える。

まず、ミアはマクシミリアン・デバイス日本支社への潜入を利用して、戦略級魔法『グレート・ボム』——『質量爆散』マテリアル・バーストのこと——について探ろうとしているエージェント兼オペレーターだ。本職は放出系魔法の研究員で、十一月にダラスで行われたマイクロブラックホールの生成・消滅実験にも立ち会っている。

質量エネルギーの変換というアプローチで『質量爆散』マテリアル・バーストの仕組みを探っているのが彼女だった。

そのことから考慮すると……

「日本政府のエージェント……が知り過ぎたミアを捕えた？」

「確か、彼女はマクシミリアン・デバイス日本支社のセールスエンジニアとして魔法科大学に潜入調査を仕掛けていた諜報員でしたね。十師族が動いたという線は？」

「それも有り得るかと思えます。四葉と思われる勢力と交戦しましたから」

「東京は七草や十文字が監視していましたね。そちらの線は？」

「うう……分かりません。ですが、他のエージェントは交戦があつたと聞いています」

「なるほど」

カノープスは考える。

どの可能性が最も高いか、そしてミアが処分される可能性はあるのか。

仮に処分されるとすれば、裏方仕事を得意とする相手と判断できる。ミアは非合法の諜報活動を行っているため、証拠が出れば日本の国防軍に捕まってしまう立場だ。しかし、表向きはマクシミリアン・デバイスの社員である。合法的な組織が攫ったとは思えない。

そこから逆算すれば、勢力は絞られる。

「十文字は清廉なことを好むと聞きます。七草や四葉……十師族はこの辺りが怪しいでしょう。あとは日本政府が保有する、公的には存在しないはずの機関ですか。そちらは見当もつきませんね。少なくとも私では」

「ただの愉快犯という可能性はありませんか？ ミアは……美人ですし」

美人というより可愛らしい見た目をしているのがミアだ。というより、魔法師は基本的に整った顔立ちをしている。部分的に遺伝子操作を受けていたり、海外の血が混ざっていることもあるためだ。狙わ

れることも少なくない。

尤も、魔法師は自衛に魔法の使用を許されている。

そういう目的の犯人に誘拐されるかどうかと言えば、首を傾げそうになるが。

カノープスもその可能性は否定した。

「彼女は本職が研究系とは言え、魔法師です。それにエージェントとして最低限の護身術は会得しているのでしょうか？　少し考えにくいですね」

「そうですね。すみませんベン」

「構いませんよ。今は可能性の話をしているのですから」

そう言ったカノープスは、何かハツとした様子で耳元に手を当てた。何か通信が来たのだろう。暫く話を聞いた後、『了解です』と言って切った。

それからリーナの方へと向く。

「総隊長、バランス大佐の方でも準備が完了したと連絡が。すぐに繋がります」

「お願いします」

頷いたカノープスは、デバイスを操作した。するとディスプレイが切り替わり、ヴァージニア・バランス大佐の顔が大きく映った。

リーナとカノープスはすぐに敬礼する。

バランスも敬礼を返し、口を開いた。

『楽にしているぞ』

「はっ！」

「はいー！」

カノープス、リーナの順に少しずれて返事をする。そして休めの体

勢を取った。それから、バランスは早速とばかりに本題へと入る。

『まず、誘拐されたミカエラ・ホンゴウだが、彼女は戦略級魔法について調査する諜報員だったな？ 正直に言えば、スターズが救出に動くような事案ではないと思うのだが』

「で、ですが大佐！」

『落ち着き給えシリウス少佐。こうして私自らが指揮を執っているのだ。事情が変わったのだよ』

「事情ですか？」

『ああ、ミカエラ・ホンゴウは吸血鬼だと判明した』

「な……それは、まさか！」

『そのまさかなのだよ。詳しく説明しよう』

動揺するリーナに対し、バランスは冷静に説明を始めた。ディスプレイに幾つかのデータを提示し、グラフが二種類並ぶ。

『まず、右側にあるのが観測し、解析した吸血鬼のサイオンパターンだ。例の日にデーモス・セカンドと共にいた吸血鬼のものだな。ノイズが多かったのだが、解析班が何とかやってくれた。そして左側にあるのがミカエラ・ホンゴウのサイオンパターンだ。見事に一致している』

ディスプレイ上のグラフが重なると、確かに一致していた。これはリーナも反論できない。納得は出来なかったが。

『理解してくれたようだな。そう、彼女が吸血鬼だと判明したからこそ、スターズが動くのだ。早急に彼女を捕獲……いや、始末する』

「そんな……」

『私情を挟むなシリウス少佐』

「……失礼しました」

そうだ。これはシリウスとしてあるまじき言動だった。

リーナは反省して頭を下げる。

しかし、その気持ちも理解できたのだろう。バランスも特に追求しなかった。そして、次に具体的な作戦を語り始める。

『やることは簡単だ。シリウス少佐とカノープス少佐で一気に制圧する。要は少数精鋭による制圧作戦と同じだ。スターダストではなく、呼び出した惑星級のメンバーを同行させよう。即座にミカエラ・ホンゴウを発見し、始末しろ。死体は持ち帰らなくともよい。最悪、魔法で焼き尽くして構わん』

冷たい判断ではある。しかし、軍の行動は命懸けだ。遊びではない。まだ高校生とは言え、リーナもそれを知っている。

了解するしかなかった。

何も言わないリーナとカノープスを見て、バランスは頷きつつ言葉を続ける。

『では、詳しい話を詰めていこう』

リーナの胸に、嫌な黒い渦が巻いたのだった。



四葉家（というより黒羽家）が秘密裏に拠点としている家の地下室にて。

無事(?)にミアを捕獲した紫音は、『シンクロダイヴ』で記憶を探っていた。パラサイトに寄生されて自我を歪められても、記憶は残っている。そこに顧傑グ・ジの情報がなく探っていたのである。

尤も、顧傑グ・ジについて知ったとしても、即座トクゾに殺害することは真夜の望むところではないと分かっているので、考えて行動しなければならぬ。最終的には殺すか捕縛をするのだが、しっかりと利用してからになる。

どう利用するか、どのように消すか……誘導の仕方も考えなければならぬ。

（ま、こいつも顧傑グ・ジの情報はなしか。顔は見ているようだけど、滞在场所なんかは教えられていないか）

これも紫音への対策だろうと思っている。顧傑グ・ジはフリズスキャルヴで紫音に関する情報も手に入れているのだろう。また、ある程度調べれば、フリズスキャルヴがなくとも紫音の能力について見当を付けることができる。

大亜連合、新ソ連、USNAなどの諜報員を捕獲して、次々と情報を抜き取っているのは——裏での話だが——有名な話だ。薬物や拷問への対策をしている諜報員からも、全ての情報をごっそり抜き取ってしまう。つまり、情報を抜き取る精神干渉魔法を持っていると予測できなくもない。

一部では、四葉にはそのような技術があると推測されていた。顧傑グ・ジが知っていてもおかしくはない。

「駄目、だな」

「そうですね。本当に何も?」

「一昨日の奴もそうだったけど、顧傑グ・ジの顔や声以外に記憶はない。加えて言えば、その記憶にも霞がかかっているような印象だな。何か対

策されているのかもしれない」
「その話は前にも聞きましたね」

『調律』で眠らせたミアから手を離れた。すると、側にいた配下も残念そうな表情を浮かべる。しかし、すぐに表情を戻して口を開いた。

「なら、吸血鬼から情報を手に入れるのは諦めますか？」

「諦めはしないけど、期待しないことにする。顧傑グ・ジの殺害は母上殿から依頼を受けているけど、しっかり利用してからだ。まあ、母上殿は大漢の生き残り魔法師に四葉の復讐を言ってたけど、本音は違うだろうね」

「そうですかね？ 俺たちはそっちがメインだと思っていましたけど」

「俺が周公瑾から手に入れた記憶によると、やつはあの忌まわしい事件より先に崑崙方院を追い出されている。全くとはいかないかもしれないけど、顧傑グ・ジは元から関係ない。ただ、四葉が崑崙方院を潰したことで、逆恨みはしている」

不老不死の研究に失敗したことで、顧傑グ・ジは崑崙方院での立場を失った。USNAに亡命したままでは良いのだが、彼は魔法師に対する復讐に燃えた。

反魔法師団体ブランシュを作り、無頭ノー・ヘッド・ドラゴン竜を設立して金を集め、復讐相手を奪った四葉を恨んで生きてきた。

「母上殿は顧傑グ・ジを嘲笑っているんだよ。四葉に盾突く大漢の生き残りを翻弄し、その企みを完全に潰すことで、母上殿自身の復讐にしたってわけだ」

「複雑っすね。まあ、俺たちは当主様、そして黒羽家に従うだけです。勿論、今は当主様の息子ですけど、紫音様にも従いますぜ」

「母上の手足になる俺たちは大変だな」

「それを言っちゃおしまいですよ紫音様……」

そこまで話したところで、扉を開き、配下の一人が走り込んできた。入り方は慌てているようだが、意外にも冷静な口調で報告する。

「紫音様。USNAが囲んでいます」

「ようやくか。まあ、予想通りになったな」

「そうみたいです。おい、ちゃんと迎撃の用意はしてあるな？」

「当然ですよ。紫音様に命じられた通り、誘い込む構図で準備しておきました。この地下室に上手く誘導して見せますよ」

「よし、やれ」

命じられた配下の男は、頷いて出て行く。

同時に、デバイスを操作してメール送信を実行した。

d a k g a i 4 5 4 k a g j a e 3 3

意味は、『スターズが動き出した。周囲に隠蔽を』である。

来訪者編14

一月一七日、二二〇〇。

それが作戦の決行時間だった。

「行きますよベン」

「ええ。準備は完璧です」

カノープス少佐の言葉に頷きつつ、リーナは十字型の杖を構えた。そして照準を合わせるかのようにして視線の先にある建物を眺める。

東京都内にある小さな家屋……というよりビルに近い建物。ここがこれから作戦を実行する場所だ。スターズが保有するサイオンリーダーによつてミアのサイオンパターンが検出され、場所が判明したのである。

同時に、ミアが吸血鬼であることも分かっていた。

『総隊長、こちらシルヴィア・マーキュリー・ファースト准尉です。対象ミカエラ・ホンゴウをブリオネイクで狙撃することは可能ですか？』

「こちらシリウス少佐。窓から見える場所で隔離されているわけではなさそうです。やはり地下と思われる。よつて狙撃による任務達成は不可能です」

『分かりました。では第二プランに移行してください』
「了解」

ブリオネイク。またの名をブリューナク。

貫くもの、という意味を持った神話武器の名だ。ケルト神話に登場する光の神ルーの武器である。戦略級魔法『ヘヴィ・メタル・バースト』をコントロールしやすくするためのデバイスであり、見た目は十字の杖だった。

十字の横木は杖を支えるグリップ、そして先端は太く空洞となつて

おり、内部には金属粉を押し固めたものが入れられている。空洞は境界の容器として機能し、この内部で金属粉をプラズマへと分解して発射する装置だ。

高温プラズマが刃となって放たれる。

限界はあるが、射程も基本的には自在。戦略兵器としては不十分な威力だが、局所的魔法戦闘においては凄まじい威力を発揮する。

このブリオネイクを使って建物の外部からミアを狙撃し、消滅させるのが第一プランだった。しかし、これは失敗——というより断念——が前提の作戦である。本命は少数精鋭で乗り込んでミアを殺害することだった。

「ではまずは私とカノープス少佐でそれぞれ先行します。貴方たちは後に続きなさい」

リーナはブリオネイクを近くにいた部隊員に渡しつつ指示を出した。屋内戦闘でブリオネイクは取り回しが悪すぎる。よってナイフや拳銃デバイスを使うのが最適だ。

ブリオネイクを受け取った部下は緊張気味だったが、それを丁寧に抱えつつ下がっていく。

「作戦通り、私は表」

「そして私は裏からですね総隊長」

「ええ、頼みます」

これは予め部隊員にも伝えていることなので、確認でしかない。しかし、この小さな確認こそが重要だったりする。ここはスターズにとって戦場であり、いつ死んでもおかしくない場所だ。ちよつとした油断や勘違いで命を落とす事を防ぐため、このような確認が義務付けられている。

リーナとカノープスは互いに頷き、自己加速術式を展開した。そして一気に飛び出し、それぞれが目的の場所へと走っていく。

表から潜入するリーナは、ビルの正面扉へと向かい、部隊員数名もそれに続く。

そして裏口へと向かったカノープスは、音もなく建物の陰へと消えていった。

(見張りは無し……どういうこと?)

パツと見た様子では正面側に見張りがいなかった。これは既に分かっている、赤外線観察でも見張りの存在は確かめられなかったのだ、魔法で隠れている可能性も指摘されていた。

だが、正面扉に到着し、扉を開けて中に入っても反応一つない。これにはリーナも違和感を覚えた。

(まさか罠?)

その可能性を察したリーナは、すぐに軍用のインカムでカノープスへと呼びかけた。勿論、壁に張り付いて周囲を警戒しつつ、小声で。

「ベン、そちらに異常はありませんか？ 正面には見張り一人いません。これは少しおかしいです」

『……』

「ベン？」

全く返事がなく、リーナは焦る。

このインカムは部隊全員で周波数を合わせているので、通信はリーナの後ろにいる者たちを含めて全員に聞こえているはずだ。しかし、リーナに従って付いてきた部隊員のインカムからはリーナの声がしなかった。

リーナがインカムに話しかけているのは分かるが、インカムからは声がしない。

そして機械が壊れていないのは任務前に確認したばかり。

電波妨害という言葉が部下の頭に過った。

「総隊長。恐らくは電波妨害です。通信できません」

「私たちが使っているレベルの通信機に妨害……？ そんなまさか」

電波妨害はつい最近苦しめられたばかりだった。

四葉の部隊と交戦したとき、通信電波を妨害されたばかりか、乗っ取られてしまったのである。ミアを誘拐した組織は判明していなかったが、もしかすると四葉家かもしれないと察した。

「急ぐわ。こうなった以上、裏口から侵入したベンの部隊と合流を優先する」

追隨する三人の部下は、無言で頷く。

少なくとも撤退はあり得ない。元は二方向から同時に侵入して相手を混乱させる作戦だったのだが、こうして連絡が取れないのならば別れる必要はない。素早く合流し、一気に決めるのが最善だろう。

だが、それよりも先にリーナたち四人を囲む影に気付いた。

（しまった！ もう見つかっているなんて!?!）

電波妨害されている時点で、待ち伏せの可能性を考慮した。だからカノープスと合流して素早く作戦を終わらせるつもりだったのだ。

しかし、その現場判断ですら遅すぎた。

なぜなら、ここは既に紫音の領域なのだから。

リーナはすぐに戦闘に意識を切り替え、戦闘服に組み込まれているCADデバイスへとサイオンを流し込む。そして自己加速術式を選択した。同時にコンバットナイフで『分子デバイダー』を発動しようとする。

だが、その二つは発動失敗に終わった。

「んな!? どうしてー!」

思わず声を挙げてしまいうりな。これは彼女が未熟だからではない。現に、引き連れている三人の部下たちも魔法発動が失敗してしまっただけだから。

そうしている間に、黒装束を纏った六人の人物に囲まれてしまった。

更に言うと、その内の一人は顔を隠した紫音だったりする。

『リベリオン』は戦略級魔法師ほどの魔法干渉力でも抗えない。それを実際に確かめることが出来たのは有意義だったな)

系統外精神干渉戦略級魔法『リベリオン』。

『調律』によって精神干渉を行い、他人の魔法演算領域を意味する精神波長パターンを、紫音と同じものに調整する。そしてリンクを形成し、魔法演算力を奪い取るという魔法だ。

この魔法の利点は、効果が無差別ではなく、紫音の選択一つで切り替え可能だということにある。

敵の魔法師から魔法演算力を全て奪い取り、味方の魔法師には意識リンク以外何もしない。そうすることで、敵の魔法師を非魔法師へと一時的に変えてしまうのだ。

そして、魔法を使えない一般人の魔法演算領域を紫音のものと同一にすれば、非魔法師を魔法師のように扱うことが出来る。当然、元は一般人なので魔法演算領域が形成されても本人は使えず、リンクによって紫音の魔法演算力を底上げするために利用する。

こうして何百、何千人分の魔法演算力を束ね、マルチプリケイティブ・キャスト乗積魔法行使することで戦略級魔法『日蝕』エクリプスは完成する。

魔法師と非魔法師の境界を操る裏切りの魔法、それが『リベリオン』。

スターズ総隊長シリウスも魔法師である以上、この魔法の効果から逃れることは出来なかった。

「ぐあつー！」

「ギ」や……」

紫音が自己加速術式を使い、リーナの部下を纏めて二人吹き飛ばす。魔法が使えない以上、スターズの惑星級魔法師もただの人だ。一撃で無力化され、吹き飛ばされた先で黒羽の配下が確保した。

その間も紫音は止まらない。

フラッシュキャストによって記憶領域から魔法式を呼び出し、移動魔法で残るもう一人の惑星級魔法師を水平に飛ばした。その慣性力と壁に叩きつけられた時の衝撃で意識が奪われる。

残るはリーナ一人だった。

「投降はしないのか？」

「出来ない相談ね」

相手は同じ年の少女ということもあり、紫音は投降を呼びかける。だが、リーナはスターズ総隊長としてそれを拒否した。

腰のホルスターから拳銃を抜き、早打ちで紫音に鉛玉を発射する。残念ながら、魔法が使えない今では魔法師の情報防壁を破ることが出来ない。銃弾は紫音から数十センチ離れたところで、見えない壁にでもぶつかったかのように弾かれた。

「それが答えか」

そう呟いた紫音は、フラッシュキャストで自己加速術式を発動。慣性制御、回転制御、停止、ベクトル操作、と連続して魔法を使い、リーナの背後に回り込んでそのまま押し倒す。リーナの右腕を背中に回して抑え込み、左腕は動かせないように足で踏みつけた。

同時に、紫音はリーナの右手から拳銃を奪い取る。

「きゃっ!?!」

一瞬のことで何が起こったか理解できないリーナは、少し遅れて可愛らしい悲鳴を上げる。魔法の使えないリーナはひ弱な少女に過ぎず、紫音に抑え込まれると動くことが出来ない。

素の格闘術もある程度は会得しているが、こんな状態から逆転できるほどの達人ではないのだ。

「こちらは制圧完了した。それぞれ報告しろ」

『裏口担当です。無事に制圧しました』

『外を担当しているチームです。こちらはあと数人で終わりつすよ』
「分かった。捕まえた奴はこの地下に運べ。すぐに俺が『調律』を使ってスターズの作戦指令室の場所を調べる。強襲作戦の用意を進めろ。電波妨害はしばらく続ける。特定周波数しか使えないから気を付けろ」

紫音は予め、部下に『リベリオン』をかけておいた。勿論、魔法演算領域に干渉するレベルではなく、通常精神リンク状態に留めてである。

そして黒羽の部下がスターズに接触すると同時に、『リベリオン』を感染させるのだ。

これによって、正面、裏口、外のスターズ魔法師は無力化されてしまったのである。

外に関しては四葉家から隠蔽用の部隊を借り受けている。多少は派手に戦っても、精神系の結界によって誰にも気づかれることなく処理可能だ。

こうして、スターズはあつという間に捕獲完了されてしまったのであった。

しかも、捕らわれたのはスターズ総隊長シリウス、そしてカノーパス。強制的に情報を引き出せる紫音にとってこれほどの獲物はそうそうない。

「このまま一気にUSNA軍を落とす。上手くいけば、母上殿の依頼はこれで一つ完了だ」

真夜からの依頼に、『マテリアル・バースト』の使い手が達也であるという疑惑を取り除けというものがあった。USNAは達也を『マテリアル・バースト』の使い手候補であると断じており、その調査としてスターズを向けてきた。

より正確には、『日蝕』^{エクリプス}の使い手である紫音、『マテリアル・バースト』の使い手候補である達也の調査である。

リーナに関してはパラサイトに憑依された裏切り者のスターズ隊員処刑がメインとは言え、達也を調べようとしている諜報員はそれなりにいる。今回の件は、それを一掃するチャンスだった。



USNA軍が秘密裏に手に入れたビルに、作戦指令室は置かれていた。この建物は東京二十三区内にあるビルのだが、周囲には住宅も殆どなく閑散とした区域となっている。実を言うと、黒羽家が用意しているパラサイト保管兼研究用ビルから数キロほど離れた場所にあった。

「シリウス少佐！ カノープス少佐！ 応答しろ！」

そのこの作戦指揮官であるヴァージニア・バランスは非常に焦っていた。作戦開始と同時に目的のビルへと侵入したままでは良かった。しかし、そこから数秒後には通信が途絶えてしまったのだ。

更にはビルの外に展開していた惑星級やスターダストの魔法師からの通信も全て断絶。

現場の状況は何一つ分からない。

「バランス大佐！ 既に通信が途絶えて十五分以上経過しています。恐らくは敵勢力に無力化されたものと思われます」

「く……追加で送った部隊はどうなった？」

「そちらも通信が途絶えています」

「やはりスターダスト程度ではダメだったか」

リーナやカノープスとの通信が途絶えて三分後、バランスはスターダストの追加部隊を送った。彼らに現場の様子を監視させようと考えたのである。

実を言うと、追加で送ったスターダストは、隠蔽を担当している四葉の部隊に始末されていた。

「衛星画像は手に入ったか？」

「もう少しお待ちください……認可が下りました！ すぐに表示します！」

奥の手としてUSNA本国に衛星画像の使用を申請した。

認可が下りるまで時間が掛かってしまったが、文句は言えない。すぐに指令室のモニターへと画像（正確には映像）が映される。そこには、特に変化のないビルの様子が映されていた。

「……変化はなしか。いや、そもそも変化がないことがおかしい。やはりシリウス少佐とカノープス少佐は既に――」

最悪の場合を考えてしまい、バランスは唇を噛む。
血の味が口の中に満ちていくが、気にしている心的余裕はない。

「あの二人をこれほどの短時間で無力化するなど……どんな組織だ」

衛星による監視を見る限り、既に目的のビルでは戦闘が行われていない。連絡がないことを加味すれば、シリウスとカノープス、そして十名を超える惑星級魔法師は無力化されたのだろう。

彼らはスターズが誇る強力な魔法師であり、それを短時間で無力化するなど有り得ないことだ。

バランスも、相手が魔法師を非魔法師に変える魔法を使うなど想像できるはずがなかった。

「どういたしましたしょう大佐！」

「……止むを得まい。作戦は失敗と断定する。まずは本国に連絡だ。大きな失態だが、報告をしないわけにはいかない」

「すぐに本国と連絡を取ります」

今回のことは、バランスのキャリアを大きく傷つける要素となるだろう。吸血鬼一体を仕留めるためにスターズの隊長クラスを二人も動員し、惑星級魔法師も多数同行させて全滅という結果なのだ。降格すら覚悟しなければならぬ。

（ふふ。本国に戻れば査問会だな）

内心で自嘲するバランスは、腰かけていた椅子に深くもたれかかる。その表情に疲れが見えるのは間違いではないだろう。この指令室でオペレーター席についていたシルヴィア・マーキュリー・ファーストも、リーナを心配しつつ、バランスにも気の毒そうな視線を送っていた。

落胆の空気が漂う中、本国との通信を開こうとしていたオペレーターが突然叫ぶ。

「ば、馬鹿な！ 周囲一帯の通信が全て妨害されている……これは魔法!?!」

「なんだと!」

バランスは勢いよく立ち上がって叫んだが、もう遅い。

激しい物音を立てて作戦指令室の扉が破壊され、黒い影が大量に飛び込んできた。

それを見たバランスは、作戦の失敗どころか、自分たちの命の危機すら感じたのだった。

来訪者編 15

意識が浮上し、薄っすらと目を開ける、

(ここは……)

目を覚ましたヴァージニア・バランスは周囲を見渡す。同時に自分の状況を理解することに努めた。

(体は……椅子に縛られているか。流石に抜け出せないな)

一応は軍人であるバランスは、それなりの訓練を受けている。しかし、USNA軍統合参謀本部に就任してからはそれも無くなったと言って良い。

こうして捕まったことで、身体の鈍りを感じていた。

(部屋は小さな立方体。全面がコンクリートで窓は無し。地下ということか?)

強いて言えば鉄扉が目の前にある。しかし、かなり重そうな扉であり、鍵も掛かっているだろう。そもそも、縛られている身では扉に近づくことすら出来ない。

首を傾げ、回しながら天井へと目を向ける。

一台だけ監視カメラが設置されていた。

(さて、次は……どういう経緯でここにいるのか思い出すとしようか)

バランスは目を閉じて作戦指令室でのことを思い出す。

まず、指令室の扉が魔法と思われる力で破壊された。その後、侵入してきた幾つかの影が一瞬にして指令室のオペレーターたちを無力

化していく。指令室にいた魔法師が魔法を使おうとしたが、『魔法が発動しない!』と叫んでいた。

助けも呼べず、魔法も使えない状態。

それに対して敵は奇襲を成功させた魔法師。

勝負は一瞬で決着した。

バランスも黒ずくめの人物によって捕獲されてしまい、布を口と鼻に押し当てられ、そこで意識を失ったのだ。これはあの場にいた全員が同じだろう。

「はあ……無様なものだな……」

どこかにマイクが仕掛けられていることを警戒して、これまで言葉を発することなく考察していた。だが、こればかりには口に出して溜息を吐くしかない。それほどやるせない気持ちだった。

そんな時、正面の鉄扉からガチャリと金属音が響く。

鍵が開けられたのだとバランスは悟った。

開かれた扉からは、黒髪の少年が入ってくる。同行しているのは、少し強面の男だった。

「ハロー。いい夜だねヴァージニア・バランスUSNA軍統合参謀本部大佐殿。監査官がこんなところまでようこそと言ったらいいかな?」

「……」

何がいい夜だとか、意外と流暢な英語を話すとか、色々と言いたいことはある。

だが、ここで何よりも言及するべきなのは少年の素性だった。

バランスはこういった任務をしている性質上、彼のことはよく知っていた。

「戦略級魔法師、シオン・ヨツバ」

「あー……まあ、知ってて当然か」

紫音は頭を掻いて微妙な表情を浮かべているが、バランスからすれば、どうして自分の身分が詳細にバレているのか気になってしまう。バランスはUSNAの軍人であり、仕事の性質を考えると身分がバレているのはおかしい。

改めて四葉の情報収集能力を恐れた。

いや、正確には紫音の能力を恐れた。

そして同時に理解した。

「なるほど。私たちは四葉に手を出そうとしていたのだな」

「いいや。手を出そうとしたんじゃない。既に手を出したんだ。手遅れという奴だよ。ミス・バランス」

「……」

知らなかったでは済まない。

それに、元からバランスは対四葉すら想定して日本へと来ていた。正直に話せば、あれほど軍部に四葉の恐ろしさを力説しておきながら、バランス自身も四葉の本当の恐ろしさを理解していなかった。

それだけのことである。

「貴方がたからは有意義な情報を頂きました」

「なんだと？」

「——ブリオネイク」

「っ!？」

「FAE理論を利用した模造神器。結界内部で魔法反応を引き起こし、それによつて物理的制約が緩くなるFAE現象を通常より長く維持する。戦略級魔法『ヘヴィ・メタル・バースト』を局所的魔法戦闘に使うためのデバイス……というより杖と言った方がいいかな？」

ブリオネイクは絶対的な機密であり、その秘密を知られているなど

有り得ないことだった。

紫音はブリオネイクの名称だけでなく、その仕組みや用途まで大まかに知っている。これはバランスを焦らせるのに十分だ。

「こちらの……四葉の力は認識して頂けたかな？」

紫音の言葉はバランスの心に刺さった。

これこそが四葉、これこそが接触禁忌^{アンタッチャブル}。

「理解した……いや、させられたよ。それで、君は私に何をするつもりかねシオン・ヨツバ」

「ああ、誤解しないでいただきたいのですが、既に貴方にして貰うことは終わりました。すぐに解放したいと思います」

「なんだと……」

バランスは意味が分からなかった。

自分がこうして捕縛されている以上、尋問でもされるのかと思っただ。もしくはUSNA軍と交渉する材料にされるのではないかと思っただ。

意味が分からないという表情をしているバランスに対し、紫音は意外にも理由を示した。

「おい」

「了解です紫音様」

先程から紫音の隣に立っていた強面の男が、デバイスを手にして何かの操作をする。そして一つの画面を開き、椅子に縛り付けられているバランスに見せようとした。

だが、その前に紫音が口を開く。

「あ、それは俺が見せるわ。お前はミス・バランスの拘束を解いてや

れ」

「分かりました。お任せします」

男は紫音にデバイスを渡し、バランスの背後に回って縄を解く。その間に、紫音はバランスへと画面を見せつつ説明した。

「これ、見覚えはないかな？」

そこに記されていたのは全て英語の文章だ。

バランスが内容を読んでいくと、その内容に顔を青ざめさせた。戦略級魔法『マテリアル・バースト』を探る諜報員のリスト、潜伏先、得られた情報、その他にも戦略級魔法『日蝕』^{エクリプス}に関する諜報結果、スターズのオペレーターマニュアル、通信システム、スターズ所属の魔法師リスト、スターズの配属リスト、得意とする魔法、果てには各部隊で利用しているパスワードまで。

もはやスターズを始めとして、USNAの軍事機密がかなりの部分で記されていた。

バランスが顔色を悪くするのも当然である。

「ば、馬鹿な……」

「ああ、それとこんなものもあるけど」

うろたえるバランスは、拘束が解かれても動く様子がない。それほどの衝撃なのだ。紫音はデバイスを操作して別画面を開き、それもバランスに見せた。

それは今回の作戦に参加したスターズの魔法師やオペレーターが縛られて閉じ込められている映像である。男女は別にして二つの部屋に閉じ込められていた。

よく見ればリーナやカノープスの姿もある。

スターズの隊長である二人を捕縛できるほど余裕があったということだ。バランスは戦死者がいらないか一人一人の顔を確認していく。

すると、ただの一人も欠けていないことが分かった。
いや、分かってしまった。

「こんなことが……可能なのか……スターズだぞ……世界最高峰の魔法師部隊だぞ……」

この眩きだけはバランスの本音だった。

彼女は自分がUSNA軍大佐であることを誇りに思っており、スターズはUSNAの誇りだと思っていた。それが無様に敗北し、圧倒的な差を見せつけられた。

心が折れそうになっても仕方ない。

（ああ……これが本当の四葉。魔法を突きつめ、狂気とも言える領域に至った一族）

四葉には強大な魔法師が意外と少ない。真夜、紫音、達也、深雪は圧倒的な魔法力を持っているのだが、この四人は寧ろ例外である。

繊細な精神干渉、戦闘における魔法活用など、そういった面において四葉は群を抜いている。第四研究所は魔法兵器を効率的に生産するための研究所だ。四葉の真の恐ろしさは、一人の魔法師を究極に高めてしまうところにあると言えるだろう。

使い道の少なそうな魔法であっても、それを絶対的な力へと高め、有用に利用する。

一人一人の魔法師が、たった一つの究極を持っている。
故に強いのだ。

「君たちが四葉の手に落ちていることは、既にUSNAも認知していることです。流石にシリウスやカノープスを切り捨てるようなことはしなかったようですね。勿論、貴女のことも」

「既に交渉など終わっていたか」

「はい。後で知ることになると思いますから、貴女を含めた全員の処

遇と、これからの動きについて軽く説明して差し上げます」

もはやバランスは項垂れるしかなかった。



数時間前、紫音からの報告を受けた真夜は早速とばかりに行動へと移っていた。血のつながりが薄いとは言え、息子が為した大きな成果である。当主であり、母である自分が活用しないなど有り得ない。台無しにするなど論外である。

慎重に計画を定め、紫音が手に入れたUSNAの秘匿用電波回線とパスコードを利用して、連絡を送った。

『軍上層部を揃えた上で、指定時間にこの回線へと繋ぐように』

その文章と共にネットワーク上にある一つの回線を提示された。暗号化されたパスコードも添付されており、回線を開くにはパスコードを解読するしかない。

普通ならば悪戯だと思われるような内容だったが、そもそもUSNA軍の持つ秘匿用回線を通じて送ってきた連絡なのだ。彼らは悪戯

だと考えなかった。

なんとか指定時間以内に暗号を解読し、回線を接続したのである。軍の中でもそれなりの地位を持つ者たちは、多少渋りながらも集まり、モニターを前に着席する。

「間もなく時間ですな」

「我々も忙しいのだが……」

「まあまあ、悪戯ということはないだろうよ。もしかすると、有能なハッカーが自分をプレゼンしてくれるのかもしれないな？」

「そのために我々が呼び出されたのか？」

「ふん。USNAの秘匿回線を解析できるハッカーならば、軍部に迎えても良からう。今日はそういう余興だと思えば良いのだ」

ちよつとした冗談が飛び交いつつ、指定の時間まで待つ。

そして遂に時間となり、モニターが明るくなった。だが、彼らはそこに移った人物を見て腰を抜かしそうになる。

「なっ！ お前はマヤ・ヨツバー！」

上層部の一人が叫びながら立ち上がり、この場は騒然となった。四十代であることを思わせない美貌に加え、その魔法力も世界最高クラス。防御不可能な『夜』の魔法によって世界最強とも言われているのだ。

知らないはずがない。

『USNA軍部上層部の皆さん、ごきげんよう』

軽い口調で挨拶が行われ、部屋は一気に静まり返った。

そんな部屋の様子を眺めつつ、真夜はゆっくりと話し始める。

『本日、日本時間の二十二時頃でしたか……東京の治安維持のために

活動していた私の息子、紫音さんが襲撃されました。USNA軍魔法師部隊スターズによつて』

ゴクリと生唾を飲み込むような音が鳴る。

それが自分のものだど気付いた者は、いつになく緊張しているのを感じた。

『どうしてそのようなことが起こったのかは分かりません。ですが、息子が襲われた以上、私は抗議をすることにしました』

「な、なにが抗議だ。我らがそんなことをした事実がどこにある?」

『あら……では証拠を見せれば良いのですね』

まるで予定調和であるかのように会話が進む。

真夜が小さく手を振ると、モニターの端に幾つかの画像が表示された。そこには捕らわれたスターズの魔法師とオペレーター、そして一人だけ別室に監禁されているバランス大佐の姿。

彼らは思わず動揺してしまい、口にはしてはならないことを口にする。

「バランス大佐! それにシリウス少佐もだど!」

『ふふ、やはり知っている方なのですね?』

「あ……いや、そうではなくてだな……」

『では、何だというのですか?』

完全な不意打ちだった。

リーナを小娘だと侮る者は確かにいるが、あれは確かな魔法力によつてシリウスを継いだ魔法師だ。経験豊富で実力者なカノープスは言うに及ばず、その他の惑星級魔法師も同様である。

何より、あのバランスが捕まっているという事実にも誰もが驚愕した。

そんなことがあるのだろうかと目を疑った。

『私たち四葉家は非常に憤っています。調べてみれば、国防軍でもスターズが日本で活動することは認められていないそうではありませんか？ これは不法な活動であり、諜報行為であると断定してよいでしょう。シリウスの戦略級魔法を失った貴方がたは、四葉と戦争するつもりですか？』

USNAは他にも戦略級魔法『リヴァイアサン』を保有しているが、それは拠点防衛・攻略に有用な魔法であり、更に大量の水が存在する場所でなければならぬという条件もある。その点、ある程度の重金属があれば効果を発揮する『ヘヴィ・メタル・バースト』は非常に使い勝手の良い魔法だった。

本当の意味で、リーナはUSNAに無くてはならない魔法師なのである。

それこそ、催眠などで傀儡にしてしまいたいほどに。

「四葉と戦争など……そんなつもりはない！」

「何かの間違いだったのだろう。一度こちらで相談させてはくれないか四葉殿」

『間違い……ねえ。そんな言い訳が通用すると思っているのかしら？』

いつになく強気の真夜に対して、USNA上層部は言い返せない。今回は本当にまずい状況なのだ。何より、スターズが呆気なく敗北して、捕縛されているという事実が彼らを動揺させた。殺害はともかく、捕縛は非常にリスクの高い要求だ。相当実力に差がある場合、または非常に戦術が上手く嵌った場合でなければ不可能である。

そして、余りにも突拍子もない画像であったからか、現実を受け止めきれない者もいた。

「こんなもの加工だ！ 画像を加工したに決まっている！」

「止めろ！ 今、スターズに所属するリストと比較した。顔がすべて一致している。秘密部隊のスターズは顔の割れていないものも多い。それを的確に加工するなど不可能だよ」

「馬鹿な！ 全員が捕縛されているということの方がよっぽど非現実的だ！ それならば情報が漏れ出していたという方が納得できる」

「そうだ。連絡を取れ！ それで確かめろ」

「ダメだ。幾ら呼びかけても繋がらん。あのバランス大佐がだ！」

騒ぎ立てる上層部たちの様子を眺めつつ、真夜は結論を待つ。画像に映っていたスターズ隊員たちと連絡を取るべく通信を繋ぐが、そのどれもが使えなかった。

これにより、彼らは事実を認識し始める。

『理解して頂けましたか？ では、私たち四葉の要求を伝えます。それに了承してくださいさるなら、捕らえたスターズ隊員は解放しましょう』

「……要求を聞こうではないか」

上層部の一人がそう答える。

真夜は口を開いた。

『顧客グ・ジャーという男を知っていますか？』

この後、USNAは真夜の要求を全て飲むことになる。

来訪者編 16

USNAが四葉に屈した。

それを聞いたバランスは愕然とした。

だが、もはや四葉に逆らえなかつたのも当然である。紫音が情報を完璧に読み取り、日本各地にいる戦略級魔法の諜報員を全て捕縛したからだ。四葉は動かせる人の数が少ないので時間はかかってしまったが、半日以内に全て終わらせた。

ちなみに、全ての諜報員を一斉に捕らえた理由は、達也が『マテリアル・バースト』の使い手であることを悟らせないためである。仮に達也を調べている諜報員だけを捕縛した場合、それは逆に達也が真なる使い手であると語っているようなものだからだ。

「まあ、こんな感じですね。四葉からUSNAへの要求は先程も言った通り、顧傑^{グ・ジイ}を追い詰めるために協力することです」

「……たつたそれだけで私たちを解放するというのか？」

「我が家の当主は、これによって日本とUSNAが戦争状態になることを望んでいません。だから穏便に済まそうとしているのですよ」

既に縄を解かれたバランスは、縛られた痕の残る手首を摩りながら考察する。

（何が目的だ？ シリウスという大きすぎる手札を手に入れた四葉が……わざわざ戦争を回避だと？ 幾らでも有利な交渉を進められるというのに、たつた一人の男を追い詰めるために同盟？）

バランスは顧傑^{グ・ジイ}という男について知らないため、話が理解できなかった。その様子を見た紫音は、忘れていたとばかりに改めて口を開く。

「そう言えば、貴女は顧傑^{グ・ジイ}について知りませんでしたね。この際です

から少しだけ情報提供しましょう」

「……頼もう」

「まずは貴女がたにも分かりやすい部分からです。顧傑は吸血鬼……いえ、パラサイトを日本に送った張本人です」

「なんだと？」

「顧傑はUSNA副大統領補佐官を唆し、パラサイトの日本亡命を助けました。副大統領補佐官が協力した理由としては、パラサイトに危機感を覚えたからでしょうね。テキサス州ダラスで発生した不審死事件によつて、魔法師排斥運動が高まりそうな予感でしたから」

顧傑が行ったのは、不審死事件がパラサイトによつて引き起こされたことをリークし、対岸の国である日本に押し付けることで解決を図ろうとしたのだ。

そして日本で魔法師排斥運動が高まれば、人間主義の注目は日本に移る。

日本で騒ぎが大きくなってから援軍としてスターズを派遣し、恩を売ると同時に『マテリアル・バースト』を調査するための下地にしようと考えていた。

勿論、完璧にご破算となったが。

「つまり顧傑という男を捕えれば解決するということのか？」

「はい。顧傑は死体を操る魔法を得意とし、死体にパラサイトを憑依させることで新たな戦力としています。いずれはパラサイト兵器なんて作ってしまうかもしれませんね」

「あれを兵器に？」

「パラサイトに憑依された魔法師は、殆ど超能力のレベルで魔法を使います。その気になれば、一般人を超能力者に変えてしまう技術となるかもしれませんね」

これは事実としてあり得ることだ。

原作でも九島家がパラサイトを利用した兵器開発をしていたし、パ

ラサイトに憑依されたUSNAの魔法師は例外なく強力なサイキックを会得している。紫音はそれを知っているのです、そういった危機感を覚えていた。

「顧傑グ・ジの危険性は理解して頂けましたか？」

「……ああ、よく理解した」

「他にも申し上げると、顧傑グ・ジは反魔法師団体ブランシユの総帥でもあります。彼をこの世から消滅させることは、魔法師にとって優先度の高いことなのですよ」

より正確に言えば、四葉家は顧傑グ・ジをただで殺すつもりはない。USNAとの共同で限界まで追い詰め、日本から追い出すことが目的だ。これは四葉のスポンサーからの依頼でもあると真夜は言っていた。

そして今の顧傑グ・ジが日本から出た場合、大亜連合にしか向かう場所がない。今の顧傑グ・ジが日本国外で頼れるのは、無頭ノー・ヘッド・ドラゴン 竜の残党だけなのだから。

無頭ノー・ヘッド・ドラゴン 竜は元ボスのリチャードスン 孫の娘、孫美鈴スンメイリンが組織を纏めている。だが、無頭ノー・ヘッド・ドラゴン 竜は分裂していた。分裂した少数派を率いるロバートスン 孫は、孫美鈴スンメイリンと異なり、顧傑グ・ジと懇意にしているらしいと判明している。

ロバートスン 孫が率いる無頭ノー・ヘッド・ドラゴン 竜の残党と合流させ、大亜連合で活動させる。それを行わせる理由については紫音もある程度予想しているが、真夜からは直接聞いていない。ただ、単純な復讐だけが理由ではないと悟ってはいた。

「四葉にとって魔法師排斥が高まる世論は都合が悪い」

「USNAにとってもだ」

「つまり利害の一致です。上層部の方は理解して頂けました」
「なるほど」

真夜は高圧的な態度で交渉に臨んだ。しかも状況もかなり有利

だった。だが、提示された条件はあまりにも簡単すぎる。USNAにとつても利益がある話だったので、乗らないという選択肢はなかった。

しかし、甘い。

たったこれだけが真夜の目的な訳がない。

もう一つの目的は、しっかりと紫音に託されていた。

「ミズ・バランス。こうして貴女一人を隔離した理由について思い当たりにませんか？」

「……私が指揮官だから、というわけではないだろうか？」

「その通りです。答えを言わせて頂くと、我ら四葉は貴女の実力を買っているのです」

「ふ……無様に任務を失敗した私の実力を……か？」

「ええ、それでもです。女の身でありながら軍上層部に食い込める実力者、そして監査官という立場を持つことも大きい。我ら四葉家と個人的なパイプを作ってみないかと勧誘したくなるほどに。だからこそ、USNAの機密がかなり漏れたことは向こうにも日本政府にも伝えていません。貴女を決定的に失脚させないために」

「なるほど……」

バランスは理解した。

それと同時に、これが自分にとって有意義な話であることも。

シリウスだけでなくカノープスも捕まり、ブリオネイクを始めとした機密情報がすべて漏れ出した。普通ならば降格間違いなしである。

だが、四葉は機密を漏れなかったことにすると知っているのだ。四葉家は情報を利用するかもしれないが、その情報を日本政府に渡したりはしないと断言していることに等しい。それならば挽回は効く。

何より、個人的に四葉とのパイプが出来ることは何よりの武器になる。

利用されることは目に見えているが、利用できるのも確かなのだ。

（四葉の実力は知ったばかりだ。疑う余地などない。そもそも、これは私に選択権のない交渉だ）

このコネクションは軍部において強力な武器となるだろう。バランスは、悩んだ末に悪魔の契約書にサインすることを決意した。



日本に来てからのリーナは散々だったと言えるだろう。

やったことのない高校生を体験しつつ達也や紫音と接触、合間にパラサイトを追跡しては始末。初めての諜報任務を必死にこなすが空回りし、パラサイト追跡は四葉家によって邪魔される。

拳句の果てに、四葉に捕まって交渉材料にされてしまった。屈辱を通り越して情けなさ過ぎる。

「うう……死にたい」

無事に解放されたリーナは、基地の待合室で時間が来るのを待っていた。ちなみに、側にはカノープスも座っている。いつもは落ち込むリーナを慰めてくれるのだが、この日ばかりはカノープスも調子が悪かった。

「同じ気持ちですよ総隊長」

「これから査問会だと思おうと気が重たいです」

「今頃はバランス大佐が詰問されている頃でしょう。それに比べれば、私たちはマシだと思おうのですが」

四葉に対抗するためバランス大佐とカノープス少佐が日本まで赴いたにもかかわらず、無様な敗北を見せつける結果となったのだ。バランスに言い渡される沙汰は、それなりのものとなるだろう。

指揮官だったバランスと比べれば、リーナやカノープスはまだマシだろうと思える。

いや、思いたい。

「アンジー・シリウス少佐、及びベンジャミン・カノープス少佐は共にこちらへ！」

暫くして、兵の一人が待合室に入り敬礼しながら呼びかけた。遂に時が来たと憂鬱に思いつつ、簡易的な査問会が行われる部屋へと向かって行く。足取りは重い、二人ともそれを悟らせないようにしていた。

大きな失態だったとはいえ、上に立つ者がそんな様子では示しがつかないからである。

二人が部屋に入ると、そこには既にモニターが用意され、バランスもその場にいた。

「アンジー・シリウス少佐、ただいま到着しました」

「ベンジャミン・カノープス少佐です。同じく到着しました」

『宜しい。では、そこで立て』

「はっ！」

「了解であります」

リーナとカノープスは指示された場所に立ち、背筋を伸ばしてモニターへと目を向ける。バランスは部屋の端で椅子に座り、同じく画面

に目を向けている。

まず、口を開いたのは画面の向こう側にいる上層部の一人だった。

『今回のあらましはバランス大佐から聞いた。報告書もこちらに上がっている。だが、まずは君たち二人から見た今回の報告を聞こう。まずはシリウス少佐』

「はっ！… まずは——」

リーナは昨晚の任務で何が起こったか、その詳細を語る。ミアが誘拐されたこと、ミアがパラサイトだと判明したこと、ブリオネイクを使おうとして断念したこと、突入した結果捕まってしまったこと。

それらを話し、リーナは思い出したかのようにある事実を口にする。

「——突入の際、私たちは魔法が使えなくなりました。自己加速術式もベクトル操作も分子ダイバイダーもです。これは全ての隊員に共通した事態です。キャストジャミングの感覚もなく、起動式を読み込んでも魔法式が構築できない……と言った感覚でした」

『魔法が使えない……カノープス少佐はどうだった？』

「はっ！ 私も同様であります。シリウス少佐と同じような感覚を覚え、魔法が使用不可能になりました。それに動揺したこともあり、瞬時に敵の手へと落ちてしまったのであります」

『なるほど……』

『どう思うっ？』

『うむ、間違いなからう。あれと同じだ』

『ということは？』

『ああ、バランス大佐の進言に従うのが最もよからうよ』

思ったよりも責められないことにリーナとカノープスは首を傾げそうになる。それに、上層部たちの言葉も半分以上理解できない。

そう思っていたところで、向こうが説明を始めた。

『君たちは昨年の十月三〇日に日本で起こった事件を知っているかね？』

「はっ！ 横浜事変であります」

『その通りだカノープス少佐。大亜連合による襲撃に際し、日本は国防軍、十師族、有志魔法師部隊が出勤して事態を治めた。この時、日本側は異常なほど被害が少なかったのだ。それも、奇襲を受けた側にもかかわらず。何故だか分かるか？』

それは答えを期待しての問いではなかったのだろう。

すぐに彼らは答えを口にした。

『それは大亜連合側の魔法師が魔法を使えなかったからだ』

『横浜全域で日本の魔法師が魔法を使う一方、大亜連合の魔法師は単純な魔法すら発動できなかったと報告が上がっている』

『大亜連合はすぐに敗走した。いや、空母や駆逐艦を使つての攻略作戦に切り替えたのだ。そこで発動したのが戦略級魔法『日蝕』エクリップスだったのだよ』

『それはともかくだ。我々が何を言いたいのか理解したかね？』

これだけヒントを出されればリーナも理解できる。

カノープスと目を合わせ、頷いてからリーナが答えた。

「日本には魔法師を無効化する技術が存在している。いえ、昨晚の状況と組み合わせれば、四葉がその技術を持っているということですね」

「何よりも恐ろしいのは、味方の魔法師は魔法力を失わず、敵の魔法師のみを無力化する点。これは現代における戦争を根本からひっくり返す技術となるでしょう」

『その通りだ。我々もバランス大佐の話聞き、その二つを結び付けることが出来た』

ここで二人は察した。査問会が思ったより優しく進行しているのは、四葉が保有する恐ろしい技術が判明したという成果によるものだと。

魔法師を一方的に無力化するなど、そんなものを放置できないからだ。

『さて、本題に移ろう。我々USNAは四葉家と全面的に協力し、顧^{ブ・ジイ}傑なる者を追跡することになった。奴はパラサイトを操る張本人である。本来ならば、そんな奴は日本軍に押し付けてしまおう。だが、我々には為さなければならぬことがある』

『まずはパラサイト化したと思われるフォーマルハウト元中尉の抹殺だ。四葉家と協力してこれを追え。フォーマルハウト元中尉の死体はこちらに受け渡すと交渉で決まっている。ただし、これは二番目の優先事項だと思え』

『一番の優先事項は理解しているな?』

「勿論です」

「四葉と協力し、その中で魔法師を無力化する技術について探るのですね」

この提案こそ、バランスが先の査問会で提示したものである。

四葉の持つ恐ろしい技術を調べる。そんな大役を任せるにあたり、今回の失態を帳消しにするという話へと纏まったのだ。昨晚の件で分かる通り、四葉は恐ろしすぎる。危険な役を与えるのは、ある意味で生贄に近い。

しかし、バランスは敢えてこれを提示した。

そうでもしなければ、昨晚の失態は拭えなかったからだ。

『詳しくはバランス大佐が話すだろう』

「では私の方から詳しい話をする。こちらを向け」

「はい!」

「はっ！」

「うむ」

バランスは手元のタブレット端末を操作し、画面に幾つかのデータを表示する。

そこには紫音の顔写真も載せられていた。

「シリウス少佐。君は魔法科大学付属第一高校へと引き続き通い、シオン・ヨツバと協力してパラサイトと顧傑^{グ・ジ}を追え」

「はっ！」

「次にカノープス少佐だ。君はこちらの少女と共に行動して貰う」

バランスがそう言うと、黒髪の少女が写真で映された。どこことなく紫音と似ている気がするものの、カノープス少佐はその思考を端に追いやって話を聞く。

「彼女の名はアヤコ・クロバだ。同じく四葉からの協力者と聞いている。彼女に関しては後で顔合わせがあると四葉家当主から聞いている。カノープス少佐はアヤコ・クロバと協力し、シリウス少佐とシオン・ヨツバを補助するのが任務だ」

「了解であります」

「これらが概要になる。では、詳細へと移ろう——」

四葉家との協力。

更新された任務によって、リーナたちの頭から達也のことが完全に抜け落ちたのは間違いない。真夜からの依頼通り、無事に達也への疑いは打ち消すことが出来たのだった。

来訪者編 17

二日後の一月二〇日。

リーナとシルヴィアは留学中の住居にいた。いつもと違うのは、この場にカノープスも訪れていることだろう。理由は、今日の夕方に紫音と亜夜子がやって来るからだだった。

名目上は四葉家とUSNAの共同戦線による顧傑^{グ・ジ}追跡とフォーマルハウトの処理。だが、その実は互いに腹を探り合うこと。

リーナはかなり緊張していた。

「シルヴィ……大丈夫ですかね私たち」

「弱気にならないでください総隊長。戦いをするわけではありませんよ」

「でも……」

リーナはかなり弱気だった。

日本に来てから上手くいかないことが尾を引いているのだろう。USNAでは、若くしてスターズ総隊長になったことで、様々な嫌味を言われてきた。小娘には相応しくないとか、戦略級魔法が使える程度で調子に乗っているとか、本当に色々と言われた。

軍人としての適性だけで考えれば、リーナはかなり低い。

考えは甘く、感情に流されやすく、何より子供だからだ。

それでも魔法力という面においては大抵の大人を凌駕している。だからこそ、シリウスの称号を手に入れたのだ。

ただ、その唯一の自信が揺るがされているのも事実だった。

「フレディを追い、顧傑^{グ・ジ}を見つけろ。その打ち合わせなのは分かっています。でも、私たちは四葉が保有する魔法師無効化の仕組みを探らなければなりません。どうしたらいいのか……」

USNAから言い渡されている失敗の許されない任務。

それがリーナにプレッシャーを与えていた。一度ならず二度までも四葉に敗北していることもあり、余計に弱っていたのである。

そんなリーナに対し、カノープスは慰めの言葉をかけた。

「総隊長、日本には『三度目の正直』という諺ことわざがあるそうです。次こそ上手くいきます」

「しかしベン。同じように『二度あることは三度ある』とも言いますよ」

「それは……」

あまりにもネガティブな姿に、流石のカノープスも困った表情を浮かべる。普段なら、少し脚色しながら自信を付けさせればすぐに元の調子に戻っていた。しかし、今回はやはり回復が難しそうである。

ずっと『シリウスなんか辞めたい』と呟つぶやいているのだ。

これまで大きな失敗がなかった故に、激しく落ち込んでいるのだろう。カノープスはそのように分析した。こればかりは時間が解決するまで、見守るしかない。カノープスも経験したことだった。

どう慰めるべきかと悩む内に、時間は過ぎる。

そんな時、不意にチャイムが鳴り響いた。

「いらっしやられたようですね」

シルヴィアがチェックすると、ドアカメラが少年と少女を映していた。勿論、紫音と亜夜子である。

すぐにロックを解除し、同時にリーナとカノープスへと目を向ける。これは自分が玄関まで出迎えるというアイコンタクトであり、二人も頷いて了承した。

そして玄関で扉を開くと同時に挨拶する。

「お待ちしておりました。中へどうぞ」

綺麗な日本語であることに紫音と亜夜子は少しだけ驚いた。だが、それを表情に出すことなく、言われるがままに中へと踏み込む。

シルヴィアに案内されて、二人はリビングまでやってきた。

そこには金髪碧眼の美少女リーナ、そして精悍な見た目のカノープスが待っていた。紫音も亜夜子もカノープスの資料は読んでいるため、それなりに警戒している。場合によってはシリウスよりカノープスの方が脅威となり得るのだから。

席を示され、紫音と亜夜子はリーナとカノープスの対面に座る。シルヴィアはリーナの隣に移動し、そこに腰を下ろした。

「まずはようこそ。自己紹介から始めようと思うのだが、構わないかね?」

「いいでしょう」

先にカノープスがそう問いかけたので、紫音も拒否することなく返した。そこで、自己紹介する流れとなる。言い出しっぺのカノープスから口を開いた。

「私はベンジャミン・カノープス少佐です。スターズ三番隊を任されています。これから私のことはカノープスと呼んでください」

「ワタシはアンジー・シリウス少佐よ。戦略級魔法師で、スターズ総隊長をしているわ。プライベートではアンジェリーナ・クドウ・シールズを名乗っているのは知っていますし、シオンは使い分けて頂戴。プライベートではリーナ、任務中はシリウスでお願い」

「では次は私ですね。シルヴィア・マーキュリー・ファースト准尉と申します。主にオペレーターとして皆さんを支援する立場です。シルヴィアとお呼びくださって結構です」

遊びではないので、趣味嗜好まで語る必要はない。勿論、戦闘方法や得意魔法などを言う必要も皆無だ。

それに倅い、紫音と亜夜子も自己紹介する。

「四葉紫音だ。知っていると思うが、戦略級魔法師でもある」
「黒羽亜夜子と申します。四葉家に仕える一族の者で、紫音様とは昔からの縁です」

ここで亜夜子は、紫音を兄と呼ばなかった。理由は、四葉の家族構成を無暗に伝えることを避けたからである。黒羽が四葉分家であることは秘匿事項だ。そのため、懇意にしている一族という程度にとどめたのである。

この任務中、亜夜子は紫音を『お兄様』ではなく『紫音様』と呼ぶことに決まっている。

「まずは俺たち四葉からこれからの動きについて語らせて貰う。構わないか？」

紫音が尋ねると、リーナ、カノープス、シルヴィアは頷いた。

「ひとまず情報共有だ。パラサイトについてはここにいる全員が認知していると思っていいな？。そしてパラサイトは殺害すると、プシオン体が抜け出して新しい体に移ることも分かっている。パラサイト本体をどうにかしない限り、本質的にパラサイトを始末することにはならない」

ここが厄介な部分だ。

パラサイトと融合した人を殺しても、本体であるプシオン体は破壊されない。それは新しい体を探して乗り移り、新たなパラサイトとなる。

その仕組みについては紫音が捕らえたパラサイトで実験し、判明している。四葉はパラサイトについて大まかに解明した。故に、USNAへとフォーマルハウトの死体を引き渡すことに同意した。

真夜の意向として、保存用に何体かのパラサイトを確保する方向になつてはいる。しかし、既に積極的ではないのも確かだった。

(どちらかと言えば、^{グ・ジ}顧傑からパラサイトを奪うことを避けている感じだったな。捕獲してもいいけど、全部じゃなくてある程度つてニユアンスの命令だったし)

紫音は昨日に本家へと戻り、亜夜子と共に真夜と面会した。その際に、USNAと付き合う際の注意点など様々なことを命じられた。

その中で、真夜は^{グ・ジ}顧傑がパラサイトを使って行動することを、それほど危険視していないように見えた。いや、寧ろ^{グ・ジ}顧傑がパラサイトを持ったまま大亜連合へと逃亡することを望んでいた。

(母上は^{グ・ジ}顧傑にパラサイトの実験をさせたいのかねえ。日本じゃなく、大亜連合で)

それが紫音の予想した真夜の目的だ。

^{グ・ジ}顧傑については、パラサイトの実験が一定の成果を出してから捕獲。そして紫音の能力で知識を引きずり出す。そういう予定なのだろう。

甘い上に油断し過ぎているように思える。

パラサイトが手を付けられないほどの存在になった時、どうするかという問題もある。

しかし、そこは紫音を信用しているのだろう。

あの魔法を会得した紫音ならば、強力なサイキックを使うパラサイト兵士であつても問題なく殺せると考えているのだ。何より、紫音の『調律』はプシオン体である。パラサイトを完全に消滅させるだけのポテンシャルを秘めていると考えられている。

だから真夜は余裕なのだ。

「俺とリーナは……ああ、ここではリーナと呼ばせて貰うぞ。それで

俺とリーナはパラサイトを直接追跡する。これまで通りにしたい」

「ワタシも異論はないわ。ベンはどうなるの？」

「カノープスには亜夜子と共に行方不明者について探って欲しい。顧傑^{グ・ジ}やパラサイトは魔法的資質の持ち主を襲っている。その方面から探って、顧傑^{グ・ジ}の居場所を絞って欲しい。完璧に絞れなくても、そうやって顧傑^{グ・ジ}に圧迫を与えることが大切だ」

「なるほど、理解しました。確かに、その方針は有用でしょう。私たちが働くことで、シリウス少佐や四葉殿の支援となるのですね。私は日本について詳しいわけではありませんので、黒羽殿に頼ることになるでしょう。よろしくお願いします」

「ええ、こちらこそカノープス殿」

亜夜子とカノープスは軽く会釈する。

こう言った任務において、亜夜子はプロフェッショナルだ。黒羽の部下もそういう捜査に慣れているので、効果が期待できる。ここで紫音がカノープスに期待しているのは、戦力としての面だ。

パラサイト事件は七草家と十文字家、千葉家（警察）と吉田家が競うようにして調査している。それに対抗するため、亜夜子にはカノープスと行動して貰うのだ。仮に戦闘になれば、亜夜子たちは調査続行し、カノープスたちスターズ部隊が足止めする手筈となっている。

勿論、紫音とリーナの関係も同じだ。ただし、こちらはフォーマルハウトを含む元USNA軍人のパラサイト始末もあるので、臨機応変な対応をする。

「じゃあ、大まかなイメージ共有が出来たところで、具体的な話をしよう。まずは俺とリーナの動きだな。昼は学校に行くとして――」

秘密の会合は夜中まで続けられたのだった。



深夜、ひっそりとリーナの部屋を出た紫音と亜夜子は、黒塗りの車に乗り込んでいた。現在、公認戦略級魔法師である紫音には様々な監視がついている。それを全て誤魔化しての行動なので、こうして移動するだけでも疲れた。

車の中で座席に背を預け、一気に息を吐く。

「ふう……」

「大丈夫ですかお兄様？」

「いや、疲れたかな」

この車は黒羽家が手配したものであるため、紫音と亜夜子は普段の関係に戻れる。なお、昨晩の時点で再会しているため、改めて互いの近況を確認したりはしない。

昨日は本家に戻り、今朝は学校、そして夕方から深夜にかけて話し合い。

幾ら紫音でも疲れないはずがなかった。

「亜夜子こそ大変じゃないか？ 受験もあるだろ」

「問題ありませんわ。勿論、文弥も」

「それなら良いけど……ああ、聞きたいことがあるなら教えるぞ」

「本当ですか？ ではお願いします」

何処から取り出したのか、亜夜子は魔法に関する参考書を胸に抱え

る。その仕草は、どこか深雪を思い出させるものだった。

昔から亜夜子は深雪に憧れている節があるので、似ているのも仕方ない。『お兄様』呼びも深雪を真似してのことなのだから。

「それでここなのですが」

「ああ、それね。その参考書間違っているから気を付けろよ」

「ええっ!？」

いつもより近い距離で車の中の勉強会。

元から仲の良い二人なので、それはとても楽しい時間。あつという間に紫音の自宅へと到着する。

「ではお兄様。今日はよろしくお願いします」

「え？ 泊ってくるの？」

「そうですわ」

「聞いてないんだが」

「言っていないから」

「車の中で教えた意味……」

「あら、それも楽しかったですわ」

受験生の亜夜子は、既に学校へと行く必要がない。泊っていても問題ないだろう。紫音も亜夜子と過ごすのは久しぶりなので、そのまま二人で家に入っていくのだった。



東京都内にあるそれなりのアパート。ボロボロというわけでもなく、ごく一般的な2LDKの部屋だ。顧傑はその部屋に潜んでいた。あまり人の寄らない廃ビルなどは、逆に真つ先に調べられてしまう場所だ。木を隠すなら森と言うように、人を隠すなら都市となる。顧傑はパラサイトたちも都内のアパートに分散して潜ませていたのである。

だが、今日はフォーマルハウトを自身の部屋に呼んでいた。

「パラサイトたちの新たな器は馴染んでいるか？」

「まさか死体に憑依することが出来るとは思わなかったがな。私を除く十一の仲間たちは、既に肉体を得て復活している。活動も可能だ」「そうか。それは良かった」

顧傑はそう言いつつ口角を上げる。

しかし、フォーマルハウトは不満げだった。

「私たちが貴様に協力しているのは、私たちの目的があるからだ。貴様らがパラサイトと呼ぶ私たちは、どのように生きているのか、どうすれば仲間が増えるのか、そして私たちは何処から来たのか。それを知りたいと願っている」

「分かっているとも。だが、私たちも君たちと同様にパラサイトについて知っていることは少ない。だからこそ、実験が必要なのだ。魔法師を使った繁殖は、凡そ失敗だと判明した。新しいアプローチをかける必要があるだろう」

「ではどうするのだ？」

「まあ、待て。色々と早計に考えるのは損だぞ」

問い詰めるフォーマルハウトに対し、顧傑は冷静に返答する。パラサイトは超人的な存在であるが、知性的な面は未発達だ。知識は母体となった人間に依存し、理性は元の人間を基礎として時間とともに形成されていると顧傑は理解している。

「魔法師を襲うことは止めないつもりだ」

「どうということだ顧傑」

「分かりやすく説明しよう。つまり、身体の乗り換えだ。今、君の体を除く殆どのパラサイトは魔法的な因子の弱い者を母体としている。これは非常に勿体ない。だからこそ、より強い体を手に入れてから次のステップへと移りたい」

「ほう……」

それはフォーマルハウトにとって……いや、意識を共有している仲間たちにとって非常に魅力的な話だった。

パラサイトたちにとって、自分たちの強化も懸念している事項の一つだ。

より強い肉体が手に入るとすれば、悪い話ではない。

「具体的な話を聞こう」

その問いに対し、顧傑は怪しい笑みを浮かべつつ答えた。

「魔法科大学付属第一高校を襲撃する。そこには若く、才能ある魔法師が多い。特に四葉紫音は私の標的であり、仮にパラサイトの肉体として利用できるならば、大きな進歩となるだろう」

新たな危機が第一高校に迫っていた。

来訪者編 18

一月二一日。

今日は土曜日であり、魔法科高校は午前授業となる。午後からは部活動に励んだり、自習室で勉強したり、実習室で魔法の練習をしたりと、魔法師の卵たちは非常に勤勉だ。

ただ、授業が始まるまでの朝の時間は、やはり友人たちとお喋りする時間となる。これはいつの時代も変わらなかった。

「おはようございます達也さん」

「ああ、おはよう美月」

E組教室は賑わっているというほどではないが、各所に固まってお喋りに励んでいる。中には、幹比古のように机に突っ伏して眠っている生徒もいるが、そこは自由なので咎める者はいない。

美月はカバンを置いてから達也の机まで寄り、話しかける。

「達也さん。レオ君はまだ体調がすぐれないんでしょうか？」

「幹比古が前に言っていたんだが、時間が解決してくれるのを待つ他ないらしい。安静にしていれば回復できるそうさ。時間はかかるかもしれないが、大丈夫だと思うぞ」

「そうだといいんですけど……」

パラサイトによって生命力を奪われたレオは長期入院を強いられていた。以前に達也も見舞いに行ったところ、見た目には元気そうだった。しかし、幹比古いわく、かなり危険な状態だったららしい。

また、レオに最後の記憶を聞いたところ、吸血鬼に襲われて気を失ったところまでしか覚えていなかった。次に意識が戻った時は既に病院のベッドであり、誰に助けて貰ったのかも分からないという。

尤も、達也だけは四葉家が助けたことを知っていたが。

「レオの心配をするのもいいが、美月も気を付ける。例の吸血鬼は、魔法の素質がある人物を優先的に狙っているそうだからな」

「そうなんですか？ ニュースでは報道されていない情報ですよね？」

「あの報道は人間主義者の思惑が絡んでいる。吸血鬼事件も、魔法師が非魔法師に被害を与えたという印象で塗り潰したいんだよ。だから、魔法師またはその素質がある人物が狙われているなんて情報は表に出したくないというわけだ」

「そんな……」

美月は困惑した表情を浮かべる。

事実を捻じ曲げてまで魔法師を目の敵にしたいという意識が滲み出ていたからだ。性根が純粋な美月からすれば、理解できないことだろう。

そんなとき、雑に扉を開いてエリカが入ってきた。

疲れているのか、エリカらしからぬ重心のブレを伴いつつ机に向かう。達也や美月に挨拶することすらなく机に突っ伏した。その様子は、どこことなく幹比古に似ていた。

「……エリカも疲れているようだな」

「大丈夫でしょうか？」

「さあな。無理だけはしない様に後で言っておこう。最近は連日あの様子だ」

「そうですね」

美月がそう言ったところで、机のモニターに授業開始のメッセージ画面が立ち上がる。そこで会話を切り上げ、今日の課題に移り始めたのだった。



昼になり、本日の授業は終わった。B組の紫音は立ち上がり、早々にクラスを出た。理由は七草真由美と十文字克人に呼び出されていたからである。

かつて克人が部長をしていたクロスフィールド部の部室を借り、ちよつとした情報交換をすることになっている。ただし、これは真由美と克人が一方的に呼びつけたのであって、そうでなければ紫音がわざわざ情報交換をするはずなどない。四葉家は今、圧倒的なアドバンテージを持っているのだから。

(呼び出された理由はつと……まあ、USNAの動きが鎮火方向に向かっていることについてかな？ それとも別の案件かな？)

現在、パラサイトを追っている勢力は三つだ。

一つは四葉家とUSNA、もう一つは七草家と十文字家、そして最後は警察である。ただし、警察は千葉家と吉田家がバックについて捜査を行っている。いや、警察をバックに千葉家と吉田家が動いていると言った方が正確かもしれない。

この三つの中で、最も情報を持っているのは四葉家とUSNAだ。紫音のお蔭でパラサイトの性質は殆ど探れており、USNA軍との協力によってパラサイトに憑依された人物の情報も手に入れた。以前に周公瑾の記憶を奪った成果から、黒幕である顧傑グゼの情報すら持っている。

有利なのは当然だった。

(七草や十文字と情報を共有したところで、損をするのはこちらだ。協力することなどないって突っぱねるか、それとも渡して良い情報を手札に何かを引き出すか……)

考え事をしながら廊下を歩いていると、正面から数人の生徒を伴ったリーナが歩いてきた。リーナは紫音に気付くとギョツとした表情に変わるが、一瞬で元に戻してそのまま擦れ違った。

協力体制にあるとは言え、学校で無理に仲良くする必要はない。これまで通り、面識はあるがその程度という関係が続けていくまでだ。

(ま、USNAとの関係は禁則事項だな。調査されてバレるのはまだしも、こちらからバラす訳にはいかない)

それだけは心に留め、紫音は部活棟にあるクロスフィールド部の部屋の前に立つ。ノックすると、すぐに電子錠が開いた。入れということだろう。

紫音は扉をスライドさせて中に入る。既に克人と真由美は揃っており、ご丁寧にお茶まで用意されていた。

(ゆっくり話すつもりなのかね……)

お茶に注目しながらそんなことを考え、空いていた席に座る。すると、まずは克人が口を開いた。

「良く来たな四葉」

「先輩方こそ、受験勉強は宜しいのですか？」

「無論だ。十師族に恥じないよう、努力している」

間もなく魔法大学の受験ということもあり、三年生は勉強に余念がないはずだ。しかし、真由美も克人も余裕の表情を浮かべている。そ

の程度、問題ないということだろう。

その辺りは流石である。

「そうですか」

「無駄話はないだろう。本題に入らせて貰う」

克人はそう言って真由美に目で合図する。すると、真由美は手に持っていたデバイスを操作し、部屋にあるモニターへとデータを転送した。

映されたのは八王子を中心とした近辺の地図である。幾つかの場所は青く塗られており、他にも赤い点が三十近く記されていた。

その中で、赤い点の方は紫音も見覚えのあるものだった。

「赤い点は吸血鬼事件が発生した場所、ですね」

「その通りだ。そして青く塗り潰されている場所が、七草家と十文字家で常時カバーしている場所になる」

「残念ながら警察の動きまでは完全に把握していないわ。ある程度の予想ならマップに記せるけど、今は省いてあるの」

望むなら映すけど、と問いかける真由美に対し、紫音は首を横に振ることで答える。まずは、この地図を見せた意図を聞くことが先だからだ。

「それで……まさか四葉がカバーしている場所を言えつてことですか？」

「その通りだ。単刀直入に言えばな」

克人は各勢力がカバーしている場所を把握することで、パラサイトの居場所を炙り出せると考えたのだ。カバー範囲で見つかればそれで良いし、見つからなければカバーできていない場所に潜伏しているということになる。

いわゆるローラー作戦でパラサイトを追い詰めようというのだ。ただ、それをするには七草と十文字だけでは足りない。そこで、各勢力のカバーしている範囲を知ろうとしているのである。

「勿論、タダで教えろとは言わない。納得できる情報料を支払おう」

「それは金銭に留まらないと考えても？」

「無論だ」

そう言われて紫音は考える。

七草家と十文字家に何を望むべきか。そして、その望みと渡す情報は釣り合うのか。思考を巡らせ、また克人の思考を予想する。

(いや、今回ばかりは純粋な要請かな?)

克人は十文字家代表代理として、十師族がひとまとまりになることを望んでいる。四葉と七草の諍いにも思うところがあるのは雰囲気から察しているし、今回も対立するように吸血鬼事件を追っていることを苦々しく思っているのだろう。

(だからと言って、こちらも同情するつもりはないけど)

正直、四葉とUSNA軍でカバーしている分を言う必要はない。何かの対価を貰ったとしても、リスクの方が高くなる。スターズと協力関係にあるということが露呈すると、色々面倒だからだ。

それに、パラサイトが七草や十文字、警察及び千葉家や吉田家に渡ると拙い。USNAとの契約関係もあるため、特に元USNA兵のパラサイトは確実にこちらで捕える必要がある。

これは今現在のためではない。

直前に迫る未来のために、USNAの軍部とは親しい関係——正確には貸しを与えている関係——を作っておかなければならない。

故に答えは決まっていた。

「お断りします」

「ちよつと四葉君!？」

「待て七草……どうしてもか?」

慌てて立ち上がる真由美を克人は制する。

紫音が断ることは予想していたのか、意外と落ち着いている。

「今は十師族が争っている場合ではない。吸血鬼は日本の魔法師を脅かす敵だ。我ら十師族が一丸となり、対処すべき事案だと俺は思っている。これは十文字家代表代理としての意見だ。この意味が分かるな?」

「意味は分かりますよ」

「ならば俺が求めることも分かるはずだ」

「その上で言っています。断らせて頂くと」

紫音は譲歩するつもりすらない。

交渉にすらならないものに応じるつもりはない。そもそも、四葉の想定する勝利条件は、七草や十文字の想定している条件と異なる。

四葉は顧傑グ・ジを大亜連合に追い出すことが目的であり、パラサイトを始末することではない。そして顧傑グ・ジにパラサイトを研究させ、大亜連合で人体実験を行わせ、最終的な成果は四葉が頂く。そういった計画だ。

一方、七草、十文字、千葉、吉田の各家はパラサイト殲滅を目的としている。

相容れないのは当たり前だった。

紫音はそのまま立ち上がり、部屋の扉に向かって歩き出した。勿論、克人は止める。

「待て四葉!」

「交渉は決裂です。四葉は独自に吸血鬼に対処します」

それでも紫音は止まらず、扉に手をかける。
だが、ここで真由美が口を開いた。

「待つて四葉君。以前、貴方はこう言ったわよね? 『相手が国家であるならば、俺も十師族四葉家として動くべきではありませんか?』」
て。吸血鬼がUSNAから来ていることは私たちも既に知っているわ。仮に吸血鬼がUSNAからの攻撃だとすれば、私たちは協力するべきじゃないかしら?」

その言葉は、以前に七草の双子をパラサイトから守った翌日に言った。あの時は、流石にUSNAと協力体制を築くことになるとは思っておらず、そういった建前を言った記憶がある。しかし、状況が変わった今は、それを持ちだされると痛かった。

(いや、そうでもないか。USNAは同盟関係だし、パラサイトは国家がバックにある敵じゃない。嘘はついていないな嘘は)

段々と考え方がずるくなってきたな、と思いながら紫音は口を開く。振り返ることはなく、扉に手をかけたまま真由美の言葉を斬り払った。

「吸血鬼はUSNAを含め、どこかの国家が送り込んできた魔法兵器ではありません。あれはどちらかと言えば自然災害に近いですね。なので協力する義理はありません」

「ちよつと!?! それはどういうこと?」

そう、自然災害である。

USNAから手に入れたパラサイトの詳しい発生原因の情報から、パラサイトはテキサス州ダラスで行われた『余剰次元理論に基づくマ

イクロブラックホールの生成・消滅実験』がキーだと分かっている。少し苦しいが、自然災害と言っても過言ではない。

そして、自然災害に対し、同盟国であるUSNAと協力して対処していると言ひ張れば、四葉とスターズの関係がバレても言ひ訳は出来る。

勿論、繋がりには露呈しないことが最善だが。

「それと、吸血鬼の正式名称はパラサイト。古来の日本では妖魔なんて呼ばれてきた存在ですね。パラサイトに憑依された人物を殺しても、パラサイト本体は消滅しません。新しい肉体に憑依し、復活します。なので注意してください」

それだけ言つて、紫音は部屋から退出しかけた。

しかし、克人は強い視線を止めることなく、寧ろ山のような大きい気配を紫音に向けた。そして紫音が部屋から完全に出てしまう前に、口を開く。

「四葉紫音、俺は師族会議十文字家代表代理として決闘を申し込む」

紫音はピタリと足を止めた。

来訪者編 19

紫音はゆっくりと振り返り、克人を見つめる。一方で克人は本氣の目をしており、スツと立ち上がって紫音の前まで進んだ。

「受けて貰うぞ、この決闘を」

「応じなければならぬ理由はありませんが」

「魔法師の社会は力の社会だ。己を通したいならば己を示せ」

克人の言っていることは一理ある。

この魔法科高校では、揉め事があつた場合に決闘によって白黒つけることがある。決闘文化は非常に古典的ではあるが、その合理性から公式に認められていた。

ただし、決闘と言うからには物騒なものになることも間違いない。突然のことに驚き停止していた真由美が慌てて止めに入る。

「ちよつと十文字君！ 何もそこまで！」

「どうなんだ四葉？」

それでも克人は真由美を無視して紫音に問いかけた。

本氣ということだろう。

紫音は一拍置いてから答える。

「……以前に模擬戦をしたとき言ったはずです。これ以上は殺し合いになると。決闘ということは、以前程度では済みません。俺も『闇』を使わせて頂きますが、それでもやるのですか？」

「無論、承知している」

「今回のことに命を懸ける必要があると？」

「いや、今回だけではない。これからの十師族のあり方を見据え、この決闘が必要と考えたまでだ」

克人は、四葉家が十師族の中でも独特であることを承知している。特異な魔法戦力を保有し、数は少ないながらも戦闘用に調整された質の高い魔法師を揃えている。各所に網を張り巡らせ、何処からともなく情報を仕入れ、まるで隙をつくかのようなようにして暗躍を繰り返す。

同じ十師族としても油断ならないと思わせる存在なのだ。しかし、それではいけない。

あの横浜事変で一条、四葉、七草、十文字の勢力が協力して対処したように、あらゆる事態に十師族が一丸となつて対応する必要があると考えている。吸血鬼事件も、その一つであるべきなのだ。克人は思っているのだ。

普段はともかく、最低でも有事の際には協力する。

その伝統を積み重ねていくことが克人の目的である。

紫音も克人の考えは簡単に予想することが出来た。

しかし、だからと言って頷くわけではない。

「その決闘は無意味です。それこそ、身内で削り合つてどうするんですか?」

「これは身内の削り合いではない。そして、ここで消耗したとしても、四葉、七草、十文字が協力体制を築けるのだとすれば、プラスとなるだろう」

「もう勝つたつもりですか?」

「そのつもりだ。反論があるなら、試してみるといい」

自信たっぷりそう言い放つ克人。

これは挑発でしかない。紫音も分かっている。多少イライラしたところで、勝手に『調律』が発動して心を鎮めてくれるため、冷静なまま思考した。

(無視して帰ってもいい。だが、これはある意味チャンスか……?)

決闘を受けた場合、勝者には何かしらの恩恵がある。

克人が勝者となった時に四葉家がパラサイト事件に協力しなければならぬとすれば、紫音が勝者となった場合にも何かを求めることが出来る。そもそも、無視して帰ったところで、四葉は勝手に動くと言っているのです、止める者はない。

ここで重要なのは、決闘で紫音が何を求めるかだ。

「では、パラサイトを七草および十文字が捕獲した場合、全て四葉家に引き渡して貰います。決闘で俺が勝利すれば、この条件を呑んで貰いますが、構いませんか？」

「それは素直に領けない提案だな」

「四葉君、流石にそれはちよつと……」

克人だけでなく、真由美も渋い顔をする。

呑めないならば決闘は受けない、と言っても良いが、ここは尤もらしい正当な理由を言う方がいい。無理矢理よりも、納得しての条件である方が、後々の友好関係は保たれやすいからだ。

今は七草と十文字と協力するつもりはないが、敵対したい訳ではないのである。

紫音は建前としての理由を述べた。

「先程言いましたが、パラサイトは寄生された人物を殺害しても滅ぼすことは出来ません。精霊のように^{プシオン}霊子として存在しており、物理的な力に影響されないからです。古式の中でも、特殊な術が必要になるでしょう。ですが、俺はパラサイトを完全消滅させる魔法を開発しています。その魔法が完成すれば、パラサイトを確実に滅ぼすことが可能です」

「……そんなことが可能かどうか？」

「プシオンに直接干渉する魔法があるというの!？」

「はい。勿論、嘘ではありません。まだ未完成ですが」

理由は建前だが、パラサイトを完全消滅させる魔法を開発しているのは事実である。顧傑グンジャーにパラサイトを研究させるという計画を練っている以上、その研究成果が牙を剥く可能性も秘めている。その対策を講じるのは当然のことだった。

いざという時、パラサイトを完全に確実に倒す方法を確立しなければならぬ。

「故に、パラサイトを捕獲すれば四葉に引き渡していただきたい。俺ならば、確実に滅ぼせます」

パラサイトは古式に類する特殊な封印を使えば、辛うじて停止させることが出来る。しかし、完全消滅させるとするのは非常に困難だ。古来の陰陽師などが妖魔を祓うときも、そういった理由があったので、妖魔退治が困難だったのだ。

真由美は克人に近寄り、紫音に聞こえないよう小声で話しかける。

「どうするの十文字君。四葉君の言葉が正しいなら、私たちでパラサイトに対処するのは難しいわ。古式魔法師に協力を要請するにしても、ウチはそんなに伝手がない。九島家なら別かもしれないけどね」
「分かっている。だが、これは厄介だ」

そう言われると、この決闘に勝っても負けても四葉にパラサイトを引き渡すことになりかねない。パラサイトは普通の方法で滅すことが出来ず、それでいて紫音は可能だという。

ならば、結局は引き渡すしかない。

ただ、決闘の勝敗によって強制が付くかどうかの違いである。

「仮に捕らえたパラサイトを俺たちが保管し、問題となれば責任問題となる。滅することが可能だったのに、それを怠ったことになるからな。四葉家からすれば恰好の狙い目となるだろう」

「ウチは特に拙いわね。あの狸親父がパラサイトなんてネタを離すわ

けないわ」

「この問題は一度持ち帰るほかないだろう。弘一殿の説得には俺も応じる」

「頼むわ十文字君」

パラサイト消滅は紫音の魔法にかかっている。その情報を手に入れてしまったことが問題となった。克人はともかく、真由美はこの情報を当主の下まで持ち帰る必要がある。

決闘はすぐに出来そうではなかった。

そこで、克人は紫音に提案した。

「四葉、その情報は一度こちらで吟味させて貰う。明日は日曜日だから、決闘は明後日の月曜にするつもりだ。無論、提示された条件は呑もう。明日の内に四葉家がカバーしている場所の情報を纏めておくことだ」

「もう一度言いますが……勝ったつもりですか十文字先輩？」

「負けるつもりはない」

威風堂々という言葉がよく似合う。

高校三年生とは思えない態度だった。確かに、学生の身でありながら十文字家代表代理となるだけの器は持っている。

(けど、負けるつもりはない)

紫音はそのまま部室を後にしたのだった。



紫音が決闘を申し込まれた翌々日にあたる一月二三日。

その放課後、第一演習室に三つの影があった。

一人は紫音、相対するように立っているのが克人、そして二人から少し離れたところに立っているのが真由美である。

「第一演習室は念のために一時間抑えてあるわ。カメラの遮断も頼んであるし、人払いもしている。ただし、これは十師族同士による正式な決闘として扱われる。そのことは留意してね」

「分かりました」

「審判は頼むぞ七草」

「ええ」

紫音も克人も動きやすい服装に着替え、更にはプロテクターまでつけている。ここまで本気の装備をするのは、互いに実力を認め合っているからだだった。

更に、二人の実力を加味して、一番広い第一演習室を確保しているあたりも準備がいい。

(いつもより照明が暗いな。俺の『闇』対策か?)

波動感知に優れている紫音は、演習室が普段よりも暗いことに気付いていた。というより、演習室を利用したことのある生徒ならすぐに分かるほど今日は暗い。具体的には、普段の半分以下の光度しかないだろう。

大量の光がある場所で真価を發揮する『ダーク・ミューティア暗黒流星群』を意識しているのは明白だった。

「決闘のルールを確認するわ。致命傷となる攻撃は禁止。使用した時点で負けとします。勝利条件は相手に膝を着かせることよ。今は吸血鬼……いえ、パラサイト事件に対処しなければいけないし、必要以上ダメージを与えないようにして頂戴ね」

それを聞いた紫音は真由美にジト目を向ける。すると真由美はテヘツとでも言いたげな表情で返した。

どうやら、このルールはわざとのようなのだ。

（明らかに十文字先輩が有利となるルール……ここまで来ると露骨だな）

ともあれ、決闘と言う舞台上が上がってきたのは紫音だ。今時、決闘を汚すとか古いことを言う人物は殆どいないし、紫音も気にしない。利用できるものは最大限に利用し、相手を自分の有利な土俵に乗せることで確実な勝利を手にするのは当然の策だ。

この世は騙された方が悪いのである。

（膝を着いたら負けということとは、十文字家の『フアランクス』が確実に来る！）

四系統八種の魔法障壁を連続的に生み出すことで、最強の盾となる。同時に、その盾を連続的に座標移動させれば、あらゆるものを押し流し、押し潰す攻撃にもなる。

首都圏の最終防衛を担う十文字家の魔法、それこそが『フアランクス』だ。

今回のルールにおいて、膝を着けば負けとなる。

つまり、上から『フアランクス』で紫音に加重を掛ければ、膝を着かせることが出来るのだ。連続的に多種の障壁がやってくる以上、それに対処するためには同等の技術が必要となる。

克人が確実に勝利し、なおかつ紫音へのダメージを最小限にするためのルールというわけだ。

「二人とも、用意は良いわね？」

「はい」

「こちらもだ」

克人は腕に付けたCADをいつでも操作できるように構える。一方、フラッシュキャストのある紫音は、CADを手にすることなく右手を前に突き出して止まる。

一応持っている黒薙を使うことも考えたが、必要ないと判断した。『フアランクス』を破る用意は出来ている。

「二人とも怪我のないようにね……始め！」

その声と同時に克人はCADを操作する。扱っているのは汎用型であり、二ケタの番号と発動キーの三つを押すことで起動式を選択できる。

当然、選んだのは『フアランクス』だ。

克人が最も頻繁に使用し、キー操作にも全く無駄がない魔法である。

しかし、CADを操作するということは、僅かであっても無駄があるということ。普通の現代魔法師はCAD操作は必要な無駄と判断し、限界まで短縮できるように練習する。それが極めるということだった。

(なに……)

克人は魔法演算に伴う時間の遅延の中で、驚愕する。

何故なら、紫音はCADを使った克人よりも早く魔法を発動させたからだ。以前に模擬戦をしたことで、紫音がCAD無しに魔法を高速

発動できるのは知っていた。だが、それを加味しても早すぎる。

「はっ！」

「ぬう!？」

自己加速術式で克人の目の前まで移動した紫音は、加重魔法を加えた掌底を叩き込んだ。常人ならば内臓を掻き回されたような感覚を覚え、膝を着いて嘔吐する威力である。

だが、克人は耐えてみせた。プロテクターによる防御があつたとしても、流石の精神力である。

そして魔法演算を完了し、連続障壁を放つ。

(ダメか)

紫音は今の一撃で仕留められなかったことを悟り、すぐに引いた。お蔭で、『攻性フランクス』による攻撃を回避することに成功する。

(ちよつとズルしたつてのに……仕留めきれなかったな)

克人が驚愕するほど魔法を早く発動できたのには理由がある。

それは、試合が始まる前から魔法演算を開始していたからだ。CADを操作しなくても魔法を使えるフラッシュキャストの技術は、魔法発動を悟りにくいという利点も存在する。真由美が開始を告げるコンマ数秒前から魔法式を記憶領域から呼び出し、変数代入して魔法演算を実行していたのだ。

故に、決闘開始と同時に魔法を発動できたのである。

かなりの威力を込めた掌底だったはずだが、克人が倒れなかったのは誤算だった。まさに巖とも表現するべき克人は、その肉体能力も凄まじい。

「はあああああああ！」

『フアランクス』による障壁の攻撃が紫音を追う。四系統八種の魔法全てに対応した完全な障壁であり、突破することは非常に難しい。少なくとも、『音壊』は全く通用しないだろう。『暗黒流星群』^{ダークミューティア}については、紫音が干渉力で上回ることが出来れば通じる。

事象干渉力は深雪すら上回る紫音なら、破れると確信した。

(仕方ない)

紫音は自己加速術式で移動しつつ、右手を克人に伸ばした。

自身の持つ特異魔法『調律』によって光の移動方向を操る。本来はランダムに移動している光波を、一方向にだけ移動するように事象改変するのだ。例えば障害物があつたとしても、直進する光を止めることは出来ない。その方向にだけ移動するよう『調律』されているため、反射という光が本来持つ性質が働かなくなってしまう。

光圧によってあらゆる物質を吹き飛ばし、穴をあける紫音の固有魔法が発動した。

黒い閃光が合計五本伸び始め、克人の放つ攻撃型フアランクスを破る。絶対的直進という事象によって、克人の『フアランクス』の内、光を防御する放出系の障壁が事象相克によるエラーを引き起こしたのだ。

四本の『闇』は克人の両膝を狙い、もう一本はCADを狙う。

如何に頑丈な人間でも、膝を負傷すると立ち上がれなくなる。これは気合や鍛え方の問題ではなく、人体の構造上の問題だ。つまり、今回の決闘の勝利条件を確実に満たせる。

(勝ったな)

克人の両膝と左腕のCADに黒いレーザーが吸い込まれた。

来訪者編20

紫音の『闇』は九校戦での披露もあつて非常に有名だ。その威力と発動速度は申し分なく、四葉真夜の『流星群』ミィテイア・ラインに匹敵するとも言われている。

当然、克人はそれを警戒していた。

紫音が右手を伸ばしてきた時点で、それが発動されるのは明白。

スローになる意識の中、克人は昨日のことを思い出していた。

『なるほど。娘からあらまはは聞いていましたが、改めての報告に感謝しましょう』

『弘一さんにもこれを吞んでいただきたい。そのために今日は参りました』

克人は七草家を訪れ、当主である七草弘一と面会していた。案内してきた真由美は別室で待機しており、この部屋には二人しかない。

当然、話し合いの内容は紫音との決闘に関するものだった。

上手くいけば、四葉一族の協力を得ることが出来る。そう考えると、決闘の旨味は充分である。弘一もそれはよく理解していた。

『確かに克人君、勝つことが出来ればパラサイト事件は大きく進展するでしょうね。しかし、負けた時のことは考えていますか？』

『いえ、自分は勝利を収めるつもりですから』

揺るぎない瞳の克人を見て、弘一は克人の若さに苦笑する。その考えは甘いとは言わない。克人は魔法師としてだけでなく、十師族の中でも当主に相応しい実力者だ。絶対に勝つという自信もあれば、確かな実力もあるのだろう。

それは弘一も同意できる。

しかし、だからといってリスクマネジメントを怠るのは頂けない。

『当然、決闘という流れを作ったのだから、勝つのは当たり前です。しかし、それは負けた時のことを考えなくても良い理由にはならない。絶対に勝利できる保証はないのですから』

『確かにその通りですが、今回の場合は何も考える必要はないのでは？』

『ふむ。そう考える理由はなんですか？』

『パラサイトが寄生者を殺害しても完全消滅させることが出来ず、古式に類する特殊な魔法を必要とするならば、我々だけでは手に余る案件です。四葉が完全消滅させる技術を持っているなら、渡しても問題ないでしょう。ただし、我々の目の前で消滅させることを条件に』

それは正論だ。

パラサイトという脅威を排除しようとしてる克人の考え方としては正しい。

しかし、弘一は違った。

『克人君。私はね、パラサイトを利用できないかと思っているんですよ』

『利用……ですか』

『パラサイトとはロンドン規定に基づく定義であり、いわゆる妖魔と呼ばれる存在が主です。それは知っていますか？』

『四葉紫音に言われたので調べましたから』

『結構結構。そして改めて言いますが、パラサイトとは非常に興味深いとは思いませんか？ 人でないが、魔法のような何かを使う。まるで物語の中のような存在を研究しないというのは、十師族としてあり得ないと思いませんか？』

弘一が克人に誘惑の言葉を向けるのは、四葉に対抗してのことだった。紫音が吸血鬼の正体がパラサイトだと知っていたということとは、最低でも一体を捕獲して調べたという可能性が高い。そして七草の持っている情報網からしても、恐らくそれは事実だ。

しかも、四葉は一体どころか数体はパラサイトを捕えて調べていると思われる。

そうでなければ、寄生者を殺害しても新たな寄生者が生まれるなどと判明するはずもない。

四葉に先を越されている、という事実だけで弘一を動かすには充分な理由となった。

『何をするつもりですか？』

克人は重々しい口調で問いただす。

弘一が単純な興味だけでパラサイトを捕獲しようとしているはずがない。それは克人もよく分かっていた。だからこそ、その狙いを問う。

意外にも、弘一は克人の質問に素直な回答をした。

『九島先生に助けを頼もうと思っています』

『閣下に？』

『仮に決闘で敗北したとしても、紫音君の提示した条件に九島家は入りません。故に、九島先生を中心とした捜査体制を組み直してしまえば問題ないというわけです。勝利すれば、古式魔法の知識が豊富な九島家の力を借りることでパラサイトを封じることぐらいは出来るでしょう。四葉に引き渡す必要はないのですよ』

それはあまりにも無理矢理過ぎるのではないか、と克人は思う。

本来は守護地域でない九島家を巻き込むというのは、かなりの荒業である。確かに四葉が出張っている時点で、九島家の介入は文句を言えない。

弘一は更に続ける。

『また、七草、九島、十文字が協力体制を見せることで、四葉を孤立に追い込むことが出来ます。師族会議は民主性の高いものですから、孤

立は好ましくありません。今は四葉家にとって有利な状態が続くとしても、後々を考慮すれば痛手となっていくはずです』

四葉家は大きな魔法戦力と技術を有しており、更には戦略級魔法師まで抱えている。十師族から落ちることはまずないだろう。

だが、師族会議の中での力を削ぐことは出来る。

四葉家とその他、という状態を作り上げれば良いのだ。今回のパラサイト事件をそのきっかけに変えると弘一は言っているのである。

勿論、克人は苦言した。

『弘一さん、それは……』

『言いたいことは分かりますよ克人君。ただ、誤解しないで欲しいのは、私が四葉を貶めたい訳ではないということです。孤立していると分かれれば、四葉家も歩み寄ってくれるかもしれないでしょう?』

弘一の言葉に矛盾はない。

だから克人も口を閉じる。

『それに、明日の決闘で克人君が勝利すれば何も問題はありません。勝つと言ったのは君だったのでありませんか? そう、どんな手を使っても』

克人の頭に、その言葉が響いた。

……

……

……

……

迫る黒い閃光。

紫音が得意とする魔法『暗黒流星群』ダーク・ミーンティアは克人の両膝とCADを貫こうとした。しかし、それは触れる直前に弾かれて消えてしまう。

同時に、克人の全身からサイオンの奔流が流れ出た。

サイオン光の爆発が起こり、紫音の魔法が防がれたのが分かった。

(これは！)

紫音は驚愕と同時に、『闇』が防がれた理由を察知した。

ただの情報防壁と領域干渉、そして想子防壁。

この『想子ウォール』サイオンという魔法は、サイオンを固めることで壁を作る。それによって直接干渉する系統の魔法を弾いている。これに情報強化と領域干渉を組み合わせて、あらゆる魔法で干渉を防ぐのだ。

「それが噂の……十文字家の切り札ですか？」

「その通りだ。四葉、お前にこれが破れるか！」

自身の持つ魔法演算領域をポテンシャル以上に活性化させることで、一時的に実力を遥かに超える魔法力を手に入れることが出来る。その名も『オーバークロック』。

その代償として魔法師としての寿命が削られるのだ。

多用すれば、いずれは魔法力を失ってしまう。現当主である十文字じゅうもんじ和樹かずきも度重なる『オーバークロック』の使用によって魔法力を殆ど失い、故に克人が当主代理をしているのだ。

「行くぞ四葉！」

克人は対物障壁を纏い、移動魔法で自身を飛ばす。紫音を狙ったシヨルダータックルを仕掛けた。このまま吹き飛ばせば、確実に紫音

は跳ね飛ばされ、地面に転がるだろう。それは膝を着くことと同義だ。

更に、紫音を逃がさないつもりなのか、紫音の左右にも対物障壁を張って退路を断つ。

前後と上にしか避けられない今、紫音は防御と言う選択肢しかない。

そしてここで『闇』を使ったところで、慣性は殺せない。克人を貫いても、そのまま紫音は吹き飛ばされてしまうだろう。先に倒れるのは紫音ということになる。

克人は、己の肉体と魔法力を削ってでも勝利を狙いに来たのだ。

(腕の一本は貫うぞ！)

『闇』を発動したときの、右手を伸ばした状態で立っている紫音に動きはない。このままぶつかれば右手もしくは指は確実に折れるだろう。それでも、克人は止まるつもりがなかった。

元より骨折程度は覚悟の上。

治療魔法があれば早く治すことも可能なので、気にしても仕方ない。

暴走トラックのような勢いでタツクルする克人の肩と、紫音の右手が触れた。

その瞬間、紫音の口元が歪んだ。

——『グラム・デイバージョン術式強奪』

「っ!？」

克人は悪寒を感じるも、既に遅い。

恐ろしいGが克人の体を襲い、紫音とは反対側に吹き飛ばされた。その勢いは止まることがなく、演習室の壁にぶつかってようやく止まる。演習室全体を軽く揺らすほどの衝撃であり、克人はそのまま床に膝を着いてしまった。

防御フアランクスが解けていることで、直接衝撃を受けてしまったのである。

「ぐっ………」

遅れてやって来た痛みにも克人は表情を歪める。

正直、意味が分からなかった。『オーバークロック』を使用したことで、絶対の防御と全てを突破する干渉力を手に入れていた。あのまま紫音を弾き飛ばし、勝利するはずだった。

しかし、跳ね飛ばされたのは克人の方だった。

紫音は平坦な表情に戻り、真由美へと顔を向ける。

「七草先輩、俺の勝ちではありませんか？」

「そ、そうね。勝者、四葉紫音」

決闘のルールが膝を着かせることである以上、勝負はついた。こんなことになるとは想像もしていなかった真由美は、明らかに動揺して

いる。何が起こったのか、紫音に聞きたくて仕方なさそうな様子だった。

案の定、真由美はその質問を投げかける。

「ねえ、四葉君。今、何が起こったの？ 十文字君の攻撃で確実に跳ね飛ばされるはずだったのに、ベクトルの向きを変えたみたいに十文字君の方が飛ばされたわ。あれは干渉力で上回ったでは説明できないわよ」

克人の移動魔法を上書きし、更に防御として纏っている『フアランクス』すら無効化したのは明白だった。そうでなければ、克人が逆に吹き飛ばされた上に、壁に叩きつけられてダメージを負うなど有り得ない。

しかし、紫音はその問いに冷たく返す。

「答える義理はありませんよ」

「でも……」

「強いて言えば、俺が四葉紫音だからです」

やけに四葉の部分を強調した答えに、真由美は戸惑う。そんな返しをされても意味が分からなかったからだ。

しかし、克人はその意味が理解できた。

いや、出来てしまった。

「四葉……お前はまさか……」

四葉家の大元である第四研究所は『精神干渉魔法による魔法師の開発・強化』をテーマとしている。魔法師にとってもブラックボックスの魔法演算領域へと干渉することが、最も大きな目標だ。

魔法師の精神と魔法演算領域には密接な関係があるとされており、このアプローチにもある程度の成果が見られている。

つまり、精神干渉魔法を使えば、魔法師を強化することが理論上可能というわけだ。

『オーバークロック』という魔法演算領域をブーストさせる魔法を使う克人は、それがどういう意味を持つか理解できた。

魔法力を強化できるということは、逆に減衰させることも出来るということである。果てには、魔法力を失わせたり植え付けたりするとすら可能となる。

(精神干渉魔法で魔法演算領域に干渉し、他者の魔法力を一時的にでも操作できるとでも言うのか……)

恐ろしい思考が克人の頭に浮かんだ。

それが事実だとすれば、魔法師の根底を覆すことになる。

「決闘は終わりですよ。では、四葉の提示した条件は吞んでくださいね……七草先輩、十文字先輩」

「ええ、分かっているわ」

「提示された約束は守ろう」

ダメージが抜けきらない克人は、壁で身体を支えながら立ち上がる。まだ声が震えており、額からは汗が流れていた。

平静を保とうとしているが、隠し切れていない。

それでも瞳を鋭くし、プロテクターを外している紫音に問いかける。

「四葉、お前は何をしようとしている。その力で何を望んでいる？」

今日の決闘で、克人は完全に察した。横浜事変では大亜連合軍の魔法師が魔法を使えなくなったというのは有名な話であり、その理由も様々な方面から探られていた。

そして克人は、魔法力を失わせる力を目の当たりにした。

このことから、紫音は魔法演算領域に干渉する魔法を持っていることが明らか。今の国防の根幹を握っている魔法師の天敵となり得る。克人は、この質問を投げかけずにはいられなかった。

「それを聞いて何になりますか?」

「敗者である俺の問いに答えるのは癪かもしれないが、どうか答えて欲しい」

「……」

真剣な克人の声を聞き、紫音は防具を外す動作を止める。

そして目を上げ、しっかりと視線を合わせた。

紫音は一瞬だけ何かを考えるような雰囲気を出した後、言葉を口に
する。

「俺は四葉が生み出した史上最悪の魔法兵器の一つです。兵器の運用
方法は明らかだと思います」

それは国防のために働くのだと言っている風に解釈できる。

しかし、侵略のための力だと宣言しているようにも取れる。

さつさと演習室を出て行く紫音を、二人は止めることが出来なかつ
た。

来訪者編 21

決闘が終わった日の夜、テレビ電話で報告を受けた七草弘一は、執務室の椅子に背を預けながら考え事をしていた。

(まさか克人君が負けるとは……)

決闘ルールは弘一が勧めたものであり、正当に見せかけた理由で克人有利となるようにしてあった。実を言えば、七草家は四葉家が懇意にしている軍のコネクションに手を出そうとして、真夜から直接注意を受けている。その失敗を取り戻せる機会になると考えて狙っていたのだが、目論見は外された。

(やはり九島先生に相談するか)

元からその予定だったので、既にアポイントは取ってある。執務室に設置されたモニターの前に移動し、デバイスを操作して目的の番号へと電話をかけた。

数回のコールの後、画面が切り替わる。

映されたのは『世界最巧』とも呼ばれた九島烈の姿だった。すっかり見た目は老いてしまったが、大戦時代を生き抜いた鋭い気配は抜けていない。流石の弘一も、烈の前では緊張を隠せなかった。

「お久しぶりです先生」

まずは一礼しながら挨拶を述べる。

烈も頷きながら返した。

『うむ。久しぶりだな弘一。相談があると聞いているが』

「はい。先生は吸血鬼事件についてご存知でしょうか？」

『ああ、認知しているとも。どうやら手古摺っているようだな』

「申し訳ありません」

流石は老師とも呼ばれる人物だ。事件の大まかな内容も、解決の進度も把握しているらしい。未だに軍部と強い繋がりを持ち、謎の情報網すら抱えているという。魔法力も含め、現役と言つて差し支えない。

そんな烈に対し、弘一は早速とばかりに頼みごとをした。

「先生、こうして相談しましたのは吸血鬼事件について助力を願いたいからです」

『助力か……この老体に出来ることがあるのかな？』

「御冗談を。先生の影響力は知っているつもりです」

『はははは。それで、何を頼みたいのかな？ かつての弟子のよしみだ。無下にはすまい』

「感謝します。まずは――」

弘一は簡単な吸血鬼事件……いや、パラサイト事件の情報を伝えた。恐らくは烈も把握しているのだろうが、ここは様式美というやつである。念のために知識を共有しておくのは悪くない。

そしてパラサイトを追う勢力やUSNAの動きなど、全て述べたところで弘一は本題に入った。

「それで先生。どうか、パラサイト捕獲に九島家の力を貸していただけませんか？ 九島家の持つ古式魔法の知識、または古式魔法師との伝手が必要なのです」

『うむ。なるほど。しかし四葉は良いのかね？ 真夜の息子ということになっている、四葉紫音が色々と動いているのだろうか？』
「それについても少し報告があります」

真夜の息子ということになっている、という表現を使ったことから、烈は真夜と紫音の関係を知っているのだろう。軽く流した弘一も

同様だ。

それはともかく、弘一は今日の決闘に関係する話をする。四葉家の出してきた条件、決闘の勝敗、そして克人の容態についてが主な内容だ。

『はっはっは。九校戦で実力の一端を見せて貰ったが、四葉紫音は規格外だな。四葉の中でも飛び抜けていると言って差し支えない。深夜の子供たちも大概だが、あの少年もかなりのものだ』

「笑い事ではありませんよ先生。捕獲したパラサイトは全て四葉家に引き渡すことになります。ですが、そこで九島家が捕獲したということになれば、この約束には抵触しません」

『小賢しいことを考えるようになったな弘一』

「それでも、四葉家にこれ以上の戦力を与える訳には行きません。パラサイトは研究対象になり得るものだと確信しています。四葉に独占させるつもりはありません。あの家が十師族の中でも突出しかけていると心配していたのは、先生ではありませんか」

『……』

凶星であったこともあり、烈は暫く黙り込む。

そして、ジツと弘一の目を見つめた後、口を開いた。

『……九島も力を貸すよう真言まことにも言っておこう。本人が動くかは分からないがな。そこから先は君自身で交渉するといい』

「ありがとうございます」

真言まこととは九島家の現当主だ。つまり、本格的に九島も介入するとうことだろう。弘一も予定通りになったことで、密かに胸を撫で下ろした。この老人は弟子に対しても油断ならないところがある。それを知っているからである。

安堵した弘一は、ついでとばかりにもう一つの情報を提供した。

「それと先生。四葉紫音についてもう一つだけ報告しておきたいことがあります」

『ほう』

「彼は魔法師の魔法演算領域に干渉する魔法を使う可能性がありません」

それは烈を動揺させるのに十分な情報だった。

冷静になるまで一拍置いた後、烈は聞き返す。

『どういうことだね?』

「決闘した十文字克人君の言葉を信じるなら、精神干渉によって魔法演算領域を弄る技術を手に行っていると。かの『レテ・ミストレス』に匹敵する何かを隠し持っているようです」

『深夜の精神構造干渉……それと同等だということかね?』

「横浜事変で大亜連合の魔法師が魔法能力を一時的に失ったという報告がありました。それは四葉紫音の仕業である可能性が高いようです」

これは烈にとって何よりも重要な情報に思えた。

一線を引いた老体の望みを叶える、そんな存在のように思えた。

『そうか。貴重な情報を感謝するぞ』

「いえ、それには及びません。こちらこそ、貴重な時間を取って頂き感謝します」

『近い内に九島の動きも伝えよう。仮に力を貸すことになればな』

烈は最後にそう言って電話を切る。

弘一は、烈の言葉に違和感を感じたのだった。



決闘事件から一夜明けた一月二四日。

この日、紫音は真夜を通して魔法協会への呼び出しを受けていた。昨晩は黒羽の部隊とリーナたちUSNA軍でパラサイトを追っていたのだが成果はなく、夜遅くに就寝したと思えば早朝から真夜と電話である。何事かと思った。

ただ、呼び出されてしまったものは仕方ない。午前中の授業を休み、横浜へと向かった。

そして魔法協会横浜支部へと到着した紫音は、二人の人物とテレビ電話で会話することになった。その相手とは四葉真夜と九島烈の二人である。

「おはようございます母上、それに九島閣下」

『朝も挨拶したばかりなのだけど……まあいいわ。おはよう紫音さん』

『うむ。急に呼び出して済まないな。真夜も仲介役を買ってくれて感謝する』

『九島先生の頼みですから』

真夜もかつては烈に師事していたこともあり、その関係性は今も変わらない。烈は紫音との会話を望み、真夜はそれを仲介した。それゆえ、この会談が成り立ったのである。

今回のメインは紫音と烈だ。

真夜は傍観するつもりなのか、柔らかい笑みを浮かべたまま口を閉

じている。

そこで、まずは紫音が言葉を発した。

「それで閣下。本日はどのような要件でしょうか？」

『うむ。実は君に相談したいことがあるのだ』

「自分のような若輩に相談ですか？ 恐れながら、閣下の相談事に上手く応えられる気がしないのですが」

『いや、そんなことはない。君だからこそ、私の期待に応えられると信じている』

そう言われた時点で、紫音は予定通りだと内心で考えた。

近い内にアプローチがあるのは分かっていたが、これほどまで早いとは予想外である。烈にとって、このことはよほど大切なこと。

『あまり遠回しに言うのは止めよう。君は精神干渉魔法によって魔法演算領域へと手を加えることが出来る……そうだね？』

ストレートな質問に対し、紫音はチラリと真夜の方を見た。

それから、再び烈の方に向き直って口を開く。

「その通りです」

『やはりそうなのか。それは、魔法力そのものに疾患を抱える者を癒すことも可能ということかね？』

「やってみなければ分かりかねますが、理論上は可能でしょう。軽いものならば成功しておりますので」

『そうか……』

烈は何かを思い悩むようなそぶりを見せる。そして数秒ほど考え込んだ後、意を決したかのように再び話し始めた。

『私の孫に光宣という子がいてね。魔法科大学付属第二高校へと進学

予定なのだが、魔法力が強過ぎるといふ問題を抱えているせいで、非常に体調が不安定なのだ。九島の将来を担えるだけの才能を持っているだけに、とても残念に思っている。単刀直入に言うが、君の力で光宣を癒して欲しい』

やはり。

紫音はそう思った。

原作知識でも光宣は優秀でありながら、体調を崩しやすいとあつた。そして、体調を崩してしまう理由が、彼の力の大きさにある。光宣は膨大なサイオンを保有しているのだが、それが通常よりも活発に活動し、想子体サイオンと呼ばれる情報体を傷つけてしまっている。それが肉体へとフィードバックすることで、すぐに体が弱ってしまうのだ。しかし、サイオンが活発ということは、回復力も高いということである。

故に、命に関わったり、魔法力そのものが失われたりはしない。単純に体調を崩しやすいのだ。

つまり、光宣の魔法演算領域が活発なサイオンを制御できるレベルに至れば、魔法力を維持したまま元気になる。

もしくは、不規則に活発に動くサイオンを調整してやるのも手だ。

「魔法的な疾患は根本的治療が難しいですからね。消極的治療が殆どの現状では、光宣殿の疾患を完全に治すには自分の力が必要でしょう」

『うむ。頼めるかな？』

老師の頼みを断る理由はない。

しかし、様式美というものがある。紫音はまず、真夜に確認を取った。

「構いませんか母上？」

『ええ、やって差し上げなさい』

寸分の間もない返事を聞き、紫音は頷いて答える。こうして真夜も乗り気である以上、光宣の治療を躊躇う必要はない。

「では閣下。自分が九島の邸宅へと伺いましょうか？」

『ああ、是非とも頼もう。その代わりと言ってはアレだが、こちらも君に協力出来ることがあれば力を貸すつもりだ。無論、これは九島としてではなく、私個人としてになるがね』

「老師とも呼ばれる閣下の御助力が頂けるとは、感激の極みです。ご期待に応えられるよう微力を尽くしましょう」

『うむ。感謝するぞ。勿論、真夜にもな』

『ふふ。先生の頼みですから』

九島家としては難しいかもしれないが、九島烈個人との強固なパイプが出来上がった。これが紫音の求めていた一つの目的である。

わざわざ決闘に応じたのも、パラサイトの情報を与えたのも、敢えて自分の力を克人に仄めかしたのも、全てこれを見据えていたからだ。

克人が七草弘一と相談するのは目に見えていたし、パラサイトを消滅させるには古式に類する技術が必要になるという情報を与えれば、弘一の師であった烈を頼るのは簡単に予想できること。そして、弘一のことだから、紫音の特殊な力に関しても烈にだけは報告すると分かっていた。

そして、魔法演算領域に作用する精神魔法の存在を聞けば、烈は必ず紫音と接触する。

何故なら、烈は孫である光宣をこの上なく可愛がっているからだ。

今日の会談は、紫音が意図して作ったものである。

（後は光宣と接点を作っておかないと。あいつの実力は同年代において最高峰だから）

原作の知識によると、光宣の魔法力は最高クラス。そもそも、魔法力が強過ぎて自分自身が傷つくというレベルなのだ。完全治療して味方になれば、これほど心強い存在はない。

そして、疾患を治療したという恩によって、決して敵対しないように縛り付ける。

光宣の健康体への執着はそれほどのものだ。
確実に利用できる。

(パラサイトの方は亜夜子とスターズに任せるとして、俺は早急に九島家に行った方がいい。周公瑾を潰した時点で原作から外れつつある。早く地盤を固める方が先決だな)

亜夜子は優秀であるし、一日や二日ほど空けても問題ないだろう。スターズという大戦力もいるので、パラサイト捜索には困らないはずだ。

そこまで計算した紫音は、烈の方を向いて口を開く。

「では九島閣下。急ではありませんが、これから九島邸へと向かって宜しいでしょうか。善は急げと言いますし、問題が問題ですから手早く済ませた方がいいでしょう」

『しかし学校は良いのかね？ 光宣のことは心配だが、死に至るようなものではないのだ』

「これでも四葉の名を冠する身です。一日や二日ほど学校を休んだところで問題にはなりません。それに光宣殿こそ魔法科第二高校の受験を控えておられるのでしょうか?」

『……そうだな。では頼もう』

紫音の言葉に一理あると思ったのか、烈は申し出を受け入れる。

九島邸は奈良県の生駒にある。リニア列車を使えば、今から行っても夕方には向こうに到着していることだろう。ただし、一泊することになりそうだ。

『宿泊の用意をしておこう。そうだな、是非とも九島邸に泊って
てくれ。光宣も同年代の十師族と会えるなら、喜ぶかもしれない』
『そうね。折角の機会だから行つてらっしやい。光宣さんはとても優
秀だと聞いているわ。紫音さんとも話が合うかもしれないわね』
「では、ご厚意に甘えさせていただきます」

会談は紫音の望んだとおりに決着した。

これで九島家はともかく、烈は四葉……というより紫音の味方と
なってくれるだろう。七草と十文字を出し抜いた形となる。

この結果に、紫音は満足したのだった。

来訪者編 22

現代は交通網の発達によって国内の殆どの場所へと数時間以内に辿り着ける。烈との会談が終わった後、すぐに紫音は近畿方面へと移動した。

リニア列車による快適な旅の後、キャビネットと自動運転コンピューターを使って移動し、生駒山東山麓にある九島邸へと到着したのである。連絡が行き届いていたのか、既に入り口では使用人が待ち構えていた。

コンピューターから降りた紫音に頭を下げた挨拶をする。

「おまちしておりました四葉紫音様。ご案内します。荷物はこちらで預からせて頂きますが、よろしいでしょうか？」

「頼む」

その一言で使用人たちは動き出す。コンピューターに積み込まれた紫音の荷物は別の使用人に任せ、紫音は挨拶をした使用人の案内で九島邸へと通された。

迷路のような生垣の前庭を通り、本邸の中へと向かう。ただの邸宅と言うより、もはや砦だ。何を警戒しているのか紫音は予想した。

(伝統派の襲撃に備えてつてところか)

元々、丸を冠する一族は第九研究所を起源としている。そのテーマは、古式魔法と現代魔法の融合であり、多くの古式魔法師と古式魔法が研究された。故に九島家は古式の名家とも繋がりが深い。

しかし、これは逆に恨みを買うことにもなった。

主に、技術を奪われた古式の家系や、現代魔法を忌み嫌う家系からである。特に伝統派と呼ばれる古来からの魔法師家系は九島を目の敵にしていた。

とはいえ、ここの守りが堅いのは、実は伝統派を警戒しているからではなく、大阪を監視するための拠点だからだ。つまり、紫音の予想は外れである。

そうとは知らない紫音は、案内されるままに応接室へと通された。

「ここでお待ちください」

紫音は革張りのソファに腰を下ろし、暫く待つことにする。恐らく、これから九島烈と面会することになるだろう。

先程までテレビ電話で会話していた人物と面会するとすると、少し妙な気分だ。

そして十分ほど経つと、ようやく目的の人物がやって来た。

紫音はすぐに立ち上がり、頭を下げる。

「待たせたね」

「これは閣下。急に押し掛けることになってしまい、申し訳ありません」

「何、構わないとも。私の我儘を聞いてくれるというのだからね。まあ、座り給え」

「では」

紫音の正面に烈が座り、使用人が飲み物を用意する。九島邸が洋館なので紅茶をイメージしていたが、出されたのは緑茶だった。

しかし、それには目もくれず、本来の目的へと移る。

「さて、光宣の治療を早速やって貰いたい……と言いたいところだが、私個人として君とは一度話してみたかったのだ。少し時間を取らせてくださいかね」

「それは光栄です」

「君は四葉の戦略級魔法師でありながら魔法科高校の一生徒でもある。完全に軍に取り込むことは出来ないが、それだけのことをしなけ

ればならない立ち位置。真夜はとんでもない子を隠していたようだな」

公認戦略級魔法師というのは、核兵器にも匹敵する存在だ。ただ存在することが抑止力となり、出陣すれば緊張が走る。

それが国家に管理された軍人ではなく、ただの学生なのだから扱いに困るのだ。

緊急時には特別な軍籍が一時的に付与されるが、普段の紫音は一般人として扱われる。

「九島閣下。四葉家という名は、その存在が力です」

「そうだね」

「四葉という名の力、そして戦略級魔法師という名の力。その二つが世界に認められるということは、大きな抑止力となるでしょう」

「しかし、君はそうもいくまい。四葉として表に出てきてから、そして公認戦略級魔法師なつてからは、他国からのスパイに狙われる日々を過ごしたはずだがね」

「それも仕方ないでしょう。しかし、自分は振るわれるべき四葉家最強の剣。敵を薙ぎ払うことで安寧を得る。我が四葉家は、捕獲したスパイから多くの情報を手に入れ、国家にも提供しています」

「大した手際だと私も感心しているとも。しかし、君は良いのかね。兵器としての在り方を認めるといふのかね？」

回りくどい会話を続けていたが、烈が本当に聞きたかったのはそれだった。孫である光宣と年代が近い紫音が、今の魔法師のあり方をどう思っているのか。そして戦略級魔法師である自分自身をどのよう
に思っているのか。

それが聞きたかった。

紫音は目を逸らすことなく、烈に向かって答えを言う。

「自分は兵器としての在り方を受け入れています。そもそも、魔法師

が兵器でない国は、これからの競争を勝ち抜くことは出来ないでしょう。勿論、魔法師≡兵器という式は自分も認めるつもりはありませんが。しかし、兵器である魔法師も必要であることは確かです」

「……君はその兵器である魔法師になるというのかね？」

「そうです。自分が兵器であることで、兵器でいる必要のない魔法師が生まれる。そう思っています」

烈は一瞬だけ苦悩の表情を浮かべた。

だが、すぐに何かに気付いたのか、弱々しい声で問いかける。

「兵器である必要のない魔法師……それは司波達也君のことを言っているのかね？」

「……そうです」

「彼の頭脳は恐れ入る。それは九校戦で見せて貰ったよ。だが、同時に彼は……あの『暗黒と灼熱のハロウィン』の片側を担った存在だろう？」

「流石は閣下。ご存知でしたか」

「老体にも老体なりの情報網があるのだよ。だが、彼は戦略級に匹敵する魔法師だ。兵器としての宿命は逃れられない。君一人で担えるというのかね？」

「可能です」

間髪を入れない答えに、烈は目を見開いた。

目の前の少年は、一体何を目指しているのだろうか。そう思わせる意思を感じた。

「九島閣下……いえ、老師とも呼ばれる貴方にだからこそ言います。自分は四葉という名を背負い、絶対的な力を以て世界に君臨して見せます。既に、その計画は始まっているといつてよいでしょう。その時、閣下は自分のあり方を認めてください」

「……」

それは烈が作り出した、十師族という考え方に反するものだった。かつて、烈は十師族と言うシステムによって均衡を作り出し、日本全体を監視して守るシステムを作り出した。

十師族は互いに対等であり、互いの監視もしている。

しかし、紫音は四葉を十師族の中で飛び抜けた存在に変え、更に紫音自身は四葉の象徴として世界に名を轟かせると言っている。それは独裁的だが、強い効果を持っているだろう。

烈にも考え方は理解できた。

ただし、賛同できるかと言えばそうではない。

「紫音君。君の考え通りになったとして、君が生きている内は上手くいくだろう。だが、死んでしまったらどうするとかね。それとも、四葉は君に代わる新しい存在を自在に生み出せるというのかね？」

それは第四研究所の研究が完成しているのか、という問いだった。

紫音のように精神へと干渉し、魔法力を底上げする技術。または魔法力を付与する技術。それが完成しているのだとすれば、魔法師を生産することができてしまう。

烈はそれを恐れた。

だが、紫音の答えは意外なモノだった。

「次の時代は、次世代を担う人物が考えればよいのではありませんか？」

「何？」

「今は閣下の御子息や弟子にあたる方々が日本の魔法師社会を担っておられます。そして、次に担うのは自分たちの世代です。そして自分たちが死ねば、新たな世代が追い越してゆくでしょう」

「……」

「これは四葉紫音が次世代の魔法師のあり方を、個人の考え方で出し

た答えです。続く世代には、その世代の答えがあるでしょう。それではいけませんか？」

かなり極端な考え方であり、烈としては受け入れがたい。だが、一理あるのは確かだった。

「……私は対立しながらも互助する存在として十師族を作り出した。それ故、師族会議には様々なルールが存在しているのだ。その一つに、師族会議を通すことなく十師族が共謀・協調してはならないとある。緊急時は除くがね。しかし、そのルールが崩れつつあるのは確かなのだよ」

「十師族にある種の派閥が出来つつあるのは確かでしょう。今は表面化していませんが、いずれはハッキリしたものになると思います」

「私もそう危惧している。だからこそ、現役を引いた今も十師族に手を出して管理しているのだ」

「管理ですか。既に親元を離れた、立派な大人にですか？」

紫音は日本魔法師社会の長老が漏らした本音だと感じた。故にそう問いかけた。

烈は自身が理想とした十師族システム、そして魔法師のあり方……それらを憂い、外野から手出ししていると口にした。また、大戦中の魔法師だった烈と異なり、今の魔法師は薄氷の上の平和に生きている。この平和を崩さない魔法師のあり方が模索される世代なのだ。

その一つが、兵器でない魔法師である。

烈はかつて、兵器としての魔法師の模範を十師族に求めた。しかし、今では兵器でない魔法師のあり方も十師族に求めるべきだと考えられている。

紫音と達也。

この二人が、その両翼を担うのではないかと烈は幻視した。

「……次世代である君たちは、私の手から離れて生きていけるのか。」

私はそれを心配していた」

「心配性なのですな」

「そうかもしれない。だが、老いて覇気を失ったのかもしれない。若い時なら、軽く突き放すように育てる気概もあっただろう。私はそれを忘れていたようだ」

烈は目を閉じ、思案するようにして口を閉ざす。

そしてしばらくしてから目を開き、再び口を開いた。

「君のあり方を認めよう紫音君。しかし、認めるだけだ」

「感謝します」

一段落したところで、紫音は別の話題へと移る。

勿論、パラサイトの件だ。

「ところで、閣下は東京から横浜にかけて被害が広がっている吸血鬼事件をご存知ですか？」

「うむ。認識している」

「では、吸血鬼の正体についても？」

「聞き及んでいる」

それは恐らく弘一からだろうと紫音は予想した。

考えていた通りに事態が進んでいることに、紫音は安堵した。

「では閣下。吸血鬼……パラサイトの黒幕については御存じですか？」

「手引きした者がいることは分かっている。だが、何者なのかは私も知らぬことだ」

「四葉はパラサイトではなく、その黒幕を追うため動いています。この事件は、ただパラサイトを取り除くだけで解決するものではありません。そして黒幕は四葉家と因縁のある相手。だからこそ、我らが始

末をつけないければなりません」

「だから七草や十文字が余計なことをしないよう、私の方から動けないのかね？」

「そのような偉そうなことを言うつもりはありません。しかし、こちらの足を引つ張らない様にして頂きたいのは確かです。例えば、パラサイトを捕えるために、こちらの作戦に横槍を入れるとか」
「なるほど」

丁度、弘一から要請されていたことである。烈は釘を刺された形となった。

「良いだろう。七草家と十文字家に手を貸さないことを誓おう。だが動くなどは言えない。パラサイトによって日本社会が乱されているのだからね」

「承知しました」

「ところで紫音君。四葉家と因縁のある黒幕とはどのような存在かね？ 少し興味がある」

「顧傑グ・ジーという大漢ダイハンの生き残りの魔法師です。崑崙こんろん法院の魔法師だったといえれば分かりますか？」

それを聞いて烈の表情が僅かに動いた。

崑崙法院はかつて真夜を誘拐し、辱めた。そして四葉一族に滅ぼされたのだ。その生き残りの魔法師と聞かされれば、烈も察することは出来る。

「それは真夜の願いなのかな？」

「その通りです。必ず顧傑グ・ジーを貶め、始末せよとのご命令です」
「ならば私も止めるまい」

真夜の受けた傷は烈も理解している。

約三十年越しの復讐とも言えるだろう。

烈は個人として、四葉の動向を認めることに決めた。

「ありがとうございます」

「構わぬ。それよりも、本来の目的である光宣のことだ。そろそろ本題に移っても良からうよ」

烈はそう言つて、呼び鈴を鳴らした。

すると、応接間の扉が開き、使用人が一人入ってくる。

「これから光宣の所に向かう。光宣は今どこだね？」

「お部屋にてお休みになっておられます。目は覚ましておられたので、訪れても問題ないかと」

「そうか。これから彼を連れて行く。先に行つて光宣に伝えてくれたまえ」

「かしこまりました」

一礼した使用人が出て行くと同時に、烈は立ちあがった。それに倣つて紫音も席を立つ。

「まずは光宣に会わせよう」

二人は応接間から出て、光宣の部屋へと向かった。

来訪者編 23

「光宣の部屋はここだ」

烈に案内されたのは洋風の扉が付いた部屋だった。扉の手前には使用人と思われる女性が立っている。烈の姿を確認した彼女は一礼して口を開いた。

「光宣様は中でお待ちになっておられます」

「そうか。では通してくれ」

「はい」

使用人は扉をノックし、烈がやって来た旨を伝える。そして扉を開いた。烈は紫音を引き連れ、光宣の部屋に入る。中にはベッドで横になる美少年の姿があった。

紫音は波長を読み取り、心音や脳波、精神波長から光宣の体調を精査した。

（うわー……これは体調が悪くなるはずだ。サイオンが収まりきつてない）

あまり正確な表現とは言えなかったが、そう言い表すしかない状態だった。光宣が体調を崩しやすい理由は、活性化し過ぎているサイオンが原因である。それがサイオンを保持する仮想的な器を傷つけ、肉体へとフィードバックされて体調を崩すのだ。

魔法も普通に使えるし、元気な時は元気である。

だが、こうして寝込むときは寝込んでしまう。

光宣は祖父である烈が入ってくるのを見て、ベッドから起き上がるうとした。

「お爺様」

「そのままですよ」

「ありがとうございます。それで……そちらの方は？」

光宣は紫音の方を見る。

そして少しだけ考えた後、思い出したかのように驚きを表した。

「まさか戦略級魔法師……『エクリプス日蝕』の四葉紫音さん!？」

流石に知っていたらしい。

四葉家の中でも特に有名なのは四葉真夜と紫音だ。そして数か月前に戦略級魔法師として公式に発表された紫音は注目されて当然。光宣もよく知っていた。

烈は光宣に対して頷き、紫音を紹介する。

「うむ。知っておるようだが、彼が四葉紫音だ。彼には理由があつて来て貰ったのだ」

「理由……ですか？」

「光宣。お前の体のことだ。彼はお前を健康な体に出来る可能性を秘めている」

「っ！ 本当ですかお爺様！」

光宣は興奮してベッドから飛び起きそうになったが、すぐに咳をして苦しそうになる。烈は慌てて光宣を寝かせた。

「落ち着きなさい。詳しくは彼が話してくれるだろう」

列は紫音へと視線を向ける。

紫音も頷いて一歩前に進み、光宣に挨拶した。

「初めまして四葉紫音といます」

「こんな格好ですみません。九島光宣といいます。あの、僕の体を治してくれるということなのですが」

「ええ。特殊な精神干渉系の魔法を持っているので、それを応用して治療します。それにあたり、光宣君は自分の体がどのような状態か把握していますか?」

光宣は少しの間だけ思案顔を浮かべ、答えた。

「はい、少しは。どうやら僕は常人よりもサイオンの動きが強過ぎる。それに対して、サイオンを保持するサイオン体の強度が間に合っていないとも」

「その通りです。なので、暴れまわっているサイオンを鎮めます」

「っ! そんなことが? 精神干渉魔法にはそんなことも出来るのですか?」

「いえ、これは特殊な魔法だからこそ出来ると思ってください」

紫音は烈の方を向き、改めて問いかけた。

「では、本当に治療をしても宜しいですか?」

「うむ……私は君に頼みたい。光宣、彼に賭けてみないか?」

「お爺様。僕はその可能性があるなら、治療を望みます」

「そうか。では頼むぞ」

魔法による精神干渉は危険を伴う。何故なら、精神の構造というものが解明されておらず、精神干渉魔法も一部を除けば個人の資質に依存するものだからだ。

そんな賭けにも等しい紫音に治療を託すというのは此か危険だ。今の光宣と烈はそれだけ追い詰められているということだろう。尤も、紫音はそれを利用した訳なのだが。

「では、少しだけ静かに願います」

紫音は右手を光宣に伸ばし、自身の特異魔法『調律』を使う。

治療方法は光宣のサイオン体を強化する、あるいは暴れるサイオンを鎮めるのどちらかだ。紫音は系統外精神干渉魔法『調律』と収束・振動系魔法『調律』の二種類を使うことによつて暴れるサイオンを捕らえた。

サイオンとは紫音からすれば操れる波動である。

アンテナイナイトによるサイオンジャミングですら、紫音にとっては邪魔にならない。

(まあ、少し魔法力が低下するかもしれないが……誤差のようなものか)

精神構造を操り、暴れるサイオンすら制御できるように出来ないかとも思ったが、そちらは実験色が強くなるので諦めた。今回ばかりは失敗できないからである。

それに、精神構造干渉は四葉深夜の魔法であり、紫音は例の実験でその性質をわずかに受け継いだのみ。完全に扱えるわけではない。

『調律』が持つ本来の力を上手に利用するためには、サイオンを調整してやるのが最も効率的だ。

(これは厄介だけど……ま、俺にかかれば難しい話じゃない)

この手の実験は、光宣の治療を見据えて済ませてある。丁度良くバラサイト実験体もいたので、既に会得済みなのだ。

治療は一分と経たずに終わった。

「終わりました。どうですか光宣君」

「……」

光宣は暫く自分の体を探るように目を閉じる。

彼は特殊な力によって、自身の体がどうなっているか見えていた。

「凄い。治っています……」

ベッドから起き上がり、立ち上がった。烈は驚いて光宣を支えようとするが、光宣はふらつく様子もなくしつかりとした足取りで紫音の前まで歩く。

そして頭を下げた。

「ありがとうございます！ 本当に……！」

「光宣、本当に治ったのか？」

「はい、お爺様。この通りです」

優秀な魔法師である光宣は、自分のサイオンが完全に制御下へと収められたことを理解していた。

紫音が行ったのはサイオン波長の調整。光宣の魔法演算領域に合わせて、その稼働率を『調律』した。これでもう光宣のサイオン体が内側から破壊されるようなことはないだろう。

（これで九島家の最大戦力はこちらの味方だな。流石に現当主は無理だろうけど……まあ、光宣と九島閣下を味方に数えられるのは大きい）

深雪やリーナにも匹敵する魔法力を持った光宣、そして日本の魔法師界だけでなく軍にも特殊なコネクションを持つ烈。この二人は紫音にとって有効な手札となり得る。

最低でも敵にならないだけで十分な収穫である。

「さて光宣。無事に治ったとは言え、病み上がりなのだ。今日は休みなさい」

「ですがお爺様。紫音さんにも碌にお礼が……」

「彼とは今晚にでも良く話すといい。十師族の次代を担う者の中でも、非常に優れた魔法師だ。ためになる話も色々聞けるはずだ。ああ、前後が逆になってしまったが、彼は今晚、屋敷に泊っていく予定だ。明日の朝にでも東京まで送ろう。午前の授業は公欠扱いにして貰えるよう、私から第一高校に口添えしておく」

半強制的だったが、紫音にとっても悪い話ではない。

元から宿泊するという話だったので、悩む様子もなく提案を受けることを決めた。

「ではご厚意に甘えたいと思います」

「君には世話になった。それに有意義な話も聞いた。今日は歓迎しよう。屋敷の者には伝えておく」

「感謝します」

「そうだ。夕食の時にでもゆっくりと話をしよう。光宣も同席すると良い」

「今は魔法演算領域とサイオン波長を調整したばかりですし、無理はしない方がいいでしょう。ですが夕食の時間になれば回復していると思います」

「……だ、そうだ」

「分かりましたお爺様。夕食の時まで体を休めます」

動きたくて堪らないと言った様子だったが、烈の言葉を聞いて素直に諦めた。

非常に残念そうな表情を浮かべる光宣を不憫に思ったのか、烈も妥協した。

「そう気を落とすな光宣。どうせ紫音殿の部屋を用意するために時間もかかる。その間、少しだけ話をしていい。紫音殿も構わないかね?」

「ええ、そうさせて頂きます」

烈はそう言うと、部屋を出て行った。

使用人が扉の前で控えているようだが、部屋は紫音と光宣の二人きりである。

「さてと、改めて話をと言われると、何を話せばいいのか悩んでしましますが……」

「そうですね。僕も戦略級魔法師の方が前にいると緊張してしまいます。ただ、まずは敬語を止めて頂けませんか？ どうも紫音さんに丁寧な口調をされると調子が狂ってしまいます。僕の方が年下ですし、そのように接してください」

「そう……かな？ ではそうしようか」

「ええ、僕もその方がしっくりきます。同じ十師族としてだけでなく、友人のように——」

そこまで言いかけて光宣は慌てて言葉を止める。

「——すみません。急に変なことを」

「いや、変ではないさ。俺も四葉家次期当主候補という立場がある。なにより悪名高い四葉だ。友人関係というのは憧れるよ」

確かに光宣との関係は利を求めた結果であるが、紫音に友人がいないことも事実である。密かに気にしていたので、紫音にとっても良い機会だった。

「こんなことをわざわざ言うのもおかしな話だけど……これからは友人ということで」

「ふふ。そうですね。よろしくお願いします紫音さん」

「光宣は敬語のままなのかな？」

「あはは。それは許してください。紫音さんは僕にとっての大人人ですから」

無理強いする必要もないだろうと紫音も納得し、これには触れないことを決める。

「光宣は第二高校に進学だったか。病弱と聞いているけど、受験は大丈夫なのか？」

「ええ、なんとか……。これでも勉強は出来る方だと自負しています。体調さえ良ければ、実技にも自信ありますよ」

光宣は恥ずかしそうに述べているが、これは凄いいことである。魔法とは才能の世界であると同時に、必要な努力も並ではない。限られた中で魔法の腕を磨き、深雪にも並ぶ魔法力を手にしている。

恐ろしき才覚の持ち主なのだ。

「勉強はベッドの上でもできますから」

「興味のあることでもあるのか？」

「ええ、精神干渉系魔法について少し興味があります。魔法分野の中では体系化の進んでいない魔法ですし、知れば知るほど気になってしまつて。精神とは一体何か、精神に干渉するとは何か、そもそも精神干渉系魔法に情報体の改変は起こっているのか、そうだとすればその仕組みは……すみません。一人で語ってしまつて」

「精神干渉系魔法は使用者が少ない希少な魔法だ。それに使える魔法も固有なものになりやすい。例えば俺の一族なら、四葉深夜様が精神干渉系魔法師として有名だった」

「ええ、存じています。精神を作り変えるとも言われた精神構造干渉ですね。お爺様に聞いたことがあります。生きてれば僕の治療も出来た可能性がある」と

精神構造干渉の力があれば、光宣の治療も不可能でなかっただろう。事実として深夜は達也にその魔法を施し、『分解』と『再成』以外の魔法演算領域を植え付けたのだ。光宣の精神体を強化し、暴れるサ

イオンに耐えられる状態へと作り替えることが出来たはずだ。

かつての実験により、紫音にも深夜の精神構造干渉が残滓として残っている。紫音は他人の精神構造を波動パターンとして認識し、その波動を調整することで構造に干渉する。本物の精神構造干渉と比較すれば大したことのない力だが、『調律』は同じ構造を瞬間的に大量に作り出すことを得意としている。

『リベリオン』がその一例だ。

「精神干渉魔法を調べていたのは自分の治療のためか？」

「はい。出来るだけ文献を調べて、自分なりに考察を続けてきました。最近読んだ文献はこの端末に入っています。目を通してみますか？」

光宣はタブレット端末を操作して紫音に見せる。ダウンロードされているのは精神干渉魔法に関する論文ばかりだった。これを理解するには中学生の知識で足りるはずもない。勉強をしているというのは本当なのだろう。

紫音も精神干渉魔法を使うので、幾つか目を通したことがある論文もある。故に、難解な文献であることはよく知っていた。

「これを全部理解したのか？」

「いえ、恥ずかしい限りですが、分からない部分がある。例えばこれです」「……これは確かに分かりにくい。多分、実際に精神干渉系の魔法を使える人でないと理解しにくい感覚的な部分だから」

「そうなのですか？ でしたら……出来れば紫音さんにご教授願えればと思います」

「ああ、構わない」

その後、夕食に呼ばれるまで二人で論文について議論を続けた。

来訪者編 24

翌日、一月二五日。

紫音は九島邸へと訪れていたが、本来今日は平日。魔法科高校も通常授業となっている。達也も深雪も普段通りに登校していた。

デバイスに表示される課題をこなし、実習では魔法の練習をする。何も変わらない日常だった。

(紫音は今頃、リニアでこっちに向かっているだろうな)

昼休みとなり、達也はいつものメンバーと昼食の時間を過ごしていた。いつものメンバーとは、勿論のこと深雪、ほのかである。ちなみにエリカや幹比古、美月といったEクラスのメンバーは別だ。

寒くなり、人氣が少ない屋上での昼食は三人きりであった。こうして屋上を快適に過ごせるのは、深雪が寒気を遮断する魔法を使っているお陰である。

(九島家に行くと言っていたが……何事もなく帰ってこれたのか?)

達也は九校戦で九島烈の姿を見ている。その老獪さと卓越した魔法技術はしかと見届け感じ取った。紫音は優秀であり、四葉家で随一の精神干渉魔法を扱う。裏の仕事も多く任されていることから、最も当主に近いとまで噂——四葉家の使用人の話である——まである。

九島家に行った本当の理由までは達也も知らないが、何か大きな意味があつてのことだ。

(パラサイトの件も進展していると良いんだが)

幹比古や九重八雲といった古式魔法の使い手から情報を手にいれ、達也もパラサイトについては多少の知識を持っている。今回の吸血

鬼事件は友人であるレオも襲われたのだ。事件そのものは紫音に任せているが、情報収集は怠っていない。

深雪に害が及ぶ可能性を僅かでも残す達也ではないのだ。

「お兄様？　どうかされたのですか？」

「いや、何でもないよ」

考え事をしていたのがバレたのだろう。深雪からすれば、敬愛する達也と過ごせる至福の時なのだ。出来ることならば、自分を見て欲しい。もつと自分のことを考えて欲しい。そのように考えるのは当然のことである。

さり気なく達也との距離を縮め、深雪は体を密着させるほどになった。

「あ……」

そして負けじとほのかも達也に密着する。

両手に花、という言葉が何よりも的確だろう。達也は少しばかり困った表情を浮かべたが。

そんなとき、深雪が不意に身じろぎした。

「深雪、どうした？」

達也にはそれが不快感から来るものであると悟った。ほのかも達也から離れ、心配そうに深雪を見つめる。不快感から、思わず寒気を遮断する魔法まで消えてしまった。

そして深雪はもう一度ブルリと体を震わせ、それから口を開いた。

「申し訳ありません、お兄様」

慌てた様子で深雪はCADを操作し、再び魔法を発動する。寒気は

消えたが、深雪の顔色は悪いままだ。

「それよりもどうしたんだ？」

「……酷く不快なものが肌を掠めた気がして。気のせいだと思うのですが」

達也はそのような悪寒を感じなかった。

しかし、魔法師にとってそのような感覚は決して気のせいだと言いきれない。特に精神干渉の魔法を操る深雪は、悪意のような感情にも敏感だ。

「不快な何か……それはサイオンか？ それともプシオンか？」

「お兄様が感じ取れないのでしたらプシオンではないかと思えます」

まだよく分からない、と言った様子だ。しかし、達也も少し納得する。

確かに達也ならばサイオンの波動を逃すはずもない。そしてこの魔法科高校は国家的重要施設であり、魔法的な防御が敷地に組み込まれている。深雪が感じ取った波動は、なにかしらの魔法的な影響を対抗術式が感知して漏れ出たものだろう。

そのように予測した。

そしてプシオンに関係するとなれば、ただの敵国魔法師テロリストではない。世間を騒がせている吸血鬼である可能性が高かった。

達也が視野を広げようとした時、デバイスのコール音が鳴り響く。画面を見ると七草真由美であった。

『大変よ達也君！』

電話に出た達也の耳に、そんな大声が入ってくる。思わずデバイスを耳から離してしまった。だが、真由美の慌て方は尋常ではなく、軽いパニックになっているのではないかと思ってしまう。

しかし、達也もそれで状況は察した。
間違いなく侵入者だろう。

「七草先輩、それで位置は？」

『侵入者が——って分かっているならいいわ！ 感知できたのは十人よ。二方面から侵入しているみたい。達也君には数が少ない実験棟方面に行ってくれるかしら』

「了解です。細かい位置は随時教えてください。先輩がマルチスコップで感知していますよね？」

『ええ、任せて！ もう一方は十文字君が向かっているわ』

達也はデバイスを繋げたまま、耳から離す。

「そういうわけだ。深雪」

「はい、お兄様」

達也はベルトに仕込んだ飛行デバイスを使い、屋上から飛び降りる。深雪もすぐに飛行デバイスを使って達也を追いかけた。

残念ながら、空を飛べないほのかは一人、屋上に残された。



侵入者を知覚した者は他にもいた。

それは古式魔法の使い手である幹比古である。自然と、一緒にいたエリカや美月もついてくることになった。残念ながら、この三人は校内でCADの携帯を許されていない。故に預けたCADを返却して貰う必要があった。

「規定時間ではありませんので……」

「だーかーらー！ 侵入者だって言っているでしょー！」

職員とエリカが言い争い、幹比古と美月はエリカを抑える。

春の事件では明らかな侵入者がいたので即時返却をされたのだが、今回はまだ職員にまで侵入者の情報が伝わっていない。故に返却許可が下りなかった。

しかし、そこへ助け船が現れる。

「吉田に千葉か？ よく分かったな」

感心したような声を出しつつ近づいてきたのは十文字克人。

そして揉めている職員の前まで歩き、少し威圧的な態度で告げた。

「緊急時につき、返却を願います」

「し、しかし」

「緊急事態です。このままでは取り返しのつかないことになるでしょう。その二人……吉田と千葉は自分の補佐です。返却を」

克人は体格が良い。

そして家柄も良い。

折れてしまった職員を責めることは出来ないだろう。

「少々お待ちください」

彼の背中には哀愁が漂っている気がした。



リーナはA組のクラスメイトと共に昼食を取っていた。

四葉家とパラサイト捕獲に関する契約を結んで以降、殆どの夜に外を捜索している。しかし一向に見つからず、疲れだけが溜まっていた。

昼食も五分あれば食べきれんだろう。

残る昼休みは休憩に使いたところだった。

(っ！これは！)

不意に感じ取った波動。

それは間違えるはずもないパラサイトの波動である。幾度となくパラサイトと交戦したリーナは、それを知覚することが出来た。

思わず立ち上がりそうになったが、何とか踏みとどまる。

どうやら、一緒に食べていたクラスメイトは座り直した程度にしか思わなかったらしい。

丁度そこへ、メールも送られてきた。

(送り主は……ベン！)

チラリとメールを見たリーナは立ちあがる。

ベン……すなわちベンジャミン・カノープスから送られてきたメールがただのメールであるとは考えにくいからである。基本は機密であるため、席を離れることにしたのだ。

「ごめんなさい。ちよつと用事を思い出しましたので先に失礼しますね」

丁寧な断りを入れて、リーナはその場から去って行った。
そして人気のないところでメールをチェックする。

（パラサイトが!? 何でこんな場所に……いえ、これはチャンスよ!）

リーナが向かう先は実験棟。

達也と深雪が向かっている場所だった。



そして第一高校の外部からパラサイトを観察する者たちもいた。

「敷地内に逃げられてしまいましたわね」

「これは厄介ですね。どうしますかアヤコ嬢」

「まずは様子を窺いましょう。パラサイトの数は十二体。シリウス少佐にはメールで知らせましたわね?」

「ええ」

「では任せましょう。隙あらば……で問題ないと思いますわ」

読めない笑顔を浮かべた亜夜子は動かない。

彼女の役目は当主である四葉真夜の命令に従い、USNAと協力することだ。ちなみに、紫音が捕らえたパラサイトのお蔭で既に研究は終わっている。あとはUSNAに全力で貸しを作ることが目的だ。

フォーマルハウトを含む元USNA軍人を始末することがスターズの最優先任務なのである。

一方でカノープスも裏では別のことを探っている。それは四葉家が所有していると思われる。魔法師を無力化する技術についてだ。横浜事変では大亜連合の魔法師が次々と魔法の力を失い、大打撃を受けた。その力を四葉が保有しているとUSNAは予測している。

カノープスとリーナはその調査も任されている。

(まさかパラサイトが昼間に動き出すとは……)

これまで、パラサイトの活動時間は夜だった。

また、吸血鬼という固定観念から夜しか動けないという勘違いもあった。それゆえ、初動が遅れてしまったという面がある。

陽も真上に昇った昼間から一斉に動き出すなど、予想できない。

更には狙いが魔法科高校というのも理解不能だ。

まさかパラサイトの素体をより良いものとするために狙ったなどと、思いつくはずもない。特にUSNAはまだパラサイトについて詳しい生体を理解していないのだから。

(紫音お兄様に連絡しなければなりませんわね。それにしても、まさかお兄様がいらっしやらないときを狙ってくるなんて……偶然？それとも……)

亜夜子は紫音にメールを送った。



実験棟付近に侵入しているパラサイトの元へと向かった達也と深雪は、真由美からの補佐もあつて無事にパラサイトを見つけることが出来た。

……というのは建前で、達也が『眼』を使って見つけたのである。

「深雪」

「はい。目視ではつきりと」

密かに移動しているパラサイトが四体。

偽装の術式を展開しているのか、注意しなければ見つけにくい。しかし、達也と深雪の目を欺くのは不可能だったようだ。一応は隠れながら移動しているらしいが、バレバレである。

(まずは一体)

専用CADトライデントを構えた達也は、容赦なく引き金を引く。セットされていた『分解』が局所的に発動し、パラサイトの一体を穿つ。足の付け根を巧妙に狙われていたせいか、パラサイトは崩れ落ちた。

強靱な体を持つパラサイトも、今は人の器に収まっている。どうしても人体という物理的構造からは逃れられない。

「っ！」

呻きを上げて倒れた仲間を見たからか、他の三体にも動揺が走る。流石に空から襲ってくるとは思わなかったらしい。まだ飛行デバイスは珍しいものだ。故に、魔法師が空を飛ぶという概念がない。不意打ちが出来たのはそのお蔭だった。

(流石はお兄様！)

深雪が心の中で称賛している間に、他の三体も仕留めてしまう。いずれも人体の関節部を狙った分解攻撃であり、パラサイトの動きは止まった。

達也が唯一と言って良いほど扱えるのがこの『分解』である。もう一つの特異魔法『再成』を含め、達也はパラサイトの数体に後れを取らないほど強い。

深雪は自分の出番がなかったことを嘆くより、兄の凄まじさを直接見ることが出来たことに喜びを感じていた。

「深雪、両足を凍結させることはできるか？」

「はい。お兄様」

達也は『眼』で見て、この四体がパラサイトであることを確認している。そして四葉の実験からパラサイトの再生能力についても認知しているのだ。

殺害しても、パラサイト本体のプシオン体は自由となってしまう。そこで、人の器に留めたまま、拘束しようと考えたのである。

深雪はCADを操作し、見事な腕前で減衰振動の魔法を使う。そして同時に四人の足を凍らせてしまった。これで物理的に動けない。

「よくやった深雪」

すり寄る深雪を撫でながら、達也は鋭い視線を周囲に向ける。

まだ達也の戦闘モードは解除されていない。そして達也の気配察知能力が、アイデアを見る『眼』がもう一人の存在を捉えた。

「……そこにいるのは分かっているぞ。リーナ」

「リーナ……?」

実験棟の壁の陰で気配が揺れた。

そして諦めたのか、隠れて見ていたリーナが姿を現す。

「よく分かったわねタツヤ」

「こちらに視線を向け過ぎだ。すぐに分かったぞ」

「べ、別に隠れていたわけじゃないわ。侵入者に気が付いて来てみたけど、タツヤとミユキがあっという間に処理してしまったのよ」

「出る幕がなくて、どうするか迷っていたというわけか」

「ちよっ……う、煩いわよタツヤ!」

どちらにせよ、今のリーナはCADを学校に預けている。

なのでまともな魔法を扱うのは難しかっただろう。ある意味、出る幕がなくて良かった。

来訪者編 25

(フレディはいないわね)

リーナは倒れた四人のパラサイトの顔を観察して判断する。パラサイトの中にはUSNAの魔法師も含まれているのだが、四人の内の一人がそれだった。

リーナとしてはできればその一人でも始末したい。

しかし、流石に達也とミユキの前でそんなことはできない。とても歯痒い思いだった。

一方で達也は真由美へと連絡を取る。

「こちら司波達也です。七草先輩、侵入者の四名を無力化しました」

『っ！ 早いわね。今は十文字君も交戦を……って無力化!?!』

「はい」

達也は冷静に答えたが、真由美の口調にはどこか慌てた様子があった。

それもそのはずである。

『流石ね達也君に深雪さん……と言いたいところだけど、アンジェリーナ・クドウ・シールズさんがいるのはどうしてかしら?』

マルチスコープでリーナのこともキツチリ見えていた。

そして真由美は交換留学生であるリーナに侵入者の撃退をさせるわけにはいかない。第一高校の元生徒会長であると同時に、日本を代表する魔法師一族の者なのだ。リーナが仮に負傷すれば、それは日本魔法師界の恥となることぐらい理解している。

本来、リーナはここにはいけないのだ。

「それにつきましては、自分も答えかねます。本人に聞いてはいかがですか？」

とはいえ、達也に責任はない。

リーナが勝手に来ただけなのだから。それも、カノープスからの情報によって。ゆえにリーナは正直に答えることが出来ないのである。しかし、案外早く真由美が折れた。

『……まあいいわ。達也君と深雪さんは十文字君の所に行つてちょうだい。今は通用門の近くで交戦しているわ。吉田君に千葉さんがサポートしてくれているけど、相手は八体。それに一人だけ強力な魔法師が混ざっているわ。多分、発火能力ね』

僅かに聞こえたその言葉に反応したのはリーナだ。

発火能力のパラサイトと言えば、それはアルフレッド・フォーマルハウトに他ならない。

『十文字君の障壁魔法でなんとか拮抗を保っているけど、深雪さんの領域干渉なら発火も抑えられるはず。頼むわ』
「了解です。ところでリーナはどうしますか？」
『シールズさんは戻つて貰います。流星に一人で戻れるでしょう。それに、CADも持っていませんのでしょう？』

真由美は暗に言っているのだ。

リーナでは役に立たないし、戦わせる訳にはいかない。それに真由美とてリーナについて何も知らないわけではないのだ。急に交換留学生としてやってきたのだから、真由美だつて多少は調べた。

そしてUSNA軍とリーナが関係している可能性についても認知している。

「ワ、ワタシは……」

「リーナ」

達也は手を翳してリーナの言葉を止める。

「今は帰った方がいい」

「分かったわ」

表向きは学生ということになっている。無茶なことは出来ない。これがアンジー・シリウスとしての活動ならば多少の無茶も可能だ。周囲が揉み消してくれるからである。

しかし、慣れない潜入任務は彼女に向いていなかった。

仕方なく、教室に帰ることにする。

『達也君、深雪さん。お願いね』

「はい。行こうか深雪」

「お供します」

そうして達也と深雪は駆けて行く。

リーナは唇を噛みつつ教室に戻った。そして片手でデバイスを操作し、メールを送る。

『ごめんなさい。何もできそうにない』

その相手は当然、カノープスだ。

返信はすぐに返ってきた。

『了解』



メールを送信したカノープスは亜夜子へと状況を報告した。

「シリウスは動きを制限されました。予想通りです」

「わかりましたわ。ではフォーマルハウト元中尉を処理するため手配をしましょう」

「処理はお任せします。ですが……」

「ええ、理解していますわ」

亜夜子の浮かべた不敵な笑みは、逆にカノープスを安心させる。触れてはならない存在であると恐れられる四葉一族も、味方となればこれほど頼もしいのか。カノープスはそう考えていた。

(油断できないことには変わりはないが……組織力と実力は本物。やはり侮れない)

四葉の魔法師とは接触したことがある。そのため、実力的にはUSNA精鋭であるスターズとも並ぶのではないかと確信していた。いわゆる戦闘魔法師として訓練されている四葉の魔法師は、軍人と比べても遜色のない戦闘力と任務遂行能力を持っている。

特に四葉家の血統にある者は、スターズの恒星級魔法師に匹敵していると推測していた。

カノープスの目的は、逃亡したパラサイト化USNA軍人の処理に加え、四葉家の力を探ることもある。味方だからと、ただ安心していいわけではない。

「では展開している我が隊の魔法師には撤退を命令します」
「ええ。後は四葉にお任せください」

第一高校へと侵入したパラサイトは、既に学生たちが処理を始めている。ここでUSNA魔法師部隊が乗り込むのは無謀もいいところだろう。下手をすれば三つ巴の争いとなり、パラサイトを逃がす結果にもなりかねない。

つまり、必要なのは学生たちが捕らえたパラサイトたちを、どのように横取りするか算段。

日本においてコネを持つ四葉家が動く方が確実である。

隙について実力行使するにも、権力を使って掠めとるにも、スターズだけでは担いきれない。

「撤退後、スターズは再展開。パラサイトが逃走後、追跡を開始します」
「お願いしますわ」

亜夜子とカノープスは手筈通り、それぞれで動き出した。



達也がパラサイト四体を無力化したと同時刻、十文字克人はパラサ

イト八体と交戦開始していた。克人と共に吉田幹比古、千葉エリカも参戦している。

そして同行していた美月は魔法技能と共に戦闘能力が劣っているため、端で見ているだけとなっている。意外と気の強い美月は、勢いで着いて来てしまったのだが、出来ることが少なく、足手まといとなっている。

(せめて……)

眼鏡を外した美月は、僅かに目を細めた。

霊子光放射過敏症である彼女は、フシオン霊子の輝きに敏感だ。そしてパラサイトはフシオンと関係していることが判明している。精神生命体であるパラサイトとフシオンの関係性。このことから、精神とフシオンは何かの繋がりと予想できる。

しかし、今はその議論をしている暇はない。

「エリカ！」

「わかってる、わ、よー！」

呪符、あるいは式とも言われる古式魔法の儀式道具を手にした幹比古は雷を呼び出す。『雷童子』という雷撃の魔法だ。古式魔法は情報体を使役するというプロセスを踏むことで、魔法を生物のように振る舞わせることが出来る。

そして幹比古の呼び出した雷撃は、不思議な軌道を描いて二体のパラサイトを同時に射抜いた。

エリカは警棒のようなCADでパラサイト一体の左肩を貫いた。そのまま追撃することなく、エリカは引き下がる。パラサイトによってレオは精気を奪い取られ入院することになった。エリカもそれを警戒し、一度引き下がったのである。

「七草、増援は見込めるか」

『少し待って。もうすぐ達也君と深雪さんが到着するはずよ』

克人は障壁魔法を組み合わせ、パラサイトと一対一を繰り返す。『フアランクス』という十文字家のお家芸を存分に利用し、受け身の戦いを演じていた。

流星に人を越えた魔法師を八体も同時に相手取るのは難しい。

何より、発火能力を持つパラサイト……フォーマルハウトが厄介だった。

(む……)

フォーマルハウトが発火念力パイロキネシスによつて克人を燃やそうとする。

そもそも炎とは発光する高エネルギー電子であり、発火とは人体を構成する元素に含まれている電子を強制排出する魔法である。原子を結合する電子を奪い去る魔法であるため、直撃を受けると全身の細胞が崩れていくことになる。

克人はこれを放出系魔法を組み込んだ障壁によつて防いだ。

四系統八種の魔法を障壁として幾重にも重ね、連続して発動する十文字家の『フアランクス』は完璧な防御力を持っている。首都防衛における最終兵器を担う十文字は伊達ではない。

「むっ……はあああああー！」

気合と共に放たれた攻性フアランクスがパラサイトを纏めて吹き飛ばす。そして克人が右腕を振り下ろすと同時に、障壁魔法が上から叩き付けられる。

パラサイト二体が地面に沈んだ。

異能を操るパラサイトも人間の姿をしている。物理的に動きを封じられた場合、その力を充分に使うことは出来ない。

地面へめり込むと同時に人体が破損したのだ。

「エリカ！ 精神干渉魔法を緩和する結界を張ったよ！」
「でかしたわよミキ！」

最も厄介なパラサイトの攻撃は精神干渉である。かつては妖魔を討つ一族でもあった、古式魔法師の幹比古はそれを知っていた。そして、精神干渉に対する防御も心得ている。

「柴田さん。これでいいかい？」

「はい。エリカちゃんに触れることが出来ず、戸惑っているみたいで
す」

「ありがとう。何度も言うけど、その結界からは動かないでくれ」
「はい」

幹比古が結界を行使したのは、美月からアドバイスを受けたからでもある。パラサイトから触手のようなものが見えたという。それがエリカに触れようとしていたのだ。

通常の魔法師には観測できない触手となれば、それはプシオンを利用した精神干渉魔法だろう。

幹比古はそう予測し、見事な結界を構築したのである。
パラサイトの間で動揺が見えた気がした。

「ふっー！」

短く息を吐きながら、エリカは打ち込む。自己加速術式を併用しつつ、硬化の魔法で強化した一撃を叩き込むのが千葉家の剣術だ。

魔法を使うことが前提となった、戦いのための技術。

それが現代の『剣術』である。

見た目はただの警棒でも、エリカが振るえば刀となるのだ。パラサイトは胸を切り裂かれた。

そしてエリカは再び下がる。

「ねえ。ミキ！」

「なんだよ」

「あれ、見た？」

エリカが指差したのは、今切ったパラサイトの胸部である。先程まで傷口から血が流れ出ていたにもかかわらず、今は止まっていた。徐々に傷はふさがり、眺めている内に完治してしまう。

「まさか治癒魔法？ あんなことが——」

あんなことが出来るのは達也君だけだと思っていたのに。

エリカはその言葉を飲み込んだ。

「気を付けてエリカ！」

傷が治ったパラサイトは耳が痛くなるような音を放出した。エリカは片耳を抑えつつも構えは崩さない。しかし、視界が歪んだ。

音によつて三半規管を揺らすと同時に、認識障害を与える魔法である。

すぐに克人がフランクスを発動しようするが、それをフォーマルハウトが邪魔した。克人を囲むパラサイトはフォーマルハウトを含めて五体であり、幹比古とエリカを助ける余裕はない。

一体は狂いそうな音を発しており、残るもう二体がエリカと幹比古を襲う。

（ギリギリ、間に合う！）

精霊を喚起した幹比古によつて、パラサイトの一体が抑え込まれた。拘束するという概念的情報を与えられた魔法が発動した。

幹比古が取り出したのは縄である。神社では結界として用いられる、しめ縄だ。これが蛇のように這つて襲つてきたパラサイトを捕縛

する。

しめ縄は神聖な場所を隔離する意味でも利用されるが、妖魔のような悪霊を封印するためにも利用される。これを応用し、縄でパラサイトを縛り上げたのだ。

(よし)

幹比古がエリカの方を見ると、顰めた顔をしつつ防御していた。剣技によって攻撃を逸らし、力の強いパラサイトの魔手から逃れる。

しかし、これでエリカを攻撃したパラサイトはターゲットを変えられない。

美月へと襲いかかった。

「っ！ 美月！」

「しまった！」

エリカは防御体制による重心の関係で体を動かせない。幹比古はパラサイト一体を封じたばかりで、次の魔法は間に合わない。

美月に貼られた結界は霊子光りょうしこうから守るためのものに加え、精神干渉から守るためのものだけだ。物理的な攻撃は防げない。

二科生である美月は魔法が得意ではないし、戦闘行為も苦手としている。

本人による反撃は期待できない。

(僕としたことが！)

都合よく自分たちだけを狙ってくれるというのは甘い考えだった。美月を戦闘に参加させず、パラサイトの観察に留まらせていたことが裏目に出てしまった。

美月を知らないパラサイトは、初めこそ警戒して美月を襲うことはなかった。

しかし、隙だらけで見た目のまま初心者だと理解したパラサイトは、まず美月を潰すことに決めた。自分たちを見透かすような、その眼が気に入らなかつたのだらう。

美月は目を閉じて、恐怖から逃れようとした。だが、いつまで経っても衝撃は訪れなかつた。

「が……」

呻き声をあげてパラサイトは倒れる。

幹比古とエリカは、高速で飛来する何かが次々とパラサイトを貫いていくように見えた。

「うちの生徒に手を出さないでくれるかしら？」

現れたのは七草真由美。

そして発動した魔法はドライアイスを高速で飛ばす『ドライ・ミーンティア』。美月を襲おうとしたパラサイトは肉体における死を迎えた。

マルチスコープで観察に徹していた真由美も、遂に出てきたのだ。同時に、克人が相手をしていた六体のパラサイトが一瞬で氷漬けになる。

「どうやら間に合つたようですねお兄様」

「そのようだ」

飛行魔法で現れたのは深雪、そして達也。

フォーマルハウトを含むパラサイトを凍らせたのは深雪の魔法だった。

来訪者編 26

達也、深雪も合流し、数の上で劣るといふ不利も解消された。

八体いたパラサイトの内、六体は凍結、一体は捕縛、一体は死亡という形になっている。達也、深雪、克人、真由美、エリカ、幹比古、美月は一人もかけていない。戦果としては最高である。

「七草。助かった」

「ええ。間に合って良かったわ」

真由美は本当に安堵しているようだった。

襲われかけた美月も胸を撫で下ろしている。

だが、達也と深雪は警戒していた。

「七草先輩、十文字先輩。パラサイトは器となった人間が死亡した場合、精神体となって人に襲いかかります。注意してください」

「っ！ そうだったわね」

真由美は急いで斃ってしまったパラサイトへと目を向ける。だが、普通の魔法師にプシオンは観測できない。人によつては感じ取ることの出来るものだが、ハッキリと知覚できないのが普通だ。

悍ましい何かが存在していることは気付けても、その位置も姿も分からない。

達也が眼で確認しても、情報の海を漂う何かが存在しているということしか理解できなかった。

「不味いな」

パラサイトの性質は紫音のレポートを読んで知っている。死体となったパラサイトは、精神生命体となって次の寄生者を探す。つまり、この場にいる誰かが次の寄生者として狙われるのだ。

達也にはパラサイトを封印する手段もなければ、滅ぼす手段もない。
い。

何より、その居場所を探し当てることすらできない。

「司波、お前は精神体となったパラサイトを捕獲する手段に心当たりはないか？」

「位置を把握することが出来れば、幹比古にその手段を期待できましょう。しかし、魔法発動において重要な座標を把握することが出来ません」

「つまり、この場にいるであろうパラサイトの位置が分かれば良いのだな」

「十文字君。何か手があるの？」

「いや、ないな。七草はどうだ？」

「私もないわね。マルチスコープは視野を広げるだけの能力だから……」

CADに起動式として保存された魔法は、それが魔法師の中にある魔法演算領域へと送り込まれることで魔法式となり、情報の次元へと投射され、物理的な世界へと具現化される。しかし、そのためには魔法師が魔法を発動する座標を認識して演算へと組み込まなければならない。

この演算は無意識によって実行されるものであり、数値的な座標値が必要なわけではない。しかし、魔法師がその座標を観測できなければならぬのだ。

端的に言えば、パラサイトの位置を正確に観測できない幹比古は、パラサイトに有効な対妖魔術式を保有していても、発動して当てることが出来ない。

しかし、この中でそれを観測できる稀有な才能の持ち主がいた。

「吉田君。結界を解いてください！」

そう言ったのは美月だった。

パラサイトの居場所を見ることさえできれば。その言葉を聞いた美月が、自分ならば正確に観測できると考えたのである。

そして観測のためには、霊子光を抑えるため張られている結界が邪魔となる。

故に結界の解除を求めたのだ。

「だめだよ。妖気を抑える結界の中においても苦しそうにしていたじゃないか。それに今はパラサイトも肉体に封印された状態から解放されている。直視すれば、失明の危険もあるんだよ」

「私も魔法師としてこの場に来た以上、覚悟しています。今、役に立たなければ、私がこの場にいる意味はありません」

それは極論かもしれないが、この言葉に幹比古の心は揺れた。

魔法は魔法師にとって道具であるが、時には魔法師が魔法の道具となる場合がある。戦略級魔法師などがその例だ。必要なのは戦略級魔法であつて、魔法師はその発動媒体でしかない。つまり、魔法師が全身不全であつても、戦略級魔法が使えるなら国に保護される。世界を揺るがす魔法を発動させる媒体として。

今の美月は、まるで自身の眼こそが最も価値あるものであるような言い方だった。

自分自身は霊子光放射過敏症という魔法的特異体質の付属物である、と。

しかし、幹比古に美月の覚悟を阻むことはできなかつた。

「分かったよ。危ないと思ったら、すぐにこれで目を覆ってくれ」

妥協案のように差し出したのは、折り畳んだ布である。受け取った美月は、「広げてみて」という幹比古の言葉に従い、それを広げてみる。

「神道の宝具を元にして作られた吉田家の魔法道具だよ。結界と同じ

役割があるんだ。首にかけて使って欲しい」

美月は言われるがままに、布を首に纏う。

「決して無理はしないで」

「分かりました」

行くよ、と声を掛けた幹比古に対し、美月は頷いて答えた。

幹比古は結界を解く。

眩い光が美月を襲い、思わず目を覆いそうになった。だが、美月は目を細めつつも精神体となったパラサイトを探る。周囲には糸のように張り巡らされた光が輝いており、それは輝く穴のような場所から放出されていた。

「そこです！ エリカちゃんを襲おうとしています」

霊子光りょうしこうを観測する美月が指を差したのは、死体となった元パラサイトから数メートル左の上空。丁度エリカの頭上であった。

無言で幹比古が対妖魔術式・迦楼羅炎かるらえんを発動。

情報体に対し、燃焼という概念を定着させる術式だ。現実へと具現化させることなく、燃やしたという結果のみによって妖魔を滅ぼす。

達也はすぐにエレメンタル・サイトで確認し、そのように理解した。

情報の書き換え自体は、魔法師にとって目新しいことではない。そもそも、魔法とは情報という非物質次元に干渉して引き起こすのだ。それを現象として具現化するか、しないかの差である。

しかし、達也は幹比古の魔法にも驚かされたが、それ以上にパラサイトを見て驚いた。

(これは……)

今まではエレメンタル・サイトによる観測でも曖昧だったパラサイ

トの座標。それが幹比古による攻撃でハッキリと分かるようになったのだ。

まるでシュレーディンガーの猫という思考実験を思わせる現象である。

観測……この場合は幹比古の魔法が当たること、達也は間接的にパラサイトの位置情報を取得した。曖昧だったパラサイトの座標は攻撃を受けたという結果によって確定され、達也の眼にも見えるようになったのである。

そしてパラサイトは美月を脅威と感じたのか、迦楼羅炎カールラエンのダメージを受けつつも美月へ襲いかかろうとしていた。

思考は一瞬。

達也はCADを持っていない方の左手を向ける。

「来ますー！」

美月は警告を放ち、そして限界が来たのか、目を抑えてしやがみこんだ。異能の存在である妖魔デーモンが、自分をめがけて襲ってくる。その恐怖を味わった美月が軽くパニックに陥った。

幹比古はそれを責めないし、よくぞ最後に知らせてくれたとさえ思った。

すぐに結界を張り、パラサイトを侵入させないように試みる。

だが、この手の結界は、一度相手に認識されると効果が大きく減衰する。パラサイトを完全に防ぐことは難しい。なにより、美月が眼を閉じた以上、精神体パラサイトの座標を特定することが出来ない。

そもそも、古式魔法には時間をかけて下準備を行う術式が多く、咄嗟の対応は苦手としている。

ギリギリで張った結界が幹比古の精一杯だった。

(それでも……)

幹比古は意味がないと分かっている、簡易的な術式を発動する。

霊を祓う、古式魔法の家系はそのような仕事を生業としてきた。魔を祓うことにおいて、普通の魔法師を凌駕する。

剣をイメージした『切り祓い』によって、パラサイト本体から伸びる糸のようなものを断ち切った。

美月を絡めとろうとする糸は無数にあり、それを纏めて切り裂く。しかし、この術ではパラサイト本体を斃すことができない。

千日手であると分かりつつも、幹比古は糸を祓い続けた。

——選択の余地はない

パラサイトの性質を知る達也は『術式解体』グラム・デモリッションを苦渋の決断で放った。輝くサイオン流がパラサイトの糸と本体を纏めて吹き飛ばす。

『術式解体』グラム・デモリッションではパラサイトを倒すことが出来ない。

しかし、達也には他の方法がなかった。

「逃したか」

克人の眩きに対し、達也は無言のままだった。

術式解体とは言っても、魔法をバラバラに壊すわけではない。高密度サイオンによって魔法式を構築しているサイオンを押し流すのが、その正体だ。

魔法に近い存在であるパラサイトにも、同じ現象が起こっているだろう。

「だが、被害はなかった。相手も無傷ではあるまい。それにこれだけのパラサイトを確保——」

克人は深雪が凍結させたパラサイトに目を向けようとして驚愕する。そこにはパラサイトなど、どこにもいなかった。

「一体もいない？ いつの間に逃げたというの!？」

真由美の言葉は、皆が思ったことだった。

深雪はチラリと達也の方を見る。すると、気付いた達也は首を横に振った。つまり、エレメンタル・サイトを持つ達也ですら、気付かなかったのだ。

(恐らくは大陸の魔法。隠蔽に特化した術者によるものか)

魔法が発動したと悟られない技術に加え、この手際の良さ。間違いないと達也は考える。

そしてパラサイトが情報通り、大陸の魔法師と繋がっている確証も得られた。一校を狙った理由は不明であるが。

ただ、逃げられてしまった上に、精神体パラサイトも逃がしてしまった。

戦闘結果としては零点である。

——無様なものだ

紫音の戦果と比較して、そのように思ってしまう。

だが、それを声に出すわけにはいかない。

もし声に出せば深雪は気にするだろうし、美月は気に病むだろう。

例えそれが達也自身に向けられた言葉であったとしても、二人はそう思わないはずだ。

そのような恥の上塗りを、達也はしようと思わなかった。



一方、逃走したパラサイトはスターズで追跡していた。

顧傑^{グゼイ}の鬼門遁甲によつて包囲を惑わされつつ、バラバラに逃走したパラサイトたちを追っていたのである。

追うと言つても、昼間から堂々と追跡劇を繰り広げる訳にはいかない。

探知網を街中で展開し、通信によつてパラサイトたちの位置を把握しているのである。

『カノープス少佐。アヤコ・クロバ殿が確保したパラサイト四体を確認いたしました。その内、一名が元USNA軍の魔法師であると判明しています』

「確認ご苦労。なるほど、今追っている方が当たりというわけだな」

『現在、四葉家の魔法師がパラサイトを封印しています』

「封印には立ち会っているか？」

『はい。死体をすり替えられる心配はございません』

達也と深雪で無力化したパラサイト四体は、亜夜子が四葉の部隊を率いて回収していた。既に封印処置を施している最中となっている。

カノープスも四葉を信頼していないわけではないが、信用には程遠い。

利害が一致しただけの共闘者に過ぎず、味方ではないのだから。

USNA魔法師の秘密を探るべく、パラサイト化した魔法師をすり替えるぐらいはやりそうだと考えていた。

仮設のオペレーター・ルームでカノープスは思索した。

(しかし、この撤退の早さ……それに魔法科高校を襲った理由……パラサイトの行動に一貫性がない。黒幕と思われる人物は何を考えている?)

まさか思ったより一校の反撃が激しく、撤退するしかなかったとは思わない。黒幕である顧傑^{グゼイ}が追い詰められているとも思わない。

しかし、思考は途中で中断することになった。

激しい爆発音がカノープスの耳を劈いたからである。思わずヘッドセットを外し、床に落としてしまった。

「何があった!」

「各地で爆発です! 追跡中の隊員が数名、巻き込まれたと思われるです」

「なんだと!」

日本という国家は治安の良さにおいて世界有数である。監視網は勿論、訓練された警察や精鋭揃いの軍が治安を守っているからだ。

その監視を掻い潜り、爆弾を仕掛けるなど至難と言える。

街に仕掛けようものなら、隠しカメラが捕捉する。AIによる探知を加えれば、不審物は瞬時に検知できてしまうのだ。

例えばネットワークに接続されている全ての監視カメラにアクセスし、その場所を把握できない限りはカメラを掻い潜ることは出来ない。

「パラサイトは?」

「見失ったと思われます」

オペレーターの言葉はカノープスも予想した通りだった。

「撤退を命じろ。これ以上は深追いするな。怪我人の回収を優先する」

耳が痛くなるような爆発音だったのだ。その威力は充分に押し量れる。

そして、街中で爆発した以上、一般人の被害者もいることだろう。USNA軍の魔法師による追跡劇で起こった事件だと発覚すれば、カノープスは今以上に動きにくくなる。カノープスだけでなく、USNA軍の活動自体が全て制限されてしまう。

結果として、黒幕である顧傑は逃走しやすくなる。

(しかし日本の十師族も本気になったはずだ)

今回の件でパラサイトを一掃できなかつたのは残念だ。
これが吉と出るか、凶となるかはまだ分からない。

来訪者編 27

デーモン、あるいは妖魔と呼ばれるそれは異次元からやってきた。マイクロブラックホール生成・蒸発実験により揺らいだ壁をすり抜け、この世界に現れた。だが、妖魔は次元を渡った衝撃で十二に分裂してしまった。

妖魔は^{フシオン}霊子を吸収しなければ存在を維持できない。

だが、肉体という外殻を持つ世界では、妖魔が直接^{フシオン}霊子を吸収することはできない。

憑依によって形あるものと一体化することで^{フシオン}霊子を供給する。

本来、妖魔に精神性や高度な知性はない。憑依した対象の精神と同化することで、その本能を侵食し、隠れた本性を刺激増幅するだけである。

弱った妖魔は新しい宿主を探し、その新しい宿主に沿った意識を得る。

達也の術式^{グラム・デモリッション}解体によって吹き飛ばされた妖魔は、高圧の^{サイオン}想子に晒された結果、物質次元に侵入していた大部分が削り取られてしまった。

また、宿主を放棄した状態で多くの力を使い、^{フシオン}霊子までも失っている。

弱り果てて彷徨った妖魔は、やがて一つの器を見つけた。

今にも消えてしまいそうな存在を少しでも保つため、その器の中で休息を得ることにしたのだ。

この妖魔に力はない。

強い意識を持つ人間の中に侵入する程の力はない。

本能から意識のない人型を探し、その中へと納まった。

第一高校の端に位置する倉庫で見つけた、一体の試作アンドロイド P-94 の中へと。



第一高校をパラサイトが襲撃した事件は、関係者以外には口止めされた。その結果、多くの生徒は何も知らないままである。尤も、関係者というのはパラサイトを迎撃した生徒の他、第一高校の校長を始めとしたごく一部である。

その場になかった生徒で知っているのは、四葉後継者候補たる紫音だけだった。

「そうか、一体は見失ったか」

「はい。それに七体のパラサイトには逃げられてしまいました。申し訳ありませんお兄様」

「いいよいいよ。亜夜子はよくやってくれた」

パラサイトを逃がしてしまった後、亜夜子は二日ほど周辺を搜索した。だが、四葉の力を以てしても発見することができなかった。

恐らくは大陸の術師が結界を張ったのだと思われる。

結果として亜夜子たちは撤退し、紫音にその報告をしていた。

「USNA軍との対応は？」

「お兄様に言われた通り、アドバンテージを取ったまま接しています。顧傑グ・ジに圧力をかけるために動いていただいていますわ」

「よし。今は奴が尻尾を出すまで待とう。本気で隠れられたら搜索は困難だ。それに、あまり動き過ぎると逆に利用される。こちらもパラサイトに有効な手段を手に入れる時間が欲しい」

フリズスキャルヴを有する顧傑グ・ジを出し抜くのは困難だ。

USNAの包囲網、そして十師族の包囲網で圧力をかけ、向こうか

ら動くのを待つ。そして待っている間に紫音もパラサイトへの有効な魔法を開発する。

すでに四葉はパラサイトに関する実験をほとんど終えている。討伐してしまつて問題ない。

四葉のスポンサー、そして当主こと真夜の願い通り、顧傑を大亜連合に逃がす。そこでパラサイトについて研究させるのだ。そして力を得た大亜連合は、再び日本へと戦争を仕掛けてくるだろう。横浜事変で日本がマウントを取れる立場となつたが、あの国は懲りない。成果さえあげれば何とかなると考えて戦争を仕掛けてくるはずである。それを返り討ちにすることで、今度こそ顧傑を完璧に仕留め、更に大亜連合を虫の息にする。顧傑の成果も根こそぎ奪いとる。

見逃してから倒すという、実に傲慢な作戦だ。

だが、四葉は紫音に達也という戦略兵器を手に入れている。だからこそ、このような手段を選択できる。

「お兄様、あの魔法は習熟できましたの？」

「二応、何度か発動実験はしたよ。四葉本家の研究員に調整して貰つたから、魔法式も大体は完成したかな……」

パラサイトを完全消滅させるための魔法は、事件が起こつてから開発が進められてきた。その性質を解析することで有効打となる魔法を開発したのである。

今は実験室レベルだが、もう少し調整を施せば実戦でも通用するようになる。

そして、この魔法は亜夜子の固有魔法『極散』が元になっていた。ゆえに亜夜子もかなり詳しく知っている。

「名称は決まりましたか？ 私が最後に聞いた時は『極散β』でしたけど……」

「プシオン霊子分解魔法『デイスインテイク霊子極散』。最終的には亜夜子の『極散』と達也の『分解』のノウハウが使われることになつたよ。プシオン限定の分

解魔法つてところかな」

「まあ、嬉しいですわ」

亜夜子は達也に憧れている。

『極散』は達也の助言により生まれた魔法だからというのが理由の一つだ。収束系魔法として知られている『拡散』の究極系が『極散』なのだが、これは非常に扱いが難しい。

魔法の効果としては単純で、指定領域内の液体や気体やその他の物理エネルギーを平均化するというものである。つまり『極散』する対象のベクトルを完全に分解するのだ。

不完全な分解だと、ただの『拡散』に留まってしまふ。普通の術者ではこれが限界だ。だが、亜夜子は『拡散』に特化した魔法力を有しているため、完全なベクトルの分解を可能とする。

亜夜子は自身が反射・放射する電磁波、音波、気流を即座に選択してベクトルを分解し、周囲に紛れさせる。つまり存在を同化させることができるのだ。特に電磁波の少ない夜は彼女の領域である。

あらゆるエネルギーを平均化する。

つまりベクトルを分解して空間的に平らな状態とする。

これをさらに深く、狭く実行すると達也の分解魔法となる。

『極散』と『分解』には深いかかわりがあるのだ。

さらに言えば、『調律』は『極散』よりも広い魔法効果を有している。

『調律』という魔法は指定のベクトルへと馴染ませる魔法だ。つまり、分解方向へと『調律』を実行すれば、『極散』に近い効果を得ることができる。

一方向へと光を調律すれば、ダーク・ミューティア暗黒流星群だ。

そして全方向へと調律すれば極散モードキとなる。

波動を観測できる紫音がブシオン霊子に対して実行するのが、デイスインテイクレーション『霊子極散』だ。妖魔はブシオン霊子で構成されているため、デイスインテイクレーション『霊子極散』をくらえば四散する。つまり討伐可能となる。

『極散』と『分解』の魔法式を元に生み出されたのが、この対パラサイト魔法だ。

尊敬する達也と自分の魔法が、一つの魔法となって紫音に託される。

それは亜夜子にとって心地よいものだった。

「そういえば、達也の方もパラサイトに有効な魔法を練習しているらしいな。深雪に教えて貰ったが」

「お兄様のようにプシオンの分解を……？」

「いや、術式グラム・デモリッション解体の応用らしい。あの達也が苦戦しているらしいな」

何をしていても表情を変えずにこなしてしまう達也は、一見すると完璧に見える。

だが、元は魔法の才能がない落ちこぼれだ。

尖った魔法によって魔法演算領域を占有され、通常の魔法に関する才能は全くない。今持っている魔法力は、強い情動を司る部分を白紙にしてまで手に入れた仮初のもの。通常の魔法は苦手としている。

「あいつの魔法が間に合えば、もう少し楽になるかもしれないが……」
「ですが達也さんや深雪さんの手をできるだけ借りないようにするのは？」

「俺たちが止めても関わってくるからな。どうせなら対抗手段を持っていてもらった方がいい。勿論、手を借りずに解決する方が、当主様としても望み通りの展開だろうけど」

パラサイトが第一高校を襲ったという事実が、達也を本気にさせた。

彼は妹である深雪に迫る脅威を必ず取り除く。もうかかわるなど言っても無駄だろう。

(残る懸念は顧傑グレンジャーに達也と深雪が四葉の関係者だとバレることか……世界を終わらせる逆鱗に触れないでくれよ)

紫音の心配はそこだった。



達也は勿論、克人、真由美、幹比古、エリカはパラサイトとの再戦に向け、戦意を燃やしていた。

だが、対抗策を練っているのはこちら側だけではない。

二月上旬、顧傑グジも情報操作という手段で動き始めていた。

「うわあ……ついにリークされたか」

「そのようです」

朝食を食べながらニュースを見ていた紫音と亜夜子は食事を止めた。

ちなみに、亜夜子はしばらく紫音の自宅に泊まっている。深雪の真似をして紫音にコーヒーを淹れたり、食事を作ったりと色々しているのだ。

『合衆国政府は昨年ハロウィンに使用された日本軍の戦略級魔法への対抗手段構築を魔法師に命令。ダラス国立加速研究所でマイクロブラックホールの生成実験を行い、異次元からデーモンを呼び出した』

それがニュースの主な内容である。

デーモンを呼び出したなど、百年前なら鼻で笑われていた。だが、今は魔法が現実となった時代だ。日本にも陰陽師などの妖魔に対抗する術師が存在したことは、歴史の教科書にも出てくる。デーモン召喚というニュースは事実として受け入れられてしまうだろう。

「デーモンの使役によって戦略級魔法に対抗する……愚かですわ」

「まるで見当違いだし」

「お兄様はこれをどう見ますか？」

「USNA軍内部の告発ってことになっているけど、情報操作の一環だろうな。だが、こんな情報がリークされるなんて流石におかしい。となると……」

「顧傑」

「そうなるな。それにニュースの後半は魔法師批判で占めている。いわゆる人間主義の主張だな。魔法師排斥となると有名なのはブランシュだが……たしか顧傑はその総帥だったはず。これから魔法師排斥運動が激化するかもしれないな」

「まだ予想の範囲内だが、確実に期すなら知っている人間に聞くべきだ。」

「亜夜子、カノープス少佐に聞いてくれ」

「少しお待ちください」

亜夜子はデバイスを取り出し、素早くメールを打つ。暗号化された文章が送信された数分後、返事が返ってきた。当然、四葉とスターズの間でのみ共有されている暗号文でだ。

すぐに解析プログラムへと通し、解読する。

「どうやら七賢人という人物がかかわっているらしいですわ」

七賢人は紫音も知っている。

それは集めた情報によるものではなく、臚げな前世の知識によるものだ。そして四葉家当主である四葉真夜も七賢人の一人だと知っている。

フリズスキャルヴというネットワーク上に存在する情報をリアルタイムで閲覧するシステム。そのオペレーターとして選ばれた七人の人間が七賢人だ。

「あ、お兄様」

「ん？」

「ニュースを見てください」

何かに気付いた亜夜子がテレビ画面を見るように促す。
考え事をしていた紫音はそれを見て愕然とした。

『横須賀の軍事施設で爆薬が盗まれる。犯人はデーモンに憑依された吸血鬼である』

爆薬が盗まれたのは一か月以上も前の話だ。

そして顧傑グ・ジは操る死体に爆弾を仕込み、特攻させる。こちらの情報は間違いなく顧傑グ・ジだろう。

顧傑グ・ジも七賢人の一人である。

二つの軍事スキャンダルは致命的でなくとも、嫌がらせ以上の効果がある。

「情報戦が始まりそうだな」

「日本政府の頑張りどころ、ですわね」

しばらくは外務省が涙ぐましい努力をすることになるだろう。

追い詰められた顧傑グ・ジは起死回生の反撃に出るのか、逃げに徹するのか。紫音と亜夜子の仕事は、後者を選ばせることである。

来訪者編 28

一月二十五日の事件以降、パラサイトの発見報告は一度もなかった。第一高校を襲撃という大事件を起こしたことで、十師族の包囲網が強くなったことも原因の一つだが、特に四葉を警戒しているという意図が透けて見える。

アメリカで行われたマイクロブラックホールの生成・蒸発実験により異界からデーモンが呼び出されたという事実が一般のニュース番組で報道されたことにより、世論は魔法に対して厳しい目を向けている。更には全世界で魔法師排斥運動が強まっており、どうしても魔法師は肩身の狭い思いを強いられていた。

「ちっ……またか」

紫音はタブレット端末を操作しながら舌打ちする。

今日は二月十三日。

世間の女子が全力でチョコレート作りに励む夜である。それは二十世紀になろうとしている今も変わらない日本の固有文化として定着していた。尤も、男である紫音には関係のない話だが。

「顧傑め……面倒なことをしてくれ」

タブレット端末の画面に映されているのは、人間主義の活動をしたためた電子メディア紙である。他にも魔法師が引き起こした犯罪を引用し、徹底的に魔法師を批判する一種のヘイトスピーチとも捉われないコラムもあった。

これらは顧傑の手がかりであるパラサイトの足取りを見失って以降、増え続けている。顧傑は反魔法師団体ブランシュの総帥でもあるため、世論から日本の魔法師を攻めることも可能だ。やはりこういったメディア戦術に対して四葉は弱い。

「それにしても亜夜子……どこにいったんだ……？」

黒羽家の部下に連絡しても、亜夜子の居場所は教えて貰えなかった。紫音にも教えられないほど大切な任務をしているのだろうと納得したが、少し不安である。

今の紫音は、今日がバレンタイン前夜であることをすっかり忘れるほどに忙しかった。



光井ほのかは張り切っていた。

敬愛する達也に最高のバレンタインチョコを渡すためである。この日のために材料を集め、美味しい作り方も勉強した。

「ハ、ハート型はやり過ぎかな……？」

しかし彼女は成型という予想外の部分で苦戦していた。主に自分のこだわりの面で。

「でも丸型とか星型はありきたりだし……でも、チョコペンでメッセージを書き込めば」

だが、何をメッセージとして書くというのだろう。彼女は自問自答していた。



七草家のキッチンには三姉妹が揃っていた。

真由美、香澄、泉美の三人である。

「よし、できたぞ」

「私もできましたわ!」

双子の前にあるのは小さな小包が二つ。それぞれが作ったチョコレートである。

そして振り返れば、二人の姉が新しいチョコレートを湯煎で融かしていた。

「……ねえねえ泉美、お姉ちゃん、何していると思う?」

「チョコレートを作っている……のだと思いますけど」

「じゃあさ、あの含み笑いはなんだろうね……」

真由美は毒殺を企てる魔女のような笑みを浮かべている。到底、バレンタインチョコを作っているようには見えない。

「香澄ちゃん、あれってカカオ九十五パーセントのやつじゃ……」

「しかも糖質ゼロ。あ、エスプレッソパウダーも入れた」

「怨みでもあるんでしょうか」

「さあ……」

チョコを作る真由美は実に楽しそうである。まるで普段の恨みを

晴らすべく、毒薬を作っているかのような笑みだ。いや、間違いなく。

「お姉ちゃん、誰に渡すんだろうね」

「その殿方はお気の毒というべきか、お姉さまから渡されて幸運だと言うべきか、悩みますわ」

「いや、間違いなく不幸だろ」

双子はとぼつちりを受けない内に、キッチンから去って行った。



魔法科高校は未来の魔法師を養成する。その特徴から軍事的なイメージが定着しているのは間違いない。魔法師は軍事と直結しているからだ。

しかし、今日はバレンタイン。

この日ばかりは彼らも高校生としての青春を謳歌していた。

「あの、達也さんー」

ほのかは校門で達也を呼び止める。

今は深雪もいない。それは登校中、偶然にも達也と深雪に合流してしまった美月のせいだ。深雪はほのかの心情を察知し、さり気なく美月を連れて達也の側から離れたのである。

朝早くからキャビネットの停車駅で待ち続けていたほのかへの、小さな報酬だった。

駅から学校までは二人きり。

そして遂にほのかが勇気を出したのだ。

「少し……お時間を頂いてよろしいでしょうか！」

「ああ、いいよ」

達也は強い感情を失っているため、ドキドキやワクワクといった思いはない。しかし、鈍感というわけではないのだ。ほのかの目的は理解している。

ほのかは一校の密談スポットとして知られているロボ研ガレージ裏手の木陰へと達也を連れて行った。そして達也に向かって勢いよく、小さな包みを差し出す。

「あのっ、たちゅ……」

そして噛んだ。

しかし達也は空気の読める男だ。特にツツコミはしない。何事もなかったかのように包みを受け取った。

「ありがとう、ほのか」

恥ずかしさと、高ぶる感情で身動きの取れないほのか。

そんな彼女に、達也は掌に収まるほどの小さな紙袋を持たせた。ほのかにとっての予想外が一時的に羞恥心を上回り、きよとんとして表情になる。

「あの、これは……？」

「取りあえず、お返し。来月分とは別口だから、そっちも期待していいよ」

「た、達也さん……」

感極まって涙を浮かべ、慌てて拭う。

いちいち大げさだと思っではいけない。これは光井家の特徴でも

あるのだ。エレメンツという魔法師素体として研究された魔法研究初期に近い一族であり、国家に対して忠誠心が強くなるよう遺伝子コントロールされている。その影響から、ほのかも依存しやすい性格をしているのだ。

彼女の場合、達也に依存している。

そんな対象からプレゼントをもらったのだから、これは涙を流すほどの感激なのだ。

「あの、開けてもいいですか?」

「もちろん」

そうして袋から取り出してプレゼントを見つけ、ほのかは魂が抜かれたような目をしていた。

「そろそろ戻ろう」

達也はそう促す。

この場所は密談スポットとして有名なだけあり、他の男女がやってきてもおかしくない。この場を目撃されて困るわけではないが、おもしろくもない。

一応、達也の感覚ではこの場に近づく者も盗み聞きしている者もない。エレメンタル・サイト精霊の眼を使わずともそれくらいは分かった。

しかし、達也は精霊エレメンタル・サイトの眼を使うべきだったのだ。

ロボ研ガレージの中で眠る、一体の人形。

試作アンドロイドP-94の中に眠るパラサイトは意識を得たのだ。ほのかの激情ともいえるべき、想いの波動を受け取って。そして概念的なパスによって、ほのかとパラサイトは繋がった。



紫音は四葉を名乗っている。

そのため、一校の中でも恐怖の象徴だ。故にチョコレートとは無縁である。ただ、この日になってようやくバレンタインであることに気付いた。そして亜夜子が自分にチョコレートを用意していたために、昨夜は見当たらなかったのだろうとも予測できた。

愛する妹からチョコレートを貰えるのだとすれば、この程度のことには無問題である。

「しかし魔法科高校がこのザマとはねえ。バレンタインも偉くなったものだ」

「そう言うな紫音。彼らも高校生の青春を謳歌する権利はある」

「いや、達也も高校生で……ああ、お前はほのかに貰ったのか」

「何故知っている」

「勘」

風紀委員の先輩方から体よく放課後の巡回を言い渡された紫音と達也。二人はすっかり浮ついている放課後の一校を見回っていた。

高校生でありながら、既に許嫁のいる者も少なくない。親公認のカップルが堂々とチョコを渡している光景もよく見られた。

たとえば、弁当箱かと勘違いするような箱に大量の手作り粒チョコを詰めて渡す千代田とか、笑顔の圧力に屈してその場でチョコを食べ続ける五十里とか。

「紫音は貰えなかったのか？」

「帰ってから亜夜子に期待だな」

「なるほど」

そんな雑談を交わしつつ、二人はカフェテリアへと差し掛かる。そこで思いもよらない人物に声をかけられた。

「あら達也君に四葉君。今日は巡回かしら？」

「七草先輩ですか……それに……」

達也はカフェテリアのテーブルに座る二人組を無視するつもりだった。

一人は七草真由美。小悪魔的な女性であり、その眼には企みの光が垣間見える。とても関わりたいとは思えない。

なにより、彼女の前に座っていながらテーブルに突っ伏している服部。

控えめに言って苦しんでいるように見える。

そして服部は目を上げた。

「よ、四葉……いや司波でもいい。水を……」

はあ、と溜息を吐いた紫音が水を取りに行く。

その間、達也は真由美に問いかけた。

「服部会頭は何故このような状態に？ 校内で毒物事件ということも無いでしょう？」

「いえ、まあ……毒じゃないわよ？」

呻く服部に、困惑した表情の真由美。

あまりにも謎である。

そこに紫音が水を持ってきたので、服部は勢いよくそれを飲み干した。

「ふう……感謝する四葉」

「いえ、それよりも何が？」

「特に問題があったわけではない。ではこれで失礼します会長……いえ、七草先輩」

服部は一礼し、逃げるように去って行った。

キツチリと背を伸ばしていたが、何故か二人はそのように感じた。目を合わせて首を傾げる紫音と達也に対し、真由美は形容しがたい笑みを浮かべつつ勧める。

「じゃあ、二人とも座って」

何が『じゃあ』なのか。このまま座って良いのだろうか、と二人は考えてしまう。服部の様子を鑑みて、彼が苦しんでいた原因は真由美にあるように思える。だが、真由美は明らかにそれを誤魔化している。

しかし、二人に逆らうという選択肢はない。

『逃げるとか許さねえから』とでも表現すべき圧力がそこにはあった。

仕方なく紫音と達也は着席する。すると、コーヒーのような強い匂いがした。

「……誰かがコーヒーをこぼしたんですかね？」

「確かに匂いがするな」

「気のせいじゃないかしら？」

誤魔化すというより、有無を言わさぬように、真由美は言葉を被せてくる。

ここまでくれば確信犯であることが見え見えだ。

「はい、これ」

真由美は二つの包みを取り出し、紫音と達也の前にそれぞれ置く。

二人は同時に箱を手を取ったが、明らかに重かった。そして強烈な匂いはこの箱から出ていることもすぐに分かった。カカオ豆とコーヒーの匂いであることは明白である。

(なあ達也)

(何も言うな紫音)

達也は紫音からのテレパシーを強制的に打ち切った。

今の真由美は実に楽しそうな笑みを浮かべ、ドキドキワクワクしている。

「ね、食べて」

「今ですか？」

「そうよ。感想を聞かせてくれないかしら？」

念のために紫音は聞き返したが、持ち帰って食べた振りをするという手段は無理そうだ。服部で実験済みだろうという言い返しは蛇足だろう。

それは完全に藪蛇だと紫音は確信していた。勿論、達也も。

ならばもう誤魔化すしかない。

紫音は真剣な表情になった。

「七草先輩。少し内密の話を宜しいですか？」

「……ここじゃない方がいいのね？」

「はい。達也も来てくれ」

「ああ。丁度、自分も先輩にご相談したいことがありますので」

ここで話があるということは、吸血鬼のことに他ならない。

真由美はすぐに察して携帯端末を操作し、部屋を確保した。普通の生徒にはできないが、真由美ならば簡単なことである。

三人は立ちあがり、部屋に向かう。

周囲から注目されたのだが、紫音も達也も気付かぬふりをした。これは相談と銘打った、危険なチョコ回避に過ぎないのだから。



真由美が確保したのは父兄を含む外部者との面談に使う部屋だ。応接室ほどではないが、人を迎えるのに適した作りとなっている。ただの相談事に使うとすれば、少し大げさかもしれない。

「さ、座って。紅茶でいいかしら？」

「では頼みます。達也の分も」

達也が断ろうという雰囲気を見せたので、紫音が先に答えた。どうせ断ったところで、真由美は紅茶を用意しようとするだろう。尤も、この部屋にあるのは全自動サーバーの供給機。紙コップに自動で紅茶が注がれる。

そうして用意された紅茶が紫音と達也の前に置かれ、話し合いは始まった。

「話というのは吸血鬼のことよね？ 一校に現れて以降、めつきり話を聞かなくなっただけ」

「その代わりに反魔法師運動が活発化しました。まるでこちらの追跡から隠れるように」

「……ええ、そうね」

紫音がそうきりだしたことで、七草たる真由美も理解した。

この日本でメディアにも強い影響力を持つ十師族とは七草家であ

る。真由美もある程度の進捗は父から聞いていた。

「父は対処をしているわけではないわ。そうね……ほぼ、放置かしら？」

「ほぼ、とは？」

「四葉のあなたなら分かるでしょうけど、今の魔法師界は微妙な立場に立たされているわ。下手に私たちがつくと、おそらく……」

「余計に炎上するでしょうね」

それは紫音も理解している。だからこそ、手出しできないのだ。

紫音にできることと言えば、過激派の人物を暗殺すること。黒羽の部隊を使い、何人かは消している。特に海外から日本に来た人物は集中的に消した。しかし、それはあくまでも燃え上がった炎に油が注がれないようにする対処法に過ぎない。原因である可燃物を消さない限り、事態は収まらない。

そちらは七草家の得意分野のはずだった。

しかし、その七草ですら……

「ガス抜き、ですか」

「ええ」

騒がせるだけ騒がせる。今はそれしかない。膨れ上がった反魔法師の風潮を利用し、魔法師排斥派のガス抜きをしているのだ。

結局、十師族ができることは、手早く吸血鬼を仕留めることだけだ。日本の安全が確保された時、魔法師排斥の流れは小さくなるだろう。

紫音の話は終わった。

代わりに達也が次の話を持ち出す。

「パラサイトの追跡はどうなりましたか？ 一見、一度撃退して沈静化したように見えますが」

「そうね。表面上は。でも彼らのやり口が巧妙化しているだけで、ま

だ被害者はいるの」

「隠れ方が上手いですね」

「ええ、まるで見つからないの」

達也は少し考える。

十師族は既に本気でパラサイトを追っている。そして四葉の分家である黒羽家も、スターズと協力しながら全力で追っているのだ。これで見つからない方がおかしい。

パラサイトの感知能力が異常に高いと見るべきだ。

「もしかすると、仲間同士で共知覚を持っているのかもしれない」

「共……何？」

「共有知覚感応能力の略です。一種の超能力ですね。一卵性双生児の間で稀に見られます。つまり、あらゆる感覚を共有することで広範囲に感知をカバーしているということですよ」

しかしこれも達也の憶測に過ぎない。ただ、パラサイトは精神という未知の領域で存在するため、どんなことがあっても不思議ではない。

パラサイトを消し去ることが一番の方法だが、そのパラサイトが見つからない。

まずは発見。

全てはそこからだ。

達也は真由美と打ち合わせ、そこに紫音も多少は口出しして話し合いを終えた。

「では、俺たちはここで失礼します」

「有意義な時間をありがとうございました」

しれっとした表情で立ち上がった紫音と達也だが、真由美は逃がさない。右手で紫音、左手で達也の腕を掴んだ。怪しくも企みを隠そう

としない笑みで、テーブルの上に置き去りにされようとしていた二つの箱へと視線を向ける。

「今からはティータイム、でしょ？」

苦悶する服部の姿を見た後だ。

箱の中身は聞くまでもなく予想できる。

「家で食べるという——」

「だ・め・よ。四葉君」

語尾に音符でも付きそうな声音である。

早く食べろと言わんばかりに目を輝かせていた。二人なら、無理矢理逃げることも可能。しかし、それをすれば余計に面倒なことになるだろう。大人しく食べた方が、後顧の憂いなくバレンタインを終えられる。

紫音には亜夜子、達也には深雪という、バレンタインという日を幸福に終わらせてくれる妹がいるのだ。真由美のチョコ面倒ごとは夕方真由美のチョコの内に終わらせておくに限る。

二人は大人しく座り、包みを開いた。

(これは……)

紫音は眩暈がした。

あまりにも強烈なカカオの香りに。これはチョコレートというより、薬物である。ちなみにカカオの成分には薬理作用も含まれているので、薬膳として扱うこともできる。尤も、限度はあるが。

達也も苦いものは気にならない。

そもそも特異魔法『再成』を発動するとき、対象者の苦痛を凝縮して味わうのだ。それに比べれば大したことはない。

二人は同時に強烈なチョコ(?)を口へと運んだ。

——真由美は満足気な表情をしていたとだけ言っておく。



ほのかは生徒会の仕事で、ノートパソコンを抱え準備棟へと向かっていた。彼女の頭部には水晶の輝きがあった。達也が送ったプレゼントの髪ゴムである。

別にほのかは達也の恋人ではない。

だが、つきまともも達也は拒絶していない。

それをいいことに、こうして曖昧な関係が続いているのだ。プレゼント一つで上機嫌になる自分は安い女だと感じている。しかし、今日はそんなネガティブな感情すら吹き飛んでいた。

「ほのか」

ウキウキとした気分準備棟へと踏み込もうとした時、彼女は横合いから呼び止められた。

「あつ、エイミー！」

深紅の髪が目立つ小柄な少女が、パタパタと駆け寄ってきた。

二人が会ったのはただの偶然。

ほのかは仕事でパソコンを運んでいただけであり、エイミー英美も部活がミーティングだけで終わったから遭遇したのである。ちなみに彼女は狩猟部だ。

「あれ？ それって水晶？」

目敏くほのかの頭部の輝きを見つけた英美は、興味津々といった口調で聞く。

「あ、うん」

「へえ。凄いなあ。司波君に貰ったんでしょ？」

「えへへ。チョコのお返しにして」

「あらかじめプレゼントを用意しておくなんて、司波君もやるね。見た目は不愛想だけど、そんな心配りもできるんだ」

確かに達也は不愛想で、近寄りがたい。しかし仕事はできる。そんなイメージだ。

しかしほのかは褒められて嬉しい。

敬愛する達也のいいところを他者に知って貰うことは、ほのかにとつても喜ばしいことだった。まさに幸せいっぱいといった笑顔である。

しかし、英美の次の一言で彼女の笑顔に影が差した。

「陰で人気ありそうだよね。さつきも会長……あ、七草先輩がチョコを渡そうとしていたし。あたしたちも九校戦でお世話になった皆で義理チョコを渡しに行ったんだけど、四葉君もいて近づくの止めたんだよね。そのとき七草先輩が司波君と四葉君にチョコを渡していき」

「さ、七草先輩が」

「うん。まあ、無理やり捕まえたって感じだったよ」

英美は正直な感想を見たままに言っただけだろう。

しかし、ほのかは心中穏やかではなかった。

七草真由美は血統、学問、魔法、美貌とあらゆる面でほのかを上回っている。ほのかが勝っている部分など、ほとんどないに違いない。い

や、間違いなくない。

ほのか最大の敵は深雪だった。

しかし深雪には兄妹であるという制約がある。それがほのかにとつての狙い目だった。一方で真由美にはそれが無い。寧ろ先輩でお姉さんであるというアドバンテージまである。達也が一歳や二歳の年上を気にしない質であることは分かっているため、包容力で勝る真由美に勝てる部分がない。

ほのかの心に漣さざなみが生じる。

嵐のように荒れているわけではないが、それは静まることなく心中に留まった。

今朝のあの瞬間、ほのかの歓喜によって人形に宿るパラサイトとパスができあがった。そして今度はパスを通じてほのかの心が流れ込む。

嫉妬、憧れ、敬愛。

想念の波はパラサイトの微睡む意識を奮い立たせ、完全な覚醒へと至る。



控えめに言って酷い目に遭った紫音は、未だに苦さの残る口の中を不快に思いながら帰宅した。

そして家には妹がいた。

「おかえりなさいお兄様」

「……お前が天使か」

「お兄様!?!」

今日の亜夜子は白エプロン。そして手にはハート型の箱に入ったチョコレート。

控えめに言って天使であった。

「いや、ごめん。ちよつと辛いことがあってな」

「お兄様。そんなことは亜夜子のチョコで忘れてください」

「ああ、今この瞬間に忘れたよ」

紫音はチョコレートを受け取り、ギュツと抱きしめる。

それほどもでに真由美のチョコレートは苦痛だった。あれは一種の拷問である。服部が悶絶したのも領けた。それほどの苦さとも酸っぱさとも辛みとも言える味覚の蹂躪により、『調律』が自動発動してしまったほどだ。

お蔭で悶絶することはなかったが、『調律』の発動で無表情になった。

真由美にはそれを笑われたのである。

「さあ、是非とも食べてください」

「ああ、頂くよ」

「コーヒーを淹れましょうか?」

「いや、紅茶で頼む」

リビングのテーブルに着席した紫音は、早速とばかりに亜夜子のチョコレートを頂くことにする。少し遅いティータイムだ。

亜夜子のチョコはハート型のチョコレートケーキ。

「はい。紅茶ですわ」

「ありがとう。文弥と父さんにはもう渡したのか?」

「はい。文弥には午前中に、お父様には昨日の内に郵送しておきました」

「そうか……美味しいな」

ケーキにフォークを入れた紫音はそれを口に運び、感嘆する。
それを聞いた亜夜子も嬉しそうだった。

「そう言えばお兄様。本家から荷物が届いていましたわ」

「本家から？」

「はい。当主様の名義で。しかも花菱さんに届けさせていましたから、よほどの重要物ではないかと」

「このタイミングで何を……？ 分かった、俺の部屋か？」

「はい」

おそらくはネットワーク環境に晒すことのできない情報。

紫音はそのように予測した。

顧傑がフリズスキャルヴという手段によって情報を得ている以上、
下手に情報をネットワークに乗せる訳にはいかない。機密は直に運ぶのが最適だ。

「それで、スターズとの連携はどうなっている？」

「本家とバランス大佐の繋がりを綿密にしつつあります。四葉は国防軍と仲が悪いですから、いざという時の手段としてUSNAに繋がりが得られたのは大きいです。パラサイトの捜索には進展がありません」

「やはりダメか」

パク、うめえ……を繰り返しつつ紫音は思索する。

分かりやすく動き出すとすれば、それは十師族や警察による包囲網が薄くなった時である。スターズは本国での活動ではないため、それほど気にしないはずである。紫音としては、他の十師族や警察の動きが緩慢になった時が勝負と考えている。

スターズと組んでいる四葉が動く時だ。

最後の一口を楽しみ、紅茶を流し込む。

「美味しかったよ亜夜子。ありがとう」

紫音は立ちあがり、懐から小さな箱を取り出す。

そして亜夜子に握らせた。

「お礼だ。一月後も期待しててくれ」

「まあ、嬉しいですわ。開けても？」

「ああ」

箱の中身はブローチ。

赤いガーネットのブローチである。深紅は亜夜子に似合う色だ。

「ありがとうございますお兄様。次のパーティにはこれを付けて行きますわ」

「ああ。プレゼントした甲斐がある。じゃあ、俺は部屋に行つて本家からの荷物を確認する。亜夜子は……」

「私は夕食の用意をいたしますわ。今日は豪勢にしますわよ！」
「分かった。上で待つよ」

紫音は立ちあがり、二階の自室へと上がる。

扉を開くと、デスクの上に小包が置いてあった。両手で抱えるほどではない。持ち上げてみると、想定よりも重かった。

カッターナイフを手に持った紫音は、サクツと箱を開ける。

(これは……断熱素材?)

中には大量のドライアイスがあった。

そして一番上には封筒に入った手紙が乗っている。紫音が手紙を取ると、その下にはどこかで見たようなハート型の箱が見えた。

「マジですか当主様」

紫音は微かな希望を抱いて手紙を開き、確認した。

『首尾よく顧傑^{グ・ジ}を追っているようね。応援しているわ。あなたのためにチョコレートを用意しました。これを食べて頑張りなさい。』

母より』

いやちよつと待て、まさかチョコは手作り？ という思いが紫音の中で駆け巡る。

まさかあの魔王とすら言われる四葉真夜がチョコレートを作っている姿など想像もできない。恐らくは使用人に用意させたのだろうと予想する。

間違っても真夜がキッチンに立ってチョコを作っている姿など想像したくない。

「……いただきます」

ハート型の蓋を開け、中身のチョコをかじる。

甘くてちよつぴり苦い、大人の味だった。

(後で当主様に電話しないとな……憂鬱だ)

同時に一月後のホワイトデーを思い、溜息を吐いた。

来訪者編 29

暗闇の中で『それ』は微睡んでいた。

いや、『それ』には知覚能力がない。この物質世界を見渡すことも聞くこともできない。しかし、湧きあがる歓喜にも似た感情と使命感を思わせる衝動が『それ』に力を与えていた。

——あの方に

思考する。

どうすればこの歓喜を表せるのだろうか。

——会うために

更に思考する。

どうすればこの衝動を処理できるのかと。

——ああ、動く

そして確かめた。

指が、腕が、足が、肩が、首が……。

口すらも動く。

「アナタハ、ドコニ……」

深夜、第一高校ロボ研ガレージで機械的な音声が響いた。



「ロボットが魔法を使った？ 本当だったのか」

「紫音も手伝ってくれないか？」

「それは噂のロボットを調べるために、ということか？」

バレンタインの浮ついた空気も消えた二月十五日。

その昼休みに紫音は達也から呼び出されていた。その理由はロボ研ガレージで管理している家事手伝いロボット、通称3Hが魔法を使った反応があるというものだ。如何に魔法がブラックボックスに包まれた現象であるといっても、流石に無機物である機械が発動したというのは信じがたい。今朝から噂にはなっていたが、紫音は気にしていなかった。

（そういえばパラサイトがロボットに憑りつくイベントがあったような……確かピクシーだっけ？）

ほぼ強制的に達也に連れていかれる中、紫音はぼんやりとした前世の記憶から知識を引き出していた。言われてみれば、そのような話もあったと思ひ出せる。

P-94という試作型お手伝いロボットにパラサイトが憑りつき、達也の仲間になるイベントである。識別コードがP-94なので通称ピクシーというわけだ。

（一校にパラサイトが襲撃した時、達也が術式解グラム・デモリッション体でパラサイトの一体を吹き飛ばしたんだっけ。それがロボットに宿ったって訳か。当時は何の疑問もなかったけど、よくよく考えると奇跡的な確率だな）

どこかへと消えて行ったパラサイトは別の人間に寄生する可能性もあった。しかしパラサイトが現実世界に干渉するためのサイオン体が吹き飛ばされたことで一時的に弱体化した。結果として人間に

寄生する程の力を取り戻せず、人に近い形状のピクシーへと宿ったのだ。

多少の歴史が変わっても原作と同じ奇跡が起こっていることに感心や呆れを抱いていると、いつの間にかロボ研に到着していた。そこには野次馬の他、五十里啓、千代田花音、中条あずさ、そして遠くを見れば服部刑部もいる。

「司波君、それに四葉君も来てくれたのか」

紫音と達也の姿を真っ先に見つけたのは五十里だった。そしてどこかホッとした表情を浮かべる。

「五十里先輩、お疲れ様です。それに中条先輩もいらつしやったのですね」

「は、はい！ 多くの生徒が不安を感じているようなので……一応」

生徒会長となったあずさだが、相変わらずおどおどとしていた。しかし、彼女が呼ばれた理由は生徒会長であるというだけではない。数少ない、機械に対する知識を有するためだ。

この魔法科高校は魔法に特化した者を集めているため、純粋な機械の知識を有する者は少ない。達也、五十里、あずさあたりが一番の有識者だろう。勿論、この中でも達也がやはり飛びぬけている。

ただ、あずさとしては関わりたい案件ではなかったらしい。不安そうな態度は変わらなかった。

「ロボットが魔法となりますと、オカルトに近いですね。先生方は？」
「さつきまで甘楽先生^{つづら}が見てくれたんだけどね。四葉君の言った通り、まさにオカルトだよ。ハッキリとした結論は出なかった」

「つまり、本当に魔法を使った可能性がある？」

「現にサイオンレーダーには記録が残っているからね。それにサイオン波はP-94のボディパーツから発せられたみたいだよ」

「なるほど……」

答えを知る紫音は異能を発動させる。

つまり波動を観測する能力だ。それにより、P-94の内部を観察した。

達也は紫音が能力を使ったと察知し、問いかける。

「どうだ？」

「ああ、やっぱりいるな」

「いる、というのはパラサイトか？」

「そうだ」

「五十里先輩、確か胸部パーツの中は電子頭脳と燃料電池の格納容器ですよ。サイオンが観測されたのはどちらですか？」

「電子頭脳だよ」

「紫音」

「パラサイトがいるのも電子頭脳だ。種は割れたな」

紫音は風紀委員の特権で持ち歩いているCADを取り出した。フラッシュキャストでほとんどの魔法をCADなしで発動できる紫音にも、それができない魔法がある。たとえばパラサイトを完全に消滅させる新魔法『ディスプレイグレーション』だ。

いつでも発動できるようにしつつ、紫音は近づいた。

達也も背後から張り付くように続く。

「俺が電子頭脳を調べる。紫音は何かあればパラサイトを滅してくれ」

「この位置から殺っておかなくていいのか？」

「機械が魔法を使ったというのは興味深い」

「まあ、そうだな」

「それに調べるのは今じゃない。メンテナンスルームで詳細に調べる」

紫音が知る未来ではパラサイトというパラサイトをアンドロイドに搭載した魔法兵器が実験運用されていた。つまり、それだけの可能性を秘めているということである。達也が興味を抱くのも仕方ない。

それに達也の目的を考えれば危険だからと捨て置けるものでもなかったのだろう。

また達也一人ならば、深雪の安全を考えて封印措置を取ったかもしれない。しかし、ここにはパラサイトを消滅させる魔法を習得した紫音がいる。そのため、達也も大胆な行動に出た。

「中条先輩、メンテナンスルームの使用許可申請をお願いします」

「分かりました……はい、四限目の終わりになります」

「あとはサイオンレコーダー、プシオンレコーダーによる監視を強化しておきましょう。それに生徒たちが近寄らないように通達をお願いします」

「あの、やっぱり危険なんですか？」

「ええ。爆発しないことが分かっている不発弾といったところでしょうか。無暗に触れて欲しいものではありませんね」

「わ、分かりました！」

あずさもそうだが、パラサイトについて知らない者はかなりいる。USNAが実験の失敗で異界から呼び出したデーモンの話はニュースになっているので大抵の生徒は知っていたが、一校をパラサイトが襲った事実を知る者は当事者以外にいない。

しかし不発弾を例に出されたことで、あずさも危険だと察したのだろう。

達也は無暗に盛ったり、脅したりする人間ではない。

(このままなら、原作どおりだな)

そんな中、紫音は一人だけ場違いなことを考えていた。



メンテナンスルームはCADの設定や簡易改造を行える一校の設備だ。専門的な機械が揃っているだけに、使いこなせる生徒はほとんどいない。達也はそんな数少ない生徒の一人だった。

そして今回のチェックでは余計な野次馬は服部が排除している。

紫音と達也の他、深雪、五十里、あずさ、ほのか、エリカ、レオ、幹比古、美月だけが同行していた。ちなみに五十里やあずさ以外のメンバーも野次馬ではないかという点だが、それはそれという奴である。

「とりあえず、今朝あったことの詳細を教えてください」

メンテ室を見回した達也が五十里に尋ねる。

大きく頷いた五十里は簡潔に説明を始めた。

「うん。七時頃のことだね。P-94は自己診断プログラムを走らせていたんだ。そしてプログラム終了後は待機モードになる……はずだった」

「異変が起こったんですね？」

「それがネットワークにアクセスを開始したんだ。それも学内の、特に名簿に関する情報にね。マルチウエアに感染したと思ったみたいで、遠隔管制しているアプリケーションが強制停止コマンドを送った。でも、P-94はコマンドを無視して動き続けたんだ。最終的には学内ネットワークから無線を遮断してようやくアクセスが止まったんだけど……」

「普通ではあり得ませんね。軍用機でもない限り、強制停止コマンドに逆らえるはずありません」

「そうなんだ。ソフトウェアが抵抗できるわけがない」
「なるほど。まさに魔法、ですね」

停止コマンドが受信されていたことは確認されている。つまり、ハードウェアとしてもソフトウェアとしても停止していなければおかしいのだ。しかし、それを無視して電子的に動き続けていた。

「まるで何かを待ち続けているような表情を浮かべていたよ」

「ピクシーには表情を変える機能を搭載していなかったと思いますが……」

「動画が残っているけど、見るかい？」

「あとで確認します。それよりも、電子的に停止しているハズのピクシーが稼働を続けたということは、外部から電子的にしる魔法的にしろ、何かの影響を受けたと考えるおられるわけですね？」

「流石だね司波君」

満足気に頷いた五十里。

彼は達也の能力を認めている一科生の一人だ。改めて達也の優秀さを確認したといった様子である。

事情を確認した達也は、紫音をチラリと見てからピクシーに指示を出した。

「ピクシー、サスペンドモードを解除。今朝七時以降の操作ログと通信ログを確認する。その台の上に仰向けに寝て、インスペクションモードに移行しろ」

「アドミニストレーター権限を確認します」

ピクシーは面倒なキーボード操作などをする必要はない。

AIが日本語を認識し、口頭での命令を受け付けてくれるのだ。ただし、誰の命令も受けるわけではない。命令権限を有する者だけを認識して、コマンドを受理する。

達也の場合、胸に認証を付けていた。
ピクシーは台車の上で達也を見つめる。だが、その視線は胸元ではなく顔に向けられていた。

「達也」

紫音は観測していたパラサイトの波動が瞬間的に活性化したことを知らせる。達也はすぐに回避行動に移った。

同時にピクシーも「ミツケタ」という音声を発し、達也へ飛びかかった。

先に動き始めていたので回避は簡単だ。

しかし達也が回避した場合、その直線上の背後にいる深雪へとピクシーが向かってしまう。

(回避、不可能)

達也はピクシーを受け止めた。

しかし、紫音は何もしない。『デイスインティグレーション』も使わない。何故なら、ピクシーは達也に抱き着いただけだった。

『……』

沈黙が支配する。

そんな中、予想外の人物によって沈黙が破られた。

「へえ、司波君って、ロボットにもモテるんだ……」

それはメンテナンス室に入ってきて、一連の流れを知らない花音だった。

一気に部屋の温度が下がる。

達也は『ロボットにも』とはどういうことだなどと心の中で反論するが、それどころではない。

「お・に・い・さ・まっ。」

「落ち着け深雪。話せばわかる」

そして室温を下げた犯人は深雪である。

まるで浮気現場を見られた男だった。

深雪だけでなく、ほのかも咎めるような視線を向けていた。

(参ったな……)

鈍感な男、達也の言い訳は止まらない。

「俺から抱き着いたわけじゃないことは深雪も見えていただろう?」

「お兄様なら回避できたはずです。まして紫音さんの合図があったのですから」

「俺が避けたら深雪にぶつかっていたらだろうか?」

それを聞いてレオが感心する。

「あの一瞬でそこまで計算したのかよ。流石だな」

「それぐらい当然でしょ?」

一方でエリカは『当たり前』といった様子でレオにツッコむ。

そこまで言われ、深雪は萎れるように謝罪した。

「申し訳ございません。まさかそこまで考えてくださっていたなんて……」

ちなみに花音は何のことか分からないという表情を浮かべており、五十里から一連の流れを聞いて呆れていた。

そしてひと段落したところで達也はピクシーを引き剥がすことに

する。

「紫音」

「問題はない」

「分かった……ピクシー、離れてくれ」

何故か名残惜しそうな表情を浮かべている気がしたが、命令通りにピクシーは離れた。それでいて熱っぽい視線を達也に注ぎ続ける。

達也はどうにもそれが気になった。

気のせいだと思えば、気のせいにも思えるが、パラサイトが宿っているだけに油断ならない。そこでパラサイトに対して感受性を有する紫音と美月に問いかけた。

「紫音と美月にはどう見える？ 幹比古は美月を頼む」

幹比古は簡易的な結界を敷き、美月へのプシオン光による刺激を弱めた。

二人は感知した結果を告げる。

「このパラサイト、ほのかに繋がっているな」

「はい。間違いなくほのかさんのパターンです！」

紫音には分かっていたことだが、ピクシー内部のパラサイトとほのかは接続されている。しかし、ほのかにパラサイトが宿っているわけではない。ただ、情報次元的に結合しているだけだ。

ただ、勿論ほのかは驚愕した。

「え、ええええええっ!？」

どういうことだ、というのがこの場にいる全員の総意だった。そこで紫音が詳細な説明をする。

「このパラサイトはほのかの思念の影響下にある。ただ、ほのかが操っているわけじゃない。そもそもパラサイトは単独での思考能力を持たず、寄生体の精神に由来した精神を獲得するわけだ。このパラサイトはアンドロイドに宿りつつ、ほのかの思念によつて精神性を獲得した……というわけだ。ただ、その繋がりが生じた理由については不明だな。心当たりはあるか？」

「え……」

「そうです！ そんな感じですよ！ あれ？ ということは、ほのかさんが強く思ったことがピクシーに焼き付いた……ということですか？」

よく見えている美月は紫音の説明に納得する。

一方でほのかは驚愕と混乱で言葉を発することができない。

顔を赤くし、両手で覆って恥ずかしそうにしていた。彼女にも心当たりがあるらしい。

『その通りです』

そして美月の疑問に答えたのは、ピクシーだった。とても機械とは思えない、流暢な声で話し始める。答え合わせのように、パラサイト本体から事情がもたらされた。

『私は彼に対する、彼女の想いを受けて覚醒しました』

彼、彼女とは言うまでもない。達也とほのかだ。

「テレパシー……なるほど。魔法ではなくサイキックだったのか」

「そのようですね五十里先輩……言語によるコミュニケーションは可能か？」

『はい』

「随分と流暢だが、どうやって言語を学んだ？」

『前の宿主より知識を引き継いでいます』

「ということはやはり、あの時のパラサイトか……」

達也は渋い表情を浮かべた。

つまり、このパラサイトは達也が『術式解体』で吹き飛ばしたパラサイトということだ。自分の魔法が原因で、ほのかに間接的なパラサイトの影響がもたらされた可能性がある。

まずはそれを確かめなければならぬ。

「まず、お前のことは何と呼べばいい？」

『この体の個体名称については、先ほどから貴方が呼んでいました』
「ではピクシー、お前は俺たちに敵対する存在か？　そしてほのかに害を与える存在か？」

それは幾らなんでもストレート過ぎるだろう。紫音以外はそう思った。

しかし、達也は既に四葉家が解析したパラサイトの特徴をドキュメントにて理解している。パラサイトが人間よりも純粹であることを知っていた。それが特に、ほのかを基準にしたパラサイトなら尚更だ。

達也の予想通り、ピクシーは素直に返答した。

『私は貴方に従属します』

「何故？」

『貴方のものになりたい』

ピクシーは両手を胸の前に組み、そう告げる。

それは本当に人間的だった。

『私は個体名『光井ほのか』の残留思念を受けて覚醒しました』

ヒュウツと鋭く息を呑む声が後ろから聞こえる。

勿論、ほのかの口から出されたものだ。達也と紫音が振り返ると、深雪とエリカが二人がかりでほのかの口を抑え込んでいた。

その間にもピクシーは続ける。

『貴方に尽くしたい』

ほのかは抵抗して暴れる。

『貴方の役に立ちたい』

背後の呻き声が激しくなった。

『貴方に仕えたい』

もはやなりふり構っていないが、流石に深雪とエリカの二人から逃れることはできなかつたようだ。

『貴方のものになりたい。貴方に全てを捧げたい。それが私を目覚めさせた祈りです』

パタン、と背後で音がする。

紫音がチラリと目を向けると、力尽きたように膝を突くほのかの姿があった。

まさにこれは公開処刑。

精神的処刑である。

『私を突き動かすのはこのような欲求です。故に貴方に従属します』

それはトドメだった。

ほのかの思念と接続し、影響を受けているという事実は紫音と美月が証明してしまった。つまり、ピクシーの発言は、一字一句の間違ひなくほのかの意思ということだ。

やっべ。

まじかよ。

ドン引きです。

口には出さないが、そう思われているようにほのかは感じた。

「興味深いな」

「達也、それはどちらの意味で？」

「聞かずとも紫音なら分かっていると思うが？」

「まあ、情報的、あるいは学術的な意味だろう？」

「分かっているじゃないか」

どちらにせよ、ほのかはガツクリと崩れ落ちた。

来訪者編30

東京に潜伏を続ける顧傑は、大胆な行動に出ていた。各地に散らしていたパラサイトたちを一か所に、しかも自分の場所を集めたのだ。四葉紫音がパラサイトの位置を感知できることは彼も知っている。それでも尚、彼には十二体のパラサイトを集める理由があつた。

(ふむ……これが限界か)

顧傑の前にいるのはフォーマルハウトだ。スターズの恒星級魔法師にして、一番古いパラサイトの一人である。肉体への馴染みという観点においては最も高い数値を誇るだろう。そんなフォーマルハウトに対して実験を行っていた。

それは一人の人間の器に複数のパラサイトを存在させるという実験だ。

本来、一つの肉体には一つの精神という関係が成り立たなければならぬ。パラサイトも人間と融合する際、本来の精神とも融合することで一つの精神として成り立たせている。この原則が破れるとすれば、それは多重人格者だけだろう。

しかし顧傑は成し遂げた。

フォーマルハウトに対し、追加で六つのパラサイトを寄生させたのだ。それも精神融合という形ではなく、独立した精神体として融合させることに成功した。ただ、これは非常に特殊なケースと言える。元々、パラサイトは一つだった。それが次元を超えた衝撃で分裂したに過ぎない。それにパラサイトそのものは自我という者が存在せず、融合した精神体の精神性に依存する。そういった性質を利用し、また顧傑の有する魔法技術によってこの企みは実現したのである。

「調子はどうだ。不調や違和感を感じるか？」

「問題ない」

フォーマルハウトは淡々と答える。記憶にも人格にも影響はない。一見すると成功に思える。

（パラサイトを七体分宿した程度で……あの四葉紫音を倒すこととはできん）

しかし顧傑は満足できなかった。

その理由は紫音の戦略級魔法『リベリオン』の存在である。精神波長の同調により、魔法演算領域を一時的に歪め、紫音のものにしてしまう異能的魔法だ。発動終了後は世界の修正力により元の魔法演算領域形状へと戻る。

この『リベリオン』の最も恐ろしい部分は、周囲の人間の魔法演算領域を紫音と同様にすることで、強制的な乗積マルチプリケイティブキャスト魔法を発動できるところだ。千人の人間に『リベリオン』で接続すれば、概算で千倍の魔法力を得られる。

顧傑が開発したソーサリーブースターもびつくりのドーピングである。

そんな紫音に対抗するべく、ソーサリーブースターの技術を応用してフォーマルハウトの強化を試みた。しかし強化の限界は思ったよりも早く訪れた。

（今のままで正面から構えるのは愚策。それに周公瑾もない。引くべきか）

そもそもは日本との一番強い接点である周公瑾が消えたことで、顧傑が自ら日本に訪れることになった。だが結果は惨敗。憎き四葉によって顧傑は追い詰められていた。

（仕方あるまい）

顧傑は日本での活動に区切りを付けた。

四葉の思惑通りに。



二月十七日、夜。

達也はピクシーからパラサイトについての一連の情報を聞き出し、四葉家の分析と比較することでより精度の高い情報を纏めていた。その結果をテレビ電話で紫音と共有していたのだ。

『——ということだ』

「なるほどね。ピクシーではパラサイトを感知できないか……」

『分かるとすればどうするつもりだったんだ？』

「それはまあ、討伐だな」

パラサイトによって憑依されたヒューマノイドロボット、ピクシーは達也に対して従属の意思を見せた。ただしピクシーは一校に貸し出されているロボットなので、流石に持ち帰ることはできない。学校にいる間だけ、ピクシーを通じてパラサイトについて情報収集を行っていた。

『それで紫音。この後はどうするつもりだ？』

「母上殿の要望……正確には四葉のスポンサーからの要望は顧傑グ・ジを日本から追放だ。色々と誘導して大亜連合あたりに逃亡するようにしている。逃亡の準備も裏でやっていてね。そろそろ動いてくれると思うんだが……」

『一校の時のように襲撃してくる可能性はないのか？』

「その時は『デイスインテグレーション霊子極散』で数体ほどパラサイトを消滅させるさ。それに顧傑グ・ジが相手をするのは俺たちだけじゃない。十師族の七草に十文字、そして千葉家と吉田家、あとはアメリカ軍魔法師部隊スターズ

もいる。いい加減、日本から出て行くことを考えているハズだ。そのために黒羽の部隊も毎晩のように巡回させているし、俺も見回りしている。スターズの方は亜夜子の方で色々と相談してくれているから、黒羽の巡回と合わせて効率よく包囲を狭めているよ」

紫音はテレビ電話のモニターに、幾つかのデータを見せる。それは七草、十文字、千葉、吉田、黒羽、スターズの動きと探索範囲を示した地図だ。それを見る限り、顧傑グ・ジが永続的に逃亡するのは非常に難しいと言える。

更に言えば、これに加えて警察もいるのだ。

密入国者でもある顧傑グ・ジやパラサイトたちは怪しまれる立場なのだ。達也も納得した。

『これは凄いですね。お兄様』

後ろで深雪も感嘆した。

滅多に手を取らないそれぞれの組織が協力することで、これほどの包囲網を構築できることが立証されたのだ。

だが、ここで異変が生じる。

モニターの半分が切り替わり、全く別の映像が浮かび上がった。金髪碧眼の、見るからに少年といった風貌があった。ただ、おそらく年齢は紫音と同じである。

紫音はこの少年を知っていた。

(レイモンド・クラーク……出たな)

正史において世界を引っ掻き回した厄介な人物である。情報収集能力に長けた紫音ですら、手玉に取られる可能性があるとして警戒していた。

少年、レイモンドは映像の中で話し出す。

『ハロー。聞こえているかな？　僕はレイモンド・セイジ・クラーク。『七賢人』の一人だよ』

随分と流暢な日本語で話すレイモンドは、コミュニケーションを取る気配を感じない。録画映像を流しているだけだろうと紫音は推測した。

半分に分けられた画面のもう一方には、表情を変えた達也と深雪の姿があった。つまり、向こう側にも映像は見えているというわけである。

『君のことはティア……と言っても分からないか。シズクから聞いているよタツヤ。それに日本の戦略級魔法師、シオン・ヨツバ……君のこともよく知っている』

雫はリーナとの交換留学でアメリカにいる。そしてレイモンドは雫と同じ学校に通い、偶然か必然か、雫と接触した。

『こうして僕が映像越しに現れたのは他でもない、ある情報を伝えるためだ。日本のパラサイト事件を裏から操る顧傑、あるいはジード・セイジ・ヘイグと呼ばれる男のね』

それを聞いて画面の向こうにいた達也の表情が変わった。今の達也は情報の有用性、信用できるかどうかなどを吟味しているのだろう。

紫音としてはレイモンドの正体をよく知っているので、警戒はしつとも深くは考えない。

『反魔法師組織「ブランシュ」の総帥にして犯罪シンジケート「ノー・ヘッド・ドラゴン」の前首領、また僕と同じ「七賢人」の一人。そんな彼も今の状況は困難を極めているようだね。流石はあのヨツバに連なる者だと称賛するよ、シオン。そして僕が君たちに送る情報は、

ヘイグの行方さ』

そこまで言ったレイモンドは慌てて言葉を付け足した。

『ああ、同じ「七賢人」といっても仲間じゃないよ。そもそも「七賢人」とはフリズスキャルヴにアクセスできる七人のオペレーターのことさ』

紫音もこのフリズスキャルヴを欲しいと思っていた。それで『八咫鳥』という疑似精霊魔法を開発したのだ。だが、残念ながらフリズスキャルヴほどの利便性はない。

達也もフリズスキャルヴについて噂程度に聞いたことはあったが、実情は知らなかった。

『フリズスキャルヴというのは、全世界傍受システム「エシユロンⅢ」の追加拡張システムの一つだね。バックドアを利用してエシユロンⅢすら上回る効率で情報を収集することができる。ただ、その本体がどこに存在するのかわからない。ハードの存在しない、プログラムだけの存在なのかもしれない。それにフリズスキャルヴのオペレーターはそれ自身が選択を行っていて、こちらから干渉する権限はないんだ』

改めて聞くと凄まじいシステムである。

多少の太い回線さえあれば、一般家庭であつても国家の諜報機関にも匹敵する情報収集が可能となる。フリズスキャルヴを作成し仕込んだ人物は快樂主義なのかもしれない。

『とはいっても、フリズスキャルヴにデータストレージを漁る権限はない。手に入れた情報は賢者^{セイジ}たちの脳内限定なのさ。あくまでも傍受システムというわけだ。それにオペレーターの一人が検索した情報は、履歴としてシステムに記録される。その記録は他のオペレー

ターにも閲覧できるといというのが一つのリスクかな』

つまり検索内容によってはオペレーターであることが他のオペレーターにバレてしまうということだ。たとえば検索内容の偏りから居住国家や居住地域が判明することもある。

『僕もそんな経緯でハイグの情報を掴んだというわけさ。ついでに、ハイグが執着する君たちやヨツバという一族にもね』

達也の背後で深雪がハツと息を呑んだ。

つまり賢者を名乗る存在によって達也と深雪の情報が全て開示されてしまう可能性がある。秘密主義の四葉にとって、賢者は勿論だが顧傑グ・ジイも非常に危険な存在だった。それが分かったのだ。

知識のある紫音は初めから知っていたものの、危険な相手であることに変わりはない。

それは画面の中でにこやかに話すレイモンドも同様だ。

『ハイグの目的は魔法師を社会的に追いやることだ。そうすれば魔法後進国である大亜連合は軍事的バランスを改善できるからね。彼らが世界の覇権を手に入れるため、というわけさ』

レイモンドはコミカルなウインクまでしている。

しかし笑っていられる話ではない。

ただ紫音もそうだが、達也や深雪も顧傑グ・ジイの真の目的を知っている。それは四葉家への復讐という目的だ。彼に大亜連合への帰属意識などない。そもそも彼は崑崙方院に裏切られた古式魔法師だ。大亜連合のために動くということはない。

四葉への復讐と、その四葉が所属する日本の壊滅。大亜連合は利用しているに過ぎない。

『さあ、ここからが情報だよ。信じるか信じないかは君たち次第。お

代は特別にタダさ。とはいっても、この情報はシオンのお蔭で手に入ったものだよ。だから僕の力は本当に小さなものさ。明日、君たちの日付で二月十八日の夜、全てのパラサイトが横浜に移動する。彼はノー・ヘッド・ドラゴンともコンタクトを取っているらしい。おそらく港から脱出するつもりだ。そこで君たちにパラサイトの殲滅をお願いしたい』

情報には何の根拠もない。

しかし紫音が関わっているということ、達也は信じる気になっていた。そして紫音は少し面白くない表情を浮かべていた。

『この情報はUSNAにも伝えたよ。どういうわけかスターズはヨツバと協力関係にあるみたいだから、よく相談して決めることだ。そうそう！ 言い忘れていたけど、サエグサやクドウも動き始めたみたいだ。パラサイトを殲滅するつもりなら、気を付けることだ』

最後にそう告げて、レイモンドは画面から姿を消した。

そして数秒の後、紫音が先に口を開く。

「ここは俺が対処する……と言っても来るつもりなんだろう？」

『ああ。昨晚、伯母上に電話をして独立魔装大隊とのコンタクトに許可を得た。流石に一校が襲われた以上、許可を頂けた。それに俺を疑っているスターズは四葉家の管理下にある』

「……母上殿の依頼は顧傑グ・ジーを大亜連合に逃がすことだ。分かっているよな？」

『ああ。だが、パラサイトを滅することに問題はないのだろうか？』

「それはそうだが……間違いで『分解』するなんてやめてくれよ？ 母上殿に怒られる」

そう語る紫音に対し、達也と深雪は良い顔をしなかった。

二人は四葉真夜に対してよい感情を抱いていない。それは完全な

味方ではない自分たちの支配者だからだ。深雪が次期四葉家当主候補である以上、真夜が危害を加えてくることはない。だが、危害を加えないということが良いことであるとは限らない。四葉という家に縛られ、死ぬまでその役目を全うすることになるのでは意味がない。

『それよりも紫音。横浜から逃げるということだが、何か仕組んだのか？』

「顧傑が高度な情報収集手段を有することは分かっていたことだ。だから逆に利用して誘導を仕掛けた。情報収集能力で負けているのは癪だが、情報の使い方では黒羽の名折れだからな」

『今のお前は四葉だろうか？』

「黒羽のアイデンティティを忘れたつもりはないさ」

紫音は顧傑がフリズスキャルヴを利用していることを知っていた。そこで四葉、スターズ、七草、十文字、千葉、吉田、警察をメインとした包囲網を構築したのだ。これは原作の知識を有する紫音だからこそ考案できた手法でもある。

各勢力による包囲網により顧傑へと圧力をかけ、そこに少しずつ綻びを出して移動先や移動ルートを限定する。基本的な情報活用である。勿論、流石の紫音なのであからさまで分かりやすい誘導はしていない。

つまりレイモンドからの情報提供がなくとも、紫音は顧傑が横浜に赴くことを知っていた。そのように誘導したのだから。

「それと達也、あのピクシーとかいう機体を購入したらしいな」

『ああ。一校に貸与されたままだが、所有権は俺が購入しておいた』

「メイド型ロボットか……変な趣味だと思われなければいいな」

『余計なお世話だ』

その後は翌日夜の打ち合わせをして、紫音は電話を切った。



七草邸にて、当主である七草弘一はその師と連絡を取っていた。

「九島先生、夜分に失礼します」

『うむ。パラサイトの件だな？』

「はい。例のパラサイト事件を引き起こした首魁が横浜に逃亡するという情報を手にしました。私の手の者を差し向け、対処するつもりです。しかしアメリカ軍や、あの四葉家も動いているという話もあります。そこで九島先生にも力を貸していただけないかと思つた次第です」

画面の向こう側で烈は悩んでいるように見えた。そのことに弘一は疑問を感じる。古式魔法に由来する魔法を研究している第九研究所の出身である以上、パラサイトには一定以上の興味を示すと考えていた。それに烈は四葉家を警戒している。食いついてくると思つていたのだ。

『それで、弘一は私に何をしたいのだ？』

「パラサイトを捕獲し、そのパラサイトを融通して頂きたいのです。我々も研究をしたい。あるいは共同研究でも」

『ふむ。かつての師として、その願いを聞き入れることに忌避はない』
「であれば……」

『しかし弘一よ。既にお前は十師族の長の一人。引退した私に頼っているようでは器が知れる』

その通りだ。

勿論、弘一も理解している。何度も老師こと九島烈に頼ることが十師族の長として愚かな行為であることは重々に承知している。

『弘一よ。陰謀を巡らせるならば底を見せてはならん。悟らせてはならん。器を見極められ、底が知られた時点でその者は終わりだ。お前は何度、四葉にしてやられた？ いい加減、掌で踊らされているのだと気付くのだ』

「理解はしています。しかし、そこまで言いますか」

『ああ。かつての師として敢えて言わせて貰おう。今回は大人しく駒に殉じることだ。それが我慢ならないと言うのであれば、好きにするがよい。ただし、私は何もしない。私はただ見るだけだ』

そう言い残し、烈は電話を切った。

弘一は深く椅子に腰かけ、目を閉じた。

(あの九島先生が……何故)

これまでなら、仕方ないと言いつつも協力してくれていた。勿論、今回はしっかりとした交渉によって対価を用意する予定もあった。

老いた、とは思わない。

あの烈に限って、日和つたということは考えられない。

つまり冷静に考えて、今回は引くべきなのだと忠告してきたわけだ。その意味が分からない弘一ではなかった。

(だが、パラサイトはあまりにも魅力的だ)

魔法力を強化する性質、そして異次元の魔法生物という特徴。

これらは真由美からの報告にもあったことで、確実であろうと想定している。詳しく調べれば、第七研究所の研究の大きな貢献をもたらすことだろう。第七研究所は『対集団戦闘を想定した魔法』を研究している。単騎の魔法師で多くの敵兵力を相手にすることを想定しているため、魔法力の強化といった第四研究所に近い研究も魅力的に映る。

(軍の伝手を頼るとするか)

直接の手出しは厳禁された。

ならば、伝手を使って遠回りに手を出す他ない。

彼はある部署へとコンタクトを取った。国防情報部防諜第三課へと。

来訪者編 31

二月十八日、午後二時。

この日は土曜日なので魔法科高校も午前で終了だ。紫音は黒羽家
が用意した隠れ家で準備を進めていた。だがそこで真夜から電話が
かかってきた。

携帯端末に映された『当主様』の文字に溜息を吐きつつ、通話を才
ンにする。

「紫音です」

『忙しいところをごめんなさいね』

「いえ」

『用件だけを手短に言うわ。国防情報部防諜課第三課が動いている
わ』

「国防軍が動いているということですか？」

『七草家よ。先生がこちらに情報を渡してくださいました。弘一さん
はどうやってもこちらに手を出したいようね』

紫音も七草家の介入は予想していた。

あの家は様々な伝手を有しており、九島家という味方を剥がしたと
ころで何かしらの手段を取ってくる。正確には九島家というより九
島烈個人との伝手だが、どちらにせよ紫音はそちらを抑えているので
問題はない。

「随分とややこしい戦力図になりそうですね。四葉とスターズ、それ
に達也もお友達や独立魔装大隊と何か企んでいるようですし、加えて
七草ですか」

『そうね。でも紫音さん、私たちの本当の目的は忘れていませんね？』

「顧傑^{グゼ}を上手く国外に逃がす、ですわね」

『分かっているならいいわ。私たち四葉は既にパラサイトへの対抗策
を得ていますから、あの男を逃したところで問題にはなりません。寧

ろ今後の布石になるでしょう』

「心得ています」

『朗報を期待しているわ』

通話が切れたことを確認し、紫音は端末を降ろす。

すると部屋に亜夜子が入ってきた。電話が終わった途端に入ってきたことから、部屋の前で待っていたのだろう。

「お兄様、当主様から何か？」

「七草の手の者が介入してくるらしい。カノープス少佐にも仮想敵戦力の追加を知らせてくれ。詳細は俺が後でまとめておく。父さんなら何か知っているだろうし、そっちに聞いてみるか……」

「分かりましたわ」

「それで亜夜子は何の用だったんだ？」

「文弥の部隊がノー・ヘッド・ドラゴンの動きを掴みましたの。念のため紙にまとめた資料をお持ちしましたわ」

「助かる」

「^{グ・ジ}顧傑がフリズスキャルヴという最強の諜報ツールを有している以上、重要な情報のやり取りは物理的手段を用いるしかない。一度でも電波に乗せてしまうと、フリズスキャルヴで拾われる可能性があるのだ。」

紫音は見せても良い情報と見せたくない情報を巧みに使い分けていた。あまり紙による伝達ばかりをすると電子的情報の少なさから逆に怪しまれてしまうので、この辺りの匙加減が難しい。

「ノー・ヘッド・ドラゴンは何と船で逃げるつもりか……こっちで逃走経路は確保してやったか？」

「そちらも文弥に任せましたわ。あの子ったら張り切っちゃって」

「まああいつなら問題ないだろ。なんだかんだで優秀だからな。俺の代わりに黒羽を継ぐ可能性だって大いにあるわけだし」

「お兄様は四葉家次期当主最有力候補ですし、最近では文弥も色々頑張っているみたいですよ」

「よし、ならそっちは任せて俺たちも仕事をしないと」

紫音は読んだ資料を破り、発火の魔法で処分する。

作戦開始予定時間は六時間後。時間はぎりぎりだ。二人はまた忙しく準備を始めたのだった。



今夜にでもパラサイトの一団が脱走すると知らされた達也たちだが、こちらでも準備を進めていた。吸血鬼事件の主犯をUSNA軍より先に始末するという名目から、独立魔装大隊の協力も得ている。ただ政治的配慮もあつて軍が直接動くことはなく、あくまでも達也を助けるというものに留まっていた。

しかし達也からすれば縛られることなく恩恵だけを受けられるという点で悪くない。

そして何より、達也には切り札とも呼べるものがあつた。

「ピクシー、反応は？」

『マスターの予測通り、こちらに向かっています』

「そうか」

それを聞いた達也はすぐにエリカや幹比古、そしてレオに連絡した。病み上がりであるはずのレオも、『リハビリ代わりだ』などと意気込んでいたので呼んでいる。

「お兄様、では……」

「これから一戦交えることになると思う。できるだけ逃したくはな

い。紫音は別の思惑で動いているみたいだが」

達也はチラリともう一人の同行者に目を向けつつ、言葉を濁した。そのもう一人とは、光井ほのかである。彼女は達也と深雪が四葉とかかわりがあると知らない……いや知ってはいけない人間なので、言葉を濁すしかなかった。

一方でそんな配慮をされているとは知らないほのかは、首を傾げる。

「四葉君も何かしているんですか？」

「十師族だからね。七草家や十文字家も色々としていたと聞いているよ」

「あ、そうですよね」

達也に関しては疑うことを知らないというべきか、ほのかは実に素直だった。こうして余計な詮索をしないからこそ、達也も彼女を連れてきている。

だが、彼女を連れてきた最も大きな理由はピクシーにあった。

人型ロボットであるピクシーに宿ったパラサイトは、その根源がほのかと繋がっている。ピクシーの力を借りるにあたって、力の源であるほのかを連れてくるしかなかった。また安全の面も考えてのことである。

「俺たちはピクシーを利用してパラサイトをおびき寄せ、封印する。その関係上、ピクシーと繋がっているほのかにも危険が及ぶかもしれない。本当にいいんだな？」

「大丈夫です！ 私、頑張りますからー！」
「分かった」

もう三度目にもなる確認だったが、ほのかは激しく首を縦に振っている。やはり緊張しているのかもしれない。

『マスター、来ます』

ピクシーの警告から三秒後、一体のパラサイトが現れた。



横浜の倉庫エリアに一台の車が停止する。

自動化された現代においては珍しく、運転手が自ら動かしていた。運転手はそそくさと外に出た後、すぐに後部座席のドアを開いた。

「こちらへ」

明かり一つない倉庫の一角は海に面しており、そこには一隻の船が停められている。後部座席から現れた浅黒い肌の男は、無言で船へと進んでいった。

だが次の瞬間、男二人は倒れる。

そして複数の影が倒れた男たちを囲んだ。黒で統一された彼らの中に、赤い髪を振り乱す女が一人。USNA軍が誇る戦略級魔法師にしてスターズ総隊長アンジー・シリウスである。

「カノープス少佐、確認を」

「はっ！」

シリウスの命令に従って、同行していたカノープスがまず浅黒い肌の男を調べる。僅かな月明りを頼りに麻醉銃による狙撃で気絶させた男二人を検分するも、カノープスはゆっくりと首を横に振った。

「偽物です」

「くっ……次です」
「はっ！」

スターズはパラサイト化した裏切り者フォーマルハウトを始末するため、辺り一帯の監視を強化していた。このために四葉の伝手は勿論、USNA本国に控える高官たちの伝手も使っている。スターズが堂々と活動することはないものの、こうして怪しげな作戦を実行中でも監視カメラなどを気にする必要がない。

しかしながら、ここまでしておきながら成果がないのは悔やまれる。

シリウスからは無言の苛立ちが感じられた。

(フレディの始末は必ず私たちが……いえ、私が)

彼らスターズが顧傑^{グ・ジ}を追う目的はただ一つ。

脱走兵となってしまうアルフレッド・フォーマルハウトを始末することである。パラサイト化してしまったとはいえ、脱走兵の始末は総隊長たるシリウスの仕事だ。そのために太平洋を渡って日本にまで来た。

偽物だったなら、本物を見つけ出すまでのこと。

七賢人の言葉が正しいならば、ここに顧傑^{グ・ジ}とパラサイトが現れるのは間違いない。その情報を頼りに、彼らはまた闇夜に消えた。



達也たちの前に現れたのはサングラスをかけた外国人の風貌の男だった。

彼の他に誰もいないことは精霊の眼のお蔭で分かっている。そのため奇襲の心配はない。ただし古式魔法の中には情報次元を欺くものもあり、顧傑グ・ジィもそれを得意としているので油断はできないが。

「お前は何者だ？」

「我々の名はフォーマルハウト。お前たちがパラサイトと呼ぶ者だ」

フォーマルハウトはうお座に属する恒星だ。

すなわち星の名称をコードネームとするスターズの関係者であることが分かる。そして恒星の名を持つスターズはエリート中のエリートだ。そんな人物にデーモンが憑りついているとすれば、まさしく警戒に値する。

人の形状でありながら人でない気配を発するという点においても違和感があつた。

「我々はそこに囚われた同胞を解放するために来た」

「一つ質問だが、我々とはどういう意味だ？」

「君たちがパラサイトと呼ぶ我々は個々という概念を持たない。そこに囚われている同胞は個別の存在であると同時に同一の存在でもある。我々の一部を取り戻したいのだ」

「つまりピクシーを引き渡せ、ということか？」

「その通りだ。大人しく引き渡すならば、我々は日本に対して危害を加えるつもりはない。我々はこの国から出ていこう」

一見すると魅力的な提案だ。

パラサイトは日本の魔法師に対して大きな被害をもたらしている。実際、達也の身近な人間であるレオも被害に遭っているのだ。そのパラサイトがこれ以上の危害を加えないと約束してくれるならば、ピクシーを引き渡す価値があるかもしれない。

しかし、達也は根本的にパラサイトを信用していないし、またパラサイトに関する情報を得ていた。

「お前たちは元々この国から出ていく……いや、逃げ出すところなのだろうか？ どうしてそれが交渉になると考えた？」

「ならばここで破壊し、我々の同胞を取り戻すまでだ」

達也はフォーマルハウトから魔法の兆候を検知する。

パラサイトとなる前は発火念力の保有者だった。超能力に類する彼の能力は、視認した場所から発火させるというものである。それはパラサイト化によって強化されていた。またサングラスのお蔭で視線の先も分かりにくく、初見ならば対応は難しい。

しかし精霊の眼という反則級の知覚系魔法を有する達也は見逃さない。

即座に術式解^{グラム・デイスバージョン}散で魔法を消去した。

「随分と早くじゃないか？ 時間にも追われているのか？」

フォーマルハウトも自身の魔法が消滅させられたことに気付いたのだろう。苦々しそうな表情を隠すこともしない。

そして達也の予想通り、彼には時間がないのだ。

四葉、スターズによる包囲網は彼らを確実に追い詰めていた。

そして追撃とばかりにピクシーは思念を発する。

『私の望みはマスターと共にあり、マスターの物であることです』

それはパラサイトとしてあるまじき願いだった。

願いの元になったほのかは達也の後ろで引きつった表情を浮かべているが、そんなことはお構いなしとばかりにピクシーは畳みかける。

『私の元々の存在がなんであろうと、願いの核がどこにあろうと、私は私です。私が私でなくなるのは嫌です！』

異界の精神に機械の体。

しかしピクシーは確実に一つの個を確立していた。

とはいえフォーマルハウトからすれば許せることではない。機械の身体がパラサイトとしての本能を奪い去り、ほのかの願いという表面的かつ最も強い精神を獲得してしまったのが今のピクシーだ。ならばその枷から解放することがフォーマルハウトの最優先事項となる。

「貴様！」

再びフォーマルハウトは発火念力を発動し、ピクシーを焼き尽くそうとする。パラサイトは肉体に依存する生命体ではなく、精神だけの存在だ。寄生している体が破壊された場合、新たな肉体を探し求めて彷徨うことになる。

精神体だけで存在を維持できる、間違いなく人を越えた悪魔のような生命体だ。

しかしやはり達也が魔法式を消去し、フォーマルハウトの超能力は掻き消されてしまう。更にここで達也たちの援軍が現れた。

「ぐっ！・ がっ!？」

死角からの激痛にフォーマルハウトは呻く。

しかし倒れている暇もない。追撃は気合の叫びと共にやってきた。

「うおおおおおおおらああああー！」

「ぐおっー！」

まるで車にでも撥ねられたかのような衝撃だった。

フォーマルハウトは人体とは思えない勢いで宙を舞い、地面に叩きつけられる。

「へっ！　しっかりと借りは返させてもらったぜ」
「あんたがやられたのはそいつじゃないでしょ？」
「うるせ」

奇襲を仕掛けたエリカは血糊を払いつつ折り畳み式の刃を再び構える。そして追撃役を見事に果たしたレオが腕に装着した武装一体型CADは硬化魔法をメインに登録している。フォーマルハウトを弾き飛ばしたのも硬化魔法による強化を施したタックルだった。

しかしこれでパラサイトを倒せるならば、一校を襲撃してきた時点で全て返り討ちになっている。

警戒すべきは人外じみた再生能力だ。

一校での事件を経験していなければここで油断していたことだろう。エリカとレオがいつもの言い合いに興じている間に、幹比古がしっかりと仕事していた。

(これは！)

起き上がろうとするフォーマルハウトは自身の周囲に浮かぶ複数の式を感知する。古式魔法の式とはいわゆる式神の類だ。つまり独立情報体である精霊を介する術式のことである。

この術式の利点は発動者の位置情報を誤魔化す術式を混ぜやすく、遠距離発動や遅延発動など応用もしやすい。

この場合、フォーマルハウトはいつのまにか術式に囲まれていたという状態になるのだ。

ただ幹比古が式神を紙を媒体に打っていたことがフォーマルハウトにとって幸運にはたらいた。発火によって次々と式神を排除し、悪霊払いの術式を破壊したのである。

(このままでは不味い)

このままではピクシーの内部に囚われた同胞のパラサイトを解放するという思惑が失敗するどころか、自分たちも囚われる可能性すらある。既に四葉家によって複数の同胞が囚われていることは顧傑グ・ジから聞いていた。

そこでフォーマルハウトも逃げに徹することを決める。

しかしそんなことを思った瞬間、強い冷気を感じた。二月ということも考慮しても不自然な冷たさであり、それが魔法による事象改変であることを知らしめてくれる。

「私が逃すと思いましたか？」

人ならざる者へと放たれるその魔法は『ニブルヘイム』。

空気すらも液体化させる高等魔法はフォーマルハウトを瞬時に冷凍させた。魔法の発動者である深雪は女王の気品すら感じさせる言葉を告げた。

「貴方に手加減は不要と思いましたが、全力で放ちました」

冷たい笑みを浮かべる深雪が目映り、フォーマルハウトは動きを止めた。



紫音はトラックに偽装した装甲車の中で待機しつつ、情報を集めていた。傍らでは亜夜子がキーボードをタイプしながら集めた情報を整理している。

「お兄様、横須賀外国人刑務所から例の二人が脱走したようですわ」

「手引きしたのは……まあ顧傑グ・ジか」

「得られた情報から死体爆弾が使われた可能性が浮上しましたので間違いありませんわ。追撃いたしますの？」

「横浜もそろそろ乱戦に突入するわけだし、顧傑グ・ジにはさっさと海に出てもらいたいな。俺が出る。ちよつと急かせてみようか」

「御供しますわ！」

「頼む」

亜夜子の固有魔法である『極散』は存在を隠蔽する上で非常に有用だ。紫音も専用CAD黒薙を装備して装甲車の扉に手をかける。

「刑務所の件は情報隠蔽を進めておけ。メデイアに露呈すると面倒だからな。それと脱走した呂剛虎リュウカンフウと陳祥チエンシャンシエン山は追跡だけでいい。俺が少々痛めつける」

装甲車内で作業をしていた黒羽の部隊は紫音の命令通りに実働隊へと指示を出し始める。

それを確認して紫音と亜夜子は外に出た。

来訪者編32

黒羽亜夜子の固有魔法『極散』は隠密行動において最強クラスだ。正式名称を極致拡散というのだが、すなわち拡散魔法の最上位と言える。熱、音、光などの情報を拡散することで位置を特定させないというのが主な使用方法なのだが、極致拡散はその拡散性を極限まで高めることで完全な風を生み出す。

普通の拡散魔法では魔法行使を匂わせるノイズが残ってしまうものの、極散にはそれが無い。

特に情報量が少ない夜においては完璧に近い隠密が実現されるのだ。

「見つけた」

そんな魔法で存在を隠された紫音と亜夜子は、ある三人の人物を追っていた。

一人はターゲットである顧傑グ・ジー、そして二人目は横浜事変において大亜連合軍特殊工作部隊を率いていた陳祥山チエンシャンシエン、三人目が『人食い虎』と称される世界最高の魔法師の一人こと呂剛虎リュカンフウである。

彼らも大陸の法術を使って身を隠していたが、隠しきれない精霊の騒めきを紫音は見逃さない。波動を感知する紫音は、精霊の特徴的な霊子を観測していた。

「やはり動きがないな。別行動をしているパラサイトを待っているのか？」

「今連絡がありました。達也さんや深雪さんの方で戦闘が始まったようです」

大亜連合には方角を狂わす魔法がある。

それは横浜事変でよく分かったことだ。彼らは精霊魔法をはじめ

とする古式魔法を得意としており、化成体と呼ばれる精霊を利用した使い魔も厄介だ。そして鬼門遁甲と呼ばれる魔法が最も厄介である。方位を狂わす魔法で、これを使われると魔法を使っても追跡は難しい。

逆に彼らはこの魔法にかなりの自信を持っている。

それゆえ、同じ場所に留まるといふ危険を冒しているのだろう。

「こちらから仕掛ける。亜夜子は俺の撤退の援護を頼むぞ」

「ご存分に」

「ああ」

亜夜子が紫音の背中に触れ、ある魔法を発動させる。

それは彼女が得意とする疑似瞬間移動だ。空気の繭で包まれた紫音は真空チューブ内部を超高速で移動させられ、逃走者たちの真ん中に現れた。



深雪のニブルヘイムによってパラサイト・フォーマルハウトは動きを停止した。まだ周辺には液体窒素やドライアイスが舞っており、近づくことも難しい。

パラサイトも肉体に依存している以上、冷凍されたら動くことはできない。

「よくやった深雪」

「はい。ですが……」

「ああ、まだ生きている。油断はできない。どうだ幹比古？」

悪霊払いが一つの仕事であった古式魔法の継承者、吉田幹比古はこ

の手の相手を得意としている。達也の呼びかけに頷き、少しの間だけ目を閉じて感知する。

そして歯切れ悪く結論を下した。

「うん。達也の言う通りだね。まだ油断はできないよ。この男の中にいるパラサイトは生きている。それになんていうのかな……複数の悪霊が憑りついている感じだね」

「おい、どういうことだよ？」

「レオを襲ったやつより強力つてことさ。それに複数の悪霊に取りつかれた伝説は実在する。特に西洋では七体のデーモンに取りつかれた女の話もあるから」

「で、こいつにはどれだけ憑りついているのよ？」

「ちよつと待って……六、いや七体だね。本当に伝承みたいだ」

幹比古の眼には——実際に見ているというより魔法によって解釈しているというのが正しい——七体のパラサイトがフォーマルハウトの体内で蠢いている光景が映っていた。

あまりの悍ましさと気持ち悪さで流石の幹比古も嫌な顔をする。

幹比古がもう少し言及しようとしたが、そこに割り込むようにして声がかかった。

「おい、何をしている」

ライトで照らされ、丁度光を当てられた幹比古とレオは眩しそうにする。達也は深雪とほのかの前に立ち、エリカは眉間に皺を寄せた。遠くまで届く特徴的なライトを持って現れたのは警官の服装をまとった二人の若者であった。

幹比古は苦い表情を浮かべ、レオは目を泳がせる。

「何だこれは？ 君たちは高校生だろう？ ここで何をしていた？」

明らかに魔法と思われる方法によって人間が氷漬けにされているのだ。これで職務質問しない警官がいれば無能と言わざるを得ない。声を尖らせて詰め寄る警官たちを前に、幹比古は狼狽していた。

「あ、えつとですね。これは、その……」

言葉に詰まるのも仕方がない。

実は悪霊が現れたので対峙しましたなどと誰が信じるだろうか。これが軍の活動ならば良いが、あくまでも高校生でしかないとため、職務質問からの署まで同行願おうは確実だ。

しかし幹比古の言い訳を押しつけてエリカが強い口調で言い返す。

「あんたたちこそ何しているの?」

「何だと?」

「おいエリカ」

「馬鹿ね。ここには今、警察は来ないのよ。そういう命令が出ているから。うちの兄貴はそんなところで抜かったりしないわよ」

この横浜での動きは千葉家や吉田家のバックアップもしつかり行われている。当然その中には警察への情報統制も行われていた。国家権力に当然の如く手を出せる千葉家と吉田家がおかしいのだが。

しかし警官もただでは引き下がらない。

「何を訳の分からないことを言っている。暴行の現行犯だ。同行してもらおうぞ」

「へえ? あくまでもシラを切るんだ。先に襲ってきたのはこいつなんだけどなー。私たちは正当防衛したの。わ・か・る?」

そんな尤もらしいことを言っているが、魔法で凍らせるのは明らかに過剰防衛である。嘘だと分かっているでも幹比古では黙りこくってしまうほど流暢だった。

だが、それに気を取られた幹比古は背後から忍び寄る気配に気付けなかった。いや、ワンテンポ遅れて気づくことになった。

「ミキー！」

「幹比古ー！」

エリカとレオがほぼ同時に警告を発するも、既に遅い。音もなく迫る影が襲いかかったのだ。それを認識したときには既に遅く、幹比古は肩に衝撃を感じる。突き飛ばされたと感じつつ、無意識で受け身を取る。見るとレオは腕を掲げて振り下ろされた警棒を受け止め、反撃の一撃を繰り出していた。

しかしレオはそれを浅く入れただけで腕を引き戻してしまった。

その理由は静電気を思わせる電光である。襲撃者は触れた対象に電撃を流すスーツを着込んでいたのだ。レオは手首を抑えて一歩下がりが、その隙に襲撃者が警棒を振り上げる。

「レオ、離れて！」

幹比古は慣れた手つきで魔法発動媒体の扇子を取り出し、魔法による援護を使用する。しかし横合いから飛んできた円形の投擲物が扇子を弾き飛ばしてしまった。その投擲物は弧を描いて発動者の元へと戻っていく。

一方で先の電撃からレオは防戦を強いられることになり、下がりながらの戦いを演じている。エリカは別の襲撃者と打ち合っており、戦いは激しさを増していた。

また初めに声をかけてきた二人の偽警官は達也たちへと襲いかかっていったが、流石の格闘術で制圧しつつある。しかしそちらに向かって幾つかの擲弾が放たれた。

達也は擲弾に向かって『分解』を放ち、その構造を解体する。元々その擲弾も殺傷性を求めたものではなかったのか、分解されたパーツの一つが開いて網となる。

「達也さん！ 後ろ！」

いくら達也でも合間に魔法を使えば隙となる。

偽警官の一人が達也の背後から警棒を振り下ろそうとしていた。ほのかは悲鳴のような警告を発するも、しっかりと『眼』で見ている達也は身体を捻ることで回避する。

そして再び危ない戦いを始めるも、やはり遠距離からの援護射撃は止まらない。放り込まれ続ける擲弾の中には投網、スモーク、催涙ガスと様々なものが紛れている。流石に爆発物ではなかったものの、達也がそれらを深雪の近くへと放り込まれることを許さない。やはり達也は脅威だと認識されたのか、人質を取るという手段へと移行する。

黒い影が与しやすそうなほのかへと襲いかかったのだ。

「ほのか！」

深雪が咄嗟にCADを構えるも、襲撃者の方が早い。

達也は深雪への危険を常に監視しているが、ほのかは違う。達也も間に合う状態になかった。しかしピクシーが彼女の前に立って盾となる。組みつく襲撃者をしっかりと受け止めた。

ほのかもただ守られるだけではいたくない。

憧れの達也の隣を歩きたいと願う。

達也はほのかの瞳とピクシーの内部からサイオン波の急激な高まりを感じた。すなわちそれは思念の高まりでもある。魔法とは異なる思念干渉が発生する。

思念による事象改変。

それは運動量という情報を書き換え、襲撃者を吹き飛ばす。

いわゆる『サイコキネシス』という超能力であった。



横浜から大きく離れたある一室で状況をモニターしていた藤林は、引き起こされた事象に絶句していた。一方で背後からは実に愉快と言わんばかりの笑いが聞こえてくる。

「思いがけず、興味深いものを見せてもらった」

そう告げるのは日本魔法師社会の長老とも呼べる存在、九島烈である。藤林からすれば祖父にあたるこの人物の要請により、付近の状況を監視していたのだ。

監視カメラ、衛星カメラ、その他諸々の感知装置は藤林の手足となって状況を映し出す。目の前にあるモニターには、ロボットから魔法が放たれたことを示すデータで揃っていた。

「サイキックを使うロボットとはな。私も初めて見た」

「私も報告を聞いたことがあります。今の技術では不可能かと思えます」

「そうだな。機械技術だけで魔法を発現することは不可能だ。すなわち……」

烈はピクシーに注目する。

いや、更にその奥を見透かすような目を向けつつ続きの言葉を口にした。

「……そう、すなわち妖魔が宿ったか。そのような使い方があったとは」

藤林は思わず振り返る。

そこには久しぶりを見る、祖父の野心を抱えた顔があった。



ピクシーがサイキックを使用した。

その瞬間を目撃したのは烈たちだけではなかった。四葉真夜もフリズスキャルヴという手段によって事態を監視していた。

しかし彼女はフリズスキャルヴのプラットフォームであるヘッドマウントディスプレイを取り外し、デスクの引き出しに収納した。

呼び鈴を鳴らすと、控えていた葉山が入ってくる。

「お呼びでしょうか、奥様」

「青木さんと呼んで頂戴」

「畏まりました」

何も聞くことなく、深く頭を下げて葉山は下がる。

しばらくすると慌しさを発する気配がやってくる。扉が叩かれ、葉山と青木の両執事が入室してきた。息こそ切らしていないが、青木は明らかに焦燥した雰囲気である。よほど慌ててきたのだろう。

「こんな時間にごめんなさいね」

「いえ、奥様がお呼びとあらば地球の裏側からでも参上いたしましたしよう」

実に大げさな表現だが、これは真夜に心酔している青木らしいものだ。いつものことなので無視して本題へと移る。

「早速ですけど、入手してほしいものがあります」

「はっ！」

「魔法大学付属第一高校に貸し出されている3H1P94を至急買い

取って頂戴。手段も金額も問いません。もし入手が難しい場合も現在の持ち主から所有権が移転されないように処置しなさい。特に他の十師族の手に渡らないように」

普通ならば意味が分からないと聞き返してもおかしくない場面だ。

青木は四葉家序列四位の執事であり、四葉家の資産を管理する立場にある。真夜が必要とするものを買い付けるのも彼の仕事だが、たかがロボット一体に動かすというのはおかしな話なのである。また金額はともかく、手段も問わないというのは珍しいことだった。

すなわち、最悪は盗み出すことすら許可しているのだから。

勿論それは本当に最後の手段だが、そこまで許可されているという時点で色々と疑問が生じるはずである。しかし青木は動揺こそ見せるも、ただ恭しく頭を下げた。

「畏まりました(ごい)います」

そうして青木が去っていった後、室内には真夜と葉山が残された。僅かな沈黙の後、真夜が口を開く。

「何か言いたいことがあるのではなくて？」

「奥様、僭越ながらフリズスキャルヴの情報収集に頼り過ぎてはおられないでしょうか」

予想通りの忠告で、何より今更な忠告。

しかし真夜は葉山に怒ることはしない。フリズスキャルヴの利用リスクは葉山よりもよほど弁えているつもりだ。しかし七賢人の一人である四葉真夜にとって、同じ七賢人たる顧傑グ・ジイを追い詰めるにはフリズスキャルヴが必要だった。

少なくとも今は。

「これは純然たる科学技術です。ある意味で魔法よりも副作用のリス

クは小さいでしょう」

「奥様、私めはそのようなことを申ししているわけではございません。副作用ということでしたらフリーズスキャルヴも同様でしょう。本体の設置場所も分からぬ装置が今まで通りに機能するとは考えにくいと思われませんが」

「……そうですね。葉山さんの言う通りでしょう」

真夜は少し拗ねたような口調になった。

こうして彼女の我儘や屁理屈にしつかりと忠言を言い放つからこそ、葉山は腹心たりえる。

「確かに捨ててしまうには惜しい性能です。私めが愚考いたしますに、達也殿であればフリーズスキャルヴの本体の場所を突き止められるのではないのでしょうか？ そうすればあるいは、この情報収集能力を独占できる可能性もございます。また紫音殿が提出された情報収集魔法の完成に力を注がれるのもよろしいかと」

「……」

少しの間、真夜は考え込んだ。

葉山がここまで言うとは予想外だったのだろう。

「紫音さんの計画している疑似フリーズスキャルヴに予算を増やしましょう」

真夜はフリーズスキャルヴの件について、これ以上言及することはなかった。



顧傑グ・ジは日本での活動に見切りをつけ、大亜連合へと逃げることにした。逃走先は元いたUSNAでもよかつたのだが、USNA軍から追われている身となってしまうのでそういうわけにもいかない。また大亜連合に亡命するとしても、手土産があつた方が良いのは確かだ。

そこで陳祥チエンシャンシエン 山リュカンフウと呂剛虎リュカンフウの脱走を手助けした。

「仕方なくお前の要求を聞いているが、本当に来るのだろうか？」

陳祥チエンシャンシエン 山リュカンフウは眉間に皺を寄せて問いかける。

本当ならばさっさと海に出てしまいたい。しかしそれを我慢して顧傑グ・ジの要望に従い、この場所に留まっている。

この場にいるのは他に顧傑グ・ジが連れてくる黒服の男が三人。

その三人は傀儡とした死体なのだが、陳祥チエンシャンシエン 山リュカンフウはそこまでは知らない。

「あと五分経つても戻って来なければ見捨てることになっている」

「ふん」

そして顧傑グ・ジも実は内心で焦っていた。

フォーマルハウトが同胞に呼ばれていると言つた時、それは罨だと忠告した。しかしそれでもフォーマルハウトは行つてしまったのだ。やはり罨にかけられたのではないかと考えたのである。

だが、彼はここにきて自分も罨の中にあると考えることはできていなかった。

「呑気なことだな」

そんな日本語が聞こえた。

同時に顧傑グ・ジが連れていた傀儡死体が三体とも糸が切れたように崩れる。その三体は心臓部に穴が開いており、即死だつたことが分か

る。

いや、元から死んでいたのもその表現は正しくない。

心臓を媒体として発動していた死体操作魔法が解除されたのだ。

いち早く反応したのは呂剛虎である。

「貴様！・ 四葉紫音！」

思い出す屈辱。

人食い虎はコンクリートすら砕く掌底を放つ。しかし表層思考を読む紫音は呂剛虎リュカンフウの動きを一足早く察知しており、ベクトル反転障壁を張る。貫くという情報体を纏う呂剛虎リュカンフウと運動量ベクトルを反転させるという障壁がぶつかり、一瞬だけ拮抗した。

紫音は跳び下がり、その瞬間に亜夜子の極散が発動する。

障壁をぶち破った呂剛虎リュカンフウは追撃を試みたが、その時には紫音の姿がなかった。

「ふん。移動するぞ。奴に見つかった以上、ここに留まる選択肢はない」

陳祥チエンシャンシエン 山はそう告げ、顧傑グ・ジエも同意するしかなかった。

来訪者編33

ピクシーのサイキックにより謎の襲撃者は吹き飛ばされた。襲撃者たちは勿論、達也ですら驚いている。

(今、ほのかからピクシーにサイオンが流れ込んでいたな)

これは驚くべきことだった。

しかし残念ながら考察している時間はない。今のピクシーのサイキックに呼応するかのように、凍結していたフォーマルハウトが動き出したのだから。

凍結した細胞という情報体を事象改変させ、フォーマルハウトは動き出す。

七体のパラサイトに憑依された今の彼は真正銘の化け物だ。人体という限界すら超越し、同胞であるピクシーを破壊するために動き出す。

「っ！ 不味いよ達也！」

幹比古は咄嗟に達也へと警告する。

本来は全員に言うべき警告だったが、今は達也に言うべきだと直感が囁いていた。今の幹比古は魔法による解釈でパラサイトの悍ましい姿を観測している。

フォーマルハウトから七体のデーモンが蛇のように溢れて暴れているのだ。まるで八岐大蛇やヒュドラのようだと思わされた。キリスト教的な解釈だが、デーモンと蛇は同一として見られる。幹比古自身がその影響を受けているわけではないにもかかわらず、そのように感じ取れるのは、パラサイトがより深く侵食しているからに他ならない。

すなわち、フォーマルハウトの深層心理の影響を受けているのだ。

七つの頭部をもつ蛇とも表現できる今のフォーマルハウトは、観測能力も人から外れている。辺り一帯が一斉に発火し始めた。

「これは……魔法の暴走、ではないか」

フォーマルハウトの発火念力は視覚を基準に発動される。しかし今はそんなものは関係ないとばかりに次々と発火が発動していた。

しかし達也の眼には魔法の暴走といった兆候は見られない。

ただし安定はしていない。

（おそらくは新たな眼を手に入れたか。俺の『エレメンタル・サイト精霊の眼』のように）

今のフォーマルハウトがどれほどの知覚系魔法を手に入れているのかは分からない。しかし、仮に達也の眼と同等だとすれば脅威となる。基本的に達也の『エレメンタル・サイト精霊の眼』は周囲一キロが観測範囲であり、情報の紐づけさえあれば世界の裏側でも追うことができる。

これがフォーマルハウトに備わっているとすると、一度狙われたらいつでも人体発火が発動できてしまうということになる。

「深雪！　領域干渉だ！」

「はー！」

幸運だったのは、まだフォーマルハウトが力に慣れていなかったということだ。いきなり広がった視界に驚いているのかもしれない。

深雪は発火能力を抑え込むため、鎮火の効果を強制させる領域干渉を発動した。

そして達也も危険性を理解した瞬間からフォーマルハウトの完全な始末を決意していた。人体分解魔法を発動するべく、CADを向ける。勿論、軍事機密指定魔法である『ミスト・デイスバージョン雲散霧消』をそう簡単に見せるわけにはいかない。

完全な分解ではなく、フォーマルハウトの体内に向けた分解が発動

された。

「ぐうううー！」

分解されたのは心臓。

すなわち人体の急所だ。しかしそれでもフォーマルハウトは呻くだけだった。心臓が消滅すると同時に再生したのである。

更に暴風のようなサイオンを解き放ち、それによってピクシー以外は目を覆う。

魔法師にとってサイオンは感知できる波動だ。それを高密度かつ大量に解き放たれることは、爆音や閃光が発せられることにも等しい。つまるところ、サイオン酔いにも似た状態になったのだ。達也は即座に復帰するも、その時にはすでにフォーマルハウトの姿はなかった。

「逃したか」

もう眼にも映っていない。

何らかの方法で知覚系魔法すら欺いているのだろうと予測できる。そして警官を装って現れた襲撃者たちも姿を消していた。こちらは達也でも追うことができたが、余計なことはしない。何らかの派閥から派遣された部隊だと考えられるためだ。

「ああ！ もう、逃げたわね！」

エリカは悔しそうに地団駄を踏む。

レオは未だに酔いが覚めない幹比古に肩を貸しており、そのまま達也に声をかけた。

「どうすんだよ達也」

「……取りあえずここから移動しよう」

残念ながら目的を達することはできなかった。
もうピクシーを利用した誘い出しも不可能だろう。達也の選択は正しい。とにかく、今日のところは帰るといふことで意見が一致したのだった。



アルフレッド・フォーマルハウトは七体のパラサイトが宿る化け物であると同時に、元は人間だ。そしてサイオンの波動は元の間人としての形質に依存している。

それゆえ、スターズは荒々しいサイオン波動を検知していた。

「フレディのサイオンを!?!」

「はい。総隊長」

「分かっています。すぐに急行しましょう」

一瞬とはいえ恐ろしいサイオン波動を感じられた。

そして機械がそれをフォーマルハウトのものであると示している。ならばスターズが向かわない理由がない。シリウスとカノーパスが率いるスターズは即座に移動を開始する。

ただし既に反応は消失している。

達也の眼でも観測できない様に情報次元が誤魔化されているので、当然ながらスターズのバックアップ部隊も観測できないでいる。しかし最後の観測データからAI解析による予測移動ルートの検出は可能で、シリウスたちはそれにそってナビゲートされる。

(フレディ……今度こそ!)

偽者を掴まされること三回。

怪しい車で移動しているなどという曖昧な情報ではなく、間違えようのないフォーマルハウトのサイオンが検知されたのだ。次こそは逃さないという意気込みで走り続ける。自己加速魔法によって自動車ほどもある速さで移動し、跳躍の魔法で倉庫を飛び越え、そして遂に標的を見つける。

「総隊長！」

「今日はバックアップチームも調子がいいみたいですね！」

カノープスもシリウスも歓喜や安堵などの混じった複雑な感慨を覚えた。

ここ最近の任務では情報戦において完全に上回られており、実働部隊である自分たちは何も分からぬままに任務失敗へと追い込まれることが多かった。久しぶりに情報解析を担当するバックアップチームが成果を出してくれたことに対する気持ちとしては妥当なところだろう。

すなわち、見覚えのあるアメリカ人の男、フォーマルハウトがいたのである。

もう警告も必要ない。

アンジー・シリウス、つまりリーナは心の内で躊躇いつつも銃口を向けて引き金を引いた。

情報強化された弾丸がフォーマルハウトを貫く。

「ぐっ……おとおおおー！」

しかしその傷は瞬時に再生され、激しいサイオンを発する。

危険を感じてシリウスが背後に大きく飛び下がる。すると先程まで彼女のいた場所が業火に包まれた。高ランクの魔法師がCADを使って発動するような魔法を瞬時に発動してみせたのだ。

蠢く炎はまるで生き物のように形を形成し、大蛇のようになってシ

リウスへと襲いかかった。

「総隊長！ 退避を！」

しかしそこにカノープスが割り込み、分子デバイダーによって炎の大蛇を切り裂いた。しかしプラズマである炎に分子分割術式は効果が薄く、すぐに元に戻ってしまう。

そこでシリウスは腕輪型のCADを操作し、装着した左手を炎の大蛇へと向ける。

発動する魔法は『ムスペルヘイム』。気体分子をプラズマ化させ、高エネルギー電磁場を生み出す。炎とはプラズマの一種であり、同じプラズマとしても高レベルな『ムスペルヘイム』ならば押し流すことができると考えたのだ。

シリウスの予想は正しかった。

炎の大蛇は精霊のように独立した情報体を有しており、一種の生物として振る舞うように設定されている。しかしそれでも物理現象としては炎として定義できるものだ。高ランク魔法ムスペルヘイムは確かに炎の大蛇を吹き飛ばした。

「シリウス少佐！ やりすぎです！」

ただ、張り切りすぎた。

十代でありながらスターズの総隊長となるばかりか戦略級魔法師として選ばれたシリウスが全力でムスペルヘイムを放つたらどうなるか。それは火を見るよりも明らかである。

カノープスが警告するも既に遅く、シリウスが慌てて魔法をキャンセルした時には何も残っていなかった。

「シリウス少佐……これでは死んだのかどうかの確認もできません」

「……すみません」

「仕方ありません。一旦引くことを提案します」

「はっ……」

大きく肩を落としたシリウスであった。



紫音と亜夜子の奇襲は顧傑たちに対して圧力をかけていた。三人とも四葉紫音にしてやられた過去を持ち、ある意味でトラウマのようになっている。呂剛虎は内心でリベンジに燃えているが、装備も整わない内に戦うのは下策だと理解している。

結果として、まずは逃げることを優先した。

実をいえばその背後から紫音と亜夜子が追っているのだが、それは気付いていない。しかし彼らは四葉紫音という影に怯えていた。

「お待ちしておりましたハイグ大人」

監視カメラの陰となる部分に待機させた船から一人の男が現れる。勿論、ノー・ヘッド・ドラゴンの残党であり、顧傑を未だにボスと認める者たちだ。

実をいえばノー・ヘッド・ドラゴンのほとんどは顧傑から離れている。そして拠点をUSNAに移してしまったので、今の顧傑が手足とできる者たちは本当に少ない。だからこそ陳祥山と呂剛虎の脱走を手助けすることで、大亜連合に恩を売ることにしたのだ。

軍や政府との繋がりを強化し、ノー・ヘッド・ドラゴン——あるいは新しい別組織でもよい——を再び力強い組織とするのだ。

顧傑は逃亡を選択したが、全てを捨てての脱走ではない。この日本ですべき手は打ったし、大亜連合に逃亡してからの連絡口も用意している。いわば計画的逃走であり、あくまでも戦術なのである。

「出航の準備はできております。すぐに出しますか？」

「急げ」

「はっー」

顧傑^{グ・ジ}たちは船に乗り込む。

この船もエンジンやモーターの音をほとんど抑えた特殊性で、レーダーを誤魔化す装甲もある。また途中で小島に寄り、そこでヘリに乗り換えることになっている。当然だがこれらは顧傑^{グ・ジ}がノー・ヘッド・ドラゴンの残党に用意させたものであり、どのように用意したものは知らない。まさか四葉が仕組んでいるなどとは夢にも思わない。

掌の上で踊らされているとも知らず、船にエンジンがかけられる。

そこに船を揺らしつつ飛び乗ってくる影があつた。即座に反応した呂剛虎^{リュカンフウ}が攻撃を仕掛けるも、軽く躲かされてしまう。追撃を仕掛けようとしたところで顧傑^{グ・ジ}がストップをかけた。

「待て、そいつが待っていた男だ」

「止める呂上尉」

「……是^シ」

船に飛び乗ってきたのはフォーマルハウトだった。

彼自身に傷はないが、服に穴が開いたり焼け焦げていたりと激しい戦いだったことが分かる。顧傑^{グ・ジ}は何となく、フォーマルハウトが不機嫌だと思った。

「失敗したようだな」

「あの同胞を取り戻すのは厄介だ。貴様との約束もある」

フォーマルハウトの律義さには顧傑^{グ・ジ}も意外さを感じた。

パラサイトは自己生存本能に忠実で勝手なものだと思っていたからだ。最悪は戻って来なくとも囮として使う予定だったが、こうして

戻ってきたのならば使い道はある。
船は静かに夜の海に消えていった。



「軍への情報統制は？ ……そうか。顧傑^{グゼ}の追跡は続ける。それと必要ならこつちからも手を貸してやる」

海の方こうに消えていく船を眺めつつ、紫音は通話で一通りの報告を受けていた。

無事にターゲットが国外に逃げたとのことであり、後は軍に見つからないよう大亜連合まで誘導すれば良い。

「お兄様、達也さんたちも無事に帰ったと報告が」
「そうか」

「それと達也さんたちを襲った者たちについて、どうやら軍の一部である可能性がある…詳細は分かりません」

「どうせ七草家の手の者だろうから気にしなくていい」

その予想は的を射ていた。

ただ今は予想を確かめる暇もなく、確かめたところで利点もない。今回は全てのパラサイトの検体を四葉が手に入れることになった。その結果があれば充分である。

「七草家が対価を支払えば当主様もパラサイトの引き渡しを考えるかもしれないが…今の七草にそんな心の余裕があるとは思えないな」
「逆に九島はそうするのではありませんか？ いえ、正確には九島閣下が」

「その場合は渡すかもな。九島家は古式魔法師とも面識があるし、その方面の専門家と連携してウチとは違った結果を出すかもしれない。当主様が興味を持ってば普通にあり得る」

九島家にかかわらず、『九』の家の発祥である国立魔法第九研究所は古式魔法と現代魔法を融合させることを目的としている。その関係もあり、十師族の中では最もパラサイトに対する下地を持つ一族といえるだろう。

また四葉真夜はかつて九島烈に師事していたという個人的事情もあり、家としての取引ではなく個人での取引が行われるかもしれない。烈ならばかつての師という立場に甘えることなく、必要な対価を惜しむこともないだろう。

「それと亜夜子、明日にでも達也たちの家に行って今回の顛末をある程度伝えてやってくれ。顧傑グンゼはもう国外追放したけど、重要事項を電子情報で伝えるのは躊躇ちゅうちゆわれる。今は船上だろうから大丈夫だと思うけどな」

「分かりましたわ。文弥と一緒に伺っても？」

「いいぞ。後の処理は俺がしておく。今日はもう休んでも……いや、暫くは休め。お前も文弥も四校の入学準備があるだろ？」

「ありがとうございます」

亜夜子にとって達也は憧れの存在だ。

彼女にとって紫音の提案はとても嬉しいことであつた。会うことができるというのは勿論、達也の役に立てるといふことも含めて。

明らかに機嫌のよくなつた亜夜子と共に、紫音も撤退した。



自宅に戻った達也と深雪は、ひとまずリビングで休んでいた。ソファで寛ぐ二人の前には深雪が用意したコーヒーが置いてあるものの、二人とも手を付けようとしないう。数分の沈黙の後、深雪が口を開いた。

「……申し訳ありませんお兄様」

「いや、深雪が気にすることじゃないよ」

察しの良い達也は深雪の言わんとすることを理解していた。

彼女が謝罪する原因は、せっかく呼び寄せたパラサイトを逃してしまったことである。一度は凍結させたが、結局は逃してしまった。そのことを悔いているのだ。

「私が、あの魔法を使っていれば」

「深雪。それは言っても仕方のないことだよ。コキュートスは叔母上も秘匿を命じておられる魔法だ。特に幹比古がいる前で使うべき魔法じゃなかった。深雪の判断は正しいよ」

「ですが……」

「それを言うなら俺も同じだ」

四葉家には二つのタイプの魔法師が生まれる。

一つは四葉真夜を代表する歪で強力な魔法演算領域を持つ者だ。達也はこれに該当する。そしてもう一つは精神干渉魔法に長けた者だ。紫音の『調律』もこの一種で、さらに言えば深雪もこちらに部類される。

深雪が持つて生まれた精神干渉魔法コキュートス。

それは精神を凍結させることで死を与えろというものだ。当然、パラサイトも例外なく殺害することができる。

つまりコキュートスを使えばフォーマルハウトを殺すことができるのだ。

しかし実行しなかった。

四葉真夜から秘匿を命令されているため、パラサイトに何が起こったのか分かってしまう幹比古がいる場所で使うわけにはいかなかったのだ。

「気にしなくてもいい。どうやら面倒は紫音が片付けてくれるみたいだからな」

「紫音さんが……ですか？」

「そのためにわざわざ黒羽ではなく四葉を名乗っているわけだ。秘密主義の四葉がわざわざ本家の名を使わせているだけのこととしてはしてくるよ。紫音は本家からの恩恵も大いに受けているだろうからね」

「警戒しなくても良いのですか？ 信用しても良いのでしょうか？」

「紫音は良くも悪くも四葉の人間らしい奴だ。俺たちを含め、四葉の一族に迫る危機は例外なく取り除こうとする。兵器であろうとする。俺とは真逆の思想だが、あいつなりに家族を想っている奴だよ」

「……随分と信頼されているんですね」

深雪は少しばかり嫉妬の混じった口調になる。

しかし達也は小さく笑った。

「敵ばかり作っても仕方ないぞ？」

「それは……そうですね」

「俺たちは疑心暗鬼にならざるを得ない運命にある。だが、だからこそ信頼に足る人物は必要なんだ。今回の件だってほのかの協力を得たし、エリカには実家の伝手も使ってもらった。幹比古もレオもな。深雪も利用するためにほのかや雫……それに生徒会の先輩方と付き合っているわけではないだろう？」

「もちろんです！」

「パラサイトを逃がしてしまったのは痛いけど、次の情報は紫音がよこしてくるはずだよ」

達也が言った通り、翌日には亜夜子と文弥が訪れ事情を説明され

る。

あまりにも予想通りだったことに、深雪も思わず笑みを浮かべるのだった。



七草家の書斎にて、部屋の主である七草弘一は不機嫌さを隠すことなく声を荒げていた。

「失敗だど？」

「はっ。ターゲットには逃げられた可能性がある。また作戦区域で高熱に晒されたと思われる場所が発見されています。高ランクの魔法の痕跡も見られましたので、おそらくは『ムスperlヘイム』が使用されたものかと」

「……死体は見つかったのか？ 発動者は？」

「死体の発見は困難でしょう。ムスperlヘイムが発動したとなれば死体が残るかどうかも怪しく、また残っていたとしても魔法発動者によって回収されているものと思われます。発動者についてはUSNA軍と考えるのが妥当です」

弘一の腹心、名倉は淡々と情報を告げる。

そこに感情はなく、客観的な事実だけが述べられていた。

「学生から奪取できないどころかスターズに先を越されるとは……情報部もだらしがない。頼る相手を間違えたか」

「情報部は無能ではありません。今回は相手が一枚上手だったということでしょう。そもそもスターズはUSNA軍が誇る魔法師部隊ですから」

吐き捨てるようそう言う弘一に対し、名倉は冷静に反論する。

確かに名倉の意見は間違いではない。しかし窘めるようなその言方は弘一を更に不機嫌にさせた。ただここで弘一は烈からも警告されていたことを思い出す。

「……四葉、か」

「旦那様。今回の件は手を引いてはいかがでしょうか。これ以上は七草家にとつても良いことはありません」

「そうだな。失った戦力の補充になれば良いと思ったが、ここが潮時か」

そんな潮時などつつの昔に過ぎている、とは名倉も言えない。いや、敢えて言わない。

ただ弘一の言ったように、吸血鬼事件によって七草家の魔法師も幾らか被害を受けており、その補填をするためにもパラサイトを求めたということに間違いはなかった。ただ、四葉家が一枚も二枚も上手だったのだ。

「出動中のメンバーにも通常業務に戻るよう通達しておこう。下が
れ」
「はっ」

暗号通信機を操作し始めた弘一に礼をした後、名倉は下がっていった。



数日後、紫音は四葉家の本家を訪れていた。

理由はいくつかあり、その一つは新魔法の実験である。他にもバイタルチェックや理論設計中の魔法の視察もあるのだが、やはり最も重要なのは当主との面会である。

真夜の執務室へと呼ばれた紫音の前にいつもの紅茶が置かれ、話が始まる。

「報告書を読ませて貰ったわ。流石の手際ですね」

「ありがとうございます」

「今回の件で紫音さんが提案されていた情報収集魔法の研究に予算を増やすことを決めました。パラサイトという役に立ちそうな検体も手に入れましたから」

「そちらは先に視察しました。半年以内に成果を出せると考えております」

黒羽家は諜報を司る分家だ。

紫音は真夜の養子となっているが、黒羽の矜持を忘れたわけではない。昨年の九校戦で手に入れた電子金蚕でんしきんさんを改良して電子デバイスに干渉する精霊魔法の一種『八咫鳥』を開発した。またそれを元に新しい情報収集魔法の構築を始めていたのだ。

ただし新しい魔法は大規模になるため、四葉本家に研究を委託している。

「そうそう。九島先生からパラサイトに関する取引を持ち掛けられました。応じてもよろしいですね？」

「母上殿のお望みのままに」

「ふふ。今回の成果はほぼ全て紫音さんのものよ。何か欲しいものがあれば用意させるわ」

「では会社の設立をお願いします。開発する情報収集魔法に備えて解析用の企業を設立しようと考えていたところですよ。表向きをIT系企業として運営し、コンピュータによる情報管理を任せようと思っています」

「いいでしょう。葉山さん手配をお願い」
「畏まりました」

流石に腹心というべきか、葉山は淀みなく答える。おそらくはあとで青木と相談しつつ、紫音の目的に合う企業を設立するか買収するかするのだろう。

「ところで例の男の追跡はどうなっていますか？」

「ノー・ヘッド・ドラゴンにもこちらのスパイを紛れ込ませていますし、少しずつ誘導はしていくつもりです。時間はかかると思われま

す」
「そう。なら紫音さんもしばらくは普通の学生ね」
「そうなります」

真夜が葉山に目配せすると、一礼して下がっていく。

そして真夜は紅茶を口に含み、暫く無言となった。紫音も急かすようなことはせず、待ち続ける。次に葉山が入ってきたとき、もう一人メイドの少女を連れていた。

「その子は……」

「桜シリーズ、桜井水波ちゃんよ。以前にも言っていたでしょう？調整が終わりましたから、このまま紫音さんに付けることにします。また一校にも入学する予定だから面倒を見てあげて頂戴」

「はい。しかし桜シリーズということは司波家のガーディアンなのでは？」

「深雪さんのガーディアンとして鍛えるためという名目もあるのよ。家政婦としての技能は充分に備えています。高校二年生になると忙しくもなるでしょうから、紫音さんの家の住み込みメイドとして、家のことを頼みなさいな」

紫音が水波へと目を向けると、彼女は深々と頭を下げた。

「未熟者ですが、よろしくお願いいたします。奥様の言いつけ通り、精一杯お勤めさせていただきます」

新年度は多少楽になりそうだな、と達観した感情を覚える紫音であつた。

ダブルセブン編 ダブルセブン編1

外国、異界それぞれからの来訪者を迎え入れた波乱も無事に収束し、魔法科高校は新しい年度を迎えようとしていた。春休み中に国防海軍が開発中だった戦略級魔法が暴発するなどの事件は起こっていたが、紫音はそれに関与することなく四葉本家で過ごした。

真夜の命令で情報収集魔法開発の他、新魔法の実験も行っていたので紫音も暇ではなかった。

『これより、魔法大学付属第一高校入学式を開会いたします』

生徒会副会長となった達也のアナウンスによって始まる入学式。

紫音は裏方として舞台の裾に控えており、モニターを通して新入生や来賓として招かれた人物を観察する。

(今年は大物が三人、か)

魔法の名家といわれる血筋において、やはり十師族のネームバリューは桁違いだ。そして十師族とは二十八家より選ばれた十家を指しており、残る師補十八家も十師族に並ぶだけの魔法力を備えた一族であることは間違いない。十師族に選出される条件は魔法力の他、社会に対する影響力も加味される。そのため、それぞれの一族は社会に影響を与えるだけの経済活動も営んでいるのだ。寧ろ魔法力だけで十師族に君臨している四葉が異常なのである。現在は公式戦略級魔法師を抱えるという理由も含まれるが、それゆえに四葉は最強にして最恐と言われる。

話を戻そう。

七草泉美、七草香澄、そして七宝琢磨^{しつぽうたくま}。

今年と同じ『七』の家系でありながら十師族と師補十八家からそれぞれ新入生が入学した。

そのせい、来賓として招かれた人物もそうそうたる面々である。魔法師に友好的な態度を示す国会議員、CAD企業の社長など、普通の高校の入学式ではまず訪れないだろう人物ばかりだ。

『新入生答辞、桜井水波』

そして入学式はつつがなく進み、新入生答辞となる。

入試トップ成績の者に与えられるそれを掴んだのは、七草の双子でも七宝の長男でもなく、桜井水波という一般人の少女であった。

これはおそらく驚くべきことだったのだろう。

来賓の中に動揺すら見られる。

(十師族とそれに並ぶ一族を抑えてトップになった少女。これは目立つな)

紫音は壇上で答辞の言葉を述べる水波を心の内で応援しつつ、今後のことも考える。

勿論、こうして悪目立ちしてまで彼女に入試トップを取らせたのは考えあつてのことだ。達也と深雪を守るための手段である。手法としては紫音が取ってきた敢えて目立つという作戦に類似する。また水波は紫音の従者として入学しているため、目立たないようにする方が難しい。それならばいつそ思い切り目立ち、また入試トップを取ることで生徒会入りするということを選んだ。

今年度の生徒会は中条あずさを会長として、達也と深雪が同時に副会長を務めるという少々変則的な体制を取っている。水波も表向きに達也や深雪と仲良くできる立場であるほうが今後も動きやすいだろうという配慮でもあった。

また『従者の癖に名家を抑えやがった。四葉ヤベエ』という意識を植え付ける意味もある。

「後で七草姉妹にも挨拶しておかないとな。あの二人には風紀委員に入ってもらいたいし」

微かな原作の記憶によると、七宝琢磨と七草姉妹は確実に喧嘩を巻き起こす。そこで七草姉妹を風紀委員という自分の庇護下に置くことで、余計な諍いが無くなるようにしようと考えたのだ。

またそれとは別の考えもあるのだが、そちらは運の要素も絡むので期待はしていない。

ともかく、水波が新入生答辞をするという原作とは変わった始まりを迎えた新年度であった。



入学式後の恒例行事といえば、生徒会勧誘である。

そして今年迎える新入生は勿論、桜井水波だ。彼女は紫音の家政婦として第一高校に入学している。これは周知されており、また事前に紫音からも事実であると知らされていた。

ともかく生徒会長である中条あずさは胃が痛かった。

「……私が行かないとだめですか？」

「中条さん以外が行くのは失礼に値するからね」

「五十里君が勧誘してくれたりは……私もついて行くので」

「僕は構いませんが、それは生徒会長としていかなものでしょうか？」

「で、ですよね」

彼女はどちらかといえば紫音が苦手であった。

それは紫音と付き合い辛いなどの性格的齟齬に起因するものではなく、四葉というネームバリューを恐れているからだ。そして今年の新入生は四葉に仕えるという少女である。戦々恐々、といった様子はいつもの通りであったが、今日は尚更だった。

「覚悟を決めよう」

新しく生徒会役員となった五十里は最後の後押しをする。

ここまで言われたら流石のあずさも決意を固めたいらしい。水波の下へと歩み寄った。四葉の縁者という理由で避けられていた水波の周りには誰もいない。近づくのに苦労はなかった。

あずさにとつては非常に残念なことだったが。

「さ、さ、さささささ桜井水波さん！」

「……はい」

彼女は家政婦として非常に高いスキルを有しており、その中には他人のミスを華麗に流すというものも含まれる。意地悪な紫音と異なり、いちいち指摘しようとはしなかった。

「ほ、本校では将来の幹部を育成するという理念から、一年生の内から生徒会役員を選出することになっています。わ、私たちとしましては桜井さんに是非とも生徒会に入っていたらいいと思っておりますしゅ」

「……」

「……」

「……」

五十里、水波そしてあずさ本人まで黙り込む。

入学式で新入生歓迎の言葉を述べた彼女はここまで緊張してはいなかった。よほど四葉が怖いのかもしれない。五十里も少々気の毒

だと感じていた。

「とても光栄に存じます。よろしくお願いします」

いつそ断つてくれたらよかったのに。

あずさはどこか遠い目をしていた。



あずさが一世一代(?)の交渉に臨んでいた頃、達也たちは入学式の後片付けに勤しんでいた。また達也は入学式の手伝いに駆り出された二年生の監督役を任されており、目が回るほど忙しい。

ただ意外なことに、ほとんどの二年生は達也の指示に大人しく従っていた。去年までなら雑草だウイード二科生だなどと言われてまともにも言うことを聞いて貰えなかっただろう。しかし残念ながらというべきか、もう達也は二科生ではない。空白だった制服右胸と肩の部分に、歯車を模した一校エンブレムが描かれていた。

今年度から達也は魔工科に属することになっている。

九校戦での活躍がよほど衝撃だったのだろう。第一高校は試験的に魔法工学技術者を育成する学科を運用することに決めた。名目上は幅広い魔法師育成のため、ということになっているが、実質は達也一人のために開設されたようなものである。

「お兄様」

「ああ、ありがとう」

深雪は来賓の出席チェックを終えて書類を渡す。やはりというべきか、彼女の機嫌は最高潮であった。敬愛する兄の実力が正しく認められ、去年はできなかった生徒会の仕事を共にできる。これだけで彼

女は心が舞い上がった。

他にも祝辞の整理、業者との撮影データの受け渡し、小道具の回収などするべきことは多い。

彼女はまた仕事へと戻る。

そしてその間、紫音はというところある男を捕まえていた。

「は、ははははは……答辞の桜井君は君の縁者だったのですか。七草と七宝を抑えて入試トップとは驚かされましたが、納得というものですな」

「いえいえ。去年は残念ながら答辞を逃してしまった身ですから、恥ずかしいばかりですよ。うちの桜井は上野先生の目に適いましたか？」

「とても高校生になったばかりとは思えない落ち着きとスピーチでしたな。去年の司波君を思い出しますよ」

そう言つて彼は作業する深雪へと目を向ける。

十人が見れば十人が振り返る美女という評価ですら不足と言わざるを得ない彼女に見惚れない男はいない。この男も例に漏れず、衰退しつつある欲に炎が灯った。

上野は魔法師に対して好意的な姿勢を見せる国会議員だ。魔法大学の学外監事を務めたこともあり、少なくとも第一高校からすれば無視できない人物であった。それゆえに扱いにくく、一校側は配慮というものを求められる。

しかし四葉の肩書を持つ紫音は関係ない。

「ところで上野先生」

「な、何かね？」

深雪に目を奪われていた上野は紫音の声で現実へと引き戻される。

目を逸らすなんて許さねえからとでも言いたげな威圧を放つ紫音のせいで、彼は五秒以上継続して深雪を眺めることができない。性的

な下心が透けて見える彼の視線に晒されて深雪も気分は良くないだろう。そんな彼女を守るために紫音がわざわざ話しかけているのである。

十師族として魔法師とかかわりのある政治家に繋ぎを作るという意味もあるが。

「例の吸血鬼事件以降、魔法師に対する批判的な風潮が少しずつ広がっています。また同様の被害を受けたUSNAに由来する人間主義の侵入も見受けられるようです。上野先生は御存じでしたか？」

「認識していますとも。厄介なことに与党の中にも表だって、あるいは陰ながら支援する者が多く私も困っていましたな。特に人間主義はいけない。魔法は科学の一種だというのに」

「彼らの信じる魔法は時代錯誤ですからね。魔女狩りの時代の魔法と体系化された現代の魔法を混同しているのでしょうか」

「その通りですな」

「この第一高校のみならず、全国の魔法科高校で新入生を迎えた今、そのような風潮は次代を担う若者によく影響を与えていると思いませんか？」

「……なるほど。その通りですな。四葉君が言わんとしていることはよく分かりました。早速、検討させていただきますでしょう」

「ほう。検討、ですか？」

「ああ、いえ、ああ……我が政党は次の選挙の準備段階でして、意思を統一して対策というのは難しいでしょう。無論、私は手を打ちますが、まずは党の仲間と相談する必要があります」

早く対策しろ、という四葉の圧力には屈する他なかったらしい。また紫音は国防における最重要兵器、戦略級魔法師でもあるのだ。上野こうずけが如何に力のある議員でも、紫音の要求を突っぱねることはできない。

魔法師反対運動を表立って叩くと批判的な世論が集まってしまうため、選挙を控えている彼は明言を避けるという手段を取っていた。

しかし今、それを許されない状況に追い込まれている。

「見かねた彼の秘書が耳元でわざと周りに聞こえるように囁いた

「先生、そろそろ時間です」

「うむ」

こうずけ
上野にとっては渡りに船。

優秀な秘書に内心で感謝しつつ、残念そうな表情を装って紫音に告げた。

「非常に残念だが、この話はまたいずれとしまししょう。勿論、前向きに検討することを確約します」

「お願いします」

「では、私は失礼します。有意義な話をありがとう、四葉君」

「こちらこそ」

逃げるように去っていく彼を見て、片づけをしていた生徒や教師たちは明らかな安堵を浮かべていた。紫音はその立場と四葉の名によつて圧倒していたが、普通の魔法師ならば遠慮と配慮をしなければならぬ相手なのだ。片付けがあるから早く帰れとは言えず、迷惑だという思いを燻ぶらせていた。

そんな上野を実質的に追い返したのだから、まさに紫音は救世主であつた。

(夏頃にはあの計画も現実的になる……それまでに反魔法師の意見は潰すか、分裂させて小規模化させないと)

紫音は表に出た四葉として、様々な仕込みをしている。

今年の春は昨年に劣らず忙しい日々を過ごすことになるだろう。しかし学内でやるべきことは水波にも一部任せるつもりなので、紫音はより広い範囲に手を伸ばせる。

(亜夜子と文弥も頼もしく情報収集してくれるようになったしな。こっちも兄として負けてられない)

そして黒羽家も紫音とは別の切り口から同じ問題に対処していた。



時は遡り、第一高校入学式前夜のことである。

日本の三大都市として数えられる名古屋に亜夜子と文弥はいた。時刻は二十三時を回ったばかりであり、中学生にしか見えない二人ではいつ通報され、補導されてもおかしくない。しかしそんなことは知らんとばかりに亜夜子は派手な格好をしていた。

露出こそ少ないが、少々派手過ぎて過激とも言えるほどである。華美なりボンはともかく、左目を覆う眼帯が厨二感すら醸し出している。

「なんで僕がこんな格好を……もう高校生なのに」

一方で文弥は黒のジャンパースカートに同色のレギンス、そして髪型はショートボブと完全に少女の姿であった。本人にとっては残念で不本意なことなのだろうが、実に似合っている。化粧を施しているとはいえ、下手な女子よりも可愛いのではないだろうかと思わされるほどだ。

ただ文弥も思春期の男子であり、可愛いと言われて喜ぶ年頃ではない。

それゆえ非常に不満であった。

「あら、似合っているわよ?」

「そういう問題じゃない。僕は——」

「はいはい。今は『私』でしよ、ヤミちゃん？」

「うっ……」

黒羽である二人にとって、情報収集は最も大切な仕事だ。四葉分家の中でも仕事量が多く闇が深いとされているのが黒羽であり、まだ中学校を卒業したばかりの二人にも重要な仕事を幾つか割り振られていた。

そして今日の仕事はそこまで重要ではない。

少なくとも失敗したところでリカバリーの効く程度のものだ。

しかし失敗によって亜夜子と文弥の人相がばれることだけは避けなければならぬ。故に二人は戦闘に備えて動きやすさを優先するとともに、軽度の変装も求められていた。

「っ！ 来たよヨル姉さん」

「みたいね」

耳に装着した小型無線機からターゲットの到来が知らされる。

ヨルとヤミ。それが今日の二人のコードネームだ。今日に限らず普段から使っているが。

ともかく二人は余計な会話をやめて物陰から観察する。

「へえ。人影のない場所に来る割には豪華な車じゃない。隠す気がないのかしら？」

「ないと思うよ。ジャーナリスト記者に情報提供した、って体なんだろうね」

「ジャーナリストねえ」

亜夜子は高級車の到着と共に木陰から現れた大男を見て苦笑する。スーツで多少は誤魔化されているが、その下に隠れた肉体は間違はなく実戦で磨かれたもの。少なくとも一般人とは思えない雰囲気が入り込んでいた。

「まるで傭兵じゃない」

「実際に経験しているみたいだよ。さっきデータが送られてきたけど見てないの?」

文弥の窘めるような目線に、亜夜子は目を逸らす。

記者も隠れているつもりだったのだろうが、黒羽の目からは逃れられない。隠し撮りした映像データを照合し、人相からプロフィールが割り出されている。

「魔法師を優遇する体制に批判的な記者ってことらしいよ」

「ジャーナリストの鑑ね」

「はいはい。姉さんの偏見はあとでゆっくり聞いてあげるから」

「ヤミちゃんってば生意気ね」

「いいから行くよ。急がないと」

情報を渡そうとしている一般人らしき男が二人、高級車から降りてきた。そして記者と握手を交わし、小声で何かを話している。

文弥の言う通り、悠長に雑談している暇はない。

「はいはい」

軽い口調で返事をしつつも亜夜子は真面目だ。

慣れた手つきで革ブレスレットの下に隠したCADを操作し、魔法を発動する。その魔法は『疑似瞬間移動』だ。

瞬間移動と言われてイメージする空間の跳躍ではない。ただの移動魔法による超高速移動だ。真空チューブを形成し、空気の繭で包んだ物体を飛ばすというだけの仕組みとしては単純な魔法である。しかし真空チューブを形成する際に空気の流れが生じてしまい、移動先が予測されやすいという欠点がある。そのため実戦に於いての使用法は主に逃走だ。

だが、亜夜子の疑似瞬間移動はその空気の乱れすらコントロールしており、そよ風すら生じなかった。

「がっ!？」

そして元傭兵の記者が呻きながら倒れて初めて、彼らは自分たちが狙われていたことに気付いた。疑似瞬間移動によって車のボンネットに現れた文弥は、右手に装着していたナツクルダスター型のCADを突き出す。同時にまた一人、呻きつつ倒れた。

「魔法師か！」

残る一人は何が起こっているのか悟ったらしい。

そしてこの国においては所持するだけで違法となる拳銃を取り出し、文弥を撃とうとした。その目には憎悪の炎が灯っており、魔法師は問答無用で殺すという意思が見える。そしてそんな感情と銃を向けられたら普通の少年は怯んでしまうだろう。だが文弥は普通ではない。

落ち着いて親指でナツクルダスターに付いているボタンを押した。

四葉の血筋として生まれ持った文弥の固有魔法『ダイレクト・ペイン』が発動する。対象に直接痛覚を与えるこの魔法は、肉体の耐久力を無視して激痛という精神ダメージを付与するのだ。

「が、は……あ」

腹部を杭で穿たれたような激痛により、最後の一人も倒れた。

そこに優雅な歩みで亜夜子もやってくる。

「あっけないわね」

「奇襲だったからね。こっちの男たちも人相照合して、あとは持つて帰って調べれば全部わかると思うよ。こんな程度なら僕たちが出て

くる必要もなかったのに」

「くら、ヤミちゃん」

気を抜いた弟を窘めるつもりだったのだろうか。

いや違う。

彼女は意地の悪い笑みを浮かべつつ、文弥の両頬を掴まんでグニグニと虐めた。

『私』でしょう？ 今はヤミちゃんなんだから」

「ちよ、痛い。痛いよ!?!」

その後、男たちは夜の内に全ての情報をさらけ出すことになる。

USNA由来の人間主義者……に扮した工員がこの国にやってきたこと。その背後関係までは洗いきれなかったが、少なくとも日本の魔法軍事力を低下させるという目的をもって行動している。

一連の情報は即座に紫音にも伝えられ、それに準じた作戦が実行されることになった。

ダブルセブン編2

新学期が始まれば新体制が始まる。

紫音の所属する風紀委員会にも新入生を迎え入れ、新たな活動をスタートさせていた。そして新入生の中でも特に注目を浴びているのが、教職員推薦枠の七草香澄、生徒会推薦枠の七草泉美である。昨年の紫音も同じく教職員推薦であったことから、これは風紀委員の中でも予想されていたことであつた。

「で、俺に双子の面倒を見ろと?」

「そういうことよ。面識あるんでしょ?」

「まあ、いいですよ」

紫音は十師族という立場である。日本最高峰の魔法師一族である七草を押し付けられても困らない。残念ながら四葉と七草は仲が悪く、直接的な繋がりはない。しかしながら個人的な繋がりから紫音は二人とそれなりの関係性を築いていた。

面倒だとは思つたが。

風紀委員長の千代田花音も面倒を押し付けることができて満足という態度を隠そうともしない。

「そろそろ部活勧誘週間も始まるから、一人でも動けるように教えてあげて」

「了解です」

「七宝って子と因縁があるって聞いたから注意しておいて。もしもの時は四葉君が責任を持つのよ」

「……気付いた時は対処します」

色々押し付けることができて花音は終始笑顔であつた。



魔法科高校は魔法師育成を目的とした専門学校だが、その部活動も充実している。純粹な運動系の部活もあれば、魔法競技の部活、文化系の部活、はたまた技術系の部活まで存在するのだ。しかしながら新入生は一科生と二科生を合わせても二百人しかいないため、当然ながら新入生の奪い合いは熾烈を極める。

よって混乱を最低限とするため、第一高校には部活勧誘週間が設けられていた。

ただし、大人しく勧誘するような者は滅多にいない。

新入生を奪い合うだけならいざ知らず、喧嘩や魔法の撃ち合いに発展することもしばしば。そこで生徒会、風紀委員会、部活連が協力して取り締まることになっている。

紫音も風紀委員として見回りに勤しんでいた。

「異常なしと」

自嘲するように呟く。

一年経つても四葉の名前は絶大な効力を発揮しており、紫音が歩き回るだけで治安が良くなっている。下手に暴れまわるとこの世から消されるなどという眉唾な噂まで流れているほどだ。

四葉紫音が見回りをする効果だけは、生徒会長となった中条あずさもありがたがっていた。

しかし暴走する生徒が自然消滅するのは紫音の周りだけである。

インカムが鳴り、嫌な報告が耳に飛び込んできた。

『ロボ研ガレージで問題が起こった。来てくれないか?』

「達也か? ロボ研となるとかなり遠いが」

『済まないが七宝琢磨と七草香澄が暴走している。回収してくれ。泉美が一応のストッパーになっているが、それもいつまで持つか分から

ん。不味そうなら俺と深雪でも何とか仲裁してみる』
「は？ いや、とにかく急ぐ」

香澄の暴走と言われると急ぐ他ない。

おそらくは風紀委員として張り切り過ぎてしまったのだろうと予想するが、香澄ほどの魔法師が暴走したとなると周りにも被害が出かねない。

(千代田先輩に怒られるな)

紫音はフラッシュキャストで自己加速術式を起動し、目的地へと急いだ。



時は少し遡る。

ロボ研ガレージ前にて、ロボ研とバイク部が睨み合っていた。ちなみにバイク部は自動二輪車を作ったり改造したりを目的としているため、実際に乗るわけではない。

「いい加減諦めたらどう？ スミス君はロボ研に入るのよ」

「はあ？ 耳が腐っているのかしら？ スミス君は一言も言っていないわ。それに先に声をかけたのはこっちなんだから遠慮しなさいよ」

「勧誘に早い者勝ちなんてないわ。小学生じゃあるまいし。時代遅れのレシプロエンジンに脳までシェイクされちゃったみたいね」

「誰が時代遅れですって!? 等身大メイドロボで遊んでいるオタクは私たちには理解の及ばない高尚なことを仰るのですねえ！」

スミスという可愛らしい男の子の新入生を挟み、口汚く罵り合う女子生徒たち。

その背後でも部員たちが剣呑な雰囲気を出していた。

「あ、あの、僕は……」

すっかり新入生のことを置き去りにして。

まさに一触即発という空気が満ちていく。だが、今にも爆発しそうなそれを止めた者たちがいた。

「そ、そこまでですー!」

現れたのは部活連執行部の十三束鋼であった。そして見習いとして付き添っている七宝琢磨も割り込む形で二つの部活の間に入る。余程張り切っているのか、気付かぬうちに渦中の新入生スミス・ケントを押し出してしまった。

また一步遅れて連絡を受けた達也と深雪も到着する。何もない時は生徒会副会長として部活連本部に待機しているのだが、連絡を受けると直行して仲裁することになっている。去年まで風紀委員だった達也の技能が生かされた形だ。

「ケントじゃないか」

「あ、司波先輩!」

そしてスミス・ケントと達也は知らぬ仲ではなかった。入学式の時迷っていた彼を助けたという経緯があり、その関係で彼は達也を慕っている。

嬉しそうに達也の元へと駆けて行った。

勿論、問題が起こっているとは知らない達也は彼に尋ねる。

「何があった?」

「その、どのクラブに入るのか決めていないので。今日は見学して帰ろうとして、それで」

要領を得ない説明を理解しようと達也が試みている間に、状況が更に変化する。

「風紀委員です！」

聞き覚えのある声に思わず目を向けた。

「あら、泉美ちゃんに香澄ちゃんですね」

「そのようだな……ケント、つまりロボ研とバイク部に巻き込まれたわけだな」

「はい……」

「分かった。もう大丈夫だから離れてもいいよ。ここは俺たちが何とかしておくから」

「わかり、ました。お願いします」

ケントは後始末を任せて良いのか迷ったようだが、一礼して去っていった。

その間に琢磨は目じりを吊り上げながら声を張っていた。

「ここは部活連執行部が対応している。風紀委員は他所に行つてくれ」

「生徒の諍いは風紀委員の管轄だと思うんだけど？」

一瞬怯んだ香澄も強気で返す。

これが口論の始まりとなった。

「ここは俺たちが預かると言ったんだ。聞こえなかったのか七草？」

「ふうん……」

香澄は意味ありげに見つめる。
そして馬鹿にしたような態度で続けた。

「七宝君、私のこと知っているんだ。生憎だけど、風紀委員が部活連執行部に従わないといけない理由なんてないんだ」

「七草……喧嘩を売っているのか？」

「喧嘩を売るつもりなんてないよ。どうしても言うなら買ってあげるけどね」

互いの眼に剣呑な雰囲気宿り、じりじりと戦意が高まっていく。

泉美も後ろで溜息を吐いているが、まだ止めるつもりはないようだ。このままでは不味いことになりかねないと考えた達也は七草姉妹の世話役である紫音へと連絡し始める。

琢磨は香澄の挑戦的な笑みに我慢の限界を超えたのか、左の袖を軽く引つ張り上げた。そこから戦闘にも使える自身のCADを覗かせる。

「この七宝おれに喧嘩を売るのか？」

対する香澄も左袖を持ち上げ、小さめだがお洒落なCADが目映った。

「目一杯安く買い叩いてあげる。二度と七草わたしに喧嘩を売るなんて考えないようにね」

「ちよつと香澄ちゃん」

「泉美は下がってて」

「もう……」

「なんだ？ 二人一緒じゃなくていいのか？」

「負けた時の理由が欲しいなら泉美も呼んであげるけど？」

もはや仲裁のためにやってきたということも忘れているらしい。CADに右手を添え、いつでもテンキーを押せるように構えている。ロボ研とバイク部の喧嘩も中途半端なまま止まっていることすら眼中になかった。

流石にこれは不味いと思ったのだろう。十三束が止めに入る。

「ちよ、ちよっと待った！ 二人とも落ち着いて！」

彼は慌てたことだろう。

服部から面倒を見るように言われていた七宝が暴走気味で死闘を始めるようとしているのだ。しかも相手は風紀委員で、更に七草である。このままでは周囲にまで被害が出てしまうかもしれないのだ。

しかし先輩である十三束が間に入ったにもかかわらず、二人は止まる様子がなかった。

「邪魔しないでください先輩」

「どうか落ち着いて七宝」

「十三束先輩はそいつを庇うんですか？」

「七草さんも落ち着いて！」

ここまでヒートアップすると、場を解散せざるを得ない。

そこで達也はすぐ隣へと視線を向ける。向けられた深雪は意図を理解したのか、周りに向かって宣言する。

「皆さま、もうお戻りになった方がよろしいのではありませんか。生徒会はこの件を問題にするつもりはありません」

それが決め手となったのだろう。

この場からはぞろぞろと去っていく。残っているのは達也と深雪、そして争う『七』の魔法師たちとそれを止める十三束だけとなった。また、丁度そこに紫音も到着する。

魔法を使つて建物の間を飛び越えてきたらしく、空からいきなり現れて達也の側に着地した。達也は初めから知っていたので特に表情も動かさないが、深雪が驚きを露わにする。

「紫音か、丁度いいところに来た」

「状況は？」

「七草と七宝の喧嘩だ」

「把握した」

最小限の会話で察した紫音は、まず二人の間に入る。その際に十三束が安堵の表情を浮かべていたのは言うまでもない。ちなみに彼と紫音は去年まで同じクラスだったので面識がある。

「そこまでしておけ。お前たちの仕事を忘れたのか？ それと十師族、および師補十八家の者である自覚をしろ。学校で私闘がしたければきちんと申請することだ」

「四葉先輩、でも」

「分かったな香澄」

「……先輩が言うなら。それに決闘するほどでもないですし」「何！」

大人しく引き下がる香澄に対し、琢磨は尚も噛みつきこうとする。だが、それを紫音が睨みつけて抑えた。一瞬だけ怯えたものの、すぐに悔しさや苛立ちを滲ませる。そして一礼し、速足で去っていった。

「ありがとう四葉君、僕もこれで！」

「ああ」

そして十三束も軽く頭を下げ七宝を追いかけていった。

ひと段落したことで紫音も軽く息を吐き、振り返って双子を睨みつける。

「俺の言いたいことは分かるよな？」

「はい……」

「すみません先輩」

「それならいい。わざわざ言葉にすることですらない」

しかしこれで終わりにはならないだろうな、とは紫音も考えていた。



七草香澄と七草泉美にとって姉の真由美は頼れる人物という認識である。一応は兄もいるのだが、異性であり歳も離れているので関わる機会は少ない。困ったことがあれば真由美を頼るとというのが常であった。

彼女の部屋を訪れた双子に対し、真由美が尋ねる。

「二人ともどうしたの？」

「すみません。ちよつと意見を伺いたいことがあります」

泉美の言葉に真由美は『おや？』と首を傾げる。

勉強や魔法のことならば質問があると表現するハズだ。なので別の意図があるということである。

「いいわよ。何が聞きたいの？」

「お姉ちゃん、七宝家の当主ってどんな人か知ってる？」

「七宝家の？」

何故そんなことを聞くのか一瞬理解できなかった。

しかしすぐに思い当てることがあつたらしく、ジツと香澄を問い詰めるような目を向ける。

「香澄、あなたまさか……」

「な、なに？」

「あなたまさか七宝君と諍いを起こしたんじゃないでしょうね？」

大正解である。

香澄は思わず目を泳がせ、それを見て泉美も溜息を吐いた。そして泉美は誤魔化しきれないと考えたのか、正直に学校でのことを話す。

「——というわけでして、香澄ちゃんは悪くありません」

「はあ。まあいいわ。四葉君にもまたお礼を言わなくちゃね。それで七宝家の当主がどんなお人柄かという話だったわね」

真由美は目を閉じ、少しだけ思案を巡らせる。

そしてゆつくりと瞼を開きつつ呟いた。

「私も直接お目にかかったわけじゃないけど……堅実で用意周到、といった印象かしら」

「堅実で」

「用意周到？」

双子は目を見合わせる。

今日の琢磨の態度からはとてもそんな雰囲気を感じ取れない。つまり、今日の態度は七宝家の総意ではなく個人的なものだったということだろう。ある意味で安心だったが、逆に何をしてくるか分からないという怖さも出てきた。

「そうね。少なくとも七草家わたしたちに喧嘩を売るよう、息子に言い聞かせるような人ではないと断言できるわ」

「何考えているんだろ？ 家からの指示だって無視できないはずなのに」

「もしかして個人的な後ろ盾があるとか、でしょうか？」

「まっさかー」

「……」

「……」

あり得るかもしれない想定。

二人は笑って済ませられない可能性を否定できなかつた。



同時刻、七草邸は客人を迎えていた。

より正確には七草弘一に対する個人的な客人である。その名を小和村真紀さわむらまき。その父が映像メディア企業を経営しているのだが、彼女本人の職業は女優であった。経済関係者や魔法関係者が訪れるのは珍しくないものの、芸能関係者というのは滅多にない。

しかも彼女が案内されたのは食堂である。

弘一と一対一での食事会が行われていた。

「ほう。ならばお父上は反魔法師主義者との密約を反故にするか？」

「はい、その通りです。彼らの言う反魔法主義は非常に悪質で害悪なプロパガンダだと私は思っております。そして父上も説得によってようやくそれを理解して頂けました」

「ありがとうございます。あなたは話の分かる人のようだ」

真紀は浮かべそうになった笑みを抑え込み、女優としての微笑みを

維持する。

そしてここぞとばかりに今日の目的へと話題を移行し始めた。

「私は魔法をもつと社会的に評価されるようにしたいのです。軍事、治安維持にも必要だということは存じていますが、私はそれよりも娯楽映像に可能性を見出しています」

「娯楽、ですか?」

「勘違いして頂きたくないのは、魔法師を見せ物にしようとしているわけではないということです。魔法と大道芸を同一にしているわけではありません」

「ほう」

「具体的には……そう、たとえば映画の撮影です。本来はスタントマンが危険を承知で行うことでリアリティを追求するのですが、そこに魔法師の活躍の余地があります。その価値は計り知れないでしょう」

弘一は彼女の言わんとすることを全て理解する。しかし敢えて口に出すことはなく、彼女を気持ちよく喋らせることにした。

「それで?」

「魔法師の中には実戦レベルに達せず、その道を諦めてしまう方が多いと聞きます。そのような方々に道を示したい。それが私の願いです」

「なるほど」

「私は彼らに相応しい価値を見せられる場を提供できます。勿論、相応の報酬も」

実戦レベルの魔法師を囲う集団は既に存在し、新参者である彼女に入り込む余地などない。十師族などがその最たる例だ。特に七草家は様々な外部魔法師を雇用しており、実戦レベルのプロ魔法師を豊富に取り揃えている。

だからこそ、弘一の眼鏡に適わなかった者をターゲットにした。

今回の食事はそのための予防線のようなものである。しかしながら、彼女は七草家の当主という人物を見縊っていた。

「ふむ。あなたは交渉人として優秀のようだ。しかし本音を隠し過ぎている。しかもあからさま過ぎだ」

真紀は思わず動揺を表情に出してしまう。しかし持ち前の女優としての矜持によって即座に平静な顔へと戻した。

だが弘一は止まることなく畳みかける。

「確かに今仰られたことも事実で、正直な理由なのでしよう。しかしそれだけではない。あなたはもっと直接的な力として魔法師を集めようとしている。あるいは未来に向けた伏線といったところですか」

見透かされた、と内心で舌打ちするも既に遅い。

ここから巻き返す方法を即座に考え出し、それを口にする。

「……お見それしました」

彼女の取った手段は正直に話すということだった。

ここではぐらかせば二度と七草家の協力を得られないだろう。ならば七草家にも利益がある、あるいは損はさせないということの説明して納得させる必要がある。

だが、そんなものすら弘一は見抜いていた。

正直に謝罪したというプラスポイントによって勝利を掴み取った。

「いいでしょう。七草家とその縁に手を出さない限りは何も言いません」

「本当ですか!？」

「ええ、お約束します」

彼女の目指す新しい秩序。
その最も大きな懸念を排除できたことに安堵した。



小和村真紀は一目で分かる高級車から降りると、高層マンションへと入っていく。その最上階のフロア全体が彼女の自宅であり、二十四時間体制で女性ボディガードが見張っている。女優というだけでは説明できない厳重な警備体制だが、これらは娘を愛する父の心であつた。

彼女の父は複数のメディア系企業を傘下に収める持株会社の社長であり、北山家にこそ及ばないが立派な上流階級に区分される人物だ。

帰宅した彼女はまず、シャワーを浴びて汗を流す。

十師族という権力の化け物を相手に汗一つ流さず会話できるほど、彼女は熟達していない。服を脱ぐ段階で自分が酷く緊張していたことを思い出させられた。

そしてガウンを着込み、テーブルにワインとグラスを用意する。
グラスに注がれた赤い液体には口をつけず、ただ回しながら香りを楽しんでいた。

(これで計画が一步進んだわね)

駆け引きに勝利できるほど甘くはなかった。

しかし必要なものは手に入れた。

結果は満足といったところである。

そこにボディガードが扉を開けて現れる。

「お嬢様、七宝様がお越しになりました?」

「あら？ 今日は何もしていないのだけど……まあいいわ。通して」
「かしこまりました」

どうしたのだろうか、という疑問と同時に今日のことには違いないと自分なりの結論を出す。

七宝琢磨が現れるまで、彼女は存分にワインの香りを堪能した。



「こんばんは、真紀」

勝手知りたる様子で入室した琢磨は遠慮することなく彼女の前まで進み、対面のソファに腰を下ろした。これだけで彼が頻繁にここへと訪れていることが分かる。

真紀はひとまず尋ねた。

「今日はどうしたの？」

「分かっているだろう？ 七草とのことだ。君のことだから失敗はないと思うが……」

「ええ、問題は無かったわ」

「そうか」

「それよりも学校はどうなの？ 学生の内から有望な人材を見繕うの
でしょう？」

会談を成功させた真紀はごく機嫌な様子だ。

しかし対照的に琢磨は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。上手くいっていないのだろう、ということを感じた真紀は慰めるような甘い口調で問いかけた。

「何かあったの？」

「ああ、想像以上に七草と四葉が食い込んでいる。おそらく生徒会は七草、風紀委員は四葉だ。取りあえず俺は部活連に根を下ろしたけど……それも時間がかかりそうだ。今の部活連会頭が去年の生徒会副会長らしくてね。そこにも七草が絡んでいる可能性が高い」
「それは大変なのね」

思春期の男を喜ばせるのは簡単だ。

否定せず、共感してあげればよい。理論整然とした正解はいらない。ただ彼の答えを認めるだけでよいのだ。真紀はそれを心得ていた。

しかし悠長にそんなことばかりをしているわけにはいかない。同調しつつも提案は忘れない。

「まずは新入生から輪を広げてはどう？」

「俺たちの目的は仲良しクラブを作ることじゃない。次世代の……ニューオーダー新秩序を手に行き届かせることなんだ。学校の中で派閥を作ってお山の大将になったところで意味なんてないよ。たとえば北山家の令嬢やその友人の光井ほのか……彼女たちは有力候補だ」

「そう……でも一つ忠告よ。ちゃんと『先輩』は付けておきなさい。普段から気を付けないと、いざという時も出ちゃうわよ？」
「わかったよ」

琢磨は、そして真紀はどこかにある勢力に入るだけで満足するつもりはない。自分たちが新しき秩序となり、頭角を現すことが目的なのだ。

そのために、琢磨は父である七宝家当主の意向にも密かに逆らっていた。

ダブルセブン編3

四月十五日、七草弘一は珍しい相手からメールを受け取った。メールと言っても正式な文書で、しかも相手は四葉真夜である。

「ほう」

訝しげに暗号化した文書をデコードして、内容を確認する。そして思わず息を吐いた。

「これは、ふむ」

珍しい相手というのは間違いない。

また因縁のある相手であり、数か月前には辛酸を舐めさせられた。正直、苦手意識が生まれてしまったのは間違いない。だが送られてきた文書の内容は弘一とて無視できないものであった。

「なら」

主な内容は面会の約束を求めるものだ。

しかも個人的ではなく十師族としての面会である。四葉紫音を代理として遣わすとあるが、あまり油断できることではない。とはいえ断るほど狭量でもない。

答えは一つであった。



四月十六日、午後八時五十五分。

七草邸の前に黒塗りの車が停まった。そして先に降りた運転手が

後部座席の扉を開く。中からは黒スーツに身を包んだ紫音が現れた。そのまま七草邸の門を潜る。

出迎えたのは真由美であった。

「久しぶりね四葉君」

「七草先輩が直々に迎えに来てくださるとは。お久しぶりです。大学の方はどうですか？」

「まだ少し慣れないけど、楽しんでいるわよ。さ、どうぞ上がって」

「ええ、お邪魔します」

真由美は父の執務室へと案内する道中、実に意外そうといった口調で尋ねた。

「それにしても驚いたわ。まさか四葉君がうちに来るなんて」

「母上の、四葉家当主様の代理ですよ」

「それでもびつくりよ。うちの使用人には任せられないから私が出ることになったんだから」

「それは御迷惑をおかけしました」

「ふふ。気にしないで。それに四葉君には妹たちもお世話になっていくるし」

妹たち、というのは香澄と泉美のことで間違いない。

真由美からすれば二人とも風紀委員に所属することになるとは思わなかったのだろう。探る意味も込めて続ける。

「今年の首席は四葉の縁者だと聞いたわ」

「水波のことですね。あの子の一族は四葉家で世話をしている魔法師です。俺の世話役として来てもらうついでに第一高校を受験させました」

「驚いたわねえ。十師族の血縁というわけでもないのでしょうか？」

「四葉家は少数精鋭を基本としていますから。それに縁のある魔法師

一族は四葉家で世話をして、魔法力の向上に努めさせています。勿論、実戦訓練も含めて。水波とて訓練ではありませんが実戦経験済みの魔法師なんですよ」

「世話をしているってそういう意味なのね。うちとは大違いだわ」

七草家は十師族の中でも極めて大きな魔法師コミュニティを形成している。その理由は魔法大学を卒業した魔法師を大量に雇い入れているからだ。勿論、魔法師の名門として家々との付き合いから雇い入れられる者も多い。しかしわざわざ出資してまで魔法師を育てているわけではない。

あくまでも家としての付き合いを利用したものばかりだ。

四葉の言う少数精鋭の秘密に迫れたからか、真由美も感心した様子であった。

「でも本当に驚きの連続だわ。今まで四葉の後継者なんて聞いたことなかったのに……」

「そればかりは大漢ダーハンの教訓です。水波は俺の護衛でもあるんですよ」
「そう、なのね」

真由美も四葉を襲った悲劇は知っている。

だからこそ、四葉の名を隠している一族のことも納得できた。まさか第一高校に紫音以外の四葉がいようとは思わないが。

やがて紫音は一つの扉の前まで案内される。

そして真由美が軽くノックする。

「お父様、四葉君をお連れしました」



弘一は眼前に座る少年をサングラス越しに眺めつつ、まずはどう口火を切るか悩む。

いきなり四葉代表として接するか、あるいは娘の学友として接するか。弘一は少しの間だけ思案し、やがて言葉を口にした。

「よくぞいらっしやられました。国家公認戦略級魔法師殿をお招きできて喜ばしい限りです。五輪滯殿はお招きしたこともあったのですが、君は初めてですね。こうして直接話すことも」

「こちらこそ。しかし今日は四葉家当主代理として訪れています。戦略級魔法師としてであれば、またいずれの機会にでもお招きに応じましょう」

「そうですね。本題といきましようか」

余計なことは話さない、か。

そんな風に内心で考えつつ、弘一も脳内を切り替える。今日の会談の内容は予め文書によって知らされていた。しかしより深い認識の共有という意味で、前提から話し始める。

「昨日の文書を確認しました。我々七草家としても認知しています。海外から紛れ込んでいる反魔法師団体に偽装した作業員をね」

「それは良かった、と言っておきましょう。流石は七草家です。相談した甲斐がありました」

「私としては四葉家から相談してきたことに驚いていますが……流石は黒羽といったところですか」

主導権を握るためにもジヤブを放つ。

四葉の懐刀にして工作のプロとして黒羽家があることは弘一も認知していた。そして紫音が黒羽家の血縁ではないかということも調べていた。

ところが紫音は表情一つ動かさず、答えを返した。

「お褒めに与り光栄です。それに七草家こそ、海外の工作員を早期に確認し、手を打たれた。影から政治家やマスコミに情報を流し、反魔法師団体を煽って分裂を促しておられるのでしよう？」

「ええ、その通りです」

反魔法師団体を支援する。

それは十師族として叛逆にも等しい行為だ。しかし弘一は否定しなかった。そんなことをしても意味がないと理解していたから。

「反魔法師団体などと一括りにはしていませんが、我々の敵は要するに世論です。彼らの語る魔法師の危険性や魔法師と一般人の不平等性は誰かが根拠に基づいて語る意見ではありません。意見ならば我々も否定の材料と主張を以て対抗するが、世論はそうもいかない。だからこそ、反魔法師団体そのものに働きかけ、世論の分裂を促す。それが最も効果的でしょう。大火より小火ほやの方が消しやすいのは道理です」

「同意します。しかし生温いと言わざるを得ませんね」

「ほう？」

「どうせならばその火を返してやらなければ」

紫音の言葉に弘一は興味を引かれた。

同時に若い、とも考える。

確かに反撃できるならばそれに越したことはない。この国の魔法師の地位を貶め、魔法師弱小国にしてしまおうとする勢力には頭を悩ませてきた。それが一掃はできずとも、しばらく抑え込めるならば万々歳である。

しかしその難しさも理解していた。

世論は簡単ではない。

反撃ができるならば弘一もやっている。

「どうするのか、聞かせて頂きましょう」

「物事は根本的に解決するべきです。昨今のマスコミがあることないことを報道し、世論を掻きまわしていることは御存じの通りでしょうか？ この際ですから、そちらから攻めましょう」

それを聞いて弘一は落胆した。

分かり切っている対処法だが、しかしだからこそ難しい。露骨なことをすれば逆効果になるだろう。言論の自由を盾に言いたい放題する相手を鎮めるのは至難だ。

だが、紫音は弘一の落胆を察しつつも言葉を続けた。

「何も無策というわけではありません。マスコミを叩くならば、同じマスコミです」

「競合させるのですか?」

「いえ、特定メディアの報道が不当であり、信じるに値しないということとを世論に知らしめます。真実を暴きたがるジャーナリストの精神を利用して」

「罠に嵌めると?」

「第一高校という場所は格好のネタになると思いませんか？ 特に反魔法師を主張するメディアはこぞって取材したがるでしょう。そうでないメディアも、ですが」

それがどんな意味を含んでいるか、七草家当主として考える。

弘一にとって四葉を襲った悲劇は他人事ではない。かつては四葉真夜の婚約者でもあった彼にとって、あれは忌まわしい事件であった。また弘一本人もその時の事件によって片目を失っている。普段からサングラスを着用しているのは義眼を隠すためであった。

第一高校は自分の娘が通う学校だ。

そこが薄汚いハイエナによって荒らされることは望まない。たとえ他の誰かが傷つき、命を落そうとも弘一は絶対に娘を優先する。

(第一高校にメディアが訪れる場合。その標的となるのは……)

弘一はじつと紫音を見つめる。

「自分を餌とするおつもりですか？」

「高校生の戦略級魔法師……すなわち有事の際には超法規的に軍人としての働きが求められる立場です。こぞって自分を質問攻めにするだろうと思いますよ」

「なるほど」

戦略級魔法『日蝕』^{エクリップス}の使い手、四葉紫音。

それは手を出し辛い微妙な立場である。本来、未成年の従軍は法律によって禁止されている。一方で十師族という枠組みは超法規的な立場だ。様々な面で政府から優遇される特別に与る一方、有事の際にはその魔法の力を振るうことが求められている。

かつて九島烈が組織した魔法師を守るための枠組みだ。

学生でありながら軍人としての命令系統に組み込まれた紫音に対し、メディアがどのような反応を示すかは予想に難くない。また謎のヴェールに包まれた四葉に興味を示すことも間違いない。

「では四葉殿は私にどのようなことをお望みですか？」

「話は簡単です。小火^{ほや}の一つを分けて頂きたい。四葉がそれに燃料を注ぎ、相手に返す……ということですよ」

「なるほど。先んじて工作している七草^{こちら}への義理を通すというわけですか」

「パイの奪い合いを十師族でするわけにもいかないでしょう」
「尤もです」

七草が負うべきリスクは最小で、かつ最大の利益が期待できる。四葉と手を組むということに思うところこそあれど、悪くない提案だ。

しかしここで容易く頷くほど七草は軽くない。

「良い考えですが、残念ながら机上の空論ですね。今のところは」
「勿論、既に具体案もあります。民権党の神田議員をご存知ですね？」

その名に弘一は驚かされた。

神田という人物は国防軍に対して批判的な若手の国会議員だ。魔法師の人権を謳いつつ、国防軍から魔法師を排除しようとしている。弘一もよく知っていた。

「随分と刺激的な小火^{ほや}をお望みのようだ」

「魔法科高校が軍人養成学校になっていると主張してやまない勢いのある政治家と、学生身分でありながら国土防衛の要となっている四葉の後継者。実にマスコミ好みだと思いませんか？」

「策はあるので？」

「諜報と工作は黒羽の得意分野ですから」

「……いいでしょう」

「紫音がそれ以上を述べるつもりがない、ということを理解して言葉を止める。正直、プレゼンとしては充分だった。弘一としても協力することは吝かではない。」

また吸血鬼事件での失敗を挽回するチャンスでもある。

「こちらから四葉の動きを邪魔することはありません。寧ろこの国を守る十師族として、是非とも協力いたしましょう」

「ご理解いただき感謝します」



訪れた時と同様、真由美に見送られた紫音は待たせていた車へと乗

り込む。

後部座席の隣には本家から預かっているガーディアン見習いの水波がいた。

「おかえりなさいませ」

「水波、どうだった？」

「こちらを監視する目が幾つか。その中には十文字家の者もおりました」

「他は？」

「紫音様を監視する国防軍の者、七草家の縁者です」

「ならいい」

四葉が七草を訪れるという事件によって勢力が動くと考え、監視の監視を黒羽に依頼していた。そのリアルタイムの報告は全て車内待機していた水波へと届くようになっていたのである。

「しかし十文字家、か」

昨年まで第一高校に在籍していた十文字克人とは少し前に対立した。また克人は四葉が十師族に同調せず独自路線を走ることを危惧しており、今後も敵として立ち塞がる可能性が否めない。

また克人本人が清廉とした性格であることから、小さな被害をも嫌うだろう。小火を受け止め大火を投げ返すというやり方に反発することも考えられる。

（確か黒羽の調べでは十文字家が七草のマスコミ操作について探りを入れていたとか……まあいい。邪魔になるならその時に対処しよう）

魔法師に対する反発の世論は少しずつ高まっている。

その原因を遡るとほぼ必ず大亜連合の影が見られることも問題だ。沖縄、横浜と二度に渡って侵攻を阻まれただけでなく、マテリアル・

バーストによって鎮海軍港までも消滅させられた。執念深いあの国が諦めるはずもなく、今度は工作によって弱体化と混乱を狙っているのだ。

あえて逃がした顧傑グ・ジも大亜連合で少しづつ力をつけることだろう。その前に邪魔な工作は一掃しておかなければならない。多少の被害は、未来の大損害を見据えて目を瞑る。

「俺たちを監視している奴らには手を出すな。そう伝えろ」
「かしこまりました」

ひとまずは敵でないため、そう指示を出した。



国立魔法大学は元々軍事基地であった場所を潰して建てている。国家プロジェクトである魔法師の育成のためとはいえ、わざわざ軍事基地に建設するくらいだ。魔法大学と軍は非常に密接な繋がりがあると言えるだろう。

とはいえ、大学は大学だ。

防衛大学校とは異なり、軍服の着用が義務付けられているわけでもない。普通の大学生と同じように、学校敷地内では服装も自由だ。

今日の真由美は比較的露出の多い服装であったが、それを咎める目もなかった。

「十文字君、お待ちませ」

そんな彼女はカフェテリアで待ち合わせをしていた。

先に到着していた克人へと声をかけ、対面の椅子に座る。

「いや、俺も五分ほど前に来たばかりだ。わざわざ悪いな」

「気にしないで。十文字君が呼び出すなんて余程のことなんでしょう？」

しかもこんな場所に、と言葉を続ける。

確かにカフェテリアは大学内でもオープンなスペースであり、特に二人は有名人だ。また歳の近い十師族ということで婚約者なのではないかという噂もある。

だが朴念仁な克人にそんな考えはなかった。

「目立たない場所の方が問題だろう」

確かにその通りだが、そうじゃない。真由美は内心で溜息を吐く。

ただ克人は彼女の態度に気付いた様子もなく、電子ペーパーを広げた。その中には「軍用魔法師の実態」「青年の兵器化」「魔法師に支配される国防」「優遇される魔法師」などの見出しから始まる記事が並べられている。

真由美は今度こそ、溜息を吐いた。

「嫌なニュースね。魔法師の人権を代弁しているように見せかけているけど、その実態は魔法師の権利を奪い取るための世論操作じゃない」

しかし克人はそんな愚痴を無視してCADを操作し、遮音フィールドを展開する。大学内は特定の場所に限りだが魔法の自由な使用が許可されている。このカフェテリアもその一つだ。

だからこそ、克人もこの場所を選んだのだが。

「そんな重要な話なの？」

「万が一にも聞かれるわけにはいかないのでな。それより、先週あたりからマスコミの反魔法師報道が急激に増加している」

「気付いているわ」

「そしてその報道には二つの方向性がある。一つは魔法師に対して純粹な疑念を発信する、昔から反魔法師の態度を取っていた報道機関のもの。もう一つは七草が先も言っていたような態度のものだ」

「そうね。後者のものが特に増えてきた印象かしら」

相槌を打つ真由美に対し、克人はじつとその眼を見つめる。

思わず真由美もたじろいだ。

「な、何？」

「……二つの違いがあるのは、それぞれのソースが違うからだと考えられる」

「反魔法師にも勢力の違いがあるということ？」

「その通りだ。そしてその一つだが……」

克人は一度言葉を止め、眼差しを強くする。

元から強面な彼がそんなことをすれば、彼をよく知る真由美ですら身を引いてしまいそうだ。

「……その一つだが、七草家が背後にいる可能性が高い」

「なんですって!?!」

反射的に立ち上がり、テーブルを強く叩いた。

遮音しているとはいえ、周囲を大いに驚かせる。一方で克人は落ち着くとばかりに静かな口調のままだった。

「あくまでも可能性だ。しかしそれなりの確証もある。だからこそお前に相談した」

「確かにあの狸親父は謀略好きだけど、まさか魔法師にとって不利に

なるようなことなんて……」

「七草殿には何か目的があるのかもしれない。それに七草以外にも関わっているのかもしれない。しかし国防軍と大学の繋がりを非難する勢力を支援していることは確かだと思う」

「まさか父が表面的なことに騙されているとでもいうの!? それは酷い侮辱よ!」

「そうではない。だが、七草殿はそうすることが魔法師にとって良いことになるかと判断されていると考えている」

真由美はそこで息を整え、心を落ち着かせる。

克人の人となりを知っている以上、悪戯のつもりで言っているわけではないだろう。十文字家代表代理としての発言だと考えられる。

「つまり、十文字君は私にアポイントを取って欲しいわけね?」

「そうだ。頼めるだろうか?」

「いいわ。もしも本当なら父を問い詰めるわよ。同席させてもらうけどいいわよね?」

「構わない」

本題を理解した真由美は父の予定を頭の中で整理する。

全てを把握しているわけではないが、ある程度のことは知っていた。そしてしばらくの後、克人へと問いかける。

「今日の夜は空いている?」

「ああ」

「それなら、今夜うちに来てくれるかしら?」

「分かった」

それを聞いてすぐ、真由美は父にメールを送った。



「良く調べたものです」

夜、尋ねてきた克人に対して弘一はそのように返答した。

彼の前で述べられた克人の推論は当たっているもので、調べられたのならば隠す必要もないと判断したのである。

一方で同席した真由美は激怒した。

「お父様！　なんてことを！」

「落ち着きなさい真由美」

「これが落ち着いていられますか！　お父様のなさっていることは十師族に対する反逆行為です！　ひいては国家に対する裏切りですよ！」

間違いない、と克人も同調する。

しかし弘一はぬけぬけとした態度を崩さず答えた。

「裏切りではない。お前は考え違いをしている」

「そんな——」

「七草」

それでも食って掛かろうとする真由美を克人が止めた。

そして改めて問いかける。

「七草さん。私は十文字家代表代理としてあなたに問いたい。何が目的でそのようなことをなさっているのか、十分な説明をしていたかどうか」

「いいでしょっ」

弘一は子供に諭すように、優しい気な口調で答える。

「克人君、まずは誤解を解いておきましょう。確かに私は反魔法師を報道するマスコミを支援していますが、それはあくまで資金援助に留まるものです。一種の投資活動ですよ。それを通して得られるものを望んではいませがね」

「直接的なマスコミ工作ではないと?」

「ええ。そもそも、今回のことで直接的な操作は下策です。何故なら、少しずつ増加している反魔法師の風潮は世論として燃え上がろうとしているのだから」

「それが問題だと?」

「ええ。問題ですね。世論は言葉のモンスターだ。しかも飼い主がない、非常に厄介なものだ。だからこそその発言に責任の所在がなく、ただ風潮として世間に残り燃え続ける。我々が反論しようとしても、それをするべき相手がいない。実に困ったことだと思いませんか?」

世論とはすなわち、国民の総意だ。

多数決が生み出した概念だけ浮き上がった意見ともいえる。誰かが発信した意見と異なり、その誰かを排除することで消えるようなものでもない。

だからこそ、世論を消すには同じ世論しかない。

国民が反魔法師主義を馬鹿馬鹿しいと思わない限り残り続ける。たとえ本音でなかったとしても。

「世論を潰しやすくするためには、その勢力を二つに分けるのが良い。だからこそ、私は膨れ上がりつつある反魔法師論の中に一石を投じたのです。最近になって増加している反魔法師報道は私が何もしなくとも増加したということを理解してください」

「だから矛先を変えた報道をさせていると?」

「魔法師そのものに対する反発と、国防軍に対する反発。この二つの

根底には同じ考えが根付いています。しかし表面的には二つに分かれた。これによって消しやすくなったでしょう？ それについては四葉家が協力してくださることもなっています」

これは驚いた、という表情が克人に現れる。

一方で真由美は何かを察したかのように呟いた。

「まさかこの前……四葉君がうちにやってきたのは」

「そうだ。このことについて相談していた」

「珍しいこともあると思ったら……」

まさに点と点が繋がった、という思いだった。

これには克人も眉を顰める。

「つまり七草さんは四葉と共謀してネガティブキャンペーンを煽っている？」

「罨を張っていると言っていただけでしょう。私とて無為に煽るつもりはありませんよ」

「ではその罨とは？」

「魔法科高校、ひいては魔法大学と軍の繋がりを否定的に報道しているマスコミを基点として世論に訴えかけます。それによって反魔法師の意見全体に波及させます。一部を覆すことで全体にまで効果を及ぼすことが期待できます」

「具体的には？」

「第一高校に国会議員がお忍びで視察に行きます。マスコミを連れてね。対応は四葉紫音君がしてくれるそうです。彼は自分の立場の使い方を知っている」

それは学生身分でありながら国防にかかわる重要な人物であるという意味だ。

四葉紫音ほど国防軍と魔法師の関係を端的に表せる者はいないだ

ろう。克人もそれはすぐに分かった。それに反魔法師の主張は元から破綻している。核兵器を封じ込めることができるのは魔法師であり、魔法師に対抗できるのも魔法師だ。故に国防の観点から魔法師と軍の関係は切り離せない。

確かに準備さえ整えておけば不可能ではない。

しかしそれは第一高校に被害をもたらしかねない行為でもある。

克人は厳しい視線を向けた。

「多感な時期ゆえに心無い言葉で傷つき、魔法師としての生命を奪われる者がいるかもしれません。十文字家当主代理として七草家および四葉家のマスコミ操作に対し遺憾の意を表明し、ただちにネガティブキャンペーンへの関与を止めるよう求める」

「七草家は十文字家に対し書面での抗議を求める。回答は抗議状を見て行いたい」

「では家に戻り次第、したためましょう。四葉家にも同様に」

弘一は立ちあがり、静かに告げる。

「真由美、十文字殿がお帰りだ。見送って差し上げなさい」

克人は無言で一礼し、弘一もそれに返した。

ダブルセブン編4

十文字家による抗議状は四葉家にも届けられることになった。それは当主である真夜へと向けられたものだったので、真夜から紫音へと送られる。

『困ったわね。本当は秘密の謀だったのだけど』

「マスコミの動きが不自然なほどでしたから、いずれは他家にも気付かれると考えていました」

『なら、紫音さんにも策はあるのね？』

「策、というほどではありませんが」

衰えることを知らない美貌を誇る夜の女王は試すような態度だ。紫音がどのようなことを考えているのか実に楽しみである、といった言葉がセリフの中に隠れている。

紫音も慎重に言葉を選びたいところだが、ひとまずは結論から述べることにした。

「いつそのこと、十師族全体の企みとしましょう。臨時の師族会議を要請し、今回の件について同意を得るのが良いと思います。来年には十師族選定会議がありますから、マイナスイメージを抱えたまま臨むのは宜しくないかと」

『大胆なことを思いつくのね。でも賛同が得られるかしら？』

「まず七草家からは賛同が得られるでしょう。また九島閣下には例の件で貸しがありますから、心配いりません。あとは同じ戦略級魔法師を抱える五輪家も問題ないでしょう。五輪家にとって他人事ではないですから」

『そうね。でもそれでは四葉家を含めて四家しかないわ。多数決の原理に基づくなら、反対意見に止められてしまうわよ？』

尤もだ、ということを含くこと示す。

この程度のことば小学生でも分かる。敢えて敵対的な意見を焚きつけるなどという大胆かつ危険な行いをそう簡単に了承するとは思えない。だからこそ、相応のメリットを提示して味方を増やす必要がある。

だが紫音はその逆を提示することにした。

「大亜連合に開戦の兆しがあります」

『初耳ね。昨年の……そう、ハロウインを機に停戦となつたのではなかつたかしら？』

「原因は取り逃がした……いえ、泳がせている顧傑グ・ジです。黒羽が送り込んだ工員からの情報で、奴が方術師を集め新たなコミュニティを作っているということが分かっています。またその勢力を使って大亜連合政府にも干渉を始めています。大がかりで直接的なものではありませんが、この国を攻めるべきだという意見が日に日に増やしているようです。流石に大亜連合も戦略級魔法を使われて懲りたのか、慎重になつていますので、もう少し時間は稼げるでしょう。しかし……」

『それは大変なことね』

真夜はくすくすと可愛らしい笑い声を上げる。

『世論を混乱させ、戦力低下を招く世論は荒療治をしても消さなければならぬわ』

紫音が提示したのは危険性を煽るといふものだ。

確かに反魔法主義に対して罾を張り、しかも第一高校を利用して反撃するというのはリスクが大きい。また十師族でありながら反魔法主義の意見を支援している七草家にも非難の目が向けられ、それを見逃すばかりか利用しようとしている四葉家も責任を負わされるだろう。

しかし現状では放置や時間をかけての消火をしている暇がない。大亜連合は毎日のように作業員を送り込んでいるし、開戦までのカウントダウンも着実に刻まれている。

『いいでしょう。私の方から臨時師族会議を提案します。そうですね。七草殿と十文字殿との連名で要請すれば間違いなく通るでしょう。紫音さんにも参考人として出席していただきますよ』

「承知しました」

『明日か明後日には連絡が付くと思うから、準備しておいて』

「お任せください」

『ではおやすみなさい』

「はい。おやすみなさい」

画面がブラックアウトして通話が途切れる。

紫音は肩の力を抜き、振り返った。

「水波、近い内に師族会議に出席する。おそらくは電話会議だろうか……俺は魔法協会からの参加になるかな。水波にもついて来てもらうから、その日は学校を休め」

「承知しました」

「今日はもう休んでいい。俺も寝る」

「おやすみなさいませ」

軽く欠伸しつつ、紫音は部屋へと戻った。



四月十九日、午後三時。

四葉家、七草家、十文字家の連名による要請で実現した師族会議が行われようとしていた。各当主は自宅からテレビ電話での出席となり、紫音だけが魔法協会に出頭して参加している。本来ならば師族会議は四年に一度開かれるもので、その時に新しい十師族へと更新する。しかし必要とあれば臨時で師族会議を開催することもあった。また今回は四葉家が開催に関わっているということもあり、画面に現れた当主たちからは興味深げな雰囲気が見て取れる。

『さて、各家の当主と参考人が揃ったことだ。臨時師族会議を始めよう』

開始の宣言をしたのは九島真言くじょうまことであった。現九島家当主であり、九島烈の子にあたる。この中では最も年上だったので、自然と議長役をすることになっていた。

そして一番に発言したのは十文字和樹じゅうもんじかずきであった。

『私の息子、克人からあらましを聞いている。どうやら七草殿が十師族としてあるまじき行為に走り、四葉家がそれを助長しているとか。我々はそれを問いただすためにここに集まった。どうか、二家の当主方には納得のいく説明をして頂きたい』

彼の発言は七草家と四葉家を責める意味もあったが、何よりも理由を問わず糾弾するという状況を避けるためであった。納得のいく説明があるのならば理解を示すべきだということを告げたのである。

それに対し答えたのは当然ながら弘一であった。

『事前にお送りした資料の通りですので、細かい部分は省きましょう。そしてどうしてこのような無茶を通す形を取っているのかについて説明します。まず、関東方面で反魔法主義……いえ人間主義といった方が正確ですか。魔法師そのものを否定する活動が活発化していました。そして我々七草家はその後の大亜連合の影があることも確

認しています』

『ふむ。関係があるかどうかは不明ですが、博多も似たような状況です。すね』

相槌を打つ形で八代雷蔵やつしろらいぞうが同調した。

八代家は九州地方を監視する一族であるため、特に港町である博多あたりは精査していた。位置的にも大亜連合によるものと考えて間違いないだろう。

『博多でも。それは初耳でした。話を戻しますが、この膨れ上がる反魔法主義を一度……いや一時的にでも収束させる必要がある。そしてこの非論理的な感情論を抑え込む方法は主に二つです。一つは言論弾圧によつて黙らせる。もう一つは燃え尽きさせる』

前者は論外なので、つまり弘一は後者のことを言いたいのだ。

これは各当主共に理解していた。

だがここで一条剛毅いちじょうこうきが訝しげに尋ねる。

『七草殿の取った手段は燃料を投下するような行為ではないのか？』

マスコミを煽り、反魔法主義を増長させる結果しか見えない』

『ええ、一条殿の危惧は尤もです。私とてそれを考えなかつたわけではありません。対策はしていました……が、ここで四葉殿に手を差し伸べられまして協力関係を築きました』

『ここからは引き継ぎましょう。紫音』

真夜に呼びかけられた紫音は一礼する。

日本を代表する一族たちの当主から一斉に注目を浴び、少しばかり緊張の汗が滲んだ。しかしハッキリとした声で話し始める。

「国家公認戦略級魔法師、四葉紫音と名乗っておきます」

ただの四葉紫音ではなく、戦略級魔法師としての名乗り。
それを不自然に思ったのか、真夜と弘一を除く全員が首を傾げた。

「私は数か月前に起こった吸血鬼事件に携わり、異形をこの国に持ち込んだ者の特定に成功しました。しかしあと一步のところを取り逃がし、大亜連合への亡命を許しています。またその男はこの国に対して異常な執着を見せており、このままで終わる様子が見られません。四葉家としてその首謀者に対して探りを入れた結果、大亜連合に開戦の兆しありと判断しました」

『どういうことだね?』

「お答えします九島殿。敵の名は顧傑グ・ジエ、あるいはジード・ヘイグ。反魔法師組織ブランシユの総帥であり、ノー・ヘッド・ドラゴンともかわりが深いとされています。しかし彼自身も魔法師で、奴の魔法は死体を操るものや人体を改造して魔法具とするものが多く、存在そのものが危険です。また大陸方術師との間に深く広いコミュニティを築いているとも分かっています。確か九島家は大陸から亡命した術師の保護もなさっていましたね。ご注意ください」

真言は一瞬だけ眉を顰めるも、すぐに頷く。

若造に注意されたのが気に入らないのだろう。また言われたことに心当たりがあるのかもしれない。

一方で和服をまとう熟女、二木舞ふたつぎまいは疑問を呈する。

『それほどまでの情報を一体どのようにな?』

「かつて四葉家が横浜中華街に潜んでいた奴の部下を捕縛し、尋問しました。その人物は日本における大きな役目を持った人物だったらしく、顧傑グ・ジエについて幅広い情報を抜き取ることに成功しています」

一応、伊豆を含む関東方面は七草家と十文字家の管轄だ。他の当主たちから『何をやってたんだ』と言わんばかりの視線が向けられる。担当区域でないにもかかわらず、ほぼ四葉が成し遂げているのだ。

当主たちの中では最も若い六塚温子むつづかあつこが感心する。

『なるほど。流石は四葉殿ですね』

彼女は真夜に心酔している節があり、何かあると真夜に同調しやすい。確実ではないため考慮の外にしていたが、彼女も計画に賛同してくれる可能性の高い人物であった。

また三矢元みつやげんも苦々し気に呟く。

『これは四葉家の監視範囲を広げてもらうことも考える必要があるな』

「六塚殿も三矢殿もお褒めに頂き光栄です。しかし問題はこの顧傑グゼが正体不明な精度の高い情報収集手段を有していることです。それによって一步先に行く仕事を仕掛けてきます。また奴本人の戦闘力は大了ることありませんが、強力な吸血鬼を従えていますので始末するのも簡単ではありません。そして日本で起こっている反魔法主義の広がりは、元を辿ると大亜連合に。そして大亜連合内でルートを辿ると奴にいきつきます」

紫音は会議の流れを掴んでいることを確信する。

今、当主の誰もが紫音の言葉に聞き入り、明かされる情報を整理していた。故にここで畳みかける。

「奴は間接的な手段によってこの国の魔法技術の弱体化を狙ってくるでしょう。反魔法主義の運動もその一つです。なればこそ、直接的な手段が途絶えた今の内にそれらを消し、大亜連合との開戦に備えるべきだと考えます」

『ちよつと待つて欲しい。四葉君、君は開戦と言ったが性急過ぎる判断ではないのかね?』

「五輪殿の懸念は分かりますが、事実です。現に以前の横浜事変も奴の配下の手を回しています。その配下というのが我々四葉の捕らえ

た者です。前科があるのですから、次もあると考えるべきでしょう」
『それは……』

五輪勇海いつわいさみにとって開戦は避けたいことだ。

もしも戦争になれば、彼の娘である五輪滯は公認戦略級魔法師として出陣を命じられるだろう。元から彼女は身体が弱く、普段の生活も車椅子を必要とするほどだ。軍艦に搭乗して何か月も海へと出ることも考えられるため、それが心配だった。

「もしも」

紫音は力強く言葉を吐きだす。

「もしも開戦となれば、戦略級魔法師として前線に出ることも厭わないつもりです。そのためにも、今の内に余計な世論を潰す必要があります」

ハツとさせられたのは勇海だけではなかった。

仮に戦争状態となった場合、多くの魔法師が戦争に駆り出されることだろう。その中には義勇軍として軍に所属していない数字ナンバース付きも含まれるに違いない。

そんな時、特に魔法師が軍人として活躍することに違和感を覚えられては困るのだ。

学生が従軍させられている、魔法師は軍事利用されている、魔法師の権利を守れ、などの世論が巻き起こらないように、先にそれを潰しておくのが目的というわけである。

だからこそ、紫音も七草家のマスコミ操作に便乗したのだ。

優先的に潰すのは魔法師の人権を謳いつつも、その権利と必要性を奪い取ろうとする患者の意見。当主たちもそれを理解した。

『四葉殿、一つ宜しいか?』

『なんでしようか一条殿』

『つまり反魔法主義を煽っていたのは、確実に潰して今後に備えるためということだろうか?』

『その認識で間違いありませんわ』

『ならば七草殿、そちらも同じか?』

『勿論です』

『そうか……ならば一条家は今回の件を黙認する』

意外なところから崩れた。

まず一条家が最も困難だろうと予想していたが、紫音の考えを裏切られた形である。それも良い方向に。またこれを皮切りに次々と賛同の声が挙がり始めた。

『六塚家は同意します』

『五輪家も同じく。支援はできませんが、認めましょう』

『……九島家当主として容認しよう』

『そこまで仰るなら、八代家として認めます』

残ったのは二木家と三矢家、そして十文字家だ。

この三家は最後まで悩んでおり、やがて舞が答えを出す。

『二木家は中立といたします。とはいえ、多数決を考えるなら決まったも同然ですね』

『では工作活動については四葉家と七草家に任せ、師族会議としては静観。これでよろしいか?』

最後に真言が締めくくる。

これによって、紫音は大義名分を得た状態で工作できるようになった。

(あとは仕上げの情報操作も準備しておかないと、か)

参考人としてだが、師族会議は疲れたらしい。
しかし気の抜けない話し合いは、紫音の思う通りに帰着した。



深夜、地下室で作業していた達也の元に一件のメールが届けられた。またそのメールは高度に暗号化されており、その暗号強度を見て眉を顰める。

しかしウイルスに注意しながら中身を展開する。

「なんだ紫音か」

送り主を確認して安心する。

だがその内容はとても安心できるものではなかった。

(これは……なるほど。俺に協力を求めているわけか)

達也はその類稀なる頭脳によって全てを理解する。

少し思案した後、開いていた画面を閉じて新しいファイルを作成し、何かを打ち込み始めた。



四月二十日の始業前、第一高校の生徒会室に紫音、達也、あずさ、花音、五十里が集められていた。そして紫音から神田議員が視察を企んでいることを告げられたのだ。

この視察はあくまでも抜き打ちであるため、公表はされていない。なので一般生徒でこの事実を知る者はいないし、教職員も認知していない。

あずさは思わず椅子を倒す勢いで立ち上がり、慌てふためいた。

「……そんなに慌てること？」

一方で花音はまたまた大げさなという思いが溢れ出ている。

そんな彼女を婚約者である五十里が窘めた。

「いや、これは大問題だよ。神田議員は表面的にこそ魔法師の権利を擁護している。でも、軍を悪にして僕たちから軍に所属する権利を奪っているようなものだよ。ただ議員が学校を視察して軍を批判するというだけで考えない方がいい。僕たちにとって大きな壁になることは間違いない」

「どうなるの？」

「神田議員のような人が権力を握れば、僕たちが魔法大学に進学することすら抑制されるかもしれないよ。魔法大学は軍とかかわりが大きいからって。そして世間がそう思えば、僕たちは表面上こそ進学の自由が許されても、実質的には魔法大学へ進めなくなるかもしれない」

「そんなの思想弾圧じゃない！」

「だから問題なのさ」

そういうことだという意図で紫音も頷く。

また達也へと目を向けた。すると達也が昨晚の間に作製した計画概要を見せる。電子ペーパーに表示されたものを見て、五十里が感心の声を上げた。

「これは……大胆だね」

「そんなことはありません。偶然、俺たちが自主的に行うちよつとし

たデモンストレーションです」

「偶然、ねえ」

花音は苦笑する。

技術者肌のあずさや五十里は読み込みつつ、幾つかの疑問を呈した。

「これは加重系魔法の三大難問……去年も市原先輩と取り組んだ重力制御魔法式熱核融合炉だね。しかも市原先輩のものとは異なる、常駐型だ。できるのかい？」

「そうですね。誰もできないから三大難問なんですよ？」

「実物を作るわけじゃありません。ごく短時間でも起動すれば十分な実験ですから」

実験は常駐型重力魔法制御式継続熱核融合炉、あるいは恒星炉と呼ばれるものだ。昨年の論文コンペで発表した断続的な核融合とは異なり、太陽のように常時核融合を継続することでエネルギーを取り出す。

当然、取り出すエネルギーは桁違いとなるだろう。

「確かに……自然エネルギー発電に頼っている現状を変える可能性があります。供給電力を気にすることなく工場も電気を使えるようになるでしょう。平和のための魔法利用という意味でこれほどのデモンストレーションはないと思います」

あずさは独り言のように呟く。

そして顔を上げ、達也の方を見た。

「司波君はこれに取り組んでいるんですよね？　もしかして司波君の考えているプランですか？」

「本来の完成形からすれば玩具のようなものですが。しかし本校の生

徒が協力すれば、短時間でも動かせると考えています。軍事と魔法を結び付けたがっている神田議員にはこれほど効くデモンストレーションはないでしょう」

「……どうですか五十里君」

「僕はいいと思います。寧ろ是非とも協力したい」

「分かりました。正直、私も協力したいと思っていましたし」

生徒会長の許可が下りたことで、より現実味が増す。

最後に紫音が締めくくった。

「当日の神田議員は四葉家の者として俺が対応します。なので俺は実際に協力できませんが、逆に俺以外ならば生徒だろうと教師だろうと存分に使って、是非とも成功させてください。あとは何とでもします」

恐怖の象徴もこの時ばかりは頼もしい。

あずさは力強く頷いた。

ダブルセブン編5

恒星炉実験計画は教師たちの間でその日の内に精査された。

結果は当然のように許可。

寧ろ意欲的な実験であるとして、昨年の論文コンペでも担当となった甘楽が顧問教師として付いたほどである。自主的に学生が企画した実験としては破格の待遇と言えるだろう。

わざわざ生徒会室にまで訪れた甘楽は概要を直接聞き、改めて感心を示した。

「面白いアプローチだと思います。しかし役割分担はどのようにするつもりですか？」

役割分担というのは、実験に伴い誰がどの魔法を使うかだ。使用される魔法は重力制御、クローン力制御、第四態相転移、ガンマ線フィルター、中性子バリアである。そのどれもが高度な魔法であり、誰でも良いというわけではない。実験の危険性を鑑みても、魔法力の高さが求められる。

その質問が来ることは分かっていたらしく、達也は即答した。

「ガンマ線フィルターは光井さんをお願いします」

「わ、私ですか!？」

教師への回答ということで、流石に苗字呼びだ。しかしほのかはそんなことどうでもよいとばかりに素っ頓狂な悲鳴を上げた。

しかし電磁波への干渉に対して適性を有する彼女ほどぴったりの人物はいないだろう。

全員が納得していた。

「クローン力制御は五十里先輩をお願いします」

「分かったよ」

「重力制御は妹に任せるつもりです。そして中性子バリアはこちらの桜井さんに任せます」

達也は深雪のすぐ側に控えている水波を指し示す。

「彼女は一年生ですが、対物理障壁魔法に対して天性の才を有しています。何より四葉家の縁者で、今年の新入生トップです」

「それなら問題ないでしょう。では第四態相転移は誰に？」

「まだ決めていませんが、候補者はいます。七草香澄、七草泉美の二人です」

「二人ですか？ ふむ、いいでしょう」

魔法は二人で使うと効果が倍になるような性質はない。全く同じ魔法式を同時に使ったところで、干渉力が相克を起こして不発に終わる。しかしながら全く同じ魔法演算領域を有していた場合、表面上は二人で発動しているながらも魔法的世界では一つの干渉力で一つの魔法式が発動していると見なされる。

マルチブリケットイブキャスト
これを乗積魔法という。

紫音もリベリオン発動時にはこれを使えるため、達也はその凄さをよく知っていた。また七草の双子がこの技能によって有名であるため、甘楽も認知していたのである。

「その二人はすぐに呼べますか？」

「風紀委員ですので。呼ぶということであれば連れてきます」

「そうですね。まだ候補者ということですし、計画を進める上で正式な実験参加者となっていたくださいますか？」

「では私が行ってまいります」

生徒会の中では一番年下である水波が立候補する。

達也も頷いたので、彼女はそそくさと行ってしまった。とはいえ、

生徒会室と風紀委員会の部屋は直接繋がっている。すぐに戻ってくるだろう。

「では、桜井さんが七草さんたちを連れてきたら、司波君には改めて実験の説明をして頂きましょうか」

甘楽の言葉に達也は深く頷いた。



神田議員の視察だが、紫音からの情報提供によって四月二十五日であることが発覚している。一方でその情報を知って恒星炉実験の計画が立ち上がったのは四月の二十日。また学校からの許可が下りたのはその放課後である。

実質的な準備は二十一日から二十四日までという本当に僅かな期間しかない。

完成は絶望的かと思えたが、達也は何一つ慌てていなかった。

そもそも恒星炉実験と銘打っているが、それそのものを作るわけではない。実際には恒星炉と同じ働きを僅かな時間でも機能させることができる魔法装置を作るだけなのだ。実際に電力へと変換する機構も必要ない。

「うわ。間に合っちゃうんだ……」

「流石は天才と名高い司波先輩です」

ほぼ強制的に参加となった香澄と泉美も感心半分、呆れ半分といった様子である。

彼女たちも初めは渋っていたが、紫音からの指令で参加する運びとなった。なお、彼女たちには神田議員の視察に合わせたものであると

いうことは伝えてあるが、その裏に隠れた計画までは教えていない。ただ第四態相転移の魔法を使うために参加している。

そして彼女たちの前には完成した実験装置が並んでいた。

既にリハーサルとして一度起動しており、実験結果だけを考えるならば十分なデータ採取ができたといえるだろう。

しかし本番は四月二十五日。

明日である。

「これで明日を迎えるだけです。皆さん協力ありがとうございます。明日のデモンストレーションも今日の調子でいきましょう」

達也はそう締めくくった。



琢磨は騒動となる日を前日に向かえた夜も、新秩序を目指す同盟者と密談をしていた。小和村真紀と別れて帰宅した時には二十三時を過ぎており、自宅の使用人も既に休んでいる。そのため、勝手口からひっそりと家に入った。

「琢磨さん、先生が書斎でお待ちです」

しかし予想外にも父の助手に声をかけられる。

現当主である七宝拓巳しっぽうたくみは天候の予測を事業展開している。エネルギー生産を太陽光に頼っている現在において、日照時間の予測は重要なファクターとなる。彼は気象予測の第一人者として投資家顧問事業を展開していた。助手というのはそちらの仕事のものである。

だが七宝家当主としての拓巳に対しても助手として働いていた。

仕方なく書齋に訪れた琢磨はぶつきらぼうに口を開く。

「こんな時間に何だよ」

「今日の内に話すことがあった。これだけ遅くなるなら先に言っておけ。そうすれば学校から帰ってきたときに話したものを」

「……それは」

「まあいい。学校は楽しんでいるのか?」

琢磨はそれが本題でないことを察し、申し訳なさの中に不機嫌さが戻ってくる。

「親父、俺にとって高校は楽しむ場所じゃない」

「そういうな。今しか楽しめないんだぞ?」

「呑気なことを言っている場合か!? 次の師族選定会議まであと一年を切っているんだぞ!? このままじゃまた七草家の奴らに十師族の座をかつさらわれる!」

「琢磨、十師族は二十八家から選ばれるものだ。七草家だけに拘ってどうする」

二十八家はその名に一から十までの数字が与えられた特別な家系だ。一条、一之倉、一色、二木、二階堂、二瓶、三矢、三日月、四葉、五輪、五頭、五味、六塚、六角、六郷、六本木、七草、七宝、七夕、七瀬、八代、八朔、八幡、九島、九鬼、九頭見、十文字、十山から四年に一度、十師族を選定するのだ。

現在は偶然にも一から十まで綺麗に揃っているが、そうである必要はない。

魔法師としての力、社会的な影響力から日本を守護するに相応しい十の家系を選び取る。勿論、七草家と七宝家が同時に十師族として君臨することもあり得ることだ。

しかし琢磨は頑なに七草家を目の敵にしていた。

「あいつらは！…三枝は第三研究所を裏切り、俺たち『七』の成果を奪い取って十師族になったんじゃないか！」

「琢磨、七草が『三』の三枝だったのは十師族の制度ができる前の話だ。七草家は自らの力で十師族の中でも抜きん出た力を得た」

「だがそれは第七研の群体制御を…それも七宝、七夕、七瀬が完成寸前まで漕ぎつけていた技術を成果だけ奪いとった結果じゃないか。俺たちだけじゃない。三矢も三日月も虚仮にされてるんだ！ 親父は何故そんな平然としていられる！」

「彼らは実験体であることに甘んじず、自らの判断で力を高めた。それは称賛されることだ」

数字を与えられた魔法師たちは、血の滲むような努力が求められた。

彼らは開発された血族である一方で、ただ実験体としてされるがままであれば良かったわけではない。魔法師としての成果が得られなければ問答無用で数字を剥奪され、エキストラ・ナンバーズ数字落ちとなった。

その中で七草は『三』と『七』の研究を融合させ、独自に発展させた。

拓巳はそれを称賛しているのだ。

しかし琢磨はそこまで思い至らず、感情のままに言葉を吐く。

「…裏切り、出し抜くことが称賛されることだって言うのか？」

「お前も十師族を出し抜こうとしているではないか」

「それは」

一体どこまで父が知っているのか。琢磨は戦慄を覚える。

ブーメランの如く自らの元へと戻ってきた言葉の刃に、黙り込むしかなかった。しかし拓巳は何も言及しない。

「まあいい。何を言ったところで納得はせんだろう。それより、明日は学校を休め」

「それが本題か？ 何故だ？」

「野党の神田議員が第一高校を訪問する。相手は国会議員だ。熱くならすぎるお前は行かない方がいい」

ムツとしつつも、琢磨は問いただす。

「神田ってあの神田か？ 魔法師の人権がどうか言っている」

「そうだ。しかもマスコミを連れてな。大方、魔法師となることを強要される少年を守るというパフォーマンズがしたいのだろう。それに第一高校には公認戦略級魔法師もいる」

「……四葉か」

「四葉紫音も標的の一つだが、お前もその一人になりかねない」

その子どもも扱いに対し、琢磨は強く反発した。

「ふざけるな！ そんな逃げるような！」

「ならば問題を起こさないと誓えるのだな？ たとえ向こうから喧嘩を売ってきたとしても、何があろうと愚かな真似はしないと」

「っ！ 当たり前だ！」

「いいだろう。そこまで言ったのだ。七宝家次期当主として責任を持つて」

琢磨は苛立ちを吐き出すように舌打ちし、そのまま書斎から出て行くようにする。

しかしそれを拓巳が止めた。

「待て、この件は七草家と四葉家が収める。くれぐれもお前は手を出すな」

「七草が!？」

あくまでも七草家と四葉家が、なのだが彼には前者しか聞こえてい

なかった。拓巳もそこが気になったものの、無視して話を続ける。

「これは十師族が決めたことだ。従いなさい」

「くそっ！」

「言葉に責任を持って。いいな？ 七宝家は何もしない」

前言を撤回する訳にもいかず、また苛立ちを表現するだけの言葉も浮かばなかった。



四月二十五日、魔法大学付属第一高校に招かれざる客が訪れた。高級車三台で物々しく訪れたのは野党議員の神田と取り巻きのジャーナリスト、またボディガードであった。

授業中の生徒はともかく、職員たちは大いに慌てた。

何故ならば本来ならば対応するべきである校長が不在だったからである。よってひとまずは教頭が対応することになった。

「神田先生、申し上げました通り、校長の百山ももやまは京都に出張しておりませう。校長の居ります時に改めてお越し頂けないでしょうか？」

「ほう。つまりこの神田に子供の使いよろしく出直せと？」

「そんな滅相もない」

「では教頭先生でも結構です。授業の見学をさせていただきます」

突然の客に対し、教頭の八百坂は全身から汗を流す勢いだった。

彼からすればアポイントメントもない相手を見学させる訳にも行かず、また問答無用で追い返せる相手でもない。彼の勝機はこのまま時間を稼ぎ、授業終了時間が過ぎるのを待つことだった。

「私の一存では承服しかねますので、やはり校長に直接仰っていただかなくては」

そして逆に神田からすれば何としても押し通らなければならぬ。流石に力づくでやるのは外聞が悪いので不可能だが、このまま圧力をかけて首を縦に振らせれば勝ちである。

神田はこの日に校長が出張していることを知って訪れたのだ。

校長である百山は現在の魔法教育に関するカリキュラムを完成させた人物の一人として有名であり、幅広い人脈を有する。勿論、神田の所属する党の上層部とも面識があるだろう。だからこそ、党にも内緒かつ百山が留守の間を狙ったのだ。

流石に正面から言い合うには分が悪い。

神田からすれば今日は絶対に逃せぬ日なのだ。

しかしその時、応接に利用していた校長室の扉がノックされる。扉を開けて入ってきたのは予想外の人物であった。

「よ、四葉君!? 何故ここに……」

八百坂は純粋な疑問と同時に、どこか安堵を覚えていた。彼も数字付きであることから分かる通り、魔法師の名家が出自だ。四葉の威光と恐ろしきはよく理解している。

一方で神田も思わず顔を引きつらせそうになった。

彼からすれば百山校長を回避したと思つたら四葉裏ボスが出てきたようなもの。しかし同時に目的の人物でもある。これはチャンスになるのではと、周囲に侍らせた記者たちへと目配せした。

「八百坂教頭、自分は校長からの連絡でここに来ました」

「は、はあ?」

「来てしまったものは仕方ありませんから、対応をお願いされましてね」

嘘である。

臨時師族会議によって罫を張ることが決まってから、その命令は関係するナンバーズへと下されることになった。七宝家しかり、百山家しかりである。

従って百山からのお願いというのは便宜上であり、ここに紫音が来ることは初めから決まっていた。

紫音は改めて神田と向き合う。

「挨拶が遅れました。四葉紫音と申します」

「あ、ああ。君があのだ。民権党の神田といいます。どうぞよろしく」

「しかし急な訪問でこちらとしても困っています。実はこれから学生主体の実験が行われることになっておりまして、もう実習授業はありません。私がある程度は対応しますので、その後は帰って頂くということでしょうか？」

「実習が、ない？」

神田は困惑したが、一方で彼の引き連れた記者が興味を示す。

「あの、実験とはどのようなものでしょうか？」

「当校の優秀な一部学生が自主的に企画したものです。ただ企画書を見た教職員が是非とも他の生徒にも見学させて欲しいということになり、実習は全て中止となりました」

ちなみにこの記者、黒羽家の仕込みである。

神田が実験に興味を示すよう誘導させる役目を与えている。その目論見通り、神田はその実験へと目を向けることにした。

「四葉殿、それでは実験だけでも見学させて頂けませんか？」

「しかし神田先生は普段の魔法科高校の授業を見学したいということではないのですか」

「いえいえ。高校生が実験を企画したというのも気になりますし、可

能ならば是非お願いしたい。このまま帰っても味気ないですから」

百山のいない第一高校に不意打ちで訪問できるのは今日だけだ。二度と同じ手段は使えないだろうし、そんなことをすれば常識知らずの議員だと周りに見られてしまう。初めの一回で、かつ魔法師と軍の繋がりを疑問視している政治家だからこそ可能なのだ。

ここで引き下がることはできない。

魔法科高校が子供を軍の道に進ませるよう洗脳しているのではないと危惧している、という体裁を気にするならば確かに本来の魔法実習授業を見学するべきだ。しかしそんな建前など今はどうでも良かった。

「そうですか……少し失礼します」

紫音は悩むような素振りを見せ、懐からタブレット端末を取り出す。そして何かの操作をした後、それを仕舞って神田へと向き直った。

「どうも失礼しました。では条件付きですが見学を許可しましょう」

「条件、ですか？」

「一つは近づかないことです。繊細な実験機器を使用する他、魔法発動者が安全に魔法を行使するためにも近づくことは禁止します。それを破るようでしたら危害を加えると思われ、魔法によって排除することも厭わないと考えてください。防衛目的の魔法行使は合法ですから」

その強気な発言を聞いて記者たちが騒ぎ始める。

また神田のボディガードたちも軽い殺気を紫音へと向けた。

しかし紫音はどこ吹く風である。

「勘違いしていらつしやるようですが、これはあなた方の安全のため

です。本日使用する実験装置には重水素も使用されます。被曝されたいのならば止めませんよ。ああ、いえ。こちらとしても我が校の生徒をそのような危険に晒すわけにはいきませんからやはり止めます」
「……わかりました。確かに四葉殿の仰る通りです。徹底しましょう」

「勿論、それでは納得されないでしょうから、実験担当の教員の元へ案内いたします。そこからならば全体を見渡せるようになっていきますので、実験内容もよく分かるでしょう。詳細な説明を教員に依頼しておきましたし、何なら自分も実験を把握しておりますので解説しましょう」

「ご配慮感謝します」

重水素と聞いて目敏く反応した記者たちもいたが、今は黙る。

まだ紫音の説明は終わっていないからだ。

「二つ目の条件ですが、当校の生徒に対して取材などの行為を禁止します。質問は全て自分が受け付けますので。それを守れない方は強制的に帰って頂きます」

「横暴だ！」

「報道の自由を侵害していますよ！」

「アポイントメントもなくやってきて正当な取材ができるとは思わないことです。こうして取材できるようそちらの無茶に最大限応えている。それを横暴で報道の自由の侵害と？ 文句があるのならば今すぐ出て行って頂きます」

それを言われると痛いのか、記者たちは一瞬で静かになった。秘密に守られた魔法科高校を取材できるまたとない機会なのだ。屈辱で顔を歪めつつも紫音の言うことに従う。

尤も、四葉の名にある程度遠慮していることも理由の一つだが。

更に紫音は神田へと畳みかけた。

「良識ある神田先生ならばこの条件に納得して頂けますね？」
「う、うむ」

それは皮肉だろうか。

神田は思わず頬を引き攣らせ、それを隠すことすらできなかつた。

ダブルセブン編6

紫音の案内で放射線実験室へと案内された神田は、取り巻きを伴って入室する。しかしそれと同時に実験準備中の生徒たちから冷たい視線を向けられる。

一瞬だけ神田もたじろいだが、気のせいだと断じた。既に生徒たちはそれぞれの作業に戻っている。

「先生方、連絡した通りに議員の方々をお連れしました」
「そうですか、ではこちらに」

甘楽は一瞬だけ神田に目配せした後、ある場所を指さす。

またその後すぐに準備の指示をし始めた。どうすれば良いのかわからない神田たちは、取りあえず指定された場所へと移動して困惑した表情を浮かべる。

一体何が起きているのか分からないといった様子だ。

「解説いたしましょうか？ 先生方も忙しそうですから」
「あ、ええ。お願いします」

だからこそ紫音の提案は渡りに船だったのだろう。

神田は勿論、記者たちも食いついた。

「本実験は常駐型重力魔法式熱核融合炉の技術的可能性を探るものとなります」

「は？ 核融合？ 研究が止まっていたのでは？」
「止まっているわけではありませんよ。優先度が低くなっただけです。気象条件に左右されることなく膨大なエネルギーを得る手法として、核融合炉は有用な手段となるでしょうね。また燃料は水素です。海洋国家である我が国にとってこれほど相応しい装置はありません」

説得力のある話だが、記者たちからすれば面白くない。

反魔法主義を掲げる者たちからすれば都合の悪い説明でしかないのだ。意地悪な質問と分かっているながら、記者の一人が声を上げる。

「しかし核融合ということは、兵器転用も可能ということですよね？」

『灼熱と暗黒のハロウィン』で使用された灼熱魔法のように」

それを聞いていたのか、甘楽は視線だけを向けて眉を顰める。

しかし紫音が目で制して回答した。

「ほう？　つまり、四葉の秘密兵器たる俺の魔法と同レベルの魔法が……たかだが学生如きに再現できてしまうと？」

「それ、は……」

「あまり魔法を舐めないで頂きたいですね。工科専門高校の生徒が核兵器を作成できないように、魔法科高校の生徒がそのような兵器を開発できるわけがない。戦略級規模とされる魔法兵器は世界最高峰の研究所が技術の粋を尽くして完成させるものです」

その辺りの事情は魔法師でなければ分からない感覚だろう。

魔法を使ったことのない一般人からすれば、どうしても魔法はゲームのような感覚になってしまう。CADにプログラムされた起動式があれば、誰でもどんな魔法でも使えると勘違いしている者すらいる。

残念ながら世の中はそんなに甘くない。

紫音は論理的に、追い詰めるようにして記者へと畳みかける。

「そもそも旧世代の核分裂発電と核兵器の違いも明白でしょう？　制御された核分裂反応を容器内で維持しつつ熱エネルギーを取り出し、タービンを回して発電するのが発電所。一方で核兵器は反応させることだけを考えればいい。核融合も同じことです。魔法式エネルギー

ギー機関だとしても、ただ反応させるだけに比べれば膨大な制御式と安全確保が必要になります。それを継続的にかつ安全に実行するための実験ですよ？ 冗談でも兵器開発などいうのは無礼だ。そして知らなかったのならば記者として知識不足過ぎる。勉強し直してください」

その煽るような言い方に多くの記者たちが苛立ちを露わにする。彼らからすればその程度の知識は有しているし、記事を面白くするために質問を投げかけたに過ぎない。紫音の過剰反応とも言える返答は彼らのプライドを刺激した。

世論の代弁者としての自分たちにまるで敬意を払っていないと。だが、紫音はこれで良いと考えていた。

「さ、見ていてください。始まりますよ」

生徒の一人が壁のスイッチを操作すると、シャッターが開く。そして実験のために用意された機器を全員で校庭へと運び出し始めた。

「行きましようか。今日の公開実験は校庭で行われます」

紫音に促され、神田たちも移動し始めた。

どうにかして粗探しをと考えている記者集団を引き連れて。



恒星炉実験の装置は球形水槽を本体としている。その赤道部分には金属環が嵌めこまれ、そこに特化型CADが取り付けられているのだ。

水槽中心部のごく僅かなエリアを照準しており、そこに重力を発生させる。

「実験を開始します」

拡声器を通して達也の音が響く。

校舎の窓から実験を眺めていた生徒たちも余計なお喋りを止めて、ジッと実験装置を見つめ始めた。神田と記者たちも何が起こるのか、今は黙って見つめる。

「重力制御」

まずは深雪の魔法だ。

内部に半分ほど満たされていた重水・軽水混合物が容器の内面全体に張り付き、丁度中心部が空洞となるようにする。

「第四態相転移」

続いて七草の双子が同時に魔法を発動した。

干渉力、魔法式展開という行程をそれぞれが担当することで、一人では不可能な強度の魔法を実現する。液体をプラズマ化させるための魔法であり、混合水で覆われた空洞部分に重水素、水素、酸素、プラズマが発生する。

「中性子バリア、ガンマ線フィルター」

続いて水波とほのかが魔法を行使した。

これは安全装置としての魔法であり、放射される有害物を遮断する。共に核兵器対策として最も古くから存在している魔法であり、最も完成された魔法でもある。しかし使いこなせる二人の技量は流石であった。

これによって準備が整う。

「重力制御」

達也の合図によって、深雪が二度目となる重力魔法を発動する。しかし今度は混合水を容器へと張り付かせたものとは逆だ。容器中央部へと一点に向けて重力を与え、水素プラズマを反応させる。

そしてここで最後の仕上げだ。

「クローン力制御」

五十里の魔法が発動し、電気的斥力の見た目における低下を実現した。

通常、同じ電荷を帯びた物質は近づくほどに強く反発する。距離の二乗に反比例して力が強まるため、重力によって核融合を引き起こす際にはこのクローン力を超えなければならない。また、このクローン力を超えるための重力魔法にエネルギーを行使してもなお、回収できるエネルギーが上回っていないければ核融合炉の意味がない。

エネルギー回収効率を高めるためにも、クローン力制御は必須なのだ。

やがて内部に淡い光が灯り、水が沸騰し始める。

計測機器によると内部温度は三百度、気圧は通常の百倍にまで達していた。幾ら重力魔法で閉じ込めているといっても、比較的簡素に作った実験装置では短時間の起動で耐久限界に達する。達也は三分ほどで改めて拡声器を手に取った。

「実験終了」

それに続いて段階を踏みつつ、装置を停止させていく。

最後に中性子バリアが解除されたのち、達也は生徒会長であるあずさへと拡声器を渡した。彼女が締めくくるところこそ相応しいと考え

たのだろう。初めからそれは決まっていたのか、あずさも特に慌てることなくそれを受け取る。

また一度深呼吸し、告げた。

「常駐型重力制御魔法を中核とする継続熱核融合炉は初期の目標を達成しました。恒星炉実験は成功です」

まずは校庭から、続いて校舎から。

一斉に歓声が上がリ、熱気が立ち昇る。学術的な意義は勿論だが、この実験は魔法を兵器以外に転用する可能性を示したものでもある。将来は軍を指す者も、魔法技術者を指す者も、それ以外の道を志す者にとつても新たな未来を提示されたかのようにであった。



魔法というものあまり関わりのない一般人からすれば、この実験はSFチックで目を引く光景だったことだろう。しかし同時に何が起こったのか訳が分からないというのも正直な気持ちだ。

記者の一人が紫音へと尋ねる。

「あれは何をしていたのですか？」

紫音はその意味をはき違えることはない。

恒星炉の実験ですという答えが欲しいわけではないということを理解していた。

「重水をプラズマ化させることで生じた重水素と、通常の水素プラズマによる核融合です。重水素は御存じですか？」

「えっと。確か普通の水素より中性子が一つ多い、倍ほど重い水素の

「ことですよね？」

「その通りです。電気的斥力を軽減する魔法と重力制御魔法によって原子核をぶつけ、水素からヘリウムを生成します。その際に生じる質量差がエネルギーとなっていていのですよ。有名なアインシュタインの質量エネルギーの方程式です」

これは太陽が熱を発する仕組みと同じだ。

太陽系の中心にあるこの恒星も、重力によって水素プラズマを圧縮して核融合反応を引き起こしている。そうして発生した膨大な電磁波を地球にまで届かせているのだ。

「そして今回は発生した大量の中性子の運動エネルギーを熱として取り出しています。中の水が沸騰していたでしょう？ あれが中性子によって熱を与えられた結果ですよ」

「中性子……やはり兵器として使えるのでは？ 中性子爆弾なんてものもあります」

「ですからそんな兵器を作るならば素直に放出系魔法のニュートロンビームを使います。わざわざ水素から生成する意味がありませんよ。それこそ、電磁波や中性子を放射する魔法でしたらUSNAが戦略級魔法として実現していますから」

紫音の言っているのは十二使徒の一人、アンジー・シリウスのことだ。

彼女が使うとされているヘヴィ・メタル・バーストは金属粉末をプラズマ化させることによってその電磁波を解き放つ魔法。その際に中性子線やアルファ線も放射されることになる。ある意味で上位互換が存在しているのだ。

記者たちはどうしても兵器と結び付けたいようだが、説明されればされるほど兵器と無関係であるということしか分からない。

故に神田は方向性を変えて責めることにした。

「四葉殿、あなたは学生でありながら戦略級魔法師であらせられる。しかしそれは軍から強制されたことではないのですか？ 魔法が技術的に優れた成果を出せることは理解しましたが、高校生たちが魔法兵器として軍に入れられている事実は変わりません。四葉殿はその筆頭です」

今回の実験からは残念ながら魔法科高校と軍を結び付けるのは難しい。

だからこそ、そこに通う生徒から糸口を見つかるしかない。見学の条件として他の生徒たちへの取材は禁止されているため、神田も紫音を標的とした。いや、戦略級魔法師である紫音こそが標的として相応しいと考えた。

記者たちも目を光らせて聞き入る。

(やっと来たか)

紫音がその質問を待ち望んでいたとも知らずに。

「沖縄、佐渡島、横浜。その共通点をどこ存知ですか？ 神田先生でなくても構いませんよ。答えられる方はいますか？」

「……魔法師によって敵国を撃退した戦いです」

「流石は神田先生。沖縄は軍の魔法師、佐渡島は軍に加えて一条家、そしてついこの前の横浜では自分も参戦しました。さて、なぜ魔法師は戦うのだと思いますか？」

そのために作られたから、そう強要されているから。神田はそれを口にしようとして噤む。その言葉はあくまでも紫音の口から言わせなければならぬことである。だからこそ、ここは大人しく答えを待った。

「答えは国民だからです」

しかし予想外の答えに度肝を抜かれる。

記者たちもそれは考えてもいかなかったのか、顔を見合わせていた。

「四葉殿、それは一体」

「魔法師は軍人としての適性が他者より高い。だから目指す人が多いんですよ。普通、才能があるならばその方向に進むものでしょう？」
「だがそれは世間の風潮や家に縛られているからではないのですか？」

「何を言っているんですか？ それ嫌な人は技術者として成功しているじゃないですか。今日の実験もそんな生徒たちが自分たちの将来を見据えてやったことです。そして国民として、この国を守りたいと志す者は軍へと行きます」

魔法科高校は専門学校としては軍へと進む者が多い。

故に他の高校と比べれば異様と感ずることだろう。一見すると魔法科高校や魔法大学が子供たちを軍へと送り出しているように感じられる原因だ。しかし全員がその道へと進むわけではない。実戦魔法師として不適格と自覚し、魔法師の道を諦めて一般人として生きていく者もいる。

「我が校の生徒は自分の意志で望む進路を選んでいきます」

「しかし魔法は学生の使うものでも殺傷力が高いと聞いています。政府が管理するべきという声もありますか？」

中々に意地悪な質問が投げかけられる。

これに対し反発すれば、学生魔法師の危険性を記事にできる。未熟な精神に委ねられた危険な力という見出しで売れる記事が完成することだろう。

一方で同調すれば、それはそれで反魔法主義からすれば喜ぶべきことである。次代を担う魔法師たちが政府による完全な魔法師の管理

を望んでいるというように世論操作できるのだから。

本来は学生魔法師に投げかけるような質問ではない。

しかし紫音はそれを理解した上で返答した。

「政府が管理する必要はありませんよ。魔法師は既に十師族を頂点とする秩序の中にいることをお忘れですか？」

「そ、それは民間組織でしょう！」

「だからどうだというのです？」

「どうって……ですから魔法師を政府が管理して魔法の制限を……」

「仮にそれを求めるとすれば、生まれて死ぬまでの一生を全て政府に負担していただかなければいけませんね。食費、教育費、高価な魔法機器、そして魔法が使えなくなった時の保障。全ての魔法師にそれをして頂かなければ割に合わないと思いますか？」

「は？ なっ!？」

記者は一瞬理解できなかつたようだが、すぐに意味を察する。

魔法師として誕生した者を全て税金で育てると言っているのだ。しかも魔法師として使えなくなつた後も生活を保障しなければならぬというのは無茶苦茶である。

「そんなのは認められないでしょう！」

「十師族だからといって無茶が通ると考えているのですか？」

「な、君たち止めなさい！」

次々と記者たちが怒りを顕わにする中、神田は慌てて彼らを止める。これは紫音の罫だと気付いたのだ。今ここで紫音の発言に反発すれば、それによって揚げ足を取られてしまう。

しかし神田の静止は少し遅かつた。

「ほう？ つまり魔法師は人権無し。国民ではないと？」

心臓が冷えるような声だった。
思わず誰もが口を閉ざし、背に汗を滲ませる。

「政府による管理を強要するかと思えば、それに対する保障もない。あなた方が口にする人権は本当に都合の良いものらしい。これは驚きました」

しまったと思うも既に遅い。

魔法師の人権を保護を謳う名目だったはずが、それを奪い取られた。

「あなた方の思想は十師族の一員として四葉家当主様に報告させて頂きましょう。仮にあなた方が我々魔法師の権利を侵害するのだとすれば、十師族は断固とした態度で臨ませて頂きます。勿論、多くの未来ある学生を預かっている第一高校としても黙っているわけにはいかないでしょう。出張より戻られた百山学長にも同様の報告をさせて頂くつもりです」

「あ、いや」

「神田先生も同様に考えていらつしやるのですか？」

「そんなまさか！」

十師族は勿論だが、百山を敵に回すのは不味い。

このままでは神田は政治家としてあるまじき人物として認定されてしまう。魔法師だとかそうでないとかは関係ない。国民を蔑ろにするような態度は政界から爪弾きにされること間違いなし。

慌てて否定する。

「私としましても魔法科高校の姿勢を視察できて安心いたしました。それに生徒自らが魔法の平和的技術開発に携わっているとは……素晴らしいことです。また魔法師の教育がどのようなになっているかを含め、一議員として非常に有意義な視察でした」

「そうですか」

紫音は懐からデバイスを取り出す。
そして白々しきすら滲む笑みを浮かべつつ告げた。

「確かにその言葉、伺いましたよ」

録音された、と焦るも後の祭り。

神田も記者も完全にペースを奪われており、これ以上は墓穴を掘る
ことにもなりかねない。

実験成功に沸く校庭へと目を向ける。

「……そろそろ私も退散いたしましたよう。視察も充分ですから」

「そうですか？ ではお見送ります」

「そんなとんでもない！ では失礼いたします」

逃げるように背を向ける神田に付き添い、記者たちも取材を取りや
める。

余計なことまで録音されているかもしれないのだ。

人騒がせな来訪者たちはすぐに第一高校から去っていった。

ダブルセブン編7

議員訪問というハプニングは第一高校だけでなく、世間全体にも大きな議論を起こした。その理由は神田議員の引き連れた記者たちである。彼らは取材した内容を記事として公表したのである。

「お兄様、何か気になるニュースでも？」

朝、キャビネットに乗って登校する達也はニュースのチェックを日課としている。そして普段は滅多に表情を動かさない彼に何かを感じたのか、深雪が尋ねた。

「昨日手伝わってもらった実験のことが、ね。好意的な記事と敵対的な記事が共存していることは予想通りだよ。ただ、敵対的な記事を批判するような記事まであるのは驚いたね」

「どういうことでしょうか？」

「見てごらん」

達也は画面を動かして幾つかの記事を見せつつ、その中から一つを選択する。すると『意図的な印象操作？ 魔法科高校をめぐる論争』という過激なタイトルが現れる。

一見すると魔法科高校を否定するタイトルにも見えるが、その中身は真逆である。

「昨日の実験を兵器開発や水爆実験なんて書いてある記事への批判だよ。この記事はかなり魔法に詳しい人物が書いたようだね。俺たちの実験についてほぼ正しくまとめている。その上で敵対的な記事の内容が印象操作だと強調しているんだ。これは魔法師反対派にとつて痛いだろうね」

「そうでしょうか。このくらいの反論でしたら魔法協会がずっと発信

してきたと思いますが」

「問題はこれが民間のメディアから出たということさ。一般的に中立ということになっていいるメディアが、他の記事を批判した。そして批判記事は正当だと思える程度に事実を突いている。これによって反魔法主義の主張は言いがかりに過ぎないと印象付けることができただろう。この印象は理論整然とした反対派の意見にも疑いの眼を向けさせることができる」

「つまり……でつち上げの記事を一つ批判するだけで反魔法師団体の意見を全て封殺できた、ということですか？」

「そこまでは言わないけど、大きく制限されるんじゃないかな」

他人事のように言っているが、達也はこれが紫音による世論操作ではないかと予想していた。わざわざ神田議員の案内役まで買って出たのだ。あれだけで終わるとは思っていない。

また達也が語った魔法師に対する敵対的な記事を批判する動きというのは、既にかなり広がっている。反魔法師主義に染まっている大手報道機関でさえ自粛せざるを得ないほどだ。

実をいえば百山校長や甘楽が働きかけ、政治家の上層部も反魔法師運動を縮小するほかない状況に追い込まれていた。今回のことを利用したのは紫音だけではないということである。

「反魔法師主義がフェイクニュースを流している、なんてことが世間に知られてしまったからね。だからこそ魔法師に好意的な意見が支持される。しばらくは悩まされずに済みそうだ」

「そうですね！」

魔法師にとって良くない情勢が続く中、この朗報は達也の表情すら緩ませる。深雪も自然とその腕を絡ませ、微笑んでいた。



恒星炉実験のこともだが、やはり関連するニュースは第一高校全体を盛り上げていた。全員が見学していたということもあり、その凄さは目の当たりにしている。連続して報道される好意的なニュースはある種の快感であった。

これで煩わしい反魔法師主義も下火になる。

それだけでも彼らにとっては最高のニュースである。

しかし誰もが素直に喜べるわけではない。

(くそ……)

七宝琢磨は燻る苛立ちのせいか、授業にすら身が入らなかった。本日最後の授業が終わり、他の生徒たちが部活へと向かう準備を進める中、再び不愉快な会話が耳に飛び込んでくる。

何よりも許せなかったのは、その会話の中に二人の女子生徒の名が登場したことであつた。彼が最もライバル視する双子の名前が。

反射的に立ち上がった。椅子が大きな音を立て、琢磨は注目を集める。不機嫌さを隠そうともしない彼の態度に教室は静まり返った。

しまった、と思うが少し遅い。自分の感情をコントロールできなかった未熟さを呪うばかりだが、それでもあの七草を手放しに称賛するなど彼のプライドが許さなかった。

結局、彼は逃げるようにして教室から去ってしまう。

(くそ、くそ)

苛立ちは募るばかり。

そのせいか部活動中も集中を欠いてしまい、普段なら決してしない

ようなミスを連発してしまう。それが彼のフラストレーションを加速させていた。

下校の時には彼のストレスは最高潮に達していた。

だが、ツいていない時というのはとことんツいていないものである。

こんな時に限って顔を合わせたくない人物と遭遇してしまう。

『あ……』

事務室でCADを受け取り、帰ろうとした矢先であった。風紀委員の腕章を付けた七草香澄と廊下でばったり出くわしてしまったのである。

これで彼女の他にペアがいるならばまだ良かった。だが部活勧誘週間も終わり、今の風紀委員は通常シフトに移行している。残念ながら彼女一人だけであった。それに彼女も一通りの見回りを終えて本部に帰る途中だったのだろう。琢磨を面倒臭そうに見た後、そのまま素通りしようとしたのだ。

(馬鹿に、しやがって)

香澄にそんな意図はなかった。

冷静に考えれば琢磨にもそれくらい理解できたはずだ。しかし、今日はタイピングが悪かったのだ。だからこそ、言うべきではないことを口にしてしまう。被害妄想でしかないことを言ってしまう。

「上手くやったものだな」

「……なにが？」

訝しげに尋ねる香澄の態度は演技ではなかった。

だが今の琢磨はそれすらも惚けているのだと断定してしまう。

「昨日の公開実験のことさ。四葉と組んで上手くやったんだろう？」

「何のこと？ あんた何か勘違いしているんじゃないの？」

「とぼけるなよ。国会議員が来ることを知って、四葉家と組んで昨日のことを仕組んだんだろう？ 司波先輩を利用してさ」

琢磨の言っていることは間違いではない。彼の父、拓巳からそのように教わっていたのだから。確かに七草家と四葉家が一時的に協力して反魔法師主義に対してカウンターの世論操作を仕掛けたのは間違いではない。

だが、彼の誤算はこの事実には香澄や泉美が関わっていないなかったことである。香澄は惚けているのではなく、本当に何も知らなかったのだ。

また彼女は温和な性格というより、直情的で喧嘩っ早い。

「利用ですって？ 変な言いがかりつけないで」

ただ香澄は隠し事が苦手であった。

国会議員が来るということは確かに知っていたので、それに思考を巡らせてしまい返答が鈍る。一方で琢磨は歯切れの悪さから自分の推論が正しいものだど勘違いしてしまったらしい。饒舌になって高圧的になじっていく。

「迂闊だったよ。あの人、この学校だけじゃなく九校でも有名人だったんだな。流石は七草だ。姉に続いて色仕掛けで誑し込んだか？ お前たち姉妹は見てくれだけは一流だからな」

「なんですって!?!」

香澄の爆発は琢磨ですら絶句するほどの剣幕であった。

しかしそれも一瞬のことであり、すぐに彼女は嫌味で言い返す。

「誑し込むなんて七宝は下品ね。色仕掛けなんてあたしたちには思い

つかないよ。あんたこそ見た目はいいんだし、どこかの芸能人にでも取り入ればどう？ 魔法師なんてやめてさ。ま、今時そんな芸能人なんていないだろうけど」

それはただの嫌みのつもりだった。

偶然、少し前に見かけた有名女優の少年買春事件を思い出して言っただけ過ぎない。まさかそんな偶然が琢磨にクリティカルヒットするなどとは予想もできないことだった。琢磨からしてみれば小和村真紀との関係を言われているように思えたのだから。

激昂するには十分な火種だった。

「喧嘩を売っているのか七草！」

「先に手を出したのはそっちでしょ？ それに言わなかったっけ？二度とそんな口きけなくなるくらい安く買いたたいてあげるって」

二人は同時にCADを構える。

香澄は風紀委員として、琢磨は帰宅前だったことで二人ともCADを所持していた。それが問題を大きくさせてしまう。ある種の法的緩和があるとはいえ、学内で勝手に魔法を使うことは許されない。授業や自主練、部活動を除けば学内であろうと不正な魔法使用を禁じる法に引っかかってしまう。

「二人とも止まれ」

まさに一触即発といったその時、琢磨の背後から声がかかる。これによって声の主を目で見た香澄は動きを止め、そして琢磨は振り返りつつブレスレットタイプCADを装着した左手を向けてしまった。

反射的に魔法を発動して声の主を攻撃しようとした琢磨は、次の瞬間、激しい閃光と音に襲われる。

「ぐああああああっ!?!」

チカチカと点滅する視界と脳内。
ある程度の集中を必要とする魔法は失敗する。

「全く……せつかく世論操作したのに余計なことはするな」

「四葉、先輩」

香澄がその名を呼ぶ。

二人を止めたのは、彼女と同じく見回りから帰るところの紫音であつた。



琢磨、香澄の両名は紫音によって風紀委員会本部へと連行されることになった。そこで二人は針の筵のような居心地の悪さに直面する。それもそのはずだ。

まず琢磨は幹部候補として部活連に所属しているのだが、その会頭である服部、また琢磨の教育係である十三束が呼び出されていた。そして香澄に関しては直属の先輩にあたる紫音に連行された上、目の前では怖い顔をした風紀委員長こと花音がいる。

ちなみに生徒会代表としてなぜか達也もいるのだが、ここでは置いておこう。

流星にこの場に及んで言い逃れはしないらしい。

罪状を言い渡される被告のように、二人とも言葉を待っていた。

「……とまあ、そんな感じですよ」

紫音は第三者として客観的な情報だけを一通り説明する。

その後、花音が溜息を吐きながら苦言した。

「何しているのよ。風紀委員が見回り中に……」

「すみません」

まずは上司として香澄に、ということだろう。

それに続いて十三束が同じように琢磨へと問いたです。

「七宝、魔法の勝手な使用は重大な違反だって知っているだろう？」

魔法を使って攻撃するだけでも問題なのに、止めに入った四葉君を攻撃しようとするなんて」

これには琢磨も身を強張らせる。

今は頭も冷えて、やってしまったという感情が強く支配していた。

そんな反省の色を見せる二人に対し、花音はひとまずの結論を言い渡す。

「先に言っておくわ。完全に未遂だった香澄はまだいい。酷くても停学くらいで済むわ。でも七宝君はCADの操作に入っていた。相手が四葉君だったからいいけど、これで一般生徒だったら大怪我をさせていた可能性もあるわ。最悪、退学だと思っておきなさい」

琢磨はただ黙って受け入れる。

本当は体が震えそうだったが、そうならないように力を込めていた。そんな情けない姿を見せることだけはすまいと心に誓っていたのだ。

花音は香澄に目を向けて問う。

「で、何が原因だったのよ」

「七宝君が七草家を侮辱したんです」

「そう。それで七宝君は？」

「七草から許し難い侮辱を受けました」

おそらく話し合いでは平行線になるだろう。

この場にいる誰もが察した瞬間であった。こういった問題の場合、誰が悪い、何が悪い、などと話し合いで納得させることは難しい。上位者が一方的に裁決するに限る。

そこで花音は服部に尋ねた。

「服部、この始末どうつけるべきだと思う？」

「七宝は部活連の身内だ。公平な判断ができる自信はない」

「それなら香澄も風紀委員の身内よ」

「なら、どちらにも属さない生徒会に判断してもらうのがいいだろう」

と、ここで全員の眼が達也へと向いた。

提案した服部も今更彼に対して何か思うことはない。実力は勿論、魔工科が開設されたことを鑑みても達也は優れた人材であると認める他ない。またこういった時には間違いなく公平な判断をしてくれるという確信もあつた。

しかし指名された達也からすればいい迷惑である。

そもそも生徒会長のあずさは面倒ごとを察して逃げてしまい、副会長である彼が来ることになってしまったというのが始まりだ。同じ副会長の妹に任せるということはできず、仕方なくここにいる。ただ、指名されてしまった以上は何か言わなければならぬ。

少し思案した後、一つの解決策を提案した。

「二人に試合をさせればよろしいのでは？ 話し合いで解決できないことは実力で決める。当校で推奨されていることだと伺いましたが？」

これに対して服部は何か思うところがあつたのか、微妙な表情を浮かべている。しかし花音は納得といった様子であつた。

ただ、一つ問わなければならぬことはある。

「それは二人を見逃すつてこと?」

「重大違反とはいえ未遂です。攻撃された紫音が問題にしないということでしたら、二人の決着を優先するべきかと。互いに譲れないものがある以上、このままでは再び同じようなことが起こりかねません。罰は私刑ではなく更生の機会です。その本質にもとるのであれば、実力で白黒つけさせ、同じようなことがないようにするべきでしょう」「そう言っているけど、四葉君は?」

「構いませんよ。反省の色も見えますし、問題にするほどのことでもないでしょう。達也の言つた通り、結局は未遂ですから。それに世間のこともあります。今は大きな問題にするべきではありません」

達也や紫音の主張は尤もである。

それに去年も森崎という一科生が同じように魔法を発動しようとして咎められ、結局は見逃されたという前例もあるのだ。あり得ない裁決ではない。

「あたしはそれでいいと思うわ。服部はどう?」

「異存はない。司波、手続きを頼めるか?」

「了解です」

ここに琢磨と香澄の意見が介入する余地はない。達也はさっさと手続きを開始する。

だが、ここで琢磨はそれを破つた。

「司波先輩」

「七宝、不服なのか?」

それを咎めたのは十三束である。
しかし慌てて琢磨は否定する。

「ち、違います。ただ七草との試合を許していただけならお願いがあります」

本来は条件を付けられるような立場ではない。ここで封殺されても文句を言えない。だが、花音は敢えてそれを許可した。興味に駆られて。

「言ってみなさい」

「相手を七草香澄ではなく、七草泉美との二人にしてください」

「……あんだ、あたしを馬鹿にしてるの？」

そう思われても仕方のないことだ。

だがここで意見を言う立場にないのは香澄も同じ。彼女の言葉は無視され、花音は顎で続きを促す。

「これは七宝家の誇りを賭けた試合です。『七草の双子は二人そろって真価を発揮する』……これは有名な話です」

「だから二人を相手にしなければ意味がないと？」

「そうです！」

達也の問いかけにも食い気味で返す。

そこで香澄にも問いかけた。

「七宝はそう言っているが、香澄は構わないか？」

「構いません。その思い上がりを後悔させてやります」

「分かった」

本人たちが納得の上ならば、この変則的な試合も認めないわけには

いかない。達也は七宝琢磨、七草香澄の試合に七草泉美も書き入れ、試合の手続きを完了させた。



放課後の第二演習場を使って試合をすることに決まってからは早かった。審判は公平性の観点から生徒会の達也が担当し、深雪が立会人を務める。また風紀委員の立会人を紫音、部活連からの立会人を三東が務めることになった。

また立会人ではないが、演習場の鍵を預けられた立場としてほのかもいる。

琢磨はこのメンバーに当惑していた。

彼目線で語るなら、そもそも達也と深雪は七草側の人間だ。紫音も四葉でありながら七草と協力する立場である。つまりこの試合は審判も立会人も敵だらけというわけである。当然ながらそれは彼の被害妄想なのだが、一度確信した妄想を疑うことは難しい。

むしろこれ乗り越えることで光井ほのかを口説きやすくなるのではないかと捕らぬ狸の皮算用までする始末。彼はある意味で闘志を燃やしていた。

「この試合はノータッチルールで行う」

審判の達也はそう宣言する。

これは互いのエリアから外に出ることを禁じるというルールだ。選手は互いに一定の距離を保ったまま魔法を撃ち合うということになる。男女で試合する場合によく採用されるもので、他意はない。尤も、女性同士でも大抵はこのルールが適応されるのだが。

つまり左右に回避するなどの行為は可能だが、近づいて直接攻撃は不可能ということである。

「当然だが致死性の攻撃、治癒不可能な傷害を負わせる魔法も禁止だ。危険だと判断した場合は俺が強制的に試合を止める」

そう告げる達也に対し、琢磨の態度は冷ややかだ。できるものならやってみろ。雑草ワイド如きに止められる魔法なんて使わない。そんな声が透けて聞こえるようである。

ただ達也はそれを何となく感じつつも無視していた。

「では双方構えて」

片側には琢磨が。もう片方には香澄と泉美がそれぞれCADを構える。

ただその際に琢磨は足元へと分厚い本をズドンと下ろした。

達也が右手を掲げ、三人に確認の視線を送る。問題ない、という返答が無言で返ってきたところで、勢いよく腕を振り下ろした。

「始め！」

双方から想子サイオンの輝きが溢れ、瞬時に魔法が飛び交い始めた。

ダブルセブン編 8

殺傷性の低い魔法縛りということもあり、互いが行使するのは風の魔法である。空気を圧縮して放つ『エア・ブリット』、それを無効化する『拡散』などの応酬が繰り広げられる。ただ流石に香澄と泉美は二人ということもあり、手数が多い。食いつく琢磨はやはり魔法師として優秀なのだろう。

ただ、所詮は魔法の撃ち合いだ。

実力が拮抗する者たちが魔法を撃ち合う時、勝負を分けるのは魔法の使い方になる。つまり、上手に戦えた方が勝つ、ということだ。

「七宝が先に気付いたか」

紫音がそう漏らすと十三束が返す。

「そうだね。事象改変そのものと、それに伴う結果。双方を上手く使いこなせてこそだ。このままだと七宝が勝つ」

「とはいえ試行錯誤しているところのようだ。まだ分からない」「だね」

魔法とは事象の上書きである。

たとえばエア・ブリットとは空気を圧縮して放つ魔法だが、本来は気圧や温度に従って圧縮率などが決まっている。それを強制改変しているのが魔法だ。だが、その魔法による干渉が途絶えたからといって圧縮された空気が何もなく元に戻るわけではない。圧から解放された空気は拡散し、暴風を生む。

これが事象改変後の作用だ。

床に炸裂した空気の塊が圧力から解放され、泉美へと襲いかかる。上方向へと拡散に限定されたことで強烈な突風となり、彼女のバランスを崩したのだ。更には泉美自身に移動魔法をかけて香澄にぶつけるなど、一気に琢磨が優勢となる。

慌てて香澄が対処することで事なきを得たが、流れは琢磨に傾いた。

「来るか」

紫音の眩きに十三束は首を傾げる。

だが、その意味をすぐに知ることとなった。

香澄と泉美は手を取り、同時に魔法を行使したのである。

高難度魔法ナイトロゲン・ストーム窒息乱流が放たれ、窒素の暴風が琢磨へと叩きつけられる。慌てて空気の層を作り出し対処したが、この大魔法を前にして彼のエア・ブリットは意味をなさなくなってしまった。

「あれは……」

「マルチプリケイティブ・キャスト乗積魔法演算。二人の魔法演算領域を重ね、同時に放つことで魔法の威力を底上げする手法。見た限りだと香澄が魔法式を、泉美が干渉力を担当しているようだ」

「もしかしてそれが噂のやつかい？」

「ああ。しかしあの年でこのレベルの魔法を操るとはな」

そんな風に感心してみせる紫音だが、この乗積魔法は紫音の得意分野である。『調律』により魔法演算領域をリンクさせ、強制的に従わせる。戦略級魔法リベリオンもこの応用だ。紫音は多数の魔法演算領域を重ねることで一時的に世界最強の魔法師になれる。

またこの乗積魔法も簡単ではなく、全く同じ魔法演算領域を保有していなければならぬ。つまり、エイドスが同じ脳から発せられた魔法式であると錯覚することで初めて引き起こされる事象なのだ。

だが琢磨もこれで終わったわけではない。

その場でしゃがみ、足元に置いた分厚い本を手に取る。そしてハードカバーを開き、暴風の中に本を晒した。すると中にある全てのページが拡散し、無数の紙の片となる。その数は一ページ当たり二千八百八十。本に綴じられた紙が三百六十枚なので、総数は百万を超える。

「あれは噂に聞く『ミリオン・エッジ』か」

七宝家の研究成果、群体制御を応用した産物だ。

無数の紙片を一つの塊として扱い、その紙片の一つ一つを硬化して刃へと変える。これほど大規模な術式だがCADも詠唱も必要ない。発動媒体である本さえ準備しておけば即座に起動できる。これが七宝家の誇る秘伝であった。

その秘密は術式待機状態で本を維持しておくことにある。

この辺りの秘密は七宝家が努力した結果ということ、紫音どころか達也ですら詳しくは分からない。刃の群雲が窒素の暴風すら引き裂いて七草姉妹へと殺到する。

対抗する双子もミリオン・エッジのことは知っていた。あれが所詮は紙であることを理解しているため、ナイトロゲン・ストーム窒息乱流を維持しながらも、ヒート・ストーム熱乱流を放つ。

「危ない！」

十三束が叫ぶのも当然だ。

琢磨には二つの大魔法により制御が効かなくなったナイトロゲン・ストーム窒息乱流が迫る。そして七草の双子には燃やしきれず赤熱した無数の刃が迫る。互いに怪我で済む魔法ではない。

これは危険と判断したのか、達也が動いた。グラム・デモリッション術式解体がこの場に荒れ狂う全ての攻撃性魔法を消し飛ばし、静寂を呼び起こしたのだ。

「流石だな」

「あれは……そうか。凄いね」

紫音は素直にサイオン出力を褒め、十三束も何が起こったのか理解した上で感心を示す。あれだけの魔法を一撃で無効化する絶大な想

子出力と、そのコントロール技術に皆が舌を巻いていた。

ただ、試合をしていた一年生たちは全く理解できなかったようだが。

「双方失格とする」

この審判としての裁定を聞き、ようやく動き出す。

当然ながら琢磨は納得できないとばかりに声を張り上げた。

「どういうことですか!」

「試合前に言ったはずだ。致死性の攻撃は禁止すると。そして危険と判断した場合は試合を止めるとも」

「ではどのような裁定になるのですか?」

この中では比較的落ち着いていた泉美が、それでもたどたどしく質問する。

「先も言った通り、双方失格。つまり両方負けだ」

これはつまり引き分けということだが、再戦を認めないという意図も含まれていた。ただそこまで理解できているのかは疑わしい。ともかく達也はより詳しい判定を説明する。

「まず窒息乱流ナイトロゲン・ストームは致死性こそ低いレベルに抑えられていたが、それは始めだけだった。威力を上げれば当然ながら殺傷力を得る。最後は熱乱流ヒート・ストームも併用していたな? その時から制御が崩れ、威力が抑えきれていなかった」

また達也は琢磨の方にも向いて同じく語る。

「それとミリオン・エッジは致死性が非常に高い魔法だ。言うまでも

ない」

「そんなっ！」

これは琢磨としても納得できるものではない。

すなわち、初めから切り札を封じなければならなかったと言われて
いるようなものである。

「俺は自分の切り札を使った時点で反則だというのですか!？」

「威力をコントロールできなければそうなる」

「無茶苦茶だ！ とんだハンディキャップマッチじゃないか！」

「条件は同じだ。香澄と泉美も威力の高い魔法は制限されていた」

「詭弁だ。二人も致死性の高い魔法を使っていた！」

「それは発動当初は威力がルールの範囲内にコントロールされていた
からだ。だから止めなかった。だが七宝、お前はミリオン・エッジの
威力を抑えることができなかった」

「言い掛かりだ！ 俺はちゃんと制御できていた」

議論は達也の方に分がある。

徐々に深雪からは冷たい視線を、ほのかからは生暖かい視線を向け
られ、琢磨は引くに引けなくなる。このままでは計画が狂う、という
のが彼にとって一番の懸念だったのだ。だからこそ自分の主張が子
供のような、それこそ言い掛かりであることに気付いていない。

十三束に至っては呆れを通り越しておろおろとしていたほどだ。

「威力をコントロールできていなかったのは事実だ。自分の未熟を転
嫁するな。条件を満たせなかったのは自分の技量不足でしかない」

「ウイード雑草のあんたに言われたくはない！」

あ、と思うがもう遅い。

確かにこればかりは琢磨の正論ではあるが、今言うべきことではな
かった。雰囲気も含め、冗談で済ませられる状況ではなかった。これ

には琢磨自身も顔を青くしている。

ただ、達也はあくまでも冷静に、深雪が怒りだす前に口を開いた。

「俺に言われるのは不満か？」

この期に及んで深雪やほのかの評価を気にするあたり琢磨も状況が分かっていない。ただ彼女たちからの印象を良くするために必死の言い訳を考える。素直に謝っておけばましだったということに気付けないうあたりが子供だった。

「ふ、不満なのは不公平なジャッジについてです！ 七草がナイトロゲン・ストーム窒息乱流をコントロールできて、俺がミリオン・エッジをコントロールできていないなんて先輩の主観に過ぎません。俺はミリオン・エッジをコントロールできていました！ 司波先輩のジャッジは明らかに七草を贖したものです！」

「お前……自分が無茶苦茶言っていることに気付いているか？」

これは達也が七草についている、という彼の思い込みからくる妄言だ。達也からすれば本当に意味が分からないし、第三者からすれば見るに堪えない。

すっかり呆れ果ててしまったのだろう。

香澄が口を挟んだ。

「もういいよ七宝。あたしたちの負けで」

「いいんですか香澄ちゃん」

「うん。よく考えればそこまでこだわることじゃなかったし。大体、ナイトロゲン・ストーム高校生の試合で窒息乱流とか熱乱流なんてどう考えてもやりすぎ。ヒート・ストーム司波先輩の言う通りだよ」

一周回って落ち着いたのか、香澄が先に正常な思考を取り戻したらしい。事実、達也がいなければ双方に重大な怪我をもたらし、大不祥

事にまで発展していたことだろう。尤も、その場合は紫音が止めていたので問題はなかったが、香澄もそこまでは知らない。

ともかく、どうでもよくなったのだ。

所詮は口喧嘩。

熱くなってしまうたが、元は七宝琢磨が難癖をつけてきただけである。

「司波先輩、ご迷惑をおかけしました」

香澄はそう一礼して背を向ける。

「ただひとつと言わせてください。私たちは窒息ナイトロゲン・ストーム乱流を維持できていました」

謝罪の一言で終わらないのが彼女らしいところだが、その程度の生意気は許された。それは琢磨があまりにも、ということもあつたからだ。

しかしそうして去っていく彼女たちに対し、琢磨は屈辱を感じる。

香澄と泉美からすれば大人の対応で勝ちを譲り、議論を収めたつもりかもしれない。しかし思春期の男子にその対応は火にガソリンを注ぐようなもの。立場を理解して暴発しなかった琢磨はまだ理性的な方だったのかもしれない。少なくとも二人が演習室を去るまでは無言を貫いていた。

いや、寧ろある程度の理性を取り戻し、礼節に構っている余裕はないと思ひ込んでいたのだ。

「司波先輩」

香澄と泉美が去った後に達也へと呼びかける。

今更詫びを入れたところで手遅れだ。だからこそ、自分の主張だけは通さなければならぬ。

「俺は納得していません」

「何に？」

「俺が反則負けだということですよ」

「七宝！」

これには見ていられなくなったのだろう。十三束が止めに入る。だが琢磨はそれすら無視して激しく主張した。

「それに証明させてください！俺がミリオン・エッジをコントロールできるという証明を！」

「どうやってだ？」

「俺と立ち会ってください。そうすれば……」

引き下がらない琢磨にもはや我慢ならなくなったのだろう。十三束が怒りを露わにして踏み出す。

しかしその十三束を紫音が止め、達也の前に割り込んだ。

「そこまでしておけ七宝。流石に見ていられない」

紫音も十師族として今の琢磨は見るに堪えなかった。

実力はある。

向上心もある。

だが七宝琢磨という人間には魔法師社会を引っ張るだけの器が足りていない。そして何より、考え方が甘すぎた。

「お前は戦場でも敵にそんな言い訳をするつもりか？敵魔法師に対し、自分の実力はこんなものじゃないと言い張るのか？厳しい条件を理由に敗北を認めないと駄々をこねるのか？納得できないからとやり直しを要求するのか？」

「それ……は……」

「七宝琢磨。お前のその思い上がり、ここで改めておけ。それでも納得できないというのなら、ミリオン・エッジを用意してこい。俺が相手になろう」

この時点で琢磨に引くという選択肢はなかった。

四葉に恐れをなして逃げたとなれば、彼の考える新秩序ニューオーダーなど夢のまた夢。また落ちる所まで落ちた今の評価を取り戻す最後のチャンスでもある。

「望む、ところですよ！」

もはや何のために試合を始めたのかすら臆げになる急展開だ。だが、このまま七宝琢磨が問題を起すということになれば紫音も困る。ある意味で双方の利害が一致した結果と言えるだろう。ただ、こうした無茶を通す以上は必要な手順を踏まなければならない。

紫音は十三束に目を向けた。

「このことは服部会頭と相談してくれ。十三束、頼めるか？」

「え、あ、うん」

「風紀委員長には俺から言っておく。生徒会長には達也が伝えておいてくれ」

達也としても自分が模擬戦をする必要がないということであれば望むところである。そのためならば多少の面倒は請け負うつもりであった。

すでに手遅れかもしれないが、変に達也が目立つというのも紫音としては困る。ここで紫音が割り込むのは必然の流れであった。



『七』の決闘というハプニングに襲われた後も生徒会は普通に業務が残っている。達也と深雪は生徒会室へと戻り、残る仕事を片付けていた。

しかし十五分としない内に服部が部屋へと訪れる。

「中条、その言いにくいんだが……」

「ああ……もしかして四葉君と七宝君の」

「もう聞いていたか。恥ずかしい話だが懲りなかったようだな。模擬戦の許可が欲しい」

服部はあの後も七宝と面談し、本当に紫音に挑むつもりなのかと問いただした。しかし琢磨の意志は非常に堅く、退く様子もない。そこで服部が折れるという形で模擬戦は成ったのだ。

「ここで強く叱るべきかとも考えたが、今後のことを考えるなら一度挫折させるくらい考えるべきかもしれない。そのための相手が戦略級魔法師というのは少し贅沢かもしれない。俺は止めたんだが」

「なら、どうしてですか？」

「本人の強い希望だ。それに七宝の才能は確かなものだと思う。もう少し謙虚になることを覚えればもっと伸びるだろう。それにあいつには後ろからついてくる存在にも目を向けて欲しいが、魔法師の頂点も見て損はない。そう思って許可した」

伸びきった鼻をへし折る、というのは有効な手段だ。

ただ、相手を選ばなければ折れたままになってしまう。より強く生まれ変わる人材はそれほど多くない。だが琢磨にはその素質があると服部は判断した。

ちなみにそれを聞いていた深雪やほのかは『そのくらいされても仕

方ない』といった表情であつた。人伝に話を聞いただけの水波ですら同意している。ある意味で憐みも向けていたが。

「一度手痛い敗北を味わわせ、十三束や俺で教育していくつもりだ」

「ふふ」

「どうした？」

「なんだか服部君って十文字先輩に似てきたね」

それはあずさからすれば誉め言葉であつた。

だが自分の器量不足を真似で補っていると言われたような気がして、どこか微妙な表情を浮かべる服部であつた。



その日、小和村真紀はいつにもまして琢磨が不機嫌だと察していた。確かに彼は普段から不機嫌そうな態度だが、ここまで分かりやすくはない。

「私、夕食がまだなのよ。軽く何か摘まみましょう」

「こんな時間からか？」

「軽く、よ」

だからこそ、彼女は琢磨の頭を冷やす時間を設ける。いきなり本題に入れば延々と愚痴を聞かされるであろうことが分かりきっていた

からだ。

もう深夜と言える時間帯ではあり、琢磨も夕食は済ませている。だが、いきなり真紀の部屋を訪れたという負い目からか、彼女の言うことに従った。その程度の良識はあるらしい。

数分もしない内にテーブルへ大皿が置かれる。そこにはバゲットに生ハムやサーモン、トマトにチーズなどを載せたオードブルが並べられていた。

ついでとばかりに真紀はアルコールを混ぜた果実水をグラスに注いでやる。

琢磨も無言で手を伸ばし、愚痴を言うはずだった口はそれらを頬張るために使われた。そうして皿がほとんど空になった頃、琢磨は今日あったことを説明する。

「そう、そんなことがあったのね。悔しかったでしょう?」

真紀は努めて『包容力のある姉』のような態度と口調を使った。演技派女優として知られる彼女からしてみれば朝飯前の技能であり、少し酔っているからか琢磨は饒舌に語る。

「悔しくなんてない! 最初からフェアな勝負じゃなかったんだ。あのまま続けていれば俺が勝っていた。どいつもこいつも七草に……」
「気にすることなんてないわ。勝者に靡いてしまうのは仕方のないことだもの。それにその称賛と敬意だつて本当はあなたが勝ち取っていた。ただ運が悪かっただけなのよ。そう。もう少し運が良ければあなたが全てを手に入れていたのよ」

「ふん。当然だ。フェアな勝負でさえあれば俺が……」

何度も何度も同じ言葉を繰り返しているにもかかわらず、真紀は嫌な顔一つせずに聞き入る。彼の隣に座り、顔を覗き込んで耳元で囁くのだ。

「大丈夫よ。本当の実力者は最後に勝つの。確かにほんの小さな勝負事は運に左右されてしまうわ。でも最後には必ず勝つ。私だって運が悪くて役を奪われてしまったこともあるわ。でも、今はこうして有名女優として名を連ねることができているの。あなただってそうよ。今日はただ運が悪かっただけ。でもそんな小さなことで腹を立てちゃだめよ」

そうは言っているが、真紀としても今回のことは予想外であった。勿論、琢磨が模擬戦で負けたという小さな話ではない。今の世論についてだ。

情報メディア会社を運営する父に頼んで反魔法師プロパガンダを止めさせ、二十八家の一つである七宝家次期当主に取り入って新勢力を確立させようと目論んだ。表向きは十師族の勢力に協力する姿勢を見せるため七草家とも面会しつつ、水面下で様々な手を広げていたのだ。反魔法師運動が広がりつつある今の世論ならば動くチャンスだと考えた。

しかし蓋を開けてみれば反魔法師を主張するメディアの勢力は次々と衰え、今や見る影もない。寧ろ自粛の流れすらある。それも当然だ。今は反魔法師を唱え、根拠を述べても、『フェイクニュースなのでは?』という目で見られてしまう。報道という特性上、多少の誇張は常に込められている。そこを突かれて崩されては会社全体の信頼が失われてしまうのだ。今はどこも反魔法を口にできない状況にある。

真紀も思わず呆れてしまうほどの手腕であった。ただ、これでは予定通りに動くことは難しい。故に彼女は切り口を変えた。

「次は四葉君と戦うのよね。だったら今日のこと一度忘れましょう。大丈夫。あなたならきつと力を示せるわ。あの戦略級魔法師を打ち負かすことができれば、あなたの未来は約束されたも同然よ」
「ああ。やってやる。やってやるや」

今は琢磨との関係を維持して、次のチャンスを待つ。

それが彼女の狙いである。

焦る必要はない。まだ琢磨は高校生で、自分は旬の過ぎていない女優。時間はまだあるのだ。だから真紀は睡眠時間を少し犠牲にして、琢磨を（精神的に）慰めるために使った。

ダブルセブン編9

紫音と琢磨の模擬戦は例の事件から三日後となった。放課後になると琢磨は服部、十三束に先導され、第三演習室へと現れた。既に紫音を含む風紀委員、また生徒会メンバーは揃っており、琢磨を待つのみという状態である。

そして当の紫音はアタッシュケースを開き、拳銃型CADを弄っていた。

「来たわね」

「ああ、待たせた」

花音と服部は小さくそんな言葉を交わす。

今回、この模擬戦を観戦したいと願った者たちは意外と多い。風紀委員からは花音、幹比古、雫の他、沢木などの上級生メンバーが。生徒会からは達也、深雪は勿論、あずさや五十里、またほのか、水波もいる。部活連からも桐原など、何人か観戦目的でやってきていることから、この模擬戦がどれほど注目されているのか分かる。

そもそも一校全体でも今回の模擬戦は話題になっていた。

あの『四葉』が『七宝』と戦うというだけで話題性に欠くことはない。むしろもつとたくさんの生徒が観戦を望んだほどである。今回は見世物が目的ではないということの一部の生徒のみが見ることを許されることになったが。

「双方、準備は？」

「問題ありません」

「俺もです」

今回の審判役として選ばれた服部は二人を所定の位置に並ばせる。今回は男子同士の模擬戦ということもあり、接触ありのルールだ。た

だ、今回は琢磨にだけ殺傷力の高いミリオン・エッジの使用が許可されている。一方で紫音は攻撃魔法について制限が存在した。

また二人の姿にも違いがある。

全力を出すという意味表示か、琢磨は野外演習用のツナギ姿であった。一方で紫音はいつも通り制服であり、シューズについても運動用ではない。

だが達也はそんな部分より、紫音のCADについて言及した。

「珍しいな。あいつがCADを使うなんて」

「そうですね。やはり相手が七宝君だからでしょうか。油断するつもりはない、と」

「いや、それなら運動着のはずだ。おそらく、紫音の能力でも処理が難しい魔法を使うつもりだろう。俺たちが見たことのない魔法を使うのかもしれない」

普段から紫音がCADを使わないというのは有名な話だ。しかもその理由がCADを使うより、直接魔法式を構築した方が早いというもの。そこから考えるなら、普段は使わない魔法を使うのだろうという予測は簡単にできる。

ほのかは生徒会の先輩として水波に尋ねた。

「あの、四葉君がどんな魔法を使うか知っていますか？」

「いえ。紫音様の魔法について私を知ることはあまりありません」

「そうなんですか？」

「振動系や収束系魔法を得意とされることは存じております」

去年の九校戦のこともあり、紫音の得意魔法は明白だ。しかしその時でさえCADは使わなかった。だが今はCADを保有している。何をするつもりなのか気にならないはずがない。

紫音と琢磨の間に不可視の圧が飛び交い、緊張は徐々に高まってく。

今回の模擬戦は琢磨がミリオン・エッジをコントロールできるということを示すためのものである。また今度こそ言い訳ができない様に、審判も部活連から服部が出てきている。琢磨にとっては最後のチャンスであると同時にアピールの機会だ。挽回できるかどうかはこの一戦に懸かっていた。

やがて演習室全体がシンと鎮まり、服部は右手を掲げる。

「始め！」

そして勢いよく腕が振り下ろされ、同時に琢磨は本を開いた。



舞い散る紙吹雪は本のページの内、十分の一ほどによって生み出された。紙片の総数は十万もなく、ミリオン・エッジとは名ばかりである。しかし今回はコントロール能力こそが重要だ。琢磨は数を減らすことで操作性を高めるという選択をした。

うねり、帯のように連なり、あるいは雲のように蠢くそれは四つに分かれて紫音へと迫る。まずは四肢を傷つけて動きを封じるつもりらしい。

硬化魔法により鋭く強化された無数の紙片が殺到する。

その瞬間、紫音はCADの銃口を向けて引き金を引いた。

「……………えっ？」

琢磨は茫然とする。

理由は簡単だ。

ミリオン・エッジが解かれたのだ。

「何、が……？」

魔法を解いたつもりはない。

だが突如として紙片は魔法による支配から解き放たれ、ただの紙吹雪となってしまうた。術式解体グラム・デモリッションのような想子の輝きもなかった。何か理解できないことが起こり、魔法を強制中断させられたのである。

しかし呆けている暇はない。

琢磨は本のページから半分ほどを手で引き千切り、紙吹雪に変える。

そして今度こそ紫音に向けて、包み込むように殺到させる。

だが、やはりCADの引き金が引かれた瞬間、ミリオン・エッジという魔法現象は消し去られた。

「ちよつと司波君！ あれ何よ!?!」

観戦していた花音は思わず達也へと尋ねる。

困ったとき、達也なら的確な回答を返してくれるという信頼からくるものだ。しかし達也としても目の前で起こっている現象には困惑していた。

「……すみません。既存のものとは異なる対抗魔法ということしかわかりません。おそらく魔法式そのものに対抗したり、反対術式で相克を引き起こすという類ではないと思います」

「達也でもわからないのかい?」

「……幹比古。お前は俺を何だと思っているんだ?」

「え、いや、あはははは」

「まあいい。ともかく、四葉家の秘術に値するものではないかと思えます。そして四葉家を生み出した第四研究所の性質を考えれば、おそらくは精神干渉魔法。新種の対抗魔法ではないかと」

達也は花音への返答として、予測でありながらかなり近い部分に迫っていた。それは彼が四葉の血族であるという秘匿事実も関係しているのだが、それでも恐るべき洞察力である。彼の特別な眼には不可思議な魔法の消失が引き起こされていた。

魔法の破壊ではない。
消失だ。

(魔法式は残っている。だが、エイドスへの上書きが上手くいっていない。これは……事象干渉力を妨害する魔法か?)

こうしている間にも琢磨は残るミリオン・エッジを展開し、更にはエア・ブリットなどの魔法も連射することで紫音を攻撃しようとする。だがその度に魔法を無効化され、ただの一つも紫音のもとに到達しない。そればかりか構築した魔法式を乗っ取り、干渉力を付与して琢磨を攻撃する。慌てて拡散魔法を使ったが、それどころではない。

(そんなこともできるのか!?)

これは琢磨にとって衝撃であった。

魔法とは事象の改変だ。つまり捻じ曲げられた状態と言える。これは魔法が発動した後も僅かに残っており、理論上はそれを利用して素早く事象改変を済ませることも不可能ではない。

そして次の瞬間、閃光魔法と振動魔法による共振が発生し、スタングレネードのように琢磨の意識へと切り込む。フラッシュユキヤストにより放たれたこの魔法を防ぐ術はなく、琢磨はその場で蹲った。

「勝者、四葉!」

服部は即座に判断を下す。

まだ琢磨には動けるだけの意識はあった。だが、完全に心が折れていた。これまで鍛えてきた魔法がまるで応えてくれず、一方的に、一瞬で勝負をつけられた。敗北感と共に無力感が彼の中で広がり、同時に悔しきで頭の中が熱くなる。

そんな琢磨へと紫音は歩み寄った。

「七宝、お前はまだ弱い」

「っ……………」

「お前がやるべきことは駄々をこねることじゃない。お前は俺たちに意見できるほどの存在じゃない。理解したか？ 自分の小ささを」

それで耐え切れなくなったのだろう。

琢磨は振り向くこともせず、第三演習室から逃げ出した。



ロボ研ガレージの奥は人通りが少なく、密談にも適した場所となっている。それを知っていたわけではないが、人目を避けて走っていた琢磨は自然とそこに辿り着いた。

「くそ、くそ、くそ……………」

しばらくはそこにある大樹の前で立ち尽くしていたが、やがて感情

が爆発し、右手で幹を殴る。何度も、何度も、皮が剥けて血が流れても殴り続けた。

「くそ……っ」

「何しているのよ七宝！ 血が出てるじゃない！」

やがてその声すら震えた頃、背後から彼を呼ぶ声がした。

「お前、七草……」

「はあ……四葉先輩に叩きのめされたの？ ちょっとその手、見せてみなさい」

そこにいたのは七草香澄であった。

こんな時に限って、と琢磨は嫌な顔をする。それに対して香澄はハンカチを取り出しつつ反論した。

「別に追いかけてきたわけじゃないわ。ここに来たのは偶然よ」

彼女はそういつつ琢磨の右手を取り、ハンカチを包帯のように巻きつける。かなりの出血のためか、すぐにハンカチにも滲みだした。

「あーあ。ずる剥けじゃない。悪いけど治癒魔法の許可は下りていないから、あとで自分で保健室に行くのよ」

「あ、ああ……」

「それとハンカチは返さなくていいから」

琢磨はハンカチの巻かれた手をじっと見つめ、反応が薄い。よほど堪えたということが香澄にも分かった。

「やっぱり、上級生の壁は厚かった？」

「なんでだ……」

「ん？ 何が？」

「なぜ、こんなにも差がある！ たった一年じゃないか！ 同じ二十
八家じゃないか！ 俺と、四葉先輩との間にどうしてこんな差がある
んだ！」

それは悲痛な叫びであった。

問答無用で全ての魔法が無効化され、切り札たるミリオン・エツジ
も簡単にあしらわれる。挙句の果てには真似できない技術まで使わ
れ、気づけば敗北していた。

使っていた魔法は正体不明の対抗魔法を除けば琢磨もよく知るも
のだった。それほど強くもない魔法ばかりだった。だが、琢磨は何も
することができず負けた。

「あー……」

香澄は何かを理解した様子であった。

「別に強さに理由なんかないよ。強いから強い。それだけでしょ。才
能が同じなら、そこにあるのは努力の差だよ。たった一年でも、やつ
ぱり一年だもん」

「……」

「ま、あたしはあんたの言う強さなんかには興味ないけどね。でも、見
えたんですよ。それなら……あんたならきつと辿り着けるよ。その
強さに」

琢磨はがばりと顔を上げた。

だが、香澄はさつさと背を向けてその場から去ってしまふ。そして
彼女の姿が見えなくなった頃、琢磨は再び幹を殴った。その眼には悔
し涙が浮かんでいた。



演習室でCADを仕舞う紫音は、皆から質問を寄せられていた。それは勿論、ミリオン・エッジを無効化した魔法は何だったのか、という話である。

「ああ、あれですか？ 四葉が開発している新種の魔法ですよ」

紫音はこともなさに答える。

しかしそれは十師族で最も秘密の多い一族が開発している最先端ということだ。皆、興味を示さないはずがない。研究肌の五十里は特に興味深そうに質問した。

「あれは術式解体グラム・デモリッションのように万能の対抗術式なのか？ 七宝君の魔法に全て対応できていたように見えたけど」

「はい。そうなります」

「想子の塊で魔法式を押し流す、といった感じじゃなかった。まさか理論上最強の対抗魔法と言われている術式解体グラム・デイスパージョン!?」

「よくご存じですね。ですが違います。これは今のところ、俺の固有魔法です。名前は霊子極散デイスインティグレーションといいます」

この会話の途中、僅かに深雪が反応したのを紫音も感じていた。五十里が語った術式解体グラム・デイスパージョンに思うところがあったのだろう。一方で彼の婚約者、花音は首を傾げながら訪ねる。

「ねえ啓。そのグラム……何？」

「術式解散グラム・デイスパージョン。これは分解魔法と呼ばれるものを応用した対抗魔法だよ。構造物を分解し、最小単位にまで消し去ることができる。実験

室の中のごく小さな領域でのみ確認されている魔法さ」

「へえ。凄いのね。でも四葉君の魔法は違うんでしょ？」

「うん。僕も聞いたことがないよ」

ディスプレイグレッション
靈子極散は紫音が対パラサイトの魔法として開発したものだ。空間中に収束する靈子を調律し、平均化することで収束を破壊するというものである。

だが、この魔法には別の応用方法があった。

それを説明するためには魔法についてまず説明しなければならぬ。

魔法とはCADから送り込まれる起動式を元に、魔法式を構築することから始まる。事象改変後の情報である魔法式を投射し、エイドスを書き換え、それが魔法現象として具現化するのだ。この際に必要なのは改変後の情報である魔法式と、それを作用させる事象干渉力である。

通常、対抗魔法とは魔法式に影響を与えることで無効化を試みるものだ。

だが事象干渉力を消し去ることで同じく魔法は失敗する。それを実行するのが靈子極散である。紫音もこの魔法を開発し、幾度となく試す内に知ってしまったのだ。魔法式が想子サイオンによって構築される一方、事象干渉力は靈子ブシオンによってもたらされると。

(まあ、これを言うつもりはないけど)

これはまだ四葉家内部でも一部の者しか知らない秘中の秘。

あつさりと学友に言うようなことではない。

「申し訳ありませんが、詳しいことは説明できません。ただ、新種の対抗魔法だということだけ言っておきます」

この魔法は事象干渉力の正体を突き止めた特別な魔法である。今

も四葉家で研究が進められているということもあり、詳細を話せないのは当然だ。ただ、存在を示唆するくらいは問題ない。寧ろ四葉らしさを見せつけることができた。

また面倒ごとの元になり得る七宝を叩き折るという役目も充分に果たせただろう。

CADをアタツシケースへと仕舞う紫音の元に服部が近寄る。

「今日のごことは感謝する。後の教育は俺たちに任せてくれ」

「いえ。二十八家に名を連ねる以上、無様を許すわけにはいきませんから」

「ふ……厳しいな」

確かに服部の目から見てもこの前の琢磨は酷いものだった。

驕り高ぶり、達也に対して舐めているとしか思えない態度を取っていた。その礼を欠いた態度は流石に目に余る。こうして格の差というものはつきり教える機会はどちらにせよ必要だっただろう。

「今回のことは迷惑をかけた。今後は俺たちで教育し、このようなことがないように気を付ける」

「が、頑張ってくださいね服部君」

「あたしとしても面倒は御免だからね。頼むわよ」

服部からあずさと花音に礼が述べられ、この場は解散となった。



四葉家本家から動くことがない四葉真夜だが、彼女は魔法の研究を日課としている。当主としての最も大きな仕事はむしろそれだ。

「そう。紫音さんはデイスインテイクレーション霊子極散を公開したのね」

「よろしかったのですか奥様。あれは四葉家においても秘奥に属するものかと」

「構わないでしょう。寧ろ達也さんに見せつけるために使ったのではなくて?」

「達也殿に、ですか?」

「ええ」

ブロン霊子が事象干渉力を生み出すということは魔法史における大発見である。デイスインテイクレーション霊子極散によって偶然にも発見された事実であり、四葉家の研究施設でも詳しいことはまだ分かっていない。

だが、解析能力に優れた達也ならば良い結果を出してくれる。

真夜はそれを期待していた。

「それに今回のことで反魔法師主義の主張をしばらくは抑えることができるでしょう。大亜連合に潜むあの男も手を出し辛くなったはずです。そうになると、直接的な手段が予想されますね。あちらに忍び込ませた者からの情報はどうなっていますか?」

「奥様の懸念は尤もでございます。顧傑グゼなる者はかの国で傀儡の魔法を研究してるとか。達也殿が確保しておられるパラサイト入りのヒューマノイドヘルパーと似た機構のようです」

「そう」

「ただ……」

「あら、どうなさったの?」

「実は九島家と繋がり、開発しているようですよ」

葉山の言葉に真夜は眉をひそめた。

しかし考えられないことではない。以前、パラサイトを確保した際

に九島家と分け合ったのだ。それを保管して研究に利用しているということは充分に考えられる。また第九研究所は現代魔法と古式魔法の融合を目指している。その過程で大陸魔法師の亡命者を受け入れ、その技術を手に入れるといったことも行っているのだ。

パラサイトを持ち、大陸との関係も深い。

疑うには十分な背景である。

「貢みつぐさんに連絡して。九島家のことを調べていただきましょう」

「かしこまりました」

「それと紫音さんに一度本家へ戻るように言いつけなさい。どうせ今年の九校戦は不参加となるでしょうし、例の魔法……死神デスサイズの鎌を完全なものにしてもらいましょう。きっと、今年の内にもまた戦争になるわ。私たちも備えなければ」

そう告げて彼女は紅茶を口に含む。

空になったカップがソーサーに置かれ、葉山が追加を注ぐ。

「もうすぐ……もうすぐあの子は死神の再来となるわ。楽しみね」

真夜の唇が弧を描く。

そこに湯気の立つカップが寄せられた。